

バッドエンドの未来から来た二人の娘

アステカのキャスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、あの日死んだのがセラでは無くグレンなら。

もし、あの日を生き延びたセラにグレンとの子供が産まれていたら。

『天の知恵研究会』が支配した未来の世界。

グレンもシステイーナやリィエル、アルベルトやイヴ、セリカすら死に絶え、最後にはセラまで死んだ絶望の世界。フェジテは滅び、ルミアは『天の知恵研究会』に利用され、セラは最後まで抗いながらも、娘を残して死んでいったバッドエンドの未来。

2人の娘、フィール||レーダスは未来のルミアの力を借り、時の女神と契約し、過去を遡る。果たしてフィールはバッドエンドを回避できるのか。

フィールレーダスのイメージ画

《愚者》 フィールⅡウォルフオレン

帝国宮廷魔導師団 フィールⅡウォルフオレン

目次

番外編

番外編 フィールとエルレイの出会い

1

番外編 彷徨う過去の《愚者》との出会い

い 前編 60

番外編 彷徨う過去の《愚者》との出会い

い 中編 93

番外編 彷徨う過去の《愚者》との出会い

い 後編 153

セイギノマホウツカイ

第■話 210

第0章 ようこそ絶望の世界から

第1話 263

第1章 未来への歯車は動き出す

第2話 276

第3話 305

第4話 338

第2章 未来の愚者と過去の天使の逃避

行

第5話 368

第6話 392

第7話 430

第8話 465

第3章 未来の愚者と蒼き刃を振るう者

第9話 487

第20話	第5章 永遠者と愚者の異変	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第4章 正義の魔法使い	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話
870		839	797	769	731	699		650	604	570	540	516

第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第6章 春風と銀風の再結成	第26話	第25話	第24話	第23話	第22話	第21話
1154	1132	1105	1090	1077	1052		1035	997	976	947	921	896

第 3 話 第 3 話
第 4 話 第 3 話



11921171

番外編

番外編 フィールとエルレイの出会い

フィール「疲れた……」

帝国宮廷魔導師団としての仕事が終わりに、フィールはセラの家に帰ろうとしていた。鬼畜上司イヴのせいで色々疲れが溜まって仕方がない。学生をしながら宮廷魔導師団としての仕事、今回は軽い調査だったがそれでも時間がかかった。

フィール「……あの女狐、いつか殺す」

少し漏れ出る殺気を抑え込み、ポストを開ける。

いつも大したものが入っていない。光熱費やらの手紙が多いが、そこには何故かフィール宛の一通の手紙が入っていた。

フィール「……………?」

この世界にフィールルに手紙を届ける程、仲のいい人間は居ない。

罾か注意して調べても魔術の形跡はない。どうやら大した内容ではなさそうだ。そう思っていたが、手紙にはこう書かれていた。

『未来から来た2人の娘さんへ』

その内容に目を見開いた。

宛先は書いておらず、ただ名前とその言葉だけが書かれていた。

フィールル「つつ……!? まさか…… 『天の知恵研究会』……いや、魔術の形跡はないし、どうやってそれを知った?」

虎穴に入らずんば虎子を得ず。

どの道、魔術的罾や、呪術的罾は存在しない。念の為、「トライ・レジスト」を付与して手紙を開ける。

フィール「なっ……!?!」

開いた手紙が突如、光だして輝き始めた。

そして次の瞬間、フィールはセラの家の前から姿を消していた。

私は未来から来た人形だ……だからこそこれから起こることは知っているし、誰が誰でどんな人間がどんな行動をするのかも理解している、そう、基本的にはその筈なのだが……

フィール「……………」

エルレイ「学園の前に、知らない学院の制服を着た少女がいる時は……どうすればいいか……」

とりあえずエルレイはその女の子を担いで医務室へと足早に向かった。

フィール「……………っ……………」

目が覚めるとそこは知らない天井だった。消毒液や薬品の匂い、白いベッドにフィールは寝かされていた。宮廷魔導師団のコートは脱がされて白いワイシャツになっている。近くに立て掛けてあるコートのポケットに入ってる物を確認する。

フィール「〔女帝の世界〕 起動のブラックストーンと、『患者のアルカナ』はある……
隠しナイフもあるし」

警戒心が薄いのか、助けられたのか分からないが、敵意はこの部屋の何処から感じ無さそうだ。縄に縛られてるわけでもないし、フィールは安堵のため息をついた。

フィール「……………誰か来る」

保健室のような扉から気配が近づいてくる。

念の為袖にナイフを隠し、扉が開くのを待った。敵意は無さそうだが油断は出来ない

い。だが、その扉が開いた時、フィールは驚愕していた。

エルレイ「思ったより、起きるの早かったね」

扉が開いた先にいたのは青髪でアホ毛が少し目立つ魔導士礼服のような服を着ている20代くらいの女性だった。

エルレイ「気分はど？ 悪くなってるない？」

その女性はいつの間にか持っていた水筒をコップに移し、フィールに差し出す。

エルレイ「君は誰？ どのクラス？」

フィール「リィ……エル……？」

フィールは驚愕を隠せずにいた。そこにいたのは未来では量産兵、あの世界では同僚、帝国宮廷魔導師団の《戦車》として一緒に戦うリィエルと瓜二つの姿をした女性だった。

フィール「いや、でも性格が少し大人びて……」

その言葉に何故知っていると云わんばかりの顔を向けられる。頭が痛い。どう言う事だ。一体何が起こっている。

落ち着こうとリエルと同じ顔をした人から水を受け取る。毒は入っていない。安心して飲む。とりあえず落ち着いたはいいい、一つずつ整理して行こう。この状況についてだ。

フィール「すみません。私の素性の前に一つ、ここは何処ですか？」

エルレイ「リエルの名を……知っている、成程、別の世界線、把握」

女性は少し驚いたがすぐに冷静になり、無表情に戻る。

まるでいつもの事かのように無表情になっていた。

エルレイ「ここはアルザーノ帝国魔術学院、だけど君の知ってる学院とは違うと思う」

女性は同じ学院だが君の知っている学院などと訳の分からないことを言っ
て、ポケットからサクサクといちごタルトを食べ始めた。

フィール「……………うん。やっぱりリエルだ。いちごタルト食べてるし……………世界線な違
うって事はまさか……………」

ここは自分の知る世界ではない？ だとするなら、『天使の塵』^{エンジェル・ダスト}の事件はどうなった？
ここは自分が介入していない世界なら、助けられなかつた世界？ リエルは大人び
ているなら違う未来の世界？ だがそれ以上に聞きたい事が存在した。

フィール「リエル！ おと……………グレン先生とセラ先生は!？」

エルレイはキョトンとした顔で首を傾げるが、フィールは何よりもそれが聞きたかつ
た。あの2人は一体どうなったのか。

エルレイ「いちごタルト食べてるから私……………ま、いいや、落ち着いて」

女性はそつとやさしくフィールの袖を触り、隠しを引き抜き、フィールの手に握らせる。気付かれたフィールは目を見開いて警戒する。

「エルレイ「私が、リエルじゃなかったとき、君は私を、暗殺できなくなっちゃおうよ？」」

女性はフィールに強くナイフを握らせながら微笑んだ。まるで自分を殺しても構わないと言わんばかりに。

握らされたナイフに少しだけ驚いて、それを仕舞う。

敵意は無い。何かはあるが、今のフィールはリエルに似た顔のこの女性を傷付けるのは得策じゃないと考えた。ここがアルザーノ帝国なら、この保健室で戦闘するのは後々の行動を考えれば危険だ。

何より、今のフィールは未来にいた量産兵と割り切って殺したくないと心の何処かで感じてしまっているのだ。

フィール「……2人はどうなったんですか？ それに、貴女は一体何者なんですか？ 私の知っているリエルからかけ離れてるし、感情もある。貴女は一体……」

エルレイ「私はエルレイ、しががない臨時教師の出来損ない人形、早い話、未来のレイ
エルレイフオード、感情を~~XXXX~~得てしまった~~XXXX~~ね」

エルレイは無表情のままフィールを見つめる。

エルレイ「グレンとセラなら、生きてるよ、どつかの私の、お人好しの初恋の人と、ル
ミアの旦那様のおかげでね」

そんなことを言いながらエルレイは苦笑いをした。

フィール「……未来のオリジナルの方の……じゃああのリエルが成長したのが今の
貴女って事……貴女も未来から……」

いや、正確に言うならば私の知るバッドエンドの世界から、違う世界に到達し、その
違う世界からの延長線からこの世界があるのだろう。感情を持つリエルはオリジナル
を除いて他にいない。つまり、バッドエンドにならなかつた世界から来たリエルな
のだろう。

未来からの逆行の術式はフィールを除いて使えない筈だ。

フィール「どうして未来の人が……こんな所に」

いや、自分も人の事は言えない。

現に逆行の術式はフィール自身が3年かけて編み出し、自分の血を触媒にしなければ使えない術式だ。あの手紙は一体何だったのか分からない。魔術の形跡は無かったのに気付けばこれだ。異能関連に間違いないのかもしれない。

フィール「いや、とりあえず私も自己紹介します。私はフィール、フィールⅡウォルフォレンです。未来から来た……宮廷魔導師団の《愚者》です」

グレン先生とセラ先生の2人の娘と言う事は言えなかった。

この人は大丈夫だと思っけても、自分が逆行した世界でも言ったのはほんの数人程度だ。それくらい自分の素性は他人に知らせてはいけなくらいのタブーなもの。

ただフィールは悲しくクスツと笑っていた。

この世界が救われた世界ならもう自分は要らないんじゃないかって少しだけ自嘲気

味自傷気味に笑っていた。

エルレイ「なるほど、《愚者》……グレンの子供か何か……か、道理でグレンの匂いが
すると思った」

フィール「つつ……違います。私は……」

2人の娘じゃないと言おうとして言葉が詰まる。

どの世界でも、同じ姿、同じ性格であろうと、フィール＆ウォルフオレンには別人な
のだから……

エルレイ「……謝罪、深く掘り下げるつもりはない、安心して。フィーちゃん」

何かを察したのか、エルレイは頭を下げながらそう言った。

エルレイ「言えない事情があるのは、私も同じだから、今は君の名前しか聞かないで
おく」

エルレイはそう言いながらフィールの頭を優しくなでる。

ただ少しでもくすぐったくて、でも何処か安心する手付きにフィールは少しだけ……

『ははっ、フィールは偉いな。こうすると猫みたいだ』

『もうフィールちゃんったら、撫でられるの好きなんだね』

お母さんとセリカ伯母さんの事を思い出させるようだった。優しく、何処か安心する。未来ではあんなに殺すだけの殺戮兵器だったのに……今は何処か安心する。

ただ、それが少し痛くて……やっぱり少しだけ寂しく感じてしまう。この世界は救われた世界なら、ただフィールはあの2人の他人として生きなければいけない。もう救う必要もない。

ただ少しだけ、寂しいのかもしれない。

フィール「ありがとう……エルレイさん……」

少しだけ弱々しい声でそう呟いた。

エルレイ「ん、どういたしましタルト」

唐突、本当に唐突だった、撫でられてなぜか安心していている時に目の前に急にいちごタルトが現れた。

やっぱり少しだけ私の知るリエルに似ている。クスツと笑っていちごタルトを受け取る。

フィール「……それ何処から出したんですか？」

一応、収納魔術はあるがフィールでは8節も使う。

何の詠唱も無しに魔術の気配もせずはどうして無尽蔵にいちごタルトが出てくるのか興味本位でフィールは聞いた。

エルレイ「これは完成度の高い魔術、難しい物……やったら精神すり減る……」

エルレイは暗い声で、しかし声は尖らせている、するとエルレイは急に礼服の上を脱ぎだしその正体をあらわにする……!!

エルレイ「魔術、次元ポケット（内側のポケット）」

そこを見ると異様に膨れ上がった、内ポケットがあつた。おそらく全部いちごタルトだろう。

フィール「……才能の無駄遣いですね」

フィールは頭に手を当てて苦笑していた。

エルレイ「無駄じゃない魔術など、ない、魔術で火をおこしたい？ 木を擦れ、電気を流したい？ 発電しろ、食べものがないから、食材を取るため魔術を使う？ じゃあおのが死……」

リエル「頂戴」

エルレイ「……わあ！」

フィール「うわっ!？」

エルレイの理不尽魔術論をかましている時に突然またもやリリエルらしき人間が姿を現した、気配を察知させることなく、エルレイはいちごタルトをリリエルに渡す。

リリエル「……」サクサクサク

システイーナ「エルレイ先生看病中のところ申し訳ありません」

システイーナが申し訳なさそうに入ってくる。

エルレイ「なに？」

ルミア「あの……そろそろこちらのほうに戻ってきていただけると」

ルミアが苦笑いをしている。

教室で何があったのだろう。システイーナは頭を抱えていた。

エルレイ「馬鹿グレンが、バカし始めた？ 了解」

システイーナ「察しがよくて助かります……」

システイーナはそう言いながらため息をつき。少しだけフィールのほうを見る。

エルレイ「ん、今行く……丁度いい、ちよつと見学してかない？ グレンに会わせるよ？」

エルレイはそう言いながら微笑んだ。

少しだけその事に動揺しながら質問する。

フィール「……いいんですか？ 一応私部外者か不審者か疑われてますよね？」

学院の前で倒れていた訳だし、宮廷魔導師団のコートを着ていたのならハツキリ言っ
て怪しい筈だ。学院の制服は持ってないし、貸し出してもらおう訳にもいかないし、先生
のフリでもしろと？ ハーレイ先生が待った無しだ。

システイーナ「エルレイ先生、この人は……？」

エルレイ「件の倒れてた子、名前はフィール」

フィール「どうも……こんにちわ」

ルミア「こんにちわ、フィールさん、でも本当に連れて行くんですか？ 確かに部外

者を入れるのは良くないんじゃない？」

システイーナ「私もルミアに同意見です。ここは事情聴取でもして適切な対処を……」

そんなごく当たり前な事を二人とも言う。しかし……

エルレイ「うちのグレンやセラが、良い行動とか、適切な対処……取る？」

「……………」

エルレイ「おい、目をそらすな」

フィール「えええ……………」

リエル「……」サクサク

リエルはなんとなくフィールをじつと見ながら無心にいちごタルトを食べていた。

エルレイ「ていうわけで、ここでは常識は通用しない、あきらめれ」

エルレイはそういうとファイルの手を引つ張り、保健室を出る。システイーナ達も後を追うようにエルレイ達について行く。ファイルは耳打ちでエルレイに聞いた。

ファイル「大丈夫なんですかこの学院……」

エルレイ「……………」

ただ沈黙するエルレイ。割と不安だ。

あつちの世界でもセラ先生はまともに機能していた筈なのに。

そうか、これが歪みか。私が介入したせいで性格が歪んだのか。後悔と自責の念にファイルは俯いた。

そしてなんやかんやで教室に入った。とりあえずいつも通りなのだが……

カツシユ「……本当に……アンタと戦わなきゃいけないのか……っ！」

グレン「俺だつて、大切な生徒となんて戦いたくないさ……でもな、俺が勝たないと……一人の人間すら守れないクソ野郎になっちゃうんだよ!!」

その状況は一触即発と呼ぶにふさわしい、黒板前で、グレンがカツシユとにらみ合っている。

カツシユ「……すいません、感情を……出しちまって」

グレン「……こつちこそすまん……落ち着きがなかった」

そんなことを言いながらピリピリした状況は続く、生徒たちはそれを悔しそうな顔で見ているものもあれば、もう見てられないと言わんばかりに顔を手で覆っている。

そんな二人を横目に、二人の真ん中にいたセラが苦いものを口の中で転がしているかのような声で言葉を出す。

セラ「ふたりとも……準備はいいね……」

すると突然、二人がこぶしを握り締め上にあげる完全に殴り合うようにしか見えな
い。

フィールはすぐに駆け出して止めようとするがそれをエルレイに止められる。

「さへよ……」

じゃんけん……」

「ぼおおおおおおおおおおおおおおい!!!」

「「……………」」

エルレイ、システイナーナ、ルミアはそのどうでもいいことこの上ないであろう（確定）
の状況を呆然と見ている。

リイエル「楽しそう、混ざる」

そういつてリイエルが楽しそうだという理由で行こうとするのでエルレイは髪を引っ張って止めた。

リイエル「いたい」

フィール「……………」

一体何をしているのだろう。

馬鹿みたいに騒いでいるのはいつものグレン先生と変わらない。一応セラ先生が何か審判やっている。

フィール「あの……………すみません説明」

エルレイの方を向くと首を横に振った。

どうやらエルレイも理解不能らしい。フィールは少しだけ息をついていた。馬鹿やるのはいつもと変わらないのだが、色々セラ先生も感化されてしまったのかもしれない。

エルレイはフィールの言葉に首を振り、自分も理解していなことを示す。全員硬直し

ている中、またもやグレンとカツシユの雄たけびがこだまする。

グレン「つくつそおおおおおおおおおおおおお!!!」

カツシユ「つしゃあああああああああああああ!!!」

セラ「はい、というわけでクツキーはカツシユ君にあげるね」

カツシユ「ありがとうございますうううううううううううううう!!!」

エルレイ「今理解した、ごめんね、フィーちゃん、こんなクラスで」

エルレイは死んだ魚のような目でカツシユとグレン、セラの三人を見ていた。

フィール「……ハア、《徒然なるままに・我が右手に奇跡を・万里の果てより招来せよ》」

何故か相変わらずで安心したが、心配した此方の身にもなれと若干の怒りから意趣返しとして、フィールは白魔儀「アポーツ・クラフト」を使って皿に乗せられた最後のクツキーを自分の手に転移させた。

フィール「どうぞエルレイさん」

カツシユ「なっ!? 何すんだお前!？」

エルレイ「適応能力高い、感謝」

エルレイはそのクツキーをいったん手に持ち、そのまま、フィールの口へと運ばせて割と強引に入れる。

フィール「むぐっ……」

エルレイ「……説明」

エルレイはマジトーンになりその場の全員が凍り付く。

エルレイ「説明」

カツシユ「は……はいつっ!!! 実はセラ先生がクツキーを作ってきてくださって、それで最後の一枚誰が食べるか男子で論争になって」

グレン「何しやがんだ!! 俺の大切な食糧がああああああああああああああああああ!!!」

グレンはそんなエルレイなどお構いなしに叫び散らす。

セラ「え、えつと……ね、なんかこんなことになっちゃて、それで私も主犯だから見てるだけなのも気が引けたし……仕方なく……」

グレン「お前ノリノリで審判やってたろうが!!!」

セラ「こ、こらっ!! 余計な事を……」

エルレイ「《わが手に刃を》」

エルレイは目にも止まらぬ高速詠唱でリィエルに似た大剣の少し小さいものを生成した。

エルレイ「とりあえず、騒いでたであろう男と、セラは……死」

「「「えつちよつま……ぎやあああああああああああああああああああああ
!!!!
「「「」

グレン他数名とセラはエルレイに剣を振り回されながら追い回され、叫び声をあげた。

システイーナ「……今聞くのもあれなんだけど……大丈夫？ フィール……だっけ？
ばかばかしくなったりしてない？」

フィール「んぐっ……ゴクツ、普通に呼び捨てで構わないよ。多分同い年だから。ま
あ……何というか……」

少し安心した。

馬鹿やつてるのは相変わらずだが、笑いあつてエルレイ先生が叱つて、何処か安心し
ている。

私はあの世界では……叱る事も笑わせる事も出来なかつたから。

エルレイ「と、言うわけで、今回急遽訪問された、子の紹介、どうしても未来の魔術
師が見てみたいらしい、自己紹介お願い」

そう言つてエルレイはフィールに振る。

フィール「魔術工学所属から来ましたフィールⅡウォルフオレンです。階級で言うならば第四階梯クアットルデの魔術師でもあります。魔導具の生成に自信がありますので分かなければ質問も構いません。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします」

丁寧な口調でフィールは答えた。

まあ本当は未来で第六階梯ロウデだが、この世界に私の身分証明書は無いので誤魔化した。

「「「……………」」」」

自己紹介した瞬間、沈黙がこのクラスを包む……。

エルレイ「……フィーちゃん、耳ふさいで」

自己紹介をしたのになぜか無反応の生徒達を見た後エルレイはフィールにそう耳打ちをした。

フィール「は、はい」

フィールは言われた通り耳を塞いだ。

何かおかしい点でもあっただろうか？ それとも容姿で私の事がバレているのだろうか？ 次の瞬間、爆音のような音がフィールの耳に届いた。

「「「エルレイねえねが美少女連れてきたあああああああああああああああああああああ
ああ!!!」」」
!!!」

そう、一部の男子共が叫んだのだ。

「ちよっ……ま……かわいすぎだろ……ていうかエルレイ先生が連れてきたってことは
百合?! 百合なのか!?!」

「やっぱ……マジで好きかもしれん、正直セラ先生以上の破壊力を持つ!!」
「ぐああ!! ……テレサ推しのこのおれがあ……心を揺らしてるだどつ!!?!」

「ちよつとそこの男子うるさい!!」

やっぱりかと言わんばかりにエルレイはため息をついた。

エルレイ「もういいよ、思ったより、うるさかったから、聞こえてるかもだけど」
フィール「エルレイ……ねえね？」

何で姉呼ばわりされてるのかフィールはエルレイを見て首を傾げる。エルレイは頬を少し赤くしている。どうやら恥ずかしいようだ。

フィール「随分特徴的なクラスですね……」

知っていたけど、私がいた世界よりクセが強くないか？ 地味に男子達もグレン先生みたいになってるし。ギイブル君については不変で何故か安心している自分がいる。彼は将来本と結婚するのもかもしれない。

……
なんて下らない事を考えながら、クラスを見ると変わっていなくて少し安心もしたが

エルレイ「~~~~~」

特徴的なクラスと聞いてエルレイは頭を抱えていた、顔を赤く染めながら。

リエル「ねえね、どうしたの？ 疲れたの？」

エルレイ「この疲れ……リエルのせいなんだけど」

リエル「？」

ルミア「あ、あはは……」

システイーナ「え、エルレイ先生。お気を確かに！」

ルミアは苦笑いをし、システイーナは腕でガッツポーズをした、リエルは首を傾げた後、またフィールのほうに顔を向ける。

フィール「えつと……エルレイ先生。私はどうすればいいですか？ 質問タイムでも設けますか？」

とりあえず一向に進んでいる気がしない。

グレン先生やセラ先生はさっきの闘争と逃走でグッタリしてるし、ややそれを見て苦笑する。

エルレイ「……ん、じゃあ質問タイム」

エルレイは呆れた顔になりながら生徒たちに質問タイムを設けた。

「はい!! 彼氏はいますか!!」

エルレイ「質問破棄、関係ない」

「はい!! 好きな男性のタイプはー」

エルレイ「質問破棄、異性恋愛×」

「はい!!! スリーサイズいくつ?!」

エルレイ「質問破棄、もう隠さない、死」

フィール「他にまともな質問はないんですか?」

恋愛関係はスウィーツ並みに食いつくから却下したのはわかるのだが、他に無いのだろうか。得意な魔術とか、もつとこう普通の質問が。いやまあ恋愛は絶対にあり得ないけど。

エルレイ「他」

システイーナ「じゃあ、一つだけ」

そう言つてシステイーナが手を上げた。

エルレイ「言つてみて」

システイーナ「魔術工学所属つて言つてたけど……それつて家族の意向？」

フィール「……っ……ごめんなさい。家族は私が魔術師になる前に亡くなつてるから」

システイーナ「あつ……すみません失礼な事を聞いて」

フィール「まあ……私の家族の片方はちよつと子供っぽくて、母はそうだね……ちよつとお節介で犬みたいな人かな？」

システイーナ「えっ？」

少しだけ視線をセラに向けて軽く笑う。

まあその視線は誰にも理解する事はなく、フィールは続けた。

フィール「入った理由は……まあそうね……人生の副産物かな？ どちらかと言うと、やらなきゃいけないかった事の為に学んで……まあその後にその道を見つけたって感じかな？ 例えるなら……」

フィールはポケットから黄色い球体のようなものを出した。

両手でそれを重ねて持ち、詠唱を開始する。これは子供の頃、セリカ伯母さんに見せようと作った専用の魔導具だ。あの頃、帰るのを待っていたが、帰る事は無かったが……少し懐かしく悲しい顔をしながらも、それを起動する。

フィール「《私は世界を欺きし者・魔力を練り上げ知識を基盤に彼方を幻想せよ・真実のヴェールで覆いし者よ・今一度聖歌の幻想を・我が命脈に従い・奇跡と彼方の巡礼を》」

するとフィールを中心に綺麗な花が咲く。それどころではない。教室全体が消えて、空には満天の星空にオーロラ、それを照らすかのように花は光り、幻想的な空間を生み出す。

「す、すげえええええ！」

「綺麗……！」

「ロマンチック……！　これ魔導機で!？」

生徒達はあまりの光景に驚愕する。

教室は一転して花が咲く夜空に包まれて感激する。これ程綺麗な場所は見たことがない。

フィール「白魔〔イリユージュオン・スファイア〕。それをこの魔導具を利用して範囲を広めたの。魔導具は傷付ける為にあつた時があつた。けど、捨てた物じゃないでしょ？」

フィールは少しだけ得意げに笑つた。

エルレイ「……」

グレン「へえ、やるな、ここまでこの歳でできるなら大したもんだ」

セラ「うんうん、将来有望ってこういう子の事を言うんだね！　ねっ！　レイちゃん」

エルレイ「……」

セラ「……レイちゃん？」

ファイルがエルレイのほうを向くと無表情に、本当に何も感じていないかのように無表情に、ただただ、光っている花ではなく、オーロラをじつと見つめていた、その目はとても濁っていて、同じ人間なのか疑うレベルにまで変わり果てた顔をしていた。

ファイル「……エルレイさん、何かおかしかったですか？」

ファイルは少しだけ心配しながら聞いた。

何かオーロラが気に入らなかったのか、軽く肩に触れてエルレイに問う。

エルレイ「ごめん、何でもない」

エルレイはそう言って微笑んだがその顔は例えにくい何かを隠しているような、何かを否定する笑顔のような、そんな印象を抱いた。

そんなことがあって夕方の放課後、ファイルはいろいろと大人気（どんな感じで人気

だったかはお任せ) だった

授業が終わった後椅子に座っているとエルレイが話しかけてきた。

エルレイ「ちよつと、屋上まで、ついてきて」

フィール「……? はい、構いませんけど……」

フィールはエルレイの後ろに小走りについていく。屋上についた2人は向かいあっていた。長い黒髪が風に靡くようであるでまるで男子が女子に告白するような状況だ。

フィール「まあそんな事あり得ないけど」

エルレイは下を向いてため息をついた後決心したように、フィールに向き直る。

エルレイ「単刀直入に聞くよ、フィール!! ウォルフオレン」

フィール「……? はい」

他人から見たら告白のように見えるが、フィールは少しだけ首を傾げて返答する。

「コピーと人間、何体殺った？」

いつもと同じトーンだがエルレイのその言葉はどこか重く、悲しそうな印象を抱いた。

ファイル「つつ……!? な、何で……!?」

それはファイルしか知らない未来の出来事だ。人間ならまだ分かる。だが、コピーと言うのは既にファイルの脳裏に過ぎっていた。

『Project:Revive life』

人間の蘇生関連の魔術の中で世界初の成功例、それは本来ならリエルを除いて他にない。だが、未来ではその実験は確立された。リエルと言う感情なき殺戮兵器、そ

れが未来では量産されていた。

エルレイ「……あなたから、私のコピーの匂いがする、血なまぐさい匂いもね……」

エルレイはフィールに近づき頭を撫でた。

エルレイ「そして、フィーちゃん顔が、私の知り合いの、人間に絶望した人に、そっくりなの」

エルレイ「私には、こんなこと言う資格ない、でも、私みたいにならないでほしいの……感情を手に入れても……殺戮兵器としての本能が渦巻いて、斬ることしか快感を得られなくなった私みたいには……」

エルレイは悔しそうな顔で話を続けた。

エルレイ「だから、私みたいにはならないで……このきれいな世界のはずなのに、何かを斬り殺して親友を助けたいと願っている……私みたいには……」

フィール「ごめんなさい、それは出来ません」

フィールはそれを否定した。

気持ちには分かる。グレン先生のように闇に堕ちていくのを見たくない気持ちは痛いほど分かる。だが、それは出来ない。

フィール「私はエルレイ先生じゃない。だから貴女の事が分からない。けれど、貴女がロクデナシであろうが、そうでなかりうと、私は守る為なら私を殺しても殺戮兵器にでもなるつもりです。そう……未来に誓ったんです」

そこに自分の幸せが含まれていなくとも。

例え自分が絶望の全てを背負う事になっても、私は私を殺す。

それが……未来を救う最善策なのだから。

エルレイ「なにかを守るためなら、自分を犠牲にする……本当にシユウとロクサスに似てる……」

エルレイは目をつぶった後、目を開き言葉を出す。

エルレイ「……それは《守るための最善策》ではある、でも……仲間や家族、知り合

いを悲しませる《最悪手》でもある」

フィール「なら……なら自分の我が身可愛さに指加えて地獄を見ろって言うんですか！? 私は私なんてどうでもいい。私がいるべき世界は未来しかない！ 私は……!」

感情的になり、声を荒げるフィール。

その顔は泣きそうだが、まるで憎しみを糧に今を生きているように見える。

フィール「約束した！ エルザと……ルミアさんと……！ 私をここまで連れてきてくれた！ だから……!!」

フィールは本来終わってしまっただけ存在だ。

ifの世界から来た黄昏の幻想、あり得ざる結果から生み出された世界のバグ。だがバグ故に世界を変える力を持つ。そこに自分の感情は含まれてはいけないのだ。

エルレイ「……落ち着いて……私はフィーちゃんが、間違つてるとは思つてない」

そういうと、エルレイはぎゅっとフィールを抱きしめた。

エルレイ「その自己犠牲の行動がとれる人間は……本当に強い人、でも、その犠牲で悲しむ人だっている、それを忘れないでほしいのと……殺したくなんてないっていう、感情を忘れないでほしいだけ」

そう言いながらエルレイはフィールの頭を撫でた。

エルレイ「……ごめんね、辛い思いさせて」

エルレイは優しく、抱きしめて、何度も頭を撫でた。

フィール「……っ……うう……」

ポロポロと涙が溢れ落ちていく。

ただ、感情が決壊し、魔術講師のローブを掴んでただ泣いた。それはまるで子供が母親に泣きつくかのようで、その場所に夕日が2人を照らしていた。

――――

エルレイ「さて、そろそろ戻ろう」

フィールが泣き止んだのを見計らってエルレイはフィールの頭をポンポンと叩いて、笑みを浮かべた。

フィール「そうですね……」

フィールの目が微かに赤くなっている。

エルレイの言った通りに屋上もそろそろ閉鎖される。

エルレイ「一応言っておく、泣くことはいいことだよ？ 迷惑な事じゃないし、当たり前前の感情」

エルレイはそう言いながらフィールの頭を撫でた。

フィール「もう流石に恥ずかしいですよ」

少し照れながら頭を撫でる手を触れて止める。
年頃の女の子は母親みたいな人からのスキンシップに恥ずかしがる頃だ。

エルレイ「そして……………」

フィール「？」

「いちごタルトを食べさせたいのも当然の感情」(暴論)

フィール「……………プツ……………フフ」

エルレイ「お・た・べ・？」

フィール「……………ハハハ、因みにあと何個あるんですか？」

エルレイ「やった、普通に笑ってくれた……………えつと……………この間300作ったから……………5個食べて……………そのあと300作って……………」

フィール「糖尿病になりますよ？」

ポケットの神秘にも気になるが、いちごタルトを収納するだけの為に固有魔術オリジナルを作ったなんて聞いてみたらおかしくて笑ってしまった。

エルレイ「いいじゃん、『Project:Revive life』の成功例、死亡、死亡理由 糖尿病 なかなかインパクトある」

エルレイはそう言いながら屋上から去ろうとしたその時。

エザリー「……話し終わった？」

エルレイ「え、わあ!!」

エルレイとフィルの目の前にエルザに似ているが少し大人びたメガネをかけた女性が無表情の前でずっと立っていた。

フィル「エルザ……に似てるけど誰ですか？」

フィルは少し驚いた顔でエルレイに聞いた。

間違いなくエルザ本人だ。かつて共闘した私の世界では《戦車》を名乗った魔術師。

エザリー「エルザに似てるけど、エルザである、今はエザリーです」

エザリーは微笑みながらそんなジョークのような事を言う。

エルレイ「その口ぶり、やっぱり最初から見てたんでしょ？」

エザリー「まあね」

エルザは舌を少しべつとあざとく出した後。

エザリー「ところで、リエル？　ずいぶん子のこと仲良さそうだね？」

エルレイ「……………」

エザリー「目をそらさないで☆」

成る程とフィールは察した。

この世界で彼女を救ったのは、エルレイなのだ。

フィール「エザリーさんは、エルレイさんが好きなんですわね」

少しだけかつての親友と重ねながら、リエルと言う量産兵と戦っていたエルザとエルレイが仲が良い事に少しだけ涙が溢れそうになる。殺し合った血みどろの世界が消えていくようで安心した。

エザリー「まあ……ね」

エザリーは頬を染めた。

エルレイ「それで、なんで接触してきたの？」

エザリー「えつとね、簡単に言うと、ここにリエルのコピーが30くらい来てるからちよつと狩りに行こうって、リエ……エルレイにお願ひしに来たの」

フィール「……はっ？ 何で！ 実験は凍結した筈じゃ!？」

エルレイ「なんで、そうなった？」

エザリー「現時点では不明です、騎士長」

エザリーもエルレイもどうでもいいかのように、とても笑顔で話していた。

エルレイ「ごめん、フィーちゃん、先生、急用で来た、誰か先生いると思うから、その人と帰って」

エルレイはニコつと笑みを浮かべた、まるで戦場がやってきたのがうれしくてたまらないかのような、そんな表情だ。

フィール「……ハッ、舐めないでくださいエルレイさん」

帝国宮廷魔導師団のコートを着て、右手には魔銃ペネトレイターが握られていた。『愚者のアルカナ』に『魔銃ペネトレイター』を持ち、隠し武器を仕込んでいるフィールの姿はまるで……

フィール「私を誰だと思ってるんですか？」

まるで帝国宮廷魔導師団にいた《愚者》グレンⅡリーダーダスと姿が重なっていた。

エルレイ「……面白い」

エザリー「あ、一緒にこさせろの？」

エルレイ「うん、《万象に希う・我が背に取り付け・大いなる翼となつて羽ばたかん》」
エルレイはそう詠唱すると、エルレイの背中から銀色をベースに蒼い色が各所についた羽がエルレイから生えた、よく見てみるとリエルの大剣をつなぎ合わせ、羽にしたものようだ。

エルレイ「のつて」

フィール「分かりました。じゃあ私も、《駆けよ無窮の旋風よ》」

風で押す事で進む【ラピット・ストリーム】をリエルの羽に当てる事で推進力を引き出した。

フィール「行きましょう」

エザリー「この子……リエルに適応早いなあ……」

エザリーは苦笑いをしながら、フィールを支える形でエルレイの背中に乗った。

エルレイ「いるいる、いもうと」

エルレイはそう言いながら無表情だが嬉しそうだった、今いるのは学院の一番近くの林で林の木の陰に隠れるようにコピー体が何体もいた。

フィール「どうするんですか？ 殲滅か捕縛か」

エルレイ「突っ込む、ぶっ壊す!!」

エルレイはそう言い残し、一目散に大剣を詠唱して、生成し2刀流にしてから考えなしに突っ込んでいく。

エザリー「えつと……違うリエルを知ってるって言ってたから一応言っとくね、あの子リエルだよ？」

フィール「そうだったよ。成長してるけど、成長してないのね……」

フィールはため息をつきながら、エルレイの背中を追いかける。リエルの基本性能は「フィジカル・ブースト」並に高い為、フィールは「フィジカル・ブースト」をかけて詠唱を始める。

フィール「《極滅の雷神よ・世界を駆ける・彼方の果てへ》！」

軍用魔術B級の攻性呪文アサルトスベル「プラズマ・カノン」をぶつ放し、リエルのコピー体を殲滅していく。近づくコピー体はエザリーが弾き、遠距離から大剣を投げ付けるコピー体には魔銃ペネトレイターや「ライトニング・ピース」で撃ち抜く。

フィール「《吠えよ炎獅子》——《吠えよ》《吠えよ》《吠えよ》！」

黒魔「ブレイズ・バースト」を連射し、コピー体を吹き飛ばすが、大剣に防がれて致命傷には至らない。何人か大剣で襲い掛かってくるのをナイフでギリギリ捌きながら、至近距離で「ライトニング・ピース」で撃ち抜く。あと何体いるかわからない為、ここはこの場所ごと消し飛ばした方がいいだろう。

フィール「エルレイさん、エザリーさん！ 時間稼ぎお願い！」

ポケットの中の赤い結晶を取り出し、右手を前に出し詠唱を始める。元より殲滅なら塵すら残さず消し飛ばす。この瞬間、フィールは動けないが、今の自分には……

フィール「《——我は神を斬獲せし者・我は始原の祖と終を知る者・其は摂理の円環へと帰還せよ》」

仲間がいる。リエルのコピー体の攻撃を弾くエルレイとエザリーの援護がこの場において最大の力を発揮する。

エルレイ「了解」

エルザ「時間稼ぎ……ねっ!!」

二人の攻撃には目を見張るものがあつた、早すぎる剣撃、圧倒的な二人一組の戦闘技術、息の合いすぎている二人、そして何より、これだけ、30体ものコピー体を2人だ

けで相手しているにもかかわらず二人とも~~死~~まったく息が乱れていない~~死~~寧ろ笑いながら戦闘をしている、敵だとしたら恐ろしいことこの上ないだろう。

フィール「《五素より成りし物は五素に・象と理を紡ぐ縁は解離すべし・いざ森羅の万象は須らく此処に散滅せよ・遙かな虚無の果てに》

—— 2人共、下がって！

その一声に2人はフィールの後ろに下がる。これは200年前の魔導大戦でセリカ~~死~~アルフォネアが生み出した神殺しの最大の魔術、概念を消滅させる最大の奥義。

「黒魔改「イクステインクシオン・レイ」！」

膨大なマナをかつ喰らいながら赤黒い魔術式を作り出したフィールはその魔術を行使した。音も消え、概念と言う概念が跡形もなく消滅する神殺しの息吹は、リエルのコピー体はその威力の前に為す術なく消滅させていった。

フィール「ハア……ハア……これでざっと3分の2ぐらいは倒したでしょう」

エルレイ「ん、ちょうど全滅」

エザリー「お疲れ」

その言葉に驚き周りを見てみると確かにもう1体たりとも残っていない、逃げられたか、そう考えたが、「イクステインクション・レイ」で吹っ飛ばしたか所とは別に、エルレイとエザリーの戦っていた場所にコピーの死体の山が出来上がっていた、この二人は。詠唱という明らかに短い時間でフィールが気付かないうちに3分の1倒していたのだ。

フィール「流石、あんな短時間で全滅させられるなんて凄いですね」

素直にその強さに驚いた。

とりあえずやらなければならぬ事はリエルのコピー体の死体は残すべきではないと言う事だ。『Project:Revive life』が明らかになっていない以上、これを公にすればリエル本人が危ない。何故現れたのか知らないが、証拠は無さそうだから結局……

フィール「燃やすしかないか……流石にキツイけど『ブレイズ・バースト』を何回も使って焼却するしか……」

エルレイ「……ん《我目覚めるは・デウスと赤龍帝の力を信じし・殺戮人形なり》」
エザリー「！ ……フィールちゃん、ちよつとさがつてて」
フィール「聞いた事ない詠唱ですな……」

見るからに危なそうだ。大気がどんどん熱されていく。

エザリーは手をフィールの前に出し、下がるように合図をする。

「《我が力を糧として・我に大いなる力を与えたまえ》」

エルレイが詠唱を終えると発生していた熱が一気になくなった、そしてコピー体の死体の山の下にチャックのようなものが空間が開いたように開いており、そこから大量の黒い手がめきめきと現れ、そのコピー体を空いた空間の中へ引きずり込んでいつてしまった。

エルレイ「これで完了」

フィール「凄い魔術ですな……」

まるで禁術の「ゲヘナ・ゲート」のようだ。
だが、それはそんな物より更に上の次元の魔術だ。

エルレイ「……術？」

エザリー「……術……」

フィール「……へっ……違うんですか？」

「……………」

「まあ術でいいや」

二人は沈黙した後、あきらめたようにため息をついた、すると空から一枚の紙が降つてくる。

フィールがそれをつかみ取るとそこには。

『あの世界に戻りたいか？』

そう書いてあった。

エルレイ「多分、それに強く願えば帰れると思うよ」

エルレイは何かを確信したようにそう言った。
その状況をエザリーは微笑みながら見ていた。

フィール「そうですか……ねえ、エルレイさん……いや、リエル」

フィールはその紙を掴んだ。

すると、フィールの身体は光り輝き始めた。

フィール「リエル……貴女は殺戮兵器じゃないよ……ちゃんと優しい……先生になっただね」

フィールは優しい顔をしてエルレイに笑う。

エルレイを抱き締めて、胸ポケットの内側のいちごタルトを一個だけ貰う。お礼の時や別れの時はいつもいちごタルトを渡していたなら、これは多分……

フィール「リエル、一つ貰うね。さよならタルト……だっけ？」

エルレイ「……ん、さようならタルト、今度会う時は、天国か地獄か……それともま

たこの世か……また会お？　フィーちゃん」

エルレイ。いや、リエルはフィールをしつかり抱きしめて微笑んだ。

エルレイ「私はフィーちゃんの手助けをすることはできないけど……でもいつでもどこにいてもフィーちゃんの、味方だから」

最後に聞こえた言葉にフィールは優しく笑っていた。

「……………は」

気が付けばアルザーノ帝国学院の屋上に居た。

どうやら彼方では夕方だったのに、こちらは夜。時間の流れが少し違うらしい。

「夢……………だったのかな」

宮廷魔導師団のコートを着たまま屋上で倒れていた。
気が付けば寝てしまったと言う都合の良い事は無い。

「あー！居たー！」

「フィール！大丈夫?!」

「フィールさん大丈夫ですか?!」

校庭から声が聞こえるので下を覗くとそこにはセラ先生とグレン先生、システイーナ、ルミア、リエルの五人が居た。フィールは「グラビティ・コントロール」を使って屋上から降りると全員に心配されていた。

「みんなどうして……」

「当たり前だ。授業1日サボりやがって」

「今日一日行方不明だったんだよ!?!軍の人も知らないって言うし!」

「一日行方不明!?!」

時間の流れの影響がまだ半日しか経ってないと思っていたのだが……

「……………ん？」

自分の宮廷魔導師団のコートの中に何かが入っている。

自分の内側のポケットに何か自分の知らない膨らみがあった。それを取り出すとその膨らみの正体は……

「いちごタルト？」

「黒猫、お前お腹が空いたからって内側のポケットにいちごタルトは……」

「……………ぷっ……………」

フィールは堪らず笑い出した。

何だ、ちよつとした魔法のようなものに笑わずにはいられない。

「で？黒猫、何があったんだ丸一日行方不明になって」

「さてね？強いて言うなら……」

フィールは笑ってこれを渡した本人の顔を思い浮かべる。

「——ちよつとした『正義の魔法使い』に会っただけですよ」

「……………はあ？」

「リエル、あげるよ」

「いいの？わーい」

そう。ちよつとした『魔法使い』に会ったのだ。

フィールはこの時だけ、いちごタルトをあげた後、リエルの頭を撫でながら、遙か彼方の未来のリエル、エルレイに会える奇跡をただ月を見上げて無邪気な子供のよう
に笑っていた。

番外編 彷徨う過去の《愚者》との出会い 前編

ミアル「はああ!!」

エルレイ「いいいいいやああああああ!!!」

誰もいない真夜中、何もない林の中で、エルレイとミアルは自分自身の武器を手に自分の信念を貫くため戦いあっていた。

ミアル「いい加減……諦めてほしいな!」

エルレイ「できるわけない、ふざけないっで!!」

二人の武器がかち合うたびに空気が揺れ、地面が振動する。

エルレイは大剣でミアルの武器を破壊し戦意喪失させようとし、そしてミアルは氷でできた鎌を使用し、それを軽々と受け流していた。

ミアル「さて、そろそろ終わりに……！」

エルレイ「なに……！」

二人が戦って後ずさりした直後、二人の戦っていた中心に空白の手紙が1通、空から舞い降りてきた。その瞬間、2人の動きが止まる。降ってきた空白の手紙に、ミアルは普通気付く事はないナニカを感じたのだ。

ミアル「……へえ」

ミアルは氷の鎌をしまい、その手紙を片手に取る、エルレイも大剣を消滅させ、ミアルに近づく。差出人は不明、しかしその内容は。

『あの少女に会いたいのか？』

というエルレイにとって引つ掛かる言葉運びの内容だった。

エルレイ「……あの、少女？」

エルレイは嫌でも思い出す。

『私はエルレイ先生じゃない。だから——』

思い浮かべたのは長い黒髪の少女。

優しい笑顔を持つていながら、何かに絶望した顔の少女の事を……。

ミアル「……どうする？　リエル」

ミアルは少し楽しそうに聞き返す。

どうやら、戦いは一時中断。この手紙には何かがあるのは明白。敵同士の2人が動きを止めなければいけないこの手紙にミアルは少し楽しそうに見えた。

エルレイ「決まってる」

エルレイは即座にミアルの持っていた手紙を取り上げる。この手紙の差出人は未だ不明だ。前回も目的が分からずにただ偶然にも出会えたに過ぎないあの少女も居る。

だが、それ以上に……

エルレイ「これに乗れば、黒幕の正体が、掴める可能性あり、わざと乗せられてやるだけ」

そういうとミアルはその言葉を待ってたと言わんばかりに微笑んだ。やられつぱなしじや性に合わない。動かされただけで終わるなら、2人は最初から戦っていない。

それにこんな術式、存在してはいけないのだ。

こんな術式があっただけで世界は崩壊する。故に2人は昔のように手を取った。一時的な共闘、だが2人がすべき事は決まっていた。

ミアル「そう、じゃあ、ロクサスと、シユウ君には内緒ね」

エルレイ「ん、ルミア……私たちの」

ミアル「私たちの」

「^{デイト}戦争をはじめよう」

手紙を開いた瞬間、二人の意識は白い光に奪われていった。

血の匂いがする。

この地域は人が住まなくなった廃れた街中、そんな場所で2人は襲いかかる外道共を殲滅していた。

飛び散る鮮血、地獄を思わせる死肉が地面のあちこちに転がり、最後の1人をエルザが斬殺すると、フィールは風の魔術で死体を纏め上げて、燃やした。

フィール「任務完了……また気が滅入る任務だったよ」

エルザ「相変わらず、敵が減らないよね。ちよつと疲れてきちゃった」

死体の山を気付き上げて、魔術で死体を積み上げて、斬殺も火葬も全部自分達でやって疲れた。相変わらず血の臭いはとれない。腐ってしまった感情に腐ってしまった自分は多分、地獄に堕ちるのだろう。

とりあえず自分の服を水で流して魔術で乾かす。エルザの服まで乾かした瞬間、フィールは十時の方向に視線を向ける。

フィール「……………！ エルザ」

エルザ「分かっている。直感でしかないけど、かなりの戦闘経験が濃い。多分新手か……第二団^{アデフタス}《地位》^{オグダー}以上の力を感じる」

途轍もない魔力の波動、召喚魔術で悪魔か天使でも降臨させたのか知らないが、それともまた違う。概念的存在とは違い、戦場を知っている傭兵に近い。そんな感覚が2人を襲う。

フィール「本部に連絡する？ 大した応援は来ないだろうけど」

エルザ「死体が増えるだけよ。行きましょう」

フィールとエルザは強い気配を感じた場所へ走り出す。何故か、自分にもわからない不安を持ちながら。

エルレイ「……ここは」

見たところ街中のようだ、しかし人の気配はなく、ところどころ廃れている、そして何より、街の至る所に血が飛び散り、とても人が住める場所ではない。

ミアル「……血生臭いね」

ミアルは街中を見渡しながらそうつぶやいた。

嫌に鼻につく血と衛生が行き渡ってない為に匂う『死』の匂いにミアルは顔を顰めている。

エルレイ「……少し期待してたんだけど」

エルレイはかなりがっかりした様子でため息をついた、ここに例の少女がいる可能性は限りなく低いからだ、前に会った少女は血の匂いはしたがかなり過去に付いたものと

いう印象を受けた。

エルレイ「もしも、ここにいたとするなら、私達、タイムスリップしてきたってことだね」

ミアル「誰の事かわかんないけど、タイムスリップなんて非科学的……」

2人は口ではそう言ったものの。

「……」

どうやら心当たりがあるようだ。それも割と身近に存在する。

ミアル「ごめん、できる人いるね」

エルレイ「……だね」

エルレイとミアルはある二人の少年を思い浮かべながら苦笑いをした。

そしてエルレイは背伸びをした後、眠たそうな顔を元に戻し、真剣な表情で構え直した。

エルレイ「誰か来るよ、しかも、殺ることに慣れた人が、二人」

匂いで分かる、何か血で染まった人間の香りが2人ほど来ている。それも真新しい人を殺した匂いと、血を焼いたような焦げたような匂いが鼻につくようだ。

ミアル「戦闘はいったんやめてねリエル？　コンタクト取ってみる」
エルレイ「わかった」

二人は何者かが来るであろう方向へ歩を進めていった。恐怖など何も感じていないかのように、友達と散歩をするような気持ちで、二人は歩く。

フィール「(……コピー体に、金髪の少女……どっちも手練れだね)」

その影で、息を潜めて敵を観察する2人。

片方はコピー体で片方は見た事があるような金髪の少女。だがどちらも血と戦闘経験の濃さが尋常じゃない。

それに、理屈は分からないが良くない存在を感じる。術式を逆算出来るフィールでも、逆算出来ない異質の存在が背後についているようだ。

フィール「……まあいいや。行くよエルザ」

エルザ「うん！」

フィール「《駆けよ風狼よ》！」

フィールはエルザに黒魔【スウィフト・ストリーム】をかけて先陣を切らせる。エルザの抜刀術【神風】は神速の居合い抜き、剣の神エリエーテのデータを持とうが、追いつけないことが多い。

だが……

エルレイ「！」

ガキンツツ——！！

ミアル「！！ リイエル!!!」

エルレイはその神速抜刀に反応し、即座に刀を生成させ、エルザとかち合った。火花が散り、頬を僅かに斬ったものの、その抜刀は止められていた。

エルレイ「……エルザ？」

エルレイはその斬って来た少女に見覚えがあった、昔のエルザの姿、そのものなのだ。エルザは技を【神風】から【霜風】に変更し、下から上に刀を振るうが、それも受け流される

エルザ「くっ……！」

反応が早い。

剣の錬成スピードも今までのコピー体の比ではない。何より、言葉を話した。そして、隣の人間はコピー体をリイエルと呼んだ。

エルザ「リイエル？ 確かオリジナルの名前だったか……けど、私を知っている時点で敵なのは分かった」

エルザは宮廷魔導師団の《戦車》だ。

それを知る人間は『天の智慧研究会』くらいだ。コピー体は兎も角、金髪の少女は何かを知っている。

フィール「雷槍よ——踊れ！」

並列起動した6つの「ライトニング・ピアス」をそれぞれに三発ずつ撃つ。毎秒8万キロスの超高速の雷槍が2人を襲う。コピー体は兎も角、金髪は何が知っている為、捕らえて情報を吐かせるつもりで手加減はしていた。

エルレイ「っ!!!」

エルレイは即座に刀を投げてエルザを庇うように抱きしめながら「ライトニング・ピアス」を受けてエルレイ。だが、腕や足に貫通しただけで急所は避けられた。しかも投げた刀は丁度ミアルに向かった「ライトニング・ピアス」をすべて弾くように回転していた。

ミアル「今度は誰!？」

ミアルは「ライトニング・ピアス」が飛んできた方向に向かって叫ぶ。その場所には敵はいない。既に、別の地点に移動しているからだ。

フィール「(っ……エルザがまさか、捕まるなんて)」

エルザが捕まった。

庇っているようにも見えたが、フィールはさつき撃った「ライトニング・ピアス」の場所から敵の背後に出る。

フィール「《吹雪け三度の厳冬よ》《駆ける氷狼》！」

黒魔【フリージング・コフィン】を足元に放ち、黒魔【アイス・ブリザード】で視界を塞ぐ。エルザの服には凍結魔術対策の付与を施している為、エルザには効かない。

黒魔【フリージング・コフィン】の冷気をエルザを抱えたまま2人は躲し、黒魔【アイス・ブリザード】は視界を塞がれたとは言え、大した凍傷すらしていない。

だが、本命は氷風に隠した秒針で目を潰す事、そして自分が近づいて【愚者の世界】で

魔術封殺をするのが目的だ。そうすれば魔剣エスパーダと魔銃ペネトレイターの領分だ。

近づいて、敵の背後を取った。秒針も目を潰す事に成功した。

その時だった。

フィール「つつ……!?」

なぜかフィールの体が動かない、下を見てみるとフィールの足元に氷が張り、身動きが取れなくなった。

フィール「なっ……!!」

今、何をされたか分からなかった。

魔術は封殺した。タイミングも完璧だった。にも関わらず、自分の足は凍結していた。

フィール「つつ！【女帝の世界】!! エルザ!!」
エルザ「動けない……!! なんて馬鹿力なの……!!」

抱き締められてるエルザは抜け出せないようだ。

魔術での詠唱省略で脚に熱気を放ち、凍結した足を戻そうとするが、中々氷が解けない。恐らく、隣の金髪が行った異能関連のものなんだろう。

フィール「【極滅の雷神】——!!」

ミアル「《はい、そこまで》」

ミアルがそういうと、指をぱちんと鳴らした、その瞬間、足だけでなく、身体がピクリとも動かなくなる、それはエルレイも同じようだ、体が停止している。ミアルは秒針で血が出てしまった目の部分を擦りながら苦笑いをした。

ミアル「そろそろ、こっちの言い分を聞いてくれない？」

フィール「(つつ!) 空間凍結?! たった2節で……)」

あり得ない。時間や空間と言った術式はどの国でも最高難易度な筈、フィールが使え
る空間転移系の魔術だつて、構築出来ても劣化魔術が精一杯だ。

それに、有り得ないのは秒針が目にも僅かとはいえ当たつたのに、既に回復術式で目が
戻っている。失明した目は普通戻らない筈なのに。」

フィール「(つつ……詠唱も出来ない……【女帝の世界】も起こり得る事象が完全に停
止してる。つまり、解除しない限り絶対に動けないって事……)」

エルザは馬鹿力で押さえつけられ、フィールは空間ごと凍結させられている。殺され
る。近づいていく金髪に思わず目を瞑った。

ぼんぼん

ミアル「驚かせてごめんなさい、ご機嫌いかが？」

ミアルはフィールの頭を軽くなでた。

ミアル「すぐに解除するね、リイエル、その子から……《離れなさい》」
エルレイ「かしこまりました……」

エルレイはまるで操られているかのように目に光がなく、ミアルの一言でエルザから手を離れた。

パチンっ！ とミアルがもう一度指を鳴らすとフィールルとエルザの体の自由が利くようになる。エルザもフィールルも動けるようになった瞬間、警戒して2人から離れる。

フィールル「(精神支配の術式？ いや、なんか違う……魔術と言うより……)」

これは一種の加護に近い。

ルーンによる加護とはまた違う。と言うより、強大な力を貸してもらってるような、そんな感覚。

それにこの人、髪型こそ変わっているが……何処かで見た事がある。アリシア女王陛下に似ている金髪に異能者、まさか……

フィールル「エルミアナ女王？」

エルザ「?!」

エルミアナ王女はこの世界では天の智慧研究会に捕らえられたと報告があつた筈だ。それがコピー体を連れて何故こんな所にいる？

ミアル「……エルミアナか」

ミアルは首を傾げた、少し考えた後ミアルは口をひらいた。

ミアル「私はミアル、この子の……保護者つて思つてくれればいいかな？」

そう言いながら苦笑いをする、隣にいたエルレイは目を擦りながらため息をつく、エルレイは片方の目は当たつて失明しているようだが、片方の目はどうにか見えているようだった。

エルレイ「ルミア……私までやらなくても……」

ミアル「ごめんごめん、でもこうしないと、止まってくれないでしょ?」

エルレイ「そりやそうだけ……」

エルレイが2人を目視した瞬間。

血で目が霞みながらも、見たその光景にエルレイは目を見開いた。

エルレイ「……!!」

驚愕の表情を見せて、フィールのほうをじっと見た。

そこにいたのはエルレイが会いたかった少女、絶望を知りながら、絶望を覆す為に自分を欺き続ける哀れな少女。

エルレイ「フィー……ちゃん？」

エルレイはフィールを見据えて眩くが、フィールは首を傾げながら警戒している。フィールの事をフィーちゃんと読んだのは、この世界で一人しかいない。その人物さえ、今は故人だ。

エルザ「フィール、知り合い？」

フィール「初対面……だと思っけど、貴女は誰？」

その言葉を聞いてエルレイの顔は暗くなる。

エルレイは知っている。だが、フィールは知らない。未来であったエルレイは過去のフィールを知らないからだ。

フィール「元帝国宮廷魔導師団の執行官であり、《戦車》の前任者。リエルⅡレイフオードなら知ってる。コピー体とも少し違うのも分かる。けど、私は貴女を知らない」

エルザ「そもそも、貴女達は何者？ エルミアナ……じゃなくてミアル？ やイルシアのコピー体のオリジナルのリエルだとしても、何でこんな所に？」

エルレイ「……つ別の時間軸……」

エルレイは俯いたままそうつぶやいた。

ミアル「この子が、リエルの知り合いなんだね」

エルレイ「……」こくつ

ミアルの問いに、エルレイは俯いたまま軽くうなづく。

ミアル「……わかった、訂正します、私はエルミアナ王女で間違いありません」

ミアルは覚悟を決めたようにフィールとエルザに向き変える。

フィール達は驚愕する。何故なら、エルミアナ王女は今『天の智慧研究会』に囚われの身になっているからだ。

7 ミアル「前任者かはともかく、このこは、リエル||レイフォード、執行官ナンバー
7 《戦車》で間違いありません」

そしてミアルは片手に小さいナイフを取り出した。

それに警戒する2人、武器を一応構え直している。

ミアル「私達の事情は……未来の別次元から来ました。なんて言っても信用されないでしょう」

ミアルが口にした『未来の別次元』と言うのに引つかかった。
フィール自身はその術式をいつか生み出そうと考えている以上、その戯言のような言葉
を聞き流せなかった。

ミアル「なので今から敵でない証拠をお見せします」

するとミアルは片手に握ったそのナイフを……。

自分の首に目掛けて振りかざした。

斬った瞬間ざしゅつと鈍い音がきこえ、辺りにミアルの血が飛び散る、このまま出血
すれば、1分持たず絶命するだろう。

エルレイ「ルミアツツ
!!!!!!」

エルレイがその光景を見て悲痛そうな声をあげる。

ミアル「お手間は取らせません、何を言ったところで信用はされなさそうですからね」
ミアル「貴女方が傍観すれば私が死にます、何も問題はないでしょう？」

そう言いながらミアルは優しく微笑んだ。それは母親が子供に見せる笑顔のような優しさで、とても自殺しようとしている者の顔ではなかった。

フィール「なっ、ば、馬鹿かアンタは!？」

エルザ「フィール! ちよっ! 止血魔術!」

フィール「傷が深いから無理!」
「女帝の世界」起動! 《戦車》の前任者!! 魔力足りないから貴女の魔力を貸せ!!」

術式を省略して、「リヴァイヴァー」を発動する。

すると時間が戻ったように、出血した部分が戻るように傷ついた体を修復していく。

3分後……………

ミアル「……いたいたい……まあ、これで敵ではないとわかってもらえたかな？」
エルレイ「てめえこのやろう」

ごすつ!!! つとエルレイの拳が容赦なくミアルの後頭部に直撃する。

ミアル「いたつ!!!」

ミアルはとて痛いのか頭を抱えて蹲り、涙目になっていた。

ミアル「いつた〜……なにをするのっ!!!」

エルレイ「何するの。じゃない自己犠牲の塊、そんなことをして……そんなことをして……」

エルレイはこぶしを握り締めている、どうやら《敵じゃない》と思われるためだけのために自己犠牲で死んでしまう最悪の状況を考えて、怒りが収まらなかったのだろう
……

エルレイ「どう考えても、この二人の教育に悪い!!!」

魔力を消費してグツタリしているフィールは力無く、エルレイの頭を叩いた。

フィール「いや問題そこじゃないから……未来の世界から来た身分証明書みたいなものがある？ もしくは、自分が未来から来たって証明出来るもの。未来から来たって言うても正直まだ信用は出来ない」

エルザ「と言うかそんな術式あるの？ 聞いた事ないけど……」

フィール「思いつかなくはないんだけど、普通に考えて時間の奔流に流されて、精神体である魂がバラバラになるとは思うんだけど……」

エルザ「ダメじゃん!？」

身分証明書の偽造は出来なくはないから、対して意味はない。けど、この2人には間違いない何かがある。

それだけは確かに言える事だ。

エルレイ「……ん」

エルレイはとりあえずカードの《戦車》を二人の前に出した、その戦車はかなり傷だらけでヨレヨレ、とても年期の入ったものだった。

ミアル「私は……ない」

フィール「まあ貴女はいいです。どうせ片方から芋づる式で出てくるので」

エルザ「うーん。時期はあつてるし、この世界では確かりイエルの遺品は回収されてるんだっけ？」

フィール「ああ、間違いない。年期こそ入っているけど、本物だ。けど、これだけじゃ信用出来ないのは分かりますね？」

偽造可能の身分証明書。

私達を騙す為に作ったと考える事も可能だ。今の帝国宮廷魔導師団はシビアだ。戦力が少ない中で、死ぬ事がないようにする事が第一、用心深いのは当然だった。

エルレイ「？」

エルレイは何言ってるんだこの子、という顔で首を傾げた。

フィール「年期も時期も同じ、これは確かに《戦車》のリエルと同じだけど、偽装は出来なくはないって事ですよ」

エルザ「まあ……出来ない訳じゃないとこつちも信用は出来ないかな。仮にも帝国宮廷魔導師団の私達を抑えられる以上、私達と未来であったなら何か、私達の私物とか持つてませんか？」

エルレイ「……？」

エルレイはまだ首をかしげる。

まるで何か引つかかっているかのように。

ミアル「ねえ、君たち、1つだけ、私の質問に答えてもらってもいい？」

そこでミアルは苦笑いしながらそう言った。

ミアル「いつ私たちがさ 信用して なんて言った？」

フィールは納得して、ため息をつく。

確かに信用しろなんて誰も言っていない。敵なら敵のまま、敵じゃないならそれだけだ。

フィールル「……ああそういう事。安心して。私が言う信用は背中から刺されないだけの信用だけ、そもそも私だって信用なんて薄っぺらい言葉が1番信用出来ないし」

エルザ「ちよっ！ フィールル！」

フィールル「私があくまで調べてるのは天の智慧研究会の人間かどうか。容疑が晴れば何処にでも行けと言いたいが、貴女達は未来から来たと言った」

フィールルが危惧しているのは、むしろそっちの方だ。

過去や未来を行き来できる力、そんなものが外道魔術師達に渡ればこの国はお終いだ。

フィールル「未来や過去に行き来できる力なんて、天の智慧研究会に知られたら国は終わる。だからこそ、貴女達が何者なのかハッキリさせるのが私達の仕事。お分かり？」

エルザ「ちよっとフィールル、喧嘩腰にならないの」

フィールル「それに……まあ、あの人の約束もあるからね。姿は変わっても……」

ミアルは分からないように首を傾げている。

フィールだけが知っているアリシア女王陛下との約束。いつか必ず連れ戻すと約束したから、知らなければいけない事だつてあるのだし。

エルレイ「……ん、一番……か、嫌いな言葉の私は3番くらいかな？」

エルレイはようやく合点がいったように前を向いた。

エルレイ「じゃあ、背後から刺される、事が無くなれば、フィーちゃんはいんだ」

エルレイは左手で刀を握り締めて。

エルザ「つつ……!?!」

そのまま自分の右腕を切り落とした。

ミアル「……人の事言えないじゃん」

ミアルは軽くため息をつく。

その痛々しい切断面に思わずエルザは眼を閉じてフィールの袖を掴んでいた。フィールもエルレイの行動に何とも言えない様子だった。

エルレイ「フィーちゃん、それはフィーちゃんの……私達特務分室の役目じゃない、特務分室の仕事は殺すor捕らえる、何者なのかハッキリさせるのは、拷問屋の役目……だよね？」

するとエルレイは持っていた刀の刃を左手で持ち、フィールに差し出す。

エルレイ「ちよつとだけ手伝って、これで、私の左手斬って、それならいいでしょ？フィーちゃん」

その左手は今にも刀によって落ちそうで、見てて痛々しい事この上なかった。エルレイがそう頼む中、フィールは思いつきエルレイを殴った。力一杯殴ったせいで、エルレイは気を失っていた。

エルレイ「……知らない天井」

フィール「目が覚めたようね」

気が付けばエルレイはベッドの上にいる。

薄暗いが、ランプの明かりで照らされた家の中はとても広い。近くではエルザとミアルが毛布に包まり眠っていた。

フィール「つたく、腕を切り落とすくらいなら気絶させた方がマシなくらい考えろ。
この馬鹿」

フィールは軽く頭を殴る。

エルレイはポカンとした表情でフィールを見る。

エルレイ「いたい」

フィール「んで？ 未来から来たリイエル……エルレイだっけ？ とりあえず表面上

は貴女達を信用する事にした。だが勘違いしないで、命を簡単に粗末にする人間の言葉なんて薄っぺらい。だからこそ、生きる為に行動するべきだった。それが分からないなら私は貴女を許さない」

エルレイ「……優しいんだね」

エルレイは少し苦笑いをした。

エルレイ「でも、人間は簡単に命を粗末にする、食事、服、家、すべて命から頂戴したものだよ、生きるために命を粗末にするの……悪いけどね」

エルレイはそういうとフィールのおでこをペチツと叩いた。

エルレイ「命を粗末にする人間の言葉は薄っぺらい？ 知ってるよ、そもそも人間自体が薄いからね」

フィール「生きて、話せて、それだけの態度が取れるならアンタは人間だよ。まったく、久しぶりに縫合と回路パスの治癒なんてやったから疲れたし、私は寝る」

エルレイ「フィールちゃん……」

フィール「……悪かったよ。私も動揺してた」

フィールは毛布を被ってソファで眠り始めた。

信用されないからって腕を平然と切り落とすなんて真似、フィールはどうしても感化できなかった。誰も彼もが、生きる為に行動するのが基本なのに、エルレイやミアルの行動はそれと逆、いつでも死ぬる心構えをしているようで、気がつけばフィールは動いていた。

エルレイ「やっぱり、優しいねフィーちゃんは………優しいすぎるほどに」

エルレイはそう言いながら目をつぶった。

エルレイ「ありがとタルト」

エルレイは力を振り絞りいちごタルトをフィールに差し出した。

番外編 彷徨う過去の《愚者》との出会い 中編

フィール 「ふああああ、眠い」

遅くまで起きたのに起きるのは早いのは、長く眠ると悪夢に魘されるからだ。エルザとミアルはまだ寝ている。まだ眠いし、今日は任務は無いが、それでも休み方とかわかる筈もなかった。目を擦り、硬い床から起き上がる。

エルレイ 「おはよ?」

起きた瞬間に警戒したが一瞬で解いた。エルレイはもう起きていた、どこからか取り出したであろうおにぎりを握っている。

フィール 「いや何してんの」

意外と冷静に質問したフィールだが、少し動揺している。

エルレイ「これ？ おにぎり握ってる」

何か問題でも？ といった表情をエルレイは見せる。

問題だらけなのだが、軽くドヤ顔をしているエルレイにため息をつく。

エルレイ「大丈夫だよ、これさつき買ってきて炊いたやつ」

フィールは昨日エルレイが自刃した腕を見る。

眼はどうやら元に戻っているが、規格外の力を宿していた事を思い出し、考えるのをやめた。

フィール「腕と眼は？」

エルレイ「ちよつと痛いけど、どつちも動くよ？」

そう言いながら握ったおにぎりをフィールに差し出した。 それを見たフィールは

額に手を当て、シワが寄っていた。

フィール「全く、1日で殆ど完治とかどうなってるんだ」

ヤケクソ気味におにぎりを口の中に頬張るフィール。

中身は意外にも昆布や明太子、梅などで美味かった。

その後、ミアルとエルザが起きてミアルは平然と食べている中、エルザは疑いながらもフィールが「毒味はしたから問題ない」と言ったら食べた。

フィール「んで？ 未来から過去へ逆行する魔術だっけ？ 端的に言えば不可能じゃ

ない、が正解かな」

エルザ「どう言う事？」

フィール「正確に言うなら過去に自分の情報を書き込む。要するに本のしおりと同じ、しおりを挟んだ部分から未来を好きな形に変更出来る魔術は存在しなくはない。原理は【月読ノ揺り籠】^{ムーン・クレイドル}に似ているかな」

エルザ「世界に対して個人的な情報を入力すれば不可能じゃないって事？」

フィール「世界の根底を揺るがす歪みを許さないが、多少の歪みは許容範囲内だ。正

確に言うなら過去そのものは変えられないが、個人の過去なら変えられる。原理的にはこんなものでしょ」

まあそれがわかった所で、なぜエルレイ達が過去の世界に送られたのか、皆目検討もつかない。メリットはなんだ？ 2人には確かに特別な力がある事は身に染みて理解した。

だが、この2人がもし、意図的に召喚されたなら役目と言うものがある筈だ。

フィール「まあいい。今日は休日だ。適当に調べるしかないか」

エルレイ「？ 二人は、拷問屋に渡したらお仕事終わりでは？」

エルレイがまだそんなことを言っている。

だが今回は2人を上層部に尚更引き渡せなくなった。

フィール「いや、引き渡しは無し。そもそも上層部さえ信用し切れないし、未来から来たなんて上層部に報告してみる？ 最近一掃した連中のせいで今の上層部はピリピリしてんのに」

エルザ「まあ、1番怪しいイグナイト家の人間、室長は除いて妙にきな臭いしね。2人を渡したら敵に情報が回る可能性があるしね」

絶対に知れ渡る。確信があった。大部分の情報を掴んだのに、逃げられるのは上の連中に裏切り者がいるからだ。まあ全員書類上は白だが、アリシア女王陛下以外は誰もが怪しいのだ。

ミアル「イグナイト家がきな臭い……か、どこも同じなんだね」

そう言いながらミアルは苦笑いをした。

どうやら、そちらの未来でもイグナイトには何かあるのだろう。

エルレイ「いや……ちゃんと普通の人もいる……いやいないか」

そう言いながらエルレイはため息をつく。

一応、この世界のイグナイトはイヴなのだが、悪友のイメージが強く確かに普通じゃない。

ミアル「……というか、上層部が信じられず、私達を受け渡しはなし、しかも情報は欲しいけど、拷問もする気配なし……」

エルレイ「……なんで殺さないのって疑問しかないよね……こっちとしては」

フィール「殺さない理由？ コレだよ」

フィールのポケットから取り出したのは黄色の球体だ。

それを見たエルレイは自分のポケットを探るが、見当たらない。

フィール「身体検査をしている時に、これを見つけた」

これはエルレイが持っていた白魔〔イリユージョン・スフィア〕を拡張させる為に作られた魔導具だ。それは未来でフィールに一時的に出会った時にフィールが忘れたものだ。

フィール「これは私がセリカ伯母さんに見せる為に作った最初の魔導具で、術式は少し杜撰とは言え、これ専用の詠唱をしなければ機能しない魔導具。明らかにこれは私の

持つ魔導具と同じ」

エルザ「それって……未来でフィールから受け取ったから？」

フィール「そう。この術式は間違ひなく私が描いたもの。それが二つも存在していると言う事は……貴女は未来で私に出会ってると言う証明にはなった」

エルレイ「……成程」

エルレイは納得したようにポケットからいちごタルトを取り出して、頬張った。

ミアルはさりげなく、いちごタルトを一枚盗んで頬張る。それに呆れているフィールは疲れもあつて欠伸をしていた。

ミアル「ところで、適当に調べると言つても、あてはあるんですか？」

フィール「さつきも言つたように、人間そのものを肉体ごと過去に飛ばすのは原理上は難しい。回路や肉体が時間の奔流に流されて磨耗やボロボロになつて最悪死ぬからね」

今解明されている術式では、そんな事不可能に等しい。

そもそも時間や概念をすつ飛ばしてそんな事したら肉体が塵になる。だが、と

フィールは付け足す。

フィール「だけど、精神体、自分が生きていたという情報のみを過去に飛ばすなら肉体ごと飛ばすより難しくない。魂が飛ばされて生きた情報というものがあれば、仮初とは言え肉体が必ずついてくる。そう長くは保たない仮初の肉体だが、普通の人間としては生きることが可能だ」

エルザ「つまり？ 2人は霊体で、仮初の受肉で存在しているって事？」

フィール「まあそんな感じだね。そして、魂に関連する魔術師や、外道魔術師の通り名である程度は予測できる。こんな事が出来るのはシオンか、もしくはシオンの研究に携わった誰か」

そんな事が出来る人物は1人のみ。

シオンを殺し、魂に関連する研究データを盗み、イルシアを殺した人物で、この世界でいまだに捕まっていない人物。

エルザ「……ライネルレイヤー？」

フィール「可能性は高い。アイツが今のコピー体を造る第二団^{アダプテフ}《地位》^{オーダー}だし、恐らく

はそいつと、もう一人黒幕がいる」

ライネル以外に少なくとも一人、今のミアルやエルレイを連れてくる理由が存在する。いや、連れて来てメリットがある黒幕が存在する。

エルレイ「ライネル……もうその名は、聞かないと思っていたが」

エルレイは少しいら立ちを抑える様に唇をかんだ。

ミアル「おちついて、リエル、血が出ちやう」

それを見ていたミアルが落ち着かせようとエルレイの背中を摩った。

ミアル「そのライネルって人と、もう一人黒幕がいる可能性があるんだね？」

フィール「多分ね、ライネル単体でこんな事は出来ない。多分目的は……ミアル、貴女だろうね」

推測とは言え、狙いは未来のエルミアナだと口にした。

まあ理由は推測出来る。この人物もエルミアナ王女と同質の存在なら理由は一つ。

フィールル「貴女は『王者の法』^{アルスマグナ}が使えるよね？」

ミアル「！……へえ、それを知ってるんだ、ということは情報がもう拡散されてるってことかな？」

ミアルは少し驚いた後、首を傾げた。

ミアルもといルミアアインジエルは異能持ち、それも特異な異能を宿している。

フィールル「上層部なら誰でも知ってる。天の智慧研究会は最初から本質に気付いてるみたいだけどね」

そして、何よりルミアア的能力は昇華だ。強化ではなく、理論やルーンの強さをアップグレードさせる力だ。『禁忌教典』^{アカツツレコード}を追う奴等にとって必要なピースだ。

フィールル「だがもし、並行世界からその異能が使えるミアルを集めたら？　この世界

のライネルはミアルを使って更にコピー体を増やす事が出来る。そして、一定の上層部を瓦解させ、権力を握る事で得るのは一番怪しいイグナイトになる。そして、イグナイトの唯一の駒。世界に干渉する魔術師と言えは？」

ミアル「……そういう事」

エルレイ「……イグナイト家マジ……クタバレ」

エルレイはいら立ちを抑えることなくそう吐き捨てた。

フィール「てか2人も心当たりがあるんじゃない？ 元帝国宮廷魔導師団にいつの間にか居た人間で、イグナイト家の幻術使いの駒の名前」

フィールはため息をつきながら聞いてみる。

確か上層部の連中を一掃した中にも居た。あの時は幻影に惑わせて対象から外れたから捕まえられたが、上層部に引き渡した後に逃げられた。

二人は少し黙り込んだのち……。

ミアル「忘れたよ………イグナイト家の人間なんて」

そう吐き捨てた。

どうやらいい思い出はなさそうだ。

エルレイ「一つ言っておく、私達の世界ではイグナイト家は滅亡してるんだ、存在するとしたらそれはイグナイト家ではなくなった人間」

エルレイ「あと、あまりミアルの前で、イグナイト家の話はしないで、怒ったら怖いよ？」

フィール「……事情は聞かないけど、今回ばかりは貴女の協力も必要だ。あの魔術に對抗出来るのは『王者の法』^{アルスマグナ}くらいだし。そもそも、魂に合わせた仮初の肉体が長く持つわけがない。放っておくと貴女達は死ぬ」

エルザ「なっ……!?!」

フィール「世界が2人が存在していると誤認しているんだから当然でしょ。時間が経てば綻びは修正されていくのが基本。長引けばいつ死ぬか分からないしね」

ミアル「そういう事なら協力します、死にたくはありませんからね♪」

そのミアルの言葉にエルレイはため息をついた。

エルレイ「イグナイト家の話が無くなってからこの子明るく……まあいいや」

エルレイはあきれ果てたように二人にいちごタルトを渡す。

エルレイ「はい、協力の証、二人は未成年っぽいからこれでいいよね、おたべ？」

エルレイの言葉に三人とも一瞬硬直する、なぜ証明がいちごタルトなのか全員疑問なのだ。

フィール「いや要らないから。そもそも、何故かベッドの横にあつたから食べたし。私はこれからイヴの所に行く。アイツならある程度はライネル達の動向を知ってるかもしれないからね」

エルザ「私はどうすんの？」

フィール「ぶつちやければ休め。普通に筋肉痛で動きにくいでしょ」

エルザ「うっ」

エルレイ「じゃあ、エルザはお食べ？」

ミアル「あはは……こんな子でごめんね？」

ミアルはエルザに目線を合わせて5個ぐらい積まれたいちごタルトを見ながら苦笑いし、それを横目にファイルは隠れ家から出ていた。

ファイルは帝国に提出した資料を片っ端から漁っていた。

ライネル「レイヤー。そして、元帝国宮廷魔導師団《月》のイリアの動向を探る為にファイルは情報を見ては次にと繰り返していた。

イヴ「あれファイル？ 貴女休みじゃなかったっけ？」

ファイル「調べ物したら帰る」

イヴ「休日に調べ物するんじゃないわよ。昨日の任務があったでしょうが」

イヴはヒョイツとファイルの持つ資料を奪った。

そこに書かれていたのはライネル「レイヤー」の情報。そして、《月》のイリアの動向に

ついて。

イヴ「今更の資料なんか漁って、どうしたのよ一体」

フィール「ライネルによるコピー体が増えた事に疑問が生まれてね。あり得ない事があり得るかもしれないから動向を探ってるの。それ返してよ」

イヴ「答えになってない」

フィール「答えにしてないし」

相変わらず仲が悪い2人。

フィールが調べているのはエルレイにも内緒だが、未来からの逆行。それはフィールが1番禁忌と考えもいる魔術だ。もし、そんなものが実在しているなら……

そう考えている中で、イヴはため息をつきながら資料を置き始めた。

フィール「……なにこの資料は？」

イヴ「最新の奴等の情報よ。拠点を転々として回っているけど、貴女達が虱潰しに潰したでしょ？」

フィール「なんで知ってるの？」

イヴ「私を舐めないで。これでも室長なんだから」

そこに書かれていたのは最近の動向を捕らえた《月》のイリアの資料だ。そいつは他人に化けながら何処かにいつも潜入していくのを目撃しているとの事。

イヴ「ただ、《月》のイリアは強力な幻術使い、発見しても突撃させれば返り討ちに遭うから、どの道貴女達に頼むつもりだったし」

フィール「それはイグナイトの為？」

イヴ「伝えてないわ。1番きな臭いのは私を含めたイグナイト家なんだから」

フィール「了解、んじゃ休日は明日に回してくれる？」

仕方ないわね。とため息をつきながらイヴはフィールを見送る。奴等の動向は私達の休日も知っているからこそ、動いている。ならば今動く事が余程の異常事態となる訳だ。

フィール「直ぐに終わらせてやる」

ファイルは保管していた装備を手に取り、武器庫から自分の貯めていた装備を装着する。そして隠れ家へと向かい始めようとした。

ミアル「おわった？」

突如声がして後ろに下がるファイル。武器庫を出ると同時に気配なくミアルがそこにはいた。

ファイル「いやここ機密場所！ 何で居るの……」

ミアル「ごめんなさい、でもどうしても貴女に忠告することがあったから、誰もいないここは都合がいいんだ」

そう言いながらミアルは軽く笑った。

ファイル「忠告？」

ファイルは首を傾げた。

ミアル「ま、むずかしいことじゃないよ」

ミアルはフィールに顔を寄せた、その顔はどこか無表情で怒りを放っているような気がする、そんな顔だった。

ミアル「二度とリエルを、人間ごとときと一緒にするな」

その鋭い殺気にフィールは一瞬顔が強張った。

フィール「へえ、昨日の話、聞いてたんだ？」

ミアル「あの状況で寝れるほど……私はできていない」

フィール「じゃあ何？ 人間と一緒にするなって事はアンタらは何なの？ 人間じゃないとでも言いたいなの？」

不適に笑いながらもフィールは口にする。

人間扱いするな。まるで人間じゃないような言い方。神様にでもなったつもり……

いや、あり得ざる力はどちらかと言えばそちらに近いのだが……

ミアル「それは貴女が知らなくても良いこと」

そういうとミアルはため息をついた。

どうやら力については語ることは無いようだ。

ミアル「けど、詳しくは言えないけどあの子は人形として利用され続けてきた……そして私もね……」

ミアルは一度俯いたあと、もう一度ファイルに向き直った。

ミアル「その利用しか考えてない下等外道生物共と私の親友が同じだと言わないでほしい……それだけだよ」

ミアルはそう言い放った瞬間。

もない。それだけの話だよ」

フィールはカラカラと笑いながら口にした。

そう、フィールがエルレイに語ったのはあくまで人間の生き方についてだ。外道魔術師と一緒にしたつもりはない。唯の人間の一般論に過ぎない。

フィール「つて、お父さんが生きていたらそう言つてたと思うよ？ 私はね？」

ミアル「……ふふつ、グレンせんせ……グレンさんみたいだねそれ、あ、No. 0の愚者の人のことね」

フィール「……先生ねえ。そっちの世界では助かったんだね。私のお父さんは」

ミアル「そっちの世界……か」

フィール「あはは、お母さんの言つた通りか。まあいい。隠れ家に戻るよ。直ぐに終わらせようか。ミアルもエルレイも、手を貸してもらおうよ？」

ミアル「わかつてるよ、すぐに終わらせよつか《我目覚めるは・赤龍帝とデウスの力を許容する・名無しなり・異端を愛し・慈悲を捨てる・我が力を糧として・我に大いなる力を与えたまえ》」

ミアルが詠唱すると、熱が発生し、なくなると思ったら突如、何も無い空間が裂け、そのヒビから人を押しつぶせそうなほどの大きな懐中時計のようなものが出てくる、その中は深淵で何があるのかわからない。

ミアル「こつちに、おいで」

フィール「いやいや、大丈夫なのそれ？ 途轍もなく嫌な魔力を感じるんだけど」

冷や汗をかきながらミアルに聞いた。

空間がひび割れて出てきた懐中時計なんて怪しさと不快感が二重に襲いかかってくる。

ミアル「あ、大丈夫だよ、危ないものじゃ無いから……まあ使用者の寿命と魂削るけどね」

そう言いながら最後にぼそつと苦笑いしながらつぶやいた。だが、フィールには聞こえてしまった。

フィール「……………私は命を粗末にする生き方が嫌いって言わなかった？」

ミアルを少しだけ睨むが、ミアルは苦笑いしていた。

それを見たフィールはため息をつきながらも、ミアルの額を軽く叩く。正直そんな魔術は気に入らないが、使ってしまった以上どうこうなる問題じゃない。

フィール「……………行くよ」

ミアル「あはは、ごめんね、私達はそのあなたの嫌いな事を好きな人のためにするのが大好きなんだ」

そういうとミアルはいつの間にか両手に古風の拳銃を二丁構えていた。そしてそのままフィールを抱き寄せる。

ミアル「ザフキエル《刻々帝》 アレフ《一の弾》」

ミアルは銃を自分の頭に向けて容赦なく発射する。するとなぜかそこで意識が一瞬だけ刈り取られた。

刈り取られたのは0, 001秒程度だったが、気付くとそこは隠れ家で、瞬間移動でもしたかのような感覚だった。

ミアル「ただいま」

エルレイ「お帰り」

フィール「瞬間移動……ねえ。《シヨート・テレポ》じゃあるまいし」

エルザ「お帰りフィール。場所は特定出来たの？」

フィール「まあね。復興中のフェジテに神出鬼没で現れる人間。どう考えても怪しいでしょ。『ストーム・グラスパー』で探知して、探し出すから行くよ。刀は砥いだの？」

エルザ「バッチリよ。砥石はエルレイが錬金してくれたし」

エルレイ「砥石制作代償、エルザをモフらせることと、いちごタルトを食べてもらう事」

ミアル「はいはい。別に一触即発になつたりはしてないんだね」

そう言いながらミアルは苦笑いをした。

エルザも既に装備は完璧だ。どうやら短期決戦な雰囲気を感じていたのはエルザも同じだったようだ。

フィール「んじゃ、行きますか」

エルザ「仕事は早く終わらせるに限るし……この構図だとダブルデート？」

フィール「男が1人もいないけどね」

エルレイ「デート……シユウいないけど、いいか」

ミアル「そうだね……さあ、リエル、もう一度私たちの」

エルレイ「ん……私たちの」

「「「^{デート}戦争を始めましょう」」」

不敵な笑みでクールに決める4人。

もはや敵など居ないに等しい。その背中は男顔負けの殺戮者の背中だった。

フィール「………乗っかってみたけど、これ流行ってんの？」

ミアル「いや……」

エルレイ「うちの掛け声……っただけ」

エルザは苦笑していた。

復興中のフェジテは建物が修繕されていき、半分とはいえようやく人が住めるほどにはなった。その中で神出鬼没の存在と言えば、1人しかない。

フィール「見つけた」

エルザ「相変わらず、凄い感知力ね」

フィール「地下。空洞が存在してる以上、換気できるだけの場所は必要でしょ？ 東に300メートル、そこから異様に空気の流れが下に向かってる」

黒魔改「ストーム・グラスパー」は周囲の風を全て把握し、支配下に置く力。風使いのセラの娘としての力を本領発揮するフィール。伊達にセラの娘ではない。

ミアル「この歳で良くここまで……」

ミアルは珍しく素直にフィールに驚いた。

これ程の技量は自分達がいた時代のシステイーナでも可能だったか分からない程、支配領域が大きいのだ。

エルレイ「それで、敵は？」

フィール「風だけじゃ人物までは分からないけど、ある程度は絞れた。恐らく一軒家の地下、そこに空洞を作って研究所を生み出してるんでしょね」

エルザ「まあその場所に行つて人払いの結果を張つて、後は強行突破する？ 畏ならフィールが感知出来るし」

フィール「それでもいいけど、そっちの2人は？」

エルレイ「畏感知なんて必要ない」

エルレイはそう断言した。

しまった。よくよく考えればコピー体も同じように突貫型だった。

エルレイ「突っ込めば勝て——」

どすっ!!!

ミアル「それで大丈夫」

フィール「……死んだか」

エルザ「……死んだね」

ミアル「南無さん」

どすっ!! どすっ!! どすっ!!

エルレイ「いくら何でも辛辣過ぎ」

フィール「昨日、手首勝手に切り落として【リヴァイヴァー】まで使った後に、縫合と回路の^{パス}治療させた事、まだ怒ってるからね」

エルレイ「怒ってくれるんだ、フィーちゃんは優しいね、ありがとタルト」

そう言いながらエルレイはいちごタルトを差し出した。

だがフィールは冷静な顔をして、いちごタルトをエルレイから貰わずに告げる。

フィール「任務前は要らない」

エルレイ「!?」ガーン

とまあ茶番をしながらも、目的地の場所まで駆け始めた。

フィール「この換気口の奥が、空洞になってる」

エルザ「じゃあこの近くに……」

フィール「いるね。民家を風潰しに探したら流石に怪しまれるし」

どうしようかなあ、とフィールは考えている。

仮にも《月》のイリアの幻術は、『王者の法』^{アルスマグナ}でさえ覚醒が難しいのに、手っ取り早く

地下の入り口さえ見つかれば楽なのだが……

ミアル「？ 地下の入り口から入ろうよ、そのほうが楽だし」

ミアルは首を傾げながらそう言った。

だがそういう問題ではないのだ。民家のどこにあるか分からない。

フィール「その地下の入り口がこの近くの民家の中の何処かにあるのよ。けど、それ以上は分からないし場所も密閉されている部屋とかに風の感知は無理だし。民家には人が住んでるのに、いちいち聞き回ったら勘付かれるでしょうが」

ここはいつそ、この換気口の地盤を壊すか？

いやそんな脳筋な事をしたら始末書ものだ。絶対にやりたくない。

ミアル「……リィエル、見つけ出しなさい」

エルレイ「はっ、エルミアナ様の仰せのままに」

エルレイはそう言うとしやがみこんで、地面をトントンと叩き始めた。

フィール「洗脳？」

精神掌握しているように見えるのは私だけか？

と言うか詠唱すら無しに精神掌握したぞこの人。

エルレイ「ごめん……今のはただの仕事のノリ、洗脳はされてない」

エルレイは苦笑いをしながら地面を叩いていた手を止めて、立ち上がる。

エルレイ「こつち、ついてきて」

エルザ「えっ、分かるの？」

フィール「まさか……臭いで？ 犬か？」

エルレイ「誰が犬、わたしは猫派」

少しムツとしたエルレイに苦笑いしながらミアルが説明し始める。

ミアル「超音波だよ。今この子は地面を叩いて超音波を振動させて、ここの地形を把握してたんだよ、しかもその超音波は基本的にリエルにしか聞こえない」

フィール「便利だね。成る程、リエルの元のスペックなら納得か」

エルザ「ああ、確かに」

この世界のリエル？

ああ、剣の神エリエーテの斬撃を縦横無尽に放ってくる化け物ですよ？ あんなの命が幾つあっても足りないくらい大変だし。

エルレイ「いこう、先陣は私が務める」

そういうとエルレイは足音も全くたてず、まるでその場に居ないかのような体の軽やかさで移動し始めた。

フィール「仕方ない。エルザ、今回は後衛で。ミアルと行動」

エルザ「りょーかいよ」

フィール「罨を感知しながら行くから……ってエルレイ！ 三步目に罨!!」

フィールがエルレイに叫んだ瞬間、エルレイは一步後ろに下がった。

フィール「意外と面倒な……《滅せよ》！」

フィールは罨の部分に「デイスベル・フォース」で無力化する。一度踏んだら肉体が焼かれる炎の罨魔術だ。アレをエルレイが踏んでいたら、致命傷は避けても、脚くらは潰せただろう。

エルレイ「つ……と、ごめん、今のは気づかなかった」

そう言いながら振り返るや否や、また走り出す。

ミアル「懲りてないのかなあの子……」

フィール「つて待て!? ……五歩目と十二歩目! 上にも罨があるんだけど!」

指示する前に気付いたらエルレイは罨を踏んでいた。

上から降ってくる針の雨、下から凍る凍結魔術。何とも悪質な罨が多い事だ。

フィール「《暴乱の塔よ》!」

フィールは黒魔改「ライアブル・スクリーン」で全ての針をエルレイから逸らす。猪

突猛進過ぎてフィールが即興で合わせなくちゃいけないのが精神的にしんどい。

エルレイ「ん、ありがと……」

エルレイは優しい笑顔でフィールを見つめた、まるで自分の娘を見ているかのように

……

エルレイ「んじゃ」

ミアル「んじゃ、じゃない」

バシユン!!!

ミアルは容赦なく持っていた銃をエルレイの眉間にぶつ放した。

フィール「えっ? 躊躇無し?」

エルザ「別の意味で怖いんだけどミアルさん」

銃を躊躇無く味方に撃った。ある意味、尊敬する。

ミアル「味方に撃つのを躊躇してたら、ツツコミ担当がいなくなるも同然だから」

そんな話をしていると。さすがにエルレイが一度戻ってきた。

エルレイ「ルミア……痛い」

ミアル「あ、ごめんあそばせ？ 射線上にいたもので」

エルレイ「流石、流石、ロクサスに鍛えられた理不尽は、言うことが違いますね」

ミアル「ふふつ、突っ込んで守るしか脳のないシユウくん見たいなリィエルには遠く及ばないよ？」

エルレイ「一本取られた。ふふつ」

ミアル「でしょ？ あははっ」

「はははははっ」

スチャ……、カチャン……

バシユン!! ザシユ!! バシユン!! ザシユ!! バシユン!! ザシユ!! バシユン!!

!! ザシユ!! バシユン!! ザシユ!! バシユン!! ザシユ!! バシユン!! ザシユ!!

!! バシユン!! ザシユ!! バシユン!! ザシユ!! バシユン!! ザシユ!!

フィール「……エルザ、止めてきて」

エルザ「無理です」

フィールはため息をつきながら、秒針を投げる。

2人の首元に軽く刺さった瞬間、2人は膝をついて倒れた。

「うっ……!?!」

地面と友達になれたようでフィールは頭を痛めながらも地味に強く首元に突き刺した。痛いだけで回復すればすぐ治る。

フィール「味方に撃つのを躊躇してたら、ツッコミ担当がいなくなる……だっけ?」

エルザ「麻痺毒……」

解毒の針を腕に突き刺して、注射より痛い為2人は悶絶していた。

エルレイ「刺された瞬間、またシステイーナに止められたか、と思っってしまった」

エルレイとミアルは首元を擦った。

ミアル「……今回はリエルのせいだよ」

エルレイ「先に撃ってきたのはそっち」

フィール「次やったら致死性の毒」

「はい、すいませんでした」

※この二人はほとんど何されても死にませんが、唯一毒はまともにくらいます。

フィール「さて、罨は大分終わった筈だし、そろそろ広間……」

研究所に進むと大広間のような場所に出る。

そこには『Project: Revive life』で生み出されたリエルの量産兵の他に、別の人間の……第二団《地位》の人間の肉体すら存在している。

フィール「かつて《竜帝》レイクが蘇生したのと同じ、死んでも死なない矛盾はやっぱりこれか。コイツらは死に対する保険があるって訳ね」

エルレイ「……………ちつ所詮外道下等生物か」

エルレイは小さくそう呟いた。

これは即座に壊した方がいい、そう判断した瞬間に水槽の中にいたリエルのコピーの水槽が壊れて、表に出始めた。その数は約8体。しかも服などなく全裸で。

フィール「自動防衛システムにでも引つかかったか。遠視で見ているようね？ エルザ！ 多分全員エリエーテのデータ打ち込まれてる！」

コピー体達は即座に剣を錬金して襲いかかる。

エルレイ「《エクスマキナ》《5の因果》」

そう言いながら剣を掲げると空間がチャックのように裂け、人一人なら押しつぶせそうなほどの隕石がエルレイの周りに8つ浮かび上がる。

エルレイ「《殺れ》」

エルレイがそう言つて剣を振り下ろすと同時に隕石が全て動き出し、数秒後にはコピー体に激突する。その様子にエルザは純粹に驚いていた。

エルザ「凄い……」

フィール「いやまだ！」

コピー体はダメージこそ負つたものの、致命傷を避けている。剣の姫エリエーテによる反応速度はゼロロスやエルザを超える。

フィール「《雷槍よ——撃ち碎け》！」

フィールが同時起動した8つの「ライトニング・ピアス」と同時にエルザが動き出す。無理矢理剣で防いだせいで生じた隙にエルザは抜刀【神風】をフィールの風で強化して、一気に2体の首を落とす。

その瞬間にコピー体も動き出すが、フィールは赤い魔銃ペネトレイターで6連早撃クイック・ドロウちで一体の眉間を撃ち抜いた。

フィール「三体そつちに行つたよ！」

エルレイ「今ので仕留め損なつた」

ミアル「詰めが甘かつたね」

そう言いながらエルレイは軽々とコピー体の攻撃を受け流し、的確に大剣を使い、仕留めていく。

エルレイ「ふっ……はっ……と」

一体は完全に潰すために首を狩り、二体目は両手両足を確実に切り落とす。

ミアル「《ごめんね》」

最後の一体はミアルの詠唱により、《イクステンション・レイ》のようなものが起動し、最後の一体も無残にも四散した。

フィール達も最後の一体を魔剣エスパードで斬り裂き、終わったがフィールはやはり疑問に思っている事を聞いた。

フィール「いや、アンタらどうなつてんのその魔術。貸し与えられる上限を超えてるでしょ」

エルザ「どう言う事？」

フィール「原理は精霊魔術に近いんだけど、精霊の力を体内に宿して使用する稀な存在に近いけど、貸し与えられてるのって明らかに天使や精霊、悪魔を超えてる。まるで……」

神霊に近いものを感じる。

おかしいのだ。そんな力を人間の体内に宿せば過剰な力で内側から崩壊する。その筈なのに、この2人はそんな力を平然と使っている。

フィール「契約にしてもその力は絶対におかしい。寿命を対価にすると言ったけど、まるで神靈級と直接契約しているように見えるし。魔術理論もさっぱり、ただ願っただけでそうなったって言う古代魔術エンシェントにも似てるけど……」

フィールが精々暴けたのはそれくらい。

どんな魔術もフィールの魔術特性パワースタリテイで逆算できる筈なのに、暴けたのはその程度なのはおかしいのだ。

ミアル「ふふ、それは流石に言えない」

エルレイ「ん、ナイシヨ」

そう言いながら二人は人差し指を自分の唇に押し付けた。

ミアル「まあ、教えてあげるとしたら……この世には神様がいて、その神様にこの肉体と命を捧げている……それくらいかな」

ミアルはそう言いながら苦笑いをした。

フィールはため息をつきながらも、地味に核心に迫っていた。

フィール「まあいい。ただそれ、早死にするでしょ」

フィールが確信めいた視線を向けると2人はただ沈黙する。どうやら当たりのようだ。

フィール「……私はそれを魔術とは認めない。命を枯らす為に魔術を使うなんて、魔術に対する冒涇だと言う事だけ、覚えておきなよ？」

フィールとエルザは先に進み始める。

そう言う魔術は気に入らない。自分を犠牲にする魔術は確かに存在する。だがその末路はどれも悲惨だからだ。だが、2人は……

エルレイ「早死……冒涇だつてさ」

ミアル「どうでもいい」

2人はそう吐き捨てた。

エルレイ「だよね、冒涇と言うなら、私達はそれを続けるのみ」

エルレイはミアルを見ながらそう呟いた。

ミアル「私達は、ただ無意味に生きて、無意味に搾取してる人間……外道下等生物とは違う、好きな人の為に、命を枯らす。魔術に冒涇するなんて……」

「ただの戯言」

エルレイ達は二人だけでそう話したあと、フィールとエルザの後を追った。

次の広間に飛び込むと、一瞬にして自分達の周りの空間だけが真っ白に変わった。侵食する白い部屋、瞬間、フィールとエルレイは反射的にその部屋から抜け出そうとするが、反応が遅れたミアルとエルザは飲まれてしまった。

フィール 「エルザ!!」

エルレイ 「ルミアアっ!!!」

エルレイが悲痛の声を荒げた。

白い部屋から抜け出した瞬間、エルレイとフィールは白い部屋に対して凍結魔術を放つが、白い部屋は壊れない。

フィール 「くそっ……魔剣エスパーダ」

フィールは強引に因果逆転の魔剣で部屋を切り裂いたが、そこから出てきたのは瞳が赤く染まり、操られている2人だった。

フィール 「エルザ! ……っ……!?!」

エルザが斬りかかってきた。

フィールは魔剣エスパーダでそれを受け止めるが、刃を滑らせて下段を狙われる。

フィールは瞬時に「フィジカル・ブースト」で跳躍し、後退する。

フィール「どうやら、エルザには私が敵に見えるようね」

エルレイ「……」

何故か、エルレイは何も言おうとしない、硬直している。

フィール「エルレイ！　ポーっとししないで！　ミアル来てるけど!？」

ミアルが氷の鎌を持ってエルレイに迫っている。

エルレイ「……」

ザシユ!!!

エルレイは容赦なくミアルの両足を切り落とした。

するとミアルは銃を取り出して、斬られた足に発砲、たちまちに時間が戻ったかのよう
うに足が元の姿に戻る。

エルレイ「これができるってことは本物だね……ルミアを洗脳……高く付くぞ、外道
下等生物」

エルレイそう吐き捨ててから、フィールに向かって叫ぶ。

エルレイ「おいっ!!! ルミアを助けるついででオマエの相方を助けるっ!!! 十秒時間
稼げ下等生物!!」

エルレイは今ままで聞いたことのないほど怖ろしい叫び声を上げた。だがその命令
にフィールが激怒する。

フィール「ふざけんな! 誰が下等生物だ誰が!!」

フィールは「女帝の世界」を発動し、黒魔改【グラビティ・プリズム】で重力の檻を
張るが、2人はそれでも動き続ける。

フィールはその隙に麻痺毒が塗られた秒針をミアルとエルザに投げつけるが、エルザ
の装備は元々、状態異常に対するレジストがかけられている為、動き続ける。一方ミア

ルは効いているのか効いてないのか分からないが、止まっていない。

フィール「おい脳筋!! 麻痺毒じゃダメなのか!? さつき効いた筈だろ!」

エルレイ「誰が脳筋だ誰がつ!!」

エルレイはまたフィールに怒鳴りつける。

エルレイ「さつきの銃見てなかったの?! あれは 時間を自由自在に操る銃!! 今回復するためにルミアの時間が巻き戻ってるから毒が回らないの! 考えろ下等生物つ!!」

フィール「んな滅茶苦茶な! 《荒ぶる風壁よ》!!」

フィールは黒魔改「ライアブル・テンペスト」で2人を吹き飛ばすが、壁に激突しよ
うがすぐに体勢を治して襲いかかる。向かい風だと言うのに、風除けの魔術を使われて
いる。

フィール「これならどう? 《進まぬ床よ》!」

即興で錬金術式を組み直し、床を錬成し直す。

地面が凍ったかのように踏ん張りが聞かずに2人は滑り転んだ。黒魔「ステイック・スリップ」で2人の床の半径5メートルの摩擦係数を操り転ばせる。時間的には10秒経った筈だ。

フィール「まだか！ 10秒は経った筈だろ!!」

エルレイ「……詠唱完了、フィーちゃん、さがって」

エルレイはいつもの口調に戻り、一枚のカードを掲げる。

エルレイ「《展開》フルフェイスっ!!」

エルレイがそう叫ぶと周りが真っ赤に染まる。するとエルレイの後ろにクリスタルのようなものがそびえ立ち。

その光に惑わされるかの如く、ミアルとエルザの洗脳は解かれ、前に倒れていく。

フィール「エルザ……！ 良かった、気を失ってるだけか」

フィールはエルザを抱き抱えると、安心したように剣をしまう。

ミアル「……ふふふつ、思ったより遅かったね。リイエル？」

エルレイ「やつぱり、その場のノリに合わせてただけだったんだ、そりやそうだよね」
そう言いながらエルレイはため息をついた。

フィール「やつぱりミアルには幻術がかかってなかった訳か。まあ時間が戻るなら操られる前に戻るしね。よしそこに直れ、致死毒の後に「イクステインクシオン・レイ」だ」

キラーン！ とフィールの右手に致死毒の秒針が手に握られていた。

ミアル「やめて。死なないって言ったって痛いものは痛い、ていうか本当に君、グリーンさんに似てるね？」

そう言いながらミアルは苦笑いをした。

フィール「まあそれはさておき」

フィールは握られた秒針をエルレイの顔スレスレに投げつける。味方を誤認させ、同士討ちさせる幻術を使える人間なんて一人しか知らない。まあ、躲されたけど。

フィール「そこにいるんだろ。《月》のイリア」

イリア「……よくぞ見破った。私の幻術を」

エルレイ「なんだ、いたんだ」

エルレイがせっかく一件落着いたのと言わんばかりのため息をついた。

フィール「アレだけの幻術使いは貴女しかいないしね。どうする？ 投降するなら苦

しまずに済むけど？」

エルレイ「……フィーちゃん、こいつが黒幕、かな」

エルレイは眠たそうな目で呟く、エルレイの世界ではエルレイはある病気にかかり、イリアと実際に対峙したことはない。

フィール「《月》のイリア、世界を欺く幻術使い。それに付随する記憶すら捏造する幻術使いの頂点の魔術師」

イリア「いかに、よくこの短時間で幻術を解いたものだ。隣にいるイルシアのコピー体の力か？」

フィール「アンタが知る事じゃない。アンタらの企みはこれで終わりだ」

イリア「ふっ、忘れたか？ 私の幻術は——ッ!？」

イリアが【ムーン・クレイドル月読ノ揺り籠】を発動しようとした瞬間、イリア達の視界は真っ暗になった。

フィール「よく合わせてくれたね。エルレイ」

エルレイ「別に合わせてない、フィーちゃんの頑張り」

エルレイはそう言いながらフィールに向かって微笑んだ、先程の砕けた口調はまるで

なかったかのように、とても安心する笑顔だ。

イリア「貴様……!! 何をした!!」

フィール「黒魔【ダーク・カーテン】光を操作して一定範囲を暗闇がに交える結界魔術。あの乱闘中に、触媒を広げていた事に気づかなかったようね?」

あの乱闘中に、自分の血を染み込ませた秒針を【ライアブル・テンペスト】と一緒に辺りに仕掛けていたのだ。

フィール「あらゆる精神防御を貫通する」だっけ? ただタネは割れてる。対象に對して自分と言う記憶を植え付けられる反面、遠距離にいる人間や目視できない人間は操れない。遠くにいた私達を操れなかったのがその証拠さ。なら視界さえ塞げばそれは使えなくなる」

イリア「こんなもの! 貴様らも見えない以上、結界を解けば!」

フィール「私が誰で、そのコンビにいつもどんな動きをさせてるのか忘れたのか?」

暗闇の結界なんて、風使いたるフィールの動きを止めるほど甘くない。この程度、風

のパラメータを全て支配下に置く「ストーム・グラスパー」を使うフィールに通用する筈もない。

フィール「今回はエルザの代わりだけど《駆ける風狼》!!」

速攻の詠唱で他人をサポートし、後ろから魔術で援護するのが、エレメント二人一組・ワンユニット一戦術単位の基本だ。配役こそ変わったが、黒魔「スウィフト・ストリーム」で動き出したのは……

エルレイ「んっ」

エルレイだった、エルレイは恐ろしいほどの速さで、イリアの目の前に現れ、イリアの腕を斬り飛ばす。

エルレイ「見えづらい、でも、匂いで簡単にわかる」

そう言いながらエルレイは不敵に笑った。

イリア「ぐあああああああああああああああつ!?!?」

腕を斬り落とされた事に痛みの叫びを上げるイリア。

フィールは冷静に暗闇の中でエルレイに指示する。

フィール「エルレイ、眼を布で覆え。眼が使えなければ能力は使えない」

世界単位で欺く幻術だろうが、欺く為に自分と世界の位置を正確に把握していなければ使えない。見えなくなれば当然の事だ。目に見えるものが全てじゃないが、目に見えないものも全てじゃない。全てを把握するなら尚の事、視覚というものが必要不可欠なようだ。

エルレイ「10—4了解」

エルレイはまるで暗闇の中ハッキリ見えているようにポケットから取り出した布で目を縛り上げた。

エルレイ「これでいい？ 目潰し、しておこっか？」
フィール「潰すのは無しだ。コイツを餌に大物を釣る。能力がまだ使えるとわかったら上層部の裏の連中はどんな動きをするか。楽しみだ」

このまま上層部に引き渡せば、能力がまだ使えるイリアというカードを取り戻す為に誰かが必ず動く。イリアの腕を止血して、「スリープ・サウンド」で眠らせた後、縄を何重にもして縛った。

フィール「これでよし」

縛り方が亀甲縛りと言う超独特とだけ言っておこう。

エルレイ「……」

ドス!!!

えるれいは、ようしやなく、ふいーるにボデイブローを、くりだした！

フィール「グフツ!? ……何するのさエルレイ!？」

エルレイ「どんな教育を受けたら、この縛り方にする結論になるんだ、可笑しい」
エルレイはそう言いながら少しキレ気味で今にも砕けた口調が出そうだった。

フィール「いやこれ『お父さんの極意』って書かれてた指南書に書かれてたんですけど……」

エルレイ「それよこせ下等生物、今すぐ破いてやる」

ミアル「あ、あははは……」

フィール「嫌ですよ。曲がりなりに形見の遺品ですし」

エルレイ「遺品は遺品、参考書じゃな……っ」

そう言っていたエルレイが突然口元を抑えた。

吐血している。マナ欠乏症に陥ったようだ。

エルレイ「ごほっ……ごほっ……」

ミアル「大丈夫？ リィエル？」

ミアルはそういうと体を摩る。

どうやらさつき魔術？はかなり魔力を使ったようだ。

エルレイ「ん……ちよつと能力広範囲にしすぎた」

そう言いながらエルレイは苦笑いをした。

フィール「何をしたの？ 明らかにマナ欠乏症だよね。そんな大規模な魔術だったの？」

ミアル「……まあ、この子なら教えていいか」

ミアルは少し考えた後、説明し始めた。

ミアル「さつきこの子が使った『フルフェイス』あれは洗脳を解く力じゃなくて、逆に洗脳する力なの」

「……？」とフィールは首を傾げる。

ミアル「リィエルは【月読ノ揺り籠】^{ムーン・クレイドル}に對抗しようと【一月読ノ揺り籠】^{ムーン・クレイドル}自体、世界ひっくりかえすまで概念そのものを洗脳したんだよ、そうだよね」
エルレイ「……無駄になったけどね」

そう言いながらエルレイは苦笑いをした。

フィール「んな世界がカウンターを寄越しかねない魔術……。まあいいや。これ、使いなさいな」

フィールは魔晶石を渡した。

魔力を保存する技術は卓越したものでなければ造れない為、中々高価なものだ。

フィール「自作だし……使い物にならないと困るからね」

多少のツンデレを含んだ物言いをした後、フィールは魔晶石を投げ渡し、周囲を風で調べていく。

エルレイ「ありがとう、このお礼は、いつか必ず」

そう言いながらエルレイは魔晶石を両手に持って吸収し始めた。

番外編 彷徨う過去の《愚者》との出会い 後編

エルレイ「ねえ、フィーちゃん」

フィール「ん、どうしたの？」

突然エルレイが話しかけてくる。

フィールは少しだけ緊張をほぐしながら応答する。

エルレイ「フィーちゃんは どうして、特務分室に？」

いつも道理、眠たそうだがその目には明らかに鋭い光を感じた。

エルレイ「どうしても…そんな子には見えなくて…」

確かにエルレイからしたらフィールの性格上、特務分室に所属する理由がわからな

い。どちらかと言えば、フィールは人殺しに向いていない。躊躇こそしていないもの。自分から関わりたいとはエルレイから見たら思ってはいないのだろう。

フィール「……別に、私には合ってただけ」

エルザを背負いながら歩き出す。

特務分室が合っているとはどう言う意味なのか首を傾げるエルレイ。

フィール「【愚者の世界】に【女帝の世界】、二つを駆使すれば魔術師にワンサイドゲーム。私以上に魔術師殺しに適した人間は居ないから、私はその場所に居るだけ」

メイガス・キラ

魔術師殺しであるフィールの強みは魔術の逆算から付与された魔術を解除し、魔術を使おうとすれば魔術を封じ、封じた空間で自分だけが魔術を起動させる。

フィール以上に魔術師に対する特攻が強い人間はこの世界の何処にも存在しないだろう。

ミアル「命を枯らす為に魔術を使うなんて、魔術に対する冒涇だ、そう言っていたよね」

ミアルは少しため息をつく。

確かにあの時、フィールルが口にした言葉には怒りと明確な嫌悪感があった。

ミアル「それをわかってて魔術師殺しをするの？」

フィールル「……うん。魔術は凄いものだよ。使い手次第じゃ善にも悪にもなれる。けど、それでも命を枯らしてまで使う魔術は嫌い。そうやって目の前で、自分が犠牲になつてでも敵を倒そうとした馬鹿な天使を知ってるから」

フィールルが小さかった頃、そうやって自分を犠牲にして全て救おうとした人間がいた。『正義の魔法使い』のように見えた彼女は偽善を張り続けた。みんなと一緒に居たいと言う想いを封じ込めて命を捨てる覚悟で挑んだ彼女は、目の前で全てを奪われたような顔をしていた。

全て奪われた彼女の敵を倒したのは子供だった自分だが、彼女は私を憎んだ。いや、憎んではいけないのかもしれないが、どうして早く現れなかったのか、と言う眼でフィールルを見たからだ。

当時6歳、背丈も小さく、子供である私が何を言おうが聞いてくれない状況で、唯一生き残った私が油断した背中を貫く刃となった。

命を枯らすと言う事は誰かを置いていくしかない選択しか取れないのだ。残された者は失った命にどう思うのか、痛いくらい理解している。

もしも、お母さんが生きているなら……

フィール「理由なんて……ただの自己満足だよ」

奪った連中を許す事なんて出来ない。

力ある者である私の義務だから、私は2人の娘だから。

『正義の魔法使い』の偽善者でいい。

それが、私が、2人が共に目指し、叶わぬ夢を追う2人が残した希望なのだから。

エルレイ「……」

エルレイはその言葉を聞いて、普通なら、自己満足でそんなことをするのはおかしいだとか、理由がなくなってなさ過ぎるとか、そう言うだろう。

しかし……

ミアル「リイエル、どう思った？」

百合に見えるがそうではない。

エルザ「~~~~~!~~~~~
!?!?!」

エルザは顔を赤くしながら顔を青くしていた。

フィールはエルザの空気を吸い込んで呼吸を封じていたのだ。苦しくなったエルザはたちまち目が覚めて、フィールの胸を押して引き剥がす。

エルザ「ぶはあっ?!し、死ぬかと思っ…ゲホッ!ゲホッ!!」

フィール「よし」

エルザ「よし、じゃない!!乙女の純潔弄ばないの!?!」

フィール「敵の領域で気を失って早く目覚めないエルザが悪い」

うぐつ、と蹲るエルザ。

実際は死ぬ可能性が高いこの場所で気を失って早く目覚めないのは確かに危険だ。だがキスで殺されかけた人間の気持ちも考えてほしいものだ。

だが2人は……

「——っ?!?!」

その光景を見てミアルとエルレイは何故か真っ赤になりながら声になっていない叫び声を上げた。

ミアル「ちよちよちよちよ!!何やつてるのかなフィールちゃん?!?!と、突然ききき、き、キスなんて?!いくら女の子同士でも、べ、別に二人の仲を否定したいってわけではないんだよ?でもね?えつとえつと…:TPO弁えてといふかなんというか、いやここには女の子しかいないし少し薄暗くてシチュエーション的には——」

エルレイ「おかしいおかしいおかしいおかしいおかしい、私とシユウもルミアとロクサスもディーブまでいくのは相当時間を費やしたのに、というかELSAが、フィーちゃんとき、き、き、キ…:ス?お、落ちて着け落ちて着け落ちて着け、ここで冷静にならなくてどうする?先ずはキスの定義を考えなければいけない、あれはキスとしては分類されても好意のキスではない…:ハズ、そもそも——」

同時にブツブツと言いは始めている。二人共顔が恐ろしいほど真っ赤だ。どうやらこ

の二人はこの手の話題はとことん苦手のような。先程までの、落ち着いている大人っぽい二人は何処へやら……

フィール「この方法の『ぱーふえくと秘伝書』に書いてあった」

フィールは全く動揺する事なく告げる。

困みに2人には恐らくロクデナシの顔が浮かんだであろう。

エルレイ「グレン……」

ミアル「レーダス……」

二人は思い出した、この二人の世界でもある男が『ぱーふえくと秘伝書』などというふざけた物を持っていて、その男の妻に大目玉を食らっていた話を……。

『白猫っ!!死に際のやつにはこれを使い!!名付けて、『デーパーキッス♥リヴァイヴァー』だ!』

『このロクでなし!!!!』

「何処がパーフェクトなの何処がっ!!!」

二人の声は割と響き渡った……だがフィールは2人に眩いた。

フィール「いや執筆者はセリカ伯母さんだけど」

そつち!?と2人はフィールを振り向く。

『ぱーふえくと秘伝書』に書かれていたのはかなり大人向け。よくよく考えればグレンを女学院に潜入させる為にかなり濃厚なディープキスしたのはセリカだった。

この世界では既に行方不明だが、やつちやつたぜ☆と言わんばかりの顔をして親指を立ててサムズアップしていた。

ミアル「あれ…執筆者、アルフォネア教授だったんだ…」

エルレイ「今思うと、なんで私達、あの環境下でグレなかつたんだらう…」

二人はハイライトが亡くなった目で、何もない所（セリカの幻影が見える所）でミア

ルは苦笑いをして、エルレイはサムズダウンをした。

ファイル「《ぶっ飛べ》」

ファイルは一節で黒魔〔ブラスト・ブロウ〕を撃ち、扉を強引にこじ開ける。そこに居たのは、余裕の笑みを浮かべて、笑うライネルがそこに居た。

エルレイ「こんにちは兄さん、私のこと覚えてる…?」

くつくつと笑いながら研究所のパネルに寄り掛かり、侵入者を見下しているライネル。エルレイを嫌味つたらしく見下しながら吐き捨てた。

ライネル「覚えてるに決まってるじゃないか。リエル」

何せ俺が量産させてるんだし。とくつくつと軽い下卑た笑みを浮かべてエルレイを

見るライネル。

フィール「ライネルⅡレイヤー。第二団《地位》を持つ量産兵リィエルの製造者。お前を拘束しに来た」

フィールは臆する事なく銃を構え、ライネルに告げる。

ライネルは怖い怖いとまだ余裕の笑みを浮かべている。その笑みにフィールもエルレイ達も警戒していた。

エルレイ「……一応シオン兄さんの気持ちは汲んでおく……私の妹たちの量産をやめて」

エルレイは警戒したままライネルに向かい、問う、やめてほしいと。だがそんな事を言った所で奴は止まらな——

ライネル「いいよ？別に」

だが返ってきた返答は予想外のものだった。

ライネル「リエルの量産なんて心苦しいしね。9割段階とは言え、もう完成したし」
フィール「完成？」

ライネス「ほら、出ておいで俺の最高傑作」

パチン！と指を鳴らすとライネルの後ろに嚴重に管理されていたような機械の中から高威力の魔術によって粉碎し、現れた綺麗な金髪の女性。

フィール「……………えっ？」

フィールは震えた。

震えて、動揺する。その姿を見た。子供の頃に何度も見た。いつも自分の我儘で甘えて、でも頭を優しく撫でる優しい過去の記憶。

居るはずがない。だってあの人は何も告げずに自分の目の前から消えていった。だが、あの姿は紛れもなかった。

長い綺麗な金髪。

女神と思わせるような身体付き。

そして炎を連想させるような紅い瞳。

その姿は……間違いない。

見間違える筈のない本物と同じ姿をしていた。

フィールは驚愕しながらも弱々しく呟いた。

フィール「セリ……カ……伯母さん………?」

そこに居たのは紛れもない。

伯母であるセリカの姿だった。だが、あの人はあの日から帰ってこない。いや、厳密には死亡扱いされている。まるで死者が蘇ったように、自分の前にセリカが居るのに現実を受け止め切れないで口元を抑える。

ミアル「フィールちゃん、大丈夫……?」

ミアルはフィールの背中を擦った。

青い顔をしているフィールはセリカを見つめる。だが、やはり似ているとかそんな次元じゃないのは知っていた。

エルレイ「……はあ……」

エルレイはため息をついた。

エルレイ「まさかセリカの力を、完全にインプットしてある……でも言いたい？」

エルレイは決めつけた、セリカを完全にコピーできるわけではないと。当然ながら現代の魔術師を瞬殺出来るセリカだが、それ故に高次元な存在だ。永遠者にして第七階梯^{セブテンデ}の魔術師、そんな人間を超越した存在のコピーなど不可能だ。

ライネル「まあ完全には不可能だね。永遠者^{イモータル}までは再現出来なかつたとは言え……やれ」

虚な瞳のセリカのコピー体は右手を突き出すと、微かに聞こえた詠唱で黒魔【プラス
マ・カノン】黒魔【プロミネンス・ピラー】を撃ち出した。

「「「つつ?!」」」

どちらもB級軍用魔術、打ち消しは出来ない為、フィールは【女帝の世界】で重ね掛
けた強化でエルザを抱えて躲し、エルレイは【フィジカル・ブースト】をいち早くか
けてミアルを抱えて回避していた。

ライネル「魔術技能に関しては生前と同じ力を使えるように引き出した」

確かに今のは第七階梯セブテンデ
パウンナリテイのセリカとしての魔術技能だ。『万理の破壊、構築』と言う
魔術特性を持つセリカの実力は詠唱する理論を破壊して自分の規則ルールに再構築すること。

フィール「ツ……………!」

フィールはそれを見て悲痛な顔をしていた。
同じ顔なのだ。優しかったあの人と同じ顔なのに、何故戦わなければいけないのかと
思うくらいに悲しかった。

エルレイ「っ！」

ミアル「リイエル!!時間稼ぎお願い！」

エルレイはミアルの言葉に強く頷く。

エルレイ「エルザ!!コイツはやばい!フィーちゃんを連れて逃げて！」

エルレイはそう叫びながら大剣を片手に持ち、コピーのセリカに突進する。

エルレイ「いいいいやああああ
!!!!」

斬りかかるエルレイにセリカのコピーは右手に剣を錬成し、エルレイの一撃を受け止める。そして、弾いたかと思うとまるで剣の姫のような鮮やかな剣舞でエルレイを後退

させる。

エルザ「【ロード・エクスペリエンス】!?でもあの剣はエリエーテの……!?!」
フィール「違う。錬成した剣でそれはあり得ない。だから打ち込まれたんだよ。量産兵と同じ剣の神エリエーテのデータを……」

そう。今のセリカは『Project: Revive life』で生み出された感情無き人形。リエルの量産兵と同じ理論で原初の魂に干渉出来るなら、エリエーテのデータを入力するくらい不可能ではない。

エルレイ「っ…ひめっ!!」

エルレイがそう叫ぶとエルレイの目が少し鋭くなる。まるで別人になったかのように。

エルレイ? 「フィーちゃん! ……だっけ? このセリカもどきは僕とミアルでやる!! 二人はライネルを!」

そういうとエルレイの剣が何故か黄昏の光を発しているように見えた。

エルレイ? 「大丈夫! 僕は一人のほうが強い! そしてミアルもね!」

セリカのコピー体の剣技がエルレイから変わった。姫の剣技で応戦する。互いにの剣技は僅かながらエルレイの方が押しているが、致命傷に至らせるような傷を許していない。セリカのコピー体。

攻めきれない。オリジナルはこっちな筈なのに。

エルレイ? 「つ…: かつたい…: はは…: こんな苦戦久々」

そう言いながらエルレイはミアルの元へ軽やかに下がる。

エルレイ? 「ルミア!!」

ミアル 「わかってます!! 《灼爛殲鬼》《砲》——!!!」

ミアルそう叫ぶとミアルの元へ大きなさせる炎をまとった戦斧の形をした物が空からミアルの手に落ちてきて、砲台の形に変形する。

ミアル「…いけっ!!!」

ミアルがそう叫ぶと砲台からコピーセリカへ向け、炎の巨大な弾が発射される、見るだけで黒魔改「イクステンション・レイ」よりも威力が高いことが分かる。

だが……

フィール「駄目だ！2人共下がれっ!!!」

セリカの左手には懐中時計に似たものが握られていた。その瞬間、誰もが動きを封じられた。いや、本人は封じられた事すら気付いていないだろう。

離れていたフィール達は兎も角、接近していた2人も、放った炎も、剣技も全てが停止する世界。

ミアル「読んでました」

が、何故か動いている、ミアルは片手に古式の拳銃をもって、後ろには大きな懐中時計のような金色の物体がある。

ミアル「時間停止……私達のおはこですから」

そう言いながらミアルはコピーセリカに向けて、狂氣的にほほ笑んだ。

(…カッコつけてるところ悪いけど、ここからが問題よう！)

ミアル「……わかってる」

そう、ミアルにとってはここからが問題。どんな能力を使つたとしてもミアル自身にセリカを倒すほどの実力はない。

ミアル「ナムルス。詠唱しておいて」

ミアルは姿が見えない者にそう言った後…足を踏み出した。

ミアル「はあああああああああああああああ
!!!!!!」

刹那——。

大きな戦斧となった灼爛^{カマエ}殲鬼^{エル}を片手で軽々と振り回し突進する。その威力はまさに災害の如く、生半可の人間では受け流すことさえ不可能なパワーを秘めている……しかし。

ミアル「……っ!!」

多少の傷は付くものの、致命傷までは至らず、誰も動かない。二人だけの空間で膠着状態が続いていた。

(……よし、ルミア!! 変わりなさい!!!)

ミアル「10—4了解っ!!!」

そう言つてミアルは目をつむると、髪の毛の金髪に銀色のグラデーションがかかったようになつていて、『黄金の鍵』、そしてもう一方に大きな大剣を持っている。これこそ

が、ミアルの中にいるもう一人の人格である。

ミアル? 「さあ来なさい、空セリカの偽物。遊んであげるわ」

そう言つてミアルらしき者は黄金の鍵を握りしめながら大きな大剣を振り回す。

ミアル? 「はあああああああああああああ!!!」

瞬間——。

コピーセリカの目の前からいなくなつたかと思うと、突然目の前に現れ、斬られかける所を如何にかセリカは避けた。

ミアル? 「…ちっ」

ミアルらしき者は舌打ちをした。ここまで「ロード・エクスペリエンス」を再現しているとは思わなかつた。しかも肝心の黄金の鍵がうまく機能しない。これでは手の出しようがない。

ミアル? 「…仕方ないわね、一旦下がるしかないわね…」

「……………」

セリカの固有魔術【私の世界】

世界の事象の全てを停止させ、時間すら停止させる究極の魔術領域。

そして突如として時間が動き出す、いつの間にかある程度傷を負った、コピーセリカと、フィールとエルザの所までは後退していたミアルがいた。

しかし……

ミアル? 「…ちつ、思ったより完成度高いじゃないの」

ミアルと思われるものは髪の毛の金髪に銀色のグラデーションがかかったようになっただけで、片手には古式の拳銃ではなく、何故か『黄金色の鍵』を持っていた。

ミアル? 「空間切断できる大剣で斬っても駄目、術式は時が止まっているから動かないし、そもそも私の『黄金の鍵』が上手く作動しない、ったく」

コピーセリカが「私の世界」を使った。瞬間、エルレイは、動いていない時の中、セリカに自分の用いるすべての剣技で応戦した。『天つ風』『旋風』『暴風』『東風』『霜風』ありとあらゆる親友から教わった抜刀術を使い、そして自分自身の「ロード・エクスペリエンス」をフルに活用し、コピーセリカに応戦する。

ミアル「もう!! 『0の因果』使うんならさつきのに間に合わせてよ!」
エルレイ「ごめつ……ん!!」

そうやってエルレイはコピーセリカの片腕を軽々と切り落とした。コピーセリカは警戒し、すぐさま数歩下がる。

ミアル「リイエル……やっちゃおう?」
エルレイ「応答……やっちゃいます」
2人はまるで友達と笑いあっているかのような笑顔で互いに笑いあった。二人とも自分の得物を持ちながら…。

『0の因果』エルレイが時間操作に対抗できる唯一の手段だ。そしてミアルも時の停

止に介入した。2人そろった…

これでこの2人に負けはない、負けることなどあり得ない

……ハズだった。

「……………」

しかし……

次に眼を開けた瞬間……

ファイルが目を開けるとそこには血だらけで倒れているミアル。その隣には『黄金の鍵』が無残に転がっていた。そしてエルレイも傷だらけで部屋の端にクレーターの真ん中で横たわっている。二人共場所は移動していて、まるで時間の動いていない時に戦っていたかのようにだった。

ファイル「っ！エルレイ、ミアル…!？」

セリカの左腕は斬られていたようだが、2人は致命傷こそ避けているがそれでも重傷だ。

ライネル「はははっ！驚いただろう！僕が生み出した怪物の強さを!!魔力はこの場所なら他の人形共からコイツに送れる！つまり今君達の目の前にいるのは全盛期を超えた怪物、セリカⅡアルフォニアなのさ！」

ライネルがこの圧倒的な力に啞う。

今のセリカは全盛期の魔力容量を持ち、外部から魔力まで補給出来るということだ。けど、そんな事はフィールにとってどうでも良かった。

フィール「……………エルザ、2人をお願い」

エルザ「フィール?!」

倒れている2人の前に立ち、悲しそうな表情でセリカのコピー体を見る。傷付きながらも無表情に此方を見据えているセリカのコピー体にフィールは辛そうだった。

フィール「あなたはもう……………セリカ伯母さんじゃないんだね」

優しい記憶。

唯一の支えとも呼べる優しい記憶の中にいた人間はもう居ないのだ。分かっていた。どれだけ待とうが、どれだけ泣こうがあの人には帰ってこない事は分かっていた。

フィール「だからごめんさい、セリカ伯母さん」

右手に魔剣を持ち、2人は互いを見据えている。

無表情のセリカのコピー体だが、データにはない感情が、400年の記憶の一部に存在した僅かな記憶が警鐘を上げていた。

コイツは危険だと、そう告げていた。

フィール「私は貴女を——殺す」

明確な殺意と、その覚悟だけで乗り越えた男を知っている。ノイズのように頭の中に流れるその記憶は今のセリカには理解出来ない。

エルレイ「……あ……が……フィーちゃん……にげ……て」

エルレイはか細い声で、痛みで全身が震えるのを必死に我慢しながら立ち上がる。

エルレイ「そいつは……危険すぎる……っ……全部……先生がやるっ……、全部やるからっ……」

エルレイの悲痛そうな叫びがフィールの耳元に届く、エルレイが心から叫んでいるのだ。戦わないでと、傷つかせたくない……。

ミアル「そう……だよ、全部。汚い大人の……っ私達にっ……任せて」

そう言った2人にフィールは振り向かずに向う。

フィール「そうやって他人に全部任せて汚させたいと思ってるの？」

他人に全て任せて、自分は綺麗なままでいたいと思われるなら、フィールはそれを否定する。元よりこの身は闇へと堕ちた身、汚れなど今更の話だ。

ファイル「悪いけど、こっから先は私がやる。2人は傷を治して、私が死にかけたら、援護でもして」

いつも憧れだった存在に私は今日、初めて挑む。

世界に名を轟かせた『灰塵の魔女』『世界』『第七階梯』セブテンデと呼ばれたセリカⅡアルフォネア。

いつだって、私は忘れなかつただろう。

「いくよ……セリカ伯母さん」

だからこそ、私の手で終わらせる。

それがせめてもの手向けだから。家族として、いつも優しかったあの人に届くように。

「——起動【女帝の世界】」

フィールはセリカに向かって地を駆け出した。

ミアル「っ……《我……目覚めるは……》——！」

ミアルは体の震えを抑えながら詠唱を開始した。

エルレイ「っ……汚れるのは……私だけで十分だ、下等生物……！エルザ……！イルシアのコピーを……一体ここまで持ってこれる……？」

エルザはそれを拒否した。

理由は分からないが、魔術とは別の外法を使おうとしているのだろう。文字通り命を削る魔術で。

エルザ「……2人とも回復に専念して」

エルザも魔術を使い、ミアルを回復させている。

エルザの魔術センスは高くはないが、ある程度の軍用魔術は使用可能だ。ミアルに触れて身体を癒していく。

エルザ「今のフィールは……あの人でも勝てないから」

エルザはフィールの方を見る。

覚悟を決めたフィールは誰よりも強い。それは長年相棒をやっていたエルザが確信を持っていたからだ。

セリカは片腕ながらもエリエーテの剣技でフィールに応戦していく。魔剣エスパーダはまだ使えない。防げると確信した瞬間にしか勝機はない。

互いに剣を交じり合い、後方へ下がる。

フィール「《極滅の——》」

フィールは詠唱を省略した「プラズマ・カノン」を撃とうとした瞬間、セリカは極光の障壁である「インパクト・ブロック」を構えて迎え撃つ。

障壁は崩れずに、防ぎ切られセリカは詠唱を始める。あの詠唱はセリカの十八番、「イクステインクション・レイ」だ。フィールはその詠唱を聞いた瞬間、セリカに更に近づく。

フィール「遅い!!」

左手に握られたタロットカード。

それは愚者のアルカナ。セリカの唯一の弟子が生み出した魔術封殺の魔術。「愚者の世界」だ。

その瞬間、セリカに対して強化した身体能力に魔剣を構えて振り抜く。防ごうとしたセリカは剣を斬られ、咄嗟に躲したとは言え、脇腹を切り裂かれた。

—————

エルレイ? 「…すごい…」

ミアル? 「あの歳であるの実力…世も末ね」

二人は素直にフィールの戦闘に驚いた、二人共、長年人間と殺し合いをしてきたが、これまでの人間がいたであろうか…。

エルザは少し驚く、また別人のようになっていいるのだから。驚かないほうがおかしい。

エルレイ? 「僕たちのことは気にしないで、大丈夫、リエルとルミアはちゃんと眠って、体力回復してるから」

フィール「浅い…!」

脇腹を斬り裂いたが、欲を出せば今ので決めたかった。

フィールが発動している【愚者の世界】を把握し切れていない今なら、勝機はある。

だが、そんな考えはすぐに崩された。

フィール 「つつ!？」

セリカに再び斬りかかろうとした瞬間、右手に「プロミネンス・ピラー」の魔力を溜めてフィールに放ってきた。身体強化の重ねがけで逃れる事は出来たとは言え、「愚者の世界」があっさり破られた。

フィール 「もう逆算から再構築したのか…!？」

セリカは『変化の停滞』であるこの空間の逆算をし、魔術式を破壊した後に再構築する事で「愚者の世界」を破ったのだ。それでも早過ぎる。

フィール 「《三度の嚴冬よ》!!」

フィールは黒魔【アイシクル・コフィン】でセリカの足元を凍らせるが、それも予想済み。「トライ・レジスト」と「フォース・シールド」を指を鳴らただけで発動させる。

フィール「……………はは」

相変わらず滅茶苦茶だ。

どんな天才も即座に終わらせる事が出来る怪物。知っていたが、改めて再認識する。この人は強い。

そして、再びセリカは時計を握ろうとする。

フィールはそこまでは読めていたが、ここからが本当の勝負。

フィール「(ここ)からが大博打！覚悟を決める!!」

フィールは懐から取り出した球体を地面に投げつけると、球体が爆発し煙が広がる。視界は遮られ、見えなくなるが、セリカは「私の世界」を発動した。

キーン！と止まった時の中、煙の中を突き進んでセリカは歩く。

時間が止まれば勝ち目はない。そこで止まっていたフィールの魔剣を奪うと、セリカはフィールの首を狙い、剣を振り下ろす。

しかし……

「つつ!?!」

セリカのコピー体は後退した。

フィールが時間を停止した空間で僅かながら唇が動いていたからだ。止め切れていない? そんな馬鹿な。この魔術は完璧……と思考していたセリカのコピー体は突如、血を吐き出す。

「つつ!?!」——「!?!」

何が起きたのか理解できないだろう。

5秒が経ち、フィールの時間は動き出す。フィールは口元を抑えるが、フィールも膝をついて崩れ落ちる。

エルレイ? 「い、今のは……つつ?! リィエル! まだ休め!」

すると、エルレイの口調と目つきがすべて戻る。

エルレイ「ひめ！うるさい！！」

エルザ「エルレイ！まだ休んでなきや駄目！」

エルレイ「黙れっ！！私に指示するな下等生物！！」

そう怒鳴り声を上げながらフィールの元に駆け寄る。

エルレイ「フィーちゃん！！」

フィール「つつ！近づくな！！」

フィールが近づいてくるエルレイに叫ぶ。

エルレイは直感的に何かに気付いて足を止める。セリカのコピー体が倒れたのを見て、ライネルが叫び出す。

ライネル「な、何をした……何をしたんだお前は!？」

突如、時が止まりセリカのコピー体がフィールを始末したと思ったならセリカのコピー体の方が倒れていたのだ。だがフィールも無事ではない。身体の至る所が紫色になって身体を蝕んでいた。

フィール「……煙の中に……毒を仕込んでおいた」

時が止まる寸前に投げたあの煙玉。

アレは視界を封じる為に使った訳ではない。

フィール「セリカ伯母さんの……戦闘スタイルは超パワー型……だからこそスピードで翻弄する……相手には必ず使うと思ったよ……」

フィールの時は止まり、セリカは動くのであれば、セリカはフィールが毒に蝕まれる何倍も先に蝕まれる。時が止まった世界が仇となって、セリカを苦しめる時間を長くしてしまっただ。

フィール「この毒は即効性、私は多少抗体はあるけど、それでコレ……そっちはどう

かな？毒は一呼吸で死に至る、何回呼吸したのか知らないけど、私が倒れる前に必ずそつちが倒れる」

抗体のあるフィールでさえ、コレなのだ。

血を吐いて、今にも倒れそうなくらい苦しい。なら抗体がない人間はどうだ？セリカのコピー体は口を開いて呼吸が出来ずにいる。

フィール「乱暴な賭けだったけど……私達の勝ちだ！」

ライネル「ば、馬鹿な！毒だと!?そんな程度で倒れるな！動け！動いてコイツらを殺せ!!!」

ライネルが指示を飛ばすと、セリカのコピー体は電流が走ったかのように無理矢理立ち上がる。立ち上がって魔術を使おうとしていた。

フィール「嘘でしょ……まだ……」

解毒薬は既に飲んだが、解毒には時間がかかる。

「――目覚めろ！」

身体が麻痺しているフィールは無理矢理風を使って剣を握り、魔術を撃つ前に先に斬りかかろうとする。毒に蝕まれながらもセリカは魔術を発動しようとした瞬間。

セリカのコピー体の右手が投げられた剣に斬り落とされる。

フィール「あああああああああつ!!!」

フィールの華奢な手に握られていた魔剣がセリカを捕らえた。斬りかかる寸前、腕を失ったセリカのコピー体は焦りもせず、だが動きもしなかった。諦めて、軽く微笑んだ。

フィール「つつ！ああああつ!!」

フィールの剣がセリカの胸を貫いた。

心臓部に一刺し、セリカのコピー体は血を吐き出してフィールを見た。セリカのコ

ピー体は少し詠唱をすると、落ちた右腕が繋がっていた。それを見たフィールは力一杯、魔剣を突き刺す。魔術を使われたら殺される。

だが、フィールに魔術を放つと思われた右手はフィールを優しく撫でていた。

フィール「……………えっ？」

フィールは必死の形相からセリカを見た。

血を吐きながら笑っていた。笑いながらフィールの頭を軽く撫でていた。

「……………おお……き……くな……つた……な……フィール……ル」

最後に見たその微笑みと辛うじて聞こえたセリカの声を聞いた瞬間、セリカは軽く微笑んだまま倒れた。その後、無意識に流れていた涙と共に、毒の激痛に耐え切れず、フィールも倒れていた。

エルレイ「はあ……はあ……結果……オーライ」

あの時、セリカが魔術を使う前に剣を投げていたのはエルレイだった、エルレイは即座にもう一度剣を生成する。

ライネル「ば、馬鹿な?!もうお前にはそんな力を——」

すると、エルレイはその場からいなくなっていた、ライネルは必死に見渡すが、どこにもいない、いない、いない、いな……。

「後ろだ、下等外道生物」

そのままエルレイはそのまま片足を切り落とした。

ライネル「——つがあああああああああ!!!」

ライネルは斬られた片方の足を抑えながら苦しんでいる。

エルレイ「エルミアナ様……最高の“慈悲”のご許可を」

ミアル「駄目です、出来るだけ痛ぶりなさい、それをフィールちゃんにセリカさんをぶつけた慈悲とします」

エルレイ「かしまりました」

エルザ「でも殺しちや駄目だからね！」

そう言つてエルレイは残っている片方の足を、足首、膝、股部分、関節に的確に入れて。できるだけ痛みを与えた。

ライネル「っ!?!ああああああ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あああつ——!!!!」

聞こえたのはただの男の絶望の叫び声だった。

エルレイがライネル（だったもの）を処理した後、倒れたフィールに膝枕をしていた。エルザが既に解毒薬を服用させていたので、単純な精神的疲労もあつたのだろう。

フィール「……っ」

エルレイ「！よかつた…、目が覚めた…」

フィールは目が覚めるとエルレイに優しく抱きしめられていた、周りを見渡すと。エルザもミアルも無事のようにだ。

エルレイ「……ほんとにすごいよ、よく頑張つたね」

そう言いながらエルレイはフィールの頭を撫でた。

フィール「セリカ伯母さん……は？」

エルレイ「……っ」

エルレイは少し悲しそうな顔をした。

震える微かな声でエルレイは目を逸らした。

ミアル「あれは、アルフォネア教授じゃないよ、それに似た何か」

フィール「……分かってる。別人だつて事くらい。けど、あの時だけは、間違いなくセリカ伯母さんだつた……もう、居ないんだよね？」

フィールは悲しそうな顔をしながらエルレイを見た。

エルレイはただ沈黙する。それが答えだつた。フィールは無理矢理起き上がり、セリカに見せようとしたあの魔導具を取り出した。

フィール「……《私は世界を欺きし者 魔力を練り上げ知識を基盤に彼方を幻想せよ》」

フィールは両手を重ねて詠唱を開始する。

あの頃の約束、どうやら果たせそうにないけれど。

フィール「……《真実のヴェールで覆いし者よ・今一度聖歌の幻想を・我が命脈に従い・奇跡と彼方の巡礼を》」

フィールを中心に綺麗な花が咲き、空には満天の星空にオーロラ、それを照らすかのように花は光り、幻想的な空間を生み出す。

フィール「セリカ伯母さん……もし……貴女がまだ何者か探してるなら……やつと、旅を終えたんだね……」

フィールは冷たくなったセリカのコピー体に触れる。

無理矢理接合した右手は冷たくなっている。その右手にフィールは優しくその魔導具を握らせた。

フィール「——おかえりなさい。セリカ伯母さん」

フィールは涙を流し、そう告げた。

魂は、此処にあの時確かに帰ってきたのだ。だからフィールは振り返らない。セリカ

はもう……居ない。けど、私の前に一瞬だけ帰って来てくれたから。

エルレイ「それは…セリカに見せるものだったんだね…」

エルレイはそう言いながら、もう一度優しく抱きしめる……、強く……何もかもを包むように強く……。

エルレイ「きつとセリカは、探す旅なんてほっぽりだして…フィーちゃんをずっと見守ってたんだと思うよ」

エルレイは優しくフィールの背中を擦った。

フィールは少しだけ、エルレイに顔を胸に預けて涙を流していた。

ファイル「……………！」

ファイルは泣き腫らした顔を擦り、ライネルが調べていた研究を全て見た。だが、その中にはセリカの研究データこそあるが、世界を渡る術式のデータは存在していなかった。

ファイル「……………ライネルが主犯じゃない？」

エルザ「えっ？違うの？」

ファイル「データはない。手紙についても……………じゃあまさか、天の知恵研究会は意図的に2人を転移させた訳じゃなく、偶然見つけたからライネルは狙ったって事？」

それでは矛盾する。

一体何の目的で2人をこの世界に呼んだのか。

だが……………そう考えていると、エルレイの頭上にヒラヒラと何かが落ちてきた。

エルレイはそれを手に取る、それは手紙のようだ。

内容は……

《満足はしたか?》

というものだった。

エルレイ「……ちっ」

エルレイは小さく舌打ちをした。ミアルはエルレイの撮った手紙を横目で見る。

ミアル「……いちいち尺に触る書き方をする」

フィール「黒幕は……判明は出来なさそうね」

エルザ「帰り方は分かるの?」

エルザがエルレイに聞いてみるとエルレイは首を縦に振る。

エルレイ「多分、これに帰りたいと望めば、前みたいになる」

そう言いながらエルレイは手紙をひらひらとさせる。何処か納得行かないような顔

で。

エルレイ「……けど」

エルレイはそういうと手紙を天高く投げて、刀を生成させ、そのまま手紙を…。

バシユツ!!!バシユツ!!!バシユツ!!!

切り刻んでしまった。あたりに紙らしき物が飛び散り、地面につくと光って消滅する。

フィールもエルザも目を見開いた。

唯一の帰る手掛かりである手紙を切り刻みなんて正気の沙汰ではない。

エルザ「ちよっ!? 帰る方法!?!」

フィール「馬鹿なの?」

エルレイ「馬鹿だよ?」

エルレイはそう言いながら微笑んだ。ミアルもよくやったと言わんばかりに笑っている。どうやら気に食わなかったようだ。呼び出した人間に。

エルレイ「フィールちゃん達のおかげで力は溜まった。勝手に帰れるから大丈夫」

そう言いながらエルレイはエルザとフィールにいちごタルトを差し出した。

エルレイ「おたべ？任務終わったならいいでしょ？」

フィール「……貰ってはおく。今はそんな気分にはなれないし」

別人とは言え、身内を殺したのだ。

それに身体の毒がまだ抜け切っていない。精神的にも身体的にも今食べれる気がしない。だが、エルレイは優しい顔をしてフィールにいちごタルトを持たせていた。

エルレイ「ん、良かった、貰ってくれて」

ミアル「それで、準備は？」

エルレイ「万端。いつでもどうぞ」

そう言いながらエルレイは小さい赤いクリスタルのような物を取り出した。

フィール「……行くのね」

フィールはため息をつきながら割り切る。

まあ、未だに疑いもあるし、信用出来ない所もある。

だけど、任務を一緒に駆け抜けた時は僅かながら楽しかった。だからまあ、親友程度には別れを見送るのも悪くないだろう。

フィール「さよならね。エルレイ、ミアル……いや、エルレイ先生とルミアさん、がいいかな？」

エルレイは驚いた表情をしていた。

だってあの時、先生に任せてって言っていたし。

フィール「世界線は違えど、多分また会える気がするよ。だから、また逢おう、逢って話が出るように……約束」

エルザ「私も」

2人はエルレイ達の前に拳を突き出していた。

そしてエルレイ達が光に包まれ始める。フィールは最後に2人に叫んだ。

フィール「エルレイ、ミアル！」

「？」

フィール「貴女達が何で命を削ってまで魔法を使うのか分からない。どんな悩みがあるのか分からない。けど、2人なら乗り越えられるって信じてるから！だから……！」

フィールは最後に笑った。

それは年相応の少女のような笑顔で笑った。

フィール「生きる事を諦めるな！戯言であっても、生きたいと思えるような!!そんな素敵な人生でありますように!!そら、私の呪いだ！受け取れ!!」

フィールはポケットから2人に投げ付ける。

投げ渡されたそれを見ると、そこには『JOKER』と書かれた黒と赤のトランプだっ

た。それはある魔導具の失敗作、大した力はないが、その2枚のカードがフィールの加護と思えるような、そんな呪いを込めた最大の贈り物だった。

エルレイ「…ふつつ、フィーちゃんらしい」

ミアル「祝でも、祈りでもなく、呪いね…ますます気に入ったよ、フィールちゃん」

そういうとエルレイ達もカードを投げ渡す。そこに書かれていたのは。年期の入った。

執行官ナンバー7 《戦車》と

執行官ナンバー000 《破壊者》のカードだった。

エルレイ「こっちは、不…かな」

ミアル「頑張つてねフィールちゃん、必ず何処かで見守ってるよ」

そう言い残した二人は光へと包まれて、姿を消していった。

「フィールちゃん！ご飯だよー！」

「今行きます……！だから少し待って！」

フィールは愚者のアルカナの調整をしていた。

最近連発し過ぎて手入れを怠っていた気がする。専用の魔導機である以上、ちゃんと使うのがフィールの心情だ。

「あれ……？このカード……」

2枚のカードがあった。執行官ナンバー7《戦車》と執行官ナンバー000《破壊者》と書かれたアルカナが存在していた。

「そうか……そう言えば昔……あの人に会ってたんだね」

このアルカナは以前に会った2人からもらったものだ。今まで何故忘れていたのか

は分からない。けど、あの人達なら多分大丈夫だと思った。誰かに恋をしていたようだしね。

「フィールちゃん!!」

「はいはい、今行きますよ!!」

2枚のアルカナを調整していた愚者のアルカナの横に置き、一階にいるセラの所へ向かった。その時、机に置かれていた三枚のアルカナはまるでフィールとミアル、エルレイを表しているように見えた。

セイギノマホウツカイ

第■話

★★★

むかしむかし、あるところにふたりのまじゆつしがいました。

ひとりはせいぎのまほうつかいのゆめをおいもとめて。

ひとりはこきようをとりもどすためにまじゆつしとなつてひびたたかつていました。

かれはせいぎのまほうつかいをめざしました。

けれど、じかんがたてばたつほどにそのゆめはまつかにそまつてしまい、めざすのが

こわくなつてしまいました。

それでも、あきらめなかつたのはかのじよがいたからです。

かのじよはやさしくて、おせつかいで、かれをいつもふりまわしていました。

かれはそんなかのじよのやさしさにすぐわれ、ゆめをあきらめないままつきすすむことができたのです。

いつしかふたりはひかれあい、おたがいにこいをして、かぞくになりました。それはとてもしあわせで、ふたりはしあわせなみらいにいけるとちかいました。

ですが……

かぞくになつて、はんとしがたちました。

せいぎのまほうつかいをなのおとこは、かのじよから……かれをけしてしまったのです。

かのじよはわんわんとなきました。

ないても、ないても、なみだはとまることはありませんでした。

かぞくになつてみじかいしあわせはくだけちったのです。

そんなかのじよにあるキセキがありました。

かのじよのおなかにはかれとじぶんのこどもがいたのです。

★★★

パァン、と銃声が鳴り響く。

血に塗れた手と虚ろな瞳で死体を燃やし、仲間連絡を入れる銀髪の少女。赤い魔銃をホルスターにしまい裏路地から姿を消していく。

「終わった……次は何をすればいい?」

『次は—————』

「……了解」

仕事言い渡され、次の街へと向かう。

血を魔術で洗い流し、血が落ちないローブを捨て、新しいローブを着てフードを被る。人を殺すのに慣れてしまった。冷たい血の温度に慣れてしまった。

手を汚すことに躊躇をしなくなった。

殺す事に躊躇う事もなくなった。

いつか約束した自分の夢に敗れて、消えて、腐っていく自分に自虐するように呟いた。

「……何が、正義の魔法使いだよ」

銀髪の少女はそう眩き、空を見上げる。
見渡す限り、晴々としていた憎たらしい空を……

第■話

バッドエンドから来た二人の娘　　く外伝く

くTHE FOOL LOST ROADく

グレンⅡレーダスが死亡した未来。

そんな中でセラⅡシルヴァースとグレンとの愛の結晶が産まれた。彼女が産まれた

時、世界は彼女を代理措置として彼女を置いた。

彼女の名前はフィール・レーダス。

魔術に愛されて、風を操り、空を自由に駆ける少女。そんな彼女は父親が居なくとも、幸せな家庭で生まれたのだ。

「おかあさん！」

「んー？どうしたのフィール！」

「見ててね！《風よ集え・集いて回れ》！」

風の魔術を使つてちり紙をクルクルと回転させる。

小さな竜巻が色々な色のちり紙を回して、まるで目に見える台風を作り出していた。当時まだ七歳、多感なお年頃だ。

センスは超一級品、セリカⅡアルフォネアでさえ舌を巻く魔力制御力。恐らくは将来、セリカに次ぐ才能を持った魔術師になるだろう。

「おー！すごい！風の魔術がもうそこまで出来るようになったんだ！」

「すごいでしょー！いつかセリカ叔母さんをこえるんだから!!」

「ははっ、そりゃあ凄い目標だ」

その声に振り返ると、フィールは笑顔で飛び付いた。

セリカⅡアルフォネア。第七階梯^{セブテンデ}で魔術師の頂点に君臨する魔女。四百年の歳月を生き、愛弟子が残した最後の宝であるフィールの叔母である。

「セリカ叔母さん！」

「おー、フィール。元気にしてたか！」

「うんっ！」

「あっ、制御が乱れた」

「ああっ！ちり紙が部屋全体に!?!」

風の魔術で作られた台風が拡散し、ちり紙が部屋中にばら撒かれた。片付いて綺麗だったリビングがちり紙だらけになって、ぐちゃぐちゃになった。そんな事に脇目も降らず、フィールはセリカに報告していた。

「セリカ叔母さん！課題の魔術出来たよ！」

「マジか!?……よし、なら次は前よりちよーと難しいのを出してやろう」
「うんっ!」

「コラっフィール!片付けてから行きなさい!」

幸せな家庭だった。

グレンが居なくなっても、二人にはフィールが居た。そしてそれと同じくフィールには二人がいたから幸せだった。

ずっと、このまま生きていきたくかった。

自分が成長して、魔術師になって、お母さんを守るくらい、セリカ叔母さんを超えるくらいに強くなって、この場所を守りたい。

フィールにとつての正義の魔法使い。

それは目の前にある幸せを護れる魔術師だ。

そうなりたいと、フィールはそう思っていたのだ。

そんな人間になれたら……と、今でも悔やんでいる。

★★★

XXXXXX年 ■月■日

8歳になった。

セラはアルザーノ帝国魔術学院の教師だ。仕事に行っているため、フィールはセラに出された算術の宿題を三分で終え、魔術の訓練に使うセリカとの二人の秘密基地へと向かった。

風の魔術で市街地を駆けて、飛び回る。

まるで自分が風になったかのように空を自由に飛び回る。セラが見たら怒りそうなのでいつも隠蔽の魔術をかけて向かっている。

「んっ?」

街の様子がおかしかった。

まるで、何か重大な事が起きたかのような周囲のざわつきにフィールは少し疑問に

思った。裏路地で隠蔽魔術を解き、ばら撒かれた号外の紙を拾い上げる。

「……………えっ?」

書かれていた内容に呆気に取られた。

『灰燼の魔女セリカⅡアルフォネア。』

タウムの天文神殿にて行方、生死不明。調査官がタウムの天文神殿で彼女を探したが、未だ見つからず、レドルトⅡフィーベルの提唱した古代の時空間転移魔術の可能性が浮上。現在の所、セリカⅡアルフォネアは見つからず、消息すら不明である』

それを読んだ瞬間、激しい眩暈がした。

セリカ叔母さんが行方不明? 生死すら分からない?

そんな事ある筈が無い。

そんな、筈がない……とフィールは秘密基地へ走っていった。

★★★

「ハア……ハア……」

セリカ叔母さんが魔術で掘って形を整えた工房。

そこは広く、訓練所としても使う事が出来るほどに広く、何より隠された地下工房だ。いつもセリカはそこでフィールに魔術を教えている。

一週間前にフィールはセリカに魔術を教わっていた。

最上級の魔術課題は三つ。神殺しの魔術【イクステインクション・レイ】英雄投影の魔術【ロード・エクスペリエンス】そして、魔術師殺しの【愚者の世界】の三つだ。

すでに二つはマスターをしている。

最後の課題である【愚者の世界】だけが緻密な魔術制御力が無ければ使えないもので、フィールが大切にしている『愚者のアルカナ』の魔術式を読み取った上で流れを逆転させて0を生み出すと言うのだが、イメージが湧かない為、未だ修得できてない。

そして昨日、フィールは【愚者の世界】を使えるようになったのだ。その時は狂喜乱舞ではしゃいでいた。

「セリカ叔母さん！」

いる筈だ。

いつも、ファイルに魔術を教えてくれて、いつも笑って飛び付くファイルを抱きしめ返してくれるあの人はいる筈だと、そう思っていた。

居なかった。

何処を探しても居ないのだ。

「つつっ…そうだ…：…《罪深き我・逢魔の黄昏に独り・汝を偲ぶ》」

白魔〔ロード・エクスペリエンス〕は触れたものの技能や経験を読み取る。セリカがこの工房を訪れていたなら、何か痕跡がある筈だと、ファイルは机に触れて使った。

そして、見つけた。

経験が途切れているのは訓練所の真ん中だった。魔術を使用して、訓練所の真ん中に何か箱のようなものを埋めていた。

それを見た後、ファイルは風の魔術を使って地面を掘り進める。セリカが行方不明になる前にここに訪れたと言う事は、絶対に何かがあると思った。

掘り出したのは経験記憶で見たものと同じ、黒い箱とその側面に手紙のようなものが

張り付いていた。それを広げてフィールは読んだ。その字は間違いなくセリカ叔母さんのものだ。

『フィールへ。この手紙を読んでいるという事はもしかしたら、私はもうこの世界にいないかもしれない。急に居なくなってしまう事を謝らなくちやいけない事ではある。それでも、許してほしい。私が自分を見つけ、いつか必ず戻る日まで』

フィールはその手紙を読み続ける。

手が震える、呼吸が荒くなる。これではまるでセリカ叔母さんが残した遺書に見えてしまったからだ。

『お前に伝えなければいけない事があった。セラがお前の父について話したがらない事は知っていただろうか？セラの夫であり、お前の父親であるグレン・レーダスについて少し語らせてもらう。グレンは魔術の才能なんてなかった。魔術師としては三流だが、あらゆる魔術師の天敵とも呼べる存在だった。アイツが開発した固有魔術、それが私が出した最後の課題、【愚者の世界】だった』

セリカが出した最後の課題。

それはフィールが知らなかった自分の父親の固有魔術だった。セリカはフィールの魔術特性の特性上、使う事が不可能ではないと判断し、フィールに教えた。

それは、セリカの願いだった。

グレンの意思を継いでほしいという僅かな希望があったから、フィールにその魔術を教えたのかもしれない。

『お前の父は私の弟子だった。とても可愛くて、とても諦めないで、正義の魔法使いになりたいと思ひ魔術師を目指した。思えば、子供の頃のグレンはお前に似ていたのかもな』

グレン⇨レーダスという男はセリカにとって大切な宝物だった。手紙が入っていた封筒には写真が一枚入っていた。帝国宮廷魔導師団のコートを着て、照れ臭く笑っている男と肩を組んで笑顔で笑っていたセリカの姿が映っていた。

『だが、グレンはセラを置いて戦死した』

父は離婚してどこかに行つてたと思つていた。

セラが何故話したまらないのか、フィールはそれに漸く理解したのだ。けど、実感が湧かなかつた。父親が死んだなんて、フィールには理解が追いつかない。

誰だったのかすら、知らなかつた。

グレンⅡレーダスという人間をフィールは知らな過ぎたのだ。

『私は泣いて、自傷や酒を繰り返してたよ。いつそ死にたいと思つた。家族が死んだ辛さは今のお前じゃ分からないかもしれない。本当に辛くて、涙が止まらないんだ』

その字は少し滲んでいた。

それは、グレンを失つた悲しみによる涙だったのかもしれない。滲んで読みにくくなっている。

『けど、お前が産まれた。グレンが残した最後の宝物が、お前だった』

グレンが残した最後の宝物。

フィールⅡレーダスと言うグレンの子供だった。セリカはフィールをグレンと同じ

くらい愛した。それは重ねていたからだ。フィールとグレンという人間を。

『本当はこんなものをお前に渡したくない。けれどもグレンは私に頼んでいたんだ。もし、自分が死んでしまつたらこれを産まれてくる子にいつか渡してほしいと、手紙で書かれていた。正気を疑つたよ、親として子供にこんなものを渡すなんて。けど、グレンは何かを察していた。嫌な予感がしていたのかもしれない。フィール、正直私はお前にこれを使ってほしくない』

箱の中に入っていたのは赤い銃と一発の弾丸だった。

そして、セラとグレンの結婚した写真が入っていた。綺麗なロケット・ペンダントだ。ロケットは分かる。だが、魔銃ペネトレイターについてはわからなかった。なんでこんな物騒なものを残していったのか、フィールは分かる筈がなかった。

『けれど、もしフィールが誰かを殺してでも大切な人を守りたいと思つたのなら、私はこれをお前に託す。それが私の意思でグレンの意思でもある。私は絶対に戻ってくる。私が何者なのか知つて、決着をつけなきゃいけない』

フィールはその事について知っていた。

自分が何者なのか、知りたいと言っていたセリカを思い出した。今思えば、焦っていたのかもしれない。

まるで、自分だけが他の人間と違うようで……

『私は正直、自分を知るのは怖い。けど、それでも……私はお前と同じ家族だ。お前の前では、セリカ叔母さんで居る。だから、もしも帰ってくるのが数年、数十年だったとしても、私は変わらずフィールを愛している』

セリカがこれを書くのにどれほど悲しい気持ちだったのだろう。フィールを傷つけてしまうかもしれない、その覚悟の上で書いた手紙

『フィール、私の二番目の愛弟子。私は信じてる。お前が必ず、誰かを護れるくらい強くて、グレンに似た凄い魔術師になる事を私は信じてる。愛してる。私はお前のセリカ叔母さんだから。』

『セリカ叔母さんより』

その手紙を読むと、フィールは力が抜けたかのように膝をついた。手紙を握りしめて涙が溢れる。これは遺書だった。セリカ叔は自分を知る為にフィールの手の届かない場所へ向かっていったのだ。

「なんで……わかってて……行っちゃうんだよ……！」

家族を失った辛さを知っているならどうしてフィールを置いていってしまったのか。辛くて、悲しくて、失った痛みで死にたくなる。セリカが言っていた事をなんで……家族を置いていく辛さが分かっているんで……行ってしまったのかフィールには分からない。

「う……うあ………」

呻き声にも似た声が溢れた。

その場から崩れ落ち、ただ地面を、何も考えずに見下ろした。

胸が痛かった。

家族が、フィールの大切な人が消えてしまった悲しみが胸を締め付ける。ああ、確か

に書いてあった通りだった。

「うあああああああああああああああああああああああああああああああ
……!!」

本当に辛くて、涙が止まらなかった。

ファイルは初めて、大切な人を永遠に喪った。

★★★

しょうじよはなきました。

たいせつなひとをうしなかって、ただかなしくてなきました。

しょうじよはまじゆつしになることをちかいました。

だれかをまもれるくらいつよくなって、だれもかなしませないようにすることのできるまじゆつしになるとちかいました。

ですが、そのゆめをかたるには……

いまのしょうじよにはちからぶそくでした。



XXXXX年 ■月■日

フィールは空に浮かぶ船を見た。

突如現れた船はフェジテを覆う程の大規模な結界で断絶されていた。セラとフィールの家はフェジテの外にある為、フィールは結界の外に流れていた。

けれども……セラやアルザーノ帝国魔術学院、帝国宮廷魔導師団のナンバー持ちは断絶結界の中に居る。

嫌な予感がした。

フィールは自分が出るだけの準備をした。『愚者のアルカナ』にグレンがフィールに残した赤い魔銃ペネトレイターをホルスターにしまって、アルザーノ帝国魔術学院に向かった。そこにきつとセラがいると思っていたから。

だが……

「クソツ……!! 《紅蓮の獅子よ》！」

黒魔「ブレイズ・バースト」を断絶結界にぶつけるが、揺らぎすらしない。大規模でこれ程強度が高いものは人間では作る事の出来ない領域だ。セリカでも不可能だ。威力が弱ければ話にならないなら、最大威力をぶつけるだけだ。

「《——我は神を斬獲せし者・我は始原の祖と終を知る者・其は摂理の円環へと帰還せよ》」

神すら殺すその魔術は本来ならセリカ以外に使えるものは存在しない。だが、セリカの弟子であり、魔術に愛されたフィールなら話は別だ。

「《五素より成りし物は五素に・象と理を紡ぐ縁は解離すべし・いざ森羅の万象は須らく此処に散滅せよ・遙かな虚無の果てに》」

あらゆるもの五素に分解する。

灰燼の魔女が邪神を殺す際に生み出した存在。一人で唱えられる魔術の最高峰の魔術をフィールは幼き身で発動させた。

「黒魔改【イクステインクシオン・レイ】！」

膨大な魔力を喰らい、赤黒い魔術の閃光が結界にぶつかり合う。フィールドが唱えられる最高峰の魔術をぶつけた。

「ハア……ハア……」

少なからず、結界に揺らぎがある、揺らぎや解れがあるなら結界を解く事が出来るかもしれない。そう思っていた。

「……そんな」

結界は揺らぎさえしなかった。

所詮は愚者の牙に過ぎない近代術式では古代術式に対抗出来ない。断絶結界も古代術式だ。当然ながら壊す事は近代術式の範囲内である神殺しすら破壊することが出来ない。

「クソツ!!」

結界を力一杯殴る。

だが、揺らぎすらしない。ファイルでは破壊出来ない。中に入れなければ、何も出来ないし、何も救う事も出来ない。何度も殴るが、ただ手に血が滲むだけだった。

「ファイル!!」

「!」

結界の内側から声が聞こえた。

宮廷魔導師団のコートを着て、結界の内側から自分を呼ぶ声がした。

お母さんだった。

肩から血を流して、ファイルの元に駆けつけてきたのだ。酷い有様だ。頭の数箇所
傷があり、身体が重そうだ。

「お母さん、その怪我……!」

「ファイル、よく聞いて」

「でも……!」

「お願い、遠くに逃げて。もうすぐこの場所は全部消えちゃうから」

ファイルはその言葉に理解が出来なかった。

全部が消える。それがどういう意味なのか理解出来なかった。

「どういう……事?」

「このままじゃ、フェジテは全部炎の海に消えるから……だから、せめてファイルだけでも逃げて……!」

「お、かあさんは……?お母さんはどうするの!」

断絶結界の中に居るならば……逃げられない自分の母親は一体どうするつもりなのか。答えは母の表情を見て分かってしまった。もう逃げられない。このまま何も出来ずに死んでいくだけだ。

「逃げて……!お願いだから……!早く!」

「嫌……嫌だよ!!お母さんを置いていけないよ!!」

無情にも結界は壊れない。

結界によつて区切られた以上、セラは完全に檻の中だった。まだ、外にいるフィールには逃げられる可能性があった。けれど、そんなのはただ母親を見捨てて逃げてしまう事だった。

「私は、行かないきやいけないの」

「なんで……!嫌、嫌!行かないでよ!!」

血が滲む程に結界を叩いた。

焦つて、恐れて、目の前から永遠に消えてしまいそうな自分の母親を見て、涙が止まらなかつた。

「お母さん!!」

「フィール、最後に抱きしめたかつた。私とグレンくんが残した私達の宝物だから……」

爪が割れる程に結界に爪を立てた。

行つてしまふ。母は行つてしまふ。きっと、立ち向かう為に遠くへ行つてしまふ。無謀だと分かつていても、決して諦めないのを知つていたから。

「愛してる。私はずっと、貴女を愛してるから」

「いや……だ……いやだよ!!!行つちやヤダよ!!!行かないですよ!!!」

「お母さん、もう少しだけ頑張ってみる」

「行かないで!!ひとりにしないでよ!!ねえ!お母さん!!」

断絶された世界でセラはあの船へと駆け出した。

継りついても、何をしてもしてもフィールの手は届かない。セラの姿が消えていくまで、フィールは叫んで、引き留めようとする悲鳴と涙を流す事しか出来なかつた。

「お母さん!!」

ただ、姿が見えなくなった次の瞬間。

空から断絶結界を破るほどの威力の地獄の業火が降り注いだ。

★★★

「……ゲホッ……ゲホッ！」

辺り一面が焼け野原となったソレを見て咳き込む。

死体すら灰となり、建物は全て崩れ去り、業火によって焼かれた地には多大な熱量で溢れていた。

火傷を負ったが、それでもフィールは生きていた。

自分の身体に身につけていたロケット・ペンダントが光っていた。セリカが残したフィールへのお守りが起動したのだろう。

「お母さん……」

フィールは身体に体温調節の魔術を使い、『疾風脚』シユトロムで街を駆け出した。あんなに美しかったフェジテはもはや見る影もない廃塵となり、人が生きている様子もない。

「お母さん！お母さん！！」

フィールは叫んだ。

だが、いくら探しても見つからない。いつも果物を買っていた売店、絵本を選ぶのに迷って笑われた本屋、ハンバーグが美味しかったお店も全て崩れ去り、炎に包まれていた。

「おかあ…さん…」

アルザーノ帝国魔術学院。

それがあつたものは炎に包まれ、業火によって崩れていく。

多くの生徒がいたはずだ。

多くの教師が居たはずだ。

宮廷魔導師団も居たはずだ。

そして……自分の母親すらも業火に焼かれて死んでしまったのだろう。誰一人、救う事すら出来ないまま、フィールはただ立ち尽くした。

涙など知らぬ内に勝手に流れていた。

枯れ果てるまで泣き叫んだのに止まらない。

「う……あう………」

焼けた地面はフィールの膝を焼いていく。

痛みすら感じないほどの絶望に、フィールは胃の中の全てを吐き出した。気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。現実を受け入れきれない少女に現実は無情にも変わる事すらなかった。

「ひっ………」

崩れた家に下敷きになって焦げた骸があった。

もはや、生きているものはいない。生物に等しく死を与えた炎に全てが燃えたのだ。

フラついた足で目的地に向かう。

アルザーノ帝国魔術学院に辿り着いた。そこには学院と呼ぶには、何もありはしなかった。

何もありはしなかった事が答えだった。

何もかもが、燃え尽きてしまったのだ。

『……何のつもりだ。魔王よ』

「何のつもりと言われても、彼女は『空の巫女』だ。僕が回収するのは当然だろう？」

『足りぬ筈だ！ソレでは完璧には程遠い！貴方も分かっている筈だ!!だからわざわざ、

『メギドの火』まで出したと言うの!!』

「いいや、間違いさ。この子だからこそなのさ」

芝生の校庭が焼け野原と化した場所で言い合う二人を見つけた。一人は文字通り格が違い、金髪の天使のような美貌の女の子を抱えている銀髪の美少年。もう一人は、まるで全身が鉄で出来ているかのように黒い男だった。

そして、その黒い男がフエジテを滅ぼした。

その言葉に憎しみが膨れ上がった。初めて、人を殺したいと思ったのだ。

「おや、レーザー。君でも仕留め損なつた人間が居たようだよ？」

『何っ……っ？』

火傷はしているものの、メギドの炎で生きていた人間に驚愕していた。あれは神殺しよりも破壊力の高い全てを焼き尽くす業火だ。それを防いだ人間にレーザーは驚きを隠せなかった。

『まあよい、せめてもの慈悲だ。我直々に殺すとしよう』

「つつ!! 《冴えよ風神・剣振いて・天駆けよ》!!」

黒魔【エア・ブレード】を躊躇なく放つ。

だが、身体に命中したにも関わらず、傷一つ付かない。まるで鋼鉄に覆われているかのようにだ。

『ほう、こんな子供が軍用魔術を……』

「《紅蓮の獅子よ》《吼えろ》！ 《吼えろ》!!」

フィールはただ憎しみに力を振るう。

黒魔【ブレイズ・バースト】すら身体に当たっては霧散し、爆発しては傷一つ付かない。身体が鋼鉄なのか、魔術をレジストしているのかも分からない。

ただ、怒りに身を任せ、魔術を放った。

そんなフィールを嘲笑うかのように魔人は力を振るった。

『気は済んだか？』

「つつ………！」

『ならば、此方の番だ』
◆◆◆◆◆

頭上に数十本の剣が浮かび上がる。

格が違い過ぎた。魔術と言うには余りにもフィールが知るものと格が違い過ぎる。フィールは『疾風脚』シユトロムで逃げようとするが、襲いかかる多大な量の剣を躲し切れずに身体中に深々と突き刺さった。

「があああああああああっ?!?!?」

想像を絶する痛みだった。

身体に剣を突き刺すなど、子供では想像などする事すらした事なかった。痛みで気を失いそうになる。いつそ、このまま死ねた方が苦痛なく死ねたのかもしれない。

流れ落ちる血、焦げた世界の匂い。

もう充分だった。充分、死にたいと思えた。

『ふん。他愛無い』

「生き延びたとはいえ人間にそれかい。試し撃ちにしては少し豪勢じゃないかい?」

『何とでも言え、その娘の存命は貴方の決定だ。我は従おう』

「ありがとう。《鉄騎剛将》アセロ||イエロ」

魔人が近づいてきている。

血が滲んだ地面を見る、何も出来ないまま死んでいく。

意識は遠く、抗う力は殆ど残されていない。

ただ、仇を討ちたい。膨れ上がった憎しみが、大切なものを守れなかったその弱さを憎み、ただ一矢報いる為に、フィールが使える最後の魔術を装填した。

「……………《0^セの…専心^{ット}》……………」

父親が渡した最初で最後の弾丸。

彼は、いつかこうなってしまう未来から救ってほしいが為に託したのかもしれない。けれど、フィールには何も救えなかった。

「一つ……………教え……………」

『むっ?』

「なんで……………こんな事を…したの?」

『……………何を言うかと思えば、我はその王女を殺そうとしたに過ぎん。他の愚者の民など知った事ではない。ただ、弱者に過ぎぬものが強者に淘汰された。それだけだ』

それはつまり、その王女を殺す為にフェジテ全てを焼き払った。奴はそう口にしたのだ。要するに、王女以外は鬱陶しいからついでに殺したのだ。

その言葉にフィールは、怒りも悲しみもしなかった。

ただ、嗤った。

「ああ……安心した……」

『何?』

「良かったよ……これでお前を……」

《鉄騎剛将》アセロ||イエロ。

それは身体全てが神アダマンタイト鉄で構成され、どんな攻撃も効く筈のない無敵の体を持つ六魔将で唯一手強い相手だ。

だが、アセロ||イエロにも死因がある。

それは正義の魔法使いの弟子だからこそ使えるフィールの最後の切り札。

「心置きなく……殺せる」

——ああ、もう誰も、かの神鉄の魔人を止められない。

——誰もが絶望した時、彼の者に立ち向かったのは、正義の魔法使いの弟子でした。

——**■**は、小さな棒で、魔人の胸を突きました。

——すると不思議なことに…魔人は突然、倒れて死んでしまったのです。

絶望しても、心が折れても逆境に立ち向かう。

正義の魔法使いの弟子、綴られた原典には小さな棒で魔人の胸を突いた。それによつて魔人は死んでいった。

死に体だと油断した。

もう抗う術はないと思わせた。

さあ、一歩踏み出そう。

それだけで、私の勝利だ。

本来ならフィールではない。

唯一の代役は引き金を引いた。
フィールフィールは引かないこの世界での唯一の代役。
本来グレンの主役が居ない世界で生まれた

「**【**愚者ベネトレイダーの**一刺し】**アアア……………!!」

愚者が残した最後の切り札。

絶対不滅の神鉄で出来た、魔人の身体に傷つける事は出来ない。けれど、その絶対的防御は……

『馬鹿……な……』

たった一発の弾丸に撃ち砕かれた。

アセロロイエロの身体が崩壊していく。

『何故、何故！撃ち抜けた……!?何故我の身体が崩壊する……!?』

フィールが撃った弾丸は、アセロロイエロの心臓を貫いた。いくら身体が鉄でも、構造が全く違うわけではない。グレンが残した『イヴ・カイズルの玉薬』は自身の魔術特性パルソナリテイを弾丸に装填させる。

フィールの魔術特性パルソナリテイは『万象の逆転・逆流』だ。それはつまり、弾丸が貫いた因果を

逆転し、貫いた結果に基づいて過程を得たのだ。

故に防御など貫いた結果に基づいているなら防ぐ術などない。まさに愚者の一刺し、賢者を殺す為の究極の魔術師殺し。その叫びに皮肉混じりで嗤い見下げる。

「……人間を、甘く見たからだ」

天に向かおう者に唾を吐き捨てる。

神に信仰し、神に依存し、囚われた哀れな存在にフィールは嗤った。

「見くびるな……三流」

『貴様アアアアア!!』

消えるまでまだ時間がある。

消滅する前に、アセロリエロはフィールを殺そうとする。

しかし……

皮肉にもまだ、アセロリエロが殺せなかった存在から、不意打ちとも呼べる形でフィールの前に現れたのだ。

「はははははは！それは読めなかつた！流石はグレン！こうなる事すら予想していたのかい!？」

『貴様は……!』

「初めましてラザール。いや、今はアセロ||イエロと言うべきかな？まあまさか【大導師】^{ヘッセン}が直々に来る方が読めなかつた。だが！だが漸く、姿を現した!!」

その興奮に啞う男が居た。

フィールの前に現れたその男は、フィールの仇でもあり、悪の敵として天の智慧に手を伸ばす残虐者を狩る異端の天才。

元帝国宮廷魔導師団・特務分室執行官。

No. 11 《正義》ジャティス・ロウファンが姿を現した。

『貴様が何故！メギドの火は……!』

「あんなもの船より高く飛ばばいいだけさ。まあ、現れる地点を予測して待ち構えていたのに崩壊するものだから流石に驚いたけど、まあ彼女が居たなら当然か」

ジャテイスはフィールを見る。

まだ八歳の女の子が、魔人を倒すなんて読む以前の問題だった。だが、曲がりなりにもグレンの子供、いつだって読めなかった彼の意志を継いだ存在ならば、魔人であろうと神であろうとたった1%の勝率を引き当てる。

「漸く対等だ。知らない敵に翻弄されるのはもう無しさ」

「それは良かったね。だが、僕は君に構っている暇などない。まさか、正義の魔法使いの弟子が本当に存在していた事が確認出来た。ロランⅡエルトリアの戯言は正しかったようだ。僕はもう帰るよ」

「ご自由に。今の僕の勝率では勝てないし、君の介入は僕からしたら柵からぼた餅さ。今回は見送ろう。だが次は無いさ」

その言葉を聞いた瞬間、【大導師^{ヘッゲン}】は金髪の天使を抱えたまま虚空へと消えていった。ジャテイスにとつて、姿を表した事には僥倖だが今の自分では勝てない。必ず殺すために今は見逃した。それを見た後にジャテイスはラザールに視線を向けた。

「さて、待たせたね異端者ラザール。判決は死刑。その不信の罪を死で償え」

まるで法廷の裁判官のように、ジャティスが朗々と宣言し、左手をラザールへ向ける。その不快さにラザールは苛立ちを感じ、叫ぶ。見下されている。魔人の力を持った自分がたかが人間如きに。

『……舐めるな、人間如きがッ！』

ラザールが神速で、ジャティスに突進する。

だが、ラザールを覆っていたアセロIIエロの身体に異変が生じた。左手を向けられた場所の一部が分解されている。

パキパキと、神鉄が消えて一部がラザールの皮膚に戻った。

「僕は錬金術師だぞ？ 神鉄全てを錬成は出来ないが、一部だけなら分解は可能さ。彼女が貫いてくれたおかげで、その術式も完成した」

『き、貴様アアアアア!!!』

「そして、詰チエックメイトみさ」

ジャテイスが分解したのは額ののほんの一部分。
だが、そこは脳に繋がる生物の最大の弱点。それを逃すほどにジャテイスもフィールも甘くなかった。

「……………死ぬ」

パン！と言う発砲と共に額を貫いていく弾丸。

ジャテイスの後ろから撃つフィールの弾丸はまるで全てが無意味だった神鉄の身体を持つアセロライエロの額を穿ち、頭蓋から血が撒き散らされた。

呆気ない最後だった。

無敵とも呼べるあの男が、一人の少女と青年に殺されるなんて。

「流石、と言うべきかな？」

「……………貴方は……………？」

「そうだねえ、仇であり、敵であり、目指す宿敵であり、同類かな？」

「意味が……………わから……………ない」

意識が朦朧としていた。

油断を誘う為にわざと出血を直さなかったのだ。小さな身体から血を流し過ぎてしまっている。

身体が冷たくなっていく。

涙も枯れるだけ泣いて、泣き叫んで声が掠れ始めた、

「お母さん……セラ……は？」

「死んだよ。奴のせいだね」

「……………そう」

自分は何のために生きている？

何のためにに魔術を覚えたのか？

正義の魔法使いなんて儂い夢は、地獄の業火に焼き尽くされ、復讐を遂げても虚しいままだ。

ただ、愛が欲しかった。

どれだけ無茶をしても、ただ笑って褒めてくれて、自分を抱きしめてくれる母がいれ

ばそれで良かった。

それすらも失って、生きる意味すら失ったのだ。

皮肉なものだ。正義の魔法使いなんてものがあつたのなら、きつと誰もを救えたかもしれないのに。

それはきつと自分じゃない。

フィール||レーダスは正義の魔法使いになれない。

そんな現実には打ちのめされ、意識が暗転していった。



しようじよはこのひ、すべてをうしなしました。

せいぎのまほうつかいになることはできませんでした。

あのひ、でしががいきていたなら。

あのひ、ははといっしょにたたかえていたら。

あのとき、じぶんがいたのなら

もしかしたら、けつまつはかわっていたのかもしれない。

そんなありもしないげんそうは……
ざんこくなげんじつにひきさかれたのです。

★★★

暖かい。

誰かが自分の手を握っている。体調を崩した自分の手をこうやってお母さんが握ってくれたのを思い出す。

いつも自分を安心させてくれる……

「(っ)は……」

「っ！目が覚めましたか」

目が覚めると知らない天井だった。

ベッドの上で眠っていた自分の身体を起こす。あれからどうなったのか、一体自分はどれだけ眠っていたのか、此処がどこなのか知りたかった。

「つつう……!」

「動いてはいけません。重傷だったのですから」

鋭い痛みが襲いかかる。

肩や脚に包帯が巻かれていた。治癒魔術で修復しきれなかった部分もあったようだ。手を握ってくれていた女性を見る。

「貴女……は……あの時の?」

あの時の金髪の天使に似ている。

アセロリエロと話していた魔王が連れ去った天使に。ただ、この人は大人びていて、一度何処かで見た事があるような気がする。

「……貴女が、魔人を?」

「……はい、殺したのは私です。あと、近くに凄腕の錬金術師が居たはずですけど……」

「見つかったのは、貴女一人です」

「他の、生存者は……?」

金髪の女性は首を横に振った。

もう、お母さんはいないんだ。死んでしまった。自分だけ死に損なって、何にも守れなくとも魔人を倒した。

何にも守れない正義の魔法使い。

滑稽で、哀れな末路だとフィールは自虐する。

「……守るって……どうすればよかったの？」

「！」

「何にも出来なくて、殺せたはずの魔人から護れなくて、死に損なって、私は……」

どうすればよかったのか。

そんな事、分かるはずもなかった。

ただ、のうのうと生きた自分を恥じた。

何にも出来なかった自分を呪った。

「いっそ、死にたかった……」

「……………」

「守れないくらいなら、お母さんと一緒に死にたかった……！」

いつそ死ねれば幸せだったのかもしれない。

全部、全部が無くなって生きる理由もなくなってしまった。

正義の魔法使いになりたい。

そんな夢すらもう叶わないというのに。

「私は……………どうすれば、よかったのかな……………」

もう、何も無かった。

自分の居場所は……………何も……………残されていないなかった。

心は折れ、生きる希望も失って。

ただ、何が正解なのかを知るには遅く、自責と自虐の感情の中、どうすればよかったのか、もう何もわからなかった。

「それでも……貴女は生きなければなりません」

「……えっ？」

「居場所を失って、大切な人を失って、辛くとも、死にたいと思っても、それでも……」

唇を噛みしめ、血が滲んでいる。

泣いていた。この人は泣いていたのだ。この人もきつと辛い思いをしたのだろう。自分の弱さを悔いて、何も出来ない自分を憎んだのだろう。

「愛してくれた人が貴女を生かしたなら、貴女は生きなければならないのです」

それでも、生きなければならない。

生きて、愛してくれた人に産んでくれてありがとうと言える時まで、フィールは生き続けなければならない。

辛くとも、心が折れても、生かしてくれた理由がある。

ただ、愛されていたから。セリカが、最後にフィールに託したから。いいや、違う。ただ、大切にされていた自分が死ねば、無駄死になってしまうからだ。

「……そつか……」

心は未だ折れてしまっている。

けれど、今は死にたいと思えなかった。

守ってくれたから。

母と叔母と、そして父が私を守ってくれたから。

「……陛下、そろそろ時間です」

「……わかりました」

金髪の女王はフィールから離れる。

女王陛下、アリシアIIエルIIケルIIアルザーノ七世が自分の手を握っていた事に驚愕する。そして、漸く理解した。女王陛下の娘が、連れ去られた金髪の天使なのだ。

「一つ、いいですか」

「時間だと言ったはず」

「やめなさいゼーロス。何でしょう」

フィールは激痛が走る体を起こし、陛下に伝える。ベッドで寝ながら伝えるのは少し不敬だと思ったから。

「金髪の天使は【大導師^{ヘッゲン}】に連れ去られました」

「!!」

「……けれど、必ず連れ戻します。それがどれだけ難しい事かは分かります。けど、いつか……必ず私が貴女の下へ連れてきます」

それは誓いだった。

正義の魔法使いにはなれない。正義の魔法使いを憧れた自分はあの日に死んだのだ。それでも、それでもやっぱり目指す事にした。

愚かで、馬鹿で、くだらない甘い夢だ。だが、それを私が一番否定してはいけない。だって、私は……

「だから陛下……貴女も生きてくださいいね」

「!」

「私が連れ戻す、その時まで」

だって私は、二人の子供だから。

どんなに甘くても、いつか必ず守るべきものを守る為に夢を追い続ける。かつて、父がそうしたように。フィールもまた同じように目指す事を……

「私も一つ、よろしいですか?」

「何なりと」

「名前、まだ聞いていませんでしたね。貴女の名前は?」

「……フィール。フィール||レーダスです。グレン||レーダスとセラ||シルヴァースの娘です」

アリシア陛下は目を見開いた。

あの日、ルミアを救ってくれた男の子供が、再び世界を救ってくれたのだから。過去にどれだけ、自分の父親に辛い思いをさせたのかアリシアは理解していた。

あの日、イグナイトに任せなければ死なせなかつたかもしれない未来を今でも夢

に見る。そして、目の前の少女はあの人と同じ眼をしていた。

「いつか必ず——」

正義の魔法使いになる。

そう陛下に誓ったのだ。そして、此処から始まったのだ。ゼロから正義の魔法使いはここから始まったのだ。

代役から主役に……フィールは正義の魔法使いという辛くとも甘い夢を目指し始めたのだった。

★★★

しょうじよはせいぎのまほうつかいをめぎしました。

どんなにこころがおれても、ちちおやのようにあきらめないしんねんをかかげ、ははおやのようにやさしいにんげんになるために。

かのじよはいばらのみちをつきすすむことをけついたしましたのです。

ですが……しようじよはまだしりませんでした。

しようじよがいくらがんばったところで。

このせかいにすでにきぼうなどないことに。

まだ、しようじよはしらなかったのです。

第0章 ようこそ絶望の世界から 第1話

『ねえお母さん。私のお父さんってどんな人なの？』

料理していた母の手が止まる。

少女は写真を眺めながら、単純に興味湧いたように質問する。

写真に映っていたのは、長い髪のイケメンで帝国軍のコートを着崩しながらも、笑顔で母を抱き締めている1人の男。

長く美しい銀髪と羽根の髪飾り、赤い紋様を顔料で刻み、緑色の民族衣装を思わせる服装を身に纏って笑っている女が居た。

『……ファイルは、お父さんに会いたい？』

『うん。分かんない。けど、会ってみたいかもしれない』

『……そう、だよね』

『…………？ お母さん？』

お母さんは台所を後にして、自分の部屋から何かを持ってきてファイルに渡す。

『…………これは？』

『お父さんの…………宝物だよ。私が大事にしていた物だけど、ファイルが持っていた方がお父さんも喜ぶから』

少し埃をかぶっていたが、ハンカチで拭いた。

渡されたのはタロットカードの中でも異端に属するカード、『愚者のアルカナ』だ。この時は訳も分からずに宝物を貰ったとはしゃいでいた。

この時はまだ何も知らなかった。

この世界に主人公は居ない事もこの世界に幸せは存在しない事も全てが狂ってしまった世界。

そんな世界で彼女は産まれたのだ。

彼女の名はフィール・レーダス。

グレン・レーダスが死亡し、セラ・シルヴァースが生きていた世界に産まれた2人の子供だった。

街には大量の『天使の塵』エンジェルダストの感染者が湧き上がって斧や包丁などの刃物や鈍器でを襲っていた。その中で、拳に銃、暗殺用の小道具で応戦し、退けるグレンと風を駆使し、グレンの背中を守りながら感染者を寄り付かせないセラがいた。

「あ、あ、ああああ!!?」

「クソが!!? イヴの野郎やつぱり増援をよこさずに、俺達をただの使い捨ての囷にしようとしやがってぜってえ許せねえ!!?」

グレンがそう呟くとグレンの背後から天使の塵エンジェルダストの感染者が斧を持って振りかざそうとしていた。多勢に無勢、数で押されてジリ貧もい所だ。

「あ、あ、あ、あああああ!!?」

「!!?、しまつ……!!?」

「《大気の壁よ・二重となりて・我らを守れ》——ッ!」

セラがそう叫び唱えると黒魔「エア・スクリーン」の即興改変して「ダブル・スクリーン」になって二枚張られた強固な空気膜の真空が、外部からの攻撃を遮断してグレンを守った。

「グレン君!!?よそ見しないで!!?」

「すまねえ!!? セラ!!?」

「全く……グレン君は私がないダメなんだから……」

セラはグレンにそう言うのとグレンはムツとした表情で魔銃ペネトレイターをセラに構えて撃ち放った。するとセラの背後にいた『エンジェルダスト天使の塵』の感染者の額に風穴を開けると感染者は苦しみの声を上げてその場に倒れた。

「ふっ……全くウザったい!!」

「それには凄く同感!!」

「ああ、拉致があかねえ!!セラ、背中は頼むぜ!」

ナイフを取り出し、セラの援護で感染者を切り裂いていく。

グレンとセラは反対方向に走る。飛び掛かる感染者を躲しながら互いに魔術を放つ。

「白犬!! 《紅蓮の獅子よ・憤怒のままに・吠え狂え》!!」

《大気の風よ・旋回し・一掃せよ》!」

即興合体魔術【フレア・ハリケーン】

セラは黒魔【エア・ブレード】を改変し、グレンが放った【ブレイズ・バースト】を飲み込み、感染者を一掃する。

「ふう、舐めんなこの野郎!感染者なんかには負けるかってーの!馬鹿、バーカ!死ねジャ
ティス!!」

「さつきまで危なかつたくせに……それに私は白犬じゃないっていつも言ってるよね

「！」

グレンとセラはそう言い合っていると、空から声が聞こえた。

「いやあ、流石だよ二人とも」

黒いシルクハットと、杖に仕込んだ細剣を持ちながら、人工天使に乗りながら二人に話しかける人物が。

「相変わらずだねえ、君達は？」

「…………つ、テメエは!？」

グレンはそう言つて声がする屋根の上の方へ視線を向けると驚きを隠せない表情を浮かべていた。セラもグレンのそんな表情を見てグレン見ている場所に視線を向けると驚かすにはいられなかった。

何故なら…………そこに居たのは

「いや、久しぶりだね？ 会いたかったよ!!? グレン、セラ?」

「ジャティス!!?」

「ジャティス君どうして!!?」

グレンもセラも背後に浮遊する人工精霊に乗った男に視線を向ける。

帝国宮廷魔導士団執行官 N o . 1 1 《正義》 ジャティス 〓 ロウファンが引き起こした『エンジェルダスト天使の塵』による中毒者がグレン達に襲ってきた理由は恐らく、ジャティスの目的がグレンだったのだ。

ジャティスは驚く二人を見ても何事もなかったかの様に笑顔で話しを続けた。

「どうしてここにいたって? それなら簡単だよ? もちろん、正義の執行の為だよ

!!?」

ジャティスはそう言うのとセラはジャティスのそんな態度が許せなかったのかグレンの前に立つて

「正義だと? こんな狂った惨状が正義だと!!」

「ああ、正義さ！そして、君達は必ず来ると」読んでいた！」

ジャティスは嗤っていた。

そう、任務の時からジャティスとグレンは対極だ。悪の敵であるジャティスと正義の味方であるグレンは全くの対極。だが、百回の一回を引き当てるグレンはジャティスにないその信念が宿っている。

故にこれは挑戦だと、ジャティスは告げたのだ。

「ふざけないで……」

「何!？」

「そんな理由でグレン君に関わらないで!!?こんな惨状がグレン君と戦う為だつて言うなら、私は君を許せない!!」

セラがジャティスにそう言うのとジャティスの顔は物凄い憤怒を含んだ表情になっていた。セラは魔術師としては人間らしさが強い方だ。こんな惨状をただそれだけの為に生み出した元凶を許す事など到底出来ない。

「セラ……いくらグレンに認められている君でも、これ以上僕とグレンの神聖な会話を邪魔しこの崇高な場を汚すなら……」

ジャティスの右手が上がるとマスケット銃を持つ人工精霊がセラに狙いを定める。ジャティスが手を下ろそうとした瞬間、嫌な予感がしたグレンがセラを突き飛ばすが、セラの代わりにグレンが弾道に入ってしまったている。

「死んでくれ。正義の為に」

「つつー！ セラ!!」

マスケット銃が一斉に発射された。

詠唱が間に合わない。防ぐ術が無い中でセラは手を伸ばすが間に合わない。躲す余裕すらない中で、グレンは何も出来ない。

ズガガガガガ!!!

一斉に放たれた射撃の弾幕にグレンは飲み込まれた。

……かに思われた

「……………はっ?」

ジャテイスは驚愕していた。

発射されたマスケット銃の弾丸がグレンに当たる前に全て撃ち落とされた。それは《星》のアルベルトにしか出来ないような精密な射撃だが、ジャテイスはそれに困惑している。アルベルトは援軍に出来ない筈だ。そう読んでいたにも関わらず、狙撃されている。

「ぐっ……………!?!」

「なっ!?!」 「ライトニング・ピアス」か!? アルベルトの奴! あんな遠い所から!?!」

ジャテイスの左肩を射抜かれた。

気が付けばジャティスの生み出した人工精霊が全て砕け散っている。「ライトニング・ピース」の多重連射は的確にジャティスの切り札ごと消し去っている。撃たれているところは、大鐘の塔から遠距離で撃たれている。

「チツ……!! 誰だ! 僕とグレンとの対決を邪魔する奴は!」

ジャティスは激昂のまま叫んだ。

すると塔の上から「ライトニング・ピース」がジャティスを襲う。回避する為に、盾持ちの人工精霊で防ぐが、貫通性が売りの「ライトニング・ピース」を防ぐ程強くはない。

「ぐっ……! 仕方がない、グレン! 今回は諦めるとするよ。ただ覚えておくと良い。

『正義の魔法使い』になるのはこの僕だ!!」

「つつ……! 待て!!」

ジャティスは地面に用意していた煙玉を投げ付け、行方を晦ました。あの援護射撃が無ければグレンは死んでいた。

恐らくアルベルトの射撃だと思い感謝をする。いつの間にか『天使の塵』エンジェルダストによる感染者が消えていた。焼き払われた跡や貫かれた形跡はあるが、援軍によるものだとグレンとセラはホツとしていた。

「セラ……無事か？」

「グレン君……！ 無茶しないでよ！ 死んじゃうんじゃないかって思ったんだよ!!」

「……悪い」

セラが泣いてグレンの胸に泣きつくのを、グレンは優しく抱き締めて頭を撫でた。あの時、死ぬかもしれないなかった。確かアルベルトの担当地域は別だったのに、撃たれた「ライトニング・ピアス」は一体誰のモノだったのか、今は気にせずにセラが泣き止むまで抱き締めた。

「……これでいいんだよね……お母さん、お父さん」

黒魔「ライトニング・ピアス」や「ブレイズ・バースト」でグレン達を密かに援護していた黒いローブを被った女。少し血を吐き、マナ欠乏症に陥っているが、動けない程じゃない。ただ、今日の悲劇を回避する事が出来たなら、女にとってそれで良かったのだ。

「……私がこの世界に居なくても……2人が無事なら私は……」

ただポツリと呟いた小さな言葉は誰の耳にも届く事は無い。

バッドエンドの未来を変える為にやってきたのだ。例え自分が居なくても、それがあの2人の幸せを守るなら命をかけて惜しくはない。

「私は……2人の娘だから……絶対に、覆してみせる」

そんな決意を固めた女には『愚者のアルカナ』が握られていた。バッドエンドを乗り越える為に少女は過去の世界を動き出す。

第1章 未来への歯車は動き出す

第2話

そこはとても広い空間で、辺り一面は蠟燭を灯して地面を照らしていた隠れた工房だった。その空間の地面には夥しい数の魔方陣が血で描かれて、中心には時の女神の銅像が置かれている。

『本当にこれで大丈夫なの？』

『はい、私の魔術特性パワースタリティを時の女神と同調して、神と同じ権能を使えば、理論的には過去に戻れる筈です。ただ、どんな副作用があるかまでは分かりませんが』

ファイルは魔方陣に手を当てる。

こんな量の魔方陣を血で描くなんて酔狂な真似をする理由は簡単だった。こんなバッドエンドの世界を変える為に、過去へ移動する。その為に、自分の手が血に塗れる事になってもだ。

フィールが用意した魔晶石、数百万個を触媒にして、膨大な魔力を生み出し、最後に自分の魔術特性である『万象の逆転、逆流』をルミアの異能力で引き上げて貰えば可能な筈。

ただし、過去を変えろという事には必ず制約が存在する。本来辿るはずの運命を捻じ曲げるだけで、世界の在り方そのものが変わってしまうからだ。

『……そう。ねえフィールちゃん』

『ルミアさん？』

『私ね。貴方のお父さんに救われた事があってね。私が廃棄王女になった後に、救ってくれた人が貴方のお父さんなの』

『……ルミアさんはお父さんの事、どう想ってるんですか？』

『恋愛感情は無いよ。けど、一度あの人に救われた命だから、貴方に命をかけるのは惜しくないと思ってるね』

右手を虚空に向かって上げると、ルミアの右手には手より大きな『銀の鍵』が握られていた。それは数ある異能の行使権限を持つ鍵であり、『天の智慧研究会』が取り出す為にルミアを生かす理由でもある。

『フィールちゃん、これを持っていった』

『それって……ルミアさんの……』『天の智慧研究会』がどうしても引き出せなかった力ですよね？　これを私に……？』

『うん。フィールちゃんが転移に成功したら、私の異能は他の人を過去に導きかねないから。私は……』

『自殺……ですか？』

ルミアさんの異能は『感応増幅』では無いのは知っている。

もし、自分の存在がバレてしまえばルミアさんを利用して自分と同じ事をやっていただろう。数百万の魔晶石を『天の智慧研究会』から奪った自分とは違って、奴等は生贄すら容易に使って同じ事をする可能性があるからだ。

だが、ルミアさんの異能力が鍵である以上、ルミアが死ねばそれは絶対に起きない。連中がルミアさんを生かしているのは『銀の鍵』を取り出そうと躍起になっているからだ。

『……うん。でも、覚悟は出来てる。終わったら全部証拠を消して、死体も残らないよう

にこの工房ごと終わるつもりだよ』

『……あの連中からわざわざ私は貴女を攫ったんですよ？ 折角逃げられるかもしれないのに、それでもですか？』

そう、『天の智慧研究会』がルミアを保管している。

要するに実験動物か奴隷扱いだ。ルミアの中には耐えがたい苦痛も当然あつただろう。わざわざ慎重を期して、フィールはルミアを攫い、追っ手が来ないように発信器の魔導機は根こそぎ壊した。

自分が過去に行つた後は自由を得られるはずなのに、ルミアはそれでも死を選ぶ。

『うん。ただ、そのかわりに約束』

『？』

『こんな狂つた世界、必ず壊して。未来で生まれ変わった私が、笑つていられる世界をフィールちゃんに託すよ』

『……ルミアさん……』

フィールは鍵を受け取って、魔方陣に立つ。

ルミアが最後にフィールを抱き締めた後、ルミアはフィールに異能力『アルスマグナ王者の法』を発動した。

フィールは長文詠唱、20節はある詠唱を行い、自分の中で『原初の一』とリンクする。過去の世界に戻る為に『原初の一』から時の女神の権能を使用する。膨大な魔力が身体から流れ、権能を使用するまでに既に魔力が根こそぎ奪われていく。当然だ、世界で生きる人間が世界に背いた行為をするなど本来なら死罪ものだ。

けど、それでもフィールは過去へ繋がった。

『ルミアさん……行つてきます』

『うん。フィールちゃん、過去の私によろしくね』

最後にルミアが手を振ってフィールを送り出した事だけ覚えている。それが未来の最後の思い出だった。

「起きなさい！ フィール!!」

「うきゆ!？」

夢見が悪い少女は怒声で目を覚まして顔の上ののっけている教本を取って彼女に視線を向けて嘆息する。

「……………寝てた?」

「思いつきり寝てたわよ! 貴方この学校の生徒である事を自覚しているの!? だいた
い——」

ぐちぐちと説教を始める少女の名前はシステイナーナフィーベル。アルザーノ魔術学院の生徒であり、フィールと同じ教室で魔術を学ぶ学士である。丁度一年前にアルザーノ帝国魔術学院に入学した。

この世界ではフィールレダスでは無く、フィールウォルフオレンと言う偽名で通している。

ここはアルザーノ帝国魔術学院はアルザーノ帝国が魔導大国として名を轟かせる基盤を作った学校であり、常に最先端の魔術を学べる最高峰の学び舎で魔術師育成専門学校である。

彼等はここで魔術を学び、日々魔術の研鑽に励んでいるのだ。その一人がシステイーナである。

純銀を溶かし流したような銀髪のロングヘアと、やや吊り気味な翠玉色の瞳が特徴的な少女は黒髪のロングヘアでフィーベルに似た顔立ちの金色の瞳のフィールを叱っていた。

「ご、ごめんって……ちよつと所用があつて」

「寝る事の何処が所用なのよ!？」

「あ、あはは。てかまだ授業始まらないの? 非常勤講師まだ来てないの?！」

ヒューイ先生がいなくなつて1ヶ月経つた日に非常勤講師が来ることとなり、アルフォネア教授曰く優秀な人らしいのだが現在進行形で遅刻している。

魔術師は自分が魔術師であることに誇りを持っており、その誇りを汚さない為にも遅刻や無断欠席などありえないのだ。だからこそシステイーナは現在進行形で遅刻している講師に対して怒りが抑えられなかった。

「遅い! もうとつくに授業時間過ぎてるのに、来ないじゃない!!!」

システイーナは魔術師としての誇りだけでなく、今は亡きおじいさまとの約束を叶えるため魔術に対する熱意は人一倍なのである。まあその熱意が強すぎて講師達からは『講師泣かせのシステイーナ』と生徒達から呼ばれているのだ。

因みに学年主席はフィール、次席がシステイーナ、三席がギイブル君だ。まあ未来から来た存在なのだから、これくらい当然と言うべきだろう。

転入した理由はルミアが居るからだ。未来の世界ではルミアを中心に事件が起き続けていた。セラもここで働いていた以上、帝国宮廷魔導師団が絶対に特務分室から一人以上は寄こす筈だと睨んだフィールは主席合格で転入した。

「まあまあ落ち着こうよ、もしかしたら何か理由があるのかもしれないし……」

そしてそんな彼女を宥めるのが、彼女の隣に座る金髪の少女ルミアⅡティンジェルである。この子が未来で私を過去に飛ばすのに協力してくれた人だ。未来のルミアは後悔ばかりを浮かべて生かされて、いつも死にたいとばかり言っていたのだ。

元々の名はエルミアⅡイエルⅡケルⅡアルザーノ。アルザーノ帝国の現女王であるアリシア七世の子で第二王女だった。

しかし、魔術ならざる力を持つ『異能者』であることが3年前に発覚し、王家の威信を揺るがしかねない存在となつてしまい、表向きは流行病で急死したことにして王家から追放され、女王の根回しにより貴族の名家フィーベル家に預けられた。

そして、この世界でも彼女を中心に事件が巻き起こる。それは未来のルミアから全て聞かされていた。

「ルミアは甘すぎなのよ！ 真に優秀な人なら不測の事態にも対応できなきやダメなのよー！」

「そうかな……」

「いやいやそれは無理でしょ。落ち着いてシステイ、飴玉いる？」

「要らないわよ!？」

システイナがここまで恐ろしく高いハードルを求めるのには、前任のヒューイ先生がお気に入りだったことと、非常勤講師のことを大陸最高峰の魔術師であるセリカリアルフオネアが太鼓判を押したからだ。

システイナが文句を言っていると教室のドアが開き入ってきたのは全身ずぶ濡れで皺だらけのシャツ、目が死んでいる男性で左手に嵌めている手袋と抱えてる教本がな

「ければこの男が講師であるとは思ひもしないだろう。」

「——あつ」

フィールの眼から涙が流れそうになる。

今すぐ抱き締めたいと思った、話してみたいと思った。けど、グレンはフィールを知らない。フィールが一方的に知っているだけだ。ただ胸が痛かった。

「つつ……」

駄目だ。落ち着け。感情的になるなと自分に訴える。

全てはあの日に、願ったこと。檻を作り、閉じ籠り、仮面を作り、それを被った。
フィール・レーダス

私。ではきつと、この世界に立ち向かえないから。欺いて、影から支えて、あの2人を守る為に他人を演じようと決めた筈だ。

「やつと来たわね！ 非常勤講師。最初の授業から送れるなんて……どんな神経して

……」

「あれ……グレン君、遅刻したの!？」

「うん? あー、そういや一時限目だったか?」

システイーナは入ってきた男に驚き言葉を失う。なぜならその男は今朝ルミアにセクハラ紛いのことをした男だからだ。その隣に長く美しい銀髪と羽根の髪飾り、赤い紋様を顔料で刻み、教師服を着て入ってきた女の人。

グレンⅡレーダスにセラⅡシルヴァース、それがあの2人の名前であり、フィールがいた世界で夫婦であり、あの世界でフィールを産んだ2人だ。

「あ、貴方は——!？」

「違います、人違いです」

「そんな訳ないでしょ!？ 貴方みたいな人いてたまるもんですか!」

「いいえ、人違いですよ」

「グレン君、何したの?」

あくまで、他人のフリをする男にシステイーナは怒りを隠しきれていない。そしてそれを知ってか知らずか、男は黒板に自分の名前を書いた。名前はグレンⅡレーダスとや

る気のない汚い文字で。

「えー、本日の一限目の授業は自習にしまーす」

「ちよっ!? グレン君!？」

さも当然だと言わんばかりにグレンⅡレーダスが黒板に自習と書いた後。セラは当然止めようとするが、グレンは聞く耳を持たない。

「……………眠いから」

最後に睡眠宣言をしてから、教卓に突っ伏した。

「……………」

誰もしやべらない沈黙の数秒間

その数秒後に沈黙を破るかの様に叫びだした。

「ちよおおつと待てえええええ——ッ!!」

銀髪の耳のようなりボンでまるで猫のような憤慨の仕方をしながら、システイーナは分厚い教科書を振りかぶって猛然とグレンへ突進していった。

少しだけ、フィールはクスツと笑い押し込んだ感情を整えて自習を始めた。

セラⅡシルヴァース

元帝国宮廷魔導師団執行官N.O. 3 《女帝》に位置する人だ。グレンⅡリーダーダスは同じく特務分室執行官N.O. 0 《愚者》として働いていた人達だ。グレンが辞めた後、耐え切れなくなつて辞めるだろうとは思っていたが、セラと同時に辞めるとは予想外だった。

セラ先生は教え方にちよつとクセがあるけれど、授業は悪くない。教え方が少しだけ下手かもしれないが、クラスには歓迎されていた。

だが、グレンの場合は態度を改めることなく、次の錬金術実験で女子更衣室を覗き、集団リンチされたとか、その後セラに吹き飛ばされたとか……そして数日後システイーナ

とグレン先生は言い合っているのだが最早いつものことなのでルミアさんも止めることはしなくなっていた。

それから怒涛の三日間、自習が続き最早自習と黒板に書く前にだらけて寝ていた。流石に3日目は腹抱えて笑ったのをシステイに睨まれた。

システイーナが手袋をグレン先生に投げつけたのだ。左の手袋を相手に投げけることは魔術決闘の申し込みを意味し、その手袋を相手が拾えば決闘成立である。グレン先生はその手袋を拾い『シヨック・ボルト』のみでの決闘で勝負をつけようと提案したのだが。本人は3節詠唱しかできず、1節詠唱ができるシステイーナの相手ではない。

『お父さんの魔術特性はパーティナリテイ《変化の停滞・停止》のせいかな詠唱省略は相性が悪くてね、それ程魔術戦において使う事は無かったんだよ。その魔導機がお父さんの切り札なんだよ』

昔お母さんが言っていた。そのかわり、暗殺において右に出る者は居ないらしい。魔術で無くても魔術を封殺する固有魔術と魔銃ベネトレイターによる防衛無視は絶大な脅威をもたらしていた。未来で宮廷魔導師の資料を漁ったら案の定出ていた。

その決闘を見ていたがグレン先生の大敗だったようだ。そこからのグレン先生の評判の落ち方は少し苦笑を漏らす程だった。

いつも通り自習をやっていた時にリンがグレン先生にルーン語の翻訳を教えてくださいと頼んだのだが、そこでシステイーナが口をはさんだ。

「無駄よ、リン。その男には魔術の偉大さも崇高さも理解してないんだから、その男に教えてもらう事なんて何も無いわ」

いつもなら聞き流すようなことをグレン先生は噛みついたのである。

「魔術って、そんなに偉大で崇高なもんかね？」

この一言で教室が静まり返った。

ルーン語の翻訳に辞書をリンさんに差し出したグレン先生に、フィーベルさんが軽蔑した発言に対してのグレン先生の言葉である。

フィーベルが嬉々として魔術について語るがグレンはへつと笑い軽蔑したような目で見下ろす。

「——だから、魔術は偉大で崇高な物なのよ」

その言葉だけはフィールは同意出来なかった。

未来を狂わせたあの魔術が崇高なモノなら、あんな世界なんて生まれなかったはずだ。だが、それは口に出そうとする前にグレンがシステイーナに問う。

「……何の役に立つんだ？」

「え？」

「そもそも、魔術は人にどんな恩恵をもたらすんだ？ 何の役にも立っていないのは俺の気のせいかな？」

「……ひ、人の役に立つとか立たないとか、そんな次元の低い話ではないわ。もっと高次元な——」

「嘘だよ。魔術は役に立ってるよ——人殺しにな」

暗い顔となったグレンは、そのまま魔術の暗黒面をこれでもかと言わんばかりに語って行く。それはまるで自分が経験したかのように。

「剣術で一人殺す間に魔術は何十人も殺せ、魔導士の一個小隊は戦術で統率された一個師団を戦術ごと焼き尽くせる。ほら、便利だろ!？」

「ふざけないでッ!」

「ふざけちゃいねえさ。国の現状、決闘のルール、初等呪文の多くが攻性系、『魔導大戦』、『奉神戦争』、外道魔術師の凶悪な犯罪の件数と内容……魔術と人殺しは腐れ縁なんだよ。切つても切れない、な」

「違う……魔術は、そんな……」

「魔術は人を殺すことで進化・発展してきたロクでもない技術なんだよ! こんな下らない事に人生費やすくらいなら——」

ぱあん!

グレン先生の極論と言える発言は、システイーナにビンタされて止められた。システイーナは魔術を崇高なモノだと信じて疑わない。だから、魔術に対する侮辱が許せなかった。

「……………だいつきくらい!」

システイナは涙を溢しながらそう言い捨て、教室を飛び出していく。グレン先生も居心地の悪さからか、次いで教室を後にする。気まずい雰囲気は教室に漂う中……

「あの……おか……セラ先生、システイを追ってあげてください」

「う、うん。でもグレン君が……」

「私が追いますから……明日からちゃんと授業してくれるように」

ファイルはグレンの跡を追いかけた。

本当ならセラが行くべきなのは、ファイルが一番分かっている。けど、自分がグレンと話したかったのもあったので、システイをセラに任せ、彼の背中をこっさりついて行った。

「全く、ガキかよ俺は」

放課後、グレンは学院東館の屋上にいた。鉄柵にもたれ掛かりながら学院中を見渡す。それを歩きながら追いかけて、屋上に上がったフィールがただグレンの隣に近づく。

「で、お前は何のようだ黒猫？ 友達の意見に賛同だから俺を責めに来たか？」

「……そんな事しないですよ、ただの休憩です」

片手には皿を持ち、皿の上には三色お団子が3串分のもつていた。屋上で鉄柵に寄りかかりながら食べている。グレンは隣で、いまだに叩かれた頬を撫でている。さっきのピントは余程痛かったようだ。

「……その、食べます？」

「いいのか？ じゃあいただきます」

差し出した皿から一つを貰うグレン。

正直意外だった。システイーナ同様に責めると思っていたから。一応、黒猫ことフィール＝ウォルフオレンは学年主席のエリートだ。正直な話、魔術を崇高なモノと崇

めるあの生徒達と同じだと思ってた。

「何も言わないのか？ 俺が言った魔術の実態について」

「別に何もありませんよ。……まあ両者極論だとは思いますがね」

少し呆れた口調で言った。

そう、極論だ。魔術は崇高なモノ、魔術は人殺しの道具。どちらも極論だ。どちらも当てはまるし、どちらも否定は出来ないものだ。どちらもあるから魔術なのに、対照的過ぎる。

「……まあ、あの子達は魔術の闇を知らないで育ってきた人間だから、崇高なモノとしか考えてないだけで、人殺しの道具に使われてるのは否定出来ないですよ」
「じゃあ、お前は魔術はどういうモノだと思ってるんだ？」

とても嫌なモノだ。

未来の世界を狂わせるほど恐ろしいものだ。けど、自分は魔術師だから切っても切り離せないものだ。自分が思う魔術は……

「力……かな。使い方次第で人を傷付けるモノだし、使い方次第で人を助ける事が出来るモノだと思います」

「力……か」

「先生は……その、魔術は嫌いだけど、憎めないモノじゃないんですか？」

「……何でそう思った？」

「先生は魔術が好きだった。けどある日実態を知ってしまったって、魔術を崇高なモノと捉えきれなくなった……みたいな感じですよ？ 今の先生」

少なからずグレンは少し驚いていた。

大した関わりを持っていないのに、そこまで分かるフィールに何処か魔術師とは違う視点を感じていた。

「聡いんだな。黒猫」

「フィール＝ウォルフオレンですよ。グレン先生、だからそれしまってくださいよ」

グレンの懐には辞表があった。

グレンは自分が非常勤講師なんて一ヶ月も持たないと思つていたから、あらかじめ用意しておいたのだ。けど、フィールはグレンがちゃんと授業を教えてくれるつて信じてるから、教師を辞めさせないように促す。

「俺は魔術が嫌いだ。けどな、やつぱり切り離せないものなんだよ。それで救われた奴が居るなら、魔術は確かに崇高なものなんだろうな」

「そうですね。私は好きでしたよ。魔術」

「……………？ 何で過去形なんだ？」

「色々あつたんですよ。私にも……………あつ、ルミアだ」

「何？ どれどれ……………《彼方は此方へ・怜悯なる我が眼は・万里を見晴るかす》」

フィールに言われ、グレンは遠見の魔術、黒魔〔アキュレイト・スコープ〕を使い、西館の方を見る。そこにはルミアが教科書を見ながら、陣を書いていた。

「流転の五芒……………魔力円環陣か」

「……………水銀が足りてないですね」

「お前、この距離でよく見えるな」

「……眼はいい方ですからね」

「あ、下手くそだな……第七霊点が綻んでるぞ、ああ、水銀も流れちまつてるし、触媒の位置も……おっ、流石にそれには気づいたか」

グレンは実験室の様子を眺め、楽しそうに言う。

少しだけ無邪気に笑っている様子はまるで子供のようだった。

「まったく、見てらんねーな」

「行くんですか？」

「おう、付いてくるか？」

「はい」

「よっ、邪魔するぜ」

「お、お邪魔します」

グレンは実験室の扉を乱暴に開け、中に入る。

その後ろに着いてきたファイルがヒョコツと入り、その魔方陣の近くにあった棚から水銀を探し始める。

「ぐ、グレン先生!? それに、ファイルさんも!?!」

「実験室の個人使用は原則禁止だぞ」

「す、すみません。すぐ、片付けます」

「いや、最後までやっちゃまえよ。もう殆ど完成してんのに、崩すの勿体ねーだろ」

「で、でも、上手くいかなくて……………」

「これ、水銀が足りないだけだよ」

そう言うとファイルは棚から水銀の入った瓶を取り出し、陣に水銀を足していく。材

料が足りてないから断線が弱いのだ。材料をケチつたら偶にこうなるのだ。

「グレン先生」

「ああ」

グレンは手袋を嵌めると、水銀を卓越した指の動きで動かし、陣の綻びを修繕していく。手慣れた手付きだと言うのはルミアでさえ分かる。やっぱり、グレン先生は魔術が好きだった事が分かる。

「お前たちは目に見えないものに対しては異様に神経質になるくせに、目に見えるものに対しては疎かになる。魔術を神聖視し過ぎてる証拠だ………よし。もう一回起動してみる。教科書通り五節でな。省略すんなよ」

「は、はい！ ……《廻れ・廻れ・原初の命よ・理の円環にて・路を為せ》」

ルミアは丁寧に一説ずつ詠唱すると、鈴鳴りのような音を響かせ、陣が七つの色に光り輝く。それはまるで虹のように輝いて、とても綺麗だ。綺麗で儂くて、それは……

「うわああ……………綺麗ですね！ 先生！」

『うわあく、キレイだね！ お母さん！』

「……………」

陣をうつとりした様に見えるルミアに、グレンは、自分がセリカと共にやった時のことを思い出し、懐かしむように見ていた。対してフィールだけは胸に手を当て、胸に隠したロケットを握り締めていた。

「(つつ……………駄目っ、こんな感情を抱いちゃ……………!)」

気付かれないように感情を抑えようとするが、嫌にも思い出がフラツシユバツクする。思うように動けない。金縛りにあつたかのように喉元に突き刺さるような心の悲鳴がそうさせているようだ。

「……………」

「しっかし、いつ見ても綺麗に出来るもんだな……………つて黒猫？」

「……………」

「黒猫！」

「……………つ！ な、何ですか？」

「何ですかってお前、涙……………どうしたんだ？」

「……………えっ？」

気が付けば涙が流れていた。

駄目だ。涙脆くなって止まらない。我慢していたつもりなのに、思い出が蘇る。この世界に本当の意味でお母さんもお父さんも居ないのに。

『この方陣はね。お母さんとお父さんが好きだった魔術なんだよ』
『うわあ、キレイだね！ お母さん！』

最初に魔術を見せてくれたのは、この魔術だった。

七色に輝く光が少女を興奮させる。目を輝かせて無邪気に笑っていた。

『そうだね。とつても綺麗。フィールはさ、将来何になりたいかな?』

『お父さんみたいな魔術師になりたい! だつてお母さん、お父さんが好きだから、フィールがお父さんの代わりになつてお母さんを笑わせたい!』

そう言つた自分をお母さんは優しく抱き締めて泣いていたのを覚えていた。そんな思い出がある未来はもう失つた筈だ。フィール||レーダスはこの世界に存在しない筈だ。

それでも求めるのは傲慢な事だ。酷く独善的で浅ましくて、でも思い出に縋りたい自分が居る。けどそれは全て捨てたつもりだ。この世界を救うのに、2人の愛が欲しいと求めてはいけないと決めた筈だ。

だが、だがそれでも本能が求め、思い出が胸の痛みを加速させていた。駄目だ、これじゃあ何の為に過去に来たと思つている。

「お、おい黒猫! 何処か痛いのか!」

「い、いえ。すみません、今日は帰ります」

「あつ、おい！」

ファイルは泣いていた。声は震え、霞み、潤んでいた。まるで、何かに恐怖するかのよう。まるで、何かから逃げるように。まるで、行き場を失くした子供のよう。日にはそれはそれ程経つていない。話した時でさえほぼ初対面にも関わらず、グレンは心の何処かで追いかけないと思つたが、冷静になり追いかけようと伸ばした手が下がった。

一体どうしてこんな感情が湧き出たのかグレンにも理解が出来なかつた。

第3話

「グレン君、一緒に帰ろ！」

「はいはい、ちよつと待ってる。調べ物だ」

教員室のデスクで数枚の資料を漁っているグレン。教員室に置いてある砂糖を使ってコーヒーにたっぷり入れたものを飲みながら、資料を一枚一枚しっかり見ていた。

「わっ、グレン君が珍しく仕事してる!?! 明日は雨かな?」

「んな訳あるか!?! お座りして待ってる白犬!!」

「犬じゃないって言うてるでしよー!!」

ブンブンと怒り気味に反抗したセラの言葉を無視して、資料を読み続けている。セラが興味本位でその資料を覗いてみると、その全てがファイルⅡウォルフオレンに関するものだった。

「フィールちゃんの資料？ 何でまた」

「いんや、別に大した理由じゃないけどな。ただ……」

あの時、何故か涙を流して走り去っていた事に何かが引っかかっていた。別に大した事ではないし、何で泣いたかなんて聞くのは何処か気が引ける。資料では学年主席、提出されている魔術論文もグレンから見ても優秀の一言に尽きる。

だが、引っかかったのは、フィールとウォルフオレンには親が居ないと言う事だ。家のお金は遠い親戚から負担して貰っているらしい。クールで魔術師としての視点は宮廷魔導師団のソレに近い。

ただ、それ以外に何も無い事がグレンにとって少し不審に思った。

システイナーナやギイブル達は親が優秀なのもあり、魔術を使用するだけなら優秀だし、座学などの成績は上位に位置する。逆に親が居ないフィールにとって何も無いのにあれだけ優秀なのが引っかかる。まだ15歳の少女が親も居ない中で、これだけ優秀で、魔術師としての視野も広い。

普通に考えて何処かキナ臭い。

まるで、在り方が自分達に近いようで……

「フィールちゃんは悪い子じゃないよ？」

「まあ、確かにそう見えるけど……何かなあ」

「……ただ」

「？」

「あの子、何処か私やグレン君を避けてる様な気がするの。意識的にと言うか、私達を見ると少しだけ悲しく笑うの」

セラと目が合った時があつた。

その時のフィールの顔は何処か悲しい目をして、無理に笑っている様に見えた。会話をした時も、セラと目を合わせない。無意識と言うより、意図的なものを感じた。

「白か黒かで言えば？」

「白……だと思う。何かはあるけど、悪い子じゃないって思う」

他人と一線引いている様な感じがしてならない。

システイーナやルミアとは仲がいいように見えて、別に自分からあまり話たがらな

い。まあ、確実に何かはある事は否定しない。ただ、悪い子じゃないと言うのも同じく否定しないものだった。

グレンは教室に気急ぐ入りながら辺りを見渡す。フィールの席だけが空いていた。昨日の涙の意味はついぞ分からなかった。

「ルミア、フィールは休みか？」

「えっと、多分。待ち合わせ場所に居なかったのでお休みだと思えます」

「成る程、あと、白猫」

「……何ですか？」

「昨日は、すまんかった」

システイナは突如あのグレンが急に謝ってきて驚いていた。歯痒い感じにただ悪かったと反省している。

「まあ、その、なんだ………大事な物は人それぞれで言うか、俺は魔術は大嫌いだが、その………お前のことをどうこう言うのは筋が違うって言うか………やり過ぎたっつか、大人げねえっつか………結局、えっと、なんだ、あれだ………とにかく悪かった」

「……………はあ？」

システイはどういうつもりで謝ってきたのか分からず戸惑うグレンは謝り終えたつもりなのか、そのまま教卓へと向かい、教卓に立った瞬間、授業開始の鐘が鳴る。

「じゃ、授業を始める」

グレンの言葉にクラス全員がどよめいた。

どうせ、また寝るだけだろうと思っていたのに、ちゃんと授業開始と同時に授業を始めようとしているグレンに誰もが驚きを隠せなかった。

「さてと、これが呪文学の教科書………だったっけ？」

教科書を取り出すと、グレンはそれを――

「そおいー！」

事前に開けておいた窓から外へと投げた。

その行動に、生徒たちはいつものものかっと思し、溜息を吐いて自習をしようとする。そしてそれを見た生徒たちはいつもの奇行に自習の準備を始めたのだが、グレン先生が口を開いた。

「あく、授業を始める前に言っておくことがある」

と言い出したので聞いてみると、グレンは呆れた様な口調で笑いながら告げた。

「お前らつてほんと馬鹿だよな」

いきなり暴言を吐いてきたのである。勿論生徒からは反論を受けるのだが、グレン先生はそれを遮りありのまま考えている事を言う。

「この11日間、お前らの授業態度を見てて分かったよ。お前らつて魔術のこと、なんにもわかってねえんだな。分かっているなら呪文の共通語の翻訳の仕方なんて間抜けな質問する筈ないし、魔術式の書き取りをやるなんてアホなことする訳ないもんな」

そういうとギイブル君が煽るように呟く。

「【シヨック・ボルト】程度の1節詠唱もできない三流魔術師に言われたくないね」というが、グレン先生はどこか吹く風であり……そんな煽りを気にも留めずに続ける。

「それを言われると耳が痛い、俺は男に生まれながら魔術操作と略式詠唱のセンスが無くてね……だが、誰か知らんが【シヨック・ボルト】『程度』とか言ったか？ やっぱ馬鹿だわお前ら。ははは……自分で証明してやんの」

ひとしきり笑った後、グレン先生は【シヨック・ボルト】について話し始めた。

「まあ、いい。じゃ、今日はその件の【シヨック・ボルト】について話そうか。お前らのレベルなら、これでちょうどいいだろ」

「今さら、【シヨック・ボルト】なんて初等呪文を説明されても……」

「やれやれ、僕達は【シヨック・ボルト】なんてとつくの昔に極めているんですが？」

「はいはい、これが、黒魔【シヨック・ボルト】の呪文書です。ご覧下さい、なんか思春期の恥ずかしい詩みたいな文章や、数式や幾何学図形がルーン語でみっちり書いてありますねー、これ魔術式って言います」

生徒の言葉を無視しグレン先生は話している。

無視された事にイラツときたが、黙って聞いている。

「基本的な詠唱は《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ》……知つての通り魔力を操るセンスに長けた奴なら《雷精の紫電よ》の1節でも詠唱可能、じゃあ問題な」

問題だと言い、黒板に書いたのは《雷精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》と言った【シヨック・ボルト】の詠唱文を3節から4節に区切って書かれていた。

そしてグレンはクラス全員に問題を出した。

「3節の呪文が4節になると何が起こると思う?」

何分か待っていても誰も分からないのである。それに気づいたグレン先生はギイブルに指を指す。

「では如何にもガリ勉らしい眼鏡君、答えをどうぞ!」

「その呪文はまとも起動しませんよ、必ずなんらかの形で失敗しますね」

「んなこったあわかってんだよバーカ。必ずなんらかの形で失敗します、だってよ!」

「ぶぎやーははははっ!」

「な——」

「あのなあ、あえて完成された呪文を違えてんだから失敗するのは当たり前だろ!? 俺が聞いてるのは、その失敗がどういう形で現れるのかって話だよ?」

この術式は失敗前提のもの。

なんらかの形で失敗するのは当たり前だ。その形を聞いていたのだが、ギイブルがまさかの撃沈、しかもうざいくらい煽ってくるので生徒のウエンデイも負けじと返そうと

する。

「何が起きるかなんてわかるわけありませんわ！ 結果はランダムです！」

「ランダムう？ お前、本気で言ってるのか？ この術、究めたんじゃないのか？ 俺を笑い殺す気かよ？」

そう言つてグレンは大笑いをする。この時点でクラス中の苛立ちが最高潮に達していた。だが、なんらかの形が分からない。失敗することは分かるが、どう言つた失敗が現れるのか。

「何だあ？ 全滅か？ もういい答えは——」

「失礼します」

教室のドアが開くとそこには少し気怠げなフィールが入つて来た。少しだけ眠たいような顔をして欠伸をしている。フィールが寝坊する時は偶にしかないが、今回ばかりはかなり眠たそうに見えた。

「お前まさか寝坊か？ 優等生じゃなかったのかよ？」

「優等生でも偶に寝坊くらしいですよ。遅刻してすみません」

「ほうほう、じゃあ寝起きのお前に問題だ。まあ今、生徒全員が全滅してるけどな」

ファイルは黒板を見ると、「ショック・ボルト」の詠唱が3節から4節に区切られているのが見えた。クラス全員が分からなかったのは、授業で習うソレとは全く違うものだからだ。教科書通りにやっても教科書を超えられないのと同じ、言わば努力しても一定ライン以上に成長しない授業だったから分からなかったのだろう。

「簡単だ。「ショック・ボルト」の詠唱が3節から4節になった時、何が起きる？」

「右に曲がります」

「……へえ」

グレンは感心する。

ファイルが鞆を置く前に右手を出し、詠唱を開始する。単純に「ショック・ボルト」の詠唱を3節から4節に変えて魔術を起動する。

「《雷精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》」

フィールの右手から放たれた「ショック・ボルト」が直線に進み、右に曲がった。その事にあり得ないとばかりにギイブルとウエンデイが立ち上がり反論する。

「馬鹿な!？」

「あり得ませんわ!？」

「まあ欠陥のある「ショック・ボルト」だからね。効率のいい術式から敢えて外した術式を組むとこうなっちやうんだよ」

「じゃあ次、5節にすると?」

「射程が落ちます。一部を消すと出力が大幅に下がるし。これ実は「ショック・ボルト」のルーン語を理解してれば然程難しくはないんだよ?」

「何だやっぱ主席は伊達じゃねえって事か。まあ極めたって言うなら黒猫くらいにやらないとな」

チヨークを回しながらも笑みを浮かべるグレン。

フィールは鞆を持ち、その場で立ち止まったまま、グレンの魔術について聞いていた。

「魔術つてのは超高度な自己暗示だ。呪文を唱えるときに使うルーン語つてのは自己暗示を最も効率よく行える言語。人の深層意識を変革させ、世界の法則に結果として介入する。お前らは、魔術は『世界の真理を求める物』なんていうけどな、そりや間違いだ」

そう言い、グレンは自分の胸を叩く。

「魔術つてのは人の心を突き詰めるもんなんだよ」

その言葉に誰もが信じられないといった表情をする。

魔術は確かに真理を追い求める物、それは確かに間違つてはいない。魔術の原点には真実が宿ると言われている物だから、実際は間違つていないが、魔術師を名乗るならグレンの言葉が正しい。

「信じられないって顔だな。じゃあ、証拠を見せてやる。……………おい、白猫」

「し、白猫って私のこと?! 私にはシステイナーナって名前が——」

「愛してる。出会った時からお前に惚れていた」
「にやつ!？」

突然のグレンからの告白に、システイは顔を真っ赤にする。

きよとんとした顔になった黒猫が若干冷たい目で見ているが、グレンは気付かない。

「はい、ご覧の通り、白猫は顔を真っ赤にしました。見事、言葉が意識に何らかの影響を与えた。制御できる表層意識でもこの様だ。理性のきかない深層意識なんてうおっ!

あぶね! おい、教科書投げるな!」

「馬鹿はアンタよ! この馬鹿馬鹿馬鹿!」

「先生、乙女にそれは無いですよ。刺されますよセラ先生に」

「はあ?なんでセラに?」

「ハア……」

システイはグレンの嘘の告白により恥ずかしくなつて、持っていた教科書を投げた。あははとルミアが苦笑いしてフィールはため息をついた。

今更かもしれないが、セラとグレンは付き合っていない。フィールが居た未来では帝

国宮廷魔導師団だった時から既に結婚していた筈なのに。

なんらかの形で時間がズレたのか分からない。

だが、ズレた以上。この世界は時間が居た世界のようにフィールが産まれない。フィールがいる世界はグレンとセラが生きている並行世界の過去だ。

「まあ、とにかくだ。魔術にも文法や公式があるわけだ。深層意識を望む形に変革させるためのな。要は連想ゲームだ。白猫と聞けば、猫を思い浮かべる様に、誰もが連想するように呪文と術式の関係も同じだ。つまり、呪文と術式に関する魔術則……文法と公式の算出方法こそが魔術師にとっては最重要なわけだ」

魔術Ⅱ神聖の文字を消し、魔術Ⅱ人の心と書き記す。

魔術理論が理解出来なければ魔術は使えるだけで応用する事が出来ない。それが今までやっていった魔術とやらだ。

「なのに、お前らと来たら、この部分をすっ飛ばし、書き取りだの翻訳だの、覚えることばっか優先しやがって。教科書も『とにかく覚えろ』と言わんばかりの論調だしな。呪文や術式を分かりやすく翻訳して覚えやすくすること、これがお前らの受けてきた『分

かりやすい授業』であり、『お勉強』だったってわけだ。……もうね、アホかと」

そう言い、グレンは鼻で笑う。

今までの行動を全否定したが、生徒達は文句の一つも浮かばない。

「でだ、その問題の魔術文法と魔術公式だが、全部理解しようとしたところで、寿命が足らん。だから、お前らには基礎中の基礎、ド基礎を教える。これを知らなきゃより上位の文法を公式は理解不能だからな。これから俺が説明することが出来れば……そうだな、黒猫。お前なら出来るだろ？」

「ここで私に振るのやめて下さい。まあいいけど……」

手のひらを横に向け、詠唱を口にする。

単純に詠唱文が浮かばなかったので擬音でちよつと可愛げに、

「《バキュン》」

呪文改変による一節詠唱で「ショック・ボルト」を起動させるフィールに生徒達だけ

ではなくグレンも目を丸くした。

「マジか………1節の呪文改変で精度を落とすことがねえなんてな。天才っているもんだな」

「術式さえ理解出来ればこのくらいは出来ますよ。一説じゃなければ……うーん《痺れて・動きを・止めろ》」

3節で実践したフィールに全員が再び驚く。

術式改変とは言えあんな出鱈目な詠唱で起動するのが目の前で見ても信じられない。

「まあ、こんな感じだ。呪文改変に必要なキーワードさえ覚えればあの程度の改変は俺でも難しくない」

自分達に見えてないものがある。それに気付かされた事でここに来て生徒たちのグレン先生を見る目が変わり始めていた。

グレンはと言うとそれを知ってか知らずか、笑って授業を進める。

「今のお前たちは単に魔術が使えるだけの魔術使いだ。魔術師を名乗りたければ、自分に何が足らんのか考えろ。じゃ、そのド基礎を今から教えてやるよ。興味ない奴は寝てな」

その言葉に少しだけ、フィールが笑っていたような気がした。

フィールは昼休み、校舎裏に移動していた。

ダメ講師グレンの覚醒の噂を聞き付け授業を受ける者はその質の高さに驚愕し、ダメ講師の噂から一転し、人気者となった訳なのだが、グレンに出汁にされた主席としての実力の高さから、授業の間の休憩時間でさえ質問の嵐がフィールに襲い掛かった。

流石に昼休みくらいは静かに過ごしたいと思い、人気のない校舎裏で自作のサンドイッチを口に入れた。

「あつ、フィールちゃん！」

「……………つ、どうもセラ先生……………」

よりもよって1番会いたくない人に校舎裏で会ってしまった。今の時間は1人でいたかったのに、よりもよってここで会ってしまうとは我ながら詰めが甘かった。

「1人でご飯食べてるの？」

「教室や食堂だと質問の嵐なので……」

「そっかー、隣座るよ？」

「……すみません。1人で食べたいので別の場所に移動します」

本音を言っただけでフィールが立ち上がると、セラは手を掴んで止めた。その事に少し驚きながらセラを見ると笑顔でフィールを誘うように口にする。

「一緒に食べよっ！」

「……えっと、すみません。1人で」

「駄目……かな……」

「駄目って訳じゃ……わかりました」

少し悲しそうな眼に負けて、フィールは大人しく座ってサンドイッチを口に入れた。軽く本を読みながらサンドイッチを食べる姿は同年代から見たらクールなお嬢様に見える。月当たりもよく、性格も優しく、頭もいい。けど何処か抜けているような人柄にセラも興味を持っていた。

「フィールちゃん、それだけで足りるの？」

「お金を節約してるだけです。その、苦学生なので……」

実際はいつも気を張ってるせいか食欲が無いだけだ。

未来でかなり稼いだお金も無限ではない。あと5年間くらい働かなくてもいいくらいのお金は稼いだが、魔道具や、家の家賃、学費とかで色々何があるか分からないからだ。

「はい！」

「……セラ先生？」

「これあげる！ 女の子なんだから、ちゃんと食べないと大きくなれないよ？」

「いや、受け取れないです……先生のですよね？」

「私はいいの。はい、どうぞ」

「……すみません、いただきます」

セラの手作りのサンドイッチを食べる。

少々スパイスが効いているお肉とシャキシャキのレタスにトマトの酸味がとても美味しさを引き出している。

「美味しい……」

「えっへへー、ありがとう。実は隠し味にね」

「ヨーグルト……ですよね」

「えっ!? 凄い! 何で分かったの!?!」

「それは……」

いつも作ってくれていたから、懐かしい味だからだ。

肉を柔らかくする為にヨーグルトを使って柔らかくする隠し味、あの頃と変わらな
い。思わず涙が出そうになるが、セラの前で泣かないように水筒の中のお茶を飲んで誤
魔化した。

「……私も、隠し味にヨーグルト使った事ありますから」

「へえー、フィールちゃんつて一人暮らしなのに偉いね。料理も出来て勉強も出来て、学校でも主席だし」

「別に……偉くなんかありません。私は——」

2人を死なせてしまった世界から来た人間なのだから。

正体も明かせない、何も話す事が出来ない、ただ2人が幸せならどんな事もするし、手が血濡れたって構わない。

そんな『愚者』の体現者のような人間なのだから。

生徒達がすっかりと帰宅した放課後。グレンは一人学院の屋上で、閑散とした風景を見ていた。ふと、ここに非常勤講師としてやって来てからの日々を思い出す。

何故か妙になつてくる、子犬みたいなルミア。逆に、妙につつかかってくる、生意

気な子猫みたいなシステイーナ。そして、顔がチラついて離れない黒い猫のような
フィール。

未だに若く、そして幼い彼女たちは何をやっているのか、どう成長していくのか。少
なくとも手助けしてやりたいと思っっている自分がある。

相変わらず、魔術は嫌いだ。こんなもの早くこの世から無くなるべきだ。この考えも
これから変わらないだろう。

だが、こんなにも穏やかな日々なら――

「悪くない……か」

気がつかないうちにグレンは笑みを浮かべていた。

「おー、おー、夕日に向かって黄昏れちゃってまあ、青春しているね」

「……いつからいたんだよ？ セリカ」

そこには母親のようにグレンをニヤニヤとすまし顔で佇んでいたセリカが居た。ま
あ実際母親代わりなのだが。

「さ、いつからだろうな？ 先生からデキの悪い生徒に問題だ。当ててみな」
「アホか。魔力の波動もなければ、世界法則の変動もなかった。だったら、忍び足で来たに決まってる」

「おお、正解。あはは、こんな馬鹿馬鹿しいオチが皆、意外とわかんないんだな。特に世の中的神秘は全部魔術で説明できると信じきつちやつてるヤツに限ってね」

グレンの即答に、セリカは満足そうに微笑んだ。グレンは少しだけ真面目な表情をす
る。セリカには今朝、話していた。

「なあセリカ、フィールルウオルフォレンの事なんだけど」

「今朝言っていた生徒の事か？ 一応言われた通り調べたが、過去に事件や何かに属していたような情報は一切無かったぞ？」

「なのに【シヨック・ボルト】や魔術について完璧に理解していたのが、どうにも引つかかるんだよなあ」

「まあ……優秀な生徒だけど、他人と一線引いている。それについては同意する」

セリカも、それに同じ意見だった。

教授としての接し方ではなく、何処か悲しそうな顔で無理して笑っているように見える。セリカ自身に何がある訳ではなく、人間関係をあまり持たないようにも見えた。

「まあそうだな。あの子については魔術のセンスと才能が一線を画すからな。階梯で言えば間違いなく第五階梯^{クインティ}レベルだ。魔力容量が7500、魔力濃度が250と言ったか」

「マジで!? 一流魔術師でも3000と1500くらいなのに。アイツ、マジで天才なんだな……」

ただ、とセリカは付け足すように口にする。

「だが、潜在的魔力容量^{キャパシテイ}は既にならない。言ってしまうえば魔術師として完成され過ぎている状態だ」

「やっぱ何か引つかかる事だけで終わりかよ」

「だが、悪い奴ではないぞ? それは私が保証する」

「……まっ、一々疑いを持ってても面倒なだけか」

フィールⅡウオルフォレン。

謎に包まれている存在ではあるが、悪い人間には思えない。何かは隠しているが、それは他人に言えないデリケートな事かもしれない。宮廷魔導師団の【愚者】だった時にいつも他人を疑ってしまっていた為、今では悪い癖だ。

ただ……

「(じゃあ何で……あの時アイツは泣いてたんだ?)」

その疑問だけがグレンが気になっていた。

「遅い！ 遅すぎるわ！ 最近真面目にやっていると思ったら、すぐこれよ！」

1ヶ月前に退職した前任のヒューイ先生によつて授業に遅れがでている2組はこの5日間も授業がある。そして2組以外が休校にも関わらず、教室は満席であり後ろには立っている生徒さえいる。

その理由としてはグレン先生の授業を受けたいためである。だが授業が開始されて

いるにも関わらず、グレン先生どころかセラ先生も来る気配がなく。システイーナは少し怒っていた。

時計を見ながらシステイーナは怒っている。システイーナもグレン先生やセラ先生の授業を聞いて評価を改めているようだ。

「でも、珍しいよね。ここ最近遅刻しないように頑張っていたのに……」

「まさか、今日が休校だと勘違いしてるんじゃないでしょうね？」

「あはは……いくらなんでもそれはない……よね？」

システイーナを宥めるルミアは断言はできなかつたようだ。

ロクデナシが売りのグレン先生に否定が出来ない様子だ。

「あいつが来たらガツンと言ってやらないと……」

システイーナもなんだかんだ、グレン先生に好意らしきものを抱いてることがバレバレなのであるが本人は自覚していない為にルミアもどう返していいか分からない様子。フィールは応援しないし、我関せずと羽ペンを動かしていた。

そこから少し経った後教室の扉が開き、システイーナは説教しようとして席を立つが入ってきたのはチンピラ風の男とダークコートを着ている男でクラス内の全員が硬直しているのを見て、チンピラ風の男が口を開いた。

「おーおー皆さん勉強熱心なこと、応援してるぞ若人諸君！」

突然、現れた謎の二人組に教室全体がざわめき始めた。

フィールも謎の2人組に警戒し、袖に魔導具を隠し持った。

「ちよつと……………貴方達、一体、何者なんですか？」

正義感の強いシステイーナが席に立ち、二人の前まで歩み寄ると臆せず言い放つ。ただこの時ばかりは蛮勇もいい所だ。あの2人からは人殺しの気配がする。

「ここはアルザーノ帝国魔術学院です。部外者は立ち入り禁止ですよ？　そもそもどうやって学院に入ったんですか？」

「おいおい質問は一つずつにしてくれよ？　オレ、君達みたいに学がねーんだからさ！」

チンピラ風の男がそう答えるとシステイーナは苦い顔で沈黙した。ケラケラと笑いながら愉快に言葉を進めるチンピラ。

「まず、オレ達の正体ね。テロリストってやつかな？ 要は女王陛下サマにケンカ売る怖ーいお兄サン達ってワケ」

「は？」

「で、ココに入った方法。あの弱ちくくて可哀想な守衛サンをブツ殺して、あの厄介な結界をブツ壊して、そんざお邪魔させていたのだのさ？ どう？ オーケイ？」

「ふ、ふざけないで下さい！ 真面目に答えて!!」

クラス中のどよめきが強くなる。女王陛下に喧嘩を売ると言われた瞬間、ルミアの顔が強張った。狙いは恐らくルミアだ。フィールドの中に緊張が走りながらも、自分が奇襲する瞬間を待っていた。

「あまりにもふざけた態度を取るなら、こちらにも考えがありますよ？」

「え？ 何？ 何？ 何？ どんな考え？ 教えて教えて？」

「……………っ！ 貴方達を気絶させて、警備員に引き渡します！ それが嫌なら早くこの学院から出て行つて……………」

「きゃー、ボク達、捕まっちゃうの!? いやーん！」

「警告はしましたからね？」

魔力を練る。呼吸法と精神集中で、マナ・バイオリズムを制御する。

そして、指先を男に向け——黒魔【シヨック・ボルト】の呪文を唱えた。

「《雷精の——》」

「《ズドン》」

「っっ！ 《霧散せよ》！」

その言葉には悪手という単語が脳裏を過り、咄嗟に黒魔【ライトニング・ピアス】を【トライ・パニッシュ】で打ち消した。だが、頬に擦りかけたシステイナーナが腰を抜かす。

「【ライトニング・ピアス】!?!」

「全員動かないで!! 相手は本物のテロリスト! だからパニックにならないで動かな

いようにして!!」

怒号にも似た指示が生徒全員の緊張を走らせる。

システイーナの前に立ち、テロリスト達に手を向ける。奇襲しようとした矢先に、咄嗟とは言え「トライ・バニツシュ」で打ち消してしまった為、奇襲は出来ない。

「……へえ、凄え。この速度の詠唱を打ち消すなんて優秀優秀！ 君がフィールルウオルフォレンちゃんだね？」

「テロリスト、貴方達の目的は何……!?!」

「簡単だよ。俺達の要求はフィールルちゃんとルミアちゃんつて子を攫いに来ただけ」

「させる訳——!」

「動くな」

フィールルが魔術を使おうとする瞬間、レイクの忠告がフィールルの動きを止める。気が付けばいつの間にか詠唱が完了しているレイクの後ろには5本の浮遊する剣が浮かばれていた。フィールルは直感的に悟っていた。あの相手の強さは下手したらアルベルトさんを超える強さを持つ事に。

レイクと言う男は魔力容量キャパシティだけならフィールを超える。

「俺達の目的はフィールⅡウオルフォレン、ルミアⅡティンジェルの誘拐だ。幾らこの学園の主席である貴女でも、生徒を庇いながらは戦えまい」

「つつ……」

「両手を上げて此方に来て貰おうか」

為す術も無くただ指示通りにレイクに近づく。

手を上げたままのフィールに生徒達を護りながら戦う術は無い。1人ならまだしも2人とも手練れ。切り札を使えば片方は倒せても既に魔術を起動しているレイクには勝てない。

「がつつ……!?」

「手荒な真似をするつもりは無かったが、ジンの【ライトニング・ピアス】を打ち消せる程の力を持つ以上、貴女には眠っていたたく」

「フィール!!」

システイーナが叫ぶが既に気が遠い。

目的はルミアな以上、バッドエンドだったシナリオが始まったのを痛感しながらも、レイクに首筋に強めの手刀を下され、フィールの意識はここで途切れた。

第4話

「(ンン)……は……」

「フィールさん、大丈夫ですか!？」

目を覚ますと暗い空間だった。

首筋に残る痛みと両手両足を縄で縛られた後に「スペル・シール」で魔術起動が出来なくなっている。ルミアに関しては危害を加えられた様子は無い。

周りを見渡すと転移方陣の設定を弄り、膝をついている男が居た。それは前任者であつたヒューイ先生だ。

「ルミア……私どのくらい寝てた?」

「多分2時間くらい……良かった、フィールさんが無事で!」

涙を流しながらも安堵するルミア。

首筋の痛みから気絶させられてた事を認識し、状況を再認識する。この場所にヒュー

イ先生がいると言う事は……

「……貴方がスパイだったんですね」

「はい、残念ながらそうです」

「何を企んで私とルミアを攫おうとしたのかは知りませんが、この中途半端な法陣を見る限り、白魔儀【サクリファイス】——換魂の儀式。ロクでもないことを考えているのはわかります」

「おや、凄いですね。これだけでそこまで言い当てる生徒がいるとは思いませんでした。教育者として優秀な生徒ができて嬉しく思います」

換魂の儀式【サクリファイス】は自身を生贄として数十倍の魔力を一時的に引き上げる禁忌の魔術だ。大昔の戦争でそれを多用していた事もあったと言う話だ。更にそれに連動してフィール達の周りには五つの魔方陣で描かれた結界が張られてある。

「ヒューイ先生この魔方陣を解いてください。仮にも先生ですよね？」

「元、ですよ。フィールさん、今はテロリストをしています」

『『天の智慧研究会』……貴方がそうしたくてしてるんですか？』

「……はい」

「……狡い人、嘘が苦手ですね」

ファイルは征服の袖から自家製の魔導具のナイフを取り出した。教室で万が一の為に忍ばせておいたのだ。両手を縛られている縄を切り、「スペル・シール」にもナイフを突き刺す。すると「スペル・シール」は初めからなかったかのように消え去っていた。

「そのナイフ……まさか魔導具を忍ばせていたとは、ですがどうやって「スペル・シール」まで解除したんですか？」

「このナイフは私の魔術特性パワソナリテイを起源としてナイフに付与出来るものです。簡易的な魔術なら、対象が発動した起源を遡り、初めからなかった事に出来る魔導具ですよ」

ただし簡易的な魔術限定だ。4節以上の魔術による結界や、方陣にはこれは通用しない。『イヴ・カイズルの玉葉』の効果を薄めただけの劣化魔導具に過ぎないが……それでも縄や簡易的な魔術を破るには充分だ。

やる事は既に決まっている。この結界を破壊する。

「ルミア。全力で防御魔術展開しといて。この魔方陣を破壊する」

「それはさすがに無理ですよ。その魔方陣はいわば結界だ。物理的に破壊するとしても神殺しの術式を用いないことには話になりません」

「そう、普通じゃ無理。だから使うのは……」

幸い、結界にはヒューイ先生も入る事が出来ない。その為、今からやる魔術は邪魔されない。下手に詠唱を省略しなくていい。フィールは詠唱を開始する。

「《——我は神を斬獲せし者・我は始原の祖と終を知る者・其は摂理の円環へと帰還せよ》」

「その魔術は……!?!」

個人で使う魔術でも最高峰の力を誇り、詠唱出来るだけでも驚愕とされている。対象を問答無用で根源素オリジンに分解消滅させる究極アサルトスベルの攻性呪文。200年前の魔導大戦でセリカIIアルフォニアが生み出した神殺しの術式。

「《五素より成りし物は五素に・象と理を紡ぐ縁は解離すべし・いざ森羅の万象は須らく

此処に散滅せよ・遙かな虚無の果てに」

「それはアルフォネア教授しか使えない筈!？」

「——吹き飛ばす有象無象!!」

この世で使えるのはフィールを除いて2人のみだ。詠唱が終わり、右手を抑えながらその魔術は完成した。

「黒魔改「イクステインクシオン・レイ」!」

膨大なマナをかつ喰らいながら赤黒い魔術式を作り出したフィールはその魔術を行使した。その威力はすさまじく、一瞬で自分の視界が真っ白に変わる。転移塔の分厚い壁は崩れ去り、結界は跡形もなく消滅している。

「す、凄い……こんな魔術を使えるなんて」

「ハア……ハア……とは言え魔力半分は持ってかれるから燃費が悪いけどね……」

「……僕の負けですか。」

「……ええ、残念ながら」

フィールがヒューイの元へと近づく。

右手にナイフを持ちながら、ゆっくりと近づく。ルミアが止めようとするが、フィールは止まらない。

「……なんで私を攫おうとしたのか、聞いていいですか？」

『『天の智慧研究会』からは、貴女は『時渡り』に成功した存在だと聞かされているからです』

フィールの眉が上がった。

何処でそれがバレている。この世界に来てから誰にも話していない筈だ。どうしてそれを知っているのか知りたかったが、この人は恐らく何も知らないのだろう。

「私は……何を間違えてしまったのですかね？」

「……組織を抜け出せなかった事は同情します。宮廷魔導師も、戦う者も学ぶ者も全て未来の為に戦うんだ。貴方はそれをしなかった。だから覚悟してください」

「……好きにしてください。私は生徒のために組織を裏切ることができなかつた。です

が、この結末には満足しています。結果として学院の生徒達は無事だった。フィールさんとルミアさんにも酷いことしましたね。すいませんでした」

何だ。やっぱり優しい先生じゃないか。

『天の智慧研究会』なんか辞めて、先生としていればどれだけ幸せな世界があつたのか。だがそれはもう遅い。手遅れな所まで来てしまった。

「『テメエの不始末くらいテメエでカタつけろ』って、多分先生ならそう言つてた筈ですよ。だから、齒を食い縛ってください」

ナイフを持つ右手ではなく、何も持たない左手でヒューイ先生を殴り飛ばした。魔術も使わない拳で殴り飛ばしたとは言え、脳が揺れて動く事は出来ないようだ。

「ハア……ハア……つつ……!!」

「フィールさん!?!」

フィールの口から血が吐き出される。

この世界に来てからフィールは強力な魔術行使が出来ない。いや、使えはするが身体にダメージが負荷される。『時渡り』の代償と言うべきか、多少の寿命を代価にしたが、身体に関する回路がパスこの世界に来てからやはりポロポロになっている。そんな状態で強力な魔術を使用すれば当然こうなる。

「早く治療を……！」

「いや言ってる場合じゃない。こんな派手な魔術をこんな場所で使ったら、敵の援軍が……」

「イクステインクシオン・レイ」、200年前の魔導大戦でセリカⅡアルフォネアが生み出した神殺しの術式を再現する事が出来るだなんて」

階段から上がってきたのは仮面を被った髪の長い女性。だが声色からフィールはレイク以上の警戒をする。顔が見えない中で気持ちが悪いと思ったのは未来の世界以来だ。

「ますます興味が湧きますわ！ フィールⅡウォルフオレン」

「つつ……《雷槍よ》！」

「《霧散せよ》」

初手の「ライトニング・ピアス」を打ち消した。

実力は恐らくレイクと同等、もしくはそれ以上だ。そしてこの狭い空間で戦うのは不利。

「ルミア、掴まって！」

「は、はい！」

「《吠えよ炎獅子》!!」

黒魔「ブレイズ・バースト」を^{ダブルキャスト}二反響唱しながら放つフィール。まさか^{ダブルキャスト}二反響唱をしながら使うとは思わなかった仮面の女は光の障壁「フォース・シールド」でそれを防ぐ。

「まさか^{ダブルキャスト}二反響唱まで、興味が湧いて尽きませんわ！」

爆炎が消えると2人はいない。

ブチ破った壁から逃げたのだろう。風を纏い、連続起動する事で使える行動技術

【疾風脚^{シュトロム}】をルミアを抱えたまま使いこなししている。

昂る興奮の中、仮面の女は同じように【疾風脚^{シュトロム}】でフィール達を追いかけた。

ルミアを抱えたまま【疾風脚^{シュトロム}】で転移塔から逃げるフィール。幸いな事に、自動防衛のゴーレムは停止していて敵の気配もない。黒魔改【ストーム・グラスパー】で風を掌握して感知しているが、大した戦闘は行われていない。

「《出でよ赤き獣の王よ》！」

「……っ！ 《光の障壁よ》！」

追ってきた仮面の女が【ブレイズ・バースト】を放つが、フィールは【フォース・シールド】で防いでいた。フィールは追ってきた敵に罫魔術【フレア・クリフ】で炎の罫を仕掛けるが、躲された。

「……やっぱり追ってきたか」

「ええ、逃すつもりはありませんよ？」

「ルミア、下がって！」

「う、うん！」

仮面の女の脅力もそうだが、シユトロム「疾風脚」を使って追ってきた。間違いなく手練れだが、今のフィールには分が悪い。先程結界をブチ破る為に使用した「イクステインクション・レイ」で魔力は半分以下、最大の切り札の力は奥の手中の奥の手。外道魔術師に見せびらかせば、今後が危険だ。

「《極滅の雷神よ・世界を駆ける・彼方の果てへ》！」

軍用魔術B級の攻性呪文アサルトスベル「プラズマ・カノン」を放つが、仮面の女はそれを避けながら右手をこちらに向ける。あの速度の魔術を避けるとかどんな怪物だと内心舌打ちしながら、次の一手を考える。

「《走れ凍てつく氷狼よ》！」

「《紅蓮の炎壁よ》！」

黒魔【アイス・ブリザード】を唱える仮面の女に対して、フィールは【ファイア・ウォール】でそれを防ぐ。氷と炎の空気膨張により、辺りが煙に包まれる。フィールの纏っている【疾風脚】^{シュトロム}で煙を吹き飛ばす。

「（魔力殆ど残っていないのに……！　あと使える大技は2回くらい、それまでに決着をつけないと……！）」

「《おいでませ》―《嗚呼・おいでませ》―《おいでませ》―

その瞬間、仮面の女が呪文を唱え始める。

フィールの魔力は半分以下から【疾風脚】^{シュトロム}を連続起動させながら【プラズマ・カノン】などの燃費が悪い魔術だ。長期戦で此方に得はない。圧倒的に不利だ。

「《夜霊の呼び声に・応じませ》―《応じませ》―《応えませ》―

虚空に開かれる門。溢れ出る瘴気。門より現れる無数の人影達。むせ返るほどの死臭。フィールの周囲に、新手の使者達が凄まじい勢いで次々と召喚されていく。ルミア

は思わず気持ち悪さで吐きそうだ。

「コレまさか……冥界^{ゲヘナ}関連の魔術!? 貴女、まさか死霊^{ネクロマンサー}魔術師か!」

「彼の血が肉が・汝等慰みたもう・潤したもう」《いざ・いざ・召され》!」

その詠唱に応じて、四方八方からの腐肉の敵が津波のようにフィールに襲いかかる。その敵達をフィールは冷静に見つめながら、呪文を唱える。魔術はあと二回が打ち止め、故に速攻で決める。

「《風の巨人よ・我を大地に・その足を踏みしめろ》!」

「っ……!! 即興^{アドリブ}改変しましたか!」

フィールの改変魔術。黒魔改「ストーム・スタンプ」が腐肉の壁を風の断層で吹き飛ばし、仮面の女の体制が僅かに揺れる。その瞬間をフィールは見逃さない。

「《赤き暴龍よ・太陽の如き・己が大地を焦土と化せ》!」

軍用魔術B級の「ソル・リーネア」が周囲の敵全てを焼き払う。熱量は「ブレイズ・バースト」の倍はある中で、仮面の女が取る手段をフィールは読んでいた。

炎の嵐を突っ切って最後の魔力で「疾風脚」を最大にして仮面の女に向かって踏み込んだ。

「なっ……!!」

「流石にあの熱量、退避するのは読める!!」

「くっ……《出でよ赤き獣の——!!》」

「遅い!!」

仮面の女が唱えようとした筈の魔術が起動出来ない。

フィールが隠し持っていた切り札の一つ。左手には『愚者のアルカナ』が握られていた。

グレンの固有魔術オリジナルである「愚者の世界」は自分の魔術特性パーソナリティの『変化の停滞、停止』を一定効果領域内に使う事で魔術を封殺する事が出来る。

だが、フィールの魔術特性パーソナリティは『万象の逆転、逆流』である為、本来なら『愚者の世界』は使えない。だが、フィールは一定効果領域内に自分の魔術特性パーソナリティである『万象の逆転、逆

流』を使う事でそれを補っている。

時間と言うものは必ずしも前へ進むものだ。進む力は一定で世界は歪みを許さない以上、例外を除いてそれは絶対の法則だ。

フィールはその時間の流れを一部だけ掌握し、同等の力を逆流させる事で、時間が進む力と時間が戻る力を調和し、その空間に『停滞、停止』の起源を生み出す事が可能なのだ。

「あああああああ!!」

魔術が使えない仮面の女に防ぐ術は無い。

フィールは右手のナイフを「疾風脚」^{シュトロム}の加速を乗せて加速の女の心臓部に突き刺した。血が流れ、生々しい感覚に顔が歪む。

この世界に来てから殺しなど、久しぶりだと言うのに……

「魔術の封殺まで、何から何まで興味が湧いて仕方ありませんわ、フィール＝ウォルフオレン様!!」

「つつ!? 嘘でしょ……!?」

急所は外してないのに仮面の女は平気な顔をして立っている。咄嗟にナイフから手を離し、距離を取るフィール。だが今ので魔力は使い切り顔色が悪い。マナ欠乏症に陥っている。これ以上魔術は使えない。

まだ切り札はあるがアレは代価を支払って使う魔術だ。それに今使った後の反動が酷い為、マナ欠乏症の状態のフィールが使えば確実に死ぬ。

「くっ……不死身……いや、異能力……による再生!?!」

「さあ、さあ! 私をもっと楽しませてくださいませ!!」

「《——吠え狂え》!」

仮面の女の横から「ブレイズ・バースト」が放たれた。

仮面の女は油断していたのか、それを防げずに身体が焼き焦げる。だが、身体は焦げても再び再生する。

「おや、レイク様は失敗したようですか」

「つつ……! グレン先生、セラ先生!?!」

セラの黒魔改【スウィフト・ストリーム】で【ラピッド・ストリーム】を他者に向け、擬似的に【疾風脚】シュトルムを使える事で、グレン達は転移塔から離れていた2人に追いついた。

「よく耐えたな黒猫。お前が何でアレだけ戦えるのかは後で聞く」

「今は私達に任せて」

「つつ……」

涙が出そうになる。けど、それは後だ。

咄嗟に『愚者のアルカナ』をポケットに仕舞い、それでも戦闘体制を崩さない。仮面の女がつけている仮面が半壊している。その見えた眼は実験動物を見る様なおぞましい眼だ。

「元とは言え帝国宮廷魔導師団の《愚者》と《女帝》ですか。些か分が悪い様なので退かせていただきます」

「逃すか!!」

「《爆》!!」

黒魔「クイック・イグニッション」で最速の爆破がグレン達の前に襲うが、砂埃を払い敵を見るとそこには仮面の女は居なかった。

「……逃げられたか」

「そうみたいだね、でもテロリストは制圧したし、今は2人と、生徒達の方が先だね」

フィールルはマナ欠乏症、ルミアは精神的疲労で疲れ果てていた。この世界に来てから未来の敵となんの遜色も無い強さを誇る敵と戦ったのだ。フィールルはまだ15歳、本来ならまだ闇を見るのは早過ぎる年齢だ。

「2人とも怪我は無い？」

「私は大丈夫です。フィールルさんは……」

「マナ欠乏症だな？　まったく、世話の焼ける奴だな」

「ちよっ！　グレン君！　フィールルちゃん達が必死に耐えてたのにその言い方!!」

「わ、悪かったって！」

フィールは顔色が少し悪い中、2人の様子を見る。グレンに関しては全身に少し浅い切り傷、セラに関しては少し腕に切り傷があるが「ライフ・アップ」で回復しているのだろう。

「……セラ先生達は……大丈夫ですか？」

「俺はまあ少し傷を負ったが、白猫とセラに助けってもらったよ」

「私は大丈夫。生徒達も無事だよ」

「……良かった」

両方の意味で安堵した瞬間、自分の視界が遠のいていく。

この世界に来てからの初めての戦闘がまさか不死身の相手と誰が予想出来ただろうか。三人が声を掛けているようだがもう聞こえない。精神的疲労とマナ欠乏症による身体への負担でフィールの意識は再び途絶えた。

『お前はセラの才能を受け継いだんだな』

『お母さんの?』

『ああ、セラはな。風の魔術が上手いんだ。制御だけなら私以上にな』

『ホント!? セリカ叔母よりも!』

『ああ。フィールの髪はグレンと同じ黒髪なのに、母親似でセラにも似ている。ただ、そうやって目を輝かせてるのはグレンそっくりだ』

フィールが居た未来の数少ない大切な思い出。幼い頃にグレンを拾って母親の様にグレンを愛した彼女は、若かった頃のグレンの様にフィールの頭を優しく撫でる。

『お前の夢は何なんだ?』

『んー、正義の魔法使い! って前までは考えてた』

『前までは? どう言う事だ?』

『だって正義の味方ならみんな平等に守らなきゃいけないじゃん! 私はお母さんを守るんだもん!』

『……フツ、アハハハハ!!』

えっへん! と胸を張るフィールにセリカは思わず爆笑する。そう言う所が可愛いのだとばかり思い、頬をムニムニと弄りながら抱きしめる。爆笑されたフィールは頬を

餅のように膨らませ、そつぽを向く。

『むー、何がおかしかったの?』

『いやいや、良い夢だな。お前の夢は』

『セリカ同じさんはどんな夢なの?』

『私はな——』

知りたいたんだよ、自分が何者なのか。と小声で言った。フィールは首を傾げてセリカの頬を触る。優しく、まるで子供が悪戯するかの様に。それがセリカにはグレンの面影を少しだけ感じさせていた。

『セリカ叔母さんはセリカ叔母さんでしょ?』

『……そうだな』

『なら約束! セリカ叔母がどこの誰であっても!』

無邪気な笑顔でフィールは約束の言葉をセリカに伝えた。『永遠者』イモータルであるセリカに約束など誰かが見たら鼻で笑うだろう。

『私の前ではセリカ叔母さんでいる事!!』

フィールにとってセリカが誰であろうと関係ない。セリカはお父さんの母親なのだから、フィールにとって永遠にセリカ伯母さんなのだろう。その言葉を聞いたセリカが笑った。

『……そうだな、私はお前のセリカ叔母さんだ。約束するよフィール』

『うん！ セリカ叔母さん大好き!!』

『ハハハ！ 私も——お前が大好きだよ。フィール』

それが最後に交わした2人の会話だった。そして約束をした一週間後、セリカ叔母さんは『タウムの天文神殿』で行方不明になったとフィールの耳に聞かされていた。

「……………ハハハ……………」

「保健室だよフィールちゃん」

「セラ……先……つつ!?」

セラが持っていたロケットを瞬間的に奪い取る。よく見ると自分の胸の辺りにロケットが無い。中身が見られないように隠していたのに。身体に怪我がないか調べていたのだろう。上半身のシャツのボタンが取れている。

「中身……見たんですか?」

「う、ううん。見てないよ。ごめんね、大事な物だった?」

「……命の次くらいに大事な物です」

ロケットの中には二枚の写真がある。

1枚目は2人の結婚の時に撮られたお父さんとお母さんの写真、2枚目は私とセリカ叔母さんとお母さんの写真だ。この世界では絶対に手放せない物で、でも見られるわけにはいかない物だ。

「……マナ欠乏症で倒れたんですね」

「うん。もう少し寝てようね？ アレだけ激しい戦闘があったんだから」

「……グレン先生は？」

「とりあえず上からの指示で学園長室に居るよ」

「……ねえ、セラ先生」

ファイルは目を瞑りながらセラに質問する。

単純にこの世界でセラに自分から話しかけるのは初めてかもしれない。

「セラ先生はグレン先生の事、どう思ってるんですか？」

「ふえ!？」

「……相棒、と言うにはセラ先生はちよつと違いますよね」

「か、顔に出てる？」

「バツチリ出てますよ」

この世界でファイルは生まれない。

けれど、セラが生きている以上、グレンの事をどう想っているのか知りたかった。自分が生まれぬ時点で並行世界のセラにこんな質問しても意味などないのに。

「……グレン君はダメダメな人で、ロクデナシで、馬鹿な人なんだけど、それでも夢を諦めずに前に進む所が私は好き……かも……」

「あつ、グレン先生」

「ひよわ!!」

「……冗談ですよ」

「もおおおおおお！ フィールちゃん!!」

クスクスと笑いながらセラを揶揄うフィール。

例え並行世界のセラであっても、フィールには変わらず優しいお母さんだった頃と変わらない。そんな人だった。

「……失礼するぞ」

「あつ、セリカさん！」

「セリ……アルフォネア教授」

保健室のドアをノックして入ってきたのはセリカだった。腕を組みながらフィール

の様子を見つ少し安堵する。どうやら用事があるのはフィールのようだ。

「セラ、濟まないが席を外して貰えるか。この子と2人きりで話したい」

「それは構いませんけど……グレン君は？」

「アイツなら教室にいる。お前も行つてやれ」

「はい」

セラは子供のような返事を返し、グレンの居る教室へと早足で向かつて行つた。セリ力は指を鳴らすと保健室に防音の結界を張つた。万が一の盗聴を防ぐ為だが、詠唱無しに出来るとは流石の一言に尽きる。

「さて、フィールⅡウォルフオレンだったか？」

「……はい」

「お前の狙われる理由をヒューイが吐いた。お前は『時渡り』に成功したんだな？」

「……っ……その事をグレン先生達は？」

「話していない。単刀直入に聞こう。お前は何者だ？」

セリカが真剣な表情で聞いてきた。

誤魔化しきれない。この人は人類最高峰の階梯である第七階梯セブテンバの魔術師だ。フィールは観念したかのように、少し悲しい顔で制服を手に取り、ポケットに入れたままの物を取り出す。

フィールが出したのは『愚者のアルカナ』だ。この魔導機は生涯でグレンが一枚しか作成していなかった専用の魔導機だ。

「なっ、それは……!」

「これは私のお父さんの形見だと言われて、お母さんに渡された物です」

「なっ……それはグレンしか持っていない専用の魔導機だ! それを何故お前が!」

『時渡り』……と言えども分かりますか? 分からないなら、これを見てください」

フィールはロケットをセリカに渡す。

セリカはそのロケットを開くとそこには2つの写真が入れられていた。その事にセリカは酷く驚愕する。真実を知ってしまったのだ。その形見が誰のものであるのか。

「じゃあお前は……まさか……!」

「私は並行世界の10年後の未来から来ました」

『愚者のアルカナ』『時渡り』そしてフィール自身の容姿からセリカはフィールが何者なのか悟った。フィールは悲しい顔でセリカに本当の事を告げる。

「私の本当の名前はフィール＝リーダーダス。グレン先生とセラ先生の2人の子供です」

セリカは目を見開いて驚愕した。

—————

アルザーノ帝国魔術学院で起きたテロ事件は無事に解決した。

関わった組織の事もあり、社会的不安に対する影響も考慮して内密に処理され、破壊された教室も魔術実験の爆発ということで公式に発表された。

そして今回の事件の後、政府上層部は事件の要因となったルミアの素性をグレン、システイナ、フィールに打ち明かした。

「（しかし…ルミアがああ三年前病死したと言われていたエルミアナ王女だったとはな…）」

ルミアは三年前に病死したエルミアナ王女。

異能者であるルミアは政治的事情によって帝国王室から放逐され、三人は事情を知る側としてルミアの秘密を守る為に協力することを要請された。

「（はあ…この学院色々抱えてる奴ら多すぎるでしょうに…）」

ルミアだけではなく、フィールも何か隠している。それにセラが言うには神殺しの黒魔改「イクステインクシオン・レイ」まで使用したのだ。明らかに学生のレベルではない。だが、帝国宮廷魔導師団にフィールと言う名前の人間は存在していない。

「……まあセリカが聞きにいった。問題ねえか」

グレンは学院東館の屋上にいた。鉄柵にもたれ掛かりながら呟いていた。そう言えば、あの時三色のお団子をくれて、魔術について少しだけ語ったのはあの時だけだった。

「悪い奴じゃない……か」

それだけはグレンの中で他の人と共通するファイルの印象だった。

第2章 未来の愚者と過去の天使の逃避行

第5話

「フィールちゃん、いらつしやい！」

「その……お世話になります」

フィールは荷物を抱えてセラの家を訪れた。フィール自身、まだ反対していたのだが、セリカの正論に押し切られてしまいセラと一緒に住む事になった。

「その……荷物は何処に……」

「えっと左の部屋に纏めておいて！」

「……分かりました」

セリカ叔母さんめ、と心の中で少し恨むフィール。

本来ならあまり2人に関わらないように影から見守るのがフィールの心情だったが、

何がどうなったら、フィールがセラの家に住む事になったのか。時は1日を遡る。

『未来の……グレンとセラの娘……だと?』

『はい……この世界で私は生まれませんが、未来ではお母……セラ先生とグレン先生が『天使の塵』の任務でグレン先生だけが亡くなって、セラ先生が生き延びました』

未来の真実を告げると神妙な顔をするセリカ。

もし本当だとするなら時期が合わない。フィールが産まれた時はセラが生き延びた『天使の塵』エンジェルダストからそう時間がかからなかったなら、フィールを既に身籠っている筈だ。

『なら普通に考えるならセラはこの時期に身籠っている筈だ。2人は結婚どころか交際すらしていないんだぞ?』

『……その理由は分かりません。私がこの世界に来た影響なのか、私自身の未来がこの世界において並行世界なのかは私にも分かりません』

例えるなら水面に小石を投げ込めば水面が揺らぐように、フィールと言う存在がこの世界に来てしまったせいで、世界そのものに歪みが生じたのかもしれない。

『イクステインクシヨン・レイ』を教えたのは未来の私と言う事か。神殺しの術式を知らないと出来ない芸当だからな』

『はい……未来でセリカ叔母さん……セリカさんが少しだけ魔術を教えてくださいました時に神殺しの術式を説明してくれたんです』

セリカは再び目を見開いた。

その頃のフィールは5歳とちよつとな筈だ。なのに神殺しの術式を理解出来るなんてセリカですら驚愕ものだ。グレンには一から教え込んだが、フィールはただ説明を受けただけで『イクステインクシヨン・レイ』をマスターしたと言う事だ。

『でもその後、セリカさんは行方不明になって、そこから『天の智慧研究会』が本格的に動き始めたんです。その後、正体不明の超高度な術式でフェジテが滅んで……宮廷魔導師団も大きな損害を負いました』

『……………』

『それで最後に……お母さんも……『天の智慧研究会』に殺されて……私は……』
『もういい』

途切れ途切れの声になるフィール。

膝の上で握られた拳からは血が出ている。後悔する程の未来に何も出来なかった自分に決死の覚悟で未来から過去に飛んで来たのだろう。

セリカはフィールを優しく抱き締める。母親が子供を慰めるように優しくフィールを包み込んだ。

『セリカ……さん？』

『よく……頑張ったな。お前が誰とも一線を退いていたのは分かったよ。自分と関わっちゃいけないって思ったからなんだろう？』

『……私、未来で沢山の人を殺しました……帝国宮廷魔導師団の《愚者》として……数え切れないほどの人を殺したんです……！ だから、私はこんな優しい世界に関わっちゃいけないんだって……！』

この世界は眩し過ぎる。

未来が辛く重く、悲しい世界だったフィールにとって、あんな壊れたような世界から来た人間がこの世界に触れて仕舞えば壊れてしまうんじゃないかといつも一線を退いていた。

『そう言う所はグレンそつくりだ。抱え込まなくていい、セリカ伯母さん……だったか？ お前にとって、それが私の呼び方なんだろう？』

俯いたまま、コクリと頷く。

フィールにとって、セリカもセラもこの世界で変わらない存在だった。子供の頃と全く変わらない。

『よく話してくれたフィール。私はお前の味方だよ』

駄目だ。こんな事理解したくない。こんな世界は私がいるべきでは無い。自分が居るならせめて他人の幸せを願う為にしか動けない《愚者》になると決めていた筈なのに、理解しなくなかったソレを、しかし、どうしても自覚せざるを得なかったソレを、混沌状態にあった思考回路が結論を出して、自覚してしまった。

力が抜けていく。表情が歪み、少女の気持ちが溢れ出す。

『っ……うっ……』

——涙が、零れ落ちていく。

この世界に依存したい自分と、昔のままで在り続けなければいけない自分。相反する想いが交錯し、行動に矛盾を起こし、涙を零しそうにさせて。硝子の心に罅が入る。罅など入れてはいいけない、この世界で自分は赤の他人でなくてはならない。でもそれが何処か辛くて、悲しくて、抑え切れない気持ちが溢れ出す。

『ごめん……なさい……ごめん……なさい……』

『フィール……』

フィールはただ強くあり続けなければならない。そうやって自分に言い聞かせて、仮面を被って、逃げて、目を覆って、眩しい世界から自分を遠ざけていた。闇が刺すなら闇を喰らってでもあの光を失わないと誓った筈だ。それなのに……

『私……やつぱり……寂しいよ……独りは辛くて……悲しくて……』

『……フィール……お前……』

『でも……託してくれた人が……居るのに……私なんかが幸せになっちゃ……いけないって……』

人殺し、ただ正義の味方を張り続ける偽善者。《愚者》の体現者に幸せなど、呪いの枷でしかない。ただその幸せが何処か羨ましくて、求めて、そんな邪な心が毒のように蝕んで、抑えていた気持ちが決壊する。子供のように泣きじやくって本音をポロポロと零す。

『大丈夫……もう、お前は独りなんかじゃないからな』

セリカはフィールを抱き締める力を強くする。

それは痛くなくて、暖かさ^{フィール}と温もりを感じさせる。フィールはこの時だけ、^{フィール}面を外し、年相応の私として泣き続けていた。

『……すみませんでした』

『謝らなくていい。年相応のお前が見れて何処か安心しているよ』

『あ、アレは忘れてください！』

『はっはっは、どうだかな？』

頬を赤らめて叫ぶフィールにセリカは笑う。

やっと少しだけ、フィールの本当の姿が見れた気がする。セリカは少し安心する。

『しかし、どうするんだお前は？』

『別にやる事は変わりません。ただ『天の智慧研究会』からルミアさんを守って、あの2人も守りきる為に動く。その内、帝国宮廷魔導師団に入るのでやる事は変わりません』
『そうじゃない。グレンとセラについてだよ』

『あの2人には明かせません……だって、産まれてもいないのに2人の娘ですなんて……それに、私の未来とこの世界は並行世界の可能性があるのです』

『まあ、そうだな』

未だ付き合ってすらいない2人に私は2人の娘です。なんて言ったら普通に信じられない、と言われて疑いを持つ。けど、2人は狙われる理由が分からない。説明するにしても、『時渡り』からもしかしたら正体がバレるかもしれない。

『ちよつとついて来てくれ』

『はい……?』

保健室から出てセリカについていくフィール。

一体何処に向かっているのかと尋ねるが、すぐ着くと言われ黙って着いていく事になった。着いたのは教室で、フィールは困惑した。

『グレン、セラ、ちよつといいか?』

『あつ? セリカに……ああ成る程、分かった』

『ごめんね。ちよつとだけこの公式の復習しといて』

グレンとセラが教室から出た。

セリカの後ろにフィールは立っているが、セリカが2人を呼んだ事で少し嫌な緊張し

ている。

『セリカ、どうだったんだ？』

『フィールについては白だ。私が保証する。狙われる理由だが、フィールの魔術特性を知られたからだろう』

『魔術特性が？』

『フィールの魔術特性は『万象の逆転、逆流』だ。ありとあらゆる物事をフィールは全て遡る力を持っている』

『!?!』

『この力を使えば解明されていなかった古代の叡智、下手したら魔術の根源素オリジンの始まりすら知る事が可能だろう』

セリカは敢えて使い方を古代叡智の解析の力と話した。間違つてはいない。古代の叡智を解析する事は原典クラスまで遡る事が可能だ。やった事は無いけど、魔術の規則性を逆転し、遡ると言う事に関してはフィールは誰よりも長けている。

『まあフィールも『天の智慧研究会』に狙われる事に変わりはない。だからセラ、済まな

いがフィールを引き取ってくれないか？』

『えっ？』

『ちよっ!!? セリ……アルフォネア教授!!?』

フィールでさえ初耳で動揺する。

セラやグレンから遠ざかる方がいいフィールにとって、その案だけは飲み込めないものだった。

『まあ詰まる所、護衛と監視だ。何せコイツには親が居ない。だから1人じゃ危険と言うのもあるしな』

『別に私1人でも問題無いです!』

『仮に生徒を人質に取られたら戦えないだろうが。今回それで気絶させられたと聞かされたぞ』

『ぐぬっ……』

『私は構いませんけど、フィールちゃんは……?』

『私は反対です。セラ先生を危険な目に合わせるかもしれないのに』

『馬鹿者、子供が見栄を張るな。こう言う時は大人に頼る事を少しは覚えろ』

ペシツと頭を叩かれた。

フィールルはグレンみたいに抱え込む癖があるせいで、フィールルレーダス本音を押し殺して

フィールルウォルフオレン偽りを演じる事に躊躇しない。それは良くも悪くもフィールル自身が人間として壊れているのもある。壊れた心はセリカでは治せる事に限界がある。だからセラの家に預かって貰うのだ。

『フィールルちゃん！ 一緒に住もう！』

『でも……迷惑なんじゃ……』

『気にしない！ フィールルちゃんはまだ子供なんだから!!』

両手を取り勢いがあるような返答をされ、フィールルは俯いたままその言葉が胸に刺さる。並行世界であろうと、未来にいた本当の母と重なったからだ。

『フィールルちゃん……いい？』

『……はい』

ただ、俯いたまま力無く首を縦に振った。

アルザーノ帝国魔術学院のテロ事件が来て数日が経ったある日。システイーナたち二年次生二組の教室では一週間後に控えた魔術競技祭への参加メンバーを決めていた。

「『飛行競争』の種目に出たい人ー？」

黒板の前の壇上に立っているシステイーナがクラス全員に呼びかけるが教室内は葬式のように静まり返ってしまっている。

「『変身』の種目に出たい人はー？」

システイーナは順番に種目を聞いていくがこれもまた無反応。このままでは誰が種目に出るか決めるのに一週間かかってしまう。

「困ったわね……来週にはもう競技祭なのにこれじゃあ全然決まらないわ……」
「ねえ、みんな？　せっかくグレン先生が『自由にして良い』って言うってくれたんだし思
い切つてみんなで頑張つてみようよ！　ほら、去年出られなかった人も出られる機会な
んだよ？」

ルミアはみんなに対して呼びかけるが誰も反応を示さない。フィールは魔術論文に
夢中で見向きもしない。

「ん……、もう決まったの？」

「フィール、アンタもさっさと決めなさい！」

『『殲滅戦』で』

「うわ即答……」

カツシュが呟くが即答過ぎて笑えてしまう。

こうスパツと決められるのは才能か自信か羨ましい限りだ。

「無駄だよ、二人とも。例年通り他のクラスは成績上位者達で全種目を固めてるんだ。

最初から負ける戦いをしたくないのさ」

「でも、せっかくの機会なのよ？」

「おまけに、今回の魔術競技祭にはあの女王陛下がここまでお越しになられるんだ。みんな、陛下の前では恥を晒したくないんだよ」

ギイブルの口は悪いが今のクラスメイト達の心情を的確に突いておりクラスメイト達の視線はさらに下がる。

「それよりも、早く全競技を君や僕、フィールⅡウオルフォレンみたいな成績上位者達で固めるべきだ。そんなんじや、ハーレイ先生率いる一組には絶対に勝てないよ？」

「勝ち負けが全てじゃないでしょ?!」

「いいや、全てさ。魔術の技比べが滅多にできないこの学院において、誰が優秀か明白にできる数少ない機会が魔術競技祭なんだ。それに、当日は魔導官僚や帝国軍からの来賓がいらっしゃる、その絶好のアピールの機会を僕ら成績上位者が多く貰えるのは当然の権利だと思うだろ？」

「貴方……それ本気で言ってる……？」

システイーナは怒りを露わにしながらギイブルを睨みつける。しかし、ギイブルはそれを無視して弁論を続ける。

「それに、今回の優勝クラスには女王陛下から直々に勲章を賜る栄誉が与えられるんだ、これがどれほどの価値か君も分かるだろう？ だからこのクラスのためにも成績上位者達で固めるんだ！」

「ギイブル……そろそろいい加減に……！」

システイーナの我慢も限界だった。今この瞬間の空気が最悪になろうともギイブルに物を申したいと怒声を上げようとした時、廊下から駆け足のような音が迫って来たと思った瞬間、ばぁん！ と教室の扉が勢いよく開かれた。

「話は聞いたぞ！ このグレン＝レーダス大先生にここは任せろ！」

クラスの皆が目を向けると、人差し指を前に突き出し、不自然なほど胸をそらして、全身を捻り、流し目で見得を切るという謎めいたポーズをしたグレンがいた。

「……………ややこしいのが来た」

呆然とするクラスメイトの中でシステイーナは頭を抱えた。

「喧嘩は止めるんだ、お前達。争いは何も生まない。それに——」

きらきら輝くような爽やかな笑みを浮かべて続ける。

「俺達は優勝という目標を目指して共に戦う仲間じゃないか」

「グレン先生、失礼かもしれませんがキモいですよ」

クラス全員を代表するようにフィールが言った。

即興改変した盗聴魔術で盗み聞きしていたのだが、フィールはうわあと苦虫を噛み潰したような顔でグレン先生を見ていた。

「おい黒猫、キモいとはなんだキモいとは、減点するぞ」

「ギャンブルでスツタから特別褒賞狙いで来たんでしょ？」

「……何で知ってるの？」

「さつき学長室から轟音がしたから聴覚強化の魔術で聴いてました」

「何という才能の無駄遣い！」

名付けるなら【ポイント・ヒア】って所かな？

いよいよグレン先生も苦笑とバレた事でクラス一同からの冷たい目が突き刺さる。
オーバーキルもいい所だ。

「えっと……フィールは殲滅戦か」

「殲滅戦も得意ではありますし」

「じゃあ決勝戦だな」

「鬼ですか」

話聞いてなかったのかこの人？

まあ構わないけど……、実を言えば殲滅戦は午前で終わるから後が楽だし、午前で全部終わらせたなら午後は自由に少しだけ祭りを楽しもうと言う事だった。まあ決勝戦でもどの競技でも問題はないのだけれど。

「まあ嘘だ。殲滅戦はお前以外に向いてないし」

「じゃあそれで」

「黒猫が一番オールマイティだったから決めるの時間かかりそうだったが、案外簡単に決まったな。まず一番配点の高い『決闘戦』は白猫、ギイブル、そしてカツシュだ」

競技祭の『決闘戦』は三体三の団体戦で実際の魔術戦を行う。目玉競技であり、各クラス最強の三人を選出するのが定石だ。成績順で選ぶならばフィール、システイーナ、ギイブルだ。しかし、指名されたのはカツシュであり、カツシュ自身もこの人選に戸惑っている。

「んで次は……『暗号早解き』はウエンデイしかないな。『飛行競争』は……ロッドとカイで。『精神防御』はルミアしかありえねえな。えつと、それから……」

次々とメンバーが発表されていく。そして、この人選には使いまわされてる生徒は一人もおらず、グレンはクラス全員を出場させるつもりだと気づく。グレンの意図が読めずにクラス全員は困惑している。

『変身』は、リン頼む。あとは……」

ズバズバと決めていくグレン先生。フィールは変身についてはリンが少し自信がないから後で教典を貸そうと考えていた。リンの変身能力はクラスでは上位に入るし。

「よし、その枠以外はとりあえず出場枠は全部埋まったな！ 何か質問あるか？」

「納得いたしませんわ！ フィールさんが居ないなら何で私は『決闘戦』の選抜から漏れていますの?!」

「あー、それなんだがな？ お前、確かに呪文の数も魔術知識とかも凄えけど、ちよつとドジだからなあ。たまに呪文囁むし」

「なっ……!?!」

「だから、使える呪文は少なえけど運動能力と状況判断の良いカツシユの方がお前よりも強いと判断した。気を悪くしたならすまん、けどお前の『リード・ランゲージ』の腕前なら『暗号早解き』はお前の独壇場だろ？ ここは任せたぞ」

「そ、そういうことでしたら……仕方ありませんわね……!」

まあ、ウエンデイは鈍臭いところがあるから仕方ない。

【シヨックボルト】や術式が少なくとも勤がいいカツシユの方が実践的ではある。カツシユについては後で少し戦い方を教えておこう。

「……いい加減にしてくれませんかね？ 先生」

ギイブルは苛立ちを隠さず、そのまま成績上位者での編成を吐き捨てるように進言する。まあ確かに余裕があるフィールやシステイーナ、ギイブルは何回か使い回した方がいいだろう。

それを聞いたグレンは編成を考え直そうとしたが――

「ちよつと！ 折角先生が考えてくれた編成にケチを付ける気!？」

「(ちよ――)」

「皆が活躍できるよう、先生がここまで考えてくれたのに、いつまで情けない理由で尻込みするの!？」

「(頼むから余計なこと……)」

「先生はこのクラスを優勝に導いてやるって言ってくれたわ！ 戦う理由はアレだけど

それは皆でやるからこそ意味があるのよ! ——ですよね!?

「お、おう……」

「た、確かに……」

「ああ……システイーナの言うとおりだ……」

「やれやれ、好きにすればいいさ」

システイーナの反抗と純粋な想いと朗らかな笑顔によつて、全員参加の編成に決定した。噛み合わない事を途中から気づいたファイルは若干苦笑いしていた。

その後……

「給料三ヶ月分だ! 俺のクラスが優勝するのに給料三ヶ月分を賭ける!」

「貴様……正気か?! ええいならば私も給料三ヶ月分だ!!」

「(もうなるようになればいいや……)このお馬鹿さん達」

フィールはため息をついて下らない争いの賭け事に付き合わされる事となる。未来でも偶にロクデナシと聞かされていたが、まさかこれ程とはと少しだけ呆れていた。

昼休み、シロツテの枝を口に含みながらベンチで黄昏ているグレンにフィールは苦笑しながらも、近づいていく。

「グレン先生」

「あつ？ どうした黒猫」

フィールはバスケットを一つグレンに渡す。

その中に入っていたのはお手製のサンドイッチだ。グレンは震える手でフィールから渡されたバスケットを手を持つ。グレンはバスケットを爆弾物を扱うかの様に慎重にベンチに置き、膝を降り頭を地面へとつける。土下座である。

「この前のお礼と、純粹に感謝の気持ちです。セラ先生も作ったので良かったらどうぞ」
「ありがとうございます女神様！」

「お礼はセラ先生にも言ってくださいね」

これくらいなら構わないよね。

ほんの少しの関わるくらいなら、未来を変える為にここに来た以上、思い出は些細な物でいい。私はそれだけで充分なのだから。

この後、セラ先生が来たのを見計らってフィールは退散し、セラ先生がグレン先生の所に来て一緒にご飯を食べている所を屋上から眺めながら、フィールはサンドイッチを口にしました。

第6話

ちやぷん。と水滴が湯面に落ちて小さな音を立てる。

入浴剤が入られた湯は乳白色で、何処か落ち着く香りを放っている。冷たい雨に濡れた体に、暖かいお湯の熱がジンわりとしみこんでいき、筋肉がほぐれていく。

「……………はあ……………」

力無くため息を吐き、チャポーンと言う湯の音が身体から力を奪っていく。フィールはセラの家に住んでから5日が経った。セラは相変わらず笑顔で、楽しそうな顔で先生をしている。その姿にフィールは少し笑っているが、心から笑う事が出来ない。心から笑う事を忘れてしまったかのように。

「……………この世界に来てから……………私も甘くなつたかなあ……………」

感情を押し殺し、フィールウオルフォレンと言う偽りの存在を演じる。それが基本だったのに、感情が表に出てしまう。この世界は限りなく優しく、蜂蜜のように甘い世界だ。フィールが居た未来に無かった世界に染まりそうで、でもそんな事許されないと
思う事は変わらない。罪過を背負った事を一度たりとも忘れた事はない。

ただ、偽り続けるのも疲れてきた。馬鹿みたいに騒いで、はしゃいで、笑っていられる世界にただ演じているのが馬鹿らしく思ってしまうくらい。そう考えていると風呂場のドアが開く。

「フィールちゃん♪」

「なっ!? セラ先生、私、先にお風呂をいただきますって言いましたよね!」

「一緒に入りたかったし、別に女の子同士なんだから構わないでしょ?」

「私が気にします!!」

普通に裸で風呂場に突入するセラにどうにもセラの前で冷静になり切れないフィール。単純にセラの行動が唐突だったり読めなかったりすることもあって、気を張ってもボロが出る。セラは気にせず、フィールの隣の湯煎に浸かる。

「はあああああ、生き返るうううう」

「……すみません。私が来たばかりに、セラ先生に負担かけてしまって……」

「謝らないの。それにフィールちゃんに来てから楽しいから、私は気にしてないよ。フィールちゃんが狙われる理由もあるんだし、こう言うのは大人の私の役目だし」

「……セラ先生」

「それ！」

「？」

「せめてこの家では先生禁止！」

首を傾げるフィールにビシツと指を刺すセラ。

単純に先生だと距離感があったのだろう。フィールは困惑していた。仮にも家主だから、従者的な立場を考える。

「えええ……じゃあセラ様？」

「様も禁止！」

「……じゃあセラさんで……」

弱々しく呟くフィール。

それが一番いいのだ。この世界ではフィールⅡウォルフオレンなのだから。目の前に居るセラが同一人物であっても、未来にいた世界とは違うセラⅡシルヴァースだ。フィールが産まれない世界、この人は別人だ。分かっているつもりだ。

「フィールちゃんって不思議だよねえ〜」

「……何がですか？」

「何というか……子供っぽくなくて大人びているからさ〜」

まあ、確かにフィールは年相応の精神じゃない。

子供っぽくなく、大人びている。だが、フィールにとって生きる事さえ必死だった世界で宮廷魔導師団まで入って立ち向かっていたのだ。逆に言えば、年相応の生き方を知らないとも言える。

「もう少し、肩の力を抜いて子供っぽく遊んでもいいんだよ〜」

「別に……そんな暇ありません」

未来のルミアさんから聞かされた話はある程度の事は知っているが、詳細を詳しく知っている訳ではない。唯一分かるのは、この魔術競技祭で女王陛下の暗殺を企んでい
る人間がいると言う事。気は抜けない。

「フィールちゃんは親が居ないんでしょう？ 私が今は保護者みたいなものだからさあ。
フィールちゃんにも楽しんでほしいんだよね」

「保護者じゃなくて監視役でしょう」

ただの気遣いが今は苛立ちを感じる。

楽しめ、と先を知っている人間に聞かされれば、お気楽もいい所だ。自分は楽しむ為
にこの世界に来たんじゃない。最悪な未来を阻止する為に来たのだ。それだけが、この
世界に来た意味なのだから。

「別に……私に家族なんて要りません。いつも独りで生きてきたんですから」

「えええ……それじゃあ悲しいよ。お母さんって呼んでもいいんだよ？」

「つつ!! いい加減にしてください!」

冗談でセラが言った言葉に激昂するフィール。

フィールがそれを認めてしまえば、未来に居た本当の母親を記憶から殺す事になる。それだけは自分で一番許せない事で気付けば無意識の内に叫んでいた。

「……あつ、ぐ、ごめんね？」

「……その……すみません。もう上がります」

フィールは居辛くなつて風呂場を先に上がった。

セラが用意してくれた部屋に閉じ籠り、乾かない髪のまま布団を被る。やっぱり、この世界は自分の居るべき世界では無い。フィールの過去の優しい記憶も辛かった現実も霞んでしまふそうだ。

「《我が心が鋼の如く・何者にも揺らぐ事無し》」

不安定な精神を「マインド・アップ」をかけて大人しく寝る事にした。結局、セラとフィールは少しだけ仲違いしたまま魔術競技祭当日になった。

「さあそして最終コーナーに差し掛かった！　なんと！　二組のロッド君が！　ぬ、抜いたああああ！　まさかの、二組が三位だああああああ！」

二人で一チームを作り、学院敷地内に設置したコースを一周ごとにバトンタッチしながら何十週する『飛行競争』の競技。二組は先頭集団とは大きく離されてしまったが安定した飛行で三位をキープしそのままゴールした。そしてゴールと同時に拍手と大歓声が巻き起こる。

「やったあ！　先生！　ロッド君とカイ君が三位ですよ！」

「(ええ……嘘やん……)」

「……グレン君、そこは喜ぼうよ」

グレンの隣で大喜びするルミア。グレンはまさか上位に食い込むと思わなかったのか呆然としておりそれを見てフィールとセラは呆れていた。セラとフィールは若干距離を置いている。昨日の事もあってフィールがセラを無意識に避けているのだ。

「いや、確かに一週間で飛行速度を上げるのは無理だからペース配分の練習だけやつてろとは言ったが……まさかここまでやるとは思わないじゃん……?」

「幸先良いですね、先生! もしかしてこの展開計算通りでしたか?」

「と、当然だろう? 体力勝負になるこの『飛行競争』。ペースさえ守れば他の奴らが勝手に自滅してくれる、だから俺の指示は簡単だ。ペース配分は死んでも守れつてな! はっはっは、楽な采配だぜ」

グレンの後付け講釈を周りで聞いていた生徒たちはフィールとセラを除いて勘違いして尊敬の眼差しを向け始める。

「いや、君たちマジでやめて……? 俺にそんな期待の視線を向けないで! 心が痛い……」

「グレン君よくボロが出なかったね……」

そしてこの光景を見ていた一組が難癖をつけてきたがグレンへの信頼が最高潮に達している二組は逆に一組を煽り返しグレンはさらに憔悴しきってしまった。

そして競技がどんどん進んでいき、二組の快進撃は続いていく。最初の『飛行競争』の三位が効いており二組の士気はかなり高い。

「あ、当てたあああ！ 二組のセシル君、三百メートル先の空飛ぶ円盤を【ショック・ポルト】で撃ち抜いたあああ！ 『魔術狙撃』のセシル君、四位以内確定だああ！」
「やった！ グレン先生の言うとおりだった……！ これならいけるよ！」

成績が平凡な生徒たちは予想外に大健闘をした。

当然と言えば当然だ。グレン先生の授業を聞いている二組なら魔術師の基礎的土台が組み上がっている。アドバイスも現実的、戦略的にも的を得ている為、快進撃と言った所だ。

「な、なんとおおお、正解のファンファーレが鳴り響く！ 二組のウエンディ選手、『暗号解説』圧勝だあああ！ 二組の快進撃が止まらなああああい！」

「この分野で負けるわけにはいきませんわ！ とはいえ……神話の翻訳、先生のアドバイスが無かったらダメだったかもしれないでしたわね……感謝しませんと！」

成績上位者は安定して好成績を収める。

しかし、いくら快進撃を続けていても他のクラスと二組にできてきている地力の壁が地味に高いのだ。現在三位の二組と一位の一組は得点差はそれほど離れてはいないが少しずつ離されている感があるため安心が出来ない。

グレンとセラは手元のプログラムを見ながら話し合っている。その距離感に違和感を持たない事にクラスの大半は呆れている。男子の視線が痛そうだが。

「しっかし、他のクラスとの地力の差が厄介だな……」

「そうだね……でもこのまま高順位を保てればいけるかも……」

「二組が一位になって一組が負けるような競技……おっ、これはひよつとするといけるかもしれないぜ？」

グレンは手元のパンフレットを見て午前の最終種目の欄を見てにやりと笑った。次の競技は『精神防御』、その次は『殲滅戦』だ。『精神防御』は勝てば中々の高得点になるし、『殲滅戦』は決勝戦並みに配点が高い。

「ねえ、先生？ 次の競技、やっぱりルミアを変えない？」

「はあ？ いや、何言ってるんだ白猫」

「『精神防御』はルミアには酷すぎるわよ……！」

『精神防御』。精神汚染攻撃への対処法は魔術師として必須であり、この競技はそれを競い合う競技だ。精神作用系の呪文を白魔〔マインド・アップ〕という自己精神強化の術を使い耐えるというシンプルな形で競われる。段々と威力を上げていき最後まで精神を正常に保っていた者だけが勝者となる。

しかし、最後まで耐えれないと最悪の場合は病院のベッドに送られてしまう過酷な競技でもある。システィーナのグレンへの指摘通りルミア以外の選手は全員男で、さらには一人を除いては全員捨て駒とした選手ばかり。各クラスはグレンのように勝ちにきているのではなく『精神防御』を捨てて主力選手を温存するために成績下位者を出場させているのだ。大半はそうする。

「先生も酷い人ですね、全員を出すためにこの競技に彼女を出したんでしょ？　そこまで成績は優秀じゃないから出場させる競技が無いですからね、この競技に捨て駒として……」

「それは違うよ。本気で言ってるなら見る目がないよギイブル、システィーナ」

グレンの近くに来ていたフィールがギイブルと抗議するシステイーナに向かってため息を吐きながら口にする。

「えっ? どう言う意味かしら……」

「何っ?! それ以外に何があると云うんだい?! 五組のジャイルがいるんだぞ? 勝てるはずがないだろう?!」

「精神防御に関してはルミアがクラスで一番だからだよ。私よりもね」

「はあ……ルミアが捨て駒? ギイブル、白猫、お前ら何言ってるんだ?」

「え?」

「ただいまより、『精神防御』を開始します! 今年も第六階梯のツエスト男爵にお願いしたいと思います!」

「さて、早速競技を開始しよう。今年はどれだけ私の華麗なる魔技に耐えられるかな?」

そう言つてツエスト男爵が白魔【スリープ・サウンド】を唱え、選手たちは対抗呪文として白魔【マインド・アップ】を唱えていく。そして、呪文が完成してすぐに地べた

に倒れて眠ってしまった選手が現れる。

「去年の覇者五組のジャイル君がいますからねえ、どのクラスも主力を温存しているんでしょう！　しかし！　二組のルミアちゃんがどこまで残れるか実況の僕としては思うのですが、どうですか？　男爵」

「そうだな……可憐な少女がどこまで私の精神操作呪文に耐えてくれるのか、いたいけの少女の心をどのように汚染し尽くしてやるか実に楽しみだねえ！」

男爵が気持ち悪い笑みを浮かべて魔杖を舐める様は変態そのものだった。フィールはルミアを見ると、流石のルミアも思わず一步引いていた。ちなみに観客席ではフィールがゴミを見るかのような視線で睨み付け、学園長は「アイツ、クビにしよう」と言う意見にセリカも同意。

セラとシステイーナがフィールドに行きかけているのをグレンとフィールが止めていた。無論フィールも止めたくはないが。アレは単純に女の敵だ。後で巨悪の発端を握り潰すと言う物騒な事を考えていた。

そして、エロ男爵ツェストによる精神攻撃は続いていき最終的に残ったのは五組のジャイルと二組のルミアだけになった。

「なっ……五組のジャイルと張り合ってるだ?! 彼女……あそこまで強かったのか……!?!」

「白魔【マインド・アップ】は、素の精神力を強化させる呪文。精神力が強い人間には効果が大きい。ルミアは素で精神的な心構えが違うからね」

それを説明したフィールをチラリとグレンは見る。

心構えだけならフィールも常人のソレとは格が違う。まるで戦場を知っているかのような、ルミアが居なければグレンは間違いなくフィールを選んだだろう。

「まあ、ルミアでも楽勝だと思ってこの競技に送り出したが……あのジャイルとか言う奴? アイツやべえな、どんな修羅場潜ってきたんだ?」

「万が一の時は行きましよう。無理させる程でも無いので」

親友を応援するシステイーナの隣でフィールとセラ、グレンは静かに覚悟を固めていた。

フィールド上では遂に【マインド・ブレイク】の呪文に入った。これは精神操作系の

呪文の中で一番危険と言われる呪文だ。下手をすれば相手を一瞬で廃人に追いやってしまう呪文でもある。そして、ツエストが呪文を唱えるが二人は「マインド・ブレイク」すらも耐えてしまう。

「お前……やるじゃねえか。ここまで気合入ってる奴は滅多にいねえぞ？」

「そ、そうかな？」

「だけどそろそろキツイんじゃないか？ 棄権したらどうだ」

「あはは……実は結構キツイんだよね……でも、みんなと一緒に一番を目指すから、私は頑張れるんだ！」

そう言ってルミアは観客席のグレンやシステイーナを見つめる。負けられない戦いにルミアは強く立ち向かう。

ジャイルはルミアのこの競技に対する思いも理解したため何一つ言わずに前を見据えた。そして、二十八、二十九、三十とラウンドが過ぎていき三十一ラウンドで膠着状態だった戦況に変化が現れる。

「っ……………」

「ああああつと！……ここでルミアちゃんがよろめいてしまった！」

最初と比べて威力が上がった【マインド・ブレイク】がルミアの【マインド・アップ】の守りを貫通してきてしまった。バランスを崩したルミアは片膝をついて俯いている。対するジャイルは全く動じず仁王立ちのままだった。

「大丈夫かね……？ ギブアップするかい？」

「……………いい、いえ……大丈夫です。やれます！」

「な、なんと！ ルミアちゃんまだ続行です！ これはまだ勝負の行方は分からないかああ?!」

実況も会場も大盛り上がりになってきた午前最後の種目『精神防衛』しかし、それは1人の男の声で終わりを迎える。

「棄権だ！」

突然上がった叫び声に会場はしんと静まり返る。

ルミアが辛そうな表情で後ろを振り向く。

「え……先生……？」

ルミアが振り返るとそこにはフィールとグレン、セラがフィールドに上がってきた。これ以上は危険だと判断したのだろう。

「え、えーと。二組の担当講師グレン先生……？ 今なんと……」

「棄権だ、二組は三十一ラウンドクリアした段階で棄権する。これ以上はルミアが無理だ」

「な、なんと！ 二組のルミアちゃんは棄権！ 今年の『精神防御』もジャイル君の勝利だああああああ」

実況がそう告げるがルミアの番狂わせが観れると期待していた観客たちからはブーイングの嵐が起きてしまう。セラはルミアを支え、フィールはブーイングする観客を睨みながら、審判に話しかける。

「あー、審判さん。それは違うよ」

「……………？ どう言う事ですか？」

「ジャイル君、悪いけど触るよ」

フィールは反応の無いジャイルの額を軽く押すと、ジャイルは腕を組んだまま白目を剥いていた。別段魔術を使った訳では無い。ただ指で軽く押しただけで倒れてしまった。

「ジャイル君、立ったまま気絶してたからね」

白目を剥いて腕を組むジャイルを見てクスツと笑うフィールに、その言葉でブーイングが一気に収まった。

「と、いうことはどうなるんでしょうか？」

「ルミア君の勝ちだろうな。棄権したがジャイル君が耐えられなかった三十一ラウンドをクリアしているからな」

「な、な、なんとおおお!!? 大どんでん返しだああああ! 『精神防衛』勝者はルミア

「ちやんだああああ！」

会場は先ほどのブーイングの比にならないぐらいの大歓声が響き渡る。フィールはルミアの頭を軽く撫でる。

「よく頑張ったね、ルミア」

「うん………！　ありがとうフィールさん！」

「ルミア！　おめでどう!!」

システイーナもルミアに抱きついて喜びを共有する。

セラやグレンはそれを遠目で満足したような笑みで見ていた。

『次の競技、『殲滅戦』に出る生徒は入場口まで来てください』

「あつ、私だ」

フィールは少し早足で入場口に向かう。グレンはフィールすれ違う前に大丈夫なのか尋ねる。『殲滅戦』は競技の中で一番危険な競技だ。フィールなら問題ないかもしれない

ないが、念のため確認する。

「次は『殲滅戦』か。黒猫、お前大丈夫なのか？」

「心配なんてお釣りが来ますよ？ グレン先生」

「悪い、愚問だったわ」

次の競技は『殲滅戦』。この競技は至ってシンプル、1組から10組の代表生徒が、一つのフィールドで場外、又は気絶するまで戦い、最後に立っている生徒のクラスに配点が入る。魔術は当然、格闘術も使用可能だ。

『さあ！ 配点が決勝戦の次に高い『殲滅戦』！ 注目すべきは快進撃を見せる二組の主席、フィール||ウォルフオレン！ 一組と二組の順位が更に近づきます！ それでは試合、開始です!!』

『殲滅戦』開始のアナウンスが流れる。それと同時に生徒達はフィールに向けて呪文を放つ。

「黒猫っ!!」

グレンはその狙いにいち早く気付いたのか、フィールに忠告を叫ぶがもう遅い。九人同時に放たれる呪文がフィールを襲う。

「『雷精の紫電よ』!」

「『大いなる風よ』!」

「『残響為る咆哮よ』!」

九つの呪文が着弾し砂煙を起こす。この煙が晴ればフィールは場外に飛ばされているかその場に倒れて気絶しているかのどちらかだろうとフィールドの生徒達は思った。

「き、汚ねえぞ! 同盟を組むなんて!!」

「フン! 勝負は始まる前から始まっているのだ!!」

1組の生徒がカッシュの言葉を黙らせるが、観客席から2組を応援している生徒達か

らはブーイングを浴びる。だが1組にとつて勢いに乗っている二組を黙らせるためにはこの策しか無かったのだ。だが、ファイルは平然と砂煙の中から悠然と立っていた。

「……プライドを捨ててこのザマか。つまらない作戦ですね」

「なっ……!」

『何という事だああああ! 9つの攻撃を受けて尚無傷で立っているファイル!! ウォルフォレン!!』

「黒魔改「ライアブル・スクリーン」で強化した風の結界を作っただけですよ。まあ、こうなるなとは思いましたけど」

クラス全員が立つ場所が妙におかしいと思つて防御の「ライアブル・スクリーン」を使ったのが正解だった。だが防いだのに納得がいかないと呼ぶ生徒達。それにウンザリしたのかファイルはため息を吐いた。

「ハア……騒がしい人達ですね。イライラしてきます」

「もう一度だ! もう一度同じ魔術を!」

「《う》《る》《さ》《い》《よ》」

「グハア!？」

「なっ!?! ぎやあああああ!!」

「《森人の加護》——グハア!？」

たった一文字で「シヨック・ボルト」を二反響唱しながら、殲滅戦に参加した生徒全員にぶち込んだ。詠唱が早過ぎるせいか終わりは呆気なく、「シヨック・ボルト」を少しだけ電圧を上げていた事で生徒全員はその場で倒れた。

『な、なんととおおお! 圧倒的力の差を見せつけ、『殲滅戦』は二組のフィール||ウォルフオレンの勝利だあああああ! これぞまさに殲滅! 戦場を蹂躪するかのような怒涛の攻撃でしたあああ!』

「うわあ……マジか。しかも『二反響唱』しながらあんな短い起動術式で精度を落とさな
ダブルキャスト
いなんて、天才過ぎるだろ」

「……フィールちゃんのノート見た事有るけど、普通に学生レベル超えてたよ?」
「だろうな……アイツ学園にいる意味殆ど無いだろ」

学園が教えられる分野を超過している。元同僚のアルベルトが学園の生徒になっ

たみたいだ。純粹な完成度の魔術師としてはシステイナどころかセラですら足元にも及ばない。

「ねえ、フィールちゃ——」

「午前の部はこれで終了ですね。もう行きます先生」

「ちよつ、黒猫っ!？」

セラの呼び止める声を無視してフィールが早足で競技場から去る。セラは伸ばした手を引つ込めるが、グレンはその様子にため息を吐きながらセラを見る。

「………ったく。セラ、お前も黒猫も朝から変だぞ？ 何があつた？」

「その、冗談でお母さんって呼んでいいって言ったら怒っちゃって」

「………セラ、お前ロリコンか？ 母性に目覚めておかしくなつたか？」

「違うよ!？」

丁度お昼頃だ。毎日サンドイッチやお弁当を貰っていたグレンにも借りはある為、グレンはフィールを追いかけた。もう一つは正体について知りたいのだろう。魔術特性パーソナリティ

だけでは無いのは薄々勘付いているからだ。

ファイルは競技場の外のベンチでサンドイッチを食べていた。

ただ俯いて、悲しむ様子もなく無表情で食べている。無表情なせいか何故かいつも美味しそうなサンドイッチが不味そうに見えてしまう

「お前、いつも昼にサンドイッチを食べてるよな。好きなのか？」

「……別に」

別にサンドイッチは好きではない。ただ、思い出があるからいつの間にか外せなくなっただけだ。一種のルーティンみたいなものだ。

「お弁当ならセラ先生に預けたんで、そっちに行ったらどうですかグレン先生」

セラにグレン先生に渡しといて、と書かれたメモを残し、魔術競技祭へ先に向かって

いたフィール。単純に昨日怒った手前で、何事もなく顔を合わせるのが少しだけ嫌だった。単純に迷惑かけているのは分かっているけれど。

「まあそれは後で取りに行く。んで？ 黒猫、どうしてお前は『二反響唱』ダブルキャストが使えるんだ？ アレは軍の宮廷魔導師団くらいしか使えねえ筈だ」

「……自分で考えてください。仮にも先生でしょ」

未来で宮廷魔導師団に入っていたから当然だ。

絶対に分かるわけが無い。『天の知恵研究会』に狙われる対象な以上、『天の知恵研究会』に所属している訳でもない。

「やけに棘がある言い方だなコラ。分からないから聞いてんだろ？ 別にやましい事じゃねえだろ。それに何だあ？ セラがお母さん呼ばわりして欲しいって事にまだ怒ってるのか？ 別に冗談で怒る事でも——」

「黙ってください!!」

ビリビリッ！ と聞こえた怒号に思わずグレンが怯んだ。

ただの餓鬼の駄々だって分かってる。ただ子供みたいに下らない事は分かってる。けど、この世界は自分がいない全く別の世界だ。この世界に依存する事は未来の使命もフィールの過去も全てが否定されてしまうようで、自分自身に対する苛立ちが抑え切れない。

「……悪かった」

「……いえ」

「……母親が大事なんだな」

「……凄いい人でした。『天の智慧研究会』の陰謀に、最後まで立ち向かって……でも、殺されてしまった」

「……」

フィールの母親はセラⅡシルヴァースだ。それは変わる事は無い。だが、フィールが産まれないこの世界は自分が居た世界と全く違う。過去が変わったなら、フィールが産まれなかったなら、フィールⅡレーダスはこの世界では赤の他人だ。この世界のセラに重ねるのに少しだけ抵抗があった。

「本当は、何で私を残して死んでしまったの？　っていつも思っていました。何も出来なかつた自分が居るから、何も守れなかつたって……だから強くなつたんです。理由は……それだけです」

「……すまん。嫌な事聞いた」

「いえ……ただグレン先生」

「？」

フィールは少しだけ、本音をグレンに聞かせた。

もう叶わなくなつてしまつたフィールの夢だ。夢は何処まで行つても夢でしかない。それでも、自分の夢を語つた。

「私はただ、お父さんとお母さんを守れる『正義の魔法使い』になりたかつたんです」
「つつ……『正義の魔法使い』ねえ……」

「あの場所では……もう永遠になれませんが、それでも今があるならいいんです。『正義の魔法使い』なんてものより、2人を守れる力があつたらつて……そう思つてただけです」

それが出来たならどれだけ良かったか。

未来でそんな事が出来ればどれだけ幸せだったのか。だからもう失くすつもりはない。この世界で赤の他人であったとしても。

「(それでも……私は2人を助けるから……今のお父さんと同じように)」

必ず守り抜いて、未来を変える。

それが、未来でフィールが《愚者》から受け継がれた最後の意思なのだから。

午後の部が始まり、最初の種目『遠隔重量上げ』が始まる。この種目は白魔〔サイ・テレキネス〕の呪文で鉛の詰まった袋を触れずに空中へ持ち上げる競技だ。より重い袋を持ち上げた選手に得点が入るルールである。

それを少しでも眠たそうに眺めていると、グレン先生とシステイナが話している所を目撃した。

「先生、ルミア見ませんでした？」

「ルミア？ あー、悪い。今は一人にさせた方がいい」

「？ 何ですか？」

「俺らの元にアリシア陛下が来た」

「！」

グレン先生とシステイナは話す内容が内容なので小声で話してはいるが流石のシステイナも驚きを隠せないでいた。どうやらルミアが先生にお弁当を渡した後にアリシア陛下がこっそりルミアに会いに行ったらしい。だが、エルミアナとして接したアリシアに対して、エルミアナは死んだと伝えられ、その会話を拒絶して何処か行ってしまったのだ。

「そんなことが……だからあの子一人でどこかに行っちゃったのね」

「まあ、こんな状況なら誰でも一人になりたいんだろ。まあ、一人になりすぎて塞ぎ込む問題でも無いと思うが……」

「先生、じゃあ私がルミアを探してきます」

会話に入つてそう言ったフィール。

どの道、この後に何かあるのは分かっている。事件が起きるなら元凶の中心が狙うルミアの近くにいた方がいいだろう。

「黒猫が？ いいのか？」

「訳有り同士なら話し易いですし、先生は生徒たちにアドバイスした方がいいでしょう？ 適材適所ですよ。私は午後の部は何にもありませんし」

「分かった。んじゃ頼むわ」

グレンは察したのかフィールに頼んだ。

フィールは了解と言った後、黒魔改「ストーム・グラスパー」を使って風の感知を広げ、ルミアを探し始めた。

「何見てるのルミア？」

「あ、フィールさん……ロケット・ペンダントだよ。この中に誰か大切な人の肖像が入ってた気がするんだけどいつの間にか失くなっちゃったんだ……」

そう言いながらルミアは寂しく笑う。

それをフィールは無言で見つめる。自分も同じものを持っている。ロケットの種類は違うけど。

「これ自体特に価値があるわけじゃないんだよ……こんなものを今でも大事に持ち歩くなんてやっぱり変だよ……」

「変じゃないよ。中身は見せられないけど、私も持つてるし」

フィールは胸元からロケット・ペンダントを取り出す。ルミアはその事に少しだけ驚いていた。フィールもこのロケットの中には大切な思い出がある。

「フィールは……私と陛下のこと知ってるんだよね？」

「うん、知ってる。けどね、今居るのはルミアアティンジェルであってエルミアアではない。そうでしょ？」

「フィールさん……」

「話ぐらいなら聞くよ。今ここには私とルミアアしかないんだからさう。」

そう言ってルミアアは背もたれに背中を預け、空を見上げながら過去の日常を語り始める。まだルミアアがエルミアアとして健在しており、幸せと呼べた頃の思い出。

フィールはその事に少し動揺した。

それはまるで自分と同じ悩みだったからだ。母親だったセラとこの世界のセラと同じような悩み。つくづく思う。フィールとルミアアの境遇は似ているものであると。

「陛下が国の未来のために私を捨てた理由は分かるんだ……必要なことだったって分かってる。でも、私は心のどこかで陛下を許せなくて……怒ってるんだと思う。だけど、またあの人をお母さんって呼んで……抱きしめて欲しくて……お話………したいって思いがあるんだ……」

そう言いながらルミアは俯く。

その声はどことなく声も震えて、潤んだ涙を抑えながら、ルミアは続ける。

「だけど、お母さんって呼んじやったら……システイのご両親にも申し訳なくて……裏切っちゃうような気がして……どうすれば良かったか、私分らないんだ……」

そういつてルミアは目を伏せてしまった。

フィールはルミアの隣に座って自分の悩みを語り出す。

「……私もね。昨日、セラ先生と喧嘩した」

「えっ……?」

「私にも大好きだったお母さんが居た。けどもう、この世には居ないの」

「!」

「セラ先生は冗談でお母さんと呼んでもいいって言ってくれた。けど、私はそれが少し許せなかった。自分自身がそれを認めたら、大好きだったお母さんとの記憶が薄れてしまうんじゃないかって」

この世界のセラはフィールが知るセラとは違う。

フィールが産まれなかった並行世界のセラに、自分の知るセラを重ねてはいけな
思っていた。この世界でフィールは何処まで行っても他人なのだ。

「馬鹿みたいな理由だったんだよ。ただ駄々をこねる子供みたいで、本当は縋りたくて、
けど大好きなお母さんを裏切ってしまうんじゃないかって、考えてた」

「……フィールさん」

「けど、答えは簡単だった。両方とも同じで変わらないんだよ。大好きなお母さんと私、
セラ先生を母と重ねる私は同じなんだよ。ルミアもそうでしょ？ システイーナの両
親が好き、けどルミアの本当のお母さんも好き。両方とも変わらない。どちらも好きな
んだよ」

フィールはセラが大好きだった。

でもそれは自分が知るセラが好きであって此方の世界を見ていなかった。別人で
あっても好きだった気持ちは同じで変わらないのだ。分かっていたつもりなのに。

「ルミアは凄いいよ。その事にちゃんと悩める所が。私なら子供みたいに否定して今絶賛空回り状態だし」

「…………ふ、ふふふ。そつかあ、両方好き…………」

「だからルミアは悪くない。システイーナの両親が好きなルミアとお母さんが好きなルミア、どちらもあつて良い。そうでしょ？」

「…………はい！…………あれ？」

ルミアが返事をした後にある事に気がついた。

王室親衛隊が足早でこちらに向かつて来ているのが視界に入った。

女王陛下を護衛している筈の王室親衛隊がどうしてこんなところにいるのか疑問に首を傾げていると王室親衛隊は二人の前で足を止め、囲むように素早く散開した。

「ルミア…ティンジェルとフィール…ウォルフオレン……………だな？」

二人の正面に立った、その一隊の隊長格らしい衛士が低い声で問いかけてくる。

「…………ルミア…ティンジェルにフィール…ウォルフオレンで間違いないな？」

「え？ は、はい……………そ、そうですね……………」
「……………何ですか突然、新手のナンパですか？」

念を押すように再び重ねられた問いかけに、ルミアは戸惑いながらも答え、フィールはルミアを背に隠した。しかし次の瞬間。衛士達は一斉に抜剣し、ルミアとフィールその剣先を突きつけていた。

「——ツ!?」

「傾聴せよ。我らは女王陛下の意思の代行者である」

一隊の隊長格らしい衛士が朗々と宣言した。

「ルミア…ティンジェル。フィール…ウォルフオレン。恐れ多くもアリシア七世女王陛下を密かに亡き者にせんと画策し、国家転覆を企てたその罪、もはや弁明の余地なし！
よつて貴殿らを不敬罪および国家反逆罪によつて発見次第、その場で即、手討ちとせよ。これは女王陛下の勅命である！」

嘘でしょ、と呟いた言葉と共にファイルは予想していた最悪の事態が始まったのだと改めて認識した。

第7話

あまりの訳の分からなさにルミアは状況が飲み込めていない。ファイルもあまりの現実離れた状況に少し頭が追いついていなかった。国家反逆罪の濡れ衣を着せられて、裁判も無しに即刻処刑だ。特例どころの問題じゃない。

「証拠は挙がっている。抵抗せず罪を認め刑に服することを勧める。さすれば我らとて苦痛を与えずに貴殿の命を絶つことを約束しよう」

「証拠？ だったらその証拠とやらを見せてください」

「罪人である貴様らに証拠の開示義務は無い」

「……横暴って言葉知ってる？」

弁明の余地すらない。どうやら、何か焦ってでも私やルミアを殺したがっているのだ。この状況がおかしい。わざわざ虚偽で女王陛下の勅命なんて持ち出してまで私達を殺そうとする理由。

とは言え魔術を使おうとすれば首を掻き切られる。ため息を吐いて両手を上げる。

「はいはい。分かりました。とりあえず場所を変えましょう。ここだと路上が血の染みになるので、せめて木陰で受けましょう」

「フィールさん……!?!」

「ルミア、両手を上げて。それが最善策だから」

「……いいだろう」

フィールとルミアは拘束されながらも木陰へと移動した。

「ここに立て」

そう言ってルミアとフィールは先程から少し離れた木の下に連れてこられた。手を縄で縛られ、四方から剣を突きつけられて身動きすら取れない。

「体の力を抜いて動かないことだ。そうすれば苦しまずに済む」

「……………はい」

ルミアは深呼吸をして目を瞑る。いつかこのように自分が死ぬことを覚悟はしていた。しかし、覚悟はしていたがシステイーナやグレン先生と過ごす日々を思い出すとど

うしようもなく悲しかった。

「最後に一つ、遺言をいいですか？」

「許可する」

「ありがとうございます。じゃあ一つだけ——」

ファイルは諦めた表情を作りながら、縄に縛られたままと言う絶対的不利から起死回生の一手を打った。

「《どう考えても・それ・虚偽だろコラ》」

「なっ——！・ぐあああああ!?!」

黒魔改「ストーム・スタンプ」を即興改変し、風の衝撃波が周りの兵士全てを吹き飛ばす。縄で縛られた状態で抵抗するとは思わなかったようで、意表を突く事に成功した。

「実戦経験が足りてないですね。魔術耐性の鎧じゃ物理的な風圧や光は防げないんです

よ」

「フィールさん……!!?」

「ぐっ……貴様ら!? 我々に手を出す事は——がつ!？」

「知るかかって話です。ごめんなさい」

起き上がった兵士を蹴飛ばした。

フィールは改造した学院のロープから、例の3節以下の魔術を無効化するナイフを取り出して縄を切る。その瞬間、手首を少し切ってしまったが、大した出血じゃない。わざわざ隙を作るのに降伏を演じたはいいが、予想以上に隙を作るのに時間がかかった。

「いたぞおおお！ 見ろ！ 同志達が殺られている！ あいつらを逃すなああああ
！」

「いや、殺つてませんよ!? ツと……ルミア逃げるよ! アイツら問答無用で私達殺しに来て
る!!」

「は、はい!!」

「《駆ける》！」

ルミアはフィールに掴まって、フィールは「疾風脚」シユトロムを起動させてルミアを抱えて柵を越え、街へと逃げる。王室親衛隊との命がけの鬼ごっこが始まった。笑えない冗談だと眩きながらも、フィール達は地の利があるため裏路地を使いながら巧みに逃げ切る。しかし、どこから兵士が来るかは分からないため警戒だけは怠らない。

「どうするルミア？ 私達、国家反逆罪だつて。私と駆け落ちする？」

「こんな時にふざけてる場合じゃないよ!？」

「まあ冗談だよ。とは言え、王室親衛隊は私達を殺したがつて。いや、正確にはそうせざる得ない状況に陥っていると言うべきかもね」

どうにも王室親衛隊が暴走している。理由として考えるなら3つ。

① ルミアが異能力であるのが親衛隊に明かされ女王の名誉を守らんと行動し、その末の暴走し、ついでに異端者であるフィールを殺そうとする可能性。

② 私とルミアが暗殺計画という国家反逆罪をデマとして流し、焦った親衛隊が殺そうとした可能性。

③ 女王陛下が何者かに人質に取られている可能性。

「①、②は不敬罪起こしてまでする事じゃないし……理由に無理があるしね……」

「じゃあ、③のお母さんが人質に取られている……が」

「現実的に考えてそれしかない……っああ！」

よくよく考えれば解決手段あるじゃないか。

フィールの腕に蒼い宝石のついたブレスレットを見る。確かセリカ伯母さんが……

『もし緊急時、何があつたらこれで連絡しろ。無理だと思つたら大人を頼れ』

と言つて渡してくれた連絡用のブレスレットを渡されていた。確かセリカ伯母さんは女王陛下の近くに居たはずだ。連絡すれば、直ぐに解決出来る筈だ。フィールは魔力を込めて通信を始める。

『……フィールか』

宝石越しにセリカが応じた。

良かった、通信阻害の魔術でもされていたら大変だったが、その様子はない。

「セリカさん！ 王室親衛隊が暴走して、私達を狙つてきました。女王陛下の勅命であ

るかどうか確認してもらえますか？」
『……………』

何故かセリカさんは無言だった。

その沈黙にフィールは疑問を抱きながらも、首を傾げる。

「……………セリカさん？」

『すまないフィール。私は何もできない』

「——っ!?？」

即座に返ってきたのは、感情の読めない突き放つような言葉だった。訳が分からない。セリカ伯母さんが何も出来ない？

「……………どう言う事ですか？ まだ何も——」

『すまない。私は何も言えない。フィール』

その意味が分からないのか、フィールは再度質問しようとするが、セリカは言い直し

て再び同じ事を告げる。

『もう一度言うぞ、フィールいいか？ 私は何もできないし、何も言えないんだ』

「——ツッ？」

フィールはようやくセリカの様子が、どこかおかしいことに気付いた。どうやらこの一連の事態は、フィールの予想以上に一筋縄じゃいかないものだったらしい。セリカが動けない以上、必ず何かがある。

「……セリカさん。答えられることだけ答えてください。貴女は私達が置かれているこの状況を知っていますか？」

『……大体、知っている』

「知ってて何もできない、と？」

『ああ』

「女王陛下と一緒にいますか？」

『……ああ』

「何が起きたんですか？ どうして王室親衛隊の連中が暴走しているのか説明出来ませ

か？」

『……………』

「なぜ、女王陛下は表向きルミアと私を討つ勅命を下したことになるか説明出来ますか？」

『……………』

「どうやら最後の二つは言えないらしい。

一体、どんな状況なのか。何が起きたというのか。セリカさんは大陸屈指の第七階梯^{セブテンバ}の魔術師なのだ。そのセリカさんにこれほどまでの制約をどうやって課したというのか。

「じゃあ最後に一つ、状況を覆せるのは私か、グレン先生だけですか？」

『…………… ああ』

「……………分かりました。これ以上は危険ですね。切ります」

『……………すまないフィール』

「後は任せてください」

ファイルへ通信を切る。

確信した。女王陛下が人質に取られている。それも魔術関連、となると呪殺具カリスでも持たされたのだろう。

「やっぱり女王陛下が人質に取られてるね。多分、呪殺具カリスで解呪条件は『私達の殺害』、発動条件は『一定時間の経過』、『第三者に報告』、『勝手に外そうとした場合』かな……」
「お母さんが……危ない……」

「つまりは女王陛下の下で【愚者の世界】を使わないと無理って訳ね。先生に協力を仰ぎたいけど、こればかりは私の役割かな」

と言うか中途半端に巻き込みたくない。

『双紫電』ゼーロスが陛下の隣に居るのに、接近戦に長けた先生達でも無理だろう。因みに私も勝てる気しない。今の私では、剣技で追い縋る事すら出来ないだろう。昔は剣の姫エリエーテに殺されない程度の剣技で追い縋っていたのに、鈍って絶対に勝てる気がしない。

出来れば何も知らないまま事件を終わらせたいが……

「……っ!? 誰だ!」

「安心しろ、敵ではない」

「……………誰?」

二人組の男女の内一人の男性とその同僚と思われる少女。だが、少女を見た瞬間、ファイルは殺気立って、ナイフを構えた。

「(っっ!?) Project: Revive lifeの量産兵!?! 何でこんな所に!?!」

アレは未来で『天の智慧研究会』が生み出した『Project: Revive life』によって生み出された人造人間。最終的には研究者全員をぶち殺し、資料を漁ったのだがシオンとイルシアの研究データから、それをライネルと言う男が利用して『天の智慧研究会』の兵力増大に貢献されていた感情なき殺人兵器。更に言えば「愚者の世界」を使うファイルにとって天敵だ。魔術戦ならまだしも接近戦は勝ち目が薄い。

「危害を加えるつもりはない」

「……………なら、その子の大剣下ろしてくれませんか?」

「ん、分かった」

その少女は大剣を地面に置いた。

確か『Project: Revive life』の唯一の成功例であるオリジナルは感情を持つため不完全と言われていたが……この少女がオリジナルなのだろう。

「場所を変える。ついてこい」

フィールとルミアは青年達と共に路地裏の奥へと歩いていった。

「自己紹介が遅れたな。俺はアルベルト、帝国宮廷魔導師団特務分室所属《星》として活動している。此方は同じく《戦車》のリエル」

「私はフィール∥ウォルフオレン、此方はルミア∥テインジエルです。まあ2人も異

能者に近いものだと考えてください」

「『時渡り』の少女か」

それを口にしたアルベルトをフィールは睨む。

案の定『時渡り』がバレている以上、帝国宮廷魔導師団にはある程度情報を手に入れているだろう。だが、それをグレン先生達に知られる訳にはいかない。

「それ絶対他人に口外しないでください。アルベルトさん、今回の件はご存知——」

「それについては俺たちも承知している。そして情報を加えるならば、今回の件は女王陛下の意思によるものではない」

「……つてことは、つまり」

「ああ。王室親衛隊……おそらくはその総隊長、ゼーロスの独断によるものだろう」

王室親衛隊総隊長ゼーロス。

40年前の奉神戦争において、その名を馳せた英雄。

二刀細剣の達人であり、かつて執行者ナンバー8《剛毅》であった頃のバーナードと共に、敵国の将兵たちを震え上がらせた猛者だ。

彼を一言で表わすのなら『忠義者』であり、その言葉通り彼の王室に対する忠誠心は生半可なものではなく、ある意味では狂氣的とさえ見る者もいるだろう。

「そのルミア嬢が噂の『廃棄王女』だとするのなら、それをどこかで聞きつけた親衛隊が女王の名譽を守らんと行動し、その末の暴走であると思えなくもない」

「それは無理があります。例えそうだとするならと不敬罪を犯してまでこんなことをしようとは思わないし、私も殺害対象になってますし」

「と言う事はつまり」

「『天の智慧研究会』が女王陛下を人質に取っているんでしよう」

ルミアだけでなく私も殺害対象なのは『天の智慧研究会』が私を狙っているからだ。『時渡り』の実態は未だ解明されていない魔術を超えた魔法の理論だ。ファイルが3年かけて作り上げたあの術式は描く事と膨大な魔力、それを発動する鍵さえ有れば理論的に可能なものだ。連中はそれを欲している。

「とりあえず突破口は私です。女王陛下の近くまで行ければ事件は解決出来ます」
「その理由と根拠は何だ？」

「根拠はセリカ・アルフォネアの助言だからです。彼女は何故か動けません、あの人が状況を覆せるのは私とグレン先生だけって言っていました」

「グレン？」

「理由は多分……とりあえずコレで納得してください」

フィールはポケットから『愚者のアルカナ』を取り出した。それを見たアルベルトやルミア、リエルが目を見開く。「愚者の世界」を使えるのはグレンⅡレーダスを置いて他にいない。

「それを使えるのか？」

「はい。多分女王陛下に呪殺具を持たされています。私なら起動を封殺出来ます。グレン先生と私にしか出来ないとはそう言う意味なんでしょう」

「……フィールⅡウォルフォレン、何故貴様がそれを持つ？ 何故それを起動出来る？」

「……今は言えません。けど、いつか必ず話します。グレン先生達にも、アルベルトさん達にも」

未来の事はまだ話せない。この人は帝国宮廷魔導師団だ。上層部にはイグナイト家

の魔術師、イヴ・イグナイトが居る。あの人に知られれば後々厄介になる為、今は話す事が出来ない。

「……いいだろう。しかしどうする？ 女王陛下の近くまでたどり着くには、王室親衛隊を潜り抜けて競技祭に戻らねばならない」

「私、状況を打破する作戦を考えた」

「……………一応聞いてやる」

渋い顔でアルベルトが聞こうとする。王族親衛隊の包囲網を突破して女王陛下の元にたどり着く為の作戦をリィエルが語った。

「まず最初に私が敵に正面から突っ込む。次にフィールが敵に正面から突っ込む。……そしてアルベルトが狙撃する。……どう？」

「……………」

「……苦労してるんですね」

「全くだ」

僅かにフィールは同情の目をアルベルトに向けた。

そんな脳筋な考え、無理に決まってるだと誰か言っただけじゃなかった。いや、オリジナルとは言えまだ子供だ。期待した私が馬鹿だった。

一方、グレン達はルミア達が戻るのを待っていたが、いつまで経っても戻って来ない。探しに行こうとしたが、この後の競技のアドバイスがある為、仕方なく生徒達の方を優先した。

「黒猫とルミア遅えな」

「何があったのかな？ 私探しに行ってくる」

「その必要は無い」

競技場の中の生徒達の前に長身の青年と小柄な少女が入ってきた。グレンとセラは驚愕した。2人の元同僚であるアルベルトとリエルがこの場所に入ってきたのだから。

「なっ……アルベルト!? それにリエルまで……! お前ら何でこんな所に!」

「あの……一体どちら様ですか?」

「グレンの昔の友人のアルベルトだ。この隣の女はリエル。魔術競技祭の後、旧交を温めようとグレンに招待された」

「ちよっ、お前何言ってるの!」

「アルベルト君にリエルちゃん? どうしてこんな所……」

「セラ、話は後だ。一先ず納得してくれ」

その言葉を聞いて二組の生徒達は顔を見合わせる。動揺の色が隠せないでいる。しかし、アルベルトは淡々と生徒達に告げる。

「なに、俺はただ見ているだけだ。細かい指示は担任であるグレンに聞くといい」

「一体何のつもりだアルベルト? 外で何があつた?」

「それは此処で話す事ではない。場所を変えるぞ」

「あつ、私も……!」

「私も行きます!」

グレンとアルベルト、リエルは場を外し、セラとシステイーナはそれを追いかけた。生徒達の前で話せば混乱を招く。フィールとルミアがこの場所に居るとバレたら王室親衛隊が直ぐにも抹殺しに来るので、とりあえず場所を変えた。

「アルベルト、一体何なんだ突然。外で何があつた？」

「王室親衛隊の暴走で私とルミアが狙われたんですよ。グレン先生」

「なっ……!!? お前！」

「フィーむぐっ!!」

「名前は出すな。今はアルベルトに変わっている。呼びたいなら黒猫と呼べ」

「お前、演技上手すぎだろ」

役者として食っていけるんじゃないかと下らない事を考えてるグレン。セラが名前を言い掛けるのを、右手で押さえて止める。フィールとウォルフオレンがこの場所にいるとバ

れた瞬間、王室親衛隊が殺到する。

「じゃあ黒猫、王室親衛隊の暴走って何だ？」

「ルミアとフィールが異能者である事がバレている。それにより王室親衛隊は暴走、一連の事件の首謀者は『双紫電』ゼーロスだ」

「！」

「2組には何が何でも優勝して貰わねばならん。女王陛下下の謁見の機会に俺とリエルが変身を解く。そうすれば女王陛下自らがゼーロスを断罪するだろう」

「……成る程、そう言う事か。アルベルトとリエルは大方、お前らと入れ替わってるな？」

そう、今外で逃げ回っているのはフィールとルミアに「セルフ・イリュージョン」で変装したアルベルトとリエルだ。ちよつと命がけの鬼ごっこしている所だろう。

「ああ、これは伝言だが『いつか軍を離れた理由を言え』と『グレン、いつか必ず決着を着ける』だ」

「いいっ!? まだ諦めてなかったのかよ……リエルの奴……」

「宿命だと思え。謁見には俺達が出る。異論はないな？」

「ああ、分かった」

「ねえファイ……黒猫さん。貴女本当はアルベルトさんって人なんじゃ……」

「演技だと言った筈だ。システイーナⅡフィーベル」

「大丈夫だよシステイ、必ずこんな事件止めてみせるから」

アルベルトのフリをしているとは言えグレンやセラ、システイーナでさえ本人に思えてしまう。フィーベルの面影が全く見えない完璧な演技にグレン達はやや苦笑していた。

『変身』の競技ではリンが「セルフ・イリュージョン」で時の女神、ラィテイリカに化身する事で最高得点を叩き出し、結界の陣取り競技『グランツィア』は条件起動型の結界で「サイレント・フィールド・カウンター」で逆転する事で競技は順調に進んでいきついに決勝戦。

一組対二組の正真正銘の決勝戦、勝った方が優勝というドラマの様な展開となった。先鋒のカツシユは地力の差はあったものの持ち前の身体能力と我慢強さで持久戦に持

ち込んだが一組のエナが唱えた【痺霧陣】によつてカツシユは行動不能となり惜敗。

続く中堅戦も持久戦となった。最初は互角だった二人だが一組クライスの方に疲れが見え始めその隙を見逃さなかったギイブルの【コール・エレメンタル】によつて召喚されたアース・エレメンタルがクライスを拘束し投了を宣言しギイブルの勝利となり勝負は大将戦へともつれ込んだ。

そして……

「《拒み止めよ・嵐の壁よ・その下肢に安らぎを》！」

「な、何だ！……この呪文はッ?！」

システイーナの改変呪文【ストーム・ウォール】がハインケルが体勢を崩し、その隙にシステイーナ渾身の【ゲイル・ブロウ】が炸裂する。

「そこっ！ 《大いなる風よ》！」

「う、うわあああああ！」

システイーナ渾身の【ストーム・ウォール】と【ゲイル・ブロウ】の突風によりハイ

ンケルの身体を場外へと弾き飛ばした。そして、一瞬静寂が訪れたと思うと次の瞬間には割れんばかりの大歓声が巻き起こった。

全員の力で優勝した二組の生徒たちはシステイーナが勝った瞬間観客席から飛び出しシステイーナを胴上げし始めた。その中にはグレン先生やセラも混ざっており目元にはうれし泣きなのか涙も浮かんでいた。ハーレイ先生に至っては信じられないばかりに泡を吹いて気絶している。

魔術競技祭閉会式は例年通り肅々と進んだ。過去に類を見ない大番狂わせの余韻で生徒達が騒がしい点と、来賓席に女王陛下がいることを除けば今までと変わらない閉会式である。

ただし極一部の人間にとってはこの後の展開に命運が掛かる緊張の時間である。

国歌斉唱やら来賓の祝辞、結果発表が恙無く終わり、いよいよ迎える勲章の下賜。王室親衛隊長と学院が誇る第七階梯^{セブテンバ}魔術師を伴い、アリシア女王陛下が表彰台に立つ。今この時、これ以上になく強力な護衛に守られた女王陛下を害せる存在はそうそういないだろう。

司会進行が指示をし、二組の代表者と担当講師が前へ出る。合わせて拍手喝采が上がり、一部の生徒や講師陣から羨望の溜め息が洩れた。一生に一度とない名誉を賜るチャ

ンス、羨ましくない者などいなかった。

だが奇妙なことに二組より出てきたのは担当講師たるグレンやセラではなくアルベルト、代表者も生徒ではなくリイエルである。学院では何故グレン先生達ではなく、見慣れない顔の二人に生徒と講師は困惑の声を上げ、二人を見知っているアリシアは戸惑いに首を傾げた。

「この馬鹿騒ぎはもうお終いにしましょう」

「何?!」

妙な空気が蔓延する中、アルベルトとリイエルの姿がぐにやりと歪む。蜃気楼に包まれたかのように輪郭があやふやになった後、そこに立っていたのは真剣な眼差しのフィールと緊張の面持ちでアリシアを見つめるルミアだった。

「なっ?!」 どういうことだ、フィール殿とルミア殿は今、町中にいるはずでは——!?!」

王室親衛隊からの報告でフィール達は未だ町中を逃走中と聞いていたゼーロスは、突如として目の前に現れた二人に驚きを隠せない。それは学院の生徒と講師、そしてアリ

シアも同様だ。唯一事の次第を把握していたセリカだけが面白そうに笑っている。

「どういうことも何も。2人と入れ替わったんですよ。セリカさん、お願いします——」
「《すっこんでろ》」

冷静にフィールが目配せをすると、セリカが魔術を行使する。

無数の光が地面を駆け抜け、表彰台を中心に結界が張られる。音すら中で何が起きるのかも遮断する断絶結界だ。これで邪魔者は一切介入できないし、外の人間に内部の会話が洩れ聞こえることもない。

応援として駆けつけようとした衛士達を阻む結界を忌々しげに睨み、ゼーロスが怒りに吠える。

「此の期に及んで裏切るのか、貴様!?!」
「……………」

凄まじい剣幕で喰いかかられてもセリカは応じない。只管に沈黙を続ける。まるでそうしなければならぬかのよう。

「大丈夫ですゼーロスさん。私は全て知ってます」

「つつ!!」

「僭越ながら陛下、その首飾り、よくお似合いですね。綺麗ですよ」

これはルミアが気づいた事だ。

女王陛下が何よりも大切に行っているはずのロケット・ペンダントの代わりに首元で輝く翠緑の宝石があらわれたネックレス。恐らくそれが呪殺具だとフィールは理解していた

フィールの唐突な賛辞にアリシアとゼーロスが目を瞪る。だがそれもすぐに嬉しそうな微笑みと苦虫を噛み潰したような顔に変化した。

「ええ、そうでしょう? 私の一番のお気に入りです」

朗らかに、弾むような声音で答えるアリシア。アリシアが本当は娘を溺愛し、娘達と共に写った写真を入れたロケットを何よりも大切に行っていることを知っていたフィールは、ここで確信を得た。

「了解です陛下。コレに誓って陛下をお助けします。ゼーロスさん、剣を退いてください」

「余計な事をするな！」

フィールは右手に『愚者のアルカナ』を取り出し、アリシア陛下に見せる。だがゼーロスにはその意味が通じなかったよう^{レイビエ}で細剣を鞘から二本抜く。

「つつっ！ 頭のお堅い騎士が……！！ 退けば全て解決出来るつてのに……！！」

「ならぬ！ 陛下の為、私が直々に引導を渡してやろう！！」

予想はしていたが、可能性は低いと思っていた。

【愚者の世界】を起動させるにはあと数歩は前に行かなければならない。そしてその先にいるのは……

「（問題はその一步が途轍もなくヤバいと言う事……）」

その数歩で立ち塞がるのが『双紫電』ゼーロスだ。戦えば絶対に負ける為、戦闘は避けるつもりだったのだが……

「(……万が一の為に保険を仕込んでおいたとは言え、上手く作動する前に私が殺されたらルミアも私も終わる。保険頼りの戦闘なんて杜撰な賭けだけど……)」

フィールは右手にナイフを構えてゼーロスの前に立つ。上手く間合いに入ろうとしても、踏み込んだ瞬間死のイメーヂが頭をよぎる。失敗すれば全て終わり、成功すれば全て解決。この大博打にフィールは足を踏み入れる

「……やるしかない！ 《我が力の全てよ》！」

フィールは白魔【フィジカル・ブースト】をかけてゼーロスの間合いに踏み込んだ。ゼーロスの間合いから放たれる一撃、二撃——

「ぐっ……！」

フィールは一撃目を反応し、ナイフで逸らす。だが逸らし切れずに頬を切り裂き、ナイフも弾かれた。二撃目に放たれた細剣レイピアの一閃はフィールの身体の中心を深々と貫いた。

「がつ……!」

「フィールさあん!!!」

「終わりだ! フィール!!ウォルフオ——つつ!?」

そこから心臓部を切り裂こうとしたゼーロスの身体が全く動かない。フィールの最大の賭けは成功した。この間合いに踏み込んだ以上、一定効果領域内にアリシア陛下は居る。

「つつう!! 陛下! 今です!!」

「何を……! 陛下つつ!」

フィールは細剣レイピアで貫かれたまま、【愚者の世界】を発動した。そしてフィールの合図と共に陛下の胸元に飾られていた首飾りは外され、投げ捨てられた。

「陛下っ！ 何を……!?!」

「ぐっ……!! かはっ……!!」

「フィールさん！ 大丈夫ですか!?! 今回復魔術を……!」

「大丈夫ですよゼロロス、全て終わりました」

動けないゼロロスにアリシア陛下は告げる。

フィールは胸元から抜いた細剣レイピアの一撃に血が流れ、吐血している。傷が深過ぎる為、「ライフ・アップ」では治す事が出来ない。ルミアは泣きながらどうすればいいか考え、と、ルミアの肩に手が置かれる。

「大丈夫だ。《全ての傷よ・我が元に復元・回帰せよ》」

セリカがフィールに白魔儀「リヴァイヴァー」をかけると、フィールに深々と貫かれた胸元の傷は消え去っていた。苦しんでいたフィールは立ち上がり、胸元の傷を確認する。あの時、脳天や心臓部、首を狙われていたら即死だった

「つつ……三節で『リヴァイヴァー』とかやっぱり無茶苦茶ですね。セリカさん」
「全く、無茶をするな。だが良くやったファイル」

「グレン先生と私の共通のヒントが無かったら分らなかったよ。『リヴァイヴァー』も含めて、ありがとうセリカさん」

ファイルがゼロロスに『デイスベル・フォース』をかけて動けるようにした。保険頼りの戦闘なんて2度とやりたくない。

「何故身体が動かなかったのだ……？」

「ああ、服に魔術を仕込んでたんですよ。条件起動型の呪具カウスとして黒魔改『ブラッド・リガール』を使って、神経を一時的に封じて動けなくさせました。『貫かれた原因の人間』と言う条件起動でなんとかかりました」

ただ黒魔改『ブラッド・リガール』は本来なら七節詠唱な為、実戦的ではない。起動する条件も相手の身体に触れていなければ発動しない。あの時、弾かれナイフを失った右手で触れていたから出来たのだが、結構乱暴な賭けだった。

「なら何故呪殺具は発動しなかったのだ。勝手に外せば……陛下は……」

「呪いも魔術に変わりない。【愚者の世界】に入ってしまったえば封殺可能ですよ」

『愚者のアルカナ』を見せるとゼーロスは驚いた。

ゼーロスは漸く思い出したようだ。その『愚者のアルカナ』にどう言う意味が含まれていたのか理解したようだ。

「『愚者のアルカナ』に魔術を封殺する固有魔術、貴殿は一体？」

「内緒です」

軽く舌を出して子供のようにはぐらかすフィール。

だが、ゼーロスは「そうか……」と納得したようで、胸元を貫いた事に頭を下げた。やっぱりこの人は騎士だ。深々と謝罪するゼーロスを許したフィールはルミアを見る。

「ルミア、いい加減、腹割って話しなさいな。今だけ、この時だけしか伝えようとして伝えられない事だつてあるんだから」

「でも……」

「私は……出来なかった。今の貴女にはそれが出来るんだから。ほら、行った行った」

軽く押し出されたルミアは不安げな眼差しを女王陛下に向ける。アリシアはアリシアで愉しげなセリカに何やら耳打ちをされ、おずおずと一步踏み出していた。

無言で見つめ合う母と娘。両者共にどんな言葉を投げかければいいのか、どんな態度で応じればいいのか分からず戸惑っているらしい。側から見ている者にとっては焦りたい事この上ない沈黙だ。

それもアリシアが迷いを振り切るように一步踏み出し、ルミアを力一杯抱きしめたことで終わる。

「へ、陛下……」

「ありがとう、エルミアナ。貴女を捨てた私などを助けてくれて、ありがとう。こんな親を、もう一度お母さんと呼んでくれてありがとう……!」

「——っ! うあ、お母さん……」

ルミアは泣き出してアリシア陛下に抱きつく。いや、今はただのアリシアとルミアの再会だ。陛下とか関係なく、家族としてアリシアは抱き締めた。

「私、本当はずつとこうしたくて……!」

「ありがとう……ありがとうね……エルミアナ……!」

ずつと胸の内に溜め込んでいた想いが爆発し、ポロポロと涙と共に零れ出す。親娘揃って、よく似た泣き顔だ。

抱き合つたまま二人は互いに秘めてきた想いを吐露し合い、涙を流しながら久方振りの親娘の触れ合いを続ける。その光景をゼロロスは少し笑った様子で見、フィールは疲れたのか競技場に座り込む。セリカはフィールに近づいて優しく笑っていた。

「フィール……本当に良くやったな」

「うん、此方こそありがとう。——セリカ……伯母さん」

セリカはフィールの頭を撫でる。

少し恥づかしいような顔をしながら、2人のハッピーエンドを優しく笑いながら見ていた。

私はこの為に戦つたんだ、とフィールはしみじみと思いながら自分の胸元にしまつて

いたロケット・ペンダントを見ながら。少しだけ急所からズレたのは、此れのおかげだった。

「ありがとう。——お母さん、お父さん」

ファイルは少し傷付いたロケットを握りしめて空を見上げていた。

第8話

魔術競技祭閉会式にて巻き起こった騒動は、ゼーロスの投降とアリシアの卓越した演説と手腕によつて大事なく収まつた。

セリカの断絶結界によつて内部でのやり取りを知られなかつたことを利用し、アリシアは事実を幾らか脚色して事の次第を伝えた。フィールについても貫かれた跡は「セルフ・イリユージョン」で誤魔化した。服の再合成はセリカの魔術を使うより発注した方が良いとの事、傷を負わせたゼーロスが払ってくれるらしい。

帝国政府に対するテロ組織の卑劣な畏、勇敢な魔術講師と学院生徒の活躍と。華々しい部分を自然に強調し、裏事情を隠蔽。民を見事に欺く話術はフィールも感心する。

最後の最後で一悶着あつたものの、今回の魔術競技祭は無事に終わりを迎えたのであつた。

南地区裏道にて、ひっそりと人影が歩いていった。

「まさか、失敗するとは思いませんでしたわ……………」

その言葉とは裏腹にどこか楽しそうな口調。
くつくつと笑いながら事件の事を思い出す。

「せっかく女王陛下を人質にセリカ^{セブン}アルフォネアという規格外の動きを封じたというのに……………流石は第七^{セブン}階梯^{テンバ}、なかなかの狸ですわね。それに……………ふふ」

あの時、女王陛下の前に現れたフィール^{バイン}ル^{ナリ}ウォルフオレン。以前戦った事があるが、魔術の封殺が出来るのは《愚者》グレン^{レグ}レーダスだ。その他に出来るとするなら同じ魔術特性を持つ人間か、はたまた血縁^{イレギュラー}に關係しているのか。『時渡り』、正しく時空を超えてやってきた一つの異分子にくつくつ楽しそうに笑いながら歩いていた女が、ふと足を止める。

「なるほど……………どうやら帝国もボンクラばかりでは無いようですね……………」

いつの間にか、女の前方に二つの人影が現れていた。

「……俺達に与えられた任務は二つ。一つは最近、過激な動向が目立つ王室親衛隊の監視。そしてもう一つは……女王陛下側近の内偵調査」

帝国宮廷魔導師団のアルベルトとリエルがその女の前に立つ。アルベルトは内偵の経歴関連を全て調べていたが、どれも大した情報は無かったのだが。

『アルベルトさん。女王陛下側近のあのメイドさんに注意してください』

『何……?』

『遠目で見たあの人の眼は……テロリスト事件での唯一の逃亡者と同じ眼に見えました。まるで実験動物を見る眼で……』

フィールルウォルフオレンが見たあの眼はテロリスト事件で戦った仮面の女と同じ眼、いやもしかしたら同一人物の可能性が高いとアルベルトに言っていた。

だが、首飾りの呪殺具カラスの報告と、経歴書を見て確信した。あの経歴書は綺麗過ぎた故

に逆に疑いを持ったのだ。

「最近、俺達の行動がどうも読まれているように思えた。あの娘の戯言だと思っていたが、まさか一番可能性が低いと思われていた貴女だったとはな。女王陛下付き侍女長兼秘書官……いや、天の智慧研究会の外道魔術師、エレノアⅡシャーレット」

その瞬間、辺りが更に暗くなる。

エレノアはくつくつと笑いながらアルベルトを見据える。

「お前達は、一体何が目的だ？ 以前、学院で起きたテロ事件ではエルミアナ女王やフィールⅡウォルフォレンを誘拐しようとしたが、今回は殺害しようとした……行動に一貫性がない。お前の組織は一体何を企んでいる？」

「……………『アカシックレコード禁忌教典』」

「何……………？」

天の智慧研究会に所属する魔術師が口を揃えて言う言葉、禁忌教典。それが何なのかは頑なに話さないが、天の智慧研究会の奴はこの言葉だけは話す。ロクでもない物であ

るのは確かだろう。

「そう、我々が目指すは大いなる天空の智慧、そのため王女と『時渡り』の少女……とでも言っておきましょうかしら？」

「生死は問わない……と？」

「もちろん生きていらつしやる方が良いのですが、急進派とでも言いましょうか……組織の中にはせっかちな方も居ますので、ふふっ」

エレノアは笑いながらも多少は情報を漏らした。いや態度である事は確かだ、知られても良い情報若しくは、知られた方が都合の良い情報だったのだろう。

「殺すなよりイエル。捕らえて組織の情報を吐かせるべきだ」

「……………どちらにせよ、斬る」

「ふふふ、私昂つてしまいそう!!」

闇夜の中で三人の激戦が路地裏で繰り広げられた。

それから夜が更ける頃、街灯や住宅の明かりのみに照らされた薄暗い町中を歩いていった。ファイルはため息を吐きながら

「やつと終わった……銀鷹剣付三等勲章とか正直要らなかつたし……なのにまた後日取り調べとか……」

「あはは、仕方ないよ。私達が事件の中心人物なのには変わりないから」

勲章を貰った為、時間がかかなり遅くなった。クラスの全員は既に打ち上げに店に行つてゐるらしい。グレン先生やセラ先生も色々聞きたかつた事はあるだろうが、セリカさんが止めてくれた。新しい服も貰つてとりあえずは収まつた。

「でも、何だかんだで丸く収まつたし」

「まあ、なんだかんだ被害はゼロだしね」

結論を言えば事件は解決。ゼーロスが投降宣言をし、学院長と女王陛下の弁舌によつてどうにか会場内の人間の混乱を抑えることに成功し、その場でゼーロス達の処分が

下った。

公衆の面前なので厳しい懲戒処分の体を装う必要があったが、女王陛下の為ということもあつて情状酌量の余地は充分とのことらしいけど、別段私もルミアも責めるつもりはなかった。胸元貫かれたのは別として。

「ハア……」

「セラ先生と喧嘩したからまだ顔合わせ辛い？」

「まあ……うん。そうかもね」

まだ、顔を合わせるのが少し躊躇する。

単に子供の駄々なのは分かっているのだが……それでも塗り潰せない未来の幸せもあるのだ。どちらも持つていいかもしれない。だがどちらも持つてフィール＝ウォルフオレンと言う偽りの自分を演じ切れるのか分からない。既に感情はセリカ伯母さんによつて少し半壊している。罅が入った心の壁にこれ以上の痛みが来るとするなら。

「ねえ、フィールさん」

「……ん。どうしたの？」

「フィールさんつてもしかして……未来から来たの？」

ドキツと心臓の鼓動が早まる。

ルミアを見ると、少しだけ真剣な顔でフィールを見据える。フィールはその言葉に笑って誤魔化した。

「ははっ、何の冗談？ 私が未来から来たって」

「誤魔化さないで……私は真剣なんだよ？」

真剣な顔でフィールを見る。

フィールは少し声のトーンを落としてルミアに聞いた。

「……どうしてそう思ったの？」

「……あの『愚者のアルカナ』は先生しか使えない固有魔術なのを知ってるから。フィールさんがセラ先生やグレン先生に対して向ける眼が少しだけ、私達と違うから……」

「……………」

沈黙。ルミアにとってそれが答えだった。

考えてみれば幾つもあった。『愚者のアルカナ』に『時渡り』にフィールル自身の容姿。それはまるでセラの髪を黒染めしたかのように似ている。セリカとも親しかった。近くに居たルミアにしか分からなかっただろう。その姿は幼い自分を救ってくれた《愚者》と全く違わないと言う事に

「フィールルさん。本当はグレン先生とセラ先生の——」
「違う！」

フィールルは強く否定した。

だが、その動揺、その焦り、その叫びこそ答えに他ならない。

「それは違うよ。ルミアさん」

「フィールルさん……」

「確かに私は未来から来た人間。それは認める。けど、それでも違うよ。あの2人は……」

自分を産まなかった別世界の住人だ。

幻みたいだつて分かつている。本当の親子のように甘える事が出来るなら、どれだけ幸せなのか分かつている。けど、それだけは出来ない。私は未来から来た別世界の住人、本来の結末から逃げて、未来を捻じ曲げる為に来た《愚者》なのだ。

けど、フィールは何より大切な人達のためにずっと一人で頑張ってきたんだ。そんな人が独りで血濡れた世界から2人を守るだけに動くななんて間違ってる。だが、それでもフィールは首を横に振った。

「ルミアさん気持ち嬉しい。けど、これは私の問題。部外者が口を挟まないで。私は独りで構わないから」

「そんなのおかしいよ！ 伝えなくちゃ分からないでしょ！ だいたいこのままじゃグレン先生やセラ先生は嫌でも巻き込まれて、フィールさんは誤解されたままなんだよ！！ この世界じゃ他人だとしても、せめて先生達にはちゃんと……」

「駄目！ ……止めて……」

ルミアの腕を掴んで俯いたままフィールは弱々しい声で告げた。

あの2人にだけは……
知られたくないの……

そう言つて頭を下げるフィールがまるで小さな子供のように見えて、ルミアはこれ以上、何も言えなかつた。

「ごめん……先に行つて、今は独りにさせて」

「……うん……分かつた」

ルミアは打ち上げの店に先に行つた。

ため息をついて俯いた顔を上げて右手にナイフを構えて裏路地から一步下がる。今になつて気付くなんて甘くなつた証拠だ。

「……誰ですか。こんな真夜中に監視なんて」

「……すまんのお、本当は出るつもりはなかつたのじやが」

「……もう1人居ますね？」

「ほう？ 気付いておったのか、いやはや鋭いのお嬢さん」
「――下がりなさいバーナード」

はっはっは、と笑う老人ことバーナードを諫めるように、通路の影から別の人物が彼の前に姿を晒した。

もう1人の人物――赤髪の魔術師、月明かりに照らされ妖艶な姿で不敵に笑う魔術師。

「初めまして、あなたがフィール＝ウォルフオレンでいいわね」

「……はい」

真紅の女性に声をかけられ、咄嗟に頷くように答える。

私はこの人を知っている。帝国宮廷魔導師団の称号はタロットカードに準えているけれど、その中で2枚特別な称号がある。

一つは《世界》。これは全魔術師の頂点に立つ者にしか与えられない称号。それを持つのは生涯セリカ＝アルフォニアを除いて他に居ないだろう。そしてもう一つは《魔術師》。帝国宮廷魔導師団の実質的頂点に君臨する存在。

「私はイヴⅡイグナイト。まあ、簡潔に言えばグレンやアルベルトと同じ特務分室の、室長と言えはわかるかしら？」

「それで……そんな人が何の話？」

正直、そんな大物がこつちに来たという点を考えてファイルの中で嫌な予感が渦巻いてきた。イヴⅡイグナイトについては知っている。未来にいた元上司だが、上司と思えないヒステリック女だ。

頼りになるが、実績を積む事に他人を使う。

だからこそ、あまり、いい思い出はなかった。

「そう警戒しないでくれるかしら？　これは貴女にとっても重要な話になるんだから」「私にとつても？」

「ええ。それとも腰掛けて話し合いますでしょうか？　……未来から来たグレンとセラの娘さん？」

「……つつつ！」

家の居間で、イヴは妖艶な笑みを浮かべながら言った瞬間、フィールはロープに隠したナイフを投げ付けた。だが、それをバーナードは素手で弾く。聞かれていた、よりもよって自分の中で3番目に聞かれたくない人に。

「あら怖い怖い。禁句だったかしら」

「次言ったら殺しますよ？ イグナイトの出来損ない」

「つつ……！ ムカつく娘ね……。いや、そう言う所はグレンにそっくりね」

「……2度は言いませんよ？ 女狐」

正直、私はこの人が嫌いだ。

それは未来でセラとグレンの救援要請に何も応じなかった人物だからだ。未来でも結果と手柄が全て、その為なら何でも利用する。外道魔術師と遜色ない人間のクズだからだ。

「単刀直入に言うわ。私の下につきなさい。悪いようには使わないわ」

「……何で私を選んだんですか？」

「仮面の女、本名エレノアⅡシャーロットを撤退まで追い込んだ上にB級以上の軍用魔

術の使用、みすみすそんな人材を逃すと思う？」

冷静にファイルは問い質すが、イヴは冷静にそれを返す。

「異能者はこの世界では異端の存在じゃないんですか？ 存在そのものが異端の私が言えた事じゃないでしょうけど……」

「異能者かどうかは私にとつては関係ないわ。それに、私の下にいればあなたの安全もある程度は保証できるわ」

「……………」

「貴女の能力は『天の智慧研究会』にはバレている。並行世界の人間云々までとは行かずとも異能染みた力を行使した以上、狙われるのは当然と言うべきかしら」

どうやら知られていたようだ。

だが一体どうやって調べた？ 『時渡り』はともかく、軍用魔術を使った戦闘は『天使の塵』事件とテロリスト事件の時のみ。グレン先生やセラ先生は多分関与してるとは思わない。となるとセリカさんか学園長の可能性が高い。セリカさんの場合間接的に伝えて、学園長がそれを軍に報告した。それが妥当か。

「この世界でも貴女は自分の下に引き入れようとする人に対して道具みたいな言い方をしますね。貴女の下に就くつもりはありませんよ。この世界でも、2人の救援要請に對して何もしなかった人間の下に就くと思えますか？」

「断るなら是非もないわ。貴女の正体を上に報告するのもやぶさかではないわ。勿論あの2人にもね」

「つつ!!」

ナイフ握る力を強めながら、ファイルは怒りに顔を顰める。今にでも殴りかかりたいが、そんな事をしてしまえば私の正体がバラされるのは明白。ここで2人を殺せばそれこそ国が私の敵に回る……悔しいけど詰みだ。

「世界初の『時渡り』の成功例。そんな人間を標本にでもして献上するのは、それはそれで戦果になると思わない？」

「この……!」

「イヴちゃん。これ以上は儂も看過できんぞ?」

フィールは怒りの形相で決壊しそうな怒りを、バーナードの一声で押さえ込む。攻撃できない事を理解しているイヴは、余裕の表情のままフィールを見る。

「で？ 返答は……？」

「そんなもの断るに決まって——」

あんな人間の下に降って、宮廷魔導師団に入るかフィールは悩むまでもない。
今更人殺しなんてしたく——

「……えっ？」

待て、そもそも何で悩んでいる？ 何で迷っている？ おかしい。どうして宮廷魔導師団に入るのを渋っている？ イヴの意見は気に入らない。だが、それは正しい筈なのに。

まるで自分が人殺しをしたくないみたいな……

「……………」

この世界に来てから、甘くなつたから？ セラやグレンに会えた事に気を抜いていたから？ 光に当たり過ぎて、闇が怖くなつたから？

それじゃまるで、あの2人に愛されたいって思っているから？

「はっ、ははは………」

溢れた笑みはまるで嘲笑うかのようだった。

おかしい、おかしいよね。どうして今更自分の手を汚す事に躊躇していたのだ？ 優しさに触れて自分自身がそれを認めてもいいと思つたから？ 未来を変える《愚者》の姿がそれでいい訳がない。なのに光を許容して、甘くなつて、壊したくない筈なのに近づいてしまう。

馬鹿らしい。

まるでこれでは……

私が望んでいるみたいではないか？

自分があの2人に甘えたいと思つてるみたいじゃないか？

私は一体いつから守りたいと言う感情から愛されたいと言う感情に錯覚していた？

「ははははははははははっ!!」

ああ滑稽だ。何を迷う必要がある。

未来を変える為に自分は《愚者》になったのだろう。ただ邪魔する者を全て殺す為の殺戮兵器になったのだろう。自分を蝕んでいた優^呪しさに嘲笑する。ああなんて馬鹿らしい。こんな事に自分は甘えていたのだ、と酷く悲痛な笑いにイヴもバーナードも顔を顰める。

「何? 狂ったように笑って」

「いんや、ただ馬鹿らしいと思っただけ」

濁いた笑いを残しながら落ち着いていく。

まるで狂人の笑いだ。なのに不快感が湧かない。自分がやるべき事を再認識したよ
うな顔にイヴは逆に笑う。

「で? どうするかしら?」

「……………いくつか条件があります」

「言つてみなさい」

「一つ、基本的の仕事はルミアの護衛。二つ、学園に居る以内はその仕事を優先的に。三つ、私の知人が危機だった場合は任務よりそちらを優先する事。四つ、基本的に貴女の下に就くつもりはない事」

「ええ、それで構わないわ。利用し、利用される関係つて事ね。それで結構よ」

ファイルの条件を飲んだイヴはファイルの手を差し伸ばす。手は握らないが、ハイタッチするかのように手を叩いた。互いに利用し、利用される。それが今のファイルが打てる最善策だ。

「今日から貴方は帝国宮廷魔導士団特務分室所属。ナンバーはそうね……」

「《愚者》です。グレン先生は軍を抜けたなら、その席が空席な筈です」

「いいわ。執行官N.O. O《愚者》ファイル∥ウォルフオレンよ。魔導士団の礼服については後々に渡すわ」

「分かりました。ああ、あと一つ」

ファイルは笑ったまま振り向いた。

それはまるでフィールⅡウォルフオレンと言う偽りを完璧に取り戻したかのように無邪気に笑っているようだった。

「あの2人を利用するなら——」

フィールの姿が一瞬で消えた。

気付いた時にはイヴの首元に月明かりに照らされて光るナイフが突き付けられていた。

「——貴女でも私は刃を向ける。《愚者》を飼い慣らせると思わない事ですね」

「……つつ!?」

「……ほう、成る程のう。一本取られたようじゃなイヴちゃん」

バーナードは辛うじて反応出来たが、イヴには全く反応出来なかった。イヴは気付いた瞬間、反射的に後ろに下がる。あと数センチで裂かれる首元に手を当て、冷や汗が止まらない。

それは本物の《愚者》以上の存在の新たな《愚者》。バーナードでさえ本気を出された

ら勝てない可能性を肌で感じながら。

「じゃあねイヴ・イグナイトさん。精々、飼いきれないように注意する事ですね」
「……え、ええ」

笑えない。アレは何だ？

バッドエンドから来たフィールの15年の人生はこんな甘い世界より壮絶で、光すら無い絶望の世界。だがそんな場所だからこそ、フィールを強くした。アレは自分にはいこなせない。

特大の爆弾を引き込んだ気分になったイヴにはアレが怖いと子供のような言葉を口にしていた。

フィールⅡウォルフオレンはこの世界に漸く完成された。

脆く弱いフィールⅡウォルフオレンなどももう居ない。それだけが、この世界の異分子イレギュラーだと言う事をフィール以外に誰も知る由は無かった。

第3章 未来の愚者と蒼き刃を振るう者 第9話

昨晩にアルベルトさんから依頼の連絡を受けていた。

タオルで髪を拭きながら、通信用魔導具の応答に答えた。制服越しに貫かれた部分は血がついていたのでセラより早く風呂に入っていた。

『……フィール、お前に依頼だ』

『私に依頼……大方改まっつてのルミアの護衛ですよね』

『ああ、アリシア陛下直々の依頼を此方で受ける事になった。内容はルミア王女の護衛だ。本来ならお前も護衛対象に含まれるがエルミアナ王女と一緒になら問題ないこの事だ』

『つまり私達は囃、発案者はイヴさんですね？』

『鋭いな。その通りだ、あの女狐め』

そうですか、と冷めた口調で返答する。

まあそんな感じだろうとは考えていた。宮廷魔導師団に入って間もない得体の知れない人間だ。使い方が分からない以上、それが適任だろう。

『しばらくの間、そちらにリエルを送る。済まないが世話役を頼む』
『分かりました』

感情のないフィールの返答にアルベルトが質問する。

『フィール……お前は何とも思っていないのか？』

『……何がですか？』

『イヴの決定と、宮廷魔導師団所属について』

『イヴさんについては殺したいと思いましたがよ。まあ宮廷魔導師団はどの道近い内に入るつもりだったのでタイミングだけは有り難かったです』

手を汚す事さえ構わないようなフィールの覚悟に通話越しにアルベルトは顔を顰める。その覚悟は15歳の少女達に押し付けていいものではない。今の宮廷魔導師団が人手が足りないのは分かっているが、情けないと思ったのも否定できない。

『……人殺しの碌でもない任務もある。本当に何も思わないのか?』

『心配してくれてるんですね。けど、別に構わないです。今の私には守りたいものがあるから……だから、いいんです』

『……そうか。健闘を祈る』

ファイルの答えにアルベルトは少しだけ、後悔した。

まだ15歳でここまで少女達を追い込んだ外道魔術師達に少女達は死ぬ覚悟も手を汚す覚悟も持っていると言う事に。

先月あった魔術競技祭が終わり、何事もなく日々を過ごしていたグレン達。だが、突然校内放送でグレンが名指して呼ばれたのだ。グレンは呼び出されることに心当たりがあったのか冷や汗をダラダラと流しながら全速力で学院長室へと走って行った。

学院長はグレンに封筒を手渡した。開けるよう促されたので中身を確認する。その中身を見てグレンは驚きを隠せなかった。

「これって鷹の紋……？　って……女王陛下公認の帝国政府公文書?!　そ、それに設定されてる秘匿等級が高い……　え、ちよこれって帝国軍の人事異動に関する最重要機密文書じゃないっすか?!」

「うむ、今回その軍からこの学院に編入生が来る。そこにはグレン君の担当クラスに編入させる指示が書いてあるんじゃない」

その事から推理されることは一つ。ルミアやフィールの護衛として帝国軍から派遣されてくるといったことだ。彼女の秘密を知る者は少ないが帝国政府、しかも女王陛下公認となればルミアのことを知っておりなおかつ信頼できる者でなければ護衛は任せられない。

おそらくだが、帝国宮廷魔道士から派遣されて来るはずだ。グレン自身も元帝国宮廷魔道士だったため彼らの強さは理解している。その中の一人が護衛として来てくれるなら非常に心強い。

「えつと内容は？」

「ルミアの護衛だ」

「ルミアの……あれ？　黒猫……フィールは？」

ルミアの護衛と言われれば分かる。だが、フィールに護衛が無いのはどう言う事だ。

「続きを読めば分かる。誰が入るのかもな」

セリカは口にした。

グレンの予想では護衛の一人はクリストフだと考えた。彼は防御に関する魔術ならば帝国軍の中で随一と言って良いほどの鉄壁を誇る。年代も違和感がないし、これ以上の適任はいないと思いつながらグレンは持っていた書類を流し見する。

だが、護衛人の欄の名前を見るとクリストフとは書いておらずそこには書いていた内容……

『ルミアアインジェルの身辺警護の任務をフィールウオルフォレンに一任する。更には、アルザーノ帝国魔術学院へと派遣されるリエルレイフォードの指示、連携、補佐を命ずる物とする』

「……はっ？」

グレンはその情報が飲み込めなかったのか、混乱し頭を抱えた。フィールにリエルの現場監督を一任と書かれていたのだ。

「待て待て、リエルは兎も角、黒猫に一任……つてどう言う事だよ!」

「聞いていないのかグレン君? 今のフィールちゃんは帝国宮廷魔導師団特務分室所属の執行官として入隊する事になったと」

「なっ!? んな馬鹿な! 何で……!」

「特務分室室長直々のスカウトと聞かされておる」

「つつ! イヴの野郎!!」

グレンは学院長室から自分の教室まで走って行った。

イヴの策略だと分かった以上、フィールは帝国宮廷魔導師団に入ったのだろう。このままだとフィールは自分のようになってしまう事を恐れ、止める為に既に足が動いていた。

今の時間はセラの授業、グレンは急遽学院長に呼ばれた為、副担任だったセラに授業を任せていたのだが、フィールは肘を突きながら眠たそうに授業を聞いていた。

そんな中で教室のドアがピシヤリ！ と強めの音を出して開く。軽く息切れするグレン先生にセラも生徒達も戸惑う。

「黒猫、話がある。セラ、授業中悪いがお前も来い」

「……えっ？ う、うん」

「何ですか急に……今授業中ですよ？ 先生——」

「お前ら悪いが少し自習してくれ、分からなければ後で俺が見てやる。黒猫、ちよつと来い」

「はこ」

真剣な表情のグレンに全員が戸惑う。

フィールとセラはグレンの元へ行き、それを見たシステイナーナとルミアがこつそり跡をつけて行き、話し合いを別の場所へと移す事になった。校舎裏まで連れてこられたフィールにグレンは壁ドンし、声を荒げて質問する。

「どう言う事だ黒猫！ 何でお前が帝国宮廷魔導師団に所属してんだ!？」

「どうもこうも室長のスカウトですよ。何か問題でも?」

「今すぐ除隊しろ！ 分かっくんのか！ 帝国宮廷魔導師団が何やってるのか!」

「外道魔導師の排除、殺害ですよ。それくらい知ってます」

「わかってんなら今すぐそんなとこ除隊しろ！ 俺からもイヴに言っ——」

「断ります」

グレンの言葉にただ冷たく返答をしたフィール。

グレンはその事を見開き、フィールは口を開く。

「宮廷魔導師団ならある程度の外道魔導師の牽制程度にはなるし、どの道狙われる事に変わりありません。だったら宮廷魔導師団を頼って根本的な早期解決でもしなきゃ私もルミアも狙われ続ける。それが最善策くらい先生なら分かるでしょ?」

「そうかもしれねえ………だがな、あの女はセラを見殺しにしようとした女だぞ!？」

お前の事だつて利用価値のある駒とは思ってねえはずだ！ それに、自分の生徒を血塗られた闇の世界に行くのを黙って見過ごせるか……!」

ため息をつくフィール。

だがそれではまるで昔の自分のようになってしまおうとグレンは恐れていた。笑顔が消え、殺す事にしか意義のない地獄。フィールはグレンの激昂に靡く事もなく淡々と口にする。

「黙って駒になる程、私は間抜けじゃありませんよ。単純に学校に通う事にルミアの護衛が追加された程度です。別に問題じゃありませんよ」

「だが……………」

「しつこいですグレン先生。これは私自身が決めた事です。魔術の闇から逃げた貴方はすつこんでいてください。ハッキリ言って邪魔です」

「つつ……………!!」

冷たく突き放す言葉にセラやシステイーナ達は驚きを隠せない。まるで自分が知っているフィールとは別人のようだ。グレンは黙っていられずに自分の手袋をフィールに投げた。

「先生!？」

「決闘だ！俺が勝ったら宮廷魔導師団から除隊しろ！お前が勝ったら俺はもう何も言わない。だから受ける！」

「いいですよ。その決闘、受けましょう」

断る素振りも無く、フィールは手袋を拾った。

システイーナやルミアは止めに入るが、フィールは正論を返すだけだ。

「もう止めてよ2人共!？ フィールも何かおかしいよ!」

「私は宮廷魔導師団に入るだけ、それを止めようとしたのはグレン先生。別におかしくはないでしょ?」

「だからって2人が戦う事ないじゃない!」

「邪魔しないでシステイーナ。どの道、こうなる事は分かってたから」

グレンはきつと心から私のことを心配してそう言ってくれているのだろう。普段は口クでなしな講師ではあるもその心は誰よりも熱く、優しい心を………それこそ正義の味方としての正義感を持っているのぐらいフィールも理解できている。

何を言っても止まらない以上、戦うしかないのだ。

場所は校庭のグラウンド。

生徒達全員が使っていない時間帯だ。授業を放り出して決闘をする必要は本来なら無いのだが、ファイルが帝国宮廷魔導師団に所属してしまった以上グレンも黙っていられなかった。

「ルール方式は非殺傷系呪文によるサブスト。模擬剣や徒手空拳による近接格闘戦もあり、降参、気絶、致死性を持って術者の敗北を決める。それでいいですか？」

「ああ、問題ねえ」

学生レベルでよくある模擬魔術戦のルールの説明にグレンは文句はなく神妙な顔で頷いて肯定する。サブスト・ルール下では非殺傷系のアサルト・レベルの攻撃呪文を殺傷系の呪文と見なされて行われる特に珍しくないルールだ。

判定はセラ先生にやってもらおうようだ。システィーナやルミアはその決闘を見守る。

「では——始め!!」

《雷精》

フィールが魔術を使う前にグレンは「愚者の世界」を使って魔術を封殺する。システィーナやセラはこの戦いに関しては接近戦で挑めるグレンの圧勝だと思っていた。幾ら魔術師として優秀なフィールでも魔術を封殺されてしまえば勝ち目がない。そう思っていた。

だが……グレンの帝国式軍用格闘術をフィールは容易く受け流し、グレンの腹にフィールの渾身の蹴りが当たった。

「ぐっ……!?!」

「甘いですよ先生。魔術を封じた私には接近戦が出来ないと思つてたんですか?」

グレンの一撃一撃を受け流し、フィールにカウンターに投げ技まで食らわされるグレン。セラやシスティーナは信じられない顔をしていた。グレンは魔術師としては三流だが、実戦経験はフィールより遙かに上の筈だ。鈍つているとはいえ、生徒に遅れを取

る筈なのに。

「帝国式軍用格闘だどっ?! フィール、お前何処でそれを……!」

「秘密です。降参してください先生」

「するかよ! まだ決着は着いてねえ!!」

グレンは諦めるつもりはない。

それは単純に自分が経験した道を行かせたくないのだろう。フィールにとつてその優しさは嬉しかった。けど、それでは守れない。守れないし救えない。手を汚す覚悟も無ければ救いたいものも救いたくない。

「……仕方ない。私の固有魔術オリジナルで終わらせませす。グレン先生には申し訳無いけど、気絶してもらいます」

「やれるもんならやってみやがれ! 魔術を封殺した以上、格闘術じゃ決め手にならねえぞ!」

「いいえ、貴方はもう私の領域の中です」

フィールの魔術は既に完成されている。

グレンがフィールの近くに踏み込んだ瞬間、フィールの前から紫電が飛び出してきた。黒魔【シヨック・ボルト】が【愚者の世界】の起動中にも関わらずに魔術起動されている。それも詠唱の素振りすらなく。

「ぐっあああああ!!」

「次です。受け身取ってくださいね?」

黒魔【スタン・ボール】を詠唱無しに空気圧縮弾が弧を描いてグレンに炸裂。炸裂する音と振動の衝撃にグレンの身体はボールのように地面を跳ねる。上手く受け身が取れず吸い込んだ空気が肺から吐き出される。

「がっ……!! ぐっ……!!」

「先生!? 何で……先生は【愚者の世界】を……!」

「これが私の固有魔術だからだよ。グレン先生の【愚者の世界】は私の固有魔術、【女帝の世界】には通用しない」

「【女帝の世界】? でも魔術に変わらないんじゃない?」

フィールの右手に持つ黒いブラックストーンを取り出す。ブラックストーンの中には緻密な魔方陣が透けて見える。それは自分の領域を確立する為に作られた3次元的魔術の支配領域の構築だ。

「私の魔術特性パーソナリティを利用する為に作った専用の魔導機だよ。私を中心とした一定効果領域内に於ける万象の『過程』と『結果』の逆転、そして『結果』の決定権。それが私の固有魔術オリジナル、『女帝の世界』です」

「なっ……!?!」

グレンやセラが驚くがシステイーナやルミアにはよく分からない。『過程』と『結果』の逆転と言うのはどう言う意味かよく分からないからだ。だが、この固有魔術オリジナルの恐ろしさにグレンはいち早く気づいた。

「……『結果』を導かれた状態ならその後『過程』が動くなら!? ……要するに因果の逆転じゃねえか!?!」

「そうですね。グレン先生自身に魔術攻撃を当てた『結果』を生み出せたなら、過程の魔

術は意味をなさない。『結果』になぞる事で『過程』が生まれるのなら、詠唱も必要無い」「なっ……!!? それ無茶苦茶よ! じゃあ仮に相手を殺した『結果』を生み出せば、過程として動く魔術はその『結果』になぞられて発動するって事でしょ!!? それじゃあ防御なんて意味も無さないじゃない!?!」

正確には自分が出来る範囲での『結果』の決定権を得る事だ。

どれだけ堅い結果だろうが、どれだけ堅い金属だろうが、『結果』では斬れているなら『過程』はそれに合わせて結果に辿り着くようになる為、どんな物も切断出来るし、どんな攻撃も躲す事が出来ない。

『結果』では既に攻撃を食らっているなら防御出来ないし、『結果』に沿って過程が動くなら過程の動きに干渉も出来ない。

【愚者の世界】はあくまで術者の発動を妨害するもの、未来に進めば既に発動されている術式には効果がない。フィールは単純に言えば、未来を自分のシナリオに書き換えたのだ。

「防ぎなければ万象全てを停止でもさせないと無理ですよ。【変化の停滞・停止】の【愚者の世界】でも起こり得る事象が未来に既に反映されてる以上、術式は既に発動されて

いる。未来を決め、未来の通りに運命を動かす固有魔術^{オリジナル}。今の先生じゃ私に勝てません」

「だが、それ制約がデカい筈だろ……!」

「そうですね。私じゃあこの領域の維持は3分が限界です。けど、3分もあれば充分です」

この「女帝の世界」は未来で《愚者》だった頃に編み出した絶殺の領域。自分が行使可能な事象に干渉し、魔術に必要な過程である詠唱を省略し、結果を導き出す。

生み出したきっかけがフィールにとって憎いが、イヴ・イグナイトの眷属秘血^{シークレット}である

【第七園】だ。指定した領域内における炎熱系魔術の起動を

『五工程』^{クイント・アクション}

すべて省略できる秘術だ。領域内なら炎熱系魔術は無詠唱で発動できるのを自分の力で出来ないか考えた結果、生み出したのが「女帝の世界」だ。

女帝が決めた事は絶対に起こり得る独裁者の領域、あの最悪な未来から生き延びたフィールだからこそ出来る芸当だ。

「要するに領域にさえ入らなければいいだけだろ！ 効果領域だけなら【愚者の世界】より遥かに狭いだろソレ!!」

「いいえ、領域なんてあつてないようなものです」

フィールがグレンの目の前から消えた。

次に気づいた時にはグレンの腹にフィールの拳が吸い込まれていた。

「ガッ……!? ……どう……やつて……!?」

「この【女帝の世界】の本質は魔術を詠唱無しに重ね掛けする事、身体強化の魔術を5つ、見えなかつたでしょ？」

自身に重ね掛けした強化魔術は「フィジカル・ブースト」、「ウエポン・エンチャント」、「ラピット・ストリーム」、「エレキ・フォース」、「タイム・アクセラレイト」の五つ。どれも詠唱なく発動を重ね掛けする事でその速度はグレンの反応速度を容易く超えた。

「く……そつ……い……くな……フィー……ル」

「……すみません」

グレンはなす術なく気絶した。

セラじゃなくても分かるフィールの圧勝だ。倒れたグレンにシステイーナやルミアが駆け寄る。

「私の勝ちですよねセラ先生。もう行きますよ」

「う、うん。グレン君大丈夫!？」

「先生! しつかりしてください! 今回復を……!」

【ライフ・アップ】を掛けているシステイーナ達を横目にフィールはグレンの前から去っていった。セラにはその背中が寂しそうで、何処か遠くに行ってしまうように感じていた。

アレではまるで……

「昔のグレン君みたい……」

感情を押し殺した機械的な殺人者だ。

だが今は倒れたグレンの方へ身体を向けていた。

校舎裏にファイルは戻ると、【女帝の世界】の効果時間3分が経過した瞬間、ファイルは胸を押さえて膝を突いていた。

「……つつ！ ゴホツ……ゴホツ!!」

ファイルの口から少くない血が吐き出される。

無理もない。【女帝の世界】は自分の容量キャパシテイの限界まで頭を行使し、数秘術を超えた理論の未来まで計測し続けて結果を上書きする力だ。3分と言う短い時間で身体が悲鳴を上げて、マナ欠乏症の一步手前まで陥っている。

この魔術は文字通り未来を改変するファイルの切り札であり、諸刃の剣である。

「……ごめんなさいお父さん。私は……」

血を吐きながらも空を見上げる。

私は私の成すべき事をする。それだけが未来に来た私の使命なのだから、それが例え

血に濡れたとしても。

私は《愚者》として世界を生きるのがお似合いなのだから。

次の日からグレン先生は何も言わなかった。

セラ先生はファイルを心配してくれていたようだが、「大丈夫です」と返答したファイルに何も言えなかった。いつも通り、グレンは態度を崩さずに教室に入ってきた。

「つーわけで、今日からこのクラスの一員になるリイエルⅡレイフォードだ。仲良くしろよお前ら」

朝のホームルームでは、グレンが教卓の前でリイエルの説明をしている。そのグレンとセラの横ではちよこんとリイエルが立っている。

「すっげえ可愛いな！」

「お人形みたい！」

転入生の登場に浮き足立つ生徒達だが、ルミアとシステイーナはそれとは全く違う反応をしていた。

「ねえルミア、本当にあの子大丈夫かしら？」

「だ、大丈夫だよシステイ。リエルも宮廷魔導師なんだよ？」

「そうだけど」

ルミアの説得を聞くも、システイーナは今日の朝の出来事のせいであまり良い印象は得られていない。今日の朝、ルミア達と一緒にグレンとフィールが一緒に登校していたのだが、大剣を持ったリエルは走る勢いを殺さずに、グレンへとその華奢な手に握られる大剣を振りかざそうとし、フィールは咄嗟に威力を改変した「シヨック・ボルト」をリエルに浴びせて倒したのが今朝の出来事。

「(アルベルトさん……地味に嫌な仕事押し付けたな……)」

ため息しかないフィール。

アルベルトに通信用魔導具でリエルの性格を聞くと、「命令を待機している人形のようだから細かい動きに向いていない」だそうだ。笑えなかつたので、リエルの右耳に通信用のイヤリングを渡し、ある程度の指示を此方でする事になった。

「リエル||レイフオード」

「……………」

リエルはただそれだけ言うと、ペコツと頭を下げる。
自己紹介はそれだけだったらしい。

「グレン終わった」

「終わったじゃねえええ!! 趣味とか特技とか! お前自身の事を話せばいいんだよ!!」

「わかった」

それだけ返すと、リエルはまたクラスメイトの方へと向き直った。これは嫌な予感がするとファイルはリエルの左耳につけた通信用イヤリングにファイルがつけてい

る右耳のイヤリングで通信を開始した。

「リイエルⅡレイフオード。帝国軍が一翼、帝——」

『ストップしてリイエル』

「……何か間違ってるの？」

『今から細かく言うからそれを答えて』

「わかった。将来わたしは帝国軍への入隊を目指して？ イテリア地方から魔術を学ぶために、この学院に来ることになった？ 趣味は読書？」

イヤリング越しにリイエルの紹介を語っていく。まあ適当なのだが、リイエルの場合は指示を出されれば秘密すら漏らすから、この際嘘でも構わない。グレン先生達は此方を見るがアイコンタクトで察したらしい。

「なんか、変わった子だな」

「まあ、可愛いけどな」

「め、めっちゃ可愛いなリイエルちゃんって……」

「決めた、俺無派閥はだったけどリイエルちゃん派になるわ」

「そー！ 男子うるさい!!」

ここには変な奴しかいなかったことを忘れてた。

フィールはため息をついて危機を乗り越えたかのような疲れに見舞われた。何故だろう、疲れが溜まって仕方ない。

「それじゃ、気を取り直して、質問タイム」

「では、一つだけよろしいでしょうか？」

手を上げ、質問してきたのはウエンデイだ。

フィールはイヤリングを右手で隠しながら質問の応答の準備をする。

「ん」

「イテリア地方から来たとおっしゃっていましたがあなたのご家族はどうされてるんですの？」

「……家族？」

その問いにグレンが微かに目を見開き、リエルが少し眉を動かす。フィールはこの時ばかりは応答出来なかった。

「兄がいた……けど」

「あゝ、悪いが家族関連は避けてやってくれ。コイツ今身寄りが無いんだ」

「え?! 申し訳ありません何も知らなくて……」

その重い沈黙がクラスの中に流れる。

フィールは少し疑問に思った。確か未来で見た資料にはシオンとイルシアの2人だった筈。性格にはイルシアのデータを元に作られたシオンの妹、ならシオンが兄と言うべきなのにグレン先生は何故それを教えないのだろうか？

「じゃ、じゃあやい」

そんな空気を吹っ飛ばそうとカツシユが手を上げる。

君は英雄だとばかりにクラスがカツシユに感謝するが、カツシユの質問は飛び切りの爆弾発言だと後に気付く。

「リイエルちゃんとグレン先生とセラ先生って知り合いっぽいし、いったいどういう関係なんですか？」

「……わたしと、グレンとセラの関係？」

「う……それはだな……」

「ええつと……」

対処を考えてなかったのだろう、セラもグレンも考え込む。

……
こればかりはリイエルが考えた事を伝えた方がいいと思い、何も言わなかった。だが

「セラは、わたしのお母さんみたいな人、グレンはわたしのすべて、わたしはグレンのために生きると決めた」

リイエルは迷うことなくそう断言した。

その言葉をフィールは止める事は出来なかった。

「きやあああああ——ッ！ 大胆〜！ 情熱的〜！」

「ぐあああああ！ もう失恋だあああああ!!」

「夫婦なの!?! 隠し子なの!?! ご馳走様です!!」

皆が騒ぎ出す、禁断の恋やらセラ先生とグレン先生の子供とやらリイエルが行った大胆な告白を堂々と宣言したリイエルに対して、クラスメイトの女子達は黄色い悲鳴を上げて男子達は涙を流して雄叫びを上げた。

「ちよおま……なに言っちゃってんのおおおおお!!」

「私がお母さんかあ……えへっそう言われると照れちゃうね」

「セラも恥ずかしがってんじやねえええええ!! 否定しろ否定!!」

「? セラがお母さんみたいじゃダメなの?」

状況はカオスだった。

恋愛話に暴走する女子達に失恋と泣き叫ぶ男子達、夫婦認定されるグレン先生達に首を傾げるリイエル、額に手を当ててため息をつくシステイーナに苦笑いするルミア、ギイブルは我関せずと勉強をしている。

そして……

「……………っ……………っ？」

ズキツと微かに痛みを感じたファイルだった。

今になって、その痛みを許容出来ずに気にしないとばかりに目を背けた。その痛みが今になって分からなくなり、ファイルはため息をついて通信用の小型魔導具をポケットに入れていた。

第10話

リエルが編入してきた最初の授業は魔術の実践授業だ、今回の実践授業は200メートル遠くにある人型ブロンズ製のゴーレムに魔術を当てる実践だ。当てる場所は6か所あり、頭、胸、両手、両足だ。

「《雷精の紫電よ》——！」

広い競技場でシステイーナの呪文の詠唱が響いた、システイーナの結果は六分の六、つまりすべてに命中していた。

現在は魔術の実践授業。本来は座学なのだが、今朝の騒動の所為で大幅に時間が狂ったのとグレン先生のリエルに対する気遣いで急遽予定変更になった。

座学より実技の方が色んなものが見えやすいということでの授業なのだろう。うまくいけばクラスみんなに溶け込めるし、それで守るという意識が芽生えるかもしれないし。

ちなみに今の所、トップはシステイーナとギイブル。その次でウエンディ。ただし、ウエンディは最後の狙撃でくしやみをしたために狙いが外れたので普段通りならトップ二人と並んでいたことだろう。この三人はクラスの中でも文武共に高レベルだしな。ワーストから数えればカツシュが一発も当たってない。溜めなしであそこまで寄せられるのだからもう少し落ち着いて撃てばいい所いくだろうとグレン先生もセラ先生フオローしてた。

「よしー！」

「すごい、システイー！ 六発撃って、全部的に当たったね！」

ルミアはまるで自分の事のように嬉しそうに言った。システイーナは魔術に関しては一級の才能を持つのは知っていたが、最近確かに調子がいいと思う。

「やるじゃねーか白猫。全弾命中は中々難しいのに」

「システイーナちゃん凄いいね！」

セラもグレンも感心する。

確かに命中精度は中々いい。魔力のコントロールも詠唱の省略による劣化も見当たらない。学生レベルでは文句無しの実力だ。

「次、黒猫な」

「《一》《二》《三》《四》《五》《六》」

面倒そうに「シヨック・ボルト」は数を数えただけで発動され、六つ連続で全弾命中された。連射速度も威力も狙う速度も尋常じゃない。クラスの全員は驚きに満ちていた。グレンもその速さに若干引いていた。

「……流石だな黒猫」

「……いえ、別に」

ファイルは何故か少し機嫌が悪い。

態度に表してはいないが、ルミアぐらいなら気付いているだろう。ただ無表情に「シヨック・ボルト」を撃つファイルが何処か寂しそうに見えてしまう。と言うか不機嫌にも関わらず全く精度が変わらないのがファイルの凄味だが。

「次、リエルだな」

「(いや、出来るのかな? ……リエル)」

「《雷精よ・紫電の衝撃以て・打ち倒せ》」

リエルは詠唱の省略もなく普通に「ショック・ボルト」を撃った。しかしゴーレムに当たらない、4発くらい撃ったが、擦りもしない上に狙いが雑だ。

「グレン、これって「ショック・ボルト」じゃないと駄目なの?」

「ダメとは言わねーが、この距離じゃ、ほかの攻性呪文だとまともに届かねーぞ? 軍用

魔術は禁止だぞ」

「つまり、呪文は何でもいいと」

猛烈に嫌な予感があったのはフィールだけではなかった。グレンもセラも少しだけ冷や汗をかいている。

「《万象に希う・我が腕手に・剛毅なる刃を》」

「なっ……!!　ちよっリエルちゃん!」

リエルは拳を地面にトンと付けるとウール鋼で出来た大剣が生成される。高速錬金術はともかく、フィールでさえ辛うじて分かるルーン語のバグまで取り入れたそれは等価交換の理論から逸脱している。

「iiiiiiiiiiiiいやああああああああ!!!」

「っっ!!　《見えざる手よ》!」

だが、予想外にも大剣を投げるリエルにフィールは驚愕し、ゴーレムに当たる寸前でフィールは「サイ・テレキネシス」で大剣を止める。だが、「フィジカル・ブースト」も無しに投げられた大剣を止めた瞬間、予想以上のフィールドバックで右手が痺れた。

「(っっ!!　なんて力!!　想像の三倍くらい止める魔力が奪われたんだけど……!!?)」

「あのねリエル!　ゴーレムを壊そうとしないの!」

「でもゴーレムに当てるならこっちの方が」

「ハア……右手を構えて」

リエルは言われた通りに右手を構える。

フィールはリエルの背中に立ち、狙い方を教える。

「イメージするのは銃、自分の重心を少しだけ下げ、狙いたいと思う場所に真っ直ぐに腕を伸ばす。もうちよつと……」

フィールがリエルを後ろから抱き付くようにしながら、右手の位置を正確にしている。それを見た生徒達は珍しいと言わんばかりの視線を浴びせるが、男子達は美少女と美少女の絡みにご馳走さまと言わんばかりに凝視していた。

「銃の弾は真っ直ぐにしか飛ばない。自分の意識は銃弾の進む方向に気を向ける。はい、そのまま動かずに詠唱を試みて」

「《雷精よ・紫電の衝撃以て・打ち倒せ》」

リエルの「ショック・ボルト」はゴーレムの頭に当たった。セラもグレンも感心していた。教えるのが上手い。魔術と言うのは超高度な自己暗示だ。イメージ次第では

威力も使える魔術も変わる。

リエルはアサルト・スベル攻性呪文は使えても、狙い撃つ程の技量はない。フィールはこの場でそれを補正したのだ。

「……フィール」

「ん？」

「次、胸の場所に当てたい」

「その状態のまま下に18度右手を下げて、詠唱」

「《雷精よ・紫電の衝撃以て・打ち倒せ》」

六分の二とは言え、リエルにとっては中々の成果だ。

リエルはフィールを見ると、何処か疑問に思ったかのように首を傾げる。

「どうしたの？」

「……グレンに似てる」

「……はっ？」

「……フィール、グレンの教え方に似てる……いや、セラにも似てるし、グレンにも雰囲気

気が少しだけ似てる?」

「……………」

リエルの勘については野生並みだ。

フィールは少しだけその理由に気付いていた。未来でフィールはグレンは兎も角、セラヤセリカに魔術を教わったのだ。セリカから教わったのはグレンとフィールのみだ。解釈の仕方にも似ているのは偶然か血筋なのか分からない。

けど、似ているのだ。2人から継いだ血が……

「…………そんな事どうでもいいから、リエルの番は終わり。次の人が来るからその場から退いてあげて」

「わかった」

フィールは少しだけ悲しそうな笑みを浮かべて誤魔化していた。チャイムが鳴り、結局授業は終わる。フィールは毅然とした表情に戻り、教室へ歩いて行った。

授業のチャイムが鳴るとフィールはリエルが他のみんなと一緒に食堂に行くのを見た後、校舎裏に移動していた。いつも通り、作ったサンドイッチを食べるそれは一種のルーティンのようだ。

「よっ、黒猫」

「……何の用ですかグレン先生。いつも食堂で食べる貴方が」

「偶にはここで食いたいと思っただけだ」

「じゃあ私は離れますよ」

本とサンドイッチの入ったバケットを持ち、離れようとするがグレンが腕を掴んで止める。

「まあ待てよ黒猫。お前の方から聞きたい。リエルについてだ」

「……十中八九囮でしょうね」

「チツ、やつぱさそうか。リエルに細かい作業や任務は無理だし、敵を見たら斬るって奴に護衛させねえしな。上層部が絡んでんだろ」

まあ流石と言うべきだろう。

そこまで気付いているのは元帝国宮廷魔導師団だったからこそその思考力だろう。上層部は恐らく……いや、正確には連中を一網打尽にする為にイヴが画策したものだ。それを上層部が同意した。身近にリイエルと言う護衛をしたのはあくまで牽制、階級の低い奴らは手を出せないだろう。第二団アダブタス《地位オダイ》以上の大物を狙って手柄が欲しいのだろう。

「……グレン先生、貴方もルミアを守るなら止めはしません。けど、中途半端な覚悟で此方にまで首を突っ込むなら、死にますよ」

「死なねえよ。それに……俺はお前を止めれなかった。だったら俺はある程度の事をしなきゃ立つ瀬がねえしな」

「……普段はロクでなしの癖に」

「うっせえ！」

こう言う所が、やっぱり好きだ。

普通に甘える事は出来ないけど、今はこの人を見ていられる。私は未来を変える為に

来た。だけでもし許されるなら……

「(お母さんとお父さんに……いや、それは叶わない夢だね)」

ただ幸せを願う事が今の私に出来る事だから。

そんな事に甘える程、余裕がある訳でもない。今はそれだけが私に出来る事だと、フィールは心を押し殺して少しだけ微笑む。

グレンにはそれが笑っているように見えてたかは分からないが……

「で、こうなって……こここの元素配列式をマルキオス演算展開して……こう……で、こうやって算出した火素^{フラメア}、水素^{アクエス}、土素^{ソイル}、気素^{エアル}、霊素^{エテリオ}の根源素属性値の各戻り値を……こつち……こんな感じで根源素オリジン^{オリジン}を再配列して……物質を再構築……」

時間は放課後。錬金術の授業の後、リエルが実技授業での高速錬成が話題に上がってカッシユが昼休みに言ってた約束を早速使うことになり、リエルの高速錬成の術式

を教えてもらってるのだが。

「……わかった？」

「おう、全くわからん」

「同じく……」

錬金術は無機化学と似てる分、理論が分かると思っていたようだが、クラスの大半はリエルの錬金術の仕組みをまるでわからないでいた。

「す、凄すぎる……」

「なんて事……こんな術式、誰が作ったのよ……」

学力抜群のセシルやシステイがリエルの説明を受けて表情が驚愕に染まっていた。フィールもこの術式に顔を顰める。未来の資料には高速錬金術は使える事は知っていたが、実態はフィールの目視では分からなかった。

「恐れ入ったよ……どうやってウーツ鋼の大剣をあんな高速で錬成してたか不思議だっ

たけど……魔術言語ルーンの仕様に存在するバグすら利用していたなんて……」

セシルの説明から全員がわかるのはリエルが行った高速錬成は下手をすれば廃人になって壊れるレベルのものだ。改めて見ると凄いのだが……

「リエル、あなたいつもこんな事やってるの？　こんな的一步間違ったら脳内演算処理がオーバーフローして、廃人確定よ？」

「そうなの？　全然知らなかった」

システイの説明はつまり、身体は無事だったとしても、心は死んでしまう可能性があるという事だ。そんな危ない術式をよく躊躇いもなく使えるのは、人形のように何も感じないからかもしれない。

「はあ……みんな、真似しちやダメよ。この術式使いこなすには、錬金術に対する圧倒的な天賦のセンスがいるから。ここまでくると、もうこれ、リエルの固有魔術オリジナルみたいなものよ」

「出来るかよこんなの……」

フィールは少し考え込みながら右手を地面につける。

一応、理論は分かったがフィールではリエルのように三節は無理と判断しながら、詠唱を開始する。

「《万象に希う・我が手に剛毅なる剣を・満たされるは力・我はその力を正しく知る者・我が燃ゆる手は・幻想集いし刃の如く》」

「ちよつ！ フィール!？」

六節でリエルの高速錬金術の詠唱を唱える。

演算能力に関してはリエルより上を行く自信があるフィールだが、パルソナリテイ魔術特製からかけ離れている為、リエルのように三節詠唱は無理だと判断した。

だが、地面から形成されていくリエルの大剣と同じものが浮かび上がった。

「うおおお!! 凄え!」

「これ駄目だ。やったはいいいけど、まだちよつと錬成されたウール鋼の強度と形作る精度が足りない。私には不向きだね」

「でも凄いい……少し歪みがあるけど、リエルの大剣にそっくりじゃない」

リエルの大剣を横したのだが、予想より張りぼてだ。強度は鉄より硬いが、ウール鋼より脆い。形も刀身に若干の歪みが見られる。全力でやって横せたのが、コレなのだからフィールには不可能だ。

ガタン！ と、突然教室内に荒々しく立ち上がる音が響く。今まで会話に入っていなかったギイブルが苛立たしげに荷物をまとめていた。

「おい、ギイブル……どうしたんだよ、突然？」

「……帰る。君達もそんな風に遊んでる暇があったら、帰って魔術の勉強に励むべきじゃないのか？」

「はあ？ お前、そんな言い方はねえだろ」

「……ふん」

カツシユの言葉も無視して教室を出て行こうとするが、何時の間にか、リエルがギイブルの制服を掴んで止める。

「……………これ。落としたり」

「……………っ！」

リエルが羽ペンを差し出すとギイブルは顔に慍色を浮かべてぶん取ると、そのまま大股で教室を出ていった。

「何だよあいつ？」

「仕方ないよ。ギイブル、錬金術には絶対の自信があったから。それこそ、フィールにもシステイにも負けないって自信があったから」

ギイブルはプライドの高い奴だ。あんなデタラメな癖して自分の得意分野は勝ってるってなれば面白くないのも分かる。ため息をつきながら、フィールは錬成された大剣を元に戻した。万象の逆転、一度見た事象の魔術の反対はフィールの得意分野だった事もあり、元に戻す、回帰すると言った事は楽だった。

リエルが編入してから約一週間。二年次生二組の教室で数日後に行われる『遠征学修』についてのガイダンスが行われていた。

「まあ、そんなわけで……今度お前らが受講するお出かけ旅——ゲフンゲフン！ もとい、遠征学修についてのガイダンスを行うぜ」

「つて、先生！ 言い直したつもりでしょうけど、ハッキリお出かけ旅行つて言おうとしたのがバレバレです！ アルザーノ帝国が運営する各地の魔導研究所に赴いて研究所見学と最新の魔術研究に関する講義を——」

「はいはい、ご丁寧な解説ありがとさ〜ん」

「あははは……グレン君、一応お勉強の場所だからね？」

相変わらずグレンが適当に『遠征学修』について話しそれをシステイーナが咎めるといったよく見るやり取りが見られていた。グレンがシステイーナに説教を受けている間、クラス生徒たちは遠征先について雑談をしていた。

「なあ、セシル。俺、白金魔導研究所よりもカンターレの軍事魔導研究所を見たかったなあ……」

「仕方ないよカッシユ…… それを言うなら僕だつてイテリアの魔導工学研究所の方が良かったんだよ？」

学院側も生徒たちに一応の希望調査は行うが個々の要望に応えられるほど余裕もなく自分がどここの研究所へ『遠征学修』に行くことになるかは完全に運任せなのだ。

必然的にあつちが良かった、こつちが良かったなどの話がクラス中で上がり始めた。しかしそんな中グレンが口を開いた。

「ふっ……甘いな。お前ら何も分かつてねえ。特に男子！」

「「「「……………?」」」」

グレンの急な発言にクラスの生徒たちはグレンに注目を集めた。

「お前らは別の研究所が良かったなどと言ったり思ったりしてるんだろが、断言してやる。お前らは幸運だ、幸運の女神はお前らを見捨てなかつたみたいだな」

「どういふことなんだ先生」

「お前ら冷静になって考えてみる、白金魔導研究所がどこにあるのかを」

白金魔導研究所は名前の通り白金術を研究する施設である。

白金術とは白魔術と錬金術を利用して生命神秘に関する研究を行う複合術のことで、その研究実験には大量の綺麗で上質な水が欠かせない。よって、白金魔導研究所は地脈の関係で上質な水が簡単に手に入るサイネリア島にあるのだ。そしてサイネリア島といえば……

「サイネリア島はリゾートビーチとしても有名な……！」

「先生、まさか！」

フィールは何となく察したのか、ため息をつき、ギイブルはガン無視を決め込んで勉強をしていたがそんなのお構いなしにカッシュをはじめとした男子たちは目を輝かせた。

「ようやく気づいたかお前達！ 更に、この『遠征学修』には自由時間がかなり多めに取られており少々シーズンには早えが海水浴も可能。さーらーに、このクラスはやたらレベルの高え美少女が揃ってるとなれば……あとは分かるな？」

「「せ、先生……!」」

「お前ら、黙って俺に着いてこい。楽園エデンを見せてやる!」

「「はい!」」

今、この瞬間。グレンとクラスの一部の男子生徒によるかなり奇妙な友情の絆が芽生えた。セラは少し怒りながら騒ぐ馬鹿どもに注意する。

「コラッ!グレン君も男子達も女子をダシにするんじゃないやありません!」

「だが断る!セラ、お前の水着姿も拝んでやるぜ!」

「ふえ!?グ、グレン君!」

セラは顔を赤くして少し照れる。

グレンが大胆発言をしたせい、クラスに甘い空気が漂う。

「そ、それって……」

「まあ、下手したらルミアや黒猫に負けてるかもだけど」

「《グレン君の・バカアアアアアアアアアアアア》——ッ!」

「ぬおおおおおおおおおおっ!?」

巻き起こる暴風。吹き飛ぶグレン。セラとグレンの毎度恒例の痴話喧嘩が始まったのにフィールは苦笑する。セラも地味に気にしている。フィールやルミアも結構なものをお持ちで、嫉妬しているわけではない。無いつたらない。セラも中々いい物を持っているが、生徒に負けたくない謎のプライドがあった。その領域に至れない故に嫉妬している猫のような女の子はいるが、ジト目でグレンを睨むシスティーナに苦笑いするルミア、首を傾げるリエルがいた。

「馬鹿しかいないの、このクラスは……」

「あはは……」

「海? ……それって美味しいの?」

「……サイネリア………っ!」

フィールは思い出した。リエルのオリジナルが殺された場所だ。未来の資料では確か、感情不要とされた為、ライネルがリエルを操った後にアルベルトに襲わせたと言書かれていた。

方法はルミアの『王者の法』アルスマグナで魔術特製の引き上げ。それにより本来の製造者シオンパルソナリテイの魔術特製と同列にする事でリエルの製造が可能となった。

「まさかりエル、貴方海に行つた事ないの？」

「ない」

「水着は？」

「持つてない」

「じゃあ今日買いに行かない？ フィールも一緒に……？ フィール？」

「(リエルは多分、シオンの事を知らない……)」

あの時、グレン先生が言葉を切つたのは恐らく記憶が封じられているからだ。真実を知ってしまえばリエルが壊れる。だからグレン先生は家族に関する事をリエルに教えなかった。

だが、サイネリアでアルベルトが単独で逆上したリエルを殺し、任務を完遂する。その結末だけは知っていた。

「(リエルが量産兵器になったのは未来の話……この世界では)」

「フィール！」

「っ!? ああごめん。……聞いてなかった」

「珍しいね、フィールさんが。水着一緒に買いに行かない？ リイエルも一緒に」

「うん。いいよ」

「うん、私も行くよ。子供の頃のしかないから今は着れなそうだし」

リイエルを見捨てる。絶対そんな事をさせない。

この世界は私が守るべき世界だ。ルミアさんにも誓った筈だ。あんな未来を壊す為
にフィールルウオルフォレンとしてこの世界に来たのだから、と心の中でいつも通りの
使命を呟いていた。

「（フィールちゃん……?）」

セラも微かにしか分からなかった。

フィールは少し何かを覚悟したような顔をしていた。だが、それはさほど問題ではな
かった。そんな顔をしていたフィールの片方の瞳だけが……

「瞳の色が……変わってる？」

何処かで見たとような綺麗な水色に変わっていた。

フィール自身、それに気づく事は無かった。セラが目を擦ると、フィールの瞳はちゃんと金色のままだった。

ただ、セラには今の一瞬だけフィールがフィールで無くなっているような奇妙な感じがした。

第11話

『つつ……つつうっ!?』

『ほら動かない』

上半身を脱いだフィールにチョンチョンとピンセットで摘んだ消毒液を染み込ませたガーゼを当てる。その痛みは想像より染みる上に傷跡が8つ、2つは傷が残るくらい深い傷らしい。「ライフ・アップ」にも限界はある。

『もうちよつと優しくしてくれない……? エルザ』

『充分やつてるからね。任務で散々生傷を増やしたフィールの責任でしょう? あーあ女の子がこんなに生傷つて、婚期が遅れるレベルだよ。全く無茶して……』

『ぐっ……仕方ないでしょ。例の量産兵が6体もいたんだから。てか普通14歳にやらせる任務じゃないでしょ!!』

『フィール、貴女その内死ぬかもね』

『割と洒落にならないから止めて』

【女帝の世界】で切り抜けなければ死んでいた。

ギリギリ5体まで倒したと思つたら布石でもう1体、エルザが来ていなければかなり危なかつたかもしれない。消毒に歯を食い縛り、終わった後は包帯を少しキツめに巻く。【ライフ・アップ】の前にこうでもしないと傷が残るからだ。

『イルシアのコピー体、一体いくら居るんだか……』

『100は下らないらしいとか?』

『何それ怖い』

エルザと私は宮廷魔導師団に入った。

互いに同じ学び舎でフィールは飛び級で入り、エルザが少し年上だが2人の仲はいい。エルザに剣術を、フィールは魔術を教え合い剣士と魔術師は、今日までその経験を糧に今を生きている。

互いに長所は違えど、コンビを組む事が多い。二組陣形ツーマンセルの方が、【愚者の世界】を使え、風の魔術を巧みに使うフィールと相性がいいからだ。

『……劍、摩耗してる』

『……やっぱそうか』

『酷使し過ぎた上に、相手が相手だったから刃こぼれしてる』

真銀^{ミスリル}で造られた劍がかなり摩耗しているのは知っていたが、改めて見ると刀身が歪んでいる。刀身に刻まれた魔術的刻印も掠れ始めてる。戦闘で酷使し過ぎたせいだろう。

『一体何時になったら戦いに明け暮れる血生臭い戦場は終わるのかな……』

『死ぬまで終わらないんじゃないや戦う意味なんてないよ』

『フィールが意外と弱気？』

『最近、死と隣り合わせだからね……正直気が滅入る』

『天の知恵研究会』はいよいよ帝国の中枢まで手を回している。

正直な話、魔導戦争が再び起きてもおかしくない。幾ら殺しても蜥蜴の尻尾切りで手掛かりが消える。にも関わらず国と相対出来るくらいの戦力を持っているのでタチが悪い。

『まあ……否定出来ないよね。私もそんな感じだから』

『まだ炎は怖い？』

『戦場は一面が炎の海だよ？ 今更怖がってても……まあちよつと抵抗はあるけど、大丈夫だよ』

むせ返る血の匂いに、燃ゆる街を駆け抜ける。

今の帝国宮廷魔導師団にも余裕は無い。休んでる暇すら無く、任務が終われば別の任務。『メギドの炎』から主力が居なくなってしまったのだ。

『エルザ』

『？』

『絶対に死なないで、私のコンビはエルザしかいないんだから』

『死なないよ。馬鹿ファイール』

クールでカッコ良く2人は拳を合わせて笑う。

『剣士』と『魔術師』の二人一組エレメントユニット・一戦術単位。それが今の帝国が生み出す数少ない戦力

だ。それはあつたかもしれない世界で存在した《愚者》と《戦車》の共闘。

『頼りにしてるよエルザ』

『こっちのセリフだよ。援護任せるよ』

2人は次の任務に足を運んでいく。

帝国宮廷魔導師団で加速する地獄に僅かな光があるとするなら、多分フィールという人間に唯一の相棒が居たから乗り越えたのだろう。

けれど数日後に『正義』を名乗った男の策略により、フィールは間抜けにも唯一の相棒を死なせてしまったのです。

アルザーノ帝国が運営する各地の魔導研究所に赴き、研究見学と最新の魔術研究に関する講座を受講することを目的とされた必修講座

『遠征学修』は見聞を深めさせる。グレンが担当する二組は今回、白金術——白魔術と錬金術の複合術を研究している『白金魔導研究所』に決定された。白金魔導研究所はリゾートビーチで有名なサイネリア島にある為に、移動手段は馬車と定期船。

香る磯の香り。抜けるような青空。

遙か遠く燦然と水平線が輝く、見渡す限りの広大な大海原。

緩く流れる心地良い風が、肌を、髪を優しく撫でていく——

「うおええええええええ……」

「うううううう……」

「色々台無しだわ……」

日は変わって『遠征学修』当日。馬車を乗り換え船へ乗り込み、半日かけての旅路を

進んでいた。

島という名前通り海が近くにあるので潮の香りが漂い、周囲は海が陽の光を反射させ輝きながら波打つてる光景など、観光地やリゾートとして有名な理由の一端が見えたのだが、それも背後でルミアによって支えられてるグレン先生の嘔吐で台無しになってしまった。

ていうか、一番盛り上がってたのグレン先生は船酔いに吐いている。フィールも口元を抑えて嘔吐しないようにしている。

「私達の感慨を汚さないでくれませんか!? 大体、何ですか船酔いって! あんな凶太い神経してる癖に!」

「ああ、大声上げんじやねえよ……。まだ気持ち悪いのが抜けねえ……。人は大地を踏みしめる生き物だろうが……」

「グレン先生もそうだけど、まさかフィールさんも乗り物酔いが凄いなんで……」

「……私単純に乗り物に弱くて、いつもなら……魔術で三半器官を調節して誤魔化してだけど……こじや魔術は御法度だから……ううう」

「大丈夫フィールちゃん?」

ルミアとセラ先生が背中をさすってくれるおかげで大分マシにはなったが、普通に乗り物酔いが激しい事を忘れていた。グレン先生とフィールも乗り物酔いが激しいのかもしれない。もしかしたら遺伝なのかもしれない。

「システイーナ、酔い止めの魔術使っていない？」

「ダメよ……けど、今は人がいないし乗り物酔いに苦しめなんて言えないから、今回は特別よ？」

「ありがとう……《風に揺られる百合籠よ・静寂の時を・穏やかなるままに》」

フィールは白魔改「ウエーブ・ダウン」を使って自分の床にかかる衝撃や揺れを最低限まで抑える。ゆっくり揺れるのがフィールには辛い。速く風のように空を駆けるのがフィールの得意分野であって、簡単に言えばジェットコースターの揺れは得意でも船の揺れはキツいらしい。

「黒猫……俺にも頼む」

「いいですよ。《風に揺られる百合籠よ・静寂の時を・穏やかなるままに》」

「うおお、揺れが感じなくなっただけ」

「軽く抑える程度です。10分もすれば解けてしまうのでその時また言ってください」

その後、『酔いの原因は船？ なら船を斬る』と言ったりイエルを止めるためにセラヤカッシュ達が発動員で抑えたりする騒ぎもあつたが出航から数時間後、船はサイネリア島に到着した。

「ここがサイネリア島なのね……」

クラスの生徒達と共に、船から降りたシステイナは感慨深く周囲を見渡した。潮風が強く、今の時間は黄昏時で水平線に差し掛かった太陽が燃え上がり、世界を深い黄金色に染め上げている。

「すごい綺麗だね、システイ！ フィールさん！」

「そうね、こんな幻想的な景色はフェジテにいたらそうそうお目にかかれないわよね」
「ただ、暑い……」

船から降りたルミア、システイナはこの雄大な光景をしっかりと目に焼き付けてい

た。そんな三人の後ろからセラとリエルに両脇を支えられたグレンがふらふらと船から降りてきた。フィールは支えはないが、頭を押さえながら顔を青くしていた。

「ああ……くそお、まだ気持ちわりい……」

「もう、酔い止めを忘れるからこうなるんだよ?」

「チツ……何も言い返せねえ……」

「先生……そんなに船が辛かったのなら遠征学修先は別の場所にすれば良かったんじゃない?」
……例えばイテリアの軍事魔導研究所なら移動は全部馬車だったのに」

ルミアの言うとおり一か月前に行われた事前希望調査としてクラスで採決を取った結果、軍事魔導研究所と白金魔導研究所は同数の支持票で別れた。そして、最後の一票を入れたのは船に弱いグレン自身だったのだ。不思議そうに首をかしげるルミアにグレンは真剣な表情でこう答えた。

「美少女達の水着姿はあらゆるものに優先する。決まってるだろ?」

「先生、アンタ漢だよ!!」

「一生着いていきます!!」

周囲の男子生徒からは感嘆の声が上がり、尊敬をグレンは集めていた。まあフィー、セラ、システイーナ、ルミア辺りは気付いているがグレンの真意とは生徒達を軍事施設に連れて行き軍の魔術と関わらせることをしたくないというものだった。

「軍の魔術に関わらせたくないからって、無理してまで行く必要は無かったですよ」

「何のことかな」

「もう……グレン君ってば」

苦手な船での移動になろうとも白金魔導研究所の方がまだ良いと考えたのだろう。分かつてはいたが少し過保護にも感じる。余程、魔術の闇に生徒を巻き込みたくないのだろう。

大広間で食事を終えて、全員が風呂に入り終わり、今はもう就寝の時間。闇夜に潜みながら人に見つからないように移動する男子達。一部の男子を除いて。

「……………これより作戦を開始する」

中庭の茂みでカツシユが宣言した。

「回廊は流石に使えない……………誰かに見つかる可能性が高すぎる」

カツシユの後ろに控えたロッドやカイなど他数名の男子生徒がコクコクと頷く。どこぞのスパイ映画を思わせる迫力だ。

「よって、我々は裏手の雑木林から回り込み、木をよじ登って窓から侵入しなければならぬ。ルートや部屋割りは既に調査済みだから安心しろ」

「い、いつの間に……………」

「さ、流石カツシユ、抜かりないぜ……………」

感嘆の表情を集めるカツシユ。どれだけの執念があればここまでの調査が出来るのだろう。ミッション・インポッシブルより様になっている気がするレベルで気合いが

入っていた。

「で、でもグレン先生とセラ先生が巡回している可能性は……?」

「それも大丈夫だ。一部協力的な女子生徒にそれとなく探りを入れてもらった。これからの三十分間、先生達が裏手の雑木林を巡回する可能性は限りなくゼロだ」

「スゲエ……か、完璧過ぎるよカツシユツ!?」

「兄貴と呼ばせてくれ!」

「いつも頭悪そうなお前が! 眩しく見えるぜ!」

「夜だけ冴えるカツシユ凄え!!」

「ふつ、おい最後の2人、後で殴る。感謝するにはまだ早すぎるぜ、皆……」

カツシユが不敵に笑う。

地頭悪いカツシユがここまで調べ抜くなんて先生達からしたら想定外の想定外だろう。システイーナが居たらその熱意を勉強に向けると言うのだろう。それ程までにやり遂げなければいけない何かが……

「全ては女の子達の部屋に忍び込み、夢の一夜を過ごしてからだ……そうだろう?」

「そ、そうだった……俺……リィエルちゃんと徹夜で双六するんだ……」

「な!? ずるいぞ、カイ! 俺も交せてくれ!」

「俺はルミアちゃんとトランプで遊ぶぞッ!」

「僕はこの機会にリンちゃんと、たくさんお話しするんだッ!」

「俺はフィールさんに魔術を手取り足取り教えてもらうんだ!」

「ウエンデイ様に『この無礼者!』って罵倒されたい……王様ゲームで奴隷のごとくパシ
らりたい……」

前言撤回、欲望丸出しである。

社会の窓全開のまま街を徘徊しているレベルの丸出しだ。ハッキリ言って不審者以上の変態どもである。

「システィーナは……別によい。多分、説教うっさいし」

「「うんうん」」

「さあ、いくぞッ! 心の準備はいいか、皆!? 楽園は目の前にあるぞッ!」

「「おうッ!」」

システイーナだけ扱いをぞんざいにされたまま、カツシユ率いる男子軍団のあとに続く。余程しつかり調べたのだろう、かなり入り組んでいるはずの雑木林を余裕に忍び込み踏破していく。そして遂に、カツシユ達が女子塔を視界に収めた、その時だった。

「甘いぜお前ら!!」

その女子塔の前に、一人の男が立ちふさがった。

「ぐ、グレン先生だと!？」

「バカな!?! このルートは完璧のはず!?!」

「甘過ぎる。甘過ぎるんだよお前ら。俺がお前らだったら、絶対このルート、このタイミングで、今晚、女の子達に会いに行くからなあ——ツ!?!」

「!?!ですよね——!?!」

グレンは悪びれる事もなく堂々も叫んだ。後ろでは女子の軽蔑するような視線がグレンと男子達に飛ぶが、彼にとってそれは今関係ない。

「ま、そんなわけで。部屋に戻れお前ら。一応、規則なんぞな」

「……………」

「なーに、心配すんな。んなコトいちいち学院側に報告なんかしねーよ。見なかったことにしてやるよ。だから——」

「先生!! アンタは俺達側の人間だったはずだッ! アンタは俺達が『楽園』を目指す理由を! 学院のどんな大人達よりも理解してくれているはずだッ! なのになぜッ! なぜ、俺達が戦わなければならないんだ——ッ!?!」

カッシユの魂の叫びはグレンの心を抉る。確かにグレンなら同じ事を考えてる筈だ。女の子と夜にキャツキャウフフな事をしたいのを否定出来ない。

「馬鹿野郎! わかってる……そんなことはわかってるッ! そんなうらやまけしからんイベント、むしろ俺が率先して乗り込んでいきたいわッ!? だがな!? んな事するとただでさえ少ない給料が下がっちゃう上に、セラに殺されちゃうだろうが!!」

「先生……!!」

今にも殴りかかりそうな両者だが、グレンはクールに腕を組んで男子達の前に立ち塞

がる。止める気配がないのか、カッシュ達は隙を探ろうとした瞬間、グレンは口を開いた。

「だが！ まあ安心しろ。お前らの相手は俺じゃない。お前らがここに来る事を伴って本日のスペシャルゲストに来てもらいました」

「……何でこんな事に私が呼ばれるのかしら」

「「ファイ、フィールさん!」」

若干眠気で不機嫌なフィールがグレン先生の隣に現れた。フィールの寝巻きは意外にも東洋で見る着物と言うものだ。寝巻きを見れた全員はその姿に感激するが、フィールは欠伸をしながら右手に赤い結晶のようなものを突き出されていた。

「さつき通信魔術を付与した魔導具を女子のみんなで作って、今試しに使ってるんだけど……願望漏れて女子に伝わってるよ?」

「「なつ、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」」

「「こちらフィール。スステイーナ、応答願います。オーバー」

『「こちらスステイーナ。わざわざありがとうフィール。こんばんわー夜の楽園を期待し

「た馬鹿な男子達？ とりあえず後で殺す」

「うわつ物騒な応答ありがとうございましたオーバー」

「「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイ?!?!」」

怒気のある応答に恐怖する男子達。

通信越しで分かる。滅茶苦茶怒ってる。案外ぞんざいにされたのが気に入らなかつたのか乙女のプライドに障ったのかは分からないが凄い怒ってる。「ゲイル・ブロウ」で大気圏を超えるくらい飛ばして塵にする気だ。

「「ここ」で選択肢を二つ、私と言う地獄ゲヘナを乗り越えて再び女子達に冷たい目で見られる地獄ゲヘナを喰らった後、システイーナという地獄ゲヘナの三段構えに挑むか、戻るか」

「「すんませんでしたあああ!!!」」

一目散に逃げ帰る男子に悪霊退散（比喻）とフィールへ適当に祓っていた。

次の日を清く生きる事をただ願うのみ。グレン先生を見ると、ヒッ！と怯えた声で立ち位置からどんだん遠のいていく。成る程、地獄ゲヘナは嫌か。「マインド・ブレイク」で男子撃退用の魔術でも作っておこう。1か月くらい精神科にお世話になる奴。

「しっかし黒猫。似合ってるじゃねえかその寝巻き。なんだ？ キモノだっけか？」

「まあ、ちよつと昔に親友と東方に行つたんですよ。意外と寝やすいし、愛用ですよ」
「下着付けてんの？」

「そりゃあ……ちよつと待て、何でその知識だけ知つてんですか」

「ふつ、健全な男ならば、エロい事の一つや二つは嗜みなさ！ わっはっはっは!!!」

「《セラ先生に・怒られてこい・変態教師》!!」

「ぎゃああああああアイキャンフラアアアアアアイ!?」

悪は滅びたり、「ゲイル・ブロウ」でセラ先生の巡回ルートまで吹き飛ばした。わざわざ眠い中、呼び出された腹いせはこれくらいでいいだろう。

欠伸をしながら、部屋に戻る為に歩き始めた。

吹き飛ばされたグレンを遠目で見るリイエル。

帝国宮廷魔導師団の時よりここは血の匂いがないで、穏やかで、馬鹿みたいで、笑い

合ってる場所にリエルは少しだけ悲しい顔をする。

「あんなに楽しそうなグレン……初めて見た」

「え、そうなの？ 学院だといつもあんな感じだけど」

「昔は……もっと暗かった。だから、わたしがそばにいて守ろうってそう……思ってた……いたのに」

このリエルの呟きにシステイナはリエルの表情から読み取ろうとしたが難しく、ルミアは呟きが聞こえなかつたらしくニコニコしながら下の様子を見守っていた。

「《天秤は傾くべし》」

「あつ、フィールお帰り」

「こんな事にダシに使わないで欲しかったよ……」

「まあ、魔術についてまた一つ知ったから有り難かったわよ？」

フィールがグレン先生が居た場所から「グラビティ・コントロール」で屋上まで飛んできた。まあ私の知っている通信魔術を付与する実験をリン達が見ていたらしく、試し

にやってみたのもある。意外とコレ便利だが、精々2時間くらいが素材の限界だ。

4人の背後から屋上の扉が開かれた音がする。音の方へ向くとそこにはウエンデイがいた。

「あらあら、こんなところにいたんですの？ 探しましたわよ三人とも、フィールさんもお疲れ様ですね」

「いいよアレくらいなら。馬鹿につける薬にはなったでしょう。主にシステイーナのおかげで」

「ぞんざいにされたのが気に入らなかつたんですね」

「ちよつとウエンデイ！ 哀れみの目で見ないでくれない!? ……それで、どうしたの?」

やや哀れみの目で見られたシステイーナがウエンデイに尋ねる。

「これから私たちの部屋に集まって皆でカードゲームをしたりコ・イ・バ・ナも行いますわよー!」

「カードゲームはいいけど後者のほちよつと……」

ノリノリなウエンデイに少し押され気味のシステイーナにそれを苦笑いで見ているルミア。そして、ふと疑問に思ったのかリエルがウエンデイに質問をする。

「ねえ、それってわたしもやっていいの？」

「ええ、良いですわよ？ それに、グレン先生との事も聞きたいですしね！」

「……ありがと。グレンのことなら任せて」

「私、フィールさんの恋話とか興味ありますわ！」

「あの男子の中で恋愛感情の一つでも見出せると思う？」

「無理ですわね」

即答するウエンデイ。

まあ好きな人ねえ……考える暇も無かったな。しっかりと芯のある人が好みだと思ふ。それだと当てはまるのが知ってる中じゃアルベルトさんくらいだ。まあこの世界で恋愛するなんて考えられないけど。

夜は長い。少しだけ私も楽しむとしようかなと、考えたフィールの少し緑がかつた着物は涼しい風に靡いたのを見て、軽く微笑んでいた。

「痛えなチクシヨウ、黒猫の奴……」

「あつ、グレン君？ こつち巡回ルートだっけ？」

「いんや、黒猫に吹き飛ばされた」

「どうせ擲揄ったんでしょ？」

フィールルに「ゲイル・ブロウ」で飛ばされたグレンは別の巡回ルートに居たセラと会った。もう就寝時間を過ぎている。セラとグレンは巡回も終わり、砂浜に来ていた。

ただ、波の音と星の光を反射する海が2人を魅了するかのようだ。

「綺麗だね……」

「ああ、そうだな……」

町の灯りも届かない中、海岸線はより一層幻想的な風景を演出していた。絶え間なく寄せては引いていく波にセラは裸足で波に逃げながらも、足が浸かる。

「何やってんだよ。海は明日だろうが」

「夜の海辺って気持ちいいから……子供みたいかな？」

「はっ、子供っぽいぞ白犬」

「犬じゃないってばあ!!」

いつもの様に、グレンはセラを少し揶揄う。

セラは反応して少しだけ怒るが、いつも変わらずグレンは笑う。ムツとしたセラがこっそりグレンに近づいていく。

「グレン君」

「何だよセラ「えいつ!」うおおっ!」

「あっはははは! 引つかかった!」

「この……よくもやったな白犬、お返したコラ!」

「きやあ! 冷たい!」

子供のように海水を掛け合う2人。

淡く青に輝くような白砂に沸き立つ泡は、まるで波に打ち上げられた大量の真珠が如く、月明かりに照らされてより一層輝きを放つ。

銀色に輝くセラの髪が風に靡く。

ダークブルーに染まつた海と、悠然と続く水平線。空には白銀に輝く三日月がより一層、セラを幻想的に見せる。それがグレンの瞳から焼き付いて離れない。

「グレン君？」

「——つ、ああ悪い」

「まーた考え事？ 根詰め過ぎないようにしてよ？」

「んな訳あるか！ ただ今セラに見惚れ……」

口を滑りかけたのを必死に止める。

頬が赤い、鼓動が早くて鬱陶しい、なのに何処か幸せを感じるような暖かい気持ちに衝撃を受ける。

彼女は光だ。だからグレンは光に焦がれる想いに惹かれる。

セラの顔をまともに見れない。何処か子供のように恥ずかしくて、妙に意識してしま

「……？ グレン君？」

「だああああああああ！ 何でもねえ！ ほら戻るぞ！ びしょ濡れになっちゃったじゃねえか！」

「わっ、いつの間に!？」

「お前のせいだ！ ……………ほら、帰るぞ」

無意識に差し出した手をセラは掴む。

グレンは掴まれた瞬間、無意識だった手に気付いて頬を少し赤くしたが、セラにバレないようにと平常心を装っていた。

「(見惚れてたって……それに手も……つつくくく／＼／＼!?)」

「(何意識してんだ俺！ 相手はセラだぞ!?)」

実は聞こえていたセラもグレンに悟られないように平常心を装っているが、少しだけニヤけた顔が直らない。グレンもセラも相手の顔が見れなかったのが幸いか、2人とも自分の顔が赤い事には気付かれなかった。

ただ、繋がれた手は学生達とは違う青春の1ページを刻んでいた。

「準備は出来たのだろうか？」

「万事滞りなく。あの感応増幅者が手に入るのも時間の問題でしょう」

蒼い髪を揺らし、青年が女の持ってきた資料を見ていく。

「ふん。しかし、本当にあの小娘がいれば『Project:Revive Life』は完成するのだろうか？ アレは天才だったシオンの固有魔術オリジナルと言っても遜色は無い筈だろう？」

「あら、まさか私をお疑いで？」

女は僅かに目を細める。その様に男はたじろぎつつも、疑念を呈した。この女は何処まで上の連中と繋がっているのか分からない。

「いや、疑っているわけではない。だが、しかしあのよう都合の良い存在がいるのかと不安になつてな」

「何も問題はありせんわ。アレは歴代とは次元が違い過ぎます」

蒼い髪の青年は資料を見る。

ルミアⅡテインジェル、R因子発現者の中で歴代の異能を持つ人間のそれは、ハッキリ言つて『昇華』の類だ。異能者の中でそんな事が出来る存在は居ない。

その資料を見た後、ふと思ひ至つたかのように女は呟いた。

「ああ、そう言えば。バークス様は異能者の収集が趣味でしたわね？」

「収集ではなく研究だ！」

苛立つたような声に答えることなく、話を続ける。

幾多の異能者を研究と言う名目で殺してきた男が叫ぶ。

「でしたら一つ忠告が」

「何だ？」

アカシックレコード

『禁忌教典』に最も近い存在がああ学生の中に存在致します」

それを聞いた2人が驚愕する。

ソレは『天の知恵研究会』が手に入れようと躍起になっているのだ。それに最も近い存在がああ学生に居るなど到底信じられない。

「馬鹿な!? 我々が手に入れる力に最も近いだ!?」

「感応増幅者の他に一人興味深い——そう、実に興味深い話ですが、『時渡り』に成功した人間が、ああ生徒の中にいるのですが、興味はありませんこと?」

「誰だ!? その生徒の名前は!」

メイド服を着た女はクスツと笑い、その名を告げた。

「フィール＝ウォルフオレン。この世界で唯一、

——未来から時を遡った『魔法使い』ですわ」

未だ人類が到達する事が出来ない領域に踏み込んだ魔術師。
魔術を超えた魔法の域に到達した偉業を成し遂げた少女の名前に 2 人は目を光らせ
た。

第12話

『任務の報告は以上よ』

『ご苦労様……ファイル』

帝国宮廷魔導師団の本部で報告書を渡すファイルは無表情で《魔術師》のアルカナを持つイヴに渡す。

『今日の任務はこれで終わりなら、私は帰る』

『待ちなさい』

『………何?』

イヴが呼び止めて振り返ると、イヴは小さいケースのようなものを投げていた。それをファイルは掴む。一体これは何だとイヴに問う。

『最高品質の傷薬よ。暫くすれば身体の傷も消えるくらいの、王族御用達のヤツよ』

『……何、くれるの?』

『ただの気紛れよ。傷を隠してるみたいだけど、ジャティスと戦って受けた傷、まだ完治してないでしょ』

『……………』

傷薬をポケットに仕舞う。

数少ない戦力でジャティスの対処は出来ない上、『エンジェル・ダスト天使の塵』に人員を割けなかったのは分かる。

けど、唯一の親友が死んだのだ。本当はもう戦わなくてもいいくらい心に深い傷を残した。ジャティスは殺した、けど気が晴れない。唯一の光を失い、絶望が押し潰そうとしているのをただ憎悪と残った自分の正義感に従ってただ任務に従うソレは見るに耐えないくらい痛々しい。

『私が言えた義理じゃないけど、貴女も女の子でしょ。身体に傷を残さない方がいい、女として言えるのはそれだけよ』

『……まさか、貴女の口からそれを聞くとは思わなかったよ。イグナイト家の為だけに戦つてる貴女にね』

『……今になって家名が憎く感じるわ。セラもグレンもリイエル、アルベルト、クリストフ、バーナード、そしてエルザも……結局私の指示のせいで死んだ。けど、家名を捨てれば今の宮廷魔導師団は死ぬ』

『……………』

『だから結局従わなければいけないの。私は結局、鳥籠の中で縛られたまま、この場所を維持するしかない』

内心舌打ちする。

何で貴女がそんな顔をする。目の前で失った自分より悲しい顔をする。ただ戦わなかった人間が知ったかぶって悲しもうとしている。巫山戯るなど言いたい。けど……それは出来ない。同情じゃない、単純な話、この人はセラⅡシルヴァースとグレンⅡレーダスが残した何かを持っているからだ。

『……そう。精々、使い潰されないように努力するんだね』

『あつ、そう言えば明日の任務、私と合同だから』

『……聞いてないんだけど』

『言つてなかったからよ』

この女と合同なんて正直嫌だ。

ただ殲滅力は私と同じくらいある。室長としての力は正直健在だ。ただ何処まで行つても反りが合わないのは、単純に互いが正反對の場所に居るからだろう。

歪みを感じながらも居場所を守る者と、正しい未来を信じて敵を殺す者、互いに場所と同じでも歪みを許容できないフィールと歪みを許容してでも居場所を守らなければいけないイヴは何処まで行つても同じ所には辿り着けない。

『精々、足だけは引つ張らないでよ《魔術師》』

『誰にモノ言つてるのかしら？ 《愚者》』

だが、戦う意義だけは同じだ。

それだけが、2人の共通点だった。

「……え、『楽園』はここにあったのか……!」

「焦らずとも『楽園』はいずれ俺達の前におのずと現れるから今日のところは退け……全
て、先生の言う通りでした……」

「ごめんなさい、先生……俺達が間違っていました……ッ!」

「なのに俺達ときたら……!」

「いや、あれは普通に君達が悪いでしょうが」

フィールが男子の後悔に正論で突っ込む。

まああの後、システイーナに1発ずつ「シヨック・ボルト」の刑で怒りは治まったよ
うだが、あれは完全に欲望丸出しの男子達が悪い。

まあその後、女子達の水着を見て眼福のようだが……

「先生……!」

「………ん?」

2人は誰がやって来たのは声で分かったのだが一応目を開けて確かめるとやはりル

ミアとリイエルの手を引いているシステイーナの三人とその後ろからこちらの存在に気づいたセラがこちらに駆け寄って来ていた。

「あれ、ルミア達って向こうで泳いでたんじゃ……？」

「ちよつと疲れちゃって戻って来たんだ！ それよりも先生！ この水着どうですか？」

そう言うのとルミアは先生の目の前でぐるりと回って見せた。ルミアは童顔だが体つきは同じ年代の少女達と比べても一際肉感的であり、その容貌の幼さとのアンバランスさが男性人を魅了しているようだ。

「似合ってるじゃねえか」

「えへへ、ありがとう！」

「白猫も似合ってるな、意外とセンスいいんだな」

「んなつ……！ そ、そんなお世辞言われても嬉しくないけど……まあ、ありがとう」

ルミアは嬉しそうに笑いシステイーナは照れながらそつぽを向いた。それに頬を膨

らますセラ。どうやら感想が欲しいようだ。だが、昨日の夜のせいとか妙に変な意識をしてしまったグレンがたじろぐ。

「まあ……その……似合ってる……綺麗だ」

「ふえ……!? ……あ、ありがとう……」

付き合いたての恋人同士のようだ。

フィールはそれを見て少しだけ笑っていた。

「ところでフィールさん？ 貴女は水着を着ないのですか？」

「私は少し街に、自由時間だから構わないでしょ？」

カッシュが水着を着ていない代わりに私服で緑のパーカーを着ているフィールに聞いた。嫌に丁寧に話すから気持ち悪いのだが。それを見たグレンがフィールに近づいて耳打ちする。

「おい黒猫」

「何ですかグレン先生」

「アルベルトか……?」

「……勘がいいですね。作戦と各自の情報交換程度ですよ。1時間もしたら帰ってきますから」

「……俺も」

「着いて来ないでください。てかアルベルトさんはグレンには伝えたと聞いていますので」

「……」

アルベルトが言った言葉『リエルに気を付けろ』と言う意味はグレンは一応理解していた。因みに理由はフィールも一応知っている。まあ、ある程度の作戦や確認は必要なので、待ち合わせの店に行くが。

「まあ、とりあえず何事も無いようにしたいので」

「ハア……分かった。行ってこい」

「ありがとうございます。あと……セラ先生にちゃんと男気見せてあげてくださいね?」

勝負に負けた先生は何も言えないのだろう。

グレンは「余計なお世話だ！」と叫んでいたのを聞き流し、フィールは約束の店へと足を運び始めた。

懐中時計で時刻を確認したグレンは慌てて立ち上がり旅籠へと小走りで向かい始めた。システイーナ、ルミア、リエルが夜中に海辺で遊んでいる姿を見た後、グレンはそのまま寝落ちしてしまった。

旅籠への帰路を急いでいるとふと、人の気配を感じグレンは足を止めた。目を凝らして前方を注視する。あまりにも気配を隠す気もなく、殺気の類も感じられないため危険な相手ではない。

敵ではないがそこにいたのは……

「え、リエル?」

いつものように眠たげな表情のリエルが現れた。

「どうしてここに……？」

「グレンが部屋にいなかったから探してた」

「いや、俺の部屋は鍵かかってたろ」

「扉切って入った」

頭抱えて「また減給か……」と呟くグレン。護衛対象であるルミアやフィール、システィーナはどうしたのかと聞いてみる。

「白猫や黒猫、ルミアはどうした？」

「ぐっすり寝てる」

「お前なあ……ルミアの側にいろって言ったろ？ 護衛失格だぞ」

「分かってる。だけど……グレンに会いたかったから」

そんなことをいつものように眠たげな表情で言い出した。

だが、それでもそんな風に言われればいくらリエルでも怒るに怒れない。旅籠が閉まってしまふ為、早めに帰った方が良いと考えリエルにすぐ戻ろうと促し、歩き始める。

歩いている中、グレンはリエルに対してこう尋ねた。

「なあ、リエル。ルミアや白猫、黒猫、クラスの連中と一緒に過ごしながら遊ぶのは楽しいか？」

「……よく、わからない」

グレンの質問に数秒の間を置いてポツリと呟いた。

その表情は相変わらず無表情だが、どこか戸惑っているような雰囲気だった。その感情はリエルにとって初めてのモノだったから。

「あいつらと一緒にいて何も感じないのか？ 何もなかったか？」

「グレンが私に何を期待しているのかはわからないけど……少しだけ……あの二人やみんなと……もつと一緒にいたい……そう思った」

「そうか。それがきつと楽しいっていう感情なんだよ。大事にしろよ？」

「……よくわからない」

リィエルは外見以上に中身はとても幼いのだ。すぐに理解しろなどは無理な話だろう。だが、少しずつ魔術の闇以外の人の心をリィエルが理解してくれれば、魔術の闇から抜け出す事が出来るかもしれない。

「なあ、リィエル。もうこのまま帝国宮廷魔道士団から足を洗わないか？」

グレンはそう提案をしていた。

もし、年相応の生き方が出来るなら、そちらの方がいいのだ。今のリィエルは感情が薄い、感情を真に理解すればそこに広がるのはただの絶望だ。

「まあ、ちょっと色々面倒くさいだろうが……その辺りは俺やセリカ、セラで何とかしてやる。だから、例えばこのまま本格的に魔術学院の生徒にならないか？ そうすりゃ、あいつらとずっと一緒にいられるぞ？」

一瞬リィエルの表情が揺らいだ。それを見たグレンは畳み掛けるように話していく。

「お前が宮廷魔道士やってるのって天の智慧研究会から亡命して、その成り行きだからだろ？ 別にお前が魔道士をやり続ける義理も義務もないさ。だから、そろそろ本気で足を洗わないか？ あの三人も喜ぶぞ？」

そうやって言うのとふと、リエルが足を止める。その気配を感じてグレンも足を止めリエルの方に振り返る。

「どうした？」

「それは……できない。できないよグレン」

「……どうしてだ？」

微かな失望と共に、グレンが問い返す。

「わたしは……戦わなければならないから。……グレンのために」

「おい、リエル？」

「そう……わたしは……グレンのために戦うと決めた……」

いつもリエルが言っている事だ。しかし、それはかなり危険なのだ。グレンのために戦わなければならない。グレンのために生きる。グレンがいなければ生きる意味がないという歪みをグレンは感じていた。

「だから、グレン。戻ってきて……グレンがいないとわたし……何のために生きているのか……戦っているのかわからない……」

「一年前……俺が突然お前らの前から消えたのは何も言い返せない……。俺はお前らを見捨てた最低のクズ野郎だ」

苦渋に満ちた顔でグレンは淡々と話していく。

その依存が歪みの原因なのだ。自分の為ではない、他人の為に生きるそれは一番自分の命を大切にしない生き方だから。

「そんな俺がこんなことを言う資格なんてないが……戻ってきてくれと言うお前を責めることもできないが……。だが、あえて言わせてもらう。お前は……俺を……」

一瞬ためらうように言葉をつまらせた。

こんな事を言うつもりじゃなかったが、現実を見て欲しかった。

「俺を……お前の亡くなった兄貴の代わりにしようとしてるだけだ」

グレンはそう言い放つ。

その瞬間、びくつとリエルが肩を震わせた。その言葉が痛い程リエルに突き付けられ、まるで叱られる子供のように怯える。

「そもそも、俺を守るために俺に命の危険がある世界にいて欲しいなんてその発想自体がおかしいんだよ。本末転倒じゃねえか……」

「……………」

「だから、もうやめろ。お前が守れなかった兄貴の代わりに俺に仕立て上げた。そこにあるのは希望じゃない。過去に取り憑かれた妄執と惰性だけだ」

そんな歪な生き方は止めると、リエルに告げた。

「お前の意思でお前の幸せのために生きる。お前の兄貴もそう望んでるはずだ」

「……………」

「今のお前なら戻ってこれる。あいつらと一緒に当たり前の日常を過ごせば……………」

「わからない……………」

グレンが必死にリエルを説得しようと話しかけたがリエルはその感情が理解出来ない。リエルの逆鱗に触れてしまった。

「……………わからない。わからないよグレン！」

かつてないほど激昂していた。

そうグレンが思った時にはもう何もかも遅すぎた。この話はリエルにとつての逆鱗だった。リエルが今存在するのはグレンが居るから、グレンの為に戦いたい。だが、グレンが言っている事はまるで親と一緒にいたい子供に自分を守るなど言っているようなものだった。

「グレンの言ってること、全然わからないよ！　なんで？　なんでダメなの?!　グレン

を守って戦うことの何がいけないの！ どうして……？ どうして……わたしの側にいてくれないの……?! グレンがいないと……わたしは……わたしは……！」

リエルの憤怒と悲哀と困惑に歪ませてグレンに対して溢れる言葉を叩きつけてくる。それはまるで……

「もしかして……あいつら？ あいつらのせいなの？」

リエルは何か大切なものを奪われた気がした。

自分の知るグレンは帰ってくる事はない落胆と焦り、守る意義が無くなったような、自分の存在意義が否定されたかのような。

「ルミアやフィール、システィーナ達……あいつらがいるから、グレンは戻ってこれないの？ あの学院のみんながいるから……グレンは……」

誰に奪われた？

グレンがいた居場所を奪ったのは……

今のグレンを縛り付ける何かがあるから？

「あいつらが……わたしからグレンを奪ったの？」

「待て！ どうしてそんな結論になるんだ！」

グレンは声を荒げて叫んだ。良かれと思つて勧めたことが完全に裏目に出てしまえば、焦つてしまう。だが、もう遅い。

「うるさいうるさいうるさい！ みんな……嫌い……大つ嫌い！」

最後にそう叫び、その事実を受け止めきれなかったリエルは別の方向へ駆け出してしまった。リエルが消えてしまった先を見つめながらグレンは……

「はあ……うまく、いかねえなあ……」

ぽつりとそんなことを呟いて、肩を落とし深いため息をついたのだった。ここまで歪だった事に気付けなかった自分の落ち度にただ落胆する。

翌日、グレン率いるクラスは白金魔導研究所に向けて樹海の辛うじて開いていた荒い道を歩いていった。

聞くとところその研究所は研究内容が生物系のため、綺麗な水源のある所に建てられているため、必然的に人気の少なく、複雑に入り組んだ道の先にあるという。

そんなため、一部を除いてクラスメート達が半分も行かないうちに息を荒げていた。

「はあ……はあ……」

「リン、辛いなら荷物代わりに持つよ？」

「え、でも……」

「いいから。こんな荒れ道で無理したら戻りがより大変だしね」

ファイルはリンの荷物を持つ。

こういう複雑な道も山登りもそうだが、大事なものは無理せずに休み、戻れる時はキチンと戻る事だ。山登りだって体力に限界があるのだから、無理して戻るくらいなら頼つ

てくれた方がいいだろう。

「う、うん……ありがと……」

「フィールさん、まだ余裕なのか、スゲエな」

「軽く魔術で軽量化してるからね。カツシユ君はそれ無しで凄いんだね」

元々軍に入っていた上、あの世界以上に過酷な現実は無いと思う。

一人分の荷物も重量にして大体四・五キロはある。それを二人分くらい持って山道を歩いているのが凄い。体力に自信があるフィールも少しだけ驚いている。

「まあ、みんなと比べて田舎育ちだからな」

「冒険家なんだね」

一部を除けば魔術学院の生徒達は大体が都会育ちだ。当然ながら鍛える考えがない。魔術至高主義のクラスがいきなりこんな荒れ道に足を踏み入れて平気なわけがない。

それからもちよくちよく休憩も入れながらフィールやカツシユ、他にもセラ先生など、体力に余裕のある者が疲れの目立つ奴の荷物をローテで負担しながら荒れ道を進む

と、意外な光景が目に入った。

ルミアが偶々安定の悪い石で足を踏み外しかけたリイエルを支えようと手を伸ばすが、その手をパン、と払い除けていた。

「……触らないで」

次に聞こえたのは明らかに拒絶の意思が込められた言葉だった。

「ちよ、リイエル……今のはちよっと酷いわ。何があったのか知らないけど、ルミアは貴方の事が心配で——」

「うるさい……うるさいうるさい！ 関わらないで！ もう私に関わらないで！ イライラするから！」

リイエルが今までの人形のような寡黙さから一転して明確な敵意を剥き出しにして大声をあげていた。それには他のみんなも思わず足を止め、呆然と見入っていた。

「私は……あなた達なんか、大っ嫌い！」

そう言つてスタスタとみんなから早く離れたいと言わんばかりに歩を早めて遠ざかつて行く。

「な、何なのリエル！ 貴方——」

「待つてシステイ」

リエルの行動に流石に腹を立てたシステイが追おうとするも、ルミアが手を掴んでそれを止める。

「何があつたのか知らないけど、今はそつとしておこう」

「……ルミアがそう言うなら」

渋々とだが、システイはリエルを追うのをやめた。

今のリエルは少し何かがおかしい。

「ねえ、やっぱり嫌だったのかな？」

気不味い空気の中、ルミアが悲しげに呟きだした。

「リエルは……私達と住んでる世界が違うのに……私は勝手にあの子を振り回して……本当は嫌だったのに、無理に付き合わせちゃったのかな？ 私、お節介だったのかな……？」

「そりや違う。悪いな2人とも。実は昨晚、俺が余計な事口走った所為でリエルを怒らせちゃって……ちよつと今あいつ、情緒不安定になつてんだ」

「何言つたんですかグレン先生？」

ため息を吐きながらフィールはグレンに問う。だがグレンは沈黙する。どうやらリエルの生い立ちに触れるからだろう。ため息を吐きながらフィールは予想した事を言つた。

「……大方、先生の事だから、リエルに宮廷魔導師団から足を洗えとでも言つたんでしよう？」

「……ああ」

「……確かに軍の方は魔術の闇が多いかもしれません。けど先生、リエルの拠り所はグレン先生しか居ないんですよ？ 親同然のような貴方がリエルに何言ったかは知りませんが、貴方がそれを否定しちやいけないですよ。あの子は見た目以上に幼いんだから」

「！」

幾ら歪でも、見た目以上に幼いのだ。

何故それを知っていると言う目で見えるが、フィールは分かっているような眼で先生を見る。

「そうでなきやリエルが戦ってる理由が無意味になってしまふんですから」

「……すまん。アイツは見た目以上に子供だった。後でちゃんと謝ってくるわ」

「そうしてください」

フィールは少しだけ、リエルに同情する。

戦う意義が無くなってしまおうと言うのは、自分の存在意義がなくなってしまうのと同じようなものなのだろう。

そんな事を話しながら目的地へ到着すると、

「ようこそ、アルザーノ魔術学院の皆様。遠路はるばるご苦労です」

グレンとセラの前にロープに包んだ一人の男が現れた。セラはその男を前にして。

「こんにちわ、あなたがバークスさんですね？ 私はセラシルヴァースです」

笑顔をバークスに向け、挨拶した。

バークスも笑顔で挨拶する。社交辞令とは言えとても朗らかに見える。

「はい、私がバークススリーブラウモンです。この白金魔導研究所の所長を任されているものです」

グレンが登山で掻いた額の汗を拭いながら背筋を直し、バークスに開き直った。グレン先生も意外と体力ある。後ろで息を上げている生徒達を見れば一目瞭然だ。

「アルザーノ帝国魔術学院、二年次生二組の担当魔術講師グレン＝レーダスだ。本日
はうちのクラスの『遠征学修』へのご協力、心から感謝します。生粋の研究方の魔術師
であるバークスさんにとっちゃ、ひよこ共が所内をほつき歩くなんて鬱陶しくて仕方
ないでしょうが、まあ、今日明日は我慢してください」

「いえいえ。私も日夜研究ばかりでは気が滅入りますからな、こうして未来を担う若者
と触れ合うのも良い刺激になりますからな。お疲れのところ大変ですが、ここまで
来てくれた労いの代わりと言ってはなんですが……本日の見学は私がお案内しますよ」
「はあ!? 所長のアンタが直々に!? アンタだつて研究で大忙しでしょう!」

「構いませんよ。私の権限があれば普段一般の方が立ち入らない区域にも入れますし
……やはり若者には最高の一日を送ってもらい、この日が将来この子達の糧になつてく
れるのならやはりこちらも相応のものをらせてあげたいものですから」

「はあ……普通は自分の研究なんて他者には見せないもんだつうのに、マジで人格者
だな……いや、マジでありがとうございます」

所長の案内だけでも破格な待遇なのが更に一般人の入れない場所まで見学できるも
んだから最初は渋っていたみんなも研究所の見学が楽しみになって疲れが吹き飛んだ
かのようにバツと立ち上がる者も出て来てる。単純で少し笑ってしまう。

グレンの微妙に丁寧じゃない物言いにも機嫌を損ねず、バークスは朗らかに応じた。だが、一瞬だけバークスはルミアとフィールを少しだけ見た。何故かそれは不快で、少し冷たい目で見た。

「ん？ どうしたのルミア。フィール」

だがそこでシステイーナが、少しルミアが強張った表情をしているのに気がつき後ろを振り向き、それに合わせてフィールも警戒していた。敵である事は分かっている。だからって証拠もないのに敵対すれば勘付かれる。

「ちよつとね。バークスさんが私の事見てたから気になつて」

「まあ……大した事じゃないから安心して」

バークスの案内のもと、研究所内を静かに歩く。生命の神秘を研究しているからか、いたるところに掘られた溝に清浄な水が絶やさず流れていた。そして壁や所々にある花壇にある木や草花に蔦が通路にびっしりと生えていた。

研究所内にある様々な研究室を生徒を連れて練り歩く。

あたり一面に様々な品種と効能の薬草畑が広がる、薬草改良を、試みている部屋。岩や結晶が法陣の上に並ぶ鉱物生命体を開発している部屋。

多種多様の動植物がおさめられた巨大ガラスの円筒が所狭しと並ぶ、生命の肉体構造に関する研究をしている部屋、広い空間に出たらそこではあちこちに何かの薬品の詰まった円筒に様々な姿をした生物が閉じ込められていた。

そしてその傍には妙な石版のようなものがあつて、そこからあらゆる情報が次々と表示されていた。人体の謎、キメラの分析結果、構造など色々な情報が。

パークスさんに聞いてみればあの石版はモノリス型魔導演算器であれで人や動植物の膨大な遺伝情報と魂情報を解析してるらしい。こつちではマジピューターと呼ばれるらしい。

「うわ〜……私、将来は魔術考古学を専門にしたいって思ってたけど、これを見るとちよつと心が揺らいじやうかも」

「そうかな……私は魔導官僚志望だから。それに、これを見るとちよつと気がひけるなって……」

「気が引ける?」

「本来生物っていうのは気の遠くなる程……長い時間を掛けて進化するものだからね

……それを人が勝手に弄って変な構造の生物を作ったり……捨てたり……人道的じゃない……」

「ちよ、ちよつとフィール……」

研究者に聞こえるのを危惧してか、システイーナがフィールを嗜めるが、言わんとする事はわかるのか今度は色々考えながら施設を見渡す。だがシステイーナはある事に気が付いた。

「てかフィール……どうしたの？ 気分悪そうだけど……」

「……っ、まあ……ちよつと当てられた……っ……」

システイーナは首を傾げるが、フィールは冷や汗と謎の息切れが続いている。さつきから身体に針を突き刺すように頭に直接流れ込む感情が暴走しているように、いや、進む毎に感受性が強くなっていく。

「つつう……!!」

死ね死ね死ね死ね死ね殺す殺す殺す殺す殺す殺す死ね死ね死ね死ね
 ね!!! 死ね助けて助けて助けて助けて助けて死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
 死ね助けて死ね死ね死ね死ね死ね憎い死ね死ね死ね死ね死ね憎い憎い憎い憎い
 憎い!!! 死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね殺す殺
 す殺す殺す殺す殺す殺す死ね死ね死ね死ね!!! 死ね助けて助けて助けて助
 けて助けて死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね憎
 い死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死
 ね死ね憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い助
 けて助けて助けて助けて!! 憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い殺す殺す
 憎憎憎!! 殺す殺す殺す殺す助けて助けて助けて助けて殺殺殺殺殺殺助けて助
 けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助
 けて助けて助けて助けて!!! 憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
 憎い憎い助けて助けて助けて!! 憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い殺す殺す!
 殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す! 殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
 殺す殺す憎憎憎!! 殺す殺す殺す殺す助けて助けて助けて助けて殺殺殺殺殺殺
 殺助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて!!!

「ぐっ………！　があ………！」

「フィール!?!」

「おいどうした黒猫!?!」

右眼が熱い、流れ込む憎悪や憎しみの声に右手に呪詛のように赤黒いナニカが流れ込んでいく。意識が持つてかれそうになる。寒い、痛い、辛い、消えそうになる、吸い込まれそうだ。

右眼がそれに呼応するかのように目の前の景色がモノクロへと変わっていく。そこに居たのは子供達が泣いている景色と、死んでいった後悔、憎悪の感情を撒き散らす大人の姿。

「お前、もしかして………霊障か!?!」

「くっ………あああ………！」

霊障、霊や残留思念から生じるものを自分が発現してしまう事。憎しみや霊が体験し

た事が流れ込み、まるで自分が体験したかのように浮かび上がる障害。

確かに未来でも霊障はあった事はあるが、一応持っていた十字のロザリオがそれをいつも阻害する為、安心だった筈。だが、コレは霊障と言うより……

「いくら合成獣の研究をしてるからって感受性が強いにも程が……」

「つつ……違う……」

コレは間違いなく人の声だ。

何かが流れ込んでくる。抑えきれない。背中から何か突き出されるような感覚と動悸がまるでフィルルの持つ『銀の鍵』に反応しているようで、右眼がそれを教えてくれるみたいだ。

「……おや、急病人かな？ 人を手配しましょう」

「バークスさん、悪いがうちの生徒が強い霊障持ちだったみたいだな。霊草と洗礼詠唱された部屋はあるか？」

「ええ、職員の中にも時折、体調を崩す者もいますからな。すぐに」

「助かる。生徒達の受け入れといい迷惑をかけるな」

「いやいや、稀にある事なので仕方ありません。こちらで引き受けましょう」

違う。焼き付くような熱さで右眼が反応する。

大人の憎しみが向いているのは間違いない……

「さあ、此方へ、案内致しましょう」

この男に対してだ。

だが抵抗しようにも今のフィールはマナバイオリズムがカオスにまでブレている。今連れて行かれたら不味い。咄嗟にフィールはセラ先生の腕を掴む。

「お願い……一緒に……きて……」

「フィールちゃん？」

弱々しく震える声でセラの腕を引く。

その顔はまるで何かあるかのようにセラは何かを察した。

「……分かった、バークスさん。私も着いていきます。私もこの子が心配なので……」
「……ええ、分かりました。案内致しましょう」

震える手にセラは放っておけない為、セラも同行する事にした。バークスは一瞬顔が歪み、セラはフィールを抱えたまま部屋まで案内された。コレで迂闊に手は出せない筈だ。フィールは少し安心して意識を手放していた。

無情にも私の声は届かない。

荒れ狂う絶望感が少女を押し潰すようで、未来で聞いた怨嗟より、その怒りと悲しみが少女の中に流れ込んでいく。

『……………お願い……………もう止めて……………！ それ以上は……………!!』

ただその怨嗟を見放す事は出来なくて、だがその怒りを許容出来ない自分が居る。そのままでは駄目だと、貴方達が壊れてしまうと、分かっているのに止められない。

ここはあくまで精神世界、少女には何も出来ない。

ただ押し潰すような絶望感にただ耳を塞ぐしか出来ない。

耳も眼も塞いでいっそ楽になりたいくらいの苦痛に、経験した記憶が少女に対する厳罰のように肌を焼き、凍らせ、刺すような痛みを無慈悲に送らせてくる。

『……………』

次の瞬間、自分の身体が光を放つ。

それだけで赤黒い絶望の怨嗟は掻き消え、もう声も聞こえない。それはまるで聖なる炎のように世界を照らす。

『……白魔【セイント・ファイア】？』

『……………』

目の前のそこにはナニカがあった。

姿も形も見えず、魔力も無い。匂いも音も感じないその空間の先に何かが存在していた。ただそこに感じる懐かしさのようなものが自分の胸に突き刺さっている。

『……………えっ？ ……何……………で……………？』

ただ分かるのは、それが誰かと言う事と、勝手に自分の右眼から溢れていく涙がとても痛くて、悲しくて、切ない気持ちになる。

右手が熱い、焼印を押されたような痛みに思わず顔を顰めて抑える。右手を見るとま

るで蝶のようだが、片羽がもげているような奇妙な烙印が押されていた。

『……ごめんなさい』

それは誰に向けての言葉だったのか、誰の声だったのかも認識出来ない。けれどその謝罪がとても辛そうで……まるでそれは……

『貴女に……悲しい運命を背負わせてしまつて』

頬に触れる冷たい感覚。

鏡のように現れた片眼が青く染まつた自分。

その謝罪は誰のものでもない。自分に向けられたものだった。

「つつ……!?」

右手を伸ばして何かを掴もうとしたような表情でフィールは目を覚ます。あの胸を刺す悲しみは一体何だったのか分からない。ただ、起き上がるとさつきより身体が軽い。

「あつ、大丈夫フィールちゃん!」

「はい……何とか……」

どうやらバークスに何かされた様子は無い。

セラ先生がいたおかげで牽制になったのだろう。あの時セラ先生に頼ってなかったら私は何されていたか分からない。

「つつ……あれっ? 何だコレ……」

右手の甲には蝶のようだが、片羽がもげているような……

「……………?!」

あの精神世界で見た紋章と同じ、だが魔力とか呪いみたいなものは感じない。だが、何か特別な意味を感じる、まるで……

『貴女に……悲しい運命を背負わせてしまって』

あの時に見た自分そっくりの。

いや、アレは自分では無い。あの時感じた規格外の存在の気配は……

「今は……………?!」

しまった。気絶していた以上、リエル達の事を忘れていた。

セラ先生は首を傾げて此方を見ている。だがファイルが焦り出した瞬間、セラは「どうしたの?」とファイルに聞くが、それを無視して右腕につけている二つのブレスレットの内、一つに連絡を入れる。

「アルベルトさん！」

『フィールか……グレンが今危険な状態だ。そこにセラもいるなら、今すぐ旅籠へ来い。白魔儀【リヴァイヴァー】を使うにも俺だけじゃ魔力が足りん』

「つつ!? 分かりました！ すぐ向かいます!!」

何でこんな時に気絶していた！

多分、原因は『天の知恵研究会』だろう。何故こんな時に霊障なんて馬鹿みたいな事で足止め食らっていた!!

「セラ先生！ 着いてきてください！ 【ラピット・ストリーム】くらい出来ますよね!？」

「えっ? う、うん……どうしたの?」

「グレン先生が危ないんです！ 早く旅籠へ!!」

「なっ!? わ、分かった!! すぐ行こう!!」

セラとフィールは急いで施設を出ようとするが、鍵がかかっている。蹴り破ろうとするがびくともしない。おまけにこの部屋は……

「つつ、パークスの奴!! 《天を撃ち砕け・彼方の流星よ》!」
「ちよっ!? フィールちゃん!」

黒魔【プロミネンス・ピラー】で灼熱の炎を扉に放つが、魔力が分解されていく。確か古代遺跡とかである魔力を分解する鉱石とかは存在するが、恐らくコレはその模倣だろう。

「魔力を分解するなら【デイスベル・フォース】で……!」
「いや、多分鉱石系だから無理です。ならこっちでやります」

胸ポケットから掌より小さい剣のようなものを取り出し、【デイスベル・フォース】で解除する。魔術で武器を圧縮し小型にする事で持ち歩く事をしといて良かった。いい思い出はあまり無いが、自分の愛用していた3つある特殊装備の一つ。

「切り崩せ『魔剣エスパード』」

持ち手から刀身までが黒く染まった長剣が扉を切り裂いた。魔力を分解しようが、結

果は既に斬られているなら魔力を分解しようが意味はない。

『魔剣エスパード』は特殊な金属を使つて造られたあの未来の形見。コレは自分のパルソナリティ魔術特性に接続し、その性質を取り込む特殊な剣だ。『万象の逆転、逆流』を持つフィールドが持つそれは防御不可能の斬撃を生み出す。

「よし、行きますよセラ先生！」

「う、うん！」

右手の紋章は気になるが、それよりも今は深く考えるよりグレン先生達の方が先だ。

セラとフィールは研究所を抜け出し、シユトロム【疾風脚】で急いでグレン達のいる旅籠へ駆け出した。

旅籠に到着し、走り出す2人。

見かけた人影にフィールは声をかける。

「アルベルトさん！」

「フィールにセラ、協力してもらおうぞ」

「グレン君は?!」

アルベルトに担がれているが、呼吸もままならない状態だ。剣で貫かれた状態で仮死状態だ。まだ間に合う。セラとフィール、アルベルトは近い部屋に入っていく。

「……っ?!」

「邪魔するぞ」

そこに居たのは泣き崩れたシステイナが膝をついて泣いている。ルミアは連れて行かれてしまったようだ。

「システイナ⇨フィールだな? 俺は帝国宮廷魔道士のアルベルト⇨フレイザーだ。顔と名前ぐらいは分かるな? 緊急のためお前に協力を要請する」

突然現れてはずかすと部屋に入ったと思っただけならいきなり協力しろと言われて何が何だか分からなかったシステイーナだが、アルベルトが背負っていた人物がベッドに寝かされたのを見た瞬間悲鳴をあげてしまった。

「いやああああ！ 先生！」

「システイー！ 落ち着いて！」

叫ぶシステイーナにフィールは冷静に叫ぶ。

心臓の部分にはリエルの大剣で貫かれた跡、制服は血で染まってお肌の色は白くまるで死人のような姿だった。

「まだ息はある。だが……虫の息だな」

「そんな……！ 先生！ しっかりして……早く治癒魔術を！」

慌てて先生のそばへ駆け寄りシステイーナは泣き叫ぶ。

「止めろ、治癒魔術は無駄だ。今のグレンは死神の鎌に捕まっている状態だ」

「そんな……嫌よ！ 死なないでよ……先生……お願いだから……！」
「フィーベル、俺達に力を貸せ。グレンを救うにはお前の力も借りたい」
「そんな……こと言ったって……。私なんかには……」

ルミアを助けられず先生の死体同然の姿を見て思考能力が著しく低下しているシステイナにはアルベルトが言っていることがよく分かっていなかった。

「俺は今から儀式の準備をする。その間……！ ちっ……呼吸が完全に止まったか懦弱な！」

「そんな！ 先生……！」
「落ち着け、まだ息が止まっただけで魂は肉体に繋がっている。しかし……まだ完全に儀式の準備はできていない……」

アルベルトはナイフで自分の指を切り、流れた血で儀式に必要な術式を描いていく。システイナは何をすればいいか分からないまま、フィールは的確な指示を出す。

「システイはそのままそこに居て！ 魔力を使わせてもらうだけでいいからマナ・バイ

オリズムを整えて！ セラ先生は人工呼吸でグレン先生をどうにか繋いで！ アルベルトさん、術式構築の半分は私がやります！」

「……出来るのか？」

「出来ませす！」

フィールは右手首をナイフで斬り、血で床に必要な術式を描いていく。「ブラッド・キャタライズ」もアルベルトさんと2人なら早く終わる。2分もあれば十分だ。

「セラ先生！ 早く！」

「う、うん！」

地面に描く術式が構築されていく。白魔議「リヴァイヴァー」は複雑な術式かつ大量の魔力が必要だ。アルベルト、フィール、セラ、そしてシステイーナも居れば足りる筈だ。

「グレン君、帰ってきて……」

セラは帰ってきて欲しいと祈りながらグレンの口と自分の口を合わせて人工呼吸を始めた。ただ、何も出来ないシスティーナは自分の弱さを呪った。もっと強くなりたいと……

「ふうふうう……ギリギリ間に合った」

「傷も塞がれ、呼吸や心拍に異常無し。何とかと言った所か」

フィールとアルベルトはともかく、セラとシスティーナは魔力がごっそり持っていない。システィーナの潜在的魔力容量ならアルベルトやフィールを超える。今使える魔力はそうでもないが、将来システィーナは下手したら魔術師の頂に登るかもしれない。

「セラ先生とシスティーナはとりあえずマナ欠乏症にまで陥ってるけど、命に別状無し。シ

ステイは寝ちゃってるけど問題無いかな」

「アルベルト君、今、何が起きているの？」

「リエルが裏切った。そして廃棄王女を連れて行かれた」

「クソツ……何でそのタイミングで気絶してたんだ私！」

右手の紋章が何を指すのか分からないが、今は余計な時間だった。だが起きてしまった以上はしようがない。後の始末はつけるつもりだ。

「アルベルトさん、リエルの居場所は？」

「お前の予想通りの場所だ。予想外な事があったが、結末は変わらないようだ」

「そりや良かった。まあリエルについては私がどうにかします」

「……行くの？ フィールちゃん」

「当たり前ですよ。ルミアとリエルは救う、『天の知恵研究会』は潰す。それだけです」

フィールは自分の部屋から帝国宮廷魔導師団のコートを着て、全ての切り札を持った。

「連中の潜伏先は既に目星がついている。俺はこれから王女を助ける。

だがその障害としてリイエルが現れるのなら、俺はリイエルを殺す」

アルベルトは静かに、だがその瞳に明確な意志を持つてそう言った。それはもう覚悟を固めているかのようにフィールルには見てとれた。

「いいえ、それは私が止める。話を聞かせますよ」

「あの女が聞くと思うか？ グレンにまで手にかけて女だぞ？」

「それでもですよ」

フィールルのその眼には覚悟があった。

セラもその姿を見て、誰かと姿を重ねる。それは若かりし《愚者》を背負った一人の少年と同じ背中を感じ取っていた。

「リイエルが居るべき場所はあるな場所じゃない事を教えますよ。それは、グレン先生やセラ先生も同じ事を言った筈です。私は、その為に此処にいるのだから」

「……確かに似ているな」

「アルベルトさん？」

「だからこそ、俺はお前達に期待するのかもしれない」

アルベルトはフィールにあるものを投げ渡す。

『魔銃ペネトレイター』グレンの切り札が使える魔銃だ。銃身には幾つかルーン文字が刻まれており、月明かりによってより黒く輝きを放つ。

「条件は二つ。一つは、俺はあくまでも王女の救出を最優先する。二つは、状況がリエルの排除を余儀なくした場合、俺はリエルを討つ。以下の二点を邪魔しない限り、リエルはお前に任せる」

未だにアルベルトから渡されたそれに驚いているフィールを無視しながら、アルベルトは話始め、それが終わるとそそくさと部屋から出ていった。その内容は普通に聞けば、無慈悲な言葉だろうが……

「ふつ、要するにリエルは勝手に救えつて事か。ツンデレめ」

フィールは少しだけ笑ってしまった。

フィールはそれを腰のベルトに掛けて、セラの方を見る。少しだけ優しく微笑みながら。

「フィールちゃん……」

「大丈夫、セラ先生。必ず助けってくるから……グレン先生と生徒達をお願いします」

「……分かった。気を付けてねフィールちゃん」

「はい」

私はアルベルトさんの後を追って駆け出していた。

だが、セラにはフィールの後ろ姿がまるで……

「……グレン君」

隣で眠っているグレンの頭を撫でる。

それはまるで、一緒に戦っていたグレンを連想させた。

急いで部屋から飛び出た2人はロビーに到着し、急いでホテルを出ようとする。時間
は限られているのだ。急いでルミアを取り戻しに行かなければ何をされるか分からな
い。ルミアの異能は特殊過ぎる。

そんなフィール達の焦燥感を感じ取ったのか、カツシユを先頭にクラスメイト達が少
し離れたところで心配そうにこちらを見ながら佇んでいた。

「カツシユ君……」

「な、なあ……フィールさん……どこに行くんだ……？ 一体、何が起きてるんだよ……
？」

生徒達の先頭にいたカツシユが、硬い声で聞いてくる。

心配そうな顔をしてフィールに聞いたかった。今何が起きているのか。

「リエルちゃんは帰ってこないし……ルミアも消えたし……フィールさんやセラ先生
はもの凄い形相で旅籠に走って行っていたし……システイーナ達の部屋は、なんかポロ
ポロだったし……先生もさつきまで半死人みたいだったし……」

多感な年頃だ。漂う不穏なこの空気に気付かないはずもない。今何が起きているのか不安で仕方がないのだろう。

「あの長髪の怖え人……先生の友人……なんだよな？ あの人が『関わるな』って言うから……事情はさっぱりわかんねーけど……でも、何かあったんだろ……？」

不安げに生徒達が目を伏せる。

そんな様子の生徒達に、フィールはふっと笑いかけた。

「ねえ、みんなはさ、リエルのこと、どう思う？」

「……………え？」

深刻に沈んでいる自分達とは裏腹に、少し優しく生徒達に聞いた。まるでセラ先生のよう、生徒達は戸惑ったように、顔を見合わせる。

「……………どうって……………言われても……………」

「リエルは、まだまだ短い付き合いだけど、その短い間なりに、リエルのこと……どう思った？」

「それは……」

一瞬口ごもりながら、生徒達は各々自分の思いを少しずつ言葉に変えていく。

「最初は……変なヤツだなあって……」

「わ……私は……ちよつと……怖かった……かも……」

「初日のやつが、あれは俺もビビった。『うわ、ヤツベエのが来ちまったなあ』って」

「……でも、まあ、実際はそう悪い子ではなかったみたいですし……」

「むしろ話してみると、素直な良い子でしたわ」

「ちよつと……っていうかむしろ、かなり無愛想なやつだけだな……」

すると皆、常日頃のリエルの奇行を徐々に思い出し、段々と饒舌になっていく。

「でも、話しかければ、ちゃんと答えてくれるよ」

「ん、とか。そう、とか……一言一言、やたら短いけどな！」

「いつも眠そうで無表情だけど、慣れると案外、表情豊かな子に見えるからね」

「カードゲームとか教えてあげると、あの眠そうな表情は相変わらずでしたけど、結構、夢中になっていらつしやいましたわね……」

「そういえば、ビーチバレーの時も普段のリエルちゃんから考えれば、かなりノリノリだったのかもな！」

「あはは……でも、あの殺人スパイクだけは勘弁して欲しかったなあ……」

昨日のことを思い出したのか、生徒達がよくす笑い始めた。

やっぱり、リエルは必要な存在だって事が分かって、フィールは笑った。

「ああ、安心した」

「へっ?」

「大丈夫だよ。リエルが喧嘩別れしちゃってちよつと遠い所に行っちゃって、ルミアはそれを追いかけて二時遭難、だから今からリエルの保護者と一緒にそこまで行くだけ、だから寝てて、明日になったら2人の水着と私の水着を拝むんでしょ?」

「あ……ああ、そうだよな! フィールさんの水着まだ見てないもん! みんな寝るぞー!」

「おお！ 明日に備えてみんな寝るぞ!!」

カツシユを筆頭に生徒達は部屋に戻っていった。

ファイルはアルベルトと一緒に目的地まで走り出していくと、アルベルトは少し眩いた。

「……意外だな」

「何が？」

「生徒達が何も聞かずに戻っていく事だ。大方異変には気付いているだろう」

「……まあ、確かに。でも、私なら任せられるって直感的に感じたのかもしれない。我慢じゃありませんけど、主席なんです」

「それを自慢と言うのだ。まあいい、貴様にとって初任務だ。足を引っ張るなよファイル」

「誰にモノ言ってますか？」

《星》と《愚者》、今宵違う相方で再び組む事になる。

互いに戦う意義は同じ、救出と殲滅、言葉で言わずとも2人は走り始めた。

「俺は仕留めるつもりでエレノアと戦っておきながら、同時に二重、三重に予防線を張っていた。無論仕留めるつもりだが、あの女も中々やる」

「けど、それで出し抜く事に成功した……マジですか」

感心したような、呆れたような顔でフィールは頬を引きつらせていた。正直、魔術を封殺出来るフィールでもこの人とだけは戦いたくない。

「白金魔導研究所に流れる資金の齟齬を追う過程で薄々予想は付く。奴はどうも極秘で秘密の地下研究所を造っていたようだ。確かにエレノアからの魔力発信は地下から発せられている」

「地下……でも範囲が広くないですか？」

「研究分野の性質上、バークスの秘密研究所には必ず地下水路が必要になる。別に樹海の何処かに魔術的な手段で嚴重に隠されているであろう入り口から、ご丁寧に進入する必要は無い。研究所内に通じている水路から進入すればいい。大まかな場所が判明し、

大規模な水路を用意出来る場所、土地の高低差、そして霊脈の条件。それだけ揃えば、必然的に進入路は絞られる」

「ああ成る程。湖に隠し通路でもあるんでしょうね」

2人の行く先に立ち塞がる樹海が尽き、視界が一気に開けた。

そこに広がるのは、周囲を深緑の樹木や山岳に囲まれた広大な湖だ。透き通った冷たい水を湛え、鏡のような水面に銀月が淡く映っている。

その岸辺で、2人は一旦、足を止めた。

「この湖の南西方面に、バークスの秘密研究所に繋がる地下水路の入り口がある筈だ。不自然な水の流れを辿れば容易に見つかるだろう」

「成る程、じゃあ堅物同士で2人きりの海水浴と行きましようかね……湖ですけどね」
「誰が堅物だ」

2人は黒魔「エア・スクリーン」の呪文を唱える。

2人の周囲に圧縮空気の膜が球体状に形成され、そのまま、2人が湖の中へ足を踏み入れると、周囲の水が球体状に2人を避けていく。

そして、2人は空気の膜に守られたまま、湖の中に姿を消した。

無事に用水路に辿り着き、2人は周囲を見渡す。

まるで迷路のように入り組んだその通路には、無数のヒカリゴケが群生していた。

「……当たりですね」

「ああ」

「白金魔導研究所とそっくりだし、どちらかと言うところちが本場かな」

「……来るぞ、構えろ」

アルベルトがそう呟く。

直後、目の前の用水路から大量の水が吹き上げ、巨大な水柱を形成した。

ファイルは『魔剣エスパード』を構え、アルベルトは軽い身のこなしで後ろに飛び下がった。現れたのは、巨大な蟹。人の倍以上の背丈を持つ、左右で三対ものハサミを持つ、蟹のクリーチャーだった。

「何この進化過程構造をガン無視したようなクリーチャーは、悪趣味な……《大いなる息

吹よ《》！」

フィールは黒魔「ブラスト・ブロウ」の強風で進行を止める。
そしてフィールは右に退き、アルベルトは術式を唱えた。

「《吠えよ炎獅子》！」

黒魔「ブレイズ・バースト」で焼き焦がす。

蟹のクリーチャーは黒焦げになり動かなくなった。何も言わずに射線から外れたのは大したものだ。

「成る程、戦場の勘は未来で培っているようだな」

「まあ、あの場所は地獄だったので」

次々と防衛兵として湧き出るクリーチャー達にフィールとアルベルトは蹴散らしながら徐々に進んでいった。

地下室にてルミアは『Project Revive Life』の儀式の一部に組み込まれ、強制的に異能を行使させられていた。

「……………つく……………あ……………あああ……………」

「ふははは！ 成る！ 成るぞお！ 『Project Revive Life』はこのボックスⅡブラウモンの手で完成するぞおおお！」

ルミアの苦痛など意に介さずボックスは大量のデータの解析に夢中だった。そして、それを見ている青年は内心では冷め切っており……

「(当然だろう。僕が研究を丸々譲渡したんだ。今は精々自分が勝者だと思っていればいいさ。それにしても…………)」

ボックスに向けていた冷ややかな視線を青年はリエルへと向けた。

リエルは部屋の隅でルミアに背を向けており、かたかたと震えていた。ルミアが声

を上げるたびに弱々しい背中がびくりと震え、儀式の様子を気にしていなかった。

「(はあ……これはこれで好都合だが……この調子じゃいつ使い物にならなくなるか分からないな。情けない………………)」

青年がそんなことを考えていると突然地鳴りのような音が聞こえてきた。

「何事だ?!」

作業を止め、ボックスが怒声を上げる。

エレノアが冷静に研究所内に仕掛けられている遠見の魔術を確認する。そこに写っていたのはアルベルトとフィールだった。

「流石は帝国宮廷魔導士団特務分室《星》のアルベルト様……一杯食わせたと思っ
ていましたが、一杯食わされたのはどうやら私の方だったみたいですね。御見事」

苦々しく、それでもどこか愉悅の表情で、エレノアが呟いていた。

「そ、それは一体、そういうことだ!? エレノア殿ッ!」

「さあ、どういうことでしょうか? とにかく敵戦力は二名。帝国宮廷魔導士団、特務分室のエース、アルベルト様と、そして、帝国魔術学院の生徒である『時渡り』の少女、フィール様ですわ」

「……ッ!?!」

「ふっ、ははははははははははっ!! もう一つの目的がわざわざ自分から来よった!!」

高笑いするボックス。

何せフィールⅡウォルフオレンは未だ知り得ない『^{アカシックレコード}禁忌教典』に最も近い存在。それがわざわざ彼方から出向いてくれたのだ。

「いいだろう! 情報によると、奴らがいるのは、まだこの中央制御室からは程遠い第四区画——あそこならば、対処は容易い! 私の作品で蹴散らしてくれるわ!」

ボックスは、矢次ぎ早に、モノリスの表面上にルーンを描いていく。

光の文字となって刻まれたルーンを切っ掛けに、表面に様々なルーンが一気に羅列

し、モノリス表面上を上から下へ、左から右へとせわしなく流れていった。

「ふふふ、あの区画には私が作った無数の合成魔獣が封印されているのだよ。その合成魔獣どもの封印を解き放つてくれるわ！」

歪んだ嘲笑を浮かべ、ボックスが最後の操作をする。

斬り裂く『魔剣エスパード』に貫く『魔術ペネトレイター』の銃剣使いとしてクリーチャーを的確に殺していくフィールに、魔術でクリーチャーを確実に仕留めていくアルベルト。

「《吠えよ炎獅子》！」

近づく敵にフィールが炎の咆哮が消し飛ばす。

前線のクリーチャーは黒焦げになり、残ったクリーチャーを『魔銃ペネトレイター』で

撃ち抜く。爪で引き裂こうと迫るクリーチャーの行動を予測し、躲したカウンターで蹴りを入れる。

「フィール、伏せろ！」

フィールはしやがみ、後ろからアルベルトの「ライトニング・ピアス」がクリーチャーを貫いていく。頭を貫いて死なないクリーチャーはフィールが黒魔「アイス・ブリザー」で凍結し砕いていく。お互いかなりの技量の使い手である以上、多彩な魔術を使え、フォローも速ければ、最適解が分かりやすくていい。

「流石アルベルトさん」

「正直驚いたぞフィール。俺も合わせやすくて助かる」

「まあオールラウンダー同士だと、クセがあるコンビに苦労しなくていい。それは同意ですよ。はあっ！」

迫り来るクリーチャーの首を切断し、ここらにいるクリーチャーはもう居ないだろう。実際にフォローはあまりしなくてもいい上に、互いに似ている戦闘スタイルだ。次

の行動が予測しやすいからいい。

次の場所へと進むとそこに居た生物に思わず眩く。

「か、亀？」

思わずといった風にフィールが頬をひきつらせる。通路を突破した先、大部屋に侵入したフィール達を待ち構えていたのは――

「ウオオオオオオオオオン!!!」

見上げるほど巨大な、大亀の怪物だった。その大部分が透き通る宝石のようなもので構成されている。

「宝石獣か。過去、帝国が密かに行っていた合成魔獣研究の最高傑作として、理論上の設計だけは為されていたとは聞いていたが。」

「性質とか分かりますか？」

「殆どの攻性呪文が効かん。それに恐ろしく硬い」

「厄介過ぎる……《光の障壁よ》！」

こんなモンスターは殺せなくはないが『魔剣エスパード』で斬り裂くと殺せはするが、後で刃こぼれしそうなので嫌だ。

フィールが呻いた直後、大亀がその剛腕を振りかぶった。二人は左右へと散開する。そして直後に大亀の体に埋め込まれた宝石が帯電し始め——極雷の咆哮がフィール達を襲う。

「上手く撒いても野放しには出来ん。お前なら出来るな？」

「……ハア、了解です。防御任せますよ」

赤い結晶を弾き、右手で握り前に出す。

熱くなる右手と共に詠唱を開始する。

「《——我は神を斬獲せし者・我は始原の祖と終を知る者・其は摂理の円環へと帰還せよ》」

その間も、宝石獣は攻撃を続ける。

図体に似合わない俊敏さで、生物の勘が危険と察知したのかフィールに向かって突進する。

だがアルベルトさんが黒魔「ブレイズ・バースト」を放ち、注意を引いてくれている。

「《五素より成りし物は五素に・象と理を紡ぐ縁は解離すべし・いざ森羅の万象は須らく此処に散滅せよ・遥かな虚無の果てに》」

「……ふん」

アルベルトは軽く鼻を鳴らしながら、フィールの後ろに回り込んだ。詠唱は完成された。赤黒い三つの円環が亀の前に浮き出ている。

「消え去れ有象無象」

黒魔改「イクステインクション・レイ」

セリカしか使えない最大威力の魔術。この世の森羅万象全てを、問答無用で塵と化す究極の破壊魔術により宝石獣の外甲も全てを砕け散り、言葉通り虚無の果てへと消え

去っていた。

「っ……ハア……ハア……」

口元から吐血するのを拭う。

黒魔改【イクステインクシオン・レイ】はフィールにとって負荷が1番かかる魔術だ。この世界に来てからA級やAA級の魔術は代償がかかる。【女帝の世界】も使い方によっては負荷がかかるからあまり使いたくはない。

「これを使え……」

「魔晶石……いいんですか？」

「この後使い物にならない為だ」

「言うと思いましたよ絶対」

その皮肉を漏らし、アルベルトは魔晶石をフィールに渡す。

魔力の相性がいいのか4割以下の魔力が7割くらいは回復出来た。大亀を倒した最深部、更に通路を進んだ先で声が響く。

て助けて助けて助けて助けて
!!!!

「つつ………！　ここが一番………強い！」

ファイルは靈感に強く当てられやすい。

何故自分にここまで感受性があるか知らないが、この憎しみはこの場所から発せられてくるものだ。辺りを見渡し、その原因を調べようとしたがファイルは口元を押さえ、絶句する。

「つつつ!?　これ………まさか?！」

人の脳髄がそのままくり抜かれて円筒に保管されている。

隣の円筒もそうだ。その隣もそう。その隣の隣もそうだ。

延々と、標本のように――否、事実として標本にされている脳髄が陳列されていた。

「……『感応増幅者』……『生体発電能力者』……『発火能力者』……」

アルベルトが読み上げていくのはガラス円筒につけられているラベルの文字だ。そう、標本の名前を示したラベル。

「全ての円筒に異能力名がラベルされているな。後は被験体ナンバーと各種基礎能力値データが少々……つまり、これは『異能者』達の成れの果てか」
「酷い……なんて事を」

そう言つてアルベルトは足を止め、立ち並ぶガラス円筒へ鋭い眼差しを送つた。これらはもはや人間に対する扱いではない。

右眼が熱くなる。まるで招いているかのような声にフィールは自然と足を運ぶ。その招く声の前に立つフィール。そこにあったのははフィールと同じくらいの年頃の少女だった。

少女はたしかに人の形を保っている。だが、手足を切り落とされ、様々なチューブに繋がれ、無理やり魔術的に生かされている状態だった。ガラスの円筒の外に出れば、恐らく数分で死亡する。

「……………これが……………」

ファイルはその円筒に触れる。その瞬間……

「つつ……!?」

ファイルの視界は真っ白になった。

右眼は熱くなり、その先にいるのは涙を流しながら此方に振り向く女の子がいた。それは四肢が失われた筈のあの少女だった。

『どうして……こんな所に人が……』

「私にも……分からない……貴女は……」

『夢と現実の狭間で生かされているだけの死人だよ』

少女はただ無感情に言った。

ただ、その少女が痛々しくて、悲しくて涙が溢れていた。

『どうして……貴女が泣いているの？』

「分からない……けど痛い……物凄く痛くて……涙が止まらない……」

『……そっか』

「私は貴女を救えない……私は何も出来ない……貴女を殺す事しか貴女を救えない……」

『……いいんだよ。それでいいの』

ただ膝について泣いているフィールに少女も涙を流す。

そんな言葉しか吐けなくて、体に触れてそれでも何も言えない。

『貴女は優しい人だから……私を終わらせて……』

「……うん……約束する……」

涙を拭いて立ち上がるフィール。

気が付けば自分に流れていた憎悪は薄れて、

意識が遠のいたフィールルに対してアルベルトはフィールルの肩に触れる。

「大丈夫か？ 右眼が蒼く変色しているぞ」

「……問題はないです。すみません」

「——私の貴重なサンプルの数々、お気に召されたかな？」

唐突に、場違いに。声は聞こえた。

振り返るとそこに居たのは邪悪な笑みを隠す気すらない。

「バークスIIブラウモンか」

「その通り」

まるで実験動物を見るかのような眼でフィールルを見下ろす。

フィールルは俯いたまま、バークスの言葉に耳を傾ける。

「軍の犬には死んでもらおう。小娘の存在は『アカシツクレコード禁忌教典』に最も近いのなら、私が手に入れば第三団ヘブンスオーダー《天位》も夢ではない!!」

アルベルトはその言葉に目を細める。

『アカシックレコード』
『禁忌教典』に最も近い存在がフィールウオルフォレンだと言った。『時渡り』は知っていたが、実態が分からない。だが、近しい存在というのに引つかかる。

「……ひとつ聞きたい」

「何だ軍の犬？」

「この異能者達を攫う時、彼等の家族だけじゃなく、何の関係もない人達まで殺したそうだが……異能を手に入れるためにそこまでする必要があったのか？」

アルベルトが鋭い眼光をボックスに向けて放つ。対してボックスは一瞬呆気を取られたような表情をした。

「何を抜かす……私の偉大な魔術研究の礎となるのだぞ。普通なら悪魔と罵られ、殺されようというところをこのボックスが助けようとしたというに、あの馬鹿共は愚かにも私に牙を向け、逃げ出そうとした。全くふざけた話だ……少しは感謝してもらいたいのを」

「……助けようと、だど？」

「偉大なる魔術師たる私のために身を捧げることが出来たのだぞ？ 寧ろありがたく思つて欲しいくらいだ。大体、どいつもこいつもまったく役に立たん魔術の崇高さを欠片も理解できぬ愚者共が……！ 恥を知れ！」

吐き捨てた言葉にフィールは怒り震えた。

俯いた顔から流れていたのは涙だった。蒼い右眼が涙を溢している。

「そんな……理由で……」

「むっ？」

「そんな理由で……!!」

フィールの立つ場所から発せられる突風がアルベルトの目を見開かせる。フィールは何も詠唱していない、何もしていない。ただ怒りに震えているだけに感じるこの寒気は何だ。

「つつ……!!？」

アルベルトは驚愕する。

まるでフィールルⅡウォルフオレンそのものが高次元の存在に昇華されていくような圧倒的な存在感もあるが、それ以上に目に焼き付く紫色の蝶の片羽が背中から突き出していた。右眼が蒼くなり、右手の甲に焼きつかれたような紋章は紫色に光り出す。

その姿はまるで片羽がもげた蝶のようで、その圧倒的存在感にバークスも訳が分からず後退する。

「な、何だその姿は……貴様は……っ!?」

気が付けばまるで存在そのものが変わったようなフィールルがバークスの目の前で手を翳していた。瞬間移動? それとも超加速による移動? 理解すら出来ない中で、フィールルの右の蒼い眼はバークスを捉えていた。バークスは咄嗟に右手を出そうとするがもう遅い。

「貴様! 一体何を——!?」

「——ylqc殺mtk■■■■」!!」

「ガア」

その発した言葉は果たして詠唱なのか理解する事すら出来ずに、バークスIIブラウモンはフィールルの右手から放たれた「イクステインクシオン・レイ」の威力を優に超える威力の光に飲み込まれ、肉片の一つすら残さず、消し飛ばしていた。

第14話

同時刻、セラはマナ欠乏症の中、眠っているシステイーナを部屋に運び、グレンが寝ているベッドの隣に座ってグレンが起きるのを待っていた。

「……………う、ここ……………は……………」

「グレン君！ 良かった……………目が覚めて……………」

「セラ……………つつ……………!!? 俺はリエルのアホに斬られて」

「システイーナちゃんとフィールちゃん、アルベルト君に後で感謝するんだよ？」

「ヴァイヴァー」を発動させるのに必死だったんだから」

「なっ!!? 「リヴァイヴァー」だと!? アレは……………いや、セラも手伝ってくれたんだな」

グレンは驚愕したが、居た人間が人間だ。

アルベルトとフィールは魔力容量が一流の魔術師キャパシテイの別格、セラも一流の魔術師より魔力は多い方だ。

「私は魔力と人工呼吸……とりあえず魔力を使ってマナ欠乏症、システイーナちゃんは部屋で寝てるよ」

「おい今人工呼吸って言わなかったか？」

「……………」

「おいセラ……？」

「……………つづく／＼／＼！！ ……と言うかノーカンだからノーカン！ フィールちゃんとアルベルト君が「ブラッド・キャタライズ」で手が離せなかったから私が……あうう／＼／」

思い出して顔を両手で抑えるセラ。

顔から火を吹きそうなほど、今のセラの顔は赤かった。思い出してしまった羞恥心が今になって顔に出る。

「……………つ——／＼／＼わ、悪い、セラ。まあおかげで助かったわ」

「ああうう……／＼／＼ど、どういたしまして。後で三人にお礼を言うんだよ？」

「ああ、つて待て！ アルベルトはどうした！」

「フィールちゃんと一緒に2人を助けに行った」

「いや止めろよセラ！ アルベルトの性格ならリエルは……！」

「大丈夫」

起き上がろうとしたグレンをセラは止める。

アルベルトは丸を救い一を切り捨てる人間だ。リエルが裏切ったとなれば殺すのも厭わないのだろう。けれどセラは大丈夫だと断言した。

「はっ？ 何でそう言い切れる!?!」

「フィールちゃん、必ず連れて帰るって言ってたから」

あの時のフィールちゃん、真っ直ぐなグレン君みたいだったよ？ と言っていた。それを聞いたグレンが腰を下ろした。

「黒猫を信頼してんだな。セラ」

「うん。なんて言うか……赤の他人に思えないんだよね。フィールちゃんはそれに……」

ズウウウウウン!!

部屋にいる2人にめ聞こえる轟音と、地鳴りが2人の目を見開かせる。咄嗟に窓を開け、轟音がした方向へ視線を向けるとそこには……

「なっ、何だアレ……」

「光の……柱?」

研究所から天を穿つような光が空に放たれていた。

グレンは急いでそこに向かおうとするが、まだ胸の傷は完全に癒えている訳ではない。セラだつて魔力はない。今出来る事はただ生徒達に危害が及ぶときの防衛程度だ。

「駄目だよグレン君! 安静にしてなきや!」

「だけど!」

「今のグレン君だつて重傷だつたんだから!!」

ファイルが心配だ。

あの謎の光の柱は研究所から放たれている。あそこには恐らくフィールやリエル、ルミア、そしてアルベルトが居るのだろう。

だが今のグレンには何も出来ない。場所は分かっても、血が少し足りない状態でふらつくグレンでは今行った所で、救出に行つた2人の足手まといになりかねない。

「クソッ！ あの場所で何が起きていやがんだよ!？」

ただ今の自分の無力さを壁に叩きつけていた。

右手から放たれた光はバークスを跡形もなく消し飛ばし、その余波は天井を軽々と貫き天にまで届いていた。アルベルトはフィールを見ると背中から飛び出ている蝶の片羽が消えていったのが見えた。

自我なく暴れ出したら……とアルベルトは右指をフィールに向けていた。



「■■■■ j n u k m w b ———— ぐっ!？」

頭に流れた憎悪が消え、何かの声が聞こえた。

右眼から凄まじい痛みによって、崩壊していた自我を取り戻す。今の痛みがこれ以上は危険だと通達しているようだ。右眼から血が流れている。

「無事か!」

「ハア……ハア……何とかです……」

「フィール、今のアレは何だ……?」

「……ハア……ハア……分かりません。ただ、怒りに支配されて気づいたらコレですよ」

気が付けば右眼は金色に戻っている。

背中から生えた蝶のような片羽は無い。あの圧倒的な存在感は消えていた。謎の疲労感と右手の表面が少し焼き焦げているのを除いて、フィールは無事だった。

「魔力が減ってる訳じゃないし……異能?」

「フィール、お前は異能者か? あの力は何だ?」

「……わかりません。けど、『時渡り』に成功した私にも何かがある。分かるのはそれくらいです」

「……そうか」

天井を突き破つてる。

右手の表面は白魔〔ライフ・ウェイブ〕で治した後、この場所の怨念、怨嗟はバークスを殺したが、未だに存在している。

十字架のロザリオを右手に持ち、フィールは手を合わせて祈りを告げる。

「――主の恵みは深く、慈しみは永久に絶えず、貴方は人なき荒野に住まい、生きるべき場所に至る道も知らず」

アルベルトは目を細める。

異能者であるが故に救われず、迫害されてしまい、正しい生き方を知らなかつただろう。

「《餓え、渇き、魂は衰えていく。彼の名を口にし、救われよ。生きるべき場所へと導く

者の名を」

右手で十字を切り、ファイルの右手を少女の額に向ける。

「『渴いた魂を満ち足らし、餓えた魂を良き物で満たす。深い闇の中、苦しみと鉄に縛られし者に救いあれ』」

悲しいが、もうこの世界では生きられない。

治せはしない、救えもしない、ただ出来るのは死の安らぎに導くだけしかできない。

「『今、枷を壊し、深い闇から救い出される。罪に汚れた行いを病み、不義を悩む者には救いあれ。正しき者には喜びの歌を、不義の者には沈黙を』」

けれど、少女はそれでいいと言った。

約束した。自分にはこれだけしか出来ない。だがせめて……

「『去りゆく魂に安らぎあれ』」

それだけが今のフィールに出来る最大の送迎だ。

フィールの右手から放たれた「ライトニング・ピアス」は少女の命を終わらせていた。

「……………終わったか」

コクリと頷くフィール。

その沈黙の中、アルベルトがその沈黙を切った。

「……………ありがとうございます。待っててください」

「構わん。お前の気持ちを理解出来ないわけではないからな」

フィールは少しだけ悲しい顔をしていた。

だが、嘆いている暇などない。ルミアとリエルを救う為にフィールは気持ちを入れ直した。

「行きましょう」

「ああ」

今ここで絶望なんて時間の無駄だ。《愚者》はただ救いたいが為に動けばいい。フィールとアルベルトは再び足を進め始めた。

「妙ですね……」

「クリーチャーが現れん」

「罠の可能性もありますけど、もう最深部ですよね？」

「ああ、エレノアに仕掛けた魔術反応は消えたが、消えた場所は目の前の扉の部屋からだ」

フィール達は警戒しながら進んで行ったが、一向に罠や襲ってくる人の気配は無い。それどころか、もう目的地の目の前の扉の前だ。フィールはアルベルトに視線を向ける。アルベルトは頷き、突入を許可する。

「《ぶっ飛べ》」

黒魔【ブラスト・ブロー】で扉を吹き飛ばす。

扉の部屋の中には、天井から延びる鎖に拘束されたルミア、宮廷魔導士の礼服に身を包んだリイエル、そして魔導演算機の前に立つ青い髪青年がいた。

「フィールさん!? それにアルベルトさんもー」

「助けに来たよルミア……そして」

今のルミアは衣服がボロボロで、あられもない姿にされている。同じ女としては許せない事をしたようだ。フィールは青年を睨み付けて、隣にいるリイエルに視線を移す。

「リイエル、貴女もね」

「それ以上……兄さんに近づかないで」

沸々と沸き上がる激情を必死に抑えながらも、フィールは怒気を宿して目の前の青年

を睨み付ける。両の拳は相当強く握られており、相当な怒りを抱いている事が窺える。

「リエル、私も貴女に対して怒ってるから。グレン先生を刺した事とか。後で強く殴るから」

「なんとでも言つて。わたしは兄さんのために戦う」

リエルの意思は変わらなかった。

フィールは呆れた眼でリエルを見て、一つ質問した。

「あつそ、なら一つ聞くよ？ リエル、貴女の兄の名前は？」

「……はっ？ いきなり何を……」

「兄の名前を答えられたなら手を引いてあげる」

ただ簡単な質問でフィール達が手を引いてくれるなら安いものだろう。だが、リエルには質問の意図の意味がわからない。

「……………わかった。そんな簡単なことでフィール達がそうしてくれるなら」

ファイルの意図が理解出来ない。意図を考えようとしたリエルだが、リエルは頭脳派では無い為考えるだけ時間の無駄だ。諦めてファイルの指示に従った。

「わたしの兄さんの名前は……」

そう、普通ならそれは簡単なことだ。物心ついた時からたまに支え合って生きてきた兄妹の名前を言うなどリエルに限らず誰にとつても造作のないことだ。

しかし……それだけなのに……

「わたしの……兄さんの……『名前』……は」

リエルは言葉を詰まらせていた。

「どうした？ 大好きな兄なんでしょ？ 名前くらい造作もなく言える筈でしょう？」
「わたしの兄さんの『名前』……は……『名前』……うっ……頭が……痛い……。な、
なんで……？」

「耳を貸すなリエル！」

《黙ってる》

黒魔【ノイズ・カット】でリエルの兄の声を遮断する。

リエルは頭を抱えて剣を落としていた。しかし、いくら名前を言おうとしてもリエルの口はぱくぱくさせるだけで、やがて表情を歪ませ頭を押さえて脂汗を浮かべていく。

「そりやそうだよね。今のリエルは記憶がグチャグチャ、感情もバラバラ、一体自分は何なのか理解できない」

そんなリエルに対して淡々と言葉を連ねるフィール。幾ら考えてもリエルの口から兄の名前は出てこない。頭を押さえながら、大剣を拾い、リエルは刃をこちらに向ける。

「私は……私は……！ 兄さんの為！！」

錯乱したリエルがこちらに突っ込んできた。

剣を拾い向かってきたリエルにアルベルトは指を向けるが、それをフィールは右手で阻んだ。アルベルトはフィールを睨んだが、大丈夫と言わんばかりの視線を向け、魔術の起動を止めた。

「私は……！　ぐっ!？」

突っ込んでくるリエルはフィールとあと二メートルの地点で自分の体が地面に這い蹲っている事に気が付いた。フィールの右手には既に切り札であるブラックストーンが握られていた。

「黒魔改【グラビティ・プリズム】無理に動くと骨折れるよ」

「ぐうううう……!？」

「驚いたな。いつ仕掛けた？」

「未来で結果を先に反映させました。詠唱も必要ないですからね」

重力の結界がリエルを押し潰さんとする。無論加減はしているが、リエルはこれ

くらいしないと動くからだ。

フィールのみが使える固有魔術^{オリジナル}【女帝の世界】は自分の計測し観測した未来に『結果』を先に反映する事で、『過程』を省略し結果に辿り着く因果逆転の世界を生み出す魔術。魔術に必要な詠唱と言う『過程』は先に『結果』さえ生み出してしまえば詠唱せずとも『結果』を反映した未来を生み出す事が出来るのだ。

まあ最大3分までしか持たないし、3分も使えば魔力はかなり減る。だが数秒程度なら充分使える。キャンセルも可能だが、使い勝手がいいとは言えない。詠唱破棄の代わりに魔力とそれを支える脳の演算能力が必要だからだ。

「ぼ、僕のリエルに何をやる気だ！ 離せ！」

リエルの劣勢に焦った青髪の青年が。フィールに対して叫ぶ。「ノイズ・カット」の時間切れだ。

「黙れ兄を語る偽者、貴様の正体は割れている」

「ライネル||レイヤー。かつて、仲間と一緒に『Project:Revive life』を研究し、その仲間を殺した男、それが貴方の名前」

「……『Project: Revive life』? どういうこと……?」

這いつくばったままのリエルがファイルに聞く。何故リエルの正体に『Project: Revive life』が出てくるのか理解出来なかったからだ。ファイルは重い口を開いた。

「そのプロジェクトの名前は通称『Re||L計画』」

「!?!」

「そしてリエル、貴方は『Re||L計画』の世界初の成功例、けど……それを生み出したシオンはライネルに殺され、その妹イルシア||レイフォードも殺された。そしてその後、リエルをグレン先生が救った」

「あ……………っ!?!」

バラバラになった記憶の欠片ピースがカチリとはまった。

燃えるような赤毛の青年に、それに刃を突き立てた青髪の青年、そしてそれを見ていた同じ燃えるような赤毛の妹、まるでリエルのような人間が刃を突き立てた青年に傷を負わせられた事。

グレンとアルベルトが二年前に天の智慧研究会が運営している研究所を強襲した。その支部にいたシオンという内通者と突如連絡が取れなくなったため強襲したのだがその道中にて大雪林に瀕死の重傷を負わされていたイルシア・レイフ・オードを見。もうすでに手遅れで見つけてから間も無くで息を引き取ったこと。

その後、シオンの遺体も発見。と同時にガラス円筒に収まっていたとある少女を密かに回収し、保護した。上層部にバレないようにアルベルト達は隠蔽しながら。そして、その少女こそがイルシアの記憶を『Project: Revive Life』によって記憶を受け継いでいたリエルだったということ。

リエルの正体は世界初の『Project: Revive Life』の成功例であるが、シオンの妹であるイルシアの『ジョン・コード』である肉体情報と『アストラル・コード』記憶情報を引き継いだだけの魔造人間だ。

しかし、リエルは納得できなかったのか唯一の味方である『兄』に縋るような視線を送るが……

「嘘……だよね……兄さん」

リエルは真実が分からず兄へ視線を向ける。

だがその兄は髪をぐしやぐしやにして、本来の髪型に整える。

「……やっぱりあの時、シオンを安直に始末したのは俺の最大の失敗だったな」

本来の口調でリエルにそんな事を言い放っていた。

「……………え？」

「術式はシオンの固有魔術オリジナル同然になったから、そのままでは使えないし……『イルシア』のコピー品であるお前の名前を『リエル』と安直に設定していたからね。白魔には『キーワード封印』ってのがあって、シオンに関わる記憶を封印出来る筈だった。けど設定が間に合わず、ちよつとでも切っ掛けがあれば簡単に封印が解けるから、色々和小細工をしたの……本当に上手くいかないもんだな」

邪悪な笑みを浮かべ、リエルを見下す。

シオンを偽っていた兄。いやライネルは本性を現した。

「あ、ああ……………」

「君は僕の妹だけど、もう要らないや」

「その口閉じろ！ 《雷槍よ》！」

フィールは殺さない場所に「ライトニング・ピアス」を発動しライネルへと閃光を飛ばす。が。その閃光は不意に間に乱入した三つの影によつて防がれた。その防がれた存在にアルベルトも目を見開く

その正体は……………

「だって、この子たちがいるから」

無表情で大剣を持つ三人のリエルだった。

三人ともからのボンテージを着用しており、錬金術で錬成した大剣を構えている。リエルと全く同じ……………リエルのコピー体がそこにいた。

「……………王女を攫つた理由がコレか」

「はっ……………どうせお前にはできないとか思っていたんだろうが……………言っておくが今回は完璧だぞ？ なにしろ、余計な人格や感情は念入りに削除！ 後から記憶調整なんて面

倒なことはせず、リエルの凄まじい戦闘能力だけを受け継いだ、俺の思い通りに動く、俺だけの操り人形だ！」

アルベルトの反応を見て愉快そうにライネルが叫ぶ。

「もう『Project Revive Life』はシオンだけのものじゃない！ このルミアとかいう部品のおかげで！俺はもういくらでもリエルを作り出せるんだ！」

「……………」

最初からわかってたが、バークスと同じくらいの屑だ。アルベルトは冷静ながらもその視線に静かな怒気を含み、フィールは俯いている。だが、ライネルはお構いなしに叫ぶ。自分の勝利を確信して。

「今回のリエル達は完璧だ！『アストラル・コード』から余計な人格や感情は予め徹底的に抜いたから僕の言葉に忠実に従う！記憶の改変やら調整やら七面倒な真似などしなくても俺はリエルの凄まじい戦闘技能だけを受け継いだ人形を生み出せる！」

「い、や……………」

「もう兄だなんだ演じるのも煩瑣だったからな！ 余計な感情を持つて右往左往されるくらいなら最初から余計な心なんて無くして俺の思い通りに動く人形を作ればそんなガラクタなんていらなんだよ！」

「あ、ああああああああああつ！」

そうライネルは言い放ち、兄だと信じていた人に裏切られ、目の前に並ぶ自身と同じ顔をした存在。それらを前に、リエルは力なく両膝を床につき、頭を抱えながら、生きる意味を失ってしまった。

「……………ぷっ」

「あつ？」

そんな中、誰かが吹き出した。

「ははは、あははははははは!!」

リエルが三体、明らかに状況は絶望的なにも関わらず、そんな中でフィールは耐え切れず笑ってしまふ。

その笑みはリエルの感情の崩壊を見て笑ったものでは無い。滑稽さに笑っている訳では無い。

「ああ、安心したよ」

それは怒りだった。

バークスと同じ人間を何とも思わない屑に対する圧倒的な怒りにフィールの右眼は蒼く染まっていた。

「貴方達が、私の思った通りの外道だつて事にさ。つつい笑っちゃった、キャー恥ずかし」

「な、何だお前、この状況で頭がイかれたのか?」

「そんな感情の無いガラクタなんて」

フィールは一瞬にしてリエルのコピー体に近づいた。

【女帝の世界】を使い、決闘でグレンに迫った強化魔術の重ね掛けでリエルのコピー体は反応すら出来ない。いや、直感や戦闘の勘がない以上、咄嗟に避ける事すら出来ないだろう

「……………へっ?」

「——もう嫌と言うほど見飽きよ」

それはまるで死神の鎌のようだった。

フィールの振るう『魔剣エスパード』はコピー体であるリエルを容赦なく両断し、バラバラに斬り裂き、無詠唱の「ブレイズ・バースト」が肉片を跡形もなく燃やした。

それは余りにも呆気ない決着、気づいた時には既にリエルのコピー体はこの世から姿を消していた。その事にライネルは酷く動揺した。

「ば、馬鹿なああああああああつ?!」

「そもそもリエルじゃ本気の私の相手にもならない。それこそ見ていたのに、何粹

がってんの？　せめて『剣の神』エリエーテのデータでも打ち込んで出直してきなよ」
「さ、三体だぞ！　リエルの同スペックが三体も!?」

「感情っていうのは偉大だね。何も知らない自分に何かを教えてくれる。今泣いている
リエルだって、辛いと学んだから泣いている。感情が有るから人は学び、成長する。
それが欠落した人形なんて、獣にも劣る」

フィールはリエルの前に立つ。

感情があるから人間だ。感情がなければ獣に劣る存在だ。リエルは顔を上げ、涙を
流していた。だが信じられないとばかりにライネルは動揺する。

「そ、そんな非常識な事……!」

「もう黙ってください。後はじっくり軍で聞くので」

「た、《猛き雷帝よ・極光の閃槍以って・刺し穿て》!」

ライネルが「ライトニング・ピアス」を放とうとするが、魔術を発動する事が出来な
い。それに酷く動揺したライネルはフィールを見ると目を見開く。フィールの左手に
は『愚者のアルカナ』が握られていた。

「残念でした。魔術はもう使えないよ」

「『愚者のアルカナ』だど!? アレはグレン||レーダスにしか使えない筈!? お前は一体……!」

「ライネル、貴方の罪は3つ、シオンとイルシアを殺した事、ルミアを部品扱いし、リエルを捨てた事、そして3つ目は——」

魔銃ペネトレイターがライネルの額に突き付けられる。

ライネルはただ恐怖して震える事しか出来ない。怒りに満ちた顔のフィールは最後の罪を告げた。

「先生をリエルを使って襲わせた事だ」

「ひい……ま、待ってくれ!」

「この世界に来てからの決まりだね。私が守ると決めた人間に手を出した人間はブチ殺すと決めたんで。さようならライネル||レイヤー」

「ま、待つ——!」

フィールは迷わず引き金を引いた。

ルミアやリエルは目を瞑り、耳にはパアン！と鳴る銃声音が木霊する。銃弾は狂いもなくライネルの額に当たり、ライネルは倒れた。

「フィールさん……？」

「大丈夫だよルミア、リエルも」

意識を失っているだけだ。よく見るとライネルの額は赤いになっているが、銃痕は見当たらないし、一切血が出ていない。アルベルトはため息を吐く。

「そんな事したリエルだって僅かながら心を痛めるかもしれないし」

「非殺傷系のゴム弾と分かっていなかったら俺が止めていたぞ。全く」

「さて、ルミア。服以外に怪我は無い？」

「う、うん大丈夫……」

ルミアを縛る鎖は『魔剣エスパード』で斬り裂いて、服はフィールの宮廷魔導師団のコートを貸してあげた。リエルの方を向き、指を鳴らすと「グラビティ・プリズム」が

消えていった。

リエルに近づき、目の前に立つと、パン!! とフィールはリエルの顔を力一杯叩いた。それはルミアでさえ目を瞑るくらい痛そうな程。

「……これはグレン先生の分」

「……私……は」

「リエル、偶には一つだけ私が貴女に一言授けよう」

フィールはリエルに告げた。

座り込むリエルをフィールは見下ろしながら真面目な顔で一つの言葉を授けた。

「自分を憐れむな。自分を憐れめば、人生は終わりなき悪夢だよ」

その言葉にリエルは震えた。

人形と卑下するこの少女にどうしても伝えなかった言葉だ。憐れんで、苦しんで、自分の居場所はない。生きる価値はない。そう思い込んでいるリエルにどうしても伝えなかった言葉だ。

「でも……私は人形で……人間じゃない……」

「その何が悪いの？」

「……………えっ？」

人形と卑下する少女は困惑した。

この少女は人形の何が悪いと真つ正面から口にしたのだ。

「リエルが人間じゃないってのは分かっているよ。『Reel計画』で生み出されたのは知ってるし、で？ それと私がリエルやルミアを助ける事に、何か都合の悪い部分があるのか？ 言ってみなよ？」

「え……………いや、だから……私はみんなを騙して……」

「いまリエルは『騙した』とか言ってたが、それは違う。貴女は知らなかった。ただ、秘密が明るみになっただけ、騙したんじゃない、知らなかっただけ。だからリエルは悪くない」

更に困惑するリエル。

この人は何を言っているのだろう。人形である自分を許すなんて、リイエルには理解が出来なかった。

「あのねリイエル。確かに貴女は人形、魔造人間かもしれない。けど、私ははつきり言つてあげる。それがどうした？」

「……だから、私は…………！」

「貴女が私やルミア達を見て何を思った？」

「！」

「楽しかった。違う？」

ただ俯いたリイエルは力無く頷く。

楽しかった。馬鹿みたいに騒いではしゃいで、それで心が安らいで、楽しかったのだ。それを思い出して涙が溢れ始めていた。

「それが答えだよ」

「でも………私には、生まれた意味も、何のために生きるのかも、いるべき場所もない。グレンも刺して、システイーナも傷付けた。そんな私が——」

「あー!! もう!! 面倒臭い!!」

「っ!？」

急に口調が変わったフィール。

フィールは心の声の全てをぶちまけた。

「ウジウジするな! 傷つけたなら後で謝れ! 傷付けた罪があるなら次はその人を守る為に生きてみろ! 拳骨も甘んじて受け入れて、痛くても耐えて、居場所を取り戻せ!! 生きる意味なんて誰も分からない! ただ、探すしかない! だから探せ! この世界を生きてそれを必死に探してみろ!!」

それはまるでグレンのような口調で声を荒げる。

生まれてきた意味なんて分からない。分からないから探すしかない。リエルはここから始まるのだ。スタートラインで挫けているなんて笑えない。

フィールは右手をリエルに差し出した。

「——自分の為に生きて、自分のやりたいように生きなさい。それが、私みたいな

《愚者》から貴女への呪いだよオーダー」

リエルは震えた手でフィールの差し出した手を掴む。

フィールは引つ張り上げるとリエルはフィールの胸で泣き叫んだ。ただ、悲しさ故の涙ではなく、自分を肯定してくれたフィールの優しさにただ泣き叫んだ。

「私……まだ……ここにいていいの？」

「うん。ねっ？ ルミア」

「勿論、また仲良くしてくれたら許してあげる」

ポロポロと涙が溢れてしまう。

止めどなく溢れるそれがリエルの感情を決壊させ、フィールの胸で泣き続けた。ルミアもフィールとリエルを抱き締めて、涙を流していた。

「うあああああああつ!!」

「大丈夫、大丈夫だから」

フィールは優しくリエルを抱き締めて背中を摩る。
アルベルトがそれを少しだけ、微笑ましく思い無粋な真似はせずに退路の準備を始めていた。

ただ、あの時見た蒼い瞳はリエルを抱き締めている時には消えていた事に少しだけ疑問を感じて……

ルミア誘拐事件も終わり、旅籠へと戻るフィール達。

フィールを待っていた生徒達やグレン先生、セラ先生は何事も無く無事で良かったと素直に安堵の息をつく。

生徒達もグレン先生が死にかけていたり、リエルとルミアがどこかへ消えたことなど心配していたのだが、ステイナが何も言わずに待っていて欲しいとお願いしていたように静かに待つことにしていたのだ。

何も聞いていなかった為、不安で仕方がなかったのだ。

クラスメイト達の元へ戻ったルミアとリエルは真っ直ぐにシステイーナの元へ向かった。

「フイールさん、何が……」

「まあともかく、今はあの5人だけにしてあげて」

システイーナが先頭に立ち、その後ろにセラとグレンの姿があった。

そして、みんなが見ている中でリエルはシステイーナにぼそぼそと何かを話し、パン！ とシステイーナが突然リエルの頬を平手で叩いた音が響き渡り、一同を驚かせる。

「~~~~~ッ！ ~~~~~ッ！」

システイーナが涙ぐみながら、リエルに何かを捲し立て、その後ろからセラも抱き締める。安堵の涙を流しながら力強く抱き締める。

「……………っ……………っ！ ……」

抱きしめられるままのリリエルも、ぼろぼろ涙を零しながら何事かを呟いている。それにグレンは片目を瞑り微笑んでいた。自分を貫いた事は全部、システイーナが代弁していたから。

そして、それを見守っているルミアの目にも大粒の涙が浮かんでおり、それを見ていたクラスメイト達はいつもの光景に戻ったと、無事に終わったんだと心からそう思っていた。

『戦いはいつ終わるんだろうね』

腕に包帯を巻いているフィールにエルザを呟いた。

治癒魔術は日に使えるのに限界がある。アレだけの剣撃で更に最上の戦闘能力に『剣の神』エリエーテのデータまで含められたら少女も気が滅入る。

『急に何?』

『イルシアのコピー体をもう何体殺したと思ってるの? 流石に疲れるよ』

『……まあね』

『剣の神』エリエーテの剣技に対抗出来るのは帝国宮廷魔導師団の《剛毅》と《戦車》のエルザ、《愚者》のフィールくらい、後は『双紫電』のゼーロスくらいだろう。まあ魔術を使わなければエルザの方が断トツで強いが……

『ねえエルザ……もし、イルシアのコピー体が感情を持っていたらさ。仲良く出来たと
思う?』

『私は無理』

『うわつ、はつきり言っちゃったよ』

『ただ……』

『?』

『感情の無い人間なんて、やっぱり悲しいかな。私のイルシアに向けての殺意も摩耗するくらいなんだから』

凄腕の暗殺者、イルシアに奪われたエルザの人生。

憎くて仕方ない相手のコピーが何体も何体も現れたら流石に精神的に磨耗し、疲れてしまうのだろう。

『けどね』

『?』

『イルシアのコピーに感情があったなら……それはイルシアじゃない。ただの別人とは思うかな』

『別人……ねえ? 自分次第で仲良くはなれるって捉えていいわけ?』

『勝手にしなさい』

その曖昧な答えにクスツと笑ってしまった。

エルザは優しい人間だ。あの時母と叔母を失って尖っていた私に声をかけてくれた親友。「魔術を教えて」なんて下級生から言われたらプライドが許さない学校だった中で、唯一私と対等に接した人間。

自分次第で人は変わる。それがエルザの答えだった。

「結局は自分次第……か」

その通りなのかもしれない。

結局、運命を切り開くのは自分次第。今のリエルが生きたいと思うのも自分次第。だから、だからこそ今のリエルは笑顔でバレーボールに混ざっているのだろう。

あつ、殺人スパイクでカツシユ君が吹き飛んだ。

「これが……お前の守りたかった未来か？」

「いいえ、私はこんな未来は知りませんよ。ただ、守りたいと思えるなら、その未来はハッピーエンドなんですよ」

木陰で一休みするフィールと気付かれないように木に背を預けるアルベルト。フィールは黒いビキニで緑色のパーカーを着ている。アルベルトは変装をしているが、フィールはあの光景を見て、フツと笑う

「ありがとうございます。アルベルトさん」

「何に対しての礼だ」

「リエルの報告の虚偽、アルベルトさんがやったんでしょう？」

「……………フン」

『Project:Revive life』が明らかになればリエルの今後は危ないだろう。だからアルベルトさんは報告書を隠蔽し、『Project:Revive life』について明るみに出ないように仕向けた。

任務に帰った後の後始末は殆どやってくれた。本当にこの人凄い。戦闘能力もそうだけど、やはり超一流の魔術師だ。

「リエルを救ったのはお前だ。礼を言われる筋合いは無い」

「それでもですよ。私は未来である子の地獄を見ましたから」

『Project:Revive life』が利用された未来か……………」

「あんなのは作られちゃいけないんです。だからこそ、リエルは人形のままの感情じゃダメだと思ってたら、気付かぬうちに声を荒げてた。全く、冷静になりきれない時点で魔術師失格ですよ」

冷静さを保つのは魔術師の基本だ。

アルベルトはその言葉に少しだけ笑った。

「お前が魔術師失格なら他の人間は魔術師以下となるぞ」
「それは勘弁、じゃあやっぱり私は魔術師ですよ」

フィールは笑ってしまった。

下手な謙虚は侮辱だから、直ぐに訂正してしまった。真剣な顔でフィールにアルベルトは質問する。

「フィール＝ウォルフオレン」

「……？ 何ですか？」

「お前は『アカシックレコード禁忌教典』と言う言葉に心当たりはあるか？」

『アカシックレコード禁忌教典』は未だ何なのか判明していない。未来の情報を持つフィールなら分かるか
アルベルトは聞いたが、フィールは首を横に振った。

「……未来でも、それだけは不明でした」

「そうか」

「だけど一つ、世界は歪みを許さない。ただ、その絶対の法則を塗り替えると言う事だけは未来で知った僅かな情報です」

「歪み……お前も歪みの対象なのだろう？　世界を超えたのに世界は何故お前を修正しない？」

「……それは私にも分からないんです。改変となれば、世界そのものが番人^{ルーラー}を遣すとは思ってたんですけど、時間を超える為に使用した術式ならまだしも、未来から過去まで来る間の記憶は無いんです」

世界は歪みを許さない。

定められた運命と言うものが存在するなら、世界は歪みの対象であるフィールに対して、修正の為の存在くらい遣すだろう。

なのに、フィールに対して発動しないのは世界そのものに何かあるのか、フィール自身に何か特殊な力があるのか。フィールが繋がった『世界の一』に何かがあるのだ。『世界の一』に繋がった後に何かがあった。

この世界に来てから回路は酷く損傷し、A級以上の魔術には多大な負荷がかかる。魔力容量も全盛期の半分以下、半分以下でも超一流の魔術師より高いが……その原因が何があつたのかもしれない。

チラツと自分の右手の甲を見ると、片羽の蝶の紋章のようなものが未だに存在している。異能関連に関わった時、自分の中にある十二力が影響されたのか、定かでは無い。この紋章はフィール自身でさえ理解出来ず、ただ『銀の鍵』の他にフィールには全く別の、人智を超えた力を秘めていると言う事だけが分かつた事だ。

「引き続き此方で調べる。リエルの事は暫く任せるぞ」

「はい。アルベルトさんも気をつけて」

そう言つてアルベルトは木陰から姿を消していた。

全く、いつも手が早い人だ。薄く笑つて、空を見上げる。少しはハッピーエンドに出たのかな。そこからグレンが覗き込む。

「よう黒猫」

「……先生、リエルとは話せたんですか？」

『ルミアとシステイーナを守る、そしてグレン、わたしはあなたの剣になる。グレン達が望む道を切り開くために、グレンが守りたいものを守るために、わたしは剣を振ろうと思う。それが私のやりたい事だから』だよ。兄の代わりじゃなく自分の意思なら否定出来ねーよ」

「ふふっ、そうですね」

それが自分の意思なら否定なんて出来ない。

リエルのやりたい事なら尚更だ。グレンはフィールの頭に手を当てて呟く。

「……ありがとな」

「？」

「リエルを叱ってくれた事だよ。イルシアとの約束、俺じゃなくてお前にやらせる事になっちまったけどな」

「ああそれですか。気にしてませんよ。ただ……」

てか私は猫か！ と撫でられた手を恥ずかしくて払い除ける。グレンは真剣な顔でフィールを見る。その表情にフィールは軽く笑いながらバレーボールをしているリイ

エルを見る。

「リイエルはこれからです。結局は自分次第、私はあくまで少しだけ本音をぶちまけただけです。だからこれから色々な事を学んで、ちゃんと人として、導くのは私じゃないし」

「？」

「ほら、ああやって居場所を作って、教えあって、自分の為に生きるのが一番、人間らしい生き方でしょ？」

自分の為に生きる。傲慢な生き方だ。

だが、傲慢に生きなきゃ、私みたいに全て守りたいと言う傲慢さとリイエルのそれは少し違うが、でもリイエルが自分の為にそれを選んだなら否定するつもりはない。それはきつと自分の傲慢なのだろう。

「……ふっ、そうだな」

「それはそれとして、どうでした？」

「あつ？ 何が？」

ファイルはニヤニヤと笑いながらグレンに対して特大の爆弾を落とした。クラスを巻き込もうと思つたが、流石にセラ先生が恥ずかしそうだからあえて耳打ちでグレンに告げた。

「セラ先生のく・ち・び・る」

「ぶふおっ!? お、お前あの采配絶対わざとだろ!?」

「まさかまさか、それともアルベルトさんが良かったですか?」

「それこそもつと嫌だわ!!」

「セラせんせいにまかせたのはわざとじゃありませんよー」

「棒読みじゃねえか! 大人をからかいやがって、そこに直れ!」
「イクステインクシヨ

ン・レイ」だ」

「セラ先生〜! グレン先生が話があるって〜!!」

「おまつ!?! 汚いぞ黒猫!」

「今の私は《愚者》ですよ? 汚くて結構」

「グレン君、どうしたの?」

「ぬおおおお!? 白犬!?!」

フィールはクスクスと笑いながらグレン先生から逃げ、グレン先生は昨日の恥ずかしさからセラ先生から逃げていた。まあフィールは遠く離れた所で「イリユージョン・イメージ」で誤魔化して上手く撒いていた。これで一層面白くなりそうだが、撒いたフィールの隣にリエルが立っていた。

「何してるの？ 三人とも」

「さあ？ セラ先生とグレン先生の鬼ごっこかな？」

リエルの頭に手を乗せてフィールは撫でた。

カラカラと笑いながらあの2人が走っていた場所を見ていた。フィールは撫でながらリエルに問う。

「今、生きてて楽しい？ リエル」

「分からない。けど……」

未だ生きる意味は分からない。

だが、リエルが今生きたいと思った理由をフィールに微笑みながら語った。

「この居場所を守りたい。そう思えた」

「……そっか。それは良かった」

「フィール」

「？」

「私は貴女も守りたい。グレンみたいで、セラみたいな貴女も」

「ふふっ、物好きだね。それは使命？」

「自分の意思」

「上出来、じゃあまた遊んでいきなさい」

と言つてリエルは再びバレーボールへ足を運んでいた。ただ男子達はヒイイイイ！と叫びながらも次は負けないといつの間にか参戦していたギイブルとバレーボールを繰り広げていた。

「……っ!? っほっ! っほっ!!」

急になにかがむせ上がってくるような感覚に襲われ、ファイルは咳き込んだ。まるで喘息を患った時のようなそれは何度か連続して訪れ、呼吸が難しくなる。

「カハツ……! ハア……ハア……」

少し収まったのを機に、口を押さえていた手を退ける。すると、その手は赤く滲んでいた。

「ハハツ、分かってるよ。そろそろ限界が見え始めたんでしょ?」

自嘲しながらファイルは赤く染まった手を見て誰も居ない中で呟く。分かっている。

私はきつと、2人が生きる未来の行く末まで生きる事は無いのだと。ただそれを遠くにいる生徒にバレないように海水で洗い流した。

「……せめてあと3年は保つてくれれば上出来かな」

フェジテの滅びに決着をつけた後からは、フィール自身がどうなっているのか分からない。緩やかな毒のように身体に巡る運命の毒が、フィールに告げているようだった。

お前はもう長くないと、フィールには分かっていた。

けど、最善策の先に生まれたハッピーエンドで終わる世界があるのなら……

「1番、歪なのは……私なんだろうね。エルザ」

フィールは空を見上げて自嘲していた。

第4章 正義の魔法使い 第15話

ヒラヒラするものを追いかけてた。

それは丁度街中で、お母さんが目を離れた隙にヒラヒラとするものを追いかけて、掴んでいた。

『ん！』

『わっ!? な、何……子供?』

『何じゃクリ坊? ……ん?』

それをグイッと引っ張る。

1人白髪のお爺さんと涼やかで落ち着いた物腰の10代後半の少年が足を止めた。ヒラヒラと動くマフラーを掴み、フィールはやった! と思いつながら喜んでいた。

『あー、お嬢ちゃんもしかしてクリ坊のマフラーを掴もうとしたのか?』

『うん!』

『ガハハハハ! クリ坊! 一本取られたの! 背後にいるお嬢ちゃんにマフラーを掴まれるなんてな!』

『いや敵意とかないですから!? ……まあ、良かったねお嬢さん』

『うん! やったー!』

ふふふ、と笑いながら頭を撫でる少年に少女は猫のように口元を緩ませた。何故こんな所に少女が居るのか、バーナードは怖がらせないように聞いた。

『お嬢ちゃん、お母さんは何処に?』

『おかーさん? あつ、どこだっけ?』

『迷子……ですね』

『しよーがないわい、一緒に探すとしようかの』

迷子になったフィールルに少年はため息を吐き、お爺さんは笑いながら少女を肩に乗せてお母さんを探しに街を歩き始めた。

街は意外と賑わっている。人も多い中で迷子になってしまったフィールルの母親は

バーナードの肩から見下ろしても見つからない。

『うーむ、どうするかのぉ？　いつそ警備隊の所を探してみるか？』

『けど、この場所から大分離れてますよ？』

『おかしさんのぼしよ……あつ、おかしさんをよべるかも！』

『んんっ？　どうやって？　通信用の魔道具とかないのに？』

『えつとね……《そよかぜはつたう・かぜをつたいて・ふきぬけよ》！』

『なっ!?　ま、魔術!?!』

フィールは幼い口調で黒魔〔ゲイル・ブロウ〕のような突風ではなく、自分の周りに微風を生み出す魔術。名付けて黒魔〔リトル・グラスパー〕を使って風を吹き抜けさせる。本家である「ストーム・グラスパー」のように風を掌握し、操ったり感知したりは出来ないが、一定効果範囲に微風を吹かせるくらいなら可能だ、

風に関しては、フィールに教えてくれたお母さんの魔術だ。自分の魔力を乗せた微風が吹き抜ければ、風に最も相性がいい。

『フィール!』

『あ、お母さん!!』

黒魔改「ストーム・グラスパー」を使って感知出来る母親がフィールの風を感知する事が出来る。遠くから走ってくるお母さんに手を振って迎えている。

『あつれえ!? セラちゃん!』

『セラさん!? まさか、セラさんの娘さん!』

『あつ、バーナードさんにクリストフ君!』

『おかーさんのしりあい?』

『う、うん。と言うかコラ! 離れちゃダメって言ったでしょ!』

『ガハハハハ! お嬢ちゃんはクリ坊のマフラー追っかけとったんじゃよ』

他愛無い会話に花を咲かせていた3人。

2人は《隠者》のバーナードと《法皇》のクリストフだ。帝国宮廷魔導師団特務分室の実力者。軍を抜けたセラがまさか2人に会えるなんて驚いていた。

ただヒラヒラするマフラーが少しだけ羨ましくて、マフラーを掴むフィール。セラは離しなさいと言っても駄々っ子のように、やー! と言って離さない。

『どうしたのかい?』

『マフラーが気に入ったんじゃないかな? ごめんねクリストフ君』

『いえいえ、別に謝る事じゃないですよ』

クリストフは自分の首から紫のマフラーを外してフィールに巻き付ける。それにフィールは無邪気に喜んでいたが、セラは少しだけ申し訳無さそうにしていた。

『ちよっ! クリストフ君いいの!?!』

『構いませんよ。それにこんな小さいのに、魔術を見せてくれたお礼と思ってくれれば』
『わーい! ありがとう! えっと……クリストフおにーさん!!』

『ははは、どういたしまして』

『クリ坊、1発殴らせろ』

『嫌ですよ!?!』

頭をまた撫でてくれた事にフィールは、むふー! と顔を緩ませていた。紫色のマフラーを首にセラとフィールは手を繋いで帰るのを、手を振って見送るバーナードとクリ

ストフが居た。

その数年後、2人はフェジテを焼き滅ぼす終焉の炎に飲み込まれ、フィールが宮廷魔導師団として敵將軍を殺した後に、2人の名前がフェジテ崩壊の慰霊碑に刻まれていた。

その慰霊碑の前に花を添え、紫色のマフラーを巻いて宮廷魔導師団のコートを着ている黒髪の少女がそこに居た。

「……………ん……………」

何故だろう。酷く懐かしい夢を見た。

朝目が覚めるとくらりと視界が揺れた。

貧血か何かだろう、そう思いながらフィールは制服に着替えて部屋を出た。まだ朝の早い時間なので空気が冷たくて気持ちがいい。

少しだけ頭が痛い。寝足りなかったのか、顔でも洗ってしつかりしなきゃ、と思いつながら洗面所に近づくと水音が微かに聞こえてきた。

静かに洗面所を除けば、すでに起きていて眠た気なセラが居た。

「おはよう、セラさん」

その背中に向かっていつものように朝の挨拶をすれば、セラの未だに眠そうな瞳がフィールを映した。

ぼんやりしているところを見るとまだ寝惚けているのかもしれない。

いつもは綺麗な銀色の髪も寝癖で左右ばらばら飛んでいる。

意外と朝弱いんだなあ、と内心で思いながら蛇口を捻る。冷たい水が気持ちいい。顔を洗ってふと目の前にあつた鏡を見ると、こちらを見ているセラの瞳と鏡越しに目があつた。

「……どうしたんですか？ セラさん」

なんだろう、と不思議に思うのと同時に、急に横から伸びてきた手が額に添えられる。何事かと横を見れば、の気難しそうな顔。あまりに近い距離に驚いて身を引けば少しだけ目眩がした。

「フィールちゃん」

「な、何ですかセラさん？」

「熱があるね」

え？　と思わずセラを見る。確かに触れたセラの手は冷たかったが、それは水を使っただからだと思っていた。しかしどうやらそうではなく、己の体温が高かったらしい。理解した途端、無視してきた体のたるさが酷くなる。人間の体とは不思議だ。自覚した途端に顕著に現れるのだから。

「風邪……？」

「どうやら、疲れが溜まってるとみただね。今日はお休みして」
「……分かりました」

風邪程度なら寝てれば治るだろう。

よくよく考えれば身体のダメージの他にも、サイネリア島の気温差や船酔いに当てられて体力を削られていたのだろう。任務も夜中に行われたし。

「それじゃあ私は寝てるので……セラさんは気をつけて」

「ううん。私も休むし」

「サボりじゃないですか。行ってきてください。てかむしろ風邪拗らしそうだから却下で」

「酷くない!？」

フィールはため息を吐きながらベッドに戻る。

セラに頼るまでもなく、風邪薬を飲んで寝れば回復するだろう。荷物をセラに持たせて外に追いやるフィール。セラは少し心配しながらも、渋々ながら学院へ向かう事にした。

地獄を見た。

戦場は血で血を洗うような過激な戦い。

襲ってくる敵を斬り殺し、焼き殺し、撃ち殺し、氷殺し、呪い殺し、いつしか自分の目の前は血で描かれたようなキャンパスの中に居た。

蒸せ返る血の匂い、木霊する悲鳴と恐怖。

心が弱い人間なら剣すら握れず吐いているであろう地獄絵図の世界。

それでも必死に戦っていた2人の人間を……

『エルザ!!』

マスケット銃の弾がエルザを貫いていた。

エルザの抜刀は確かに届いていた。死体もここに存在する。にも関わらず、空の上で

『人工精靈』に乗る殺した筈の男がそこにいた。

『エルザアアア!!! クソツ! 《慈愛の天使よ》!』

そんな男に目もくれずにエルザを抱き寄せ治癒魔術である白魔【ライフ・アップ】をかけるが、急所を3箇所貫かれている。【ライフ・アップ】はあくまで自己治癒力を上げるだけ。【女帝の世界】だろうが、今のフィールが何をしようが貫かれた急所を治癒する事は出来ない。白魔儀【リヴァイヴ】は魔力がフィールだけでは足りない。全盛期である魔力全てを使っても不可能だ。

『ごめん……フィール、油断しちゃった』

『喋らないで! 今、回復を……!』

傷から血が止めどなく流れる。

吐血するエルザにフィールの心は恐怖に満ちていった。

『……フィール……ゴホツ……もしまた……会えるなら……』

『エルザ……嫌、嫌だよ！ ……私、まだ……！』

エルザは涙を流しながらフィールの頬に触れる。

無情にも血が流れ、徐々に冷たくなっていくその手にフィールは涙が溢れていく。子供のようにそんなのが認めたくなくて、エルザが自分の隣から居なくなってしまう恐怖にフィールは叫ばずにいられなかった。

『私、まだエルザと一緒に……！』

だが、現実には少女の願いを否定するかのように鼓動を弱めていく。エルザは涙を流しながら、いつかの願いを乗せて微笑んだ。それはまるで、少女に約束するかのよう。

『今度は……幸せな世界で……また、会おうね』

エルザは微笑んでフィールの頬を撫でると、静かに目を閉じた。

そして、頬を撫でた手は徐々に地に落ちていき、パタリと音を立てていった。

「つつ……!!」

嫌と言う程辛く、悲しい悪夢に目が覚めた。

身体は震え、冷や汗は止まらず、頭が痛い。辛くなるほど胸が苦しくなって、涙が気付かぬ内に溢れていた。

「……懐かしい夢の後は悪夢とか、何の嫌がらせよ全く」

震える手を握りしめて「マインド・アップ」をかける。気休めにしかならないが、今のフィールは鏡で見なくても分かるくらい酷い顔だった。

熱は大分下がったようだ。まあ風邪薬を飲んで、汗を掻くほど寝ていれば治るのは当たり前だ。この世界に来てから気を張り詰め過ぎていたのだろう。そんな事考えながら時間を見ると夕方の4時過ぎだ。流石に寝過ぎたと思いつながら、体を伸ばしているとコンコンとノックの音が聞こえてきた。

「どうぞ」

「やつほー、フィールちゃんお客さんだよー!」

「調子はどうフィール?」

「お、お邪魔します」

「いちごタルト買ってきた」

そこにいたのはセラの他にシステイーナ、ルミア、リエルの三人だった。フィールが風邪と聞いた3人はお見舞いに来たようだ。

「3人とも、まさかお見舞い?」

「うん。まあ……後は少し愚痴りに来たのと、明日の特別演習について色々」

「……また何かやらかしたの? グレン先生」

「あ、あはは」

「?」

システイーナは精神的に疲れたような顔だった。今日の事を振り返りルミアは苦笑

いし、リエルはルミアが苦笑いする理由に首を傾げた。

事の発端はレオスⅡクライトスと言う男がシステイーナの婚約者と言い、アルザーノ帝国魔術学院に来た事が始まり。

「レオスⅡクライトス……確かクライトス魔術学院の教師だっけ？　優秀な教鞭を振るうくらいは聞いてるけど」

「これ、今日そのレオス先生の授業のノート」

「あつ、わざわざありがとう………うわマジか」

レオスⅡクライトスは帝国総合魔術学会でも名の知られた有名人。病気による長期療養という名目で表舞台から遠ざかっていたが、特別講師としてアルザーノ帝国魔術学院に赴任、高度な軍用魔術理論を普通の学生に理解させる高い指導力から一気に人気を取ったらしい。実際にルミアが写したノートを見てみると、内容は超高度な物だ。

「『マテリアルフォース物理作用力理論』を一から噛み砕かせて生徒達に教えたのか……確かに凄いなだけど

……」

これは正直今の生徒達に教えてもいいものなのか？

ハッキリ言って魔術理論は素晴らしいの一言に尽きるが、魔術の威力に関するこの理論を理解してしまえば、「シヨック・ボルト」で人を殺せたり、「エア・スクリーン」で窒息死させたりと、学生達に教えるにはまだ早い気がする。

何というか、経験が無い人間が配慮無く教えている気がする。考え過ぎならいいのだが……

「大丈夫だよ。先生達が教えてるんだもの。力に溺れる人なんて絶対にいないよ」

「……まあ、力しかない人間ならここに居るけど」

「？」

リエルに視線を向けるが、呑気にいちごタルト食べてる。あれ？ いちごタルトって私の為に買ったんじゃないの？ ただ買ってきた報告？ だとしたら一周回って尊敬する。

「まあいいや。それで……？」

「レオスに求婚されたんだけど……でも……」

「レオスは現実主義の政略結婚で迫ってきた……違う？」

「な、なんで分かったの？」

「そんな顔だったから」

メルガリウスの天空城の謎を解き、お祖父様が憧れた城にいつか辿り着くと。婚約を断った。だが、レオスは現実を見るような事を口にした。システイーナは魔術を学べば学ぶほどいかに祖父が雲の上の存在だったかを痛いほど実感しつつあった。システイーナはずっと不安だったのだ。祖父に迫いつけないまま自分は無駄な時間を過ごして人生を消費してしまうのではないかと。極力考えないようにしていた事をレオスに直接抉られてしまったのだ。

「それで……嘘について、先生と婚約者と言う嘘をついたら……決闘になって……」

弱々しく呟いたシステイーナ。

システイーナはグレンとセラの関係と言うか、割り込めない間柄に気付いていたのに、グレンを使って嘘をついてしまった。

「……ハア、レオスも悪いけどシステイも悪いよ？ キチンと断れって私が言う資格は無いけど、嘘をつくのとは違うよ」

「うっ……分かってるけど……それでも」

「まあ、システイを責めるのはお門違いだけど」

「グレン先生も察してそれに乗っかったけど」

「『俺が見事、白猫とくつついて逆玉の輿、夢の無職引きこもり生活をゲットするために、今からお前らに魔導兵団戦の特別授業を行う！』って言ってた」

「……ハア」

あの人、本当に嫌われ役を買うのが好きだな。

リエルが一字一句話してくれたおかげで、グレン先生の心情も何となく理解できた。要するにシステイーナの夢を諦めさせようとしたレオスに割り込んでいったのだろう。自分から、生徒の夢を応援したいが為に……いや、システイーナがセラに似ているせいかもしれない。

「特別演習の魔導兵団戦か。二人エレメント一組・一戦術単位ワンユニットの翻弄でケリを着けるつもりかな？」

「えっ？ 何で分かるの？」

「だって、戦場に英雄は居ないんだし」

えっ？ と2人は驚いたような目をしていた。

戦場に英雄はいない。それはグレンが1番初めに言ったことだ。何も知らない
フィールがグレンと同じ事、同じ戦術を組み立てている事にシステイーナは驚愕して
いる。

ルミアだけは、その理由を知っているようだが、敢えて口に出さないようにしている
のだろう。

「……とりあえず明日についてやノートの内容も理解したし、もう暗くなるから帰った
ほうがいいよ。3人ともお見舞いに来てくれてありがとう」

「……うん。そうね、じゃあセラ先生にもお礼を言つて帰ろっか」

「うん。リエルも一緒に」

「わかった」

3人は部屋から出て、帰っていった。

何か嫌な予感がする。まるで、既に敵の策略の道筋を踏みしめているような嫌な感

覚。

その嫌な予感に考えこむと同時に、アルベルトさんとの連絡用魔導具が光り出した。

セラの料理を食べ終えたフィールは宮廷魔導師団のコートを着て、セラに少し事情を話すと、あとでちゃんと話してね？　と言われ、フィールを見送っていた。

夜のフェジテの賑やかな繁華街に背を向け、とある路地裏を歩くフィール。人気のない路地裏を進んでいると、ひっそりと隠れるように据えられた、場末のバーが現れる。

その店に足を踏み入れると、店内は薄暗く、客は殆どいない。

この店は客に対して徹底した秘密厳守・非干渉を貫くことが売りの店で、密談・密会に使うような店だ。

「こんばんわ。アルベルトさん」

「フィールか、体調はどうだ？」

「まあ問題ないです。他にも居るんですか？」

「グレンにも一応な。セラにはお前から伝える」

「はい。まあそれは構わないですけど」

座って紅茶を頼む。

アルベルトさんがわざわざ元《女帝》と元《愚者》の2人にも話したほうがいい内容に気になりはするが、グレン先生が来るのを待ちながら、紅茶を飲む。

「……………遅かったな。二分の遅刻だ」

「うっせーな、二分くらい誤差の範疇だろうが。てかフィール、お前はサボりかよ」
「単純に風邪引いてただけです。熱引いたんで来ましたよ」

グレンはアルベルトの隣に腰かけ、毒突く。

フィールもため息をついて再び紅茶を飲む。

「また何やら、派手に動いているようだな、グレン」

「ま、お前なら当然、こつちの状況も把握しているか」

「惚れてもない女を賭けて勝負など……………下衆の極みだ。少しはシステイーナ
フィールに申し訳ないと思わないのか？」

「はっ………いーじゃねーか？ 成功して白猫とくつついちまえば、もう働かなくてもいいんだぜ？ こんな逆玉の輿、滅多にねーよ。こりや乗るつきやねーよなあ？」

にやりと口の端を吊り上げ、くつくつと喉を鳴らして笑うグレンにフィールは呆れながら言う。

「グレン先生、道化を演じるのは勝手かもしれないですけど、それは夢を応援してくれた人達への侮辱ですよ」

「あつ、なんだ黒猫。説教か？ 別に俺は——」

「システイーナの夢を踏みにじつてるような言い方は止めろって言ってるんだよ。グレン——」

強めの口調にグレン先生は少しだけ怯んだ。

正直な話、フィールも少しだけ怒っていた。幾ら自分を蔑ろにしようが、それを応援しているセラ先生の気持ちも考えないで言った言葉は嘘でも許せないでいた。

「システイーナの夢を知っていて、それでもなお、そう言うなら今貴方がやってる事はた

だ悪戯に人生を踏みにじる悪人でしかない」

「はっ、はいはい俺は悪人だつてゝの。だから俺は——」

「自分がここに在るべきじゃないつて言いたいのならセラ先生の前でハツキリ言え。それとも『正義の魔法使い』の夢に挫折して、そこから見つけた光を、セラ先生と一緒に見つけた居場所を否定しますか？」

その眼には少し怒気を含んでいた。

幾ら自分の父とは言え、そんなやり方を取るならそれは軽蔑するものだ。別に全てを知っている訳ではない。グレンは何故それを知っているのか目を向ける。

「……………お前」

「乗つかつて決闘に勝つた後に嫌われれば全て解決と思つてるなら勘違いしないでください。そんなやり方じゃ、システィを傷付けるだけ、悪質な『天の知恵研究会』と同じですよ」

気分が悪そうにグレンは座り込む。

頼んだ酒を流し込んで、言葉を飲み込んでいた。

「……フン、生徒に叱られるとはな」

「うっせえ、……悪かったよ黒猫」

「それはシステイに言つてください。で、アルベルトさん用件は何ですか？」

わざわざアルベルトさんがこんな場所で伝えるなんて、結構な用件なのだろう。アルベルトは重い口を開いた。

「このフェジテに『天使の塵』エンジェル・ダストが、何者かの手によって持ち込まれている」

「な——ッ!？」

「……………っ」

それを聞いた2人の顔が強張った。

思い出したのは自分にとつて四年前の出来事。未来で相棒のエルザを失った嫌な記憶がフラッシュバックする。漏れ出る怒りは拳を握り必死で抑える。

『天使の塵』は被投与者の思考と感情を完全に掌握し、筋力の自己制限機能を外し、ただ投与者の命令を忠実なまでにこなす無敵の兵士を作ることを目的として開発された魔

薬。

だが、一度この薬を投与された人間は確実に廃人と化し、もう二度と元には戻らない上、定期的に『天使の塵』(エンジェル・ダスト)を投与されなければ、たちどころに凄まじい禁断症状と共に肉体が崩壊し、死に至る。

投与を続けてもいずれ末期中毒症状で死に至る劇薬でもある。故に研究資料と製法は全て抹消された筈だ。

「馬鹿なッ!? 『天使の塵』(エンジェル・ダスト)に関する研究資料と製法は、一年とちよつと前のあの事件で

全て抹消されたはずだ! あの高度な錬金術知識を要する複雑怪奇な製法、正確な製法

抜きに『天使の塵』(エンジェル・ダスト)を再現するなんて不可能だッ! アレはとつくに失伝魔術なんだ

ぞ!?!」

「その通りだ。そして唯一『天使の塵』(エンジェル・ダスト)の製法を自身の頭の中だけで完全把握していた格別の男が恐らく動いていると上層部は見ている」

グレンは1年半前にその男と戦った。セラと一緒に戦ったが、援護がなければ死んでいた。末期中毒者が入り乱れる街で……あの男は想定外の出来事に逃亡した。

ファイルは目を細めて、その男の正体を確認した。

「元帝国宮廷魔導師団特務分室執行官N.O. 11《正義》ジャティスⅡロウファンですよ
ね」

「なつ、黒猫。お前どうしてそれを……!」

「アルベルトさん。今誰が出所調査の担当してるんですか?」

「《隠者》と《法皇》だ」

「成る程、ならいいです」

グレン先生の質問を受け流しアルベルトに聞く。

本当に《正義》が動いているのなら、下手に動くより任せた方がいいだろう。どの道
フィールの目的はあくまで2人とクラスメイトの防衛だ。奴の狙いは分からない以上、
下手に動くのは危険だ。

「……………なあ、アルベルト……………」

「断る」

グレンが何かを言いかけた瞬間にアルベルトは即答した。その返答にグレンは動揺

した。

「ま、まだ何もいってねーだろ……」

「お前の言いたい事などお見通しだ。大方、『俺も天使の塵の出所調査に参加させろ』……だろう？ 俺はフィールドも同じ事を言うと思っていたが……」

「ぐ……」

「《隠者》《法皇》が動いてるなら、私は私で任務を続けるだけです。まあ多分、近い内に関わる気がしますけどね」

「その時は追って伝える。グレン、俺が情報を共有したのは助力が必要だからではないし、お前が今回の件に関わる資格もない。魔導士である俺にしか為せない責務があるように……今は教師であるお前しか為せない責務を果たせ」

金を置き、立ち上がって出入口に向かいながらアルベルトは最後に振り向かずにグレンに告げた。

「尤も、道化を演じている今のお前では……そんな事は夢のまた夢だろうがな……」

そう告げて店から出て行った。

フィールは頼まれた紅茶にミルクを入れて、グレンは告げられた言葉にただ沈黙する。ため息をついて口を開いた。

「ハア……分かってるよ。んな事ぐらい」

「分かってるなら、最初からシステイ傷付けるの止めてくださいよ。全く」

「お前、少しだけセリカやセラに似てきたな」

「まあ……否定はしませんよ」

紅茶を飲み、少し落ち着くフィール。

ルミアやフィールが居る時点で騒ぎの中心にいる事は理解していた。今回だってリエルに胴体貫かれたのだ。少し躊躇するがフィールはグレンを真剣な眼差しで話しかけた。

「グレン先生」

「あつ？ ……つ、これ……何でお前が」

「アルベルトさんが私に預けたものですよ。護身用ですけど、持つといた方がいいで

しよう」

ファイルがホルスターに入れたままの『魔銃ペネトレイター』をグレンに渡した。それを見た時、グレンは顔を強張らせた。正直、嫌や思い出は無かったグレンの切り札だ。

「……何でこれを渡してくれるんだ？」

「……嫌な予感がするんですよ。何か蜘蛛の糸に絡まれたかのような、そんな予感です。本当は渡したくありませんけどコレも渡しときます」

「あつ？ 何だコレ？」

渡されたのは小さな白い箱。

本当は渡したくはない。ただ、もしかしたらコレが必要になってくる可能性があるかもしれない。あんまり今のグレン先生に渡したくはないが、セラ先生がいる以上使い方を間違う事はないだろう。

「グレン先生の切り札ですよ」

「——つつつ!？」

「使えなんて言いません。要らないなら捨ててくれても構いません。ただ、『正義』がどれだけ動くのかによって、役に立つかもしれないので」

駄目な時は大人を頼れ。

それはセリカさんが言った言葉だ。ただ、もし頼る事になるならそれは……いや、そんな日があつて欲しくない事を願うしかないのだが。神妙な顔でグレンは口を開いた。

「……………なあ、フィール」

「?」

「…………お前は何者なんだ？ 俺の切り札やジャティスの奴も知っていて、規格外のオリジナル固有魔術まで使えるなんて普通じゃない。狙われる原因も曖昧だし、一体お前は——」

「——私の父と親友はジャティスに殺された」

「つつ!？」

「それだけです。ジャティスを知る理由なんて」

グレンが言いたい事を遮って口にした言葉にグレンは驚愕し、ただ沈黙する。未来で私の父は殺され、エルザも死んだ。握りしめた紅茶のティーカップの取手にヒビが入っ

ていた。

「それに、今は語るべきではない」

「はっ？ どう言う意味だ？」

「語るとするなら、真相に気付けた時ですよ。グレン先生」

ファイルは金を置いて、出口に向かい始めた。

グレンはまだ聞きたい事があるようだが、ファイルは最後に軽く笑いながらグレンに告げた。

「それに明日はレオスとの勝負ですよ？ ちゃんと寝て、備えてくださいね？ それこそ、システイを傷付けないようなやり方で、ですよ？」

少しだけ微笑みに悲しみが含まれながら。

その悲しい顔が理解出来ないグレンはファイルを引き止めようと手を伸ばしたが、ファイルは既に店を出ていた。

それはまるで、ファイルがグレンに出会ってはいけないような、それともそのやり取

りをしてはいけなような強迫観念に囚われているようにも見えた。

グレンには理解出来ないがフィールは微かに理解していた。ただ父と娘の会話だが、グレンはフィールを知らない。知られてはいけない。だから、ただ赤の他人として演じている自分も道化だ。

幸せと言う答えはこの世界で望んではいけない。

そんな人間が望む真逆の強迫観念に縛られていた。

第16話

スリーマンセル
 三人一組・一戦術単位

魔術戦には基本的に『近距離戦』と『遠距離戦』の二つのレンジがある。『近距離戦』は相手を目視できる距離で呪文を撃ち合う最前線で戦うレンジ。『遠距離戦』は相手を目視できない距離で、超長距離射程魔術で『近距離戦』に従事する魔導兵を援護する形の戦術に対して、近距離戦で最も強いのは三人一組・一戦術単位スリーマンセルと言う。

だが、三人一組スリーマンセル・一戦術単位ワンユニットに対してグレン先生のクラスが取った戦術は……

二人一組エレメント・一戦術単位ワンユニット!?

レオスは驚愕していた。

組むチームの練度によって数の制圧が出来ない。

12対18にも関わらず、平原は状況をキープしている。

丘はシステイーナやルミア、ギイブル達が居る以上、制圧は困難。更にはリイエルが【シヨック・ボルト】を躲しているだけ、制圧が出来ない。

「んで、森は私の出番と言う訳か」

グレン先生から言われたのは2つ。

レオスの対応が早い為、ケリをつけるなら短期決戦。

そして、戦況が傾いたら均等にする様に攻めろ。

レオスの対応が早い以上、森というフィールドから他のフィールドに行かれたらそれはそれで面倒だ。少なからず平原の陣営は瓦解する。と言う訳で私はグレン先生の指示を待ち、戦況が傾いた瞬間に動く切札ジョーカーに選ばれた。

『お前ならそれくらい余裕だろ?』

まあ、信頼されている以上、戦果は保証しよう。

決して信頼されている事が嬉しくて照れている訳ではない。無いとたらない。丁度仕込みが終わった以上、此方もいつでも動けるし、問題はない。

『黒猫、そろそろ頼むわ』

「了解、全滅でいいですよね」

『構わねえよ。黒猫go!』

「ちよつと!?! 合図まで猫扱いしないでください!」

フィールはグレンの合図と共に動き出した。

森のフィールドの戦い方は多種多様に存在する。平原はともかく、丘はある程度の高
低差以外にはシンプルな戦場、魔術の撃ち合いで勝負が決まる戦術と違い、森は神出鬼
没の領域。

「森には2人くらいしかいないんだろ?」

「だったら別に問題はないでしょ。さっさと領域を支配して他の援護に——」

三人一組で動く一組の生徒の1人が、次の言葉を発する前に倒れた。その事に気がついた瞬間、もう遅かった。右に曲がる「ショック・ボルト」と泥濘んだ地面に足を取られ、更に1人が倒れる。

「!? なっ、敵——!」

「《黙って》」

黒魔【ノイズ・カット】で生徒の声を封じる。

情報伝達をする事も出来ず、^{デイレイブ}時間差起動した「ショック・ボルト」が三人目の生徒を襲い、気を失っていた。

「まさか、罠を仕掛けるなんて……」

「魔導兵って言うのは、人数の多さで決まるものじゃない。確かに数の利は多ければ有利だけど、連携や陣地によってこうやって覆るんだよ。ごめんね、ちよつと卑怯かもだけど」

辛うじて意識を保っていた生徒の1人が気付いた。

ここら一帯は罨だらけ、戦況を有利に進める為に付与した魔術罨が張られている。マジック・トラップ
 黒魔【セルフ・トランスパレント】で自己透明化の呪文と黒魔【サウンド・カット】で自分が発する音を声以外を遮断して、森の狩人と化したフィール。

地面の一定の所は黒魔【アクア・ミスト】で簡易的な泥濘みを作り足場を崩す。そのせいで上手く進めずに、早く動けず、イライラが募る。三人一組なら尚更陣系を意識する。

「《雷精よ——》《踊れ》」

次の敵は「ストーム・グラスパー」で感知した。

フオーム・アルタエイション
 【形式変化法】と【根源素配列変換】オリジン・リアレンジメントの錬金術で木の一部に仕掛けた鏡に【ショック・ボルト】をそれぞれ6発を同時起動し、反射させる。錬金術の類は攻撃に使わなければ使用可能だ。敵に対して使用するのが【スタン・ボール】や【ショック・ボルト】のみだから。

敵も居ない中あり得ない角度からファイルの【ショック・ボルト】が生徒達を襲う。

「グアッ!?!」

「ギャアアアア!?」

「ちよっ!? 嘘だろおおおお!?」

丁度いい位置にいてくれたおかげで、反射している事も、何処から撃たれたかも分からないまま、森に侵入した一組全員は気絶した。

「此方ファイル、グレン先生応答願いますオーバー」

『此方頼れるグレン大先生、黒猫もう終わったのか?』

「はい。で、互いの損傷率は?」

「互角イーブンだな。多分引き分けで終わる」

その予想と同時に試合終了の合図と共にハーレイ先生の声が聞こえてきた。

「そこまでだ! 両者の損傷率が八十パーセントを超えたためルールに従い……この勝負、引き分けとする!」

ハーレイの魔術によって拡張された声が戦場に響き渡り、魔導兵団戦は終了となっ

た。しかし、この展開はグレンの思惑通りでうまく引き分けに持って行けたと考えていた。

そして、グレン陣営では生き残っていた生徒達や戦死してしまった生徒たちが話し合っており、その表情はそこまで落ち込んでいたりはおらず晴れやかだった。しかし、勝負が引き分けになったことでシステイーナはどうするのか気になったカツシユはフィールに尋ねる。

「なあ、フィールさん。引き分けちまったけど、この場合どうするんだ？」

「ん？ それは……」

確かにコレは決闘だ。

この場合、やり直しを要求出来るし、決闘前の状態になるなら、システイーナがグレン先生と将来を誓い合った仲のままになる。まあグレン先生なら互いに身を引くと言う事で納めるつもりだろう。考え混んでいると、レオスが声を荒げて生徒達を責めた。

「貴方たち！ なんなんですかその体たらくは！」

突如響いてきた怒鳴り声にグレンやセラ、生徒たちは一斉にそちらを向いた。

「あの無様な戦いはなんですか?! あなたたちが、もつと私の指示にきちんと従い、作戦行動を遂行していれば……」

「やめなさい」

まるで上手いかない現実にはオスは憤慨していた。

だがこれ以上はただ生徒を悪戯に責めているだけだ。フィールがレオスの腕を掴み、鎮めようとした。

「口を出すな! 貴女如きが私に意見するな!!」

「……………?」

手を振り払われたフィールはこの時、二つの違和感を感じていた。

触れた腕から感じ取ったが、身震いしてもおかしくなくらい体温が異常に冷たい事だ。

レオスの顔色は当初と比べると随分青ざめてるような気もするし、発汗量も異常だ。まるでタバコが切れたかのような禁断症状に苦しんでいるように、今のレオスは何かがおかしい。

もう一つは、まるでそうなるかのようなシナリオを裏切られたような失望感にレオスが囚われている事。自分の思い描いたシナリオ……いや、何か引つかかるこの違和感は何？

「勝負も引き分けた。ここは互いに白猫から身を引くことで……」
「うるさい……！」

思考し続けていたフィールを覚醒させる怒号が聞こえた。

グレン先生は引き分けということで場を収めようとするが、レオス先生はそれに納得はしないのか、自分の手袋をグレン先生へと放る。

「再戦です！ 今度はわたしから貴方に決闘を申し込みます！」

「お前、まだ諦めねえのかよ……」

「当たり前です！ 貴方なんかシステイーナを任せられるわけがないでしょう！」

「……ああいいぜ。なら次の決闘は——」

「いい加減にしてよー!」

二人が再決闘をしようと話を進めようとすると、システイが我慢の限界なのか二人へ怒鳴る。幾らなんでも賞品扱いされれば、システイも黙っていられないだろう。

「黙ってれば二人して私そっちのけで勝手に盛り上がって! そんな勝負に勝ったところで私が求婚に応じると思うの!?!」

「う、システイーナ……その件は深くお詫びします。しかし——」

「今度の決闘は一対一。日時は明日の放課後、場所は中庭だ。ルールは致死性の魔術は禁止で他は全手段解禁。それで行くぞ」

「っ!?!」

レオス先生の言葉を遮ってグレン先生は決闘のルールへと話を進め、決闘を承諾する意思を見せた。同時にシステイが裏切られたような表情をした。

「……ふっ、いいのですかそれで?」

「ああ、いいぜ。これに勝てれば逆玉の輿だしな。ここいらで一発体張って——」

パンツ！ と、グレン先生の言葉が最後まで続くことはなく、システイがグレン先生の頬を叩いた。その目尻には涙が浮かべられて……

「……嫌いよ、貴方なんか」

そう言い残して馬車へ向かってその場を離れた。

「……ふう、無様なものですね。貴方こそ、彼女を諦めるべきじゃないですか？」

「……うっせえよ」

その後はなんとも気まずい空気のままみんな馬車へと向かっていく。セラも理解しているとは言えだ。今のグレンは少しやり過ぎだ。フィールは右手が震えているのを確認し、ルミアに話しかける。

「ルミア、悪いけどシステイをお願い」

「えっ？ フィールさん？」

「ちよつと、用事があつてね。私は馬車は要らないから、システイをお願い」

「う、うん。分かった」

右手の震えを抑えながら、フィールは馬車から離れた裏路地に走って行った。

「アルベルトさーん？ どこに居るんですかー？」

先程右手の通信用魔導機が震えたのを感じ、別の場所で連絡を受けたフィール。この辺りの場所で重要な話があると言われて来たのだが、フェジテから大分離れた裏路地にフィールは呼び出されていた。

宮廷魔導師団のコートを着た青い長髪の後ろ姿を目撃し、ため息をつきながらフィールは話しかけた。

「アルベルトさん……やつと見つけ……」

気づいていないのか、肩に触れようとした次の瞬間。フィールの背筋に嫌な予感が走った。

「つつつ!?!」

フィールは神がかった瞬発力でアルベルトから離れた。フィールが先程までいた場所に振り下ろされた斧と姿がアルベルトから変わり、別の人間に成り代わった誰か。

だが、フィールはその人物などどうでも良かった。その男に浮き出ている血管と思考を失っているような顔にフィールは怒りに満ちていた。

『エンジェル・ダスト天使の塵』の中毒者だ?!? 何でこんな所に居るつ!?!』

裏路地の窓から、屋根から突如現れた『エンジェル・ダスト天使の塵』の中毒者達、身体機能を限界まで引き上げた住民達を救う手立てはない上、狙いは何故かフィールに向いている。

アルベルトに化けていた中毒者がフィールに襲いかかる。それと同時に素早い速度で迫りくる中毒者にフィールはスカートに隠した太ももにつけたホルスターから赤い

『魔銃ペネトレイター』を取り出した。

「《ぶっ飛べ》！」

中毒者達は魔術に反応し、加速する。

【プラスチック・ブロウ】で吹き飛んだ中毒者達。次々と全方向から迫りくるのに対して、フィールは白魔【ブレイン・アバカス】で並列演算思考で迫りくる中毒者を次々と対処していく。

「《虚空の焔よ——うわっ!？」

多すぎて魔術詠唱が間に合わない。『魔剣エスパード』で斬殺するがその感触は久しく忘れていたような肉を斬る感覚に少しだけ躊躇しているようにも見える。

「クソツッ！ 何体居るんだこの中毒者!？」

まるで波のように迫りくる中毒者達。

フィールは中毒者に対して軍用格闘術と、右手に持つ『魔剣エスパード』で中毒者達を切り裂いていく。血が舞って、地面が赤く染まり、裏路地は地獄の光景と化していた。

「《吠えよ炎獅子》！」

「アアアアアアアアアア———!!!」

右手の『魔剣エスパード』を後ろから迫る中毒者に刺し、手を離れた瞬間に黒魔（ブレイズ・バースト）で焼き焦がすが、それでもまだ動いている中毒者。敢えて火力を下げてしまったのはこの世界に來てから甘くなってしまうのか。苦しそうな顔で、助けてくれと言うような顔で命令された事にただ必死になって迫りくるソレにフィールの怒りは更に激しく燃え上がっていた。

「つつ!! 《金色の雷獣よ・地を疾く駆けよ・天に舞って踊れ》」

黒魔（プラズマ・フィールド）で中毒者達を一掃する。

中毒者達が死んでいく中、恐怖も思考も何も感じない中毒者達は止まらない。『魔剣エスパード』を血が滲むほど握り締め、怒りを抑え切れずにフィールは叫びだした。

「どこまでっ!! 人を愚弄する魔薬ドラッグだああああああああっ!!」

『魔剣エスパーダ』と赤い『魔銃ペネトレイター』で中毒者を殲滅していくフィールは怒りに震えながら全ての中毒者を殺し続けていた。

「ただ、単純にお前の夢を否定された事に俺が腹が立っただけだ」

「はあ………?」

夕焼けの学院東館の屋上にグレンとシステイナは居た。鉄柵にもたれ掛かりながら、ただ喧嘩を売った理由をシステイナに話した。

「俺は昔、『正義の魔法使い』になりたかった。けど魔術の裏を知って絶望していた中、唯一俺の夢を応援してくれたのはセラだった」

あの頃のグレンを支えてくれたのはセラだった。

「人殺し、殺人者として魔術師になった訳じゃない俺がそれでも軍を辞めなかったのは、多分アイツのおかげなんだ。けど1年前、軍は俺とセラを捨て駒にしたんだ」

「!？」

「あの後、俺達が死になつた後、ジャティス……敵にも予想外な援護があつて退いたが、俺はそのあと軍に嫌気が差して辞めた。ただ、その後セラも暫くしない内に軍を辞めたのは予想外だったが」

自分の夢は叶わない夢と知つたのか、分からない。けれど、あの頃セラもグレンに救われていたのかもしれない。グレンが辞めて、セラも辞めたのはもしかしたら……

「まあなんだ……俺は本当はレオスに勝つた後、お前に嫌われればいいと思つた。だが、それは黒猫に怒られた」

「……えっ? フィールが?」

予想外の人物にシステイーナは驚いていた。

フィールがグレンに怒っていた。その出来事にシステイーナは目を見開いていた。基本的に無関心な部分が多いフィールが自分から誰かに接していた事に。フィールは話しかければ、会話だってするが自分から誰かに話す事は少ない。そんなフィールがグレンを怒った事に驚きを隠せないでいた。

「応援してくれた人間を否定するつてのがどれだけ悲しませる事なのか、アイツ母親みたいに怒ってやがった。本心を隠して道化を演じるなつてな」

「フィールが……」

「まあ単純にお前の夢を否定しようとするアイツに俺は気付けば手袋を投げた。今のお前が若い頃の俺みたいで、俺が昔のセラの立場ならセラも同じ事してたと思う。ただ、夢を追いかけるお前が昔の魔術の闇を知らない俺に重ねてたのかもしれないねえ」

グレンがまだ闇を知らなかった自分。

あの頃は『正義の魔法使い』と同時にセリカのようになりたいたいと思っていた。システイーナの夢、メリガリウスの天空城の謎を解き、お祖父様が憧れた城にいつか辿り着くと言う馬鹿げた夢を追いかけるシステイーナに若かった自分を重ねているのかもし

れない。

「まあ……本当は決闘もするつもりは無かったんだが、俺も冷静じゃなかった。悪い」

「……ハア、結局自分の私情じゃないですか」

「うっ……まあそうなんだが……」

「けど、安心しました」

システイーナは夕焼けを見ながら笑った。

「先生が、ちゃんと私達を見てくれていた事に、自分から周囲に響き買ってまで応援してくれている人が居るって分かって」

「……はっ、まあそんなお礼は俺じゃなくて黒猫に言っつてやれ。単純に俺は逆玉でも悪くないなっつて思っつてたし」

「……フィールルに後で言いつけますよ」

「おまつ、止めろよ！ 意外とアイツ怒ると怖いんだから!？」

どうやらフィールルの説教が弱味トラウマになってしまったらしく、慌てた反応をしたグレンを

見てシステイーナはクスクスと笑っていた。

そして、コツコツと足音を立てて歩きながら現れる一人の男がシステイーナ達の前に姿を現した。

その後、予期せぬ形でグレンは決闘の場に現れず、システイーナとレオスの結婚が3日後に決定した。

「クソツ!! 何で気付かなかった!!」

フィールは「疾風脚」を最大にして街を駆けていた。『天使の塵』エンジェル・ダストの中毒者を襲わせてその隙にフィール自身を狙うと思っていたが、居たのは大量の中毒者だけでジャティスの姿は見当たらなかった。

アルベルトに成り済まして通信用魔導具に割り込み、フェジテの随分遠い場所に呼び出された、『天使の塵』エンジェル・ダストの中毒者達をフィールに狙わせたのは単純な話だった。

アレはフィールに対する時間稼ぎに過ぎない。ジャティスがグレン先生に固執している、全盛期のグレン先生と戦うのなら、ジャティスが最も最優先にすべき事はただ一つ。

「お母さんが……！　危ない……！！」

セラの殺害だ。

悲しみ、絶望、そんな中でグレンと言う男の全ては元に戻る。セラはグレンにとって鎖なのだ。鎖を失えば狂う程の絶望の世界に足を運んでしまう。ジャティスが最も望む事だ。

「つつ！！　《風よ》《風よ》《風よ》！！」

連続で「ラピッド・ストリーム」を起動する。

自分の最高速度、1秒で300メートルと言うスピードで街を駆け抜けていく。だが遠い、セラのいる方向から自分が居た場所が遠く感じる。この街の高低差では「ライトニング・ピアス」による狙撃も出来ない。

およそ40秒、いや自分が戦っていた15分くらいの中に戦闘が行われていたなら。今のセラではジャティスに勝てない。ジャティスにとって相性は最悪かもしれないが、それ以上に先読みする固有魔術オリジナルがアドバンテージが高過ぎる。

手持ちの魔晶石から魔力を補給した。ジャティスが居る中で油断は出来ない。セラに持たせた魔導具の反応した場所は目の前だ。屋根から飛び降りてその場所を見る。そこに居たのは……

「セラさん!!」

辿り着いた時には既に遅く。

目に焼き付いた銀髪の髪は血で赤く染まっていた。

「……………あ……………」

身体中の至る所が出血し、倒れていたセラと

『人工精霊』に乗ってそれを見下ろす憎き男ジャティスⅡロウファンの姿がそこにあった。

「セラ……………さん……………」

「おや、随分早かったね。そこまでは読めなかった。フィールⅡウォルフオレン」

「……………」

「おや？ まさかセラを失った余りに声も出ないかい？」

セラは辛うじてまだ生きている。

まだ心臓の鼓動が聞こえているからだ。出血はしているし放っておけば死ぬ。あと数分の命にまで追いやられた。フィールは自分の不甲斐なさに拳を血が滲むほど握り締める。

「何か言ったらどうだい？ まあグレンを元に戻す為の必要経費——」

「《——黙ってる・この・気狂い野郎》!!!」

黒魔【ストーム・スタンプ】で周囲の『人工精霊』を吹き飛ばす。所詮『人工精霊』は疑似靈素粒子粉末が無ければ使えない。そう言う意味で風使いとは相性が悪い。ジャティスの乗っていた『人工精霊』も崩れ去り、ジャティスは高所から風の波に吹き飛ばされた。

「っ……風の使用方がセラ並みに上手いとは……!」

「《悪辣なる鬼女よ》!」

「ぐっ……!?!」

白魔【ホールド・モーション】でジャティスの動きを封じる。まだ生きているならジャティスに邪魔されてはこの魔術は使えない。セラを死なせるつもりなんて微塵もない。ジャティスの言葉など気にせずに【女帝の世界】で黒魔【ライアブル・スクリーン】を張り、フィールは詠唱を開始した。

「『黄昏は此処に・終わりを告げる時の残滓・方舟に乗りし運命は我が盟約にて反転せよ』」

今更思う。

どうしてこの魔術がエルザが生きていた時に生み出さなかつたのか。これがあつたらな最悪な運命なんて捻じ曲げる事が出来たのではないかと今更思う。

「『我は汝を排斥せし根底を覆し者・其は森羅万象を全を修める者・世界に背きし共犯者よ・汝の名を此処に告げよ・汝の名はセラ||シルヴァース』」

ただずつと後悔していた。

エルザを失つたあの時から、どうしても治癒魔術が効かない時に編み出したフィールだけが使える固有魔術。フィールはあの後絶望した。絶望したからこそ、繰り返さない為に編み出した世界に背く魔術の最奥に踏み込んだ。

オリジナル
固有魔術

クロノ、カタストロフ

【時の奉天】

起動———！

治癒魔術だけでは回復は不可能。

だからこそ、フィールは二度と同じ事を繰り返さない為に編み出したもう一つの固有魔術オリジナルが起動される。

起動された瞬間、傷付いたセラの身体が光り出した。

「……はっ？ ば、馬鹿な!!」

肉体が修復されていく。弾丸で貫かれた身体も傷だらけの身体もまるで時間が遡るかのよう^ににセラの身体を修復していく。風の結界「ライアブル・スクリーン」やジャティスを止めていた「ホールド・モーション」が維持出来なくなったが、そんな事然程問題じゃない。

「ハア……ハア……!!」

掴んでいた右手を離し、無事なセラにフィールは安堵の涙を浮かべていた。セラの身体は出血こそ見られるが、傷の大部分は塞がっていた。アレは間違いなく致命傷だ。白

魔儀「リヴァイヴァー」でもない限り塞げない筈だ。ジャティスは困惑していた。

「……一体何をした！ 今のは「リヴァイヴァー」じゃない筈だ！」

ファイルのもう一つの固有魔術オリジナル「時の奉天」クロノ・カタストロフは白魔改「ロード・エクスペリエンス」に似た魔術でセラが行っていた過去の経験を憑依し、過去に起きた出来事を最大8分間だけ全てを計測し、全てを数値化する。

世界は数字で出来ている。事象も形も、存在さえも例外なく数式で表す事が出来る、戦闘経験だろうが何であろうが全てを計測し、自分の都合の良い計測に割り込むように逆算し、セラの身体を8分前の状態に改竄する魔術だ。

「馬鹿な！ アレは致命傷だった!! ファイル!! ウォルフォレン！ 君は一体何をした!!」

「……『時間の逆行現象』よ。ただし肉体や物質限定のね」

ジャティスは目を見開き驚愕していた。

ファイルは自分の魔術特性パワースキルの特異性を理解していた。『万象の逆転、逆流』の意味は一

体何なのだろうと。

万象とはさまさまの形。あらゆる事物・現象を指し示すなら、フィードは全ての事象に介入し、あらゆる事象に対する逆転の因果を生み出す事が出来る可能性がある。

『逆に全ての正反対の理論の究明が出来れば、全ての事象の一端を操る事が出来るんじゃないかな?』

それはあらゆる事象が介入するこの世界で唯一、世界の理に背くことが出来る異端の天才児。

【女帝の世界】が『未来の結果の改竄』だと言うなら、【クロノ・カタストロフ時の奉天】は『過去の結果の改竄』だ。

限界は8分前まで、それ以上は計算し切れずに膨大な演算に廃人になりかねない。ただ、その8分間こそ、魔術師が到達した事が無い『時間の逆行現象』をたつた1人で生み出した世界唯一の『魔法使い』の御業だ。

全ての結果を数式に直し、計算式を組み替える事で事象を改竄するそれは、反則と言う領域を超え『禁忌』の領域に踏み込んでいる。世界がシナリオ通りに動くなら、世界

のシナリオを改竄するファイルは間違いなく『禁忌』の存在だ。

「それが本当だとするならそんなものは魔術じゃない!! 世界そのものの改変は『魔法』そのものだ! 君は一体何をしたか理解していないのか!!」

世界は歪みや矛盾を許さない。

ファイルの使った固有魔術では世界の根底を覆す事は不可能に近い。だが、個人に対する世界に背く結末や因果を世界から僅かながら一部を掌握し改変するくらいなら不可能ではない。

世界を改変は出来ない。それは絶対不変の規則ルーツである中で、その領域に踏み込んだ。ファイルはセラを抱えてジャティスに不敵に笑う。

「『魔法』だろうが何であろうが……私は2人を守るなら『魔法使い』だろうが悪魔だろうが、殺戮者であろうが、2人を守るなら自分を殺しても守るって決めたんだ……ジャティス||ロウファン、私がお前のシナリオ通りに進める訳ないだろ」

どれだけバッドエンドの戦場を見てきたと思っっている。

この程度で挫ける程、この世界で生きるフィール・ウオルフォレンは容易い存在じゃない。ジャティスは驚きを隠せないまま目を細めて笑う。

「……確かに驚いた。魔法級の魔術行使には僕も目を見開いたよ。けど、治した所でもう一度セラに手を掛ければいいだけだろう？ ああ魔術のせいで君はマナ欠乏症に陥っているしね」

顔色が真つ青で、口から血が流れている。

【時の奉天】は【女帝の世界】や【イクステインクシオン・レイ】と言う個人で使用する魔術の中で1番魔力を喰らう最高難易度A.A.A級の魔術だ。反動も酷く弱みを見せない為に見栄を張ってはいるが、実際は立っているのがやっと、逃げる為の「フピッド・ストリーム」も使えないだろう。

だが、それがどうした。

それでお母さんを殺された言い訳にはならない。

例え世界の法則を捻じ曲げようとこの人を守る。

フィールは命をかけてでも守る為にジャティスの前に立ちはだかり、赤い『魔銃ペネトレイター』と『魔剣エスパーダ』を持ち、ジャティスに構える。

「……その程度のハンデを覆してこそ、『正義の魔法使い』に相応わしいでしょう?」
「へえ……君は思っていた以上に面白いね。だが、『正義の魔法使い』になるのはこの僕だ! その邪魔をしようと言おうのなら……!」

『人工^タ精^ル霊^バ』で作^ルり出^シたマスケツト銃が此方^{コノカタ}を向^ムいた。辛^カうじて残^ノっている魔力^{マジリ}を
【^フイジカル・ブ^スト】に当^タてて逃^ノげるか、弾丸^{ダマ}を全^トて斬^ツり落^スとすか。

「ここで死^シぬとい^ハい。『正義』の為^{タメ}に!」

「つつ!!」

「《^イ高速^ミ結^ト界^ク展^キ開^ク》!」

マスケツト銃^{トシ}から弾丸^{ダマ}が放^ナたれた瞬間^{トキ}、懐^ナかしい声^{コエ}と共に自^レ分の地^チ面^{メン}から五^イ芒^{マウ}星^{セイ}の魔^マ方陣^{ホウジン}が浮^ウかび上^ノがり……

【^エ翠^メ玉^{ラルド}法^{サー}陣^{クル}】!!」

翡翠色に輝く結界がマスケット銃の全ての弾丸を防いだ。

後ろを見るとそこに居たのは《法皇》クリストフと《隠者》バーナードの姿があった。

「どうやらギリギリ間に合ったようじゃの！」

「セラさんは気を失ってるようですが、どうやら時間稼ぎしてくれたようですね。助かりましたフィールさん」

「……ギリギリですけど、助かりました」

今はとりあえず窮地を脱する事だけを考えよう。

今の怒り、今果てしない憎悪より、今はお母さんの方が心配だ。傷を戻したとはいえ、8分以上前の傷付いた身体はまだ治されていない。「ライフ・アップ」は魔力切れで今使う事が出来ない。

「久しぶりじゃのうジャティス」

「バーナードか。久しぶりだねえ、時間稼ぎもされたようだし、今回は素直に引くとしよう」

「………次は殺す。『正義の魔法使い』の偽善者が」

「ああ、奇遇だね。僕も同じ事を考えてたさ」

互いに睨み合った後、ジャティスは『人工^{タル}精霊^パ』の女神に乗って、この場を去っていった。フィールもそれを見送った後、身体から力が抜けて血を吐き出す。

「ゴホツ……！ ハア……ハア……」

「だ、大丈夫ですか!?!」

「戦闘後に無理してクロノ・カタストロフ〔時の奉天〕まで使ったからね。回路^{パス}が限界許容量を超えた反動みたいなものですよ……暫くすれば治ります」

「これ、使ってください」

フィールはクリストフから魔晶石を渡された。

魔力の相性は然程高くは無いが、マナ欠乏症が治るくらいの魔力は摂取出来た。自分の魔力は少ない中、『ライフ・アップ』で傷を修復しようとするフィールに対して、クリストフがそれを止めた。

「……バーナードさん、セラさんを」

「分かつておる《慈愛の天使よ》」

気を失つてるセラの腕に触れ「ライフ・アップ」をかける。傷付いた身体はある程度修復出来たが、意識は戻らないままだ。暫く戦線に居なかつたセラさんをわざわざ襲つたジャティスの狙い。

それは間違いなくグレン先生だ。《愚者》のグレンとの直接対決。

「……グレン先生……」

「なんじゃ？ お父さんが心配か？」

「バーナードさん！」

それは禁句タブーと言つた筈だ。

それ以上揶揄うなら、バーナードだろうが黙つていられない。バーナードはやれやれと言つた顔で頭を下げる。

「はっはっは、すまん。けど、グレ坊なら大丈夫じゃ。ジャティスが今からグレ坊の元には行かないじやろうしな」

「セラ先生を……アルザーノ帝国にいるセシリア先生の所まで連れて行ってください。頼んでもいいですか？」

「それは構いませんけど、フィールさんは？」

「魔力切れで反動も大きいので、帰って寝ます。ジャテイスはまた必ず動く。フェジテにいる以上、私も出来る事をしないと……」

身体がガタついており、足取りは重く、家に着く前に倒れてしまいそうだ。
クロノ・カタストロフ
 【時の奉天】はあくまで禁じ手、身体の魔力容量キャパシテイ全開で行う白魔儀改の術式なのだ。それを一人で使えるのは「女帝の世界」における魔術式の先取りをすれば不可能では無いが、当然身体に無理をしなくては使えない。全盛期ならまだしも、半分以下の魔力容量キャパシテイとボロボロの回路パスで行えばこうなる。

「フィールさん、送りましたようか？」

「いい。気遣いはありがとう」

クリストフの気遣いに頭を下げたが、フィールは直ぐに行ってしまった。クリストフやバーナードはフィールの後ろ姿で顔が見えなかったが、その顔は冷酷の具現とも捉え

られるくらい。

まるで殺戮人形のように冷たい無表情だった。

「甘かった……甘かったからお母さんは……」

もう躊躇などしない。心は捨てて、機械的になれ。

フィールⅡレーダスと言う甘い人間からフィールⅡウォルフオレンと言う殺戮者に置き換われ。

何も守れないなら、私が存在する理由がない。

全て殺してでも全てを守る。

それが私の存在理由だ。

バーナードはセラを抱えて、アルザーノ帝国の保健室に向かう。セラは暫くは目を覚まさないだろうが、2日3日もあれば全快するだろう。バーナードはセラを背負って向かうその道中、バーナードはクリストフに忠告した。

「クリ坊、フィールちゃんに目を配っておいとけよ?」

バーナードはクリストフに言ったその言葉にクリストフは首を傾げる。その忠告した言葉の意味が理解できないからだ。

「まあ、フィールちゃんはクリ坊と同年代だし、まあお似合いかもしれんがのお」

「いきなり何ですか?!」

「まあ冗談じゃよ。ただマジで目を配っておけ。今のフィールちゃんはイヴちゃんがわざわざ宮廷魔導師団にスカウトしに来た頃に戻り始めている」

「……? その時のフィールさんはどんな人だったんですか?」

意味が分からない。

フィールが未来から来た存在と言うのは知っていた。だが、戻り始めているとはどう言う意味か。バーナードは真面目な顔でクリストフに話した。

「ハッキリ言うなら、完成された暗殺者のソレじゃ。アル坊やイヴちゃんでもアレには

勝てん。格上殺しならグレ坊以上じゃし、接近戦はリエル以上。ともかく魔術師に最も突き刺さる魔術師殺しと言うべきじゃのお」

「!?」

「最近はこの世界に馴染んで来て、勘が鈍っているのかもしれないが、あの顔見れば分かる。アレは本気を出せばセリカちゃんすら殺せるっぽいぞ? マジで」

「……フィールさんのいた未来ってどんな所だったんでしょう?」

クリストフもバーナードもそれだけが気になっていた。

だが、今のフィールを察するにフィールがいた未来は想像出来なくはない。逆行する程の事が起きた以上、フィールの未来は恐らく……

「地獄だったんじゃないかな」

バーナード達に測り知れない地獄から来た事だけが理解出来た。

第17話

あの魔導兵团戦から2日。

学院はレオスとシステイーナの結婚の話題で持ちきりだった。

だが、二組を含む何人かが、何かおかしいと感じており、システイーナに問い詰めても影のある笑顔でやんわりと結婚話を肯定するだけだ。

「やあ、システイーナ。すいませんが式の打ち合わせが……」

「ええ……」

二組の教室に訪れたレオスがにこやかな顔でシステイーナを連れて教室を後にする。その様子にリエルは少し後ろ姿を睨んでいた。

「ルミア……アイツ……斬っていい？ ……アイツは……きつと、敵」

「駄目だよー」

リエルはただ感情のままにレオスに突撃しようとしたリエルをルミアが慌てて引き止める。ただ、感情を読み取るのに疎いリエルにもシステイーナが何かされたのは理解できた

「……もう少しだけ待ってあげて……きつと先生やフィールさんが……」

ルミアは2日前、グレンにシステイーナの突然のレオスとの結婚に嫌な予感を感じ、グレンに直接相談したのだが――

「でも、グレンは2日前からどっか行つた。セラも重傷でその後行方不明、フィールも昨日からいなくなつてるし……」

「……」

リエルの言う通り、グレンは2日前から姿を消しており、セラは何故か重症だったらしく、目を覚まさないと報告があつたのち行方不明になつた。フィールも何故か昨日から学院に来ていないのだ。家にも行つたが留守だつた為、その足取りは不明のままだ。

「大丈夫……信じて待とう……」

ルミアは自身の不安を押し殺すように、リエルに言い聞かせた。ルミアも少しだけ気付いていた。違和感と言うより、まるで蜘蛛の糸に引っかかっているような、そんな感覚が。

とある隠れ家でフィールは魔導具を作っていた。

ジャティスの考えは大体分かる。未来を予測する同士、条件は五分と言ったところだが、ジャティス自身がフィールの戦闘能力を理解している訳じゃない。

魔術付与が終わり、次の道具に手を出す。

それを繰り返す前にフィールはため息をついた。

「……何で居るんですかバーナードさん」

「なあに、ただの休憩がてら美少女の顔を見に来ただけじゃ」

「クリストフさんまで、大丈夫なんですか？」

「普通は駄目です。まあ連絡する事と含めて30分だけなら、と考えました。いきなり訪問してすみません」

「いえいえ、大丈夫ですよ。クリストフさんなら」

「濃の扱い雑じゃない!?!」

日頃の行いから言ってくれと辛辣なセリフを吐いて、秒針に細かい魔術付与をしていくフィール。

突如、隠れ家に来たバーナードとクリストフ。何でも捜索中にフィールを見つけたので報告と言って部屋に上がってきた。紅茶は出したが帰る気配なし。バーナードさんが。

ジャティスが動くとするなら、システイーナの結婚式。レオスに化けているジャティスの近くにセラを置く事は出来ず、奴の思考回路からセラ先生を離すためにフィールが用意していた隠れ家にセラを寝かせていた。

「何で隠れ家の場所を知ってるのかは聞きませんが。任務の方は?。」

「大した進展無しじゃ。フィールちゃんが倒した奴等は間違いない『天使の塵』エンジェル・ダストの中毒者

じゃが、出所は不明じゃ」

「……そうですか」

まあジャティスの事だ。用意周到なアイツが手掛かりと言う手掛かりを残す筈が無い。非常に気に入らないが、同じ未来を観測する同士、フィールにはジャティスの考えがある程度分かる。

「フィールちゃんや。そろそろ休んだらどうじゃ？ 隈出来とるぞ」

「セラ先生が目を覚さない中で呑気に寝ていられる程尻軽な女じゃないんで、てかバーナードさん達も出した紅茶飲んだなら調査に行ってください。ここは喫茶店じゃないんですよ」

「……分かったわい。じゃあクリ坊置いておくからお爺ちゃん行ってくるわい」
「ちよっ!? バーナードさん!？」

フィールは半端聞く耳持たずに作業を続ける。

フィールから離れた所で耳打ちで抗議するクリストフ。セラが寝ている中で、フィールはワイシャツに長めのスカートを履いて、作業をしている中に自分を置いておく理由

が分からない。

「何で僕を取り残すんですか！ 調査や索敵ならバーナードさんより僕の方が上でしょう!!」

「馬鹿野郎！ レディーを守ってこそその騎士ナイトじやろうが!! 女王陛下に対する忠義があるならそれくらいやってみせい!!」

「それとこれとは話が別でしょうが！ ならバーナードさんが残ってくださいよ!!」

「それこそお主は馬鹿か！ こんな白髪のお爺ちゃんみたいなのが悩みに悩んでいる少女を慰めるなんて出来る訳ないじやろうがあああああ!!」

「……自覚あつたんですね」

深いため息をついて哀れむクリストフにバーナードは泣いた。バーナードが過去にモテていた事はある（多分）。

だが、今は歳を取り、今や白髪で散りゆく髪を気にする年齢（多分）。そんなゴリムキ♡老人が可憐な少女フィールを慰めるとか、犯罪臭が凄い。警備兵待った無しだ。

「まあ、とりあえずフィールちゃんを休ませるんじや、精神的にも辛い状態であの調子だ

と倒れかねんしのお」

「でも、何で僕が……」

「単純にクリ坊が適任だと思っただけじゃよ」

単純にファイルは人と距離を置いている。

正確に言うなら深く踏み込まないし、一人で全て解決する事が出来るだろう。それはいい事でもあるが、同時に誰も信用していないし期待していないとも取れる。

そう言った人間の末路をバーナードは理解していた。クリストフやアルベルトは信頼はしているのだろう。

だが、信用ともなれば話は別だ。信頼と信用は全く別。信用していないのはあくまで、結末を知っているからこそ、誰かが裏切るのかもしれない疑心暗鬼の状態だからこそかもしれない。

だが、今は仲間である以上任務で殺されたなんて事は聞きたくない。バーナードは分かっていた。

今のままじゃファイルは壊れてしまう事に。

「まあ、後は任せい。何かあったら連絡するし」

「ハア……分かりました。気を付けて行ってください」

「了解じゃ……あつ、あとクリ坊」

「？」

「手は……出すなよ？」

「さっさと行け！ エロジジイ!!」

思わず素が出てしまったクリストフ。

そのギャップにフィールが思わず作業の手を止めてクリストフの方を見ていた。目はトロンとした顔で眠たそうだ。目を瞑れば直ぐに寝てしまうんじゃないかと言うくらい。

「……クリストフさんってそっちが素なんですね」

「……恥ずかしながら」

「まあカッコいいとは思いますが」

「へっ？」

椅子を立てて次の作業に入ろうとした瞬間、景色がぐらついた。頭が回らないし、考える事が辛くなってきた。睡眠不足や、ジャティスの策略から外れているか分からない状態ですつと警戒し、不眠不休で魔導具作成なんてしていればこうなる。

倒れそうになるのをクリストフが支える。どうやら、フィールも限界らしい。

「だ、大丈夫ですか!？」

「あー、少し眠気が……ただあと少しだけ……」

「無理しないでください。ちゃんと睡眠もとって無いですよね?」

「……まだ、でも……」

「戦う時に倒れたら元も子もありません! それに、セラさん達が無理をさせてると知ったらどう思うか、分からない貴女でも無いでしょ!？」

その言葉を聞いてフィールは道具に伸ばしていた手を下ろし、クリストフに身体を預けたまま眠ってしまった。精神的にも辛かったのだろう。セラが死にかけて、それを考えないようにただ道具を作って気持ちを偽って、疲れていたのだろう。

「全く、無茶し過ぎですよ……幾ら地獄を見てきたからって、僕が言える事ではないです

が、貴女はまだ子供なんですから」

全体重で倒れ込んだフィールの胸が当たり、少し頬を赤くしていたが、平常心を保ちながらクリストフは床にタオルを敷いて、フィールを運び、毛布をかけて寝かせていた。ベッドはセラが使っているので仕方がないので床で寝かせるしかなかった。この家はテーブルはあるのにソファアーのようなものがない。

ため息をつきながら家の周りに隠蔽工作の結果を張り、クリストフは自分のマフラーを外し、折り畳んでフィールの枕替わりにして作っていた魔導具を見ていた。

「……………」

どうやら寝てしまっていたみたいだ。

二徹もすれば流石にこうなる。バッドエンドの世界では睡眠は一番気を付けていたのに……………気を張り詰め過ぎていたみたいだ。

「……マフラーに、作り置き？」

自分が枕にしていたのが、見覚えのあるマフラーとキッチンにはまだ少し暖かいシチューが作り置きされていた。

「クリストフさんに……迷惑かけてたようね」

ベッドに寝る未だ意識の戻らないセラの額を撫でて、近くにあった簡潔に書かれていますメモを見る。『良かったら食べてください』とクリストフが作ってくれたのだろう。

フィールはコンロを捻り、シチューを温め直す。

ここは隠れ家だ。食材も大したものは無かった筈だが……

「……美味しい」

ただ少しだけ、その美味しさに驚いていた。

クリストフさんってやっぱり凄いんだなと再認識した瞬間だった。

3日が経った。システイーナとレオスの結婚式だ。

二組の生徒たちが話し合っている中、結婚式の開始を告げる鐘が鳴り響いた。そして、ついにシステイーナとレオスの結婚式が始まった。

花婿姿のレオスと花嫁姿のシステイーナが祭壇の前に立つ。そして、司祭による聖書朗読が始まる。そして、肅々と式は進んでいき、誓約の儀へと移行する。

「レオス、クライトス。汝、健やかなるときも、病める時も、喜びの時も、悲しみの時も、富める時も、貧しき時も、これを愛し、敬い、慰め、助け、共に支えあい、その命ある限り、永久に真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

レオスが宣誓する。

ルミアもリイエルも納得がいかない状況の中、システイーナを見る。そこにあつたのは笑顔ではなく観念だった。

「システイーナ―フィーベル。汝、健やかなるときも、病める時も、喜びの時も、悲しみの時も、富める時も、貧しき時も、これを愛し、敬い、慰め、助け、共に支えあい、その命ある限り、永久に真心を尽くすことを誓いますか？」

「……………誓います」

システイーナが一瞬の沈黙の後、俯きながら、小さく宣誓した。

「今日と言う佳き日に、大いなる主と、愛する隣人の立会いの下、今、此処に二人の誓約は為された。神の祝福があらんことを――」

そして司祭が締めめの祝詞に入る。その時だった。

「異議ありじゃボケエエエエ!!」

突如、式場の扉がバンツ!! と開かれた。その大きな音に参列していた人々は一斉にその方へ向く。

そこには普段だらしなく着崩している魔術学院の講師用ローブをきつちりと着こなしたグレンの姿がそこにはあった。

システイーナの結婚式の時刻に、フィールは隠れ家の前に佇んでいた。空を見ながら、ジャティスの考えをトレースする。客観的、状況的に考えたジャティスの策略を予測する。

「私の予想ならジャティスの狙いはグレン先生、そしてグレン先生はシステイーナを救う為に動く、クラスメイトにはリエルが居るし、ルミアの守護でバーナードさん達が駆け付ける。そして私には」

ぞろぞろと中毒者達が現れていた。

その数は200はくだらないだろう。狙いはセラとフィール。フィールは単純に邪魔な存在、セラはグレンを戻す為の材料扱い。

「中毒者をぶつけて時間稼ぎ。グレン先生との対決の邪魔をさせないつもりね」

お互いそこまで読んでいた。

セラを守りながらの戦闘になれば、私を足止め出来ると思つたようだ。そして、それは正しい事だ。今の自分ではセラを護りきれない。今のままじゃ、まだ足りない。

だからこそ、凌駕しろ。

今までの甘い考えを捨てろ。

世界の既存のルールに囚われるな。

『ファイナルレダス未来を逆行した少女』から『ファイナルウォルフオレン魔術師殺し』に成り代われ。

ここがエルザの死と同じ『並行世界の事象』だ。立場や役者が変わっただけでジャティスはグレン先生を狙い、セラを殺そうとする野望は必ず止める。いよいよ全開だ。

「——さて、皆殺しだ」

その眼はまるで見ただけで凍てつかせるほど冷たく。そう決意した少女の目の前の光景は残酷で美しさすら思わせる狂気と共に血の嵐を撒き散らしていた。

「クリ坊！ フィールちゃんは!?」

「セラさんの防衛で多分家の近くです!」

リエルが中毒者を退かせている中で、バーナードとクリストフ、アルベルトの三人はルミアの護衛の為、姿を現した。

結婚式は大波乱だ。グレン先生がシステイーナを連れ去った後にすぐさま

『エンジェル・ダスト天使の塵』の中毒者がクラスメイトの前に現れた。

「《雷槍よ》」

「《イミット・ロード高速結界展開》」

アルベルト達はそれを的確に処理し、二組の生徒たちを避難させている。アルベルトもクリストフも直感的でしかないが嫌な予感がする。搦手に絡め取られているような嫌な感覚。

ジャテイスⅡロウファンのシナリオ固有魔術通りに動かされている奇妙な感覚に、そして結局

はその配役を捨てる事が出来ないこの状況。捨てれば誰かが死ぬ。死なない為に自分達が動く。今の配役を捨てれば逆に危険と言う現状だ。

「ちっ、数が多い」

「クリ坊！ 索敵で何体くらい居るか調べい！ 外から奇襲でもされたら流石に護りきれんぞ!!」

「は、はい!! 数の総数は大体300！ 東に120、北80、南に100です！ しかも確実に此方を目指してます!!」

「西は!？」

「現在は居ません！ と言うより、さつきまで居たはずの生体反応が気がついたら一気に消えていました!」

それは被害地域が増えたと言う訳ではない。

単純に全ての反応が消えた理由は一つしか無い。もしやと思い、バーナードは通信用魔導具に魔力を込める。

「フィールちゃんやい！ 今何処に居るんじや!？」

『……西の敵の大体200は殲滅した。北はやるので後は3人に任せます』
「ちよっ!？」

繋がったと思ったたらそれだけ伝えて通信を切られた。

200体もいる中毒者をたった1人で殺し尽くしたのに、バーナードもアルベルト達も驚いていた。

「……ファイルちゃんは北を担当するそうじゃ」

「でも、たった1人で……!」

「クリストフ、残念ながら今はそれが合理的だ。俺達も生徒たちを避難させながらの対処がある以上、人員を割く暇はない」

「分かっています! ただ……!」

バーナードが言った事が現実になるかもしれない。

ファイルと言う人間が壊れてしまう可能性。今すぐに行かなければと言う衝動に突き動かされるが、冷静なアルベルトは言い放った。

「それでも、奴は死なない」

「ッ！」

「分かってるはずだ。壊れると言う訳じゃない。甘さを捨てると言う事だ。逆に言えば、任務遂行にはそちらが向いている」

それは恐らくイヴも同じ事を言うだろう。

壊れた程度で任務遂行出来ないなら最初から必要無い。だがフィールやグレンの場合は別だ。グレンの強みは《愚者》であった時の方が魔術師殺しとして強く、フィールの場合はこの世界に来てから本来の力の半分も出せず、自分の殺し方の修正に時間が掛かったのだろう。その修正している時にセラやグレン、クラスメイトが居たから修正が遅れていた。

優しさは刃を鈍らせる。

優しさを捨てれば人間として壊れてしまうが刃を尖らせる。

だが、優しさを持ちながらこの戦場を乗り切れる程、戦場は甘くない。故の壊れてしまう自分への許容が必要なのだ。

「……分かりました。避難を済ませて殲滅が終えたら援護に行きますよ」

「当然だ」

「何じやクリ坊！ フィールちゃんに惚れたか？」

「死ねクソジジイ」

「辛辣う!？」

だが、許容するからと言って放っておくとは別案件だ。

中毒者の殲滅が終わればジャティスⅡロウファンを捕らえる事と、グレン達を助ける為に3人は中毒者を退かせて生徒たちを守る為に全力を出し始めた。

教会から離れ、システイーナと一緒に北の方へ逃げていた。『エンジェル・ダスト天使の塵』の中毒者を殺

し、《愚者》として戻り始めたグレンの前に現れたレオス。

いや、レオスの振りをしていた偽物。

「ジャティスウウウウウ!!」

「久しぶりだねえグレン！ 会いたかったよ！」

ジャティスⅡロウファンは姿を現した。

レオスを殺し、ずっとこの時を待ちわびたかのようにジャティスは笑う。初めからこの男のシナリオ通りなのだ。システイーナの結婚も、セラを傷付けたのも、この状況も全てこの男の作り出した完璧なシナリオの中で自分達は転がされていたのだ。

「ふ、ふふふはははははは！　そうか、漸く戻ったようだね！　セラを傷付けた甲斐があつたつてもなさ」

余裕の表情で笑い続ける。

その激しい憎悪にグレンは叫ぶ。グレンの凄まじい憤怒の形相に、システイーナは喉を小さく鳴らして後ずさった。

「テメエの狙いは俺だろ!!　なんでわざわざこんな回りくどい真似をしやがった!!　何でセラや白猫を狙った!!」

蔑むように舌打ちするグレンに、今度は穏やかな表情でジャティスが言った。

「正義のためさ」

「は？」

思わず、ぽかんと口を開いて忘我するグレン。

意味がわからない。と言うより理解が出来ない。

「分かってないようだねグレン……僕がなぜ、一年余前、あんな事件を起こしたかわかるかい？」

話に全くついていけない。だがグレンはどうしようもなく理解した。この、目の前で誇らしげな顔をしている男は――

「正義のためさ」

意味がわからない。

だがジャティスⅡロウファンはこんな地獄絵図が、この事件が正義の為だと本気で言

い放ったのだ。片手に握られた『魔銃ペネトレイター』を握りしめ、怒りに震えていた。

「ふざけんよ、テメエ……これが正義だと？ レオスを魔薬ドラッグ漬けにして、殺すのが正義だと？」

「ああ、正義さ。彼らは揺るぎない『正義』を証明する礎になれるんだ。痛ましいことだが……必要な犠牲だったんだ」

「俺達を襲った中毒者連中は何の罪も関係もない一般市民だったはずだ。そいつらを犠牲にしても歩む事が正義だと？」

「ああ、正義さ。例え、その歩む道がどんなに罪深く血に塗れていようとも、辿り着く先に理想が存在するなら、それは正しい道だ」

グレンの問いに余裕の表情で答えるジャティス。

それはまるで、今の惨劇が当たり前と言うように。

「俺達とはまるで関係のない、白猫を狙わせたのも」

「ああ、正義さ。ぬるま湯にいた君にはいい復帰リベンジになっただろう？」

「セラを襲わせたのも」

「ああ、正義さ」

激しい怒りに耐えきれずグレンは叫んだ。

「そんな正義があるかアアアアアア!!」

それはまるで、グレンⅡレーダスの目指した『正義の魔法使い』を汚されているように。土足で夢を踏みにじられたようで、そしてそのふざけた信念でセラを傷付けた事が許せなかった。

「いいやそれが正義さ!! グレン! 君は知らないだろうけどね。この帝国は滅びなければならぬんだ!! この帝国は、とある邪悪な意思の元に創られた魔国なんだ。この世にあつてはならない国なんだ。ある時、僕は気付いてしまったんだよ……この世界の真実に!」

グレンは顔を顰めた。

ジャテイスⅡロウファンは何かを知ったのだ。知ったからこそこんな事をしている。

世界の真実に気付いた、一体何に気付いたのかグレンは理解出来なかった。

「本当の悪がなんなのか……気付いてしまったからには、それを見て見ぬ振りをするのは偽善者だ！ ……そうだろう？ それは僕の正義が許さない——！」

ジャティスの正義。

正義は崇高なモノだ。故に殺人は肯定される。善行と言う形をした悪は正当化され、悪を裁く裁定者となる。それがジャティスの正義。グレンの正義とは大違いだ。

「故に僕は一年余前、正義を執行した！ この国を持ち上げ、与する偽善者達を、片端から始末することにした。やがて内部からこの国を滅ぼすために。まあ焼け石に水だけど……善行とはまず、自分が出来ることから始めるべきだ。そうだろう？」

帝国政府の重鎮や宮廷魔導師を殺し尽くした。

この国に生まれたからには罪が無いと自称しようがお構いなしに悪と決めつけ断罪していく。

「だが、宮廷魔導師団にいた頃、君と任務をした時どうしようもなく思ってしまったんだよ!! ああ、この男は間違いなく『正義の魔法使い』としての僕と変わらない信念を持っている!! 君ほど特異な魔術師はいない! 100回戦って99回負ける勝負でも君は必ず1回目で勝利する!! それを見て思った! 正義を貫いたこの僕が、この強大な壁を前にして正義を貫けるのか? とね!!」

この男は自分の夢と同じ信念を持った人間、つまりグレンを認めていた。認めていたからこそ気に食わないのだ。全てを守ろうとするグレンと犠牲を伴っても悪を殺すジャテイスでは正反対。

いや、だからこそ……

「故にこれは『挑戦』なんだよグレン!! 君の正義と僕の正義、どちらが上か! 今回の君との戦いで証明する!」

ジャテイスにとってコレは聖戦なのだ。

『試練』であり、己が正義を証明する戦いなのだ。

「そして君を倒し僕は『禁忌教典』^{アカシックレコード}を手にする資格を得——その力で邪悪な国も天の知恵研究会も滅ぼし世界に真の平和を築く『正義の魔法使い』となる!!!」

狂っている。

狂おしい程の正義感にシステイナは震えていた。この男は狂人なのに何処か神聖さを醸し出し、それに畏怖している自分がいる。だがそんな自分を認めたくなくて、否定しようとするれば吐き気がする。

『正義の魔法使い』としてこの男は狂いながらも純粹なのだ。現実を考えればもしかしたらコレが正しい形の意味だとしたら、一体『正義の魔法使い』とは何なのか震えて仕方ない。

「悪いな、白猫。ここから去れ」

「え……?」

「済まなかったな。俺のツケでお前を巻き込んでしまった、お前はここに居ていい場所じゃない」

「同感だ。むしろ消えてくれないか? 僕とグレンとの決着に邪魔するなら……殺す」

「ヒッ!?!」

「此処は任せろ、行けっ!!」

グレンの叫びにシステイーナは背を向けて逃げてしまった。その背中を見て小さく「達者でな」と呟いたグレンはジャティスを見据え『魔銃ペネトレイター』を握りしめた。

「……今度こそ殺してやるよ! ジャティスウウウウ!!」

「来いっ! グレン!!」

両者、一斉に駆け出す。

《愚者》と《正義》による2人の対決。

『正義の魔法使い』の信念をかけた殺し合いが今、幕を開けた。

第18話

とある隠れ家に強力な結界が張られていた。

それは外部からの侵入を一切許さない城塞結界。クリストフの張る結界魔術には及ばないが、魔術を使えない人間の侵入は許さないくらいの力はある。

その結界の中で眠る銀髪の風の巫女。

【クロノ・カタストロフ時の奉天】によつて死ぬ筈だったシナリオから生きる事が出来た人間が……

「……………う……………ん……………？」

今、目を覚まそうとしていた。

ジャティスのシナリオからは逃げられない。配役も決まり、全員がそれに従つて動かねばならない。

奴等はセラを狙う。そうすればフィールは防衛に回らざる得ない。ジャティスのシナリオ通り、フィール＝レーダスならシナリオ通りに防衛に回らざる得なかつただろう。

だが、シナリオ通りに物事は進むとは限らない。

計画や予測はその人間の気持ち次第で驚く程外れる。

「《雷槍よ——》《打ち砕け》」

同時起動した「ライトニング・ピアス」の十連射が放たれる。それはゲームオーバーからの起死回生の一手。全ての弾丸を撃ち落としたあの頃と同じ精度で撃ち砕いた。

以前なら不可能だっただろう。弱さを持った少女では不可能だった。だが、弱さを、甘さを捨てた少女を凌駕した。今を凌駕した少女は全くの計算外だ。

「間に合った」

故に、今を凌駕したフィールはジャティスのシナリオを超えたのだ。紫色のマフラーを巻き、帝国宮廷魔導師団のコートを着た少女は空高くから見下ろす男を睨み付ける。

「――漸く、此処まで来たぞ。ジャティスⅡロウファン」

血濡れた魔剣と魔銃を握り締め、ジャティスが殺そうとした2人の目の前に立ち塞がった。

「っ……………！ クソが……………！」

「……………ハア……………ハア……………！」

とある裏路地で、グレンは右の二の腕の傷を左手で押さえながら建物の壁に座り込んでいた。隣でシステイーナが必死に治癒魔術を使っているが、本人も顔が青白く足元も於保ついていない。

「白猫……………やっぱお前だけでも逃げろ……………お前が戻ってきてくれた事だけで、俺は十分だ」

「嫌です!! 先生は一緒に帰るって言ったでしょ!!」

システイーナは涙を流しそう言うが、それは恐らく叶わないだろう。

最初はジャステイスとシステイーナとの協力によって戦うことが出来ていた。

だが、ジャステイスが本気を出し始めた途端、手も足も出なくなつたのは、ジャステイスがグレン達の未来を読み始めてしまったからだろう。想定外の修正力にグレン達は成す術なく力尽きていた。

元々グレンは魔術師としては三流だ。オリジナル固有魔術の『愚者の世界』と周到な準備があつて魔術師殺しとして戦える。

しかし今はもう使える手は殆ど使い切つた。魔銃ペネトレイターの弾は既に使い切り、『イヴ・カイズルの玉薬』も今のジャステイスには当たらない。弾を込める前に殺される。

『愚者の世界』の魔術式が埋め込まれたタロットカードのみ。それにシステイーナもこれ以上魔術を使えるほど魔力も残っておらず、マナ欠乏症に至っている。

「さて……グレン、僕達の宿命に決着をつけようじゃないか?」

ジャステイスはそう言いながら指をならす。

ジャステイスの周りに四体の人工精霊^{タルバ}

【彼女の御使い・銃刑】を呼び出した。その四体はマスケット銃を構えており、それらの狙いはすべて2人へと向いていた。

「ジャステイス……俺を殺すのは構わねえ……ただ一つ頼む。こいつは生かしてくれないか？」

「っ!? 先生!!」

システイーナがグレンに手を出させないように抱き締めているが、もうこの状況をひっくり返す事は出来ない。援軍も来ないのは全てジャステイスのシナリオ通りに事が動いてしまっているからだ。

「良いだろうグレン。君の最後の願いだ、聞き入れよう」

ジャステイスは指を少し動かすと、

【彼女の御使い・銃刑】の一体がシステイーナをグレンから引き離す。マナ欠乏症に陥つ

ているシステイーナには何も出来ない。

「やめて！ 離して！！ 先生！！」

「悪いな白猫」

一言だけ謝って、グレンは一度深く深呼吸した。

手を伸ばすシステイーナに無情にも、諦めてしまったようなグレンの顔を見て叫び続ける。

「安心してくれ、グレン。その娘には手を出さない。そして君は苦しませずに一瞬で殺す。それが、かつて僕の正義を脅かした唯一無二の人間に対する、最大限の敬意と礼儀だ」

「……ありがとうよ。地獄に落ちろ」

「さよならだ。グレン」

そう告げ、ジャティスが指を撃ち鳴らした。そして同時に、音が響いた。

「……はっ?」

それは1年半前と同じ、マスケット銃から発射された弾丸が全て撃ち落とされた音が、グレンの目を見開かせた。それは1年前の遠距離から銃弾を撃ち落とすと言う離れ技。撃たれた弾丸計8発は降り落ちてきた紫電の閃光に全て砕け散る。

「なっ……カハッ……!?!」

2発がジャティスの胸と脇腹を貫く。

何時も相手の思考を読み優位に立つジャティスが、予想外にも直感で避けた【ライトニング・ピアス】はジャティスの急所を外れたとは言え、小さな風穴が開いていた。

「ぐっ……! 誰だ……!!」

「間に合った」

その姿を見たグレンは息を呑む。光を失った紅い瞳。宮廷魔導師団のコートは見る影も無いくらい血で黒く染まり、それはまるで『死』そのものを運んできた死神にも見えた。

おびたしいほどの血。隠すこともできない死の臭い。本能的に怯えと恐怖を抱きながらも、システイーナは呟いた。

「――漸く、此処まで来たぞ。ジャティスⅡロウファン」

「……黒……猫？」

思わず本人か疑ってしまいうくらい、その眼は冷たくてまるで別人だ。血濡れた魔剣、血濡れた魔銃、血濡れて黒く変色した紫色のマフラーが嫌でも目に付く。一体どれだけ殺せば、コレ程の死の臭いが身体に纏わり付くのか考えたくも無い。

「ぐっ……！ まさか、一年半前の援護は君の仕業だったとはね」

「ああ、悪いけど私の『ライトニング・ピース』は毎秒8万キロス、銃弾の速度と比べる

までもない。弾道も、撃ち込む場所も判れば撃ち落とすなんて訳ない」

グレンはその言葉を一瞬理解出来なかった。

無茶苦茶だ。口で言うのは容易いが、それは豆粒と同じくらいの銃弾に合わせて「ライトニング・ピアス」を撃ち込まなければ不可能な上に、それほど小さいが同時射出された全ての弾丸を全て並列に撃ち落とすなんて、人間業ではない。

「ああ成る程……！　君は僕と同じ未来を計測する事が出来たわけだ!!　なら、逆算して此処まで辿り着いたと言う事か!？」

「セラ先生を守る為に防衛に回ると予測したようだけど、当てが外れたようだな。セラ先生を襲うように命令した中毒者は例外なくブチ殺した。ただそれだけで予定調和は崩れた」

それはファイルを見誤っていた故の崩壊。

もう二手程有れば、ファイルを止める事は出来ただろう。自分のシナリオから外れた時点で、いや最初から外れていた。

「あ、ああ——確かに予定外だ。想定外だ。だからこそ……だからこそ許さないッ！
 よくも、よくもあの成就の瞬間の邪魔を……ッ！」

ジャテイスは『人工精霊』を多数顕現させる。

顔色を見れば分かる。魔晶石で魔力を補充したとは言え、フィールの魔力は半分以下。こんな短時間で中毒者の殲滅が出来た時点で分かっていた。フィールは既に一度【女帝の世界】を使っている。【女帝の世界】の負荷は大きい為、1日で2度は使えない。使えたのは全盛期、全盛期の半分以下のフィールではそれこそ命を削る行為だ。

だが、それがどうした。【女帝の世界】は3分も保たずとも、その前にジャテイスを殺す。目を瞑り、全ての意識を詠唱に集中する。

「《暴乱の牙よ・我が道を駆けよ・空を疾く舞い踊れ》」

詠唱を唱えた瞬間、フィールはジャテイスの目の前から一瞬にして消えていた。

「……………はっ！」

否、消えたと言うより一瞬にして視界から捕らえられなくなつたのだ。気が付けば顕現した

『人工^{タル}精^バ霊』の半分が消え去つていた。それは人間が引き起こせる加速を超えている。街を3次元的に動き回るフィールの加速は弾丸の速度を超えている程に早過ぎる。

「ぐううっ!？」

通り風を感じた瞬間、ジャティスの身体が切り裂かれた。

通り過ぎる突風と風の刃がジャティスの体を切り裂いていく。街の壁を踏みしめて立体的に動くそれは、さながら風刃の嵐だ。

「風使いなのは予測していたが、まさかコレ程とは……!？」

黒魔改【ライアブル・ドライブ】

フィールのみが使用を許された【ラピッド・ストリーム】の改良型。それは身体に触れた風のパラメータを自在に操り、風の鎧を纏い空を駆ける風使いとしての究極の領域。

自分の半径5メートルの周囲の風を掌握し、自身には風の鎧を、そして外側には旋回する強靱な風の刃がジャテイスを襲う。

フィールの使うそれは【疾風脚】シュトロムではない。【ラピッド・ストリーム】を連続起動するそれとは全く違う。【女帝の世界】により生まれた魔術の重ね掛けによつて可能にした風使いの本領。この荒れ狂う暴風は名を付けるなら【暴風脚】デベレストと言うべきかもしれない。だが、ジャテイスは不敵に笑った。

「ぐっ……い…… 確かに速いけど、それ【プラスト・ブロー】並みの強風を連続起動している時点で、魔力を大量に消費してるんだろう!!」

確かに速い。目には追えないが、予測は出来る。

ジャテイスは風を逆算し、フィールが来るであろう軌道を予測している。咄嗟とは戦場の勘は伊達じゃない。

そして長期戦になれば不利なのはフィールだ。ただでさえ【女帝の世界】で身体に負荷を強いている中で、2回目を使用しているのだ。本来【ライアブル・ドライブ】は【疾風脚】シュトロム 同士の戦いの時や、極端に速い人間にしか使わない。そもそもこの世界では魔力容量キャパシテイが減っているのだ。時間にして1分も保たない。

「つつ?!」

だが、フィールの狙いはそこではない。速さで翻弄したところでジャティスの固有魔術に捕まる事は分かっていた。ありとあらゆる風のパラメータを操作すると同時に、自身の纏う風の鎧と風刃の嵐はこの広くない路地で跳躍していけばどうなるか。

「『人工精霊』が……?!」

ジャティスが呼び出そうとした『人工精霊』が召喚出来ないのだ。そもそも『人工精霊』の召喚は自身のトランスハイ状態で自分の等価交換の理論を逆手に取った錬金術の召喚、それは擬似靈素粒子粉末があつてこそ成立するものだ。

「乱気流……コレが狙いか!」

そう、フィールの狙いはその乱気流にあった。擬似靈素粒子粉末が風で流され、等価交換に必要な領域が成立していない。「ライアブル・ドライブ」で跳躍し続けたその場

は、あらゆる方向から流れる風の奔流に流され拡散していく。

「終わりだジャテイス」

「つつ!! 読めなくとも方向さえ分かれば……!」

ジャテイスは自分の周りの僅かな領域に重ねて擬似^{パラエテリオンパウダー}霊素粒子粉末をばら撒く事で
【彼女の護り】を三体顕現する。

だが、フィールは自身に纏う風を最大出力に着地した壁を【女帝の世界】で重ね掛けした強化魔術で抉り蹴る。右手に持つ魔剣エスパードは因果逆転の魔剣。斬る現象の結果を先に反映させて放つ防御不可の一閃。

「死ね」

「なっ……!?! ガッ——」

ジャテイスの呼び出した盾など意味がなく碎け散り、ジャテイスの身体を真つ二つに斬り裂いた。ドシャと地に倒れ落ちたジャテイスの身体から血が噴き出した。

「うっ……！」

「見るな白猫！」

斬り裂かれたジャティスの臓物がぶち撒けられ、それを見たシステイーナは吐き気を催していた。フィールは冷たい瞳でジャティスの死体を確認する。

「…ハア……ハア……」

ジャティスの最後の足掻きも砕け、フィールは斬り裂いたジャティスの方向を見る。見るからに即死だ。大量の血がジャティスの斬り裂いた半身から流れ、血の池を作り出している。

「ハア……終わった……」

別の世界の敵とは言え、エルザの仇を取る事も出来た。2回目の殺害もジャティスと言う人間が弱くない事を知っていて、長期戦が不利だと考えたフィールは短時間で倒すのに全力を注いでいたのだ。

そして…身体にかかる負担の波がフィールを襲った。

「…………ツ!! ゴホツ…………ゴホツ!!」

「黒猫!!」

口から少くない量の血を吐き出した。

無理もない。「女帝の世界」を2回使ったのだ。心臓が揺さぶられたかのような動悸と汗、激しい息切れと目眩が身体を襲う。「女帝の世界」の使用はこの世界では一回が限界だったのを二回無理して使ったのだ。マナ欠乏症の代償と肉体的負荷は想像以上に身体にダメージを送っていた。

「フィール、大丈夫なの?」

「コレ全部返り血だから…………システイーナ達は?」

「魔力が殆ど無いけど、私は怪我はないわ…………グレン先生は」

「俺は白猫の「ライフ・アップ」でなんとかな…………済まなかったな、巻き込んでしまった」「グレン先生が巻き込んだ訳じゃない。ジャティスが起こした騒動ですよ。そんな自分のせいみたいな顔しないでくださいよ」

グレンは申し訳無きように自責の顔をしている。
ジャテイスとの戦いにフィールやシステイーナを巻き込んだ事に負い目があるのだらう。

「とりあえず、クリストフさん達の所に向かしましょう。時間もかなり経ったし、殲滅が終わって——」

この後の方針を決めようとした瞬間、フィールとグレン、システイーナの間に突如現れた葡萄のようなものが浮かんでいた。

「——えっ?」

「——はっ?」

「つつ!?! 《吹き飛ばせ!!》」

マナ欠乏症に陥っている中で、フィールは2人に向けて「ゲイル・ブロウ」を放つ。葡萄は今の魔力では吹き飛ばす程の威力は出せない。2人を葡萄から引き離す事は出来

だが、フィールは生前出来て「トライ・レジスト」が精一杯だった。葡萄——いや、【彼女の怒り^{ハイス・レイジ}】はフィールの至近距離で爆発した。

「ガッ——!?!」

数十メートル吹き飛んだフィールは直ぐ様体制を整えようとするが、左腕が嫌な方向に折れていた。

「『人工精霊』……!?!」

ジャティスの方を見る。

ジャティスの死体はある。にも関わらず『人工精霊』が現れたのに驚愕する。激痛が走り顔を顰めるフィール。折れた左腕が酷い為、殆ど無い魔力で【ライフ・アツプ】をかけようとした。

だが、次の瞬間……

「ぐっ……!?! ああああ……!?!」

「フィールの身体に至る所が無残に切り裂かれた。

飛び散る鮮血と、身体中を走る痛み。幸い目や首は斬れていない。だが、身体に相当な負荷がかかっていた状態で、コレだけの血の量は生命維持に影響が及ぶ程だ。

「黒猫!?!」

「フィール!?!」

攻撃された原因が分からない。剣で打ち合った訳でもない、風の刃に切り裂かれた訳でもない、まるで見えないナニカに切断されたかのような……

「いやあ、まだ生きているとはね。それは読めなかつた」

余裕のある表情で拍手を送る男が現れた。

先程、「彼女の怒り」^{ハイズ・レイジ}が爆発したその場所に現れたのは、先程フィールが確実に殺した

筈の男。黒いシルクの帽子を被り、フロックコートを羽織り、切れ長の目と色白の肌の男。

「ジャ……ティス……ロウ……ファン……!？」

「君は誇つていい。この僕を一度でも殺せたのだから」

グレンは目を見開いた。

ジャティスは一度殺された。グレン達の目の前でフィールが斬殺していた筈だ。死体だつてまだそこに存在する。にも関わらず、ジャティス⇨ロウファンはそこに存在しているのだ。

「何でテメエが生きてやがる!？ 黒猫が殺した筈だ!？」

「見くびるなよグレン。僕は錬金術師だ。自分の肉体の複製くらい朝飯前さ」

「だったら肉体はまだしも精神と靈魂はどうした!？ どうやって持ってきた!？ まさか、『Project:Revive Life』——ツ!？」

「それこそ、まさか。アレで出来るのは本質的に別人……あんな粗悪なものと一緒にしないでくれよグレン。僕は、正真正銘、本物のジャティス⇨ロウファンさ……」

ジャティスは戯けて言った。

フィールは驚愕した。気付いてしまったのだ、ジャティスⅡロウファンが生きている理由。ジャティスが一体何をやったのか思わず絶句した。

「まさか……存在体質を……二つに……割った……!？」

フィールは目を見開いた。

確かに未来でもジャティスを殺した筈なのに、突如現れた死んだ筈のジャティスがエルザを殺していた。ただ、人形と自分を魔術で入れ替えたと思っていた。だが違う。この男は……

「そう……僕自身の存在体質……靈魂を二つに割って、二つの身体に分けた……それだけさ。何、僕自身が計算を度外視した直感だけでこんな事したのは初めてだったが、どうやら必要な代償だったらしいね」

「ふざけんな……! お前の自我はそのままじゃねえか!? この世界で唯一無二の自己存在を自ら二つに分けるなんて……分けたとしても、その二つはそれぞれが等しくお前自身……ッ! それをお前、確証もない直感で割るなんて……!？」

そう、^{アイデンティティ}存在体質を二つに分けると言う事は、感情も信念も文字通り半分になる。正義を行いたいと言う気持ちすら半分となつてゐる筈なのに、今存在するジャティスⅡロウファンはオリジナルのジャティスⅡロウファンと何の遜色もない。

あり得ないのだ。オリジナルの自分を半分に分けたのにオリジナルと同等の自分が存在するのがあり得ない。

だが、この男は……

「それが『正義』だからさ」

まったく揺らがず、ジャティスが嗤いながら言った。

この男はたった1%の可能性の為に、自分の未来を捨てたのだ。馬鹿げている。そこまで駆り立てるこの男の『正義』とは何だ。

「ああ、確かに僕は死んだ……だが、僕は生きて『正義』を成す……ッ！ 確かに僕の意思が、僕自身の意思で邪悪を滅ぼすッ！ そこに何の問題があると言うんだい!!」

「そんな外法使つて代償がないと思つてんのか!?!」

「代償なんて百も承知さ——この外法は魂に多大なるダメージを与える。……僕の本来

の寿命の半分、約30年かな……きつと、これからも減るだろう……だが、充分だ」

答えは変わらない。狂っている。

未来で予測した死ななかつた未来を度外視して、ありもしない、確証もない直感で存在体質を二つに割るなんて人間じゃない。予測していたにも関わらず、自分が死なない事を大前提に置くのが人間だ。それをわざわざ、死ぬかもしれないと言おうかもしれない予測した未来の為に寿命を犠牲にしても備えるなんて、一体どんな精神があれば可能なのだろうか。

「ぐ……うう……！」

「まだ立つのかい。華奢な身体をしているのに案外タフだね」

「黒猫、もうやめろ！ 無理して戦えばお前が……！」

グレンの忠告を聞かずにフィールはマナ欠乏症の中、使える最後の魔力で「フィジカル・ブースト」を使い、魔剣エスパードを右手にジャティスに襲いかかる。軋む身体、流れ落ちる鮮血の中、ジャティスに向かったのは見事と言わざる得ない。

だが……

「遅いね」

「ガッ……………」

ジャティスの仕込み杖に隠された細剣レイシテにフィールの背中は深く斬り裂かれた。

「アレに比べれば遅いし、動きが単調だ。だから読みやすい」

「フィール!!」

視界が暗転していく。

斬り裂かれた背中から大量の血が飛び散り、激痛が走る。フィールは身体中の力が抜けたかのように魔剣エスパーダを手放し意識を失い、地面に倒れ伏していた。

「くそっ?! ジャティスウウウウウ!!」

グレンがジャティスに向かっていこうとする。魔力も武器も援護もない。だが教え子が殺されそうになったのを黙って見過ごすなんて出来ない。

「ガッ……!?!」

走り出したグレンの足が撃ち抜かれる。

ジャティスの上には『人工精霊』の銃刑兵が顕現していた。風使いが消えた事によりジャティスの優位性が復活していた。

「君はよくやったよ。僕のシナリオを崩し、剩えこの僕を一度殺す事が出来、自分の命を顧みずにグレン達を守る為にその身体で僕に挑んだ。その最大限の敬意と返礼として僕自らの手で殺そう」

ジャティスの細剣レイピアの刃が倒れ伏すフィールの首元に置かれていた。意識の無いフィールはただピクリとも動く事なく、見下ろされたジャティスに対して何も出来ない。意識があつた所でフィールでは勝てないだろうし、何も出来ないだろう。

「フィール! 《大いなる——キャッ!?!》」

システイーナが殆ど無い魔力で「ブラスト・ブロー」を使おうとした瞬間、システイーナの近くに「彼女の怒り」ハイス・レイジが召喚され、システイーナは数十メートル吹き飛ばされた。

「白猫!?　ぐっ……クソツタレ!!」

グレンはジャティスの召喚した『人工精霊』タに押さえつけられた。グレンも魔力も仕込み道具も銃弾も切れている以上、腕力で退ける事は出来ない。

「さよならだ、フィールル!!ウオルフォレン」

「フィールル!!!」

「黒猫オオオオ!!!」

ジャティスの細剣レイピアは振り下ろされた。

「っ……」

気が付けば、フィールは何もない、どこまでも蒼い空だけの世界に一人立っていた。傷だらけの体、折れた左腕、枯渇した魔力を感じながらもフィールはただそこに立っていた。

そこには時間も上下左右の概念もない。ただ遠く果てない無限に広がる蒼い空で完結したその世界。

そんな世界を見渡し、後ろを振り返る。

振り返った先に瞼に焼き付けたのは、白い極小の衣装を身を包み、異形な翼、いや、蝶

の羽のような紫の翼、その身体の所々がジグソーパズルのピース抜けのような小さな穴が空いて、不完全であるがそれは……

「ル……ミア……さん……？」

明らかにルミアの形をしていた。両手を広げて脱力し、その翼や両手両足、全身を無数の鎖で雁字搦めに戒められている。

『……ようやく顔を合わせられたわね、フィール』

「……誰……ですか……？」

無数の鎖で繋がれながらもその陽だまりのような笑顔でフィールに話しかけるルミアの形をしたナニカに、嫌悪感が隠せなかった。

「……！！？」

気が付けば右腕が鎖に繋がれていた。

身体から流れ込んでいく情報と、たった一本とは言え鎖に縛られ身動きが取れないフィール。傷ついた身体では振り切る事は出来ず、ただ雁字搦めになっていたルミアが右腕だけ鎖が消えていた。

まるで、自分に成り代わるようなそんな感覚。右腕が解放されたルミアはフィールの頬を撫でる。

「……貴女に……なれば……あの2人を救えるの?」

『ええ、だから……あとは任せて? ……ね?』

その手を取れば、2人も、友達も救う事ができる。簡単だった。フィールはただ手を取ればいいだけ、手を取れば全てが解決する。

『だから、ね? ……貴女の身体を私に頂戴?』

「つつ!」

フィールは撫でられた手を折れた左腕で振り払った。

助けられるなら、友達と、二人を救えるならどんな代償も厭わないフィールでも、そ

の手だけは取れなかった。

「ふぎ」……ける……な……人を救う……人間はそんな……顔をしない」

陽だまりのような笑顔に嫌悪感しか湧かないフィール。人を救う人間はそんな笑顔で自分を捧げたりなんかしない。自分を犠牲にする事を厭わないフィールは聖女に見えるかもしれない。だが、フィールは決して聖女じゃない。

フィールは欲張りな存在だ。今が大切だから自分を犠牲にするのではない。苦しめた未来を自分の思う通りに改変する為に全力を尽くしているだけだ。自分の知る現実を捻じ曲げる。これを傲慢と言わずして何とこのか。

『……あら、残念。けど……もう手遅れよ』

「何を……ぐっ!?!」

ルミアの右腕がフィールの胸元を貫いた。

血は出ていない。ここは精神世界だ。だが、フィールは貫かれた事で、何かの一線を超えてしまうかのような感覚と、自分という存在が殺されてしまうような痛みが身体を

支配する。

『安心して、ジャティスⅡロウファンは倒して2人を守ってあげるから。だから貴女はここに……お終い』

意識が遠くなる。

頭に流れ込んでくる情報、自分の体に今まで感じていなかった強大な力が、貫いたルミアの腕に流れ込んでいくみたいで、強い不快感と、自分が無くなるような悲しい痛み、フィールはかろうじて保っていた意識は暗転した。

「ザシュ！」と振り下ろした細剣レイピアから聞こえてきた。首を跳ねられ、フィールは絶命しているだろうとその場にいる誰もがそう予想せざる得ない状況だった。
だが……

「……はっ?」

フィールは細劍^{レイピア}の刃を挿^{...}んでいた。

未だ意識は回復しているように見えない。にも関わらず、無意識の状態、目覚める筈のないその状態でフィールは膝立ちし、細劍^{レイピア}を握り潰した。

「つつ……!?」

ジャテイスは数歩後退した。

フィールから魔力は感じない。いや、感じているのは魔力とは全く別の存在。身体にビシビシと伝わる存在感がフィールから放たれている。

「何が……どうなっているんだい……」

ジャテイスの表情から笑顔が消えた。

切り裂かれた身体、折れた左腕、枯渇した魔力。ジャテイスと今の状態のフィールが圧倒的に有利、必ずフィールを殺せるだろう。

だが、ジャテイスの目に焼き付いたソレを見て叫ばずにはいられなかった

「何だ……何なんだその翼は!？」

右側から飛び出した紫の異形の翼がジャティスを前に圧倒的な存在感を放っていたのだ。否、存在の規格が全く別次元に感じ取れてしまったのだ。

「フィール……なの?」

遠くに倒れ伏すシステイーナが呟いた。

フィールの片目は瞑っているにも関わらず、右眼は綺麗な蒼色に染まっていた。ほんの阿頼耶の時に目覚めた異形のナニカ。ジャティスの予測にも無かった想定外過ぎる想定外。

「つつ……!!?」

ジャティスが気が付いていた時には左腕が消えていた。

その存在の右手から放たれた光はジャティスの左腕を一片残さず灰塵に帰していた。一瞬だけ感じ取れたその魔力は今まで自分が感じ取った魔力量の比ではない。

「ぐっ……いー　来い！　僕の奥底に眠る正義の具現！　僕だけの神、正義の神よ！！　目の前の邪悪を駆逐せよ……」
レテイ・ジャステイス　「正義の女神ユースティア！」

フィールから後退したジャティスは右腕を掲げて叫ぶ。

それは今まで召喚してきた天使とは比べ物にならない程大きく、手には天秤と黄金の剣を携えていた。その姿はまさにお伽噺に出てくる天使と表現してもいい程、強大な存在がフィールの目の前に現れた。

だがフィールはソレを見上げた瞬間、右手を掲げていた。

「行けエー！　ユウウスティイアアアア!!!」

召喚された女神が振るう黄金の剣がフィールに振り下ろされる。しかし、フィールはソレを見ても焦る事も、回避しようとする行動すら起こさそうとしない。



フィールが呟いた次の瞬間、羽ばたかせた翼から黒い風が黄金の剣を粉々にしていた。ソレはまるで、既に攻撃がされていたかのような滅びの概念そのものが一瞬にしてユースティアを呑み込んでいた。

「なっ……！！ 物理的な破壊じゃない!? 滅びの概念そのものなのか!」

ジャテイスはその存在の在り方を辛うじて捉えていた。

今のフィールはフィールではなく、全く別の存在だと言う事と、フィールが使用している全てに関連している事を断片的に理解していた。

「(……理屈は分からない。だが、関連しているのは間違いなく『時間』の概念)」

ソレならば説明がつく。

全てにおいて、フィールが使っている全てに『時間』と言う概念が関連しているなら、

べき壁はもう一つ存在していた事に。

「そうか……！ 君はそうだったのか！！ ハハハハハハ！ 成る程、神は僕に試練を与えたと言う訳か……！！」

フィールはジャティスに迫るが、ジャティスは生み出した天使に乗り、フィールから離れていく。フィールの身体はポロポロ、自分を使い潰すように身体の事など気にせず、ジャティスに向かう。

「今回は退くとしよう。だが、いつか必ずまた会おう。フィール＝ウォルフオレン！ 僕の超えるべき存在よ！！」

ジャティスは空高くに消えていく。

それを見たフィールは激昂したようにズタズタの右腕をジャティスが消えていく方向に向ける。

「《j t p j m w ■■■■■》———《！！》」

「もういい！ 止めろフィール!!!」

グレンは止めようと制止の声を叫ぶが、今のフィールは右腕から鮮血が噴き出そうとお構いなしだ。これ以上の出血はフィールが死ぬ。だがフィールは止まらない。右の掌に収束していく焼き焦がすような熱量の光をジャテイスに放つまで止まらないだろう。

「くそっ……!!」

グレンの「愚者の世界」で止められるか分からないが、近づこうとするが距離が遠い。50メートルしか機能しない「愚者の世界」で、今のフィールとの距離は訳70メートル、足を撃ち抜かれて動けないグレンが近づくには遠過ぎる。

「フィール!!!」

「フィール！ 駄目!!」

グレンやシステイーナが叫ぶがフィールは止まらない。

アレを放てばフィールは死ぬ。直感的に分かってしまうのに、グレン達の声は届かない。
い。

そして、掲げた右手から光は放たれ——

「駄目！ フィールちゃん!!」

放たれる瞬間、フィールの背中から誰かの声が聞こえた。

フィールは気にも留めなかった背後に自然と顔が向いた。グレンやシステイーナの声が届かなかったのに振り向いたのは何故か分からない。

そこに居たのは……

「これ以上、自分を傷付けないで!!」

【疾風脚^{シユトロム}】で急いで駆けつけ、腕に包帯が巻かれながらも、フィールを優しく抱き締めて

止めるセラの姿がそこにはあった。

血濡れているようが構わなかった。今のフィールがまるで泣いているかのように心の悲鳴をあげているようにセラは見えてしまったのだ。

「もう……大丈夫だから……」

セラはそう言い聞かせると、フィールの右手の収束していた光が霧散し、それと同時に背中から飛び出した紫の翼は消え去り、瞳は金色に戻っていた。意識が戻ったようにフィールは片目のまま、セラを見た。

夢を見ているように視界がぼやける。片目に血が入って見えやしない。捉えた輪郭からフィールはボロボロの身体で弱々しく呟いた。

「……………おか……………あ……………さ……………ん……………う？」

そう呟いてフィールの意識が途切れていた。

ズタズタに切り裂かれた身体をセラに預けて、フィールは気を失っていた。流れ落ちる血に、そこに駆けつける宮廷魔導師団達、身体を引き摺って辿り着くグレンとシステイーナ達、その最悪な状態のフィールにアルベルト達は「リヴァイヴァー」をかける準備を始めていた。

フィールの着ていたコートの内側から付けていたチエーンが切り裂かれていた。恐らくあの時に一緒に斬られていたのだろう。フィールがセラに身体を預けて気を失った瞬間、チエーンが耐えきれず千切れ、大事にしていたロケット・ペンダントがカッ

と地面に落ちていた。

第19話

ジャテイスの戦闘、『天使の塵』エンジェル・ダスト事件は宮廷魔導師団の手によって解決した。幸い、廃棄王女であるルミアと、そのクラスメイトに負傷は無く、システイーナは背中を打撲したもののそれ以上の怪我はなかった。グレンについては身体中の至る所に切り傷があり、足を撃ち抜かれたがヒーラー・スベル法医呪文で普通に治せる程度のものであった。

そして、フィールについては……

「フィールちゃん……」

むしろあの状態で戦闘を行なって生きているのが不思議なくらいの重傷だった。「リヴァイヴァー」を使い、治せたのは深く斬られた背中に折れた左腕、出血が酷い右腕の切り傷を治癒出来た所で治癒限界に至ってしまった。

身体中に傷が多く、全身の傷を治せたが薄皮一枚張った程度の回復、無理をすれば傷がまた開くようだ。一命は取り留めたものの、病室で未だ目覚めないうまま、腕や足にも治癒を促進させる特殊な包帯が巻かれて眠っている。

「……先生、フィールは……」

「一命は取り留めたが……今は絶対安静だな」

あの時、その場にいたシステイーナ達は重い顔をしていた。フィールの病室で小さな椅子に座るシステイーナは膝に手を立て拳を強く握った。アレだけ強くなるうとしたのにジャティスに敵わなかった。

グレンと一緒に連携を取ったあの時でさえ、ジャティスは全て出し切っていなかった。フィールが来なければ死んでいたかもしれないが、結局フィールに任せてその期待が死の淵まで追いやってしまった。

「白猫、お前のせいじゃねえよ」

「でも……私……悔しくて……!」

分かっている。

悔しくて仕方がないのはグレンも同じだ。教え子が地獄に行くのをただ止められなくて、何度も何度も敵を殺させて、血濡れたフィールをあの時助ける事も出来ずにジャ

ティスと戦わせた。

「お前は悪くねえ……巻き込んだのは俺だ」

何処か安心してしまったのだろう。フィールのあの冷たい眼に絶対的な力を感じたグレンは、心の何処かでフィールなら大丈夫だって、頼って、自分が目的だったジャティスと戦わせて、守られて、その結果がコレだ。

「(そう言えば……このロケット)」

あの時はフィールがセラの手から慌てて奪っていたが、一体これに何が入っているのかわからない。けれど、セラにはそのロケットに大事な何かがある事を知っていた。

「(あんな顔してでも……見られたくないものって)」

セラは罪悪感がありながらもロケットを開いた。

そこに写っていた写真に絶句する。グレンとセラの写真、そしてセラとセリカと幼い

頃のフィールが写っていた。

だが、それではまるで……

「白犬？」

「ひゃい!？」

セラは慌ててロケットを隠していた。

グレンは首を傾げながら「何してんだ？」と質問するが、「な、何でもないよ！ちよつと飲み物を買ってくる！」と言ってセラはその場から離れていた。

帝国宮廷魔導師団の本部で、アルベルト達は任務の結果を報告していた。

「任務はジャティスこそ逃したものの完璧に遂行した。3人とも良くやったわ」

「……イヴ、貴様に聞きたいことが二つある」

「何かしら？」

「貴様はフィールが未来から来たセラとグレンの娘と言ったな。その上で貴様はフィールに一切の指示を出さなかった」

「ええ、その通りよ」

「知っていたな？ フィールが抱えるジャティスの憎しみについて」

紅茶を飲む手が止まる。

それを見たアルベルトは確信した。この女はやはりフィールを利用したのだと。

「だからこそこの任務で奴を遊撃に置いた。いや、正確にはグレン達が狙われる事を分かっていたからこそ、お前は2人をダシにフィールを使い潰した」

「それって……!」

「ああ、この女はグレン達が狙われてるにも関わらず、一切の介入をしなかった。廃棄王女を優先したのも、フィールがジャティスへの憎悪を知っていたからこそ、奴は必ず狙うと言う信頼があつたからだ」

住民が犠牲になったとは言え、ジャティスの寿命は半分以下に削られ、片腕を失った。中毒者の魔の手から守り抜いた宮廷魔導師団に対しての荣誉、指示を出したイヴは特章

物だ。

「ええ、で？ それは何？」

「悪いとは言わん。だが一つだけ貴様に俺は忠告する」

アルベルトは珍しく感情的だった。

宮廷魔導師団、室長のイヴの襟を強く掴んだ。その状況にバーナードもクリストフもそれに驚いていた。

「次に自分の手柄の為だけに、奴等をダシに使ってみろ。俺はお前を許さない」

「へえ……珍しく感情的ね。あの子にでも惚れたの？」

「惚れたのはクリストフだ」

「はっ!? ちょっとアルベルトさん何適当な事言ってますか!？」

クリストフは慌てて否定する。

バーナードは「あっ、マジで!？」とクリストフに詰め寄って問答を開始する。アルベルトは続けた。

「少なからず、辞めていった2人は貴様が何もしなかった体たらくが招いた事だ。だが、今回のフィールルを見てみる。死に体寸前まで追い込んで、分かっているながらも何もしない。同じ事が2度続くなら俺は容赦をするつもりはない」

フィールルの心は強いように見える。

だが、それは間違いだ。昔のグレンのように魔術の闇に絶望した人間に近い。しかし、フィールルはその現実から逃げる事が出来なかった。

故にフィールルは強くなってしまったのだ。

あんな少女に自分が死んでも守りたいと言う思いを抱かせるほど、現実にはフィールルを追い詰めた。

「でも、僕も同意見です。今回セラさんやグレン先輩を巻き込んで、そちらに何も対処しようとしなかったのは決して褒められる行為ではありません」

「イヴちゃんは農等を駒として見ているかもしれんが、宮廷魔導師団も今は数少ないしのお。手柄と同じくらい、味方を死なせないようにするのも室長の役目じゃない」

バーナードもクリストフも同意見のようだ。

今回ばかりは何もしなかったイヴが悪い。と言うより、グレン達に戦力を割かなかつた事に対しての問題はある。幾ら死ななかつたとは言え結果論だ。

「そう、まあ貴方達の意見は分かったわ。私は仕事があるから、3人とも次の任務に行つてもらつて結構よ」

「……………ふん」

アルベルトは少し不機嫌に掴んだイヴの襟を離し、退室して行つた。それに続いてクリストフ、バーナードと出て行き、イヴはただ机に腰を掛けて座っていた。

——そんな、父上ツ!! どうして!! ここは『愚者』と『女帝』の援護に『星』を回すべき盤面では!? お願いします、このままでは——ツ!!

——ならぬ。彼奴等らは所詮、イグナイトたる我らの駒に過ぎぬ。

——貴様は裏切り者の『正義』を仕留め、最大効率で戦果を上げる事のみ考えればそれでよい。それがイグナイト家の大義だ。逆らうなら——

「もう……私は止まる事なんて……出来ないんだから」

眩いた言葉は誰にも理解される事はないだろう。
ただ、静寂が漂う室長室に眩いた言葉は消えて行った。

病室に足を運びに行くグレン達。

学校は想定外な事はあったものの、授業を行なっていた。事情を知らない生徒からしたらいきなり休まれば疑いもするある疑いもする。事情を他に知ってるのはルミアとリイエルだけだ。

「フィールさん、大丈夫かな……?」

「心配要らねえよ。治癒限界はもう戻ってる筈だ。多分、今頃目が覚めてるか寝てんじゃね?」

グレンとセラは1日の休暇を取っていた。

まあ生徒達も今回の事件で何かを察していたようで、ハーレイ先生に変わっていても

大した質問はしなかった。

セラは病み上がりだったので精密検査、グレンは上半身に切り傷が多かった為、少し休息をとる事を義務付けられた。

「おーい、黒猫。見舞いに来た……ぞ?」

病室の扉を開けるとそこにフィールは居なかった。

窓から風が吹き抜けてカーテンを揺らす。セラが持ってきて立て掛けていた淡い緑色の羽織が無くなっている。

「フィール、お見舞いに……えっ?」

「あいつ何処か行きやがったのか!」

窓が開いているならそうとしか考えられないだろう。

散歩に行ったのか知らないが何も無しに出歩くななんて危険過ぎる。天の知恵研究会もフィール狙いなのだから。

「手分けして探すぞ！ 白猫、リエルはルミアから離れるな。俺とセラは別々に探すから、頼んだ！」

「は、はい！」

フィールがいなくなった不安。

それはもしかしたら、グレンがフィールに背負させた人殺しの罪過。もしかしたら自分のようになってしまふんじゃないかと言う不安。

グレンは南、システイーナ達は西、セラは北を担当し探しに行った。

「被害者は幸いゼロ。中毒者は殲滅、まあ結果は上々かな」

緑色の羽織を棚引かせてため息をつく。

フィールはクリストフが置いていた被害状況や任務報告の資料を眺めながら、団子を食べていた。此処は時計塔、【疾風脚】（疾風脚）を使えなければ登れない。まあこんな場所に誰も来ないと思うが。

「この事の時系列だと、次はセリカ伯母さんの失踪。タウムの天文神殿か……」

あの場所に何かあるのかファイルは知らない。

だが、確実に何かあるのは確かだ。これは直感でしかないが、セリカ伯母さんの『正体』に迫るナニカが存在する。そして……

「これもか……」

収束する光と共に現れた小さな『銀の鍵』。

自分とあのルミアが接続してしまったせいか、右眼が蒼く染まったままだ。今は繋がりを断ち切っているからこそ、あんな莫大な力を出さないようにしているが、これはもはや侵食と言うべきかもしれない。次にあれ以上の力か、本来の『銀の鍵』の力を引き出せば、自分を永遠に失うだろう。

「逆に侵食されてるからこそ、これの一部だけ使える訳か」

右手を握り、『銀の鍵』の顕現を止める。

難儀な力だ。あの時の体の負担もまだ消えてないし、右腕の回路は以前よりズタズタになっている。内部崩壊、魔力生成のスピードがいつもの体感より遅い。

多分、フェジテ崩壊の事件が終わって、もし生きていたとしても、魔術師としては終わってしまうだろう。

「暫く、無茶し過ぎたからかあ。まあ自業自得ね。全く」

せめて、あと少しだけ……

長く生きられるなら……なんて、贅沢過ぎる悩みだ。

ただ、あの2人が幸せなら、私は何も望まない。全てを護りたい、そんな馬鹿みたいな願いを抱いて溺死する。フィール||ウォルフオレンにはお似合いな終わり方なのだろう。

「フィールちゃん!」

「……………ん?」

ファイルの後ろに息を切らしているセラがいた。書き置きを置くのを忘れてた。多分探しにきたのだろう。

「セラさん……ああ、すみません。書き置き忘れてました」

「……………」

「セラさん？ どうしたんです……か……？」

セラが取り出していたのは、自分が隠していたロケット・ペンダント。それを見た瞬間、動揺して自分の胸元を覗く。あの戦いで気を失っていた時にチェーンが切れていたのを知らずに、それをセラが拾っていたのだ。

「この中の写真、悪いけど見ちゃったよ」

「……………！ ………………そうですか」

「どう言う事なの、ファイルちゃん」

「どうもこうも、それは合成——」

「答えて!!!」

はぐらかそうとするフィールにセラは初めて怒鳴った。

カラカラと笑いながら誤魔化そうとしたフィールから笑顔が消えた。セラも動揺している。こんな事、考えるなんて頭がおかしいのかもしれないのは分かってる。

だが、このロケットに秘められた写真がそれを物語っていた。

「どういう事なのフィールちゃん……アルベルト君からも聞いた……フィールちゃんが狙われる理由も全部!!」

「……滑らせたなああのキザ野郎」

『時渡り』にこの写真、これじゃあまるで……」

セラが結論を出す前にフィールは言った。

「これじゃあまるで未来から来た、自分の娘みたいじゃないか……ですか?」

フィールはため息をついて悲しく笑う。

セラの結論に否定も肯定もしない様子で、セラを見据える。風が髪を棚引かせて、夕焼けが2人を照らす。

「……一つ、おとぎ話をしましょうか」

フィールは腰を掛けて、座り込む。

時計塔の屋根で夕焼けを見ながら、語り出した。

——昔々、ある所に2人の魔術師が居ました。2人は魔術師達の特異性を持ちながら、任務を遂行する帝国宮廷魔導師団のコンビを組んでいました。コードネームはそれ

ぞれ《愚者》《女帝》ととても息の合った帝国の切り札が居ました。

セラは少しだけ動揺する。

《愚者》《女帝》はグレンとセラのコードネームだ。正確には帝国ナンバーとして呼ばれていたものだ。

——2人はそれぞれ叶わぬ夢を追う者、『正義の魔法使い』そして『祖国の地を奪還』を目指して2人は進んで行きました。2人の仲はよく、恋人から家族になるまでそういう間は掛からなかった。

そして、それが唯一今の2人が辿らなかつた未来。

この世界はフィールが産まれなかつた世界線。セラが理解し難いのは分かっているつもりだ。

——ところがある日、事件は起きました。

——『正義』を名乗る男に《愚者》は殺されてしまったのです。《女帝》は絶望しました。『正義』を名乗る男を逃してしまい、ただ殺された憎悪を果たせずにただ泣いています。

した。

「ただ悲しくて、泣いて、自殺すら考えていたらしかたですよ？」
「私が……グレン君と」

——ですが、ここで一つ奇跡があつたのです。

「《女帝》には《愚者》との子供が出来たのです」

「！」

「まあ名前は……言わなくてもいいでしょう」

答えはもう分かつていた。

ただ、セラは黙りながらフィールのおとぎ話に耳を傾けた。

——《女帝》は《愚者》の子供を生みました。娘でした。自分に似ていて、《愚者》の髪の色を引き継いだ小さな娘でした。

——子供はすすくすすくと育ちました。魔術の才に愛され、《女帝》を超える風使いになれ

る程に、《世界》が認めるくらいに才能を持っていたのです。

——だが、それは突然でした。

「フェジテに放たれた火の海によって全てが滅びたのです」

「!？」

セラは驚愕した。

一体何があつたのか理解出来なかつた。放たれた炎によって全てが燃えた。そこに何があつたのかは分からないが、その日に全てが終わつたのだ。そして唯一燃えなかつたのは……………

——当時何もわからなかつたが、フェジテを焼く『メギドの炎』その中で滅びなかつたのは《世界》が残した加護を持つ《女帝》の子供と、廃棄王女を抱えて飛ぶ誰かでした。

「宮廷魔導師団の殆どは壊滅、残つたのは幸いにも別の任務でフェジテを離れていた《魔術師》と数人くらい。『天の知恵研究会』が一気に優勢になって、戦力補充は直ぐに必要

だった」

——当時7歳、《女帝》の子供は《愚者》が残した切り札を使い、天空に慢心していた將軍を殺す事が出来たのです。ただ、全てが遅かった。自分以外の人間の死、少女の心を砕くのに十分過ぎた。

——その後、飛び級で入った学校で魔術を磨き上げ、僅か10歳で卒業、そこで出来た友達と帝国宮廷魔導師団の《愚者》と《戦車》して剣を振り続けました。

「あの頃の唯一の救いだった親友。今のグレン先生とセラさんみたいな関係だったかなあ」

「……………」

今は亡き《戦車》を思い出すフィール。

あの頃が、絶望の中で一番楽しかった。語り合って、背中を合わせて互いを守りながら戦う。ズレているかもしれないが、2人で駆け抜けた戦場が楽しかった。

——ですが、再び悲劇が起きました。

「再び、『正義』を名乗る男に唯一の相棒を殺されてしまったのです」
「!?」

正義を語る者、ジャティスは2度も自分から大切な人を奪っていったのだ。私怨があった、許せない何かがあった、そこにつけ込まれてこのザマなら笑うしかない。

——少女は『正義』を名乗る男を殺しました。ですが心は晴れず、再び少女の心は砕け散ったのです。

——その後、少女は3年かけて世界を逆行する魔術を編み出しました。そして少女は定められた悲劇を回避すべく、過去へと足を踏み入れたのです。

めでたしめでたし。

やや自虐気味に満足そうに語ったファイルは笑いながらセラを見た。

「……なんて話。小説にしたら少し儲かると思いませんか？」

「フィールちゃん……」

それが、そのおとぎ話がフィールの生き様だった。

セラは同時にフィールの人生がどれだけ壮絶だったのを知り、絶句する。

「まあ、所詮は並行世界。少女が産まれなかった世界線、だから、過去が全てだった。この世界と少女が居た世界は違う。違う筈なのに、気がつけば、少女は2人を守りたいと思ってしまう」

そう。本当に馬鹿らしい。

けど、放っておくことなんて出来るはずもなかった。分かっていたから、見過ごすなんて出来なかった。例えば自分を産まなかった別人だとしてもだ。

「フィールちゃんの本名は……」

「……改めて自己紹介が必要なようですね」

フィールは立ち上がり、悲しく笑う。

その表情は泣いてるように見えるし、諦めたようにも見える。もう誤魔化せない。だって、こんな顔をされては嘘なんて吐きたくなくなってしまう。夕焼けに照らされながら、悲しく微笑んで口にした。

「初めまして。この世界のセラⅡシルヴァース。私の名前はフィールⅡレーダス、並行世界の《愚者》と《女帝》に産まれた、2人の娘です」

真実を告げられたセラはどんな表情だろう。

怒っているのか、疑っているのか、それとも哀れんでいるのか。

どの道、言うはずの無かった答えを口にしたのだ。もうフィール||ウォルフオレンとしての居場所はない。

「私と……グレン君の子供……」

「正確には並行世界の、と付きまますけどね。この世界で、私は産まれない。本来産まれる筈の時期を既に過ぎてている。だから、私と貴女ではどう足掻いても他人なんです」

「！」

「そう、ただの他人。私はセラ||シルヴァースを知っている。けど、貴女はフィール||レーダス知らない。それだけです。ただ、それだけのくだらない話」

夕焼けを見上げながら、ただ無感情に口にした。

そう、この世界ではどう足掻いても他人でしかないのだ。セラはフィールを知らない。グレンもフィールを知らない。ルミアやイヴも誰もフィール知らない以上、他人と言う言葉は切っても切り離せないのだ。

「まあそんな顔しないでください。混乱や疑惑が生じるのも分かります。だから、私は

もう2人から離れるつもりなので」

「えっ……っ？」

「私が狙われている以上、いつかこうなるんじゃないかって分かった。貴女やグレン先生が傷ついてしまうかもって、分かっていたのに私はそこに居座った」

ただ甘えていたのだ。

いつかこんな事態を引き起こすんじゃないかって、分かっていたながらその優しさに甘えてしまったのだ。

「その落ち度が今回の事件を引き起こした。だから、私はもう……2人から、学校から離れようって思い——」

フィールがそう伝えようとした瞬間、心臓の鼓動が拡大したように身体を揺さぶる動悸にフィールは胸を押さえて吐血した。それを見たセラがフィールに近づいていた。

「……!! フィールちゃん!？」

「ゴホッ……!! ゴホッ……!!」

「まだ、怪我が治ってないの……!?!」

「ただの持病ですよ……」

だが、身体にあれ程の負担を強いてしまった以上、少ない寿命をすり減らしたかもしれない。単純にこの世界に来てからの持病のようなものだ。吐血は頻繁に起こるものではないが、二週間に一回は吐いている。どれだけ削れたのか分からないが、どの道長くはないだろう。

「まあ……どの道、長くはない命ですけどね」

「そんな……」

「そんな顔しないでください。セラさんには関係ない事ですよ」

「!!」

その言葉を聞いた瞬間、セラはフィールを抱きしめた。

強く、強く抱きしめる。僅かながらセラは怒っていた。怒って、震えていた。それを見たフィールは僅かながら動揺した。

「そんなわけ……ないじゃない」

「えっ……？」

「関係ない訳、ないじゃない!!」

セラはフィールに怒鳴りながら泣き始めた。

それは、悲しさから流れる涙と、自分の本音を全部ぶちまけた。

「……フィールちゃん、私はね。貴女を家族だと思ってた。過去なんて関係なしに、家族が出来たって……!!」

「……………」

「なのに……なんでフィールちゃんは居なくなっちゃうの……？ 私より先に……死ななきゃいけないの!?!」

運命は決まっちゃってしまっている。

運命を変えようとするフィールは運命に殺される。なんとも皮肉めいた話だ。だが、それが運命だ。フィールでさえ変えられない運命は存在する。

「それが、私に相応しい最後なんでしょう」

「治す方法を探そうよ！私も、グレン君達も一緒に」

「……無理です」

「そんな事ない！私達が一緒に探すから——」

「そういう事じゃない！」

ファイルがセラに怒鳴っていた。

そんな淡い幻想を叶えられたらどれだけ幸せだろうか。けれど、その幻想は既に打ち砕かれているのだ。

「……もう全部、試したんです。延命出来るかどうか全部。過去では《世界》以上の知識を持つ私でさえ、この命の延命は不可能なんです」

「!!」

ファイルは断言した。《世界》の称号は魔術師の頂点に君臨するナンバーだ。それ以上の知識を持つファイルが、全て試した以上、延命する事はおそらくは不可能なのだ。原因は分かっている。だが自分には何も出来ないのが分かっているから、こんな事話す

べきじゃないって思って、ずっと胸の内にとまっていたのだ。

「嫌だよ……私、もっとフィールちゃんと話したい……沢山思い出を作りたい……まだ、一緒にいたいよ……」

それがセラの本音だった。

本当の家族のようにフィールを見ていた、ずっと娘みたいに思っていた、血だとか記憶だとか並行世界だとか関係なく、ただ楽しかった。楽しかったからセラは失いたくないと涙を流す。

「……ごめんなさい」

「……フィールちゃん。どうしても長く生きられないの？」

「……はい」

これは持病と言うより呪いに近い。

原因は薄々気付いている。けど、どうしようもないのだ。あんな術式が出来ただけ奇跡なのだ。時空を超えるなんて馬鹿げた術式を起動するために作ったあの力が、呪いと

なって身体を痛め付けるように蝕んでいるのだろう。

けど、セラは泣き続ける。肩を震わせて、強く抱きしめる。フィールは少しだけため息を吐きながら、背中を摩った。

「嫌だよ……私、フィールちゃんが死ぬの……見たくない」

落ち着かせるようにフィールもセラの背中に片腕を回し、頭を撫でながら答えた。

「大丈夫だよお母さん。……だって、私は今こんなに幸せなんだから」

それは母親が子供にするかのように、フィールは優しく抱き締める。年齢的に逆かも

しれない。けど、精神的にはフィールはセラより絶望を見てきた分強くなってしまったのだらう。

彼女は長く生きると、最後まで告げなかった。

自分の命に諦観するフィールに死んでほしくないセラはただ泣いていた。夕焼けが沈み始める。それが偶然にも泣いていたセラだけを照らしているようで、気持ちや夕日と共に沈んでいくようにも見えた。

第5章 永遠者と愚者の異変

第20話

「いやあああああああ!!」

「はあっ!!」

早朝のまだ日が昇って間も無い時間帯に三人の美少女達が戯れていた。戯れと言うには些か過激な打ち合いではあるが……。

「ルミア!」

「うんっ!!」

後退したりリエルに後ろから「シヨック・ボルト」の援護をするルミア。それを躲しながら迫るフィールよりも早くリエルを後ろから回復させるルミアの的確な後方支

援にリエルの身体能力に身を任せた剣技が活きている。

だが、リエルの剣技よりもフィールの剣技の方が技のキレが違う。手数に物を言わせたリエルの剣技より、エルザと剣技を高め合う事で剣の神エリエーテのデータ体と張れるフィール程ではない。

「そっ……！」

「うっ……!?」

木刀による横薙ぎがリエルの鳩尾に入る。

リエルの身体能力はどの魔導師より優れたものだろう。だが、フィールの剣技は技で即座にカバーしながら相手に剣を読ませない精霊舞踏シルフ・ワルツを混ぜた特殊な剣技はリエルのようなタイプと最も相性が悪い。むしろゼロロスのような一点突破ならまだしも、リエルの剣技は長期戦のパワー型。僅かな隙を流麗な踊りのように突くフィールとは相性が悪い。

因みに我流。フィールの剣技はエルザと高め合った物。フィールは『精霊剣舞』ソード・ワルツと呼ばれる。

「ここまでにしよう。リエル、ルミア」

「げほっ……げほっ……！」

「慈愛の天使よ」

リエルに触れて打たれた所を回復させる。

支援に置いてルミアの技量はかなりのものだ。支援は的確、後退の時の「ショック・ポルト」も中々の判断だ。

「大分上手くなった。ルミア」

「うん。2人のおかげだよ」

「まさか鍛えてほしいなんて、思わなかったよ」

フィールは退院した後、セラの所に結局行く事になった。

セラはせめて離れて欲しくないとの事で、それはセラが自分に気付いたからこそ言える唯一の我儘だった。

巻き込んだ責任がある。だから離れようと思った。

けど、結局離れられなかった。贖罪を望んだ所で傷付けるのはセラだけだ。だから

フィールには離れる選択肢はなかった。

「連携だけなら今の帝国宮廷魔導師団の基礎よりは上かな」

「そうなの？」

「リエル、貴女はアルベルトさんに任せきりでしょ」

「あはは……」

一応鍛えてほしいとの事でリエルと一緒にサポートの特別訓練をしていた。リエルに合わせてどれだけの後方支援が出来るかとの事。判断力は流石だが、まだ甘い。それこそ天の智慧研究会には劣るが、実戦と戦闘の勘は経験からしか生まれない。

「フィール、もう一回」

「いや、これ以上はいいや。また明日やろう」

まだ病み上がりだし、流石に疲れた。

右腕も完治していない中で、これくらいが今はまだいいだろう。ルミアとリエルは一度家に帰り、フィールも欠伸びながらセラの家に戻っていった。

アルザーノ帝国魔術学院にて、学院長室にグレン、セラ、そしてフィールが呼び出された。何があつたのかと開口一番にグレン先生が尋ねると、学院長のリツクはキラキラとした笑みのまま告げた。

「グレン君、君クビね」

「はっ、はああああああああああつ!?!」

「えっ、ええええええええええええつ!?!」

グレンとセラの素っ頓狂な叫びが響き渡る。

フィールも内心動揺している。いきなりクビだなんて誰が予想しただろう。

まあそれもあるのだが、フィールはセリカの方を見た。包帯だらけで腕は固定されている。治療限界に陥るまで、何かをしていたのだろう。

「ど、どう言うことですか?! グレン君がいきなりクビなんて!」

動揺しながらセラは学院長に猛抗議しようと詰め寄る。グレンも何故クビにされるのか分かっていないようだ。

「お、俺、クビになるようなことは………た、多分、一つもやってないつすよ!」

「そこは言い切りましょうよ。まあ最近は大シになった筈だけど……いきなり解雇クビつて、グレン先生また何かやらかしたんですか? 場合によっては憲兵」

「何で俺が犯罪やつてる前提なんだよ!? 冤罪だ冤罪!」

流石にそれはない……とは言い切れないのがグレン先生だ。だが即解雇は確かにおかしい。

「すまない、先程の物言いには語弊があったのう、訂正しよう」

「ご、語弊つすか?」

「うむ、より正確には『君、このままだとクビになる』のほうが正しい」

「そ、それって一体どう言う事ですか?」

セラとグレンが学院長の言葉に食いついているが、フィールはもしやと思い、セリカに聞いてみた。

「まさか、魔術論文提出してない？」

「ああ、フィールの言う通りだ、この馬鹿」

「……えっ？ グレン君提出してないの？」

「はいっ？」

フィールはため息をついた。

学校のルールを把握しているフィールは頭痛がしながらも、グレンに説明する。と言
うか何故フィールが知っていてグレンが知らないのか。立場逆なのに。

「確か講師職の雇用契約の更新条件は、定期的に研究成果を魔術論文にして提出するこ
と——これはれっきとした魔術学院ルールですよ。セリカさんがルールの穴をついて、
グレン先生を講師職にねじ込んだ時と状況が違うから擁護出来ないって事ですか」

「ああ、提出期限は過ぎてる。期限は過ぎたが、論文を私定義で渡せばクビは免れる事は
出来るが、論文に出来るような題材が無い」

「グレン先生、貴方結構、崖っぷちに居ますね」

雇用契約書読んでない所がまたグレン先生らしいけど。いつも何とか乗り切るグレン先生でも今回ばかりはそうはいかない。

「それで、私が呼び出された理由は？」

「ああ、特務分室からお前の階級を上げるとの事だ。第四階梯クァットルデに引き上がった」

ファイルの階級は第三階梯トレデだったが、どうやら上層部で動きやすくする為に引き上げたのだろう。まあ「女帝の世界」の公式理論なんて論文にすれば下手すれば第七階梯セブテンデでもおかしくはない。

「そうですか。まあそれは置いといて」

「いや、少しは喜べよ」

「要するにグレン先生の魔術論文があればいい訳ですね？」

リックが頷く。

グレン先生がクビにならない条件は魔術論文の提出、直ぐに書いて提出さえすれば間に合う。

「セリカ、セラ、良いことを思いついた、このまま無職引きこもり生活に戻……」

「却下!!!」

馬鹿な事を提案したグレンにセラがボディブローをして、セリカは顔面を蹴った。フィールはその様子にため息をつきながら、最近読んだ論文を思い出す。論文のネタに出来ないか必死に考えているようだ。

「とまあ冗談はここまでだ、そんな顔すんな」

「グレン君？」

「俺、もう少し講師を続けたいんです。何とかありませんか、学院長」

真面目な顔で学院長に相談するグレン。

「こんなこと俺が言う資格なんてないですけど………俺もう少し、アイツらの為にも

セラと一緒に講師続けたいんです。せめて卒業するまでは」

そう言ったグレンに学院長とセリカは笑う。

学院長はグレンに『タウムの天文神殿』の調査をネタにすれば不可能ではないと口にした。『タウムの天文神殿』にはとある魔術師によつて古代の時空間転移魔術が存在していると言う説が浮かび上がった。

多少白々しさがあるのは気のせいと思いたい。

「頼み込めばいいんじゃないですか？ 生徒たち巻き込んで」

「はあ？ アイツらがそんな話に乗るか？」

「乗るでしょ。あくまで第三階梯トレデ以上じゃなければ単独で行けないんですし、私やセラ先生、アルフォニア教授の階梯なら兎も角、気軽に一人で行ける所でもないでしょう？」

そう、観光名所となつていても古代神殿。

狂霊などの危険性はある為、適正は第三階梯トレデ以上でなければ不可能なのだ。その付き添いでなら以下の階梯でも可能だ。

「セラ先生と私も行きますので、後で生徒たちには今後の箱がつくし、手伝いが増えれば一石二鳥でしょう？」

「よし分かった。巻き込んでくるぜアデュー！」

「行動が早い……」

そう言うのとグレン先生は学院長室から教室に向かっていった。因みに廊下は走らないでほしい、後でハーレイ先生に何か言われそうだから。

グレン先生が学院長室から出た後、フィールはため息をつき、苦い顔をしてセリカを見た。セリカはフィールを見ながら笑った。

「セラには隠せなかったようだな。フィール」

「いや、まあ……」

「安心しろ。リックは事情を全部知ってる。もう演じるのはやめていいぞ」

安心していいぞ？と言われフィールは肩を下ろす。

フィールは少し気落ちしながらも本来の口調に戻す。それは演じていたフィール＝ウオルフオレンからフィール＝レーダスとして切り替わった口調。

ため息をつきながら己の失態を晒していた。

「……ドジったから仕方ないよ。まあ、本当は離れようと思ったのに、泣きついて止めてくるし……」

「フィールちゃん！ それは言わないでよ!?!」

「いや、言うからね！ その後鼻水ズルズルで引っ張って、時計塔から湖に足を滑らせて私みずぶ濡れにな——」

「わあああああああ！ 止めてよう……!!」

セリカはその様子にカラカラと笑いながらフィールを見ていた。アレだけ冷たい無表情が、少しだけ感情豊かな少女としての一面を見る事が出来たのだから。

「……それはそうと、セリカ伯母さん」

「ハハハ、何だフィール？」

「その傷……大丈夫なの？」

セリカは軽く笑いながらも大丈夫だと口にする。

フィールも右腕の治癒限界に陥った為、右腕はまだ包帯が巻かれているが、大事には至らない。だがセリカのそれはかなり重傷だ。力を酷使し過ぎているし、治癒限界に至るまでアルザーノ帝国の地下に挑んでいたのだ。

「大丈夫だ。治癒限界ももう時期治る。それにフィール、お前も人の事は言えないぞ？」

「右腕だけだよ。日常に影響はないし」

「その左腕は？」

「ああ、これは……」

左腕の包帯を取ると、そこに傷は無い。

しかし、その腕に2人共凝視していた。

「それは……」

「……まあ、これ見て察してください」

そこにはセラと同じ、民族特有の赤い紋様がフィールの白い肌に描かれていた。セラの腕にも同じような紋様があるが、フィールの場合は無かった。

それを描かれた者は風使いとして一人前になったと言う証らしい。北方の異民族の姫君であるセラは文字通り《女帝》でもある為、それを認める立場にある。

まあ嬉しくないわけではないのだが、正直まだ少しこそばゆいのだ。この世界のセラはフィールを知らない他人であっても、セラは家族のようにフィールを思ってる為、お揃いにするのが嬉しかったらしい。

「へえー、そうか。北方の異民族は風使いとして認められると紋様を入れられるんだな」

「まあ……この人も、私の大切な人には変わりないからね」

「フィールちゃん大好き！」

「ちよつ、ええい！ 離れろセラさん!! 私はまだちゃんとお母さんと決めた訳じゃないからね！ 呼んでほしいならちゃんとグレン先生に告白してこい!!」

「ででできる訳ないじゃん！ だってグレン君は私の事を女として見てくれ……!!?」

「このヘタレ」

「ぐつふう……!!?」

言葉の刃でぐざりと抉られ、膝から崩れ落ちるセラ。

フィールと言う娘が存在している時点でグレンはちゃんとセラを女として見ている筈だ。この世界でどうかと言われたら分からないけれども。

「そもそもフィールちゃんだって恋とかした事ないでしょ!」

「そんな余裕は無かったし、10歳で宮廷魔導師団だよ?」

「ストイック!?!」

ギヤーギヤーと本当に親子のように話している二人を見て学院長もニツコリと笑いながら、フィールが明るくなった事に良かったと思っっている。

ただその一方で、セリカだけは少しだけ焦っていた。誰もが変わっていく。グレンもフィールも変わっていく。ただ自分だけが取り残されていくような、そんな感覚に襲われている事をフィールに隠しながら……

そして、遺跡調査へと向かう日。

グレンたちは屋根上に二階席もある大型の貸し馬車に乗り、フェジテを出発した。考古学に興味のあるシステイーナ達やギイブルやカツシユ達も参加。セラやフィールも着いていく事になった。

「風が気持ち良いわね、ルミア！」

「うん！」

吹きさらしの二階席の一角に陣取ったシステイーナが、緩やかにそよぐ風に流れる髪を押さえながら、ルミアもそれに応えていた。

フェジテを出ると、広大な自然が広がっており、フェジテの中の都会染みた雰囲気から解放された気持ちになる。普段からあまりフェジテの外に出ない生徒たちはこの自然を満喫している。

「はあ……こんなに良い景色なのに、先生たちは……」

「と言うかフィールさんまで参加するなんて……」

「いやまあ誘われちゃったから」

いつの間にかカードゲームに白熱していた。

フィールは澁々ながら参加していた。酔い止めの魔術をかけたおかげで酔いは無い。まあ偶にはと思いいカードゲームをしていた。

「どうだハートのフルハウスだぜっ!!」

「残念、フルハウス。私の勝ちですわ先生?」

「ば、馬鹿な……」

グレン大撃沈。

有力商家の娘であるテレサはこの手の賭け事に強く、未だ無敗だ。強過ぎて他の生徒は全滅だった。

「運が無さ過ぎる!! 何でこの手の賭け事に弱いんだ俺は!?!」

「あ、あはは……フィールさんは?」

「ああ、確かに運が無かったようですね」

フィールはカードを床に広げると其処にはダイヤの10、J、Q、K、Aが揃って出

されていた。

「ロ、ロイヤルストレートフラッシュユ!」

「私の勝ち。んじゃ、賭け金精算。私の一人勝ち」

「んな馬鹿な!!? イカサマだイカサマ!!」

「証拠は?」

「……ありません」

ズルする必要が無い。

と言うか負ける要素がない。こと戦場の駆け引きに置いて地獄のような鉄火場を潜り抜けたフィールに不可能は無いのだ。フフン。

そう言えばと思い、ウエンデイがフィール達に質問する。

「超古代魔法文明……どうして超古代魔法文明では無いのですの?」

「魔術と魔法は全くの別物だからだよ。手順が確立し、理解されていれば魔術。要するに人間が到達し得ない領域の魔術を魔法と言うの」

「?? つまり……?」

「そうねえ、簡単な話。火を起こすのに魔術が無くてもマッチで事足りるでしょ？ 昔は火を起こす事態を魔法とされていたけど、手段が確立された瞬間、魔法ではなく魔術となる。ただ天空城は今も何故浮いているのか。今の時代で解明されていないから魔法って訳」

魔術では到達できない神秘、現在の時代の文明の力では、いかに資金や時間を注ぎ込もうとも絶対に実現不可能な「結果」をもたらすものを指して魔法と呼ぶ。

簡単な話、未だ人間が到達する事のない領域の魔術を魔法と呼ぶ。

「魔法の中にはまあ極めて色々あるけど、例えるなら並行世界の運用だったり、過去の逆行だったり、不老不死だったり、魔術師が追い求める真理ってのは神様の理論を究明する為ってのもある」

「不老不死まで……」

「永久の時間さえあれば解明出来なかった理論を全て知識として納められる。まあある意味魔法使いつてロクでもない奴だな」

グレンが付け足すがフィールは苦い顔をする。フィールも実際は過去への逆行に成

功した魔法使いでもあるからだ。セラはその言葉にあはは……と苦笑いしていた。

「まあ、あり得ざる奇跡の内包、人が空想できること全ては起こり得る魔法事象は何れも実現は不可能とはされてない。その気になれば空も飛べるし時間だって止められる。それでもあの天空城は何故浮かんでいるのかはまだ分からないって訳」

「へえ、そんなんですの。でも不老不死とか可能なんですか？ 悠久の時を過ごすのは誰にも不可能な筈ですのに……」

「さあ？ どうだろうね。現在は不可能でしょ。不老不死じゃなく転生とかなら理屈じゃ何年も生きられるんじゃない？」

実際そうやって生きている奴は居るし。

かなり酷く手強かったけど。不老不死なんて人間が到達すべき力ではない。神様のルールに背いた生き方はロクなものじゃない。因みに私もその1人だが。

そんな事考えていると馬車が急に揺れ出した。

「ちよ、ちよつと御者さん！ こんなルート、私たち予約してませんよ?!」

システイーナが慌てて前方の御者に駆け寄り、覗き込むが御者は黙々と馬車を操縦していた。

「道が間違ってます！　こんなに街道を離れて森に近づいたらー！」

通常、舗装されている街道は比較的安全だ。

舗装されている街道は国の政策で舗装が施されて為、魔獣除けなど施されているが、そこからずれてしまうと安全ではない。

この辺りに危険な魔獣の出現報告はないが、それでも街道を大きく離れた森には近づかない方が良いのだ。

「すぐに引き返してください！　早くー！」

皆の安全を考慮してつい声を荒げてしまうシステイーナ。

しかし、言われていている御者はシステイーナを無視して黙々と操縦をしている。

「ちよ………どうして……?!　早く止まって……！」

聞く耳を持たないのか。

ここまで言つて止まらない御者に違和感を覚えるシステイーナだがその時、馬車の左の草むらから何か近づいてくる音が聞こえてくる。

「……なつ、まさか?!」

システイーナが狼狽えた声を上げた、その時。

馬車を囲むように草むらから黒い狼が大量に飛び出して来た。

「シヤ、シヤドウ・ウルフ……?!」

シヤドウ・ウルフは猛獣とは違い、魔に関する力を持った魔獣だ。恐怖を感知して襲うかどうかを判断する賢い狼であり、その敏捷性は伊達ではない。

「あ、あ……う……魔獣……」

「そんな……どうしてこんな森に危険な魔獣が……」

リンやウエンディなどはすっかり怯えてしまっている。無理もない。温室育ちの子供にはあの魔獣は危険過ぎる。

「セラ先生、生徒達を任せますよ」

「あつ、うん」

「待てフィール。俺が行くわ」

肩を掴まれフィールはグレンを見る。

実戦経験豊富のグレン先生でも、こう言った類いは厳しいと思ったんだが、その顔は微塵にも恐怖を感じていなかった。

「おい、この犬っころども！ この俺の生徒たちに手を出そうとするたあ、いい度胸じゃねえか！ お前らはこの俺が直々に成敗してやる！」

グレンは馬車から飛び降りて華麗な着地をする。

だが、華麗な着地をした瞬間、グギツ……と言う音にフィールは頭を抱えた。

「だああああ！ 足挫いたああああ!!」

「グレン君！ 馬鹿なの!？」

「全く……少しでも信用した私が馬鹿でしたよ」

グレンの近くに降りるフィール。

風に流されるような脚を動かしながら、圧縮してポケットにしまっていた魔剣エスパードを取り出し、シャドウ・ウルフに斬りかかる。

だがその瞬間、近くから聴き慣れた声が聞こえてきた。

「《罪深き我・逢魔の黄昏に独り・汝を偲ぶ》」

「えっ?」

その詠唱は自分にも馴染みがある魔術。

白魔改【ロード・エクスペリエンス】だ。フードを被りながらその綺麗な片手剣でフィールと同じようにシャドウ・ウルフを斬り裂く業者の人が笑っていた。

棚引く綺麗な金髪にフィールは神妙な顔をしながら質問する。

「……セリカさん………何で居るんですか？」

「気分だ。それに、あの場所ならもしかしたら……」

「つつ！ とりあえず今は！」

「ああ、やるか」

精霊剣舞とエリエーテの剣撃がまるで流麗な踊りを見せるように生徒たちの視線を惹きつけた。

シャドウ・ウルフを根こそぎ殲滅した後、セリカは正体を生徒たちにも明かした。本当はこの日こそ、セリカが来て欲しく無かった日なのだ。フィールは内心、悲しい気持ちに陥っていた。

来て欲しく無かった。

だって今日が、この日こそが……

未来でセリカ叔母さんが行方不明になった日だから……

第21話

調査から5日が経過した。

大した危険は無い上に、此方にはセリカやフィール、セラに成績優秀のシステイーナがいるのだ。大した危険もなく、遺跡の全体を調査して時間が過ぎていた。

夜までにテントの準備を整えようとフィールはトコトコ歩いていると、グレンに肩を掴まれて森に引き摺り込まれた。

「……………グレン先生？」

「フィール……………正直に答えてくれ」

改まってグレンはフィールに対して真剣な眼差しを向ける。フィールも少しだけ真剣な顔をして、グレンを見つめていた。

「お前の訳わからない力、アレがなんなのか予想は付くか？」

「……………どうしたんですか急に？」

「いや、今……………お前に似た力っぽい何かを感じたんだ。幽霊みたいな奴がその像に座つてて」

「幽霊……………？」

私に似ている力を放つ幽霊？

そもそも、私はあの力が何なのかまだ分かっていない。未来から過去に飛ぶ際に記憶の一部が消えていたからだ。

「……………この力に関わっているのは……………多分ルミアさんと、銀の鍵」

だが、それはあくまでルミアの能力と元あった自分の力と混ざったからだ。自分に眠っていたあの力は未だ分からない。

「……………それ、ルミアに似ていませんか？」

「つつ！ ああ、てことは何知ってんのか？」

「いえ、多分私の力がルミアさんに似ていると言う事から推測出来ただけです。それ以

上はわかりません」

やっぱりだ。

私は多分、私自身の身体に何かを宿す魔術を行使した。だが、その力はルミアさんに渡された銀の鍵と魔術の次元が似ていたのだ。

だとすれば……幽霊の正体は心を喰われた……

「……これ以上はわかりませんね」

「はぐらかすな。お前の力って何なんだ？ セリカは古代の情報まで遡る力を持ってるって言ってたけど、それだけじゃねえだろ」

「私も分かりませんよ」

グレンもフィールもそれ以上は喋らなかつた。

どちらにせよ、フィールはルミアと同様に何かある事は確かだが、フィールはそれを聞かれるのを避けている。唯一、アルベルトから聞いたのは『時渡り』に成功した存在とは知ったが、それ以上は分からなかつた。

調査は順調に進み、5日目の夜になっていた。

システイーナを筆頭に他の生徒達は食事を作ったり温泉に入っていたりしていた。ご飯を食べ終えた（グレン先生とシステイーナを除く）女子達はセリカの魔術で温めた温泉に浸かろうとしていた。因みに2人のご飯はリエルが美味しくいただきました。

「……………!?!」

温泉に入ろうとしていたその矢先、何故かお湯の中に何か気配がしたかと思ったら何故かグレン先生が居た。幸い気付いたのはフィールのみ、ため息を吐きながらも息止めに必死になっているグレン先生を片目に背を向ける。

「……………また何やってんだこの人」

しようがないので気付かない程度に黒魔【エア・スクリーン】で空気を与えて指を出口の方向に指した。と言うか裸を見られるのに抵抗はあったので直視しないようにグ

レン先生を誘導する。

「ま、マジかフィール様！ マジでありがとうございます!!」

どうやら、上手く逃げられたようだ。

ため息が吐く程退屈しない先生な事だ……あつ、ちよつと待って？ あつちつてお母さ……セラさんが居る場所じゃあ……。

「《きゃああああああああああつ》!!?」

「ぬおおおおおおおつ?!」

……遅かった。

絶叫を即興改変して放つ【ゲイル・ブロウ】によってグレン先生は素っ裸のまま宙に舞って行った。

「フィールはまだ上がらないの？」

「もう少し浸かっている。私達が最後でしょ？」

「うん。私達は先に上がっているね」

ルミア達は先に温泉から上がって行ったが、フィールはまだ少しだけ浸かりたかった。精神的疲労も肉体的疲労も日頃の疲れもあったせいかな、長湯が基本的になっただけで済んでいる。

「ハア……………」

疲れた。

最近は何も浮かばない。まだ15歳の少女の精神は摩耗し始めている。ジャニスとの戦い、過去の現実、そして今を生きる世界でグレンとどう向き合うのが正しいのか。

セラだつてこの世界では別人。

けど、本当の家族のように接してくれる。

分かっている。

こんな気持ちは嬉しいと同時に薄れていってしまうような優しい記憶は過去にしかない。今の甘い世界で生きる事はもう僅かな時しかない事を。

終わりが分かっているからこそ、フィールはいつか別れの時を惜しんでしまう。

「……………結果、自己満足なんだよね」

過去を変える事は自己満足以過ぎない偽善だと噛み締めながらも、フィールはこの世界を守りたいと。

ただの自己満足以終わる偽善者なのだ。

「へえ、このくそ広い部屋が『プラネタリウムの天文神殿』が誇る大天象儀場か……………」

遺跡調査開始から六日目。

おそらく最終日となろうその日、一同はついに最深部である大天象儀場プラネタリウムへとたどり着いていた。フィールもその空間の広さに少しだけ驚いた。

「中々、広いですね」

これだけ広いのに汚れや埃があまり無い。

綺麗に磨き抜かれた半球状の大部屋の中心に、謎の巨大な魔導装置が鎮座し、その傍らには黒い石板のようなモノリスが経っていた。

「私は見たことはないが……ここプラネタリウムの天象儀はすごいらしいぞ？ グレン」

「あ、ああ……そうなのか？」

セリカはいつも通りだった。

グレンは少しだけホツとしていた。あの時、セリカには何故か余裕がなかった。まるで最初に会ったフィールの様に余裕がなかったように、迷子になって逸れた子供の様だったが、今はすっかり消えている。

「あの……先生？ せっかく『タウムの天文神殿』にやって来たんだし、この天象儀プラネタリウム装置で星空を見てみませんか？」

プラネタリウム
大天象儀上に足を踏み入れるなり、システイーナがそんなことを言い出した。

「はあ？ 星空あ？ めんどくせえな……」

「お願いします、先生！ 私……この天象儀プラネタリウムを見てみたかったです！」

「あつ、私も見たい！」

セラもシステイーナの意見に同意する。

いつもの態度とは違い、真摯にグレンに頼み込むシステイーナ。それもその筈、システイーナのお爺さまは天空の城へ到達を夢に見ていた。そして、この遺跡の古代式の転移魔方陣の可能性を書いたのはその人だからだ。

「うーん、どうしたもんかなあ……」

「いいんじゃないですか？ 私も見てみたいですし」

「んじやフィール、お前起動して」

「人任せですか。まあいいですけど」

フィールはモノリス版を操作して、起動させる

「——起動しますよ」

空間内に映し出される無数の星や惑星。

圧倒的な臨場感と迫力に一同全員が押し黙る。だがその凄さは誰もが眼で見分ける。まるで一つの世界に飛び込んだかのような。

「はあー、古代人つてのは……超高度な魔法文明を築いておきながら、時々、こういうどーでもいいところを大掛かりにやるよな」

「でも凄いよね。ここまでの物を作るなんて」

フィルムはその星空を見ながらも、触れていたモノリス版に目を向ける。何か感じたものがある。まるで、それに惹かれているような、口では説明できない何か、このモノリス版から微かに感じていた。

「あれ……？ まだ何か操作出来るものがある？」

ファイルの左眼が青く染まる。

右眼は既に青く染まって治らなかった。片眼だけだと思っていた変化が両眼に宿っている。ファイル自身も気が付いていないが、少しだけ好奇心もあり動かしてみよう。

「(これを……こうしたら、次は……こうして……何で、この手順を知ってるんだ私は?)」

ズキッ! と頭の中に痛みが走る。

この時の痛みはアレだ。力が暴走したかのような鋭い痛みで顔を顰め、操作する手を止めようとしたその時、ファイルは初めて異常に気がついた。

「(なっ……! 身体が勝手に……!?)」

操作する手を止められない。

無意識の内に身体が勝手に動いていた事に、無理に動かそうとするが、まるで腕を押しさえつけられて動かされているようでぴくりともしない。

「……フィールル？ お前、さっきから一体どうした？」

星空を見ずにモノリス版を動かすフィールルが妙に気になったグレンが、問いかけたが、フィールルの左眼が青く染まっている事に気がついたグレンはフィールルの元に駆け出した。

その顔は、何故か悲痛な顔をしていたからだ。

「おいフィールル！」

「グレン君？ フィールルちゃん……っつっ!?」

キン、キン、キンという音が響き渡る。辺りに突如、魔力反響音が響き……一瞬、床の紋様をなぞるように蒼い光が走った。星空が加速して回っていき、頭上の全ての星が動いていく。

「何……?!」

慌ててグレンが振り向く。

すると、そこには天象儀装置プラネタリウムが駆動していた。

「(な、なんだ……あの動きは……さつきと違う動きじゃねえか……!)」

何事かと呆気にとられるグレン達だが、頭上に浮かぶ星々が映らないくらいに回転し、銀線となつて無数の同心円を描き——やがて、天象儀装置プラネタリウムがゆつくりと動作を止め、星空が消えていく。

「なっ……!」

「おい、マジかよ……!」

そして、星空が消えたのと同時にプラネタリウム大天象儀場の北側の空間に、蒼い光で三次元的に投射された『扉』が出現していた。

「(あり得ねえ?! ああのモノリス版にはそんな機能は無かつた筈だ!? ファイルはどうやってアレを……!?)」

それを見たグレンは驚愕するが、それ以上に驚いていたのはセリカだった。知らない筈のあの光景がノイズのように頭に浮かぶ。

「回廊……馬鹿な……『星の回廊』だと……!?」

明らかにその『扉』は異質なものだつた。

扉と言うには扉の先が全く見えない深淵にでも繋がっているんじゃないかと言うくらいに異質だが、ファイルには悍ましいものに見えた。

「つつ………！ かはっ！」

動いていた身体は呪縛から解き放たれたかのように戻つた。

意識もハッキリしているし、身体は動く。グレン先生とセラの元に戻ろうとしたその

瞬間――

「………えっ？」

扉から無数の手が伸びた。

いや、まるで死神の手のように溢れ出た呪われたような手が次々と溢れ、セラは生徒達の前に立ち、魔術を放てる体制になっていた。

「なっ………！　ぐっ………!?」

黒い無数の手が扉からファイルに対して伸びていた。

余りの速さに躲す余裕が無く、その扉から無数に伸びた黒い腕がファイルの右手と胴体を掴み、引き摺り込んでいく。

「なっ!?　ファイル!!」

「ファイルちゃん!」

詠唱なんてとても間に合わない。

引き摺り込もうとする黒い腕からファイルを捕まえようと手を伸ばすが、駆け出すのが遅く、伸ばした手は届かない。

「フィール！」

「セリカ伯母——」

それに反応し、魔術で加速するセリカ。

扉に引き摺り込まれたフィールを追うようにセリカは扉に飛び込もうとする。

「この先に、何かが……！」

「待てセリカ！」

グレンの忠告は届かずにセリカは飛び込んだ。

フィールを捕まえようとするセリカはそれ以外に、何か知らない筈の事を知っていた。だが、それよりもフィールを救うためにセリカは飛び込んだ。

その瞬間、2人を引き摺り込んで扉はグレン達の前から消えていった。

「フィール！ セリカアアアア!!」

残されたグレンは叫ぶが、そこに2人は居なかった。

「ハハハ……」

セリカは扉に飛び込んでいた。

そこは広く、空気が淀んでいる。しかし、この場所は何処だか分かってしまった。

「アルザーノ帝国の……迷宮の50階層だど!？」

この先にセリカの失われた記憶の全てがある。

それが、直感で理解出来た。この場所は私の知らない記憶の道標だ。

「この先に、私の全てが……!」

そう考えた瞬間、セリカは下へ進もうと歩き始める。最早全てがどうでも良く感じた。失われた全てが取り戻せるならば、なんだっていいと思った瞬間、フィールの言葉

を思い出す。

『私……やっぱり……寂しいよ……独りは辛くて……悲しくて……』

セリカの足が止まる。

あの時、幸せにはなつていけないと言つたフィールの言葉の裏をセリカは感じ取つていた。何故今、どうして今それが頭を過つたのかは分からない。

けど、あの時の言葉を思い出す。

弱々しく呟いて聞こえた言葉は子供相応の弱さと震えた体でセリカに流した涙が今脳裏を駆け巡るようだ。

『ひとりに……しないで』

「つつ！ ……フィール？」

辺りを見渡してもフィールは何処にもいない。

あの時、黒い腕に掴まれて引き摺り込まれたフィールの魔力を感じない。いや、恐らくはこの辺りには居ないのだ。

「ははっ、何やってるんだ私は……」

この迷宮には何かがある。

セリカ自身に關する何かが存在する。だが、それよりも扉を潜つたのはフィールを助けたかったからだ。それ以上の感情を出せば、フィールを見失つてしまいそうだ。

「自分探しか、フィールか、……考えるまでもない事だな」

落ち着きを取り戻したセリカはため息をつく。

間違える所だった。間違えてしまえば後悔しかないのは目に見えていた。不思議と頭を過ぎる使命の声は掻き消えていた。

セリカはエリエーテの劍を持ち、フィールを探す為に下の階層へと歩き始めた。

「くそっ！ やっぱ俺や白猫でも無理か!!」

ひたすらモノリス版を操作しているが、扉を開く為の操作方法が分からない。何度、何度やっても扉が開く法則性が見つからずに、焦っている。

「グレン君……」

「考えろ、ファイルはどう動かしてた、何か法則が——」

「グレン君!!」

「っっ!」

セラは叫んで両頬を軽く叩く。

落ち着けずに、愚者になったかのような集中を切らして落ち着かせる。

「落ち着いて、焦りは一番解決から遠いんだよ? 少し、落ち着いて」

「だけど……!」

「私だって不安だよ。だけど、セリカさんが行ったなら少なからず落ち着くだけの気持ちはあるでしょ?」

そう言いながらも、セラの腕は震えている。

フィールやセリカが心配なのはグレンだけじゃない。セラは冷静だが、冷静で居なければグレンと同じ、余裕がない状態で不安を煽るだけに過ぎないからだ。

「セラ……悪い、大分冷静じゃなかった」

「……とりあえず、考えよう。先ず、フィールちゃんがどうして引き摺り込まれたのか？」

「……異能に近い何かしらがあるからだろ」

「うん。それは私も同意、何かに惹き寄せられたなら、フィールちゃん達は多分、セリカさんが言ってた『星の回廊』に何か関係がある」

先ず状況確認だ。

とりあえず生徒達全員、キャンプ地に戻り話を始めた。あの場所で長く居ても狂霊達が湧き出てくる為、危険と判断した。

「セリカも何で名前を知ってたんだか、まあそれはいい。問題はあのモノリス版の操作がプラネタリウム以外の方法が分からないっつゝ事だな」

「……先生、もしかしたら出来るかもしれません」

「はっ？ 白猫、何言ってる……」

「ルミアの力が有れば、出来るかもしれない」

「……いや感応増幅だけじゃ……いや、出来る事を試すしかないか。悪いルミア、協力してもらえるか？」

グレンは真剣な顔でルミアに問う。

もし開けるなら、ルミアの力はただの感応増幅ではない。それが確定する事になるが、それを今気にしている暇はない。

「はい。でも先生、その後はどうするんですか？」

「俺一人で……いや、俺とセラ、リィエル……後はルミア、白猫、お前らも来てほしい。ルミアは悪いが半強制的だ。ルミアの力で開けたとしたら、帰り道もルミアの力が必要になってくるからな。白猫に関しては強制はしねえ、生徒達を守ってほしいが、下手に気を使えばアイツらが怒りそうだしな」

わざわざ遺跡から離れた以上、大した危険は訪れないがそれでもあんまり危険な目に

合わせたくないのはある。だが、狂霊程度の問題なら自分達より2人を優先しろと言うだろう。

「行きますよ。私だつてファイルが心配なんだし」

「そうか……まあ言うと思つてだけどな」

セラとグレンは立ち上がり、準備を進める。

自分の装備は魔銃ペネトレイターと何本かの秒針、愚者のアルカナにファイルが渡してくれた『切り札』だ。少し手持ちが少ないが、どうしようもないので仕方ない。

「ギイブル」

「……何ですか急に」

「お前筆頭にこの場所を任せる。頼めるか？」

「！……誰にモノ言つてるんですか」

ギイブルは鼻で笑い、カツシユ達もそれに同意していた。ファイルが引き摺り込まれた時、自分達は何も出来なかつたのを悔いているが、まだ生徒だ。どうしようもない事

だ。

「さっさと2人を連れて帰ってきてください」

「先生、俺達なら大丈夫だから、2人を頼みます」

「私からも、お願いします」

「お前ら……」

カッシュやウエンデイは頭を下げる。

生徒達に責任はないが、それでも友達を思ってくれている。グレンはフツと笑い、ならこのグレン大先生が戻るまで任せたわ、と告げて歩き出す。

「んじや行きますか……アイツら連れ戻しに！」

「うん！」

「了解」

「はい！」

「行こう！」

このメンバーなら宮廷魔導師団も顔負けだ。
グレンを筆頭にセラ達を連れて再び天象儀プラネタリウムの場所へと向かっていった。

第22話

グレンたちが《星の回廊》の扉をルミアの異能で開き、光の扉を潜り抜けた先に、グレンとセラは顔を軽く擧める。その光景を見て、システイーナとルミアは呆然とする。グレンたちの近くには、プラネタリウム大天象儀場と同じように小型のモノリスがあり、帰る時はルミアの力があれば可能だ。それに関しては安心していたが……

「なんだこりゃ……あ……」

それ以上にこの場合は悲惨と言わざる得ない。目の前には大量の干からびた死体が、無数のミイラが転がっていた。

「死後から大分経ってんな……下手したら数十年以上は」

それも姿からして魔術師だ。

グレンやセラ、リエルは宮廷魔導師だった以上、そういう耐性はあるが、システイーナやルミアは別だ。ルミアは強固な精神を持っているが、システイーナからすればあまり耐性がある訳でもない。

「セラに…白猫、使えるか？」

「私は大丈夫。システイーナちゃんは？」

「私も…大丈夫です。少し落ち着きました」

「マインド・アップ」で精神を強化して現状に耐える。

いい判断力だ。無理だと思った時は無理に強がらずに魔術を使う事も大事だ。やはりシステイーナに関しては魔術の取捨選択が上手くなってきた。

「システイーナちゃんは左、私は右を中心に」

「はい」

「『我に従え・風の民よ・我は風統べる姫なり』」

2人は黒魔改「ストーム・グラスパー」で周囲の風を操り、感知する。この場所は広

過ぎる。感知でもしなければ張られた罫も気付かない可能性もある。グレンとの特訓の時、実はセラもシステイーナの指導をしていた。グレンは戦場の勘こそ教えられても、軍用魔術を教えられるのは限度がある。残念ながら魔術のセンスはからつきしなのだ。

セラとシステイーナは魔術の特性が似ている。システイーナに関しては素質だけならアルベルトすら超える。いつかセラやフィール以上の風使いになるだろう。

「この先に階段があります。ただ、階段の先までは分からないんですけど、多分階層みただい下に通じてます」

「マジか……多少広い事は予想してたが……フィールとセリカを見つけるのに大分時間がかかると」

「グレン君、話はあと。……来たよ」

死んでいる筈のミイラが動き出す。

この場所には何かあるとは思っていたが、やはりこの手の類いは当然と言うべきだろう。

『憎イー！！憎イー！！憎イイイイイイイイ！』

女が片腕を物凄い速さで動かし、ゴキブリのような挙動と素早さでグレンへと襲い掛かる。中々グロテスクな光景だが、グレンはそれを躲し詠唱を紡ぐ。

「《紅蓮の獅子よ・憤怒のままに・吠え狂え》！」

黒魔【ブレイズ・バースト】でミイラを吹き飛ばす。

この程度は想定内、問題はこのミイラがどれだけの力を持っているかを調べる為に魔術を使ったが、これならルミアでも対処可能だろう。

「《明き光よ・かの者を導け・優しき祝福を》」

ルミアの白魔【セイント・フラッシュ】がミイラ達の足を止め、その瞬間にリイエルが斬りかかる。システイナは風の魔術でミイラを吹き飛ばし、セラが上手く後方支援に回っている。下手したらこのメンツは帝国宮廷魔導師団に匹敵する。

「白魔〔セイント・フラッシュ〕……司祭とかが使うような魔術を使うとは俺も思わなかったわ」

「……実は戦い方をフィールさんから教えてもらってるんです。私は前線より後方支援の方が強さを出すって言われて、後方支援系の魔術を教わったんです」

グレン達はフィールから教わっている事に驚いているが、リエルが「フィールは普通に私より強いし、私も朝鍛えてもらってる」と口にしてマジかと呆然とする。

「アイツは確かに魔術のセンスがアルベルト並みに凄いからな。……てか司祭や教会関連の魔術なんて何処で知ったんだよアイツ」

「フィールちゃんは靈感強いから覚えたんじゃない?」

「じゃあ何でリエルより強いんだよ……? まあいい、フィールやセリカならこの程度で死なないが、心配に越した事はねえし」

フィールもセリカも自分より強いし、セリカは兎も角フィールに関してはアルベルトのような戦闘スタイル。基本に忠実な攻めと狡猾な騙し討ちで翻弄し、確実に優位に立つスタイル。少なからず正面切って戦える猛者は少ないだろう。

「大丈夫、フィールちゃんは死んでない。死んではいない事は分かるから」

それに関しては絶対的な確信があつた。

セラは小指に巻かれた赤い糸を指を見る。それに対してリイエルは質問する。

「セラ、小指のソレ何なの？」

「一種の魔導具なんだって。赤い糸に繋がれた人間は結ばれるって話を魔術で再現したらしいんだけど、結ばれた人間の安否で糸の縛りが強くなったり、死ぬと切れたりするってフィールちゃんがクリストフ君に教わったんだって」

「あー、アイツ結界や呪詛に詳しいからな」

クリストフは設置、時間差、呪いについては結界と何かと精通している。フィールも保険としてそのような魔術を覚えるのに何の不思議もない。ただ、フィールは普通に考えておかしい。いつも言及してもグレンには話さないし、周りの連中はフィールの正体を知っているにも関わらず、グレンにだけは教えてくれない。グレンはそこだけ引つかっていた。

「……！揺れてる」

「セリカだな。少し急ぐぞ」

だが、今は気にしても仕方ない。

これだけの圧倒的な魔術の余波はセリカしか考えられない。グレン達は進む足を早めながら、最下層へと進み始めた。

「がっ……ああ……！！」

「貴女は何者？何でグレンの近くに居たのかしら？」

迫り来る影に首を絞められて呼吸がままならないフィール。先程、黒い影の無数の手によって引き摺り込まれた。そして、今まさに死ぬ一歩手前まで来ていた。

黒い影の手に首を絞められ呼吸も詠唱も出来ない。酸欠になりかけて計算すらままならず、【女帝の世界】が使えない。

「セラが生きている事自体が想定外なのに、これ以上未来を崩されたら修正出来なくなる。いつそこいで……」

「つつ……!!」

ギリギリと絞められる苦しさから、セラが死んでいる事の方が想定内と言う目の前のルミアに似た邪神のような紫の羽をした女を睨みつける。

「ぐっ……あああ!!」

目を見開いて、怒りが溢れ出すと左眼は青く染まり右眼は中途半端に青に染まりかけた。瞬間、自分の背中から紫色の羽が一瞬だけ顕現され、首を絞める無数の影手を全てがまるで掴む事に耐えれなくなったかのように崩れていった。

「つつ!?」

「ゲホッ、ゲホッ！ハッ、ハッ、ハッ……!」

呼吸するだけで肺が傷むくらいにフィールは一瞬、死の走馬灯が見えた。

心臓の鼓動が聞こえるくらいい身体は限界を越えかけた。人間には死の境界線がある。限界を越えれば越えるほど、境界線から徐々に死へと近づいていく。呼吸もままならず、無理矢理力を解放したフィールの口からは大量に吐血していた。

「ルミア……じゃないな。誰だアンタ……」

「私の台詞よ。貴女は何者？」

「初対面でいきなり殺そうとした奴に言う訳ないでしょ……」

ジャキ、とフィールの右手には赤いペネトレイターが構えられていた。呼吸を整え、傷んだ肺をゆっくり回復させながらも目の前の存在に最大の警戒をしていた。

「つつ……！が……はっ……!?」

「ドクンツ!!と先程の反動で胸を押さえた。

フィールの中に眠っている力を無理矢理使ったのだ。普段は鎖で雁字搦めにされてくるくらいに抑え込んでいる力だ。グレン達に会うまではそんな事は無かった。最近に

なってその力が器から溢れてしまうほどに大きくなっていった。

「……！ 『魔銃ペネトレイター』 ……？」

「……………」

「何で貴女が……それはグレンの……」

よくよく見ると、存在が希薄すぎる。

あの時の魔力も邪悪なものを感じたが、今はそれさえも薄れている。思念体？ 幻影？
【女帝の世界】に必要な因果律さえ捉えきれない。そこに居るのは分かっている。

「がっ……………■……………っっ!？」

頭が割れるような頭痛がフィールに襲いかかる。脳が直接揺らされるような感覚、気が遠くなるような感覚にフィールの右眼が蒼く染まる。

引き金を引こうとした瞬間、その存在に向けた引き金が重くなる。自分の意識が停止し、引き金を向けたまま硬直する。

『馬鹿』

『どうして……貴女達はいつもそうなのよッ!? 言ったでしょう!?! 私は、貴女達のそういうところが大嫌いなんでっ!』

『一つ。……貴女が、貴女自身でもあるその『鍵』を、心から“与えたい”と思える人が……いずれ貴女の前に姿を現すかもしれない。……いい? 絶対にその人に与えては駄目よ。貴女が貴女自身の意味と覚悟をもって、その『鍵』を使うの……ッ!』

『……最悪の結末を逃れたいんだつたら、その『鍵』を使いなさいッ!』

これは……何だ?

頭の中に流れるこの記憶は。この胸を刺す悲しみは。必死にも自分に叫びながらも、悲痛な顔をしながらも説明する知らない貴女は?

これは何だ。

身体の中で『銀の鍵』が疼いている。知らない、知る筈もない。何処かで会ったかもしれないが私はこんな記憶を知らない。ルミアさんは、私に何を……?

『私は……貴女を知っている……』

「!」

気が付けば声が勝手に出ていた。

そしてそれは自分の声では無かった。透き通るような綺麗な声で最後に笑って私をこの世界に導いた……未来のルミアの声だった。

『^{ナムルス}名無し……あの時、結局ダメだった。私だけが生き延びて……利用されて……』

「つつ……貴女、まさか……！」

『だから、私はこの子に全てを託した。……今の私がこんな事言える義理はないけど……』

蒼い瞳がナムルスを捉える。

彼女は思念体だ。にも関わらず、頬に優しく触れる。ナムルスはそれに驚愕し冷や汗をかきながらもファイルの瞳を逸らせない。

『私がこうならないように……あの子を。そして……この子を信じてあげて……』

バチツ！と言う音と共に頭を押さえて右眼が金色に戻る。

激しい頭痛に顔を歪ませるが、それ以上にフィール自身も驚いている。今は……『未来』のルミアさんだ。

『銀の鍵』の残留意思か、謎の力の影響かは知らないが、その記憶を垣間見た。未来のルミアさんはナムルスと面識がある。いや、近しい存在だと言う事に目を見開いた。

「ハア……ハア……ハア……」

今のは一体何なのか？

私の身体の中は今どうなっている？ 『銀の鍵』は未だ身体の中、溢れ出し暴れる力は収まっているが、それを使おうとしただけで、このザマだ。

私は今……どういふ存在なのだろう？

「つつ、ああ……もう!!なんで貴女がこの世界に来てるのよ!!」

「やっぱりここは……私の知っている過去の世界線じゃない。そう言う事ね？」

「……貴女の進む未来と、この世界の未来は違い過ぎる。大体、セラが生きてる自体、未来が崩れたって言うのに……」

「私の世界はグレン先生が真っ先に殺されたからね……」

それを聞いて目を見開き頭をグシャグシャとしながら抑えるナムルス。どうやら聞きたく無かった情報のようだ。この世界は余りにもズレ過ぎている。私がこの世界に來た歪みによつてのものか、私の世界が歪んでいたのか。

「何で……」

「？」

「何で……貴女なのよ……！貴女がこの世界に來れば……！！」

「ストップ」

「！！」

「言わなくても分かるよ。私だって、命の終わりくらい分かる」

ファイルは分かっているのだ。

先の、遠くない未来で起きる出来事。

ファイルは殺される。否、歴史を変える為には必ずファイルが死ななければならぬ状況が訪れる。それは確定事項であり、ファイル自身、それを理解していた。

「だから!!その生き方が私は嫌いなものよ!!貴女は聖女にでもなったつもり!?間違ってる、そんな生き方は呪いでしかない!!貴女もわかってるんでしょ!!」

「分かってるよ……。だって、もう数えきれないくらいの絶望を知ったんだから」

「自分を押し殺してまで、そうまでして未来を変えるですって!?!無理よ!!今の貴女には絶対に無理よ!!『鍵』も、『その力』さえ満足に使えない!!ただの無駄死によ!!」

「私だって!!」

フィールは押し殺していた感情を爆発させた。

ナムルスは思念体であるにも関わらず、フィールはナムルスの襟を掴んで叫び出す。

「私だって……死にたい訳がない……死にたくないよ……」

それはフィールの本音だった。

死ぬのは怖い。あの世界で絶望し、狂いそうな精神で人を殺して、それでもなお生き続けた理由は単純だった。

一人が死ぬ事で全てが救われる。

聖女さながら素晴らしい奇跡だ。誰もが拍手喝采モノかもしれない。経った一人で

世界が救えるなら安いモノだろう。

だが、そんな生き方はただの呪いだ。

誰かの為にと告げた言葉には、全て救うと言った言葉の中には自分が含まれない。そこに幸福もなければ絶望もない。あるのはただの無だ。無意味で無価値で人形のように、生きる価値すら見出せない人の果て。救われない人間は人間じゃない。ただの機械だ。

「ナムルス……貴女だつて分かつてるでしょ？この歴史は既に揺らぎ始めた。世界が歪みを許す時間は限られてる。世界が動けば、修正力に全てが殺される」

「っ……………」

「私に出来るのは修正力に手を加えて、託すしかない。私は居ちやいけない。それこそ抑止力が働く」

世界には抑止力が存在する。

抑止力は基本は働かないが、ターニングポイント歴史の揺らぎが起きる場合は話は別だ。特に、未来のフェジテはそれに引つかかる。そこだけはフィール自身が変わることはできない。

ナムルスの襟を離し、ただ俯く。

悲痛な顔をしていながらも死ぬ覚悟を持つフィールがどこまでも気に入らない。そう告げたかった。けど、この子はルミアとはまた違う。助かる可能性があるのに継らずに聖女面するルミアと助かる可能性が無い上に人柱にならなければならぬフィールとじゃ、同じ状況ですらない。

「……自分が招いた事、自業自得なんだよ。だから、いいんだよ」

「……やっぱり、私は貴女を好きになれないわ」

「知ってたよ」

多分、その生き方を気に入らないと未来のルミアさんにも言っていたのだ。やっぱり、優しい人だ。ルミアさんとは別ベクトルの、正反対の優しさを持つ人だ。

「セリカ伯母さんを探して、ここから出ないと」

「無理よ」

「えっ？」

「入るまでならまだしも、既に抑止力が微弱とは言え動き始めてる。グレン達は兎も角、貴女は……」

ズウウウウン!!

地面が揺れる。この魔力、魔術の余波だけでここまで揺れる程の魔術を使えるのは一人しかない。

「セリカ伯母さん……!」

「なっ、まさか『門』の前まで!?!」

フィールはセリカの下へ走り出すとナムルスも隣を浮きながら走り始めた。ナムルスにもセリカに対するナニカがある。だが、そんな事を気にする暇もなくフィールは走り続けていた。

セリカが無数の亡霊・亡者たちを相手に戦っていた。無限に湧いてでる亡者がセリカに襲い掛かっており、セリカが倒し続けている。グレンが気にかけていたよりも冷静だ。

「《邪魔だ》」

たった一言の呪文で「プラズマ・カノン」、「フリージング・ヘル」、「インフェルノ・フレア」……上位のB級軍用攻性呪文アサルト・スバル三つを同時に放つ。その圧倒的なまでの魔術行使、正に『灰塵の魔女』に相応しい名だ。

「全く……いつまで湧き出るが知らんが邪魔くさいな」

『アアア……憎イイ、憎イイ!!』

「私の過去を知っているのか知らんが、どうやらロクでもない記憶のようだな。確かに知りたい気持ちはある。だが、そんな事今はどうでもいい」

セリカは冷静だった。最近、記憶のソレに悩まされていたセリカはこの場所が唯一の手がかりにも関わらず、冷静を貫いていた。

指を鳴らすと白魔「セイント・ファイア」によって全て焼き尽くされる。所詮は亡者、浄化系の魔術に弱い。セリカは案外冷静な状態のまま、この階層を突破した。

「セリカ！」

「ん？グレンたちか？」

セリカが振り返る。

追いついたグレン達が、セリカの下へとたどり着いた。

「どうやって入ったんだお前たち？」

「そりゃこっちのセリフだ！てかお前、フィール救う為に単独で乗り込んだと思ったら何でこんなところに一人で来てんだ！」

「フィールを探してるんだよ。だが探知の魔術はエテリオ・コーティエンゲ靈素皮膜処理で思った以上に上手くいかなくてな。セラみたいに風の物理感知が出来れば良かったんだが……」

繊細なパラメータを読み取る黒魔改「ストーム・グラスパー」は超パワー型のセリカには不向きだ。魔力の質が高過ぎて竜巻を起こしかねない。制御力はずば抜けてるが、不向きに変わりはない。

そして気が付けば最下層まで来ていた。

明らかに怪しいのはあの『門』だし、あの『門』の先にはセリカが探していた失われ

た記憶が存在する。

「エテリオ・コーティンダ霊素皮膜処理された『門』じゃ、「イクステインクシオン・レイ」でも無理だ。物理的に開かれる気がしない」

「その『門』の先にフィールはいるのか？」

「いや、私の記憶の答えがあるだろうが……それよりフィールの方が優先だ」

「……………まあそうだな。隠し通路とかあるのかもな……………」

「ああ……………未だ気にはなっているが、この『門』の先に私の全てがある筈だが、まだ残留的な記憶しかない。隠し通路の記憶とかあれば良かったんだがなあ」

セリカは軽く『門』に触れる。

本当は調べたいし、記憶も取り戻したい。フィールが居なければ必死の形相でこの『門』を開けようとしただろう。いつそ無理矢理魔術で記録を読み取ろうかと考えたセリカが門に触れた瞬間——

『その尊き門に触れるな、下郎共』

声が聞こえた。その声は冷たく、凍えるような寒気と、存在の格が違い過ぎる事を嫌でも理解してしまう。グレンとセラは身体を強張らせ、セラは無意識にグレンの服を掴む。身体が戦闘を拒否している。システイーナやルミアも同様、これまでの強敵と会わなかったらその時点で卒倒していただろう。

『愚者や門番がこの門、潜る事、能わず。地の民と天人のみが能う。——汝等に資格無し』

「つつ——!?」

この場に居る全員がその存在に圧倒的なまでの死を連想させる。存在の規格が違い過ぎる。どんな魔術を放とうが、どんな剣術を挑もうが容易く捻じ伏せられる。

セリカは冷や汗を掻き、グレンとセラはルミア達を背に警戒を上げ、リエルは既に剣を構えていた。だが、まるで意味などなさない。警戒したところで目の前の存在に通用すらないだろう。

「……はっ、誰だお前」

そんな中、沈黙の時間を切ったのはセリカだった。冷や汗をかきながらも冷静だった。かつて邪神を倒したセリカの経験測でもこの存在には警鐘を鳴らしている。

「まあお前が誰だかなんて今はいい。私は黒髪の魔術師を探してる。お前、見なかったか教えてくれよ」

『……貴女は……』

セリカを認識したららしい魔人が、不意にその威圧的な雰囲気や緊張感を緩めた。それはまるで知り合いに会ったかのような雰囲気や魔人は口を開いた。

『ついに戻られたか、セリカ空よ。我が主に相応しき者よ』

「……は？」

突然名前を呼ばれたセリカは困惑する。

その存在は明らかに格が違う。それは今のセリカより恐らく上だ。にも関わらず、この存在はセリカを知っている。

『だが……かつての主と今の貴女では比べるまでもない。今の貴女にその門を潜る資格無し……故に、お引き取り願おう』

「……お前も、私の事を知ってるのか？」

『……かつての主であれば、今の汝に用は無し』

記憶が無いから知らないというのに失礼な言葉に苛立ちを隠せないが、自分の頭に手を置き深呼吸する。大分失礼な奴だと思いつつも、今の心境を述べ、状況を質問する。

「私が誰で、何だったのか知りたいのはあるが今じゃない。私はフィールが何処にいるか聞いてんだ」

『フィール……？ああ、もしや【黄昏の魔術師】か？』

「【黄昏の魔術師】？……黒髪で目が金色で、風使いが特徴ならフィールだが……」

『是、その者こそ【黄昏の魔術師】だ』

黄昏？その意味は分からないが、フィールは【黄昏の魔術師】と呼ばれ、黒いこの存在も知っている。明らかに格が違う筈にも関わらず、コイツはフィールを知っている。

「んじや話は早い。フィールが何処にいるか分かるか？」

『否、だがこの『塔』にいる事は確かとも言える』

「何だ……知らないのか。フィールは何処にいるか心当た——」

『故に、この『塔』に入った時点で、我は排斥対象である【黄昏の魔術師】を排除する為に抑止力にて召喚された』

「……何？」

セリカは眼を細め、その言葉に魔人を睨むが魔人はこの場に現れた理由を述べた。その理由とは……

『我が召喚された理由はただ一つ』

——
【黄昏の魔術師】フィール||レィダスを殺す事である

フィールを殺す為に召喚された謎の魔人。

この時はまだ、ナムルスにしか知らなかった。『抑止力』は小さな歯車の音を立て、回り始めていた事に。

第23話

『我が召喚された理由はただ一つ』

——
【黄昏の魔術師】を殺す事である

その言葉を聞いてグレン達は硬直した。

今、何と言った？黄昏の魔術師はフィールの事だ。だが、それ以上にフィール……
ダスと言う名前、そしてフィールを殺す為に召喚されたこの魔人。

「フィール……レードス、だと？」

『如何にも、我はフィールレードスを殺す為に『抑止力』より呼び出された』

「フィールが……はっ？いや、どういう意味だよ……！」

『これ以上語る意味無し』

グレンは突然の事で困惑する。

意味が分からない。フィールがグレンと同じ名前を持つ事も、この魔人がフィールを殺そうとする事も理解する事が出来ない。

『命が惜しくば疾く失せよ。この門に触れたその不敬、一度だけ免罪とする。だが、二度はない』

「だから、俺はその理由を聞いてんだよ！」

『去るがよい。汝に答える意味無——』

魔人が言い切る前に灼熱の業火が魔人を呑み込む。

放ったのはセリカだった。事情は知っていると見え、これ以上の問答をさせようとしなかったのもあるが、それ以上にフィールを殺そうと言う目的がある以上、この魔人は敵だ。

「せ、セリカ!？」

「いや悪い。フィールの敵っぽかったから……つい」

「いや、ついじゃねえよ!?! ついで出す火力じゃねえ!?!」

「まあ悪い悪い。よし、フィールを探すぞ」

「……ハア、分かった分かった。フィールに直接聞くしかないか……」

頭を掻きながらグレンはため息をついた。

どの道、フィールが何故レーダスの名前を持っているのか、何故魔人に狙われる理由があるのか。フィールから直接聞き出す事にして、この場から離れようとした。

『……愚者の民が蔓延る世界に居たとは言え、かつての力とは行かぬが健在とは、我も見誤ったものだ』

「なっ………!?!」

灼熱の業火に焼かれた筈の魔人が平然と立ち上がる。

セリカの黒魔【プロミネンス・ピラー】は間違いなく当たった筈だ。それこそ、死体すら残さないくらいに強大な力だ。

『我も未だ未熟、一つ持っていていかれるとは……』

「どういう原理だよ……！再生……回復……いやまるでそれが無かったみたい……！」

「リィエルちゃん！二人を守って！」

「わかった……二人とも下がってて！」

「う、うん！」

魔人の両手に剣が二本出現する。

赤い魔刀、黒い魔刀、どちらも異質さを醸し出している。だが、セリカのやる事は変わらない。

「《消えろ》」

『……見戯』

セリカの黒魔【プラズマ・カノン】を黒い魔刀が斬り裂いた。そもそも、B級軍用アサルト・スベル攻撃呪文の【プラズマ・カノン】は【ライトニング・ピラス】の数十倍にも及ぶ出力と威力だ。そしてセリカが放つそれは大砲と言うより、雷そのものを凝縮した雷光に近い。

だが、魔人の魔刀は容易くそれを斬り裂く。

B級軍用攻性呪文アサルト・スベルは何より對抗呪文カウンター・スベルが存在しない。にも関わらず斬り裂いたあの魔刀は恐らく……

「魔術そのものを打ち消す魔刀か？ 赤い魔刀もなんかヤバいかもな」

「セリカ、逃げるぞ！ それが本当ならお前と相性が致命的に悪い！」

『聡いのは変わらね……だが愚者の牙を頼るその凋落ぶり、空よ、貴様セリカは何処まで堕ちた……！』

「《失せろ》」

セリカは黒魔「フリージング・ヘル」で絶対零度にも等しい凍結結界で呑み込もうとしても黒い魔刀がそれを斬り裂く。

確かにグレンの言う通り、セリカと魔人の相性は最悪だ。セリカは超パワー型の魔術師、下手な小細工を弄する前に圧倒的火力で潰す強者だ。だが、魔人は圧倒的火力であるが、黒い魔刀がそれを容易く斬り裂く。これ程の相性の悪さはグレン並みだ。

だが、逃げた所でフィールがこの魔人と出会わないとは限らない。セリカはそれが分かった上で、魔人を退けようとする。

「これも駄目、ならこれはどうだ？」

指を鳴らすと魔人が立つその場所が黒く染まる。

召喚儀「ゲヘナ・ゲート」現世に縁なき存在を問答無用で虚無へ墮とす外法、白魔「セイント・ファイア」のように浄化を与えないそれはあまりの外道さに禁呪指定されたものだ。

『虚無の怨嗟……失望したぞ空。虚無へ墮とす事すら躊躇わない惨虐さ、かつて王者の剣を持つ汝からは誇りすら感じられぬ。汝は何処まで堕ちた……！』

地面に黒い魔刀を突き刺す事で虚無の門は消え去る。

魔人は一瞬さえあれば、容赦なく魔術を斬り裂く。恐らくだが、「イクステインクション・レイ」でさえ通じないだろう。

魔人がセリカに刃を向け、加速する。

「セリカ！」

「……《光れ》」

『ぬう……!?!』

セリカが呟くように魔術を唱えると魔人の目の前で激しい閃光が目を晦ます。魔人はそれでも魔力を感じ取り、赤い魔刀で目の前のセリカを斬り裂く。

「それは幻影だ阿保」

『何っ……!?!ぐっ……!?!』

セリカは白魔〔セイント・フラッシュ〕で目を潰した瞬間、詠唱無しで「イリユージョン・イメージ」とすり替わり、背後から劍姫エリエーテの技量を「ロード・エクスペリエンス」で引き出し、魔人の首を斬り裂いた。

『凋落したとは言え空か……まさか二つ持つていかれるとは』

「首を斬った筈なのにくつついてるし、死んでない!?!」

「どういう事だ……? 感触はあった筈。不死身かアイツは……」

「二つ……?」

システイーナはその言葉に引つかかる。

黒い魔刀、赤い魔刀、そして不死身。あまりにも類似点が多いがそれはある物語に登場するそれにまるでそっくりなのだ。

『兎戯と言つた事は撤回しよう。だが此処で汝等を逃がすわけにはいかぬ。よつて、生かしては歸さぬ。』

そう言つて魔人は何やら聞き取れない言語で呪文を唱え始める。

すると、魔人の頭上に、太陽にも似た巨大で強大な熱の球体が形成されていく。馬鹿げた熱量が、この空間を支配し、グレンたちを照らしていく。

「なつ……コイツそんな力があんのか?！」

「【愚者の世界】を使うか? いや、だが今対抗出来るのはセリカだけだ! ここで魔術を封じたらあとが続かねえ……! どうする!」

セリカも驚愕しているが、その魔力は核兵器にも等しい。

グレンの予想ならこれは魔術である以上、【愚者の世界】を起動させれば放つのを防げるが、問題はこんなもの放たれたら、セリカはまだ防げるが、グレン達が無事ではすま

ないと言う所だ。

「っ……！《其は摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象と理を紡ぐ縁は解離せよ》！！」

即座にセリカは黒魔改【イクステインクシオン・レイ】を放つが、強大な太陽が墮ちてくるのを辛うじて防いでる程度だ。五素まで乖離する究極の攻性呪文アサルトスペルは太陽に呑み込まれ、膨らみ始める。

灼熱の球体は暴発寸前だ。

魔人は自分の被害を防げるが、セリカを除いた全員は魔術で防ごうが紙障子に等しいだろう。

「……………っつーヤバっ…!!」

「くっ……………《極光の隔壁よ》!!」

セリカが張った黒魔【インパクト・ブロック】でドーム状の結界を形成すると同時に、灼熱の球体は爆発した。

視覚が白く塗りつぶされる。

知覚が熱に浸食される。

まるで太陽そのものが出現したように。

熱が凝縮し、解放した魔力の波は暴風となってその場にいた者たちに無差別に襲い掛かった。

「ぐっ……ああ……」

グレンとセラはシステイーナ達の前で風の結界と光の障壁を張ったが、それでも防ぎ切れなかった。セリカは自身に「トライ・レジスト」を強固に張っては居たが、衝撃に血を吐き右腕が火傷で爛れている。

「ぐっ……チツ……なんつー余波だよ……」

「先生!?!」

「グレン、セラ……!?!」

「マジで……キツいつての……」

「うっ……みんな大丈夫？」

身体を張って止めたが、衝撃は防ぎ切れなかった。

戦えなくはないが、それでも万全とはいかない傷にグレン達も余裕が無い。セリカはエリエーテの剣を持つてはいるが、恐らくは近接戦闘は半減もいい所だろう。

その中で無傷の魔人が全員を見下ろす。

『……今のを防ぐか。ならば、もう一度だ』

その絶望的な状況で魔人は最悪な答えを出した。

魔人の右手には再び灼熱の球体が浮かび上がる。セリカの魔術で完璧に防げないあ

の魔術が再び放たれる。

「嘘……だろ」

『神妙に逝ね。』
◆◆◆
『』

誰もが、死を覚悟したその瞬間

魔人の球体が焼き尽くそうとしたその瞬間。

カチリと音が響き渡る。

「えっ……っ？」

次の瞬間には魔人も魔術も止まっていた。

まるで時間が止まったかのように、魔人の反応も無ければ灼熱の球体が墜ちる事も無い。

辺りを見渡すと後ろから声が聞こえた。

『……貴方達。こつちよ、早く来なさい』

「先生！みんな！早く来て！」

そこに居たのはフィールとグレンが見たと言っていた謎の少女の姿があった。



「セリカ伯……アルフォネア教授、大丈夫ですか？」

「ああ、まあ火傷に関しては問題ないよ。フィールが霊薬持ってきてくれたおかげだ」
「……良かった」

グレン達の怪我は魔術で治した方がいいが、セリカに至っては治癒限界に至っている。最近の事もあって心配したが、霊薬のおかげで火傷は治った。だが、これ以上は軽い怪我くらいしか治らない。治癒限界に至ると言う事はそう言う事だ。

「なあ、お前、何者なんだ？その変な翼はなんだ？お前、なんで俺達を助ける？さっきのヤバげな魔人と、俺達を救った灰色の世界はなんだ？お前、なんで俺達のこと知ってるんだ？なあ？お前、なんでルミアとそっくりなんだよ？何か関係があんのか？」

『……そうね、今はナムルスとでも名乗るわ。それ以上は教えられないわ』

『『名無し』^{ナムルス}ねえ……明らかに偽名じゃねえか。何で教えられない？』

ナムルスと名乗る少女は、グレンの問いに対し、頑なに完全沈黙を決め込んでいた。ただ、その鬱屈した目で、ちらりとグレンを一瞥するだけ。

まさに、沼に杭を打っているような気分。

何を尋ねても、少女に関する情報は、まったく得られそうになかった。

「ちっ……可愛げのないやつだな……」

背中の異形の翼を除けば、その見た目は本当にルミアそっくりだし、異形の翼は明らかにフィールのソレと類似し過ぎている。

だが、その目つきと態度はまるで違う。世を侮み、失望し、擦れてしまったルミアと
いうべきか……ナムルスは、どうにも鼻につく陰鬱で退廃的な空気を放っている。

「そういやフィール」

「？」

「お前……本当に何なんだ？」

グレンはフィールの本質に迫る事を聞いた。

あまりの大雑把な質問にフィールは首を傾げている。

「何なんだ……って私は先生の生徒で——」

「フィールレダス」

「っ……!!？」

「何でお前は偽名を名乗るのか、何でお前が異能級の力を持つてるのか、何でお前がそこまで強いのか、この名前もそうだ。お前は一体——」

動揺を押し殺したフィールグレンに問いかけられた質問に首を振った。それに苛立ちを覚えたのかフィールの肩を強く掴む。

「あんなファイル！俺はマジで聞いて——」
「止めてください！」

ファイルは叫ぶようにグレンを突き放した。

ファイルもナムルスを通してこの世界のルーツ理解してしまつた以上、やつてはいけない禁止事項が存在する事が分かつた。特に一番してはいけない禁止事項は『グレンに眞実を告げる』だ。

残酷過ぎる事だが、今はそれに従うしかないのだ。

「……少なからず、今は言える事はありません」

「何で……」

『止めなさいグレン』

グレンが聞き出そうとするが、それをナムルスが止める。

『時に知ることが最悪の事態を、知らないことが最良の結果を招くこともある。そもそも、私は本来、こうして貴方達の前に姿を現すつもりもなかったし』

「だからそれが何だって……」

「……そうですね。簡単に言うなら、今私は世界に対して『警報』を踏みました。だから、世界は私を殺したがってる。いや、世界が私を殺そうと躍起になると言うべきでしょうか？」

ファイルが口にした言葉に呆けるグレン。

世界に対して『警報』を踏んだとは一体どう言う意味なのか。

「グレン先生、『運命』をどう思いますか？」

「あつ？運命……？いきなり何」

「いいから、答えてください」

「運命……、必ず出会う定めにある事象……とかか？」

運命と言われたらあやふやなものが多いが、グレンのそれは的を得ているだろう。ファイルは続ける。

「仮に世界には一種の物語によって縛られているなら、例えるならいずれ到達する未来、

到達しない未来、それを世界そのものが掌握して未来や歴史を決める事が出来るとしたら」

漠然とし過ぎて理解が出来ない。

世界そのものが歴史を決めている。そんな誰かによつて動かされた未来に、そんな物語に別の執筆が入ってしまったら。

「例外は存在してはいけないし、例外が主人公や重要な役割を持つ人間の目に移つただけで未来が大きく変わってしまう可能性がある」

未来を変えると言うのは禁忌に当たる。

多少の改変は世界が反応しないだろう。だが、分岐点や主人公と言つたこの人を中心に世界が回っているならば……

その人に近づいただけで禁忌に触れかねないのだ。

「だからこそ、一番やってはいけないのは『先生に真実を話す』と言う事、『分岐点を変えてはいけない』や『試練に乱入してはいけない』と言う事です」

何故、グレンには話せないのか理解出来ない顔をしているが、過去の分岐点で、フィールが居た世界で実証されている。グレンが居たか、セラが居たかで、通らなければならぬ試練に到達しても、絶対に勝てないと言う状況にぶち当たるのだ。

例外さえなければ、歴史はそう決定した世界を肯定する。

「それを破ると物語の執筆を消しゴムで消すように、修正が入ります。私は二回、その禁止事項を破りました。破ったせいでアレが召喚された。禁止事項に触れば触れる程、世界は私に牙を剥く。だから、先生には何も話せないし、話す事で歴史が変わりかねない」

既にグレンが生きる世界の歴史が肯定されている。

本来ならこの世界はセラが死ぬ筈だった並行世界。それを未然に防いだのが禁止事項に触れた。そして、セリカにフィールの真実を告げている事も、禁止事項に触れている。

「今はまだ『警報』を踏んだに過ぎないでしょう。だけど時間が経つたり、グレン先生が

真実に近づけば近づく程、世界の抑止力は私を消そうとする。私は唯一の例外だからです。と言うかまだアレでも幼体みたいなもんですよ?」

「アレで!?!」

「本気じゃない修正でアレなんです。本腰入れたら私なんて一瞬で塵です」

グレンは渋々ながら理解した。

つまりはフィールを知れば知るほど、フィールを殺しかねないと言う事だ。逃れようにも逃れられないフィールの修正。あの魔人でさえまだ幼体レベルの修正なのだ。その事に驚愕する。

「フィール、一つだけ答えろ」

「?」

「お前は……俺達の味方か?」

グレンはフィールに真剣に問う。

その言葉にフィールは振り向かないまま、答えた。

「大丈夫ですよグレン先生。私は味方ですし、グレン先生を巻き込むつもりは無いです」

それは心からの言葉だった。

グレンはその言葉にため息をつきながらもホツとする。

「既に巻き込まれてるんだが……」

「アレは単純に門番ですよ。少しだけ抑止力の力を得てますが、殆ど素の力と変わりません」

「どつちにしろ絶望じゃねえか……」

逃げた先には小さな部屋があった。

その場所は狭くモノリス版は無い。あまり大きくもないその部屋はただ白かった。

「ここは……？」

「ナムルス、ここで転移出来るの？」

『……………』

「ナムルス？」

ナムルスの案内の元、この場に来たが何も無い。一体この場所が何なのかナムルスに聞こうとするが、ナムルスは振り向かない。

『フィール』

「……ナムルス？」

『——ごめんなさい』

ナムルスが指を鳴らすと、フィールの地面が突如崩れ去ったかのように『穴』へ墮ちていく。まるで落とし穴のようにフィールがその場から消えていく。

「なっ……!!?」

「フィール!？」

「フィールちゃん!!」

「先——!」

グレン達^が手を伸ばそうとするが、その『穴』はフィールが完全に落ちた瞬間、消え去っていた。手を伸ばしてもそこは硬い地面に戻っていた。

「ナムルス!てめえ……まさか!？」

『そう、私も抑止力から多少の力と命令を受けてるわ。『運命』を変えようとしているあ

の子を魔人に殺させる。それが私への命令オーダー』

「じゃあフィールちゃんは……!」

『あの魔人の前よ』

つまり最初からグレン達の敵だったのだ。

ナムルスを抱みかかろうとしたが、ナムルスは残留思念に過ぎない。触れる事は出来ない。グレンの切り札なら出来なくは無いかも知れないが、そんな事は後だ。

「戻るぞセリカ!リィエル!セラは白猫達と此処に居ろ!!」

「ああ!分かつてる!!」

「うん!」

セリカとグレンは来た道を急いで引き返そうとしたが、部屋はナムルスが目を見開くと、扉が落ちてきて閉じ込められた。

「くそつ……ナムルスてめえ……!!」

「退けグレン!《五素は五素に——》」

『悪いけど、邪魔はさせない』

ナムルスが指を鳴らすと部屋の地面全てが消えた。先程の『穴』のようにグレンやセリカ、セラ達も例外なく落ちていく。

「ぬおおおおおおお!?」

「きやああああああああああ!?!」

「ルミアちゃん、システイちゃん、掴まって!」

「えっ、はい!!」

「グレン! ルミア!」

「クソっ!? フィール! フィールウウウウウ!!!」

全員が落ちていく。

箒が無ければ飛べない愚者の民は天の巫女の画策によって、黄昏の魔術師をこの塔に残して消えていった。

どれだけ弱音を吐こうが、誰も助ける事は出来ない。

フィールしかいないのだ。フィールしか誰かを助ける『正義の魔法使い』は存在しない。むしろ世界は歴史を終わらせるためにフィールの前に敵を置いていった。

フィールが死ねば、世界は剪定されまた新しい歴史を紡ぐように別の世界を選ぶ。辛うじて終わらない詰みゲーを保って、1%を保っているのだ。その1%を殺すために世界はフィールを見限った。

天秤で計ったように、フィールを天秤に置き世界は新しい歴史を作るためにフィールを殺さなければならなかった。

故にこれは世界を救う為に必要な犠牲。

世界にとってフィールを殺す事は聖戦に他ならないのだ。

フィールと言う人間はフィールの世界の歴史を存続させる最後の愚者なのだ。癌を取り除くように、一つの世界を消す為にフィールが邪魔だから殺す。それが世界の総意だった。

そして、フィールが死ねば……………

フィールレレーダスはどの歴史にも二度と存在する事が出来ない

『——私は私のやり方を貫くわ。だから、私はフィールを選べない』

救いなんてない少女に哀れみの手すら差し出さない。

ナムルスはそんな自分の意思に吐き気すら催すくらい、酷く傲慢で残酷で気持ち悪いくらい自分が悪いと知りながら……

ただ、無意識に頬に伝う涙にナムルスは気づく事は出来なかった。

第24話

「ぐっ……!?」

真つ逆さまに落ちていくフィール。

確かナムルスに罾にかけられ、急に地面が無くなりこの状況だ。随分と深く落ちていく。下には地面が迫ってきている。

「《傾け天秤》！」

身体の体勢を立て直し、「グラビティ・コントロール」で着地するフィール。魔力は然程問題ない。武器も問題ない。その事を確認し、フィール辺りを見渡す。どうやらあの最下層である事に間違いはない。

何故ならば……

『来たか。黄昏の魔術師よ』

「……つくづく思うけど私ってやっぱりツイてないな」

抑止力の力を得た魔人がフィールの目の前にいるのだから。

★★★

「おわっ!？」

「ぎゃっ!？」

「っっ! グレン、セラ！」

「あなた、システイ大丈夫？」

「な、なんとか……」

「クソッ！」

同じ時間、フィールから離されたグレン達は滑り台のように流されてグレンを下敷きに女性陣が乗りかかる。

セリカ達も嵌められた。

グレンとセリカはルミアの力を借り、再び星の回廊に向かおうとするが、モノリス版は全くと言っていい程反応しない。

「開かない!?!」

「なんで……!?!」

モノリス版はピクリとも動かない。

まるで機能が停止したか、何かに遮られているかのようだ。

『私は世界に対して警報を踏みました。禁止事項に触れれば触れる程、世界は私に牙を剥く。だから、先生には何も話せないし、話す事で歴史が変わりかねない』
「つつ……まさか、抑止力そのものが俺達をファイルから遠ざけてるのか?」

グレンの推測は当たっていた。

あの扉の前は抑止力に最も近い場所であり、ファイルに対してあの場所は逸脱者の狩場。抑止力に関連しないものを遮り、抑止力が働く存在に対して排除を行う空間だ。

故に隔絶された。

グレン達はファイルがいる所に向かえない。

「つつ………!!」

その中で唯一、フィールの現状が分かったのはルミアだった。頭の中で見える光景に震える右手を抑える。流れ込んでくるのだ。フィールが戦っている光景が断片的に。

「ルミア………?」

システイナは異変に気付いたが、ルミアはその手を握りしめる。今の自分にはただ、フィールの現状を見る事しか出来ない歯痒さにルミアは歯を食い縛りながらも、どうするべきなのかを模索し始めた。

★★★

「はああああつ!!」

『フツ!』

フィールは精霊剣舞を使い、二刀の魔人と対峙している。

精霊剣舞は一から八までの流れるような剣撃、流麗なダンスのような華麗な足捌きと、エルザの型を参考にしたフィール独自の剣撃。風の魔術で動きを阻害させて紡ぐ追いつく風の中、魔人はその剣撃を受け切る。

六撃、七撃が終わる。

八撃目を予測されたのか既に魔刀がフィールに向いていた。

『つつ!?!』

「《雷槍》！」

八撃目を予測された事を読んでいたフィールは魔剣エスパードを離し、躲すと同時に「ライトニング・ピアス」で魔人を撃ち抜く。だが嫌な予感がしたのか魔剣を拾い、距離を取るフィール。

『流星は抑止力が動くだけある。我が命が一つならばここで終えていただろう』

「……完全に急所に入った筈なのに……！」

心臓を撃ち抜いて死なないとはどう言う事か。

不死性、いや命をストックする事が出来る存在。おまけに魔剣エスパーダは本来防衛不可の逆行現象を引き起こす魔剣だ。その効果によって本来なら魔人の持つ剣が砕ける筈。

黒き魔刀・魂を喰らう魔刀

紅き魔刀・魔を殺す魔刀

そして命にストックがある存在。

「魔煌刃将アール・カーン……」

『ほう。我が真名に辿り着くか。そしてその若さでそれほど練り上げられた力に敬意を表する』

作者ロラン＝エルトリアが描いた『メルガリウスの魔法使い』では、主人公の敵役として『魔王』、そしてそれを守護する『魔将星』たちが登場する。存在する雷霆、罪刑、白銀、鉄騎、炎魔の中で最も魔術師に相性が悪いのが魔煌の称号を持ったアール・カー

んだ。

邪神に課せられた十三の試練を乗り越え、十三の命を手にした魔人。そして、

「つつ……あと3つか」

命のストックは物語で七つ失っている。

セリカが二回殺し、今一回殺した事で失い合計十の命のストックが削れた。三つと言えど、相手にしているのは魔王に仕えた正真正銘の英雄。

恐らく、『精霊剣舞』ソード・ワルツはもう通用しないだろう。ここからが正念場。【女帝の世界】も短期決戦型、3分しかもたない以上、使い所が限られる。

「(あの魔刀は魔術殺し、ウイザリア片方が魂喰らいなら黒は絶対に喰らっちゃいけない)」

魔剣を構え、迎撃態勢に入る。

ここからは瞬き一つすら命取りだ。身体強化を絶えずかけて、魔人の動きを見計らう。

「つつ……速い！」

ガギギギギッ！と剣と剣が斬り結ばれる。

ただの「フィジカル・アッパ」では反射速度が遅い。だが、ギリギリ追い縋り、剣を弾いて距離を取る。

「《魔槍よ》」

『兎戯』

瞬間、間合いを詰められ魔術式そのものを斬り裂かれた。

だが、フィールのそれは陽動^{ブラフ}。アール・カーンの足元から獄炎の炎が起動される。黒魔【フレア・クリフ】により設置型の炎陣を踏ませる。

『兎戯だと言った』

起動し切る前に魔刀で斬り裂く。

一体どんな反応速度だと悪態をつくが、魔刀で斬り裂いた分隙が出来る。黒き魔刀を魔剣エスパルダで滑らせてアール・カーンの鎧に触れた。

「《燃えろ》！」

『又ウツ!?!』

黒魔【ブレイズ・バースト】が直撃する。

至近距離なら灰燼にする火力だが、やはりストックがある以上身体が消滅する事はない。だが今ので二つ。あと二回殺せば……

「つつつ!?!」

考える暇を与えないように赤き魔刀がファイルの首を狙われる。体を剃って躲し、距離を取る。本来なら執着する意味も無ければ逃げる事も不可能ではないが、抑止力が介入しやすいこの場所で、果たして外に出られるかと言う点だ。

逆に抑止力はこの空間のみでしか働いていない。

抑止力を殺せば次の抑止力が来るまでの時間に脱出出来る。故にアール・カーンに立ち向かうと言う最悪の選択肢しかなかったのだが。



距離を取ったことにより、魔人は魔術を使用する。

かつて、魔人は追い詰められた時に魔術を使用したと著作には書いてあった。その道理が正しければ――

「させない」

ファイルの【愚者の世界】は通用する。

魔人アール・カーンの太陽の如き球体は一瞬にして霧散した。

『何っ!?!』

「《雷槍よ》！」

それと同時に【女帝の世界】を発動する。

黒魔【ライトニング・ピアス】が心臓を貫く。ファイルだけが使える【愚者の世界】と【女帝の世界】によるワンサイドゲーム。だが、魔人の本質は剣技にある。故にこの瞬間、この三分間で最後の一つを削り切る。

「《魔槍よ——打ち砕け》！」

計二十、並行起動で魔人の周りに展開される「ライトニング・ピアス」の魔方阵が放たれる。毎秒八万キロス突き進む雷槍が魔人を襲うが、逃げる方向全ての魔方阵を黒い魔刀で斬り裂いた。

逃がさない。

身体能力を極限にまで上げたフィールの剣技がアール・カーンを追い詰める。スピード、パワーで圧倒する事が出来るフィールの切り札にアール・カーンは追い縋る。

『ぐっ……ぬう!!』

「はああああああつ!!」

風を流麗に使い、黒魔改「ライアブル・ドライブ」で動きを加速する。所々傷をつけられているが、命を奪うまでに至らない。だが、剣技を力で圧倒している。体感で一分、あと二分で仕留め切れると思った矢先、思いもよらない事態が発生した。

「つつ……ぐつつ……かはつ……!?」

フィールが吐血し出したのだ。

攻撃を中絶し、距離を取るフィール。身体が、心臓が揺さぶられるような嫌な感覚、身体の負担によって膝をつく。

【女帝の世界】の維持出来る時間が予想以上に減っていたのだ。フィールは数々の無茶をしてきたせい、魔力容量キャパシティがジャテイスと戦った時より大分減っていた。

だからって、これは消耗し過ぎている。

「あの…時………!」

ナムルスの時にほんの僅かに解放した力。

あの瞬間、魔力をゴツソリと持っていていかれていたのだ。慣れない力、御し得ない力は身体に大きな負担を掛ける。特にあの力は天使とは比較しても比べる事すら出来ない巨大な力だ。一個人で扱うとなれば、代償は必要になってくる。

「くっ……」

ファイルは「女帝の世界」を解除した。

これ以上は恐らく十秒も保たないだろう。だが、身体の負担が大きい自分に「女帝の世界」無しで勝てるのか？疲労感とマナがかなり減った事による身体のパフォーマンスは低下している。

『練り上げられたその技。愚者の民にしては中々のものだ。だがそれもここまでの話』
「……いいえ、それは違う」

ファイルはポケットから圧縮した刀を取り出した。

名は無いが、かつて地獄を生き延びてきた相棒が使っていた業物。ファイルは腰にそれを携え、構える。

「『罪深き我・逢魔の黄昏に独り・汝を偲ぶ』——」

刀には共に高め合った経験が蓄積されている。

ならば、この一閃は消される前に魔人を斬り裂けばいい。魔力は今あるものをありつたけ注ぎ込んでも【女帝の世界】は五秒と保たないだろう。

『来るがいい！』

「っ！はあああああっ!!」

フィールが放つその抜刀は超神速の抜刀術、東方剣士サムライが使う秘奥義は本来振る速度の四倍、相棒の『春風一刀流』は剃刀のように薄く鋭い刀剣を様々な体術・術理を尽くしてひねり出した常識を逸した『力』と『速度』をまったく減衰させずに刀に乗せ、魔力で増幅エンハンスすることで、遠間を斬り裂く風の刃を繰り出す絶技。

あくまで抜刀は風を斬り裂いて放つ遠距離技だ。

だが、確実に殺す奥義として、相棒とフィールが考案したのが超至近距離からの抜刀。抜刀の速さに対抗すべくアール・カーンは刃を振るう。

このままではフィールが先に斬り裂かれる。その未来を斬り捨てた。間合いは魔術を使われる前に潰すものだ。だが、同じ達人同士だと同じ考えを持つ。

フィールは残り少ない魔力で【女帝の世界】を発動する。

起動するブラックストーンに触れていない中で、フィールが見た因果が一つの未来では、到達できる可能性は少ない。故に複数の未来の可能性を計測する。

アール・カーンに何千何万と斬り裂かれる因果の中に、必ずフィールが先に斬り裂く因果がある。フィールの『万象の逆転・逆流』から導き出したその因果を渡り、斬られた未来から斬る未来へ因果を渡る。

『何っ!?!』

「あああああつ!!」

それは時を渡る剣閃。

フィール達が生み出した必勝の剣技。因果を超え、相手を斬り裂く結果を先に反映させる。神速の抜刀術を使う者と因果を遡る者がいなければ成立しない。その技の名は

「——風雷神・零式!!」

神を超えた風をここに織りなす。

かつて二人で編み出した技でフィールはアール・カーンを斬り裂いた。その剣の一閃は魔人が持つ二刀すら超えて、命を奪った。

「つ……はっ……」

居合を抜けたフィールはその勢いが止まらずに倒れ込む。流石にありつただけの魔力を【女帝の世界】と【ロード・エクスペリエンス】に注ぎ込んで魔力は空っぽだ。

「つ……なんて馬鹿力してんのエルザ」

あまりの抜刀の速さに右腕が折れた。

エルザの剣技はその世界のエリエーテと並ぶ剣才の持ち主。特に抜刀に至ってはフィールがどれだけ魔術を重ねようと見る事すら出来ない超神速の一閃。

経験がフィールを食い潰す程の果てしない技量。

帝国宮廷魔導師団だった自分と組んでいた相棒はどれだけの存在か今し方改めて痛感する。

「ハア……ハア……これで」

これで四つ殺した。

アール・カーンの身体が消滅する。物語の通り、魔煌刃将アール・カーンの命のストックは完全に切れた筈だ。

「……はっ？」

啞然。

後ろを振り向くと、そこには消える筈の魔人が立っている。先程の居合で斬り裂いた胴体は碎けない。

「まや……か……」

立ちながら消滅するならまだわかる。

だが、そんな様子には見えない。いや、消滅が始まらない。立っているアール・カー

ンがフィールの方へ向く。

『……影とは言え、我が本来の状態ならばこの場で消えていただろう。だが、我は抑止力にて召喚され、貴様を排除する為に呼び出された存在』

斬り裂かれた筈の身体はすでに修復されていた。

フィールが残した傷は既に魔人から失われていた。魔人はフィールが持つ希望を叩き折るかのように現実を告げる。

『故に今の我は全盛期、本来失われた命すら存在し召喚された』

その言葉にフィールは絶句した。

本来失われた命は7つ、たった一人で4つ殺せただけ奇跡だというのに、あと7つもあるなんて馬鹿げた話、あつてほしくなかった。

アール・カーンは十三の命を持っていたのだ。

魔力は殆ど枯渇。

身体に負担を強いた上に折れた右腕。

勝ち目すら見当たらない。

今の状況で自分が打てる最善策を考え、無数の因果を導き出しても、フィールが生き残れるビジョンが見えない。

『貴様はよくやった。故に我が攻勢にて、消えるがいい』

「つつ……！」

折れた右腕に握られた刀で魔人の剣技に追い縋る。

右腕から血が吹き出す。黒に警戒して弾いた所で紅き魔刀がフィールを斬り裂く。追い縋る事も出来ない。身体は既に限界の一步手前、むしろよく追い縋れたと称賛できるほどにフィールは頑張った。

右腕に握られた刀が弾かれた。

魔術も、武器も、あらゆる手段が間に合わない。

『逝ね』

それは走馬灯のように見えた。

どれだけ考えようが、どれだけ足掻こうがもう遅い。

打てる手段はもう残されていなかった。

アール・カーンが振るうその黒き魔刀が――

「……………あ……………」

フィールの胴体を深く斬り裂いた。

血が吹き出し、身体から妙な浮遊感が生まれ、支えていた重心は崩れ去る。力も、魔力も、意識すらも身体から遠退いていく。

身体が動かない。

熱が、命の鼓動が溢れるかのように倒れた場所は血に染まる。

『さらばだ。黄昏の魔術師よ』

アール・カーンの黒き魔刀が心臓に突き刺す。

それでフィールは絶命する。黒き魔刀は魂を喰らう、そんな事をしなくてもフィールは勝手に死ぬだろう。だが、最後まで油断しないアール・カーンができる最後の慈悲

だったのだろう。

アール・カーンは黒き魔刀を振り下ろ——

「させるかああああああああつ!!!」

———
す事が出来なかった。

木霊する声と、怒りが含まれた叫びと共にアール・カーンに対して発砲した人物。抑止にて隔離されていたグレン達が突如、姿を現した。

第25話

「先生!?なんで落ちて……」

「話は後だ!ルミア!セリカ!!」

「分かっている!!」

「はい!」

突如虚空から落ちてきたグレン達にカツシュ達は説明して欲しかったが、フィールが居ない事を理解したと同時に救出に失敗したのだと分かってしまった。

「クソツ!!動け、動けよ!!」

グレン達はどうにかモノリス版を起動させようと躍起になっていた。無論、ルミアの力を借りようが、セリカが解析しようがピクリとも動かない。ナムルスの言っていた抑

止力、それによってフィールが隔絶された。

「つつ……!?」

そんな中、ルミアだけがフィールの現状を理解していた。

ノイズが走るのだ。視界が、フィールの現状をノイズと共に頭に流れ込む。二刀を持つ魔人と魔剣で圧倒しているフィール。

『つつ……!』

「フィールさんが……押してる」

「ルミア……?何、言ってるの?と言うかどこを見てるの?」

システイーナの言葉にルミアはハツとする。

自分がいつたい何を見て、どうしてそんな発言をしていたのか、自分自身にもはつきりと断言することができなかつたからだ。

ただ――、

「……フィールさんが、何をしているのかが見える?」

胸元を強く掴んだまま、ルミアはその感覚——ぼんやりと、砂が流れるような古いレビを見ているかのような、不可思議な感覚の存在を自覚する。

まるで、フィールと繋がっているかのようなそんな感覚があるのだ。フィールが口にした言葉がルミアに伝わる。

「……アール＝カーン……ってフィールさんが」

「アール＝カーン？ つつ！ それって魔煌刃将アール＝カーンじゃ？」

「システイちゃん。魔煌刃将アール＝カーンって何？」

『メルガリウスの魔法使い』で出てくる十三の試練を乗り越えて十三の命を手に入れた魔人です！ 紅き魔刀は魔術を殺し、黒き魔刀は魂を喰らうって……」

システイナの説明に誰もが絶句する。

フィールが戦っているのは御伽話に出てくるような理不尽なまでの怪物。十三の命を手にし、魂と魔を殺す二つの魔剣を振るう魔王に仕えた反英霊。

ルミアはフィールの行動を“視ていた”が、それ以上は分からない。フィールが刀を持ち、因果を斬り裂いた瞬間、勝ったと思った矢先に魔人は動き出した。

『……………あ……………』

追い続けるフィールに対して魔人は手を緩めずに剣戟を繰り返す。追い縋っていたフィールの手から刀が弾かれた。

プツン、と途切れる音と共に視えていたものはここで途絶えた。

「……………フィール、さん？」

掠れた声は届かない。

動揺して本来の声が出なくなるほどの、心を抉るような喪失感。

同じタイミングで、セラの小指に巻いていた生存確認の魔術がかけられた黒髪がプツリと切れていた。

「嘘……………フィール、ちゃん？」

セラの指に巻かれた髪が切れたと言う事は、フィールに何かあったのだ。生存出来る事すら危うい状態に陥る程に。

一番冷静でいたセラが焦りだしたのを見てルミアは悟ってしまった。フィールが今、死に繋がるような傷を負っている事に……

「ダメ……」

フィールは今まで二人を護る為に平気で傷付いた。

気付かれなくていいと言う悲しい生き方をしてきた。でも、最近漸く心を開いてくれた。フィールが居場所を見つけたからだ。

セラが泣き出しそうな程に焦っていた。

グレンもセリカもシステイーナもリイエルも、此処にいる全員がフィールに生きてほしいと思っている。

それなのに。

漸く見つけた居場所を引き裂かれるなんて……

「ル、ミア……?」

フィールは確かに世界から排すべきものなのかもしれない。けれど、それを勝手に決

める世界も、命を奪おうとする魔人も、抑止力で開かない星の回廊の入り口も、何も出来ない自分を今は呪った。

ルミアは我儘を言わない。

それは他人を守るなら命だつて平気で差し出す。その生い立ちからそう言った性格だ。けれど今だけは、怒りと共に我儘を叫んだ。

「邪魔しないでっ!!」

ルミアの右手に力が収束している。

それは余りにも強大で、グレンとシステイーナは何処か既視感があった。存在の高次元化、ルミアは自身の力を呪った事で初めて奥底に眠る力を解放した。

『なっ……嘘?!』

遠距離から見ていたナムルスでさえ驚愕している。

ルミアの右手に収束して、現れた力の奔流は徐々に形となって現れた。今のルミアに使えるはずがないそれは……

『銀の鍵……!?!』

自分の腕の長さくらいはある大きな『銀の鍵』。

今のルミアには使えるはずがない筈だ。ただ、ルミア自身が何もできない自分を呪ったからこそ、奥底に眠る本質へ自力で辿り着いた。

誰が為ではなく、自分自身が選びその上でフィールを助けたいと言う願いが『銀の鍵』を召喚した。

「ルミア……それ、は？」

「分からない。けど、分かる。どうすればいいのか」

虚空に向けて、鍵を捻る。

鍵とは扉を開ける為に存在する。この世に二つしかない鍵はどんな空間も開き、どんな場所に通ずる。

カチリという音と共に空間が歪み、扉が開いた。

「星の回廊が!？」

鍵が扉を開くなら、閉じた回廊の扉も開くのが道理。

世界がルミアに鍵の存在を持たせたなら抑止力など関係ない。

星の回廊の扉が、再び開いた。

魔人と倒れて死にかけているファイルを見てグレン達は走りだした。

★★★

『つつ……!?!』

目が覚めた所は無限に広がる星天の下だった。

身体がある。痛みはない。斬られた部分を見る。学生服の上から着ていた宮廷魔導師団のコートは血で滲んでいた。だが、傷は無い。触つても血が滲んでない。魂を喰われて自分は死んだ筈だ。

まさかあの世じゃないよね?と呟きながらもファイルは立ち上がった。よく見れば、地面も水面のように星が輝く夜空が反射している。それはまるで宇宙に飛び込んだよ

うな異質さがありながら見惚れてしまうほど美しかった。
もうここあの世なんじゃ……

『……死んでないよ?』

『つつ!?!』

腰に据えた魔銃を取り出して声が聞こえた方向に構えた。

それが誰だったのか知るまでは、フィールも魔銃を下ろせなかった。

『……………え?』

彼女は優しく微笑んだ。

それはあの時と違う優しく、自分が犠牲になっても私をここまで導いてくれたあの人は優しく、そして少しだけ照れ臭く笑った。

『嘘……………どうして?』

『大きくなったね。フィールちゃん』

見間違える筈がなかった。

綺麗な金髪に星のような蒼眼、そして緑色のリボンを結んだ美少女。この世界に来る時に救われた。あの日、別れを告げて逝ってしまったあの人を忘れる筈がなかった。

『ルミア……さん?』

掠れた声で確認する。

アイツではない。今のルミアさんは紛れもなく生前のフィールの世界に居たルミアだ。大人びて、優しく、それでも悲しそうにするのは変わらないままだ。少しだけ服の裾やスカートが斬り裂かれているように見えるが、あの人である事には変わりはない。

『もう、現実の私みたいに呼び捨てでいいのに』
『あつ……』

頬を撫でられる。

気が付けば涙が出ていた。撫でてくる手はとても暖かくて、抑えていた気持ちが決壊

して涙を溢していた。

魔銃を捨ててルミアを抱きしめた。

そこに実体があるような柔らかさかと温かさがフィールの弱音を吐き出させる。

『もう……泣き虫になっちゃって』

『……っ、ずっと我慢してたから……』

もう、どれだけ寂しい思いをしたのか。

フィールを知る人間がない。同じ人間でも知らないと言うだけで心が折れそうになる。生まれて十数年の少女には厳しい世界だった。

ただ、自分を少しでも支えてくれた。

グレンが死に、セラが教師になった後に自分を可愛がってくれたのはこの人だ。姉妹がいたならお姉さんみたいな優しい人、もう二度と会う事の出来ないと思っていた大切な人にフィールは再び再会した。

★★★

「フィール！頼む！目を覚ませ！」

「治癒魔術が……！」

セリカの「リヴアイヴァー」でさえ傷が塞がらない。

血が溢れていく。魂を喰われ、死へと近づいていくフィールに対してセリカでさえ何も出来ない。

グレンとリエル、ルミア、システイーナは魔人と戦い、セラとセリカはフィールの回復をしている。だが、回復が出来ない上に出血が止まらない。

「セリカさん！とりあえず傷口を凍らせて！これ以上の出血量は!!」

「っ!!ああ、細胞を壊死させない程度に……出来た！」

傷口を凍らせる事で辛うじて出血は抑えたがそれだけだ。

セリカにはそれしか出来ない。治癒限界などもうとつくに來ている事に気付けなかった。

フィールの身体は徐々に壊れていつてる。

それを遅らせる為に修復を繰り返していたのだろう。だが、修復にも限界がある。ツ

ギハギのように破れた部分を継ぎ接ぐようにしても、結局は元に戻るわけじゃない。

「つつ……どうすれば……いい」

「アルフォネア教授……!」

「やっているんだ!! 治癒も蘇生も出来る事は全部!! でも、治癒限界は自然の回復を待つしかない……そんな悠長な時間は無い……」

そう、治癒限界に陥れば治癒など不可能だ。

白魔【ライフ・アップ】や【リヴアイヴァー】は身体の治癒能力を引き出して治すのを促進させるもの、だがフィールは既に引き出すべき治癒能力がない。

万事休すと思った矢先、セラはある魔術を思い出す。

「つつ、セリカさん! 協力してください!」

「何……を……」

「フィールちゃんの固有魔術なら、時間を遡って修復が出来る!」

「術式が分からない……! でも、まだ可能性がある!!」

「固有魔術だぞ……? そんな事出来るわけ」

「諦めたら、フィールちゃんが生ぬんですよ!？」

セリカはハツとして不安そうな顔をしたセラ達を見る。

そう、セリカが諦めたらフィールは確実に死ぬのだ。

「術式の詠唱を今から教えます。その詠唱から術式を割り出して、フィールの固有魔術を使えば!」

「固有魔術はどれだけ戻せる?」

「最大で8分まで! フィールちゃんが倒れてから2分が経ってる。時間が無い!!」

セラが詠唱の内容を教える。

それはとてつもなく敷き詰められた術式だ。リヴァイヴァーとは違い、時間の概念を近代魔術モダンにして使う逆行現象をたった一人で使うのだ。白魔儀改クロウ・カダストロフ「時の奉天」はその術式があまりにも難解なものであり、並列して様々な術式を使えなければ使用出来ない故に莫大な潜在魔力がなければ使ったと同時に死にかねない。

フィールの場合は使えても全魔力が使用され、マナ欠乏症と同時に回路にダメージが

行く。確実に寿命を減らすものだ。

「セラ、悪いが2分だけ時間をくれ」

「は、はい！」

「【罪深き我・逢魔の黄昏に独り・汝を偲ぶ】」

白魔改【ロード・エクスペリエンス】

それは本来なら物品に蓄積された思念や記憶情報を読み取って自身に憑依させることで、情報を元に自身を蓄積された人間の力を使う事が出来る。セリカが触れているのはフィールが学生服の上から着ている帝国宮廷魔導師団のコートと魔剣エスパードだ。フィールの魔術技能を憑依させ、時間逆行の魔術を使う。セリカにはそれが可能だった。

だが……

「ぐっ……!!？」

「セリカさん!!？」

セリカが突如吐血し始めた。

白魔改〔ロード・エクスペリエンス〕には一つ欠点が存在する。これらは通常起きない欠点だが、それは対象の経験、技量を自身に憑依させる段階で自分の意思が食い潰されかねない事だ。この欠点は欠点と呼べる程のものではない。剣の姫エリエーテだろうが、双紫電ゼーロスだろうが、余程の事が無い限り有り得ないのだ。だが、存在の格が高い者に限っては話は別だ。

「なんだ……コレ……!?!」

「アルフォネア教授!」

吐血したセリカにルミアが駆け寄る。

白魔改〔ロード・エクスペリエンス〕の弱点は存在が高ければ高いほど、憑依させた存在に食い潰される。

フィール自身が高い存在じゃない。だが、フィールの中に居る存在は次元そのものが違いすぎる。第七階梯のセリカですら存在を喰われている。

「アルフォネア教授!!」

「っ……!? なっ、コレは……」

ルミアの異能がセリカに届く。

黄金色の光が体を包み込むと同時に喰われそうになった痛みが消え去っていた。ルミアの異能は『感応増幅』ではない。

存在を昇華させる力。

セリカの存在の格を上げる事でフィールの中に居る存在に食い潰されないようになった。

「ってか、なんて難解な魔術式だよ……! 私でも出来るか怪しいな!」

「セリカさんでも!」

「やってみるさ、出来なきゃフィールが死ぬからな」

セリカは膨大な魔術式を読み込んで、詠唱を紡ぎだそうとしていた。

★★★

『ルミアさんは何でここに？』

ここは自分の精神世界だ。

精神世界には『銀の鍵』の意思があり、それは鎖で雁字搦めにされて封じられていた筈だ。そして、いつもなら黄昏た夕陽と、血を啜り、咲いたような彼岸花の花庭がフィールの心象世界だ。

少なからず、ここまで綺麗な世界では無い筈だ。

『まあ、私も鍵の意思で繋がれた存在だからね。鍵があるなら私も存在する。さつきナムルスと会った時に出てくれたの』

『で、でもあの鍵の意思が主体じゃ……』

『確かにそう。けど、フィールちゃんはその魔刀を食らったでしょ？それが靈魂と融合しかけていた鍵に残っていた意思を上手く削ったの』

そんな無茶苦茶な、と呟くフィール。

削れたのは融合しようとしていた鍵の意思だ。幸い、私自身の靈魂は傷付いてはいて

も大した損傷は無い。

本当に運が良かったとルミアさんは苦笑いしている。

『でもそれだとルミアさんも……』

『うん。私も殆どの存在が残されてない。この世界が消えたら私はもう二度と存在しない』

フィールルは俯いた。

鍵の意思とは『銀の鍵』に取り憑いている脅迫概念。ルミアはいずれその鍵を渡す者が居るらしく、その鍵をその者に渡す為に鍵には渡さなければいけないと言う意思が取り憑いている。

そして、ルミアさんは『銀の鍵』の所有者だ。

ルミアさんが所有者であるならば、『銀の鍵』に自分の存在を取り憑かせる事は不可能ではない。フィールルにそれを渡した時、ルミアが鍵の意思に食い潰されないように細工したのだ。

『だから、置き土産を渡しに来たの』

『置き土産?』

『フィルターちゃんは時間逆行がどうやってやったのか覚えてる?』

『それがフィルターみたいなのがかかって、ルミアさんの力は借りただけは覚えてるけど、思い出そうとすると頭が痛くなって』

『ごめん、それ私のせいなの』

『はっ!?!』

何故ルミアさんが私の記憶にフィルターをかけたのか理解出来なかった。時間を逆行する術式をひた隠しにする理由が分からない。時間を飛んだ以上、その術式を見た所で何が起きるわけでも……

『私はフィルターちゃんにその力を使ってほしくなかった。使い方を知ってしまえば早死になりかねないから』

『えっ……?』

『でも今のフィルターちゃんはもう、大丈夫。だから、見せるね。全てを』

フィルルの両眼が青く染まっていく。

ルミアさんが強制的にフィールと記憶を繋げ始めた。

その魔法陣は余りにも強大なものだった。

天使の言語、悪魔の単語、系列を示す世界樹、ありとあらゆるものが陣として繋がっていて、一つの強大な術式として描かれている。

祖は全ての始まりを示す。

祖は全ての終わりを導く。

全てが円環として組み込まれ、その術式は一つの神下ろしの祭壇として描かれている。

『これなら、行けるはず』

無表情で狂気に囚われた少女が居た。

この術式は天使や悪魔などを降霊させ、憑依させるものとは全く違う。そもそも天使や悪魔の術式を統一する時点で可笑しいのだ。

それもそのはずだ。

何せ、少女が生み出そうとしているのは全く別の存在。既存の天使や悪魔を模して創る全く別の存在。天使や悪魔を憑依させれば、世界を背負うのと同じ。寧ろそれは邪魔でしかない。天使や悪魔の力を融合させ、世界にある核の高い存在の一部だけを取り入れた外宇宙の人造邪神。

少女に数十年の時間を遡るのは不可能だ。

出来ないのなら、出来る存在を生み出せばいい。

少女が生み出そうとするのは。

世界に存在しない全く新しい『デウス・エクスマキナ機械仕掛けの神』

その神には名前はない。

あるのはその理論を追求し、狂気とも呼べる解析力を以って生み出した偶像の神。時間を逆行すると言う一点のみを追求し、使用する事のできる神を生み出そうとしていた。

『これなら……これなら!』

涙が溢れていた。

あの頃の自分の狂気さに胸が締め付けられるような痛みが流れる。

『会いたいよ……また、会いたいよ……!お母さん……!』

祭壇の上に立つ。

元よりこんな世界に希望などない。死んだら死んだで後悔など微塵も湧かない。

少女は行ったのだ。

この世界の枠組みから外れた邪神を『憑依召喚』ホゼツシヨンし、時間を渡る決意をした事に。

★★★

「《黄昏は此処に・終わりを告げる時の残滓・方舟に乗りし運命は我が盟約にて反転せよ》
!」

セリカは魔術式を組み上げる。

この術式の驚異的なところは複数ある術式を同時並行に並列起動し、生み出す効果だけを混ぜ合わせ、過去に干渉する『時間の概念』を持つ魔力を生み出し、8分間まで対象の状態を元に戻すと言う事。

「《我は汝を排斥せし根底を覆し者・其は森羅万象を全を修める者・世界に背きし共犯者よ・汝の名を此処に告げよ・汝の名はフィール||レーダス》！」

フィールの魔力制御力と、並列思考能力はセリカを超える。この術式はセリカですら難易度が高い魔術。なんなら神殺しの術式より厄介な力だ。だが、第七階梯の天才はフィールが編み出した固有魔術を紡ごうとしていた。どんな天才でも魔術の才はセリカに及ぶものはいない。

圧倒的な魔術センスがその魔術を紡ぎ出した。

「——固有魔術【クロノ、カダストロフ時の奉天】！」

流れていた血が元に戻っていく。

対象の時間を八分前に戻す禁忌の魔術はフィールの傷を塞いでいく。肩から胸にかけての傷は完全に塞がった。

だが……セラはフィールの手を握った瞬間、顔を青ざめる。

「脈が……ない」

心音が全く聞こえない。

傷は塞いだ。出血も元に戻った。だが呼吸をしていなければ、心音も脈も反応がない。

「そんな馬鹿な!? 完璧に紡げた筈だ!」

「でも……身体が冷たい、脈も戻ってないんです!」

セリカの術式は完璧だった。

だが、セラは叫びたくなるほどに焦る。脈も心音も聞こえない、仮死状態でさえ長く

持たない。死神の鎌に掴まり、死ぬ寸前にまで至っている。

セリカがフィールに人工呼吸を行い、セラが「シヨック・ボルト」で心臓マッサージを行う。仮死であるならば、呼吸を安定させれば心臓に直結して脈を取り戻せる可能性を信じて。

「ぐっ……!?」

「グレン!? つっ……!!」

グレンが魔人に飛ばされた。リエルとグレン、システイーナとルミアで保っていた均衡が崩れ、魔人はフィール達に狙いを定める。

『逝ね』

「つつ! 《極光の隔壁よ》!!」

黒魔【インパクト・ブロック】

外部からの攻撃を隔絶する断絶結界を一節で唱え、発動する。しかし、そんなものは魔人アール＝カーンには紙の壁と同義、赤い魔刀が結界を易々と斬り裂いた。

「セラ、セリカツ!!」

「ぐっ……!!」

「《風王の戦鎚——!」

間に合わない。

魔人がファイルに振り下ろす刃より速く動けない。セラもセリカも、グレン達ですら間に合わない。

黒き魔刀、『魂喰^{ソウル・イーター}らい』がファイルに振り下ろされた。

カチリと言う音が聞こえた。

次の瞬間、少女から飛び出すように風が吹き荒れた。いや、風というには途轍も無く真つ黒に染まってしまいそうな黒い風が黒き魔刀を遮り、弾き返した。

「……ありがとう、ルミアさん」

声を上げたのは誰だったのか一瞬理解出来なかった。

風を従え、魔術の才能に溢れた少女の瞳から涙が零れ落ちた。もう、会えないと思っていた。会う事が出来ないと、そう思っていた。

「グレン先生、ルミア、システイーナ、リィエル」

少女は涙を拭って、此処にいる人達の名前を呼ぶ。

自分はいつもそうだ。他人に迷惑をかけないように、一人で抱え込んでしまう。誰かの手を借りなければ今ですら生きていないというのに。

「……お母さん、セリカ叔母さん」

黒い風が霧散した。

少女の背中には蝶のような翼が出現していた。それはナムルスのような紫に輝く色ではない。

それはまるで天使とも思えるくらいに美しい白銀の色と頭上には天使の輪が浮かび上がっている。

「少しじつとしてほしい、もう抱え込むのは最後にするから」

そして何より、少女の髪は綺麗な銀髪に染まっていた。



『……外宇宙の人造邪神。それも時を渡る権能を持つ』

『そう、それがフィールちゃんの中に眠る存在』

あの存在は間違いなく天使や悪魔の格を超えていた。

人工^{タルバ}精霊のような紛い物ではない。召喚術ではあるがそれともまた違う。人の『意識

の帳』の向こう側にある『ここ^ネではない、どこ^{パー}でもない場所』や魔界、天界と言ったものを理解して、天使と悪魔の力を混ぜ、邪神の枠に当てはめた怪物こそフィールの中にある存在。

外法中の外法だ。

そんな発想に至る事自体が罪になるほどに。

神聖なものに外典なものを混ぜ、一つの枠外の神として信仰し、生み出したものは倫理から外れたものだ。

『今思うけどよく私、器として耐えられたな』

『そもそも全知全能の神様を人の手で創り上げるのが間違ってるからね?』

『うぐつ……』

まあ確かにこんな発想に行き着くのはフィールや天の智慧研究会くらいだろう。誰が神聖な天使と下劣な悪魔を混ぜて邪神にするなんて思いつくのだろう。

『そりゃあ、まあ、そもそも時間を戻す存在なら知ってたし』

『時の天使の眷属ル＝キルでしょ?まあ、あの世界の信仰対象だからね。時を渡れるの

は限定的で、抑止力に引っかけられて殺されてたと思うし』

『さりげなく恐ろしい事を言うのやめてくれませんか!?』

例えばの話、《時の天使》ラィテイリカを『憑依召喚^{ホゼッション}』をするとしよう。ラィテイリカの権能は一部使えるし、天使に見合う格の力を手にする事は可能だ。

だが、並行世界に渡るとなれば話は変わる。

何せ、世界に一体しか存在しない格の高い天使が突然二体が増えるなど、あつてはならない。世界が歪みを許さない以上、そう言った今の人類では太刀打ち出来ない存在に對して抑止力が働くのだ。

だから敢えて同じ力を持つ全く別の存在を創る必要があつた。

『やつとコレがなんなのか理解出来ましたよ』

『もう術式を逆算したの?』

『ルーツが分かった以上、どう使えばいいかなんて術式さえあれば分かりますよ。私の得意分野だし……ただ』

コレは銀の鍵以上に奥の手だ。

何せ使うだけで靈魂が砕け散る。砕けた靈魂は自然治癒でも元に戻らない。恐らく、時間は約一分。そして使用回数は生涯で三回。それ以上は靈魂の修復が不可能な程、『崩壊』を始める。

暴走した時でさえ、まだ使いこなせなかったから反動があつたから被害が少なかったのだ。本気で使いこなせばファイルは遠くない未来で……

『……ファイルちゃん』

『?』

『残った私の靈魂を、使つて』

『!!』

今のルミアも鍵の意思にしがみついた靈魂の一部だ。

ファイルの一部として存在するなら靈魂の代用として使う事は出来る。ただし……

『でもそれじゃあ!』

『どの道もう時間が無いの。だから最期でいい。——私に貴女を護らせて』

砕け散るのも、自然消滅もどちらにせよルミアは消える。

そうすればルミアの靈魂は砕け散る。もう二度とフィールの精神世界に現れない。けれど、その眼に後悔は無かった。

『……貴女はやっぱり卑怯だよ』

『……ごめんね』

『でも……もし、私にお姉ちゃんがいたなら貴女みたいな人だったのかもな』

少しだけ悲しく笑った。

ありもしないハッピーエンドがあつたなら、フィールの瞳には涙が溢れていた。そんな、そんなありもしない未来があつたならきつと、幸せだったのだろう。

『あれ……なんで……涙が』

初めて、怖いと思つてしまった。

そんな幸せが、この世界で生きて壊れてしまう事が初めて怖いと思つてしまった。喪つてしまう、いつかは消えて無くなる泡沫の夢から覚めたくないと思つてしまう。

ルミアはフィールを優しく抱き締めて、涙が溢れるフィールを撫でていた。自分が消えゆくほんの少しだけ、彼女の姉としてルミアもまた涙を流していた。

『今までありがとう、フィール』

消えていくわずかな時間、フィールはルミアの胸で泣き続けていた。



本当に、最後の最期まで彼女が力を貸してくれた。

世界が鮮明に見える、それと同時に世界が小さく見える。小さかった頃の公園が大きかったが、大きくなると小さく感じるのと同じように、今のフィールを止められる者は居ない。

「……この力を使いこなすと髪が純銀になるんだ。ラ||テイリカの一部が浮き出てるのかな？」

少しだけ悠長な台詞を吐きながらも、自分の存在の強さに改めて驚愕する。圧倒的な存在、そこにいるだけで魔力の余波で空間が狂ってしまうと錯覚させるほどの強大な威圧感に

『貴様、一体何者——』

「説明している暇はない。だから——」

—— 擬似神格接続 完了

—— 擬似権能 使用可能

—— 第三虚数質量物質《時素》^{ルイン}生成可能

—— 現使用中に「滅びノ風」より変更開始

—— 使用魔術変更【祠ノ陽炎】に再設定

「五秒で殺す」

右手から放たれたのは光の槍だった。

それは魔術で一瞬で行使する魔術の発動を《時素》^{ルイン}によって加速させ、魔術を使う一

瞬の行使で複数の炎の術式を圧縮させ、膨大な熱量のエネルギーを魔人に放つ。

『ぐおおおおおっ!?!』

赤い魔刀である魔術殺しで斬り裂くが、その熱量は断続的に自分に向かっている。そして何より、魔術殺しで打ち消した側から多大な魔力が圧倒的質量で放たれている。

「悪いね。時間が無くてね」

『貴様っ!?!……っつおおおおおっ!?!?』

一瞬で魔人の背後に周り、同じ質量の太陽に匹敵する熱量の光線がアールⅡカーンを挟む。たった一瞬で命を奪われ蘇生、だが断続的に続く熱量にアールⅡカーンは命を奪われ続けていった。

『我が命が一瞬で……!』

「貴方は強かった。けど、影程度じゃ抑止力の力を得ても私に勝てないよ」

魔人が構えても全く反応出来ない速度でアール＝カーンの胴体にフィールの右腕が貫いた。七つの命など、今のフィールに対して意味などない。ただそれは邪神より異質な力を持った別次元の存在だ。

「本体なら勝ち目があったかもね。まあ、本来の私なら負ける気はしないけどね」

『……貴様は、一体何者だ』

「貴方が自分で言ったじゃん」

七つの命が尽き、消えゆく魔人が問う。

ため息を吐きながら貫いた右腕を抜き、少しだけ笑って名を告げた。偽る事を止めた、フィールの本当の名前を……

「私の名前はフィール＝レーダス」

偽る事をもう止めた。

巻き込むかもしれない。でも、もしそんな事をすればフィールは魔王だろうか抑止力であろうと殺すと決めた。

だから、偽って涙を流させるのもう止めた。

「セリカ叔母さんの二番弟子だよ」

魔人はその言葉を聞くと満足したように消えていった。

フィールは力の解放を止めると、白銀の翼も天使の輪も消えて、純銀に染まった髪が黒髪に戻っていった。瞳も青く染まった瞳から金色に戻っている。

「……フィール、ちゃん？」

「……お母さん、悪いけどあとは頼むね」

そう告げるとフィールは力尽きたように倒れていった。

倒れていく身体を誰かに支えられる事を感じながら、フィールは精神的な疲労とマナ欠乏症によって深い眠りについていた。

第26話

「フィール！おい、しっかりしろ！」

グレンがフィールを支えながら軽く揺する。

ただ聞こえたのは規則正しい寝息だ。魔力を使い果たし、おまけにあれ程の力を解放したのだ。ホツとしながらもフィールを背に抱え始めた。

フィールは正体を明かした。

フィール∥レーダス。時渡りに成功し、未来でセリカの弟子であり、そして……

「セラと……俺の……」

在りえざる世界から時を渡り、ここまで辿り着いたのがフィールだ。抑止力が介入したのも、グレンやセラの接触がこれ以上は危険と判断したのか、時を渡ったペナルティが発生したのかは分からない。

けど、グレンにはもう分かってしまった。
まるで、過去の自分を見ているようだったから。

『どうやら、その子は運命と戦う未来を選んだのね』

「つつ……！」

グレンの目の前に現れたのはナムルスだった。

全員が警戒しながら、戦闘態勢に入るがナムルスは首を横に振った。戦う気がないの
だろうが、警戒する事を止めない。

『もう私に抑止力の力は無いわ。その子にも貴方達にも何にもできない』

「んな話信じるでも……！」

『信じるかどうかは勝手にしなさい。けれど、一つだけ忠告しておくわ。グレン』

ナムルスの顔には悲しみがあつた。

それは、この子供の存在だ。この子は間違いなく存在している事自体が異常なのだ。

この世界でフィールが生まれていない時点で、フィールは生まれるはずのない異物のよ

うなものだ。

『その子の存在は奇跡そのものよ。ただし、それは有償の奇跡に過ぎない。それさえももう長くない』

「なっ……!!?」

「つつ……!!」

異物はやがて処理される。

抑止力や運命、そして異物である自分自身にさえも。

セラは知っていた。

フィールが長くない事は分かっていた。けれども、何も出来ない。フィールの死を止める事はどんな手を使っても覆せない。

邪神の力で時間を跳躍し、世界の真理に触れ、いずれ来たる日を終えた瞬間、フィールは必ず死に至る。

そして、その来たる日すら待たずして抑止力がフィールを殺そうとする。なんと皮肉な運命か。

『その子を少しでも長く生かしたいのなら、あの力を使わせないで。ただ、それだけよ』
「ちよつ、おい!？」

自壊する力を使えばその日にさえ保たない。

ナムルスはただ警告するかのようにグレンに告げた後、目の前から消えていた。
長くない、そう不穏な言葉を残して……



遺跡調査は終わり、星の回廊から帰還したグレン達はアルザーノ帝国学院に戻る事になった。フィールはその間、目を覚まさない。身体に相当な負荷が掛かったのか眠りから覚めなかった。

「セシリア先生、フィールの方は大丈夫なんですか……?」

「……大丈夫とは言い難いですけど、今はゆっくり寝てれば治ります」

フィールの手を握りながらセラは寄り添う。

あの戦いでだいぶ無茶をして、死の淵まで立たされたのだ。セラは手を握りながらセシリア先生の報告を聞いた。

「フィールさんの回路や霊魂体、精神体を調べてみたのですが、まず回路から。この子の回路は修復できないくらいに劣化してしまっています」

「劣化？」

「魔術を使い過ぎると回路が傷付いたりしますよね？それに似ているように思ったのですが、全く違います。彼女の回路は時間によつて経年劣化されたようになってます。まるで時間を跳んだかのように」

「！」

多分それが時を渡った代償の一つなのだろう。

魔術師の回路は経年劣化が始まるのは六十を超えた辺りからだ。フィールの場合は、時間を越えた故の代償で回路が老化現象を起こしているのかもしれない。

「霊魂体についてですが、傷付いているのは一部です。これは自然治癒に頼るしかあり

ません。まあほんの一部ですから一ヶ月もあれば元に戻るでしょう」

「良かった……」

「ただ、おかしな点が一つ。彼女の靈魂とは別に、全く別のの靈魂が彼女の手から検出されました」

グレンもセラもそれについては知っていた。

暴走していた時に顔を出した全く別の高次元な存在。手の甲に蝶のような羽の紋章が浮かび上がっているからだ。

多分だが、あの力には意思がある。

それだけは何となくわかっていた。

「二つに関してはそれ以上の問題はありませんが、問題は精神体については、彼女の精神体はかなり異常と呼べるでしょう。本当に15歳なんですかと匙を投げたいくらいに摩耗しています。精神体が擦り減るなんて普通はあり得ません」

「それが擦り減ってるって事は……」

「彼女の精神は、本来なら崩壊してもおかしくありません。悲しい過去があったのか。または死にたいと思える程の絶望を味わったのか」

精神体が摩耗するなんて、本来は有り得ない。

絶望し、精神に深い傷を負い、閉ざしてしまいう事については珍しくない。けれども、摩耗するというのはまた違う話だ。

もう死にたいと思える絶望に身を焦がし続けて、誰にも頼れなかったのかもしれない。

「とりあえず、今は眠ってもらって回路を私の方でなんとか修復は致します。途切れ途切れ回路の異常はあつたりしますし、霊魂も一部損傷している以上、絶対安静です。私の方でなんとかしましょう」

「でもそれなら教会で治療させた方がいいんじゃないか？」

「いや、止めておけ。フィールの存在は間違いない異端だ。教会で存在がバレれば『第十三聖伐実行隊』に殺されるぞ。俺ならそうする」

『第十三聖伐実行隊』

異端を狩る異端者は聖伐と言う名の下に処理する。それは避けた方がいい。教会関連でフィールの情報が伝わったりしたらそれこそ国が敵に変わる可能性もある。

教会の方が治療は早いかもしれないが、セシリア先生は法医魔術のプロだ。下手に預けるよりよっぽど早いだろう。

「教会もダメか……つてアルベルト!? 何でいやがんだ!？」

「俺だけじゃないぞ」

「どうも、グレン先輩、セラさん……」

「クリストフくんまで……」

アルベルトとクリストフがいつの間にかアルザーノ帝国魔術学院に来ていたのにグレンが驚きながら距離を取る。クリストフの手にはフルーツバケットとアルベルトの手にはケーキが入った綺麗な箱を持っていた。

「任務帰りで立ち寄ってこいと室長と翁からの指示だ。これは見舞い品だ」

「ゾツとしねえな……妙に律儀なのが余計」

「《金色の雷獣よ——」

「ちよっ、おま【プラズマ・フィールド】は止める！」

アルベルトも自覚はあった。

こんな大男が女子に人気なケーキ屋で並んで買うなんて似合わなすぎる自覚はあった。

「そもそも、この見舞い品を選んだのはイヴだ」

「あつ？あのヒス女が？」

「ちよつとグレンくん？女の子にそんな事言っちゃめつ、だよ」

「子供扱いすんな白犬！」

「犬って言わないで！」

「重傷者の前だ。静かにしろ」

アルベルトが二人に拳骨をかまし、ため息をついた。

少なからず、暫くは目が醒めないだろう。彼女の靈魂も精神も酷く傷付いて、肉体的にも死ぬ程に辛かった筈だ。

「僕については生存確認の魔術を結んでおこうと思っただけです。セラさんやグレン先輩はどうしますか？」

「かけ直してもらってもいい?」

「俺も頼むわ」

フィールの髪を3本だけ貰いグレンとセラ、クリストフは小指に巻きつけて魔術をかけた。きつとまた無茶をしたら今度こそ自分達が助けに行くと決意し。

★★★

一ヶ月が経った。

一ヶ月の間には色々な事があった。社交舞踏会によるルミアとフィール暗殺計画は特務分室の活躍により防ぐ事が出来た。何せフィールが眠っている医務室にはあらゆる情報をシャットアウトして断絶結界を張るセリカが居た以上、解決は容易な話だったらしい。

事件は終わり、終息を迎えたその矢先……

「グレン先生!セラ先生!」

「くっつ、セシリア先生?授業中つすけど」

「フィールさんが目を覚ましました……!」
「つつ……!」

授業中の速報にグレンは生徒達を見る。全員が行ってこいと言う顔をしていたので、グレンはセラよりも早く教室から駆け出した。セラも追いかけてきたが、グレンが見に行っただから問題ないと思い、セシリア先生にフィールの容態を聞いた。

「フィールは大丈夫だったんですか?」

「身体的には……ですが……」

「何か、あるんですか?」

「それが……」

セシリア先生も言い淀んでいる。

セラは覚悟がある瞳を向け、セシリアの話聞き始めた。

★★★

「フィール！」

窓の外を見ていたフィールの肩がビクツと震えた。

息切れをしながら彼女に近づく。伝えたい事も叱らなければいけない事も沢山ある。

けど、今はそれ以上に彼女の心配をした。

目が覚めて苦しくはないからとか、まだ不調かと聞きたい事が妙に緊張して出てこない。

「大丈夫、なのか？」

「？」

「傷……とか、靈魂とかさ……」

「……完治、してるとは聞いてます……」

その言葉にホツとしてフィールに近づく。

だが、フィールはどこか怯えているように見えた。黙っていた事を叱る未来でも予想したのか、苦笑いしながらグレンは頭を搔く。

「いやー、良かった良かった。全く、心配かけさせやがって」

「……………」

「特務分室の奴等も心配してたんだぜ？セリカなんて過保護が天元突破する勢いだったしな」

「……………」

グレンが不器用ながら励まそうとするが、フィールは終始無言だった。圧巻されたかのような無言ではなく、まるで話が理解できないかのような無言にグレンは首を傾げた。

「フィール？」

「あの……………」

フィールは口を開き、グレンに質問した。

それは、グレンにとって予想から外れた悲しい質問を。



「そんな……」

「お辛い気持ちは分かります。ですが、確認したところ、確定でしょう」

教室にいたセラにセシリア先生は告げる。

その言葉を聞いたクラスメイトも全員、動揺と混乱をしていた。

「そんなのって……」

「精神体が傷付き、長い間放置されていた結果なのかもしれません。向き合うものが過酷だったからかは分かりません」

セシリア先生はフィールの症状を告げた。

「フィールさんは……」

「あなたは……………誰ですか？」

唇から紡がれる声、それが確かな音と意味を結び、グレンの脳に浸透する。名前を質問されたから？ 誰かと質問されたから？

違う。嘘だ。ありえないと混乱する。

彼女がそんな質問をするはずがない。だって、世界が違ったとしても彼女は自分の……………

その言葉にただ呆然と立ち尽くしていた。

セシリア先生が告げた言葉はとてつもなく残酷な現実だった。グレンにもセラにも、事情を知っているクラスメイトでさえ……………

彼女が告げた問いはグレンには余りにも残酷な言葉だった。その言葉を聞いたセラも子供のように涙を流して泣いていた。

『彼女は……殆どの記憶の一切を失っています』

偽りでも、全く違う世界であろうが漸く繋がろうとしていた家族の絆は、運命が拒絶するかのように再び二人からフィールを引き裂かれた。

第6章 春風と銀風の再結成

第27話

「……えっと、初めまして？ですか。フィール＝ウォルフオレンです。記憶喪失……らしいのでまた仲良くしてくれると嬉しいです」

クラスメイトの全員が哑然としていた。

改めて自己紹介をされたクラスメイトの顔は険しいものだった。特に遠征に行つた仲間は特に。

フィールは過去の記憶の一切を失っていた。

それどころか、魔術も自分が誰なのかすら分からない。

特に傷付いているのはグレンとセラ、セリカだ。

動揺こそ押し殺しているものの、未だに信じられないと思つてしまうほどに。

「ああ、まあお前なら大丈夫だと思つう。また、仲良くしてやつてくれ」

「も、もちろんですわ！」

「お、おう！よろしくなフィール！」

空元気でクラスメイトが歓迎する。

フィールはそれを見て、記憶がなくなつた自分を少しだけ憎んだ。多分、元のフィールはこんな顔させる人間ではないと、分かつていたのに。

★★★

次の日、看板に張り出しがあつた。

グレンは欠伸混じりでそれを見たのだが……

『緊急通達 アルザーノ帝国魔術学院 学院教育委員会

以下、一に該当する者を、二の通りの処分とすることを決定し、ここに通知する。

一、対象者：リイエル・レイフオード。

二、処分内容：落第退学（今年度前期の終了時点で上記の処分とする）

三、処分理由：生徒に要求する一定水準の学力非保持、故の在籍資格失効。

「が、学院長!?! どう言う事ですか!?!」

「ど、ど、どおいうことつすか、学院長おおおおお—— ツ!?!」

掲示板でそんな通達を発見するや否や、グレンとセラは猛烈な勢いで学院長室に駆け込み、執務室のリック学院長へ、机越しに身を乗り出すように詰め寄っていた。

「まあ、そろそろ君が来る頃じゃとは思っていたよ……」

「確かに、こいつはマジモンのバカですよ!?! 今のところ、成績、ボロクソですし!」

「むう……バカって言うほうがバカ」

「リエルちゃん、勉強苦手だったもんね……」

リエルはグレンに後ろ襟首を掴まれぶら下げられながら、不服そうに言う。セラに手を掴まれたまま何故かフィールも駆け込む形になったのだが……それにも理由がある。

そもそも帝国政府によって公的に運営される魔術学院は富国強兵、基本的に実力至上

主義だ。能力と意欲ある者は優遇するが、無能者、意欲なき者には厳しい。

よって、学業成績が著しく悪い生徒に対しては、学院教育委員会が『落第退学』という強制的に学院在籍資格を剥奪し、退学させる処分を下すことがあるのだが……

「一番成績に響く前期期末試験がまだだったんっすよ!!?その結果すら待たず、指導も補習も追試も留年もすっ飛ばして、いきなり退学なんて、絶対おかしいっすよ!!?」

「確かに……もしかして国軍省の強引なやり方を面白く思わない人達のせい?」

「まあ概ねその通りじゃ。器物損壊や成績不振につけ込んで退学を要求したのじゃろう」

ルミアの護衛に強引な手を使った手前で、それを納得出来ない人間はいる。陛下の一目置く宮廷魔導師団は特にそう言った面では逆らえないが、それを元にリエルの性格で学院を荒らされても溜まったものではない。それらの責任が担任と学院の不手際でと言われて名誉を傷つけられたら尚更だ。

「てかセラは何で?」

「これっ!!」

「えっと……はっ?」

「フィールちゃんに名指しで短期留学の誘い、聖リリイ魔術女学院から。と言うか受理されてるし」

「何故に!?!」

短期留学のオファーも既に受理されてるらしい。

セラも封筒と制服が届いた瞬間、フィールを抱えて『疾風脚』シュトロムで学院まで来たくらいだ。学院長がああそれか、と言う顔をしながら話し始めた。

「それに関しては学院の生徒体験留学期間と言うのがあってのお。首席や次席、成績優秀者数名なら暫くの名目で短期留学が出来るシステムがあるのじやよ。まあアルザーノ帝国は他学院より優秀な故か参加する生徒は殆ど居なかったのじやが」

「えっと……つまり私が短期留学オファーを……?」

「まあそう言う事じゃ、フィールちゃんは首席じゃったからのお」

「それ記憶を失くす前の……私が?」

「ああ、それは間違いなく」

おずおずしながらもファイルが確認する。

今のファイルは常時怯えてるようだった。ファイルは周囲が少し怖いらしい。自分が知っていたものが知らない。自分がどう言った人間なのか理解出来ない。一体自分はどんな存在だったのか。知っているはずなのに知らない人に声をかけられるそのズレにファイルは少し恐怖しているらしい。

「記憶を無くす前のファイルが？何で？」

「分かりません。……その、私は宮廷魔導師団だったんですよ？……もしかしたら、『前』の自分が……何があるって思ってたのも」

「いや、ファイルちゃんはどこらかと言うと嬉々としていたぞ？『行きたい行きたい！』と結構子供のように」

「私はまだ子供なんですけど……」

首をコテンと傾げる。

いつも冷静でクールなイメージのファイルが子供のように駄々を捏ねているなんてグレン達には想像が付かなかった。

「じゃあ……もしかしたら『前』の自分は何が想い入れがあったのかもしれませんが」
「……まさか、母校とか？」

「母校？どう言う事ですか？」

「ああいや……なんでもない」

グレン達は出来るだけフィールルの正体を明かさないでいる。それは単純な話、フィールルの精神的な病によつて記憶喪失が引き起こされたのなら忘れていた方が幸せなのかもしれない。思い出してほしいと言う反面、傷付いてでも思い出してほしいと思わない自分がいる。

「と言うか学院長、リエルの退学回避のなんか無いんですか!？」

「あるにはあるんじやが、実はリエルちゃんもオフアアが来てるんじやよ」

「なっ、何処つすかそこは！」

「奇妙な偶然なのじやが、フィールちゃんと同じ聖リリイ魔術女学院から」

グレンとセラも何故と首を傾げる。

フィールルの場合は既にオフアアが来ていたからこそ手続きがあつたが、その反面で

リイエルに関しては関わりすらなかったのに。

「……なんでリイエルにも？ フィールみたいに手続き無しでいきなり短期留学のオファーが……？ いや！ 今はそんなことどうでもいい！ リイエルに短期留学のオファーが来たつてのは間違いないんすか!？」

「うむ。今回、反国軍省派のリイエルちゃんに対する攻撃点は、成績不振による学院在籍資格への疑問、その一点じゃ。つまり、それを覆してやればいい」

「そうっすね！ 他校への留学つてのは、総合成績評価に大きく加点される立派な『実績』だ！ リイエルが短期留学を無事に成功させれば……誰も文句は言えねえ！」

そもそも聖リイ魔術女学院はかなり有名だ。

アルザーノ帝国が首都、帝都オルランドより北西へ進んだ湖水地方リタニアにある私立の魔術学院。いわゆる、女子のみが通える女子校であり、上流階級層の子女御用達の全寮制お嬢様学校だ。

学院の有名さで言えばアルザーノ帝国学院と同じくらい。

そこに短期留学を成功させれば実績に繋がり、退学を覆せるのだ。

だがそんな中、おずおずとフィールが手を挙げる。

「あの……話を進める前に……リエルちゃんは……大丈夫なんですか？」

「大丈夫って？ いや、短期留学すりゃリエルは——」

「いや……そうじゃなくて精神的な意味で……」

「はあ？」

「どう言う意味だ？ とグレンが尋ねる。

その質問の答えをフィールがリエルに直接聞いた。

「リエルちゃん、貴女は短期留学出来る？」

「たんきりゅーがく？ なにそれ……美味しいの？」

「一ヶ月くらい……学院を離れて一人で勉強出来る？」

「？ 何で離れなきゃいけないの？」

「そうしないと……学院に居られなくなっちゃうから」

リエルが目を見開いて呆然とする。

そんな事をしたくないと、涙目になって身体が震える。それを見たグレンはギョツと

する。

「……や、やだ……たんきりゆうがくも、居られなくなるのも……やだ」

「それは……なんで？どうして嫌なの？」

「グレンや、セラや、ルミアや、システイーナや、フィールと離れたくない……1人になるのが……怖い……だから……」

「……うん、怖いよね。おいで」

リエルが震える手でフィールを抱きしめていた。

母親のようによしよしと撫でながら胸でリエルの涙を受け止めていた。グレン達が見ると苦い顔をしていた。そう、リエルは精神的にはまだ幼い。記憶喪失のフィールでも分かるように、この学校や仲間依存に近いレベルになってしまっている。

そんな子供をたった一人で行かせれば寂しいし怖いに決まっている。まだ環境に馴染めないフィールだから分かってしまった。

「そう言う事か……けど、どうすりゃいいんだよ」

「私は確定してる……なんですよね？ だったら、私とせめて二人くらいリエルの友達は欲しいです。なんとかならないですか学院長？」

「そうは言ってもものう」

「安心しろ。それなら可能だ」

学院長室の扉が開くと聞き慣れた声が聞こえた。

アルベルトとセリカ、システイーナ、ルミアが入ってきた。

「リエルはあくまで護衛だ。なのでそれを逆手に二人に同行してもらおうように《隠者》が既に工作に動いている。それが効率的だと上層部も判断し既に動いている」

「えっと……すみません貴方は？」

「宮廷魔導師団のアルベルトだよ。フィールは記憶失くしてつから知らないのは無理ねえけど」

「俺の事はいい」

現状、フィールはまだ帝国宮廷魔導師団・特務分室の《愚者》として在籍している。記憶喪失である以上、グレン達はフィールを除隊させるべきだと言ったのだが、下手に

フィールを除隊させれば、除隊された理由から調べ上げられる可能性がある。

元々、フィールが軍に入ったのは『天の智慧研究会』の牽制と、単純にフィールが魔術殺しの駒として使えるからだ。

今のフィールは任務は与えられないが在籍している。言わば休隊と言った所だ。アルベルトも記憶を無くして幸せになるのならそちらを望みたいところではあるが……

「グレン、セラ、妙だと思わないか？」

「……妙？」

「リエルの落第退学処分。これは、今の帝国政府上層部の勢力争いの状況を考えれば、あり得なくはないが……リエルが落第退学処分になった途端の、この短期留学のオファーだ」

「偶然にしちや都合が良すぎる……つてこと？」

静かに頷くアルベルト。

リエルは『Project: Revive Life』の成功例。かつての帝国魔術界の最暗部であり、天の智慧研究会すらも一枚絡んだ禁呪の成果だ。今回の一件、単なる上層部の勢力争いとは、また別の思惑が動いているのかもしれない可能性があるの

だ。

「そして極め付けはフィールだ」

「私……ですか？」

「オファアの日程は大抵は決まっている。だが、この時期的には学院としてはおかしい。試験も近い中で、短期留学なんて本来は行われぬ。それについて《法皇》が調べたが、やはりフィール自身がその日に短期留学を行うように細工していた」

「……厄介ごとがある可能性が高いつて事か」

フィールが目細める。

過去の私は短期留学の日程の中に何かがあると分かっていた？ グレン先生達は隠しているようだが、自分がどう言う存在なのか明かさない理由に繋がっている。

フィール自身、未来視が使えるわけじゃない。

けど、まるで未来を知っているかのように細工していた。

自分は一体何者なのか考えていた。

「グレンとセラは？」

「私は行けるよ?けど、グレン君は……」

「そもそも女子学院だろ。女の園に俺が行けるわけ……」

「いや。グレン、お前もアルザーノ帝国魔術学院から派遣された臨時講師として、リイエールに同行して貰う」

不意に、アルベルトが訳のわからないことを言い始めた。

そもそも性別で行けないと今言ったばかりなのに。流石に行けるわけがない。

「……お前、何言ってるんだ?無理に決まってるだろ?俺、男だぞ!」

「案ずるな、手は打ってある」

「そつ、私の出番ってわけ」

「セリカが?」

「おう。セラ、こつちゃこいこい」

「?」

セリカはセラを手招きして赤い瓶を渡して説明する。

セラは首を傾げたまま、セラに近づいて説明通りに行動する。

「セラ、この薬品を口に含んでくれ。ああ飲まないでな」

「えっ? あつ、はい」

「グレン、こつち向け」

「はっ? 何する気——」

「《行ってこい》!」

「きゃあつ!」

「ぬおっ!」

セリカがセラの背中を風の魔術で押す。

突き飛ばされたセラは薬品を口に含んだままグレンの唇にぶつかって押し倒すように倒れる。

「よし、セラは口に入った薬品を飲ませろ! 口移しで」

「(ちよつ……!?!?セ、セリカさん／＼!?!無理で——)」

「《GO》!」

「(ちよつ、唇が離れねえんだけど!?!／＼／)」

「口移しするまで終わらないぞー」

「あ、悪魔……／＼／＼」

セリカの超高度な魔術で二人を磁石のようにくっつけて離さない。

フィールは羞恥心で手で目を覆いながらも、チラ見していた。それを聞いた瞬間、セラは術が解ける前に羞恥心に耐え切れる自信がなかった為、口移しする事にした。

押し倒しているグレンに口移しで薬品を飲ませる。

それが妙に艶めかしいのかシステイーナやルミアは混乱と困惑で頭が追いつかなかった。

「き、き、キス!? キスだなんて!? ずる——不潔ですッ! いきなり何やってるんですか、何やらせてるんですかセラ先生にアルフォネア教授くっツ! あわ、あわわわわわわわわわ——」

「くくくくくくッ!? (うわあ……)」

「……っ! (あれっ……このシチュどつかで見た?)」

ルミアも顔を真っ赤にして、両の掌で顔を覆い、その指の隙間から濃厚に唇を重ね合

う2人を、穴が開くほどしつかりと凝視していた。フィールは逆に失った記憶を手繰り寄せるかのように頭を抱えていた。

「「ぶはあー！」」

「あ、あの大丈夫——」

「ちよつとセリカさん!？」

「いやあ、孫の顔が楽しみだな。なつ、フィール?」

「え、ええ、そ、そうですね……／＼／＼」

「~~~~~!!!!／＼／＼」

セラはその言葉に真つ赤になって学院長室の隅で膝を抱えて顔を隠す。子供、更には生徒の前で公開デーパーキスなんてしたせい記憶を殴って失いたいくらいの羞恥心に涙目になっていた。

「セリカてめえ!!セラに何やらせて何飲ませたんだコラ!？」

「いや私よりセラが適任かなって、テヘペロ☆まあ痛くしないから大丈夫!《陰陽の理は我に在り・万物の創造主に弓引きて・其の躰を造り替えん》——ツ!」

そうしている間に、グレンの姿は立ち上る煙にすっかり覆われて見えなくなり…メキメキメキメキと不自然な音は鳴り続け…やがて…

「がああああああああああああああああああ——ッ!」

固唾を呑んで見守るシステイーナ達を余所に、グレンを包むように煙はゆつくり晴れていく。痛くはないが、嫌な音に少しだけ恐怖しながらもグレンを見つめる。

「げほっ、ごほっ…一体、何なんだよ? セリカ、お前、俺に何を…」

やがて、グレンが嫌そうに煙を振り払いながら、再び一同の前に姿を現す。

だが——セラも、システイーナも、ルミアも、フィールも、そして、あの何事にも動じないリイエルさえも…煙の中から現れたグレンの姿に、目を瞬かせて啞然としていた。

「……ん? 何だよ、お前ら? 俺の顔に何かついてるか…って、なんだ? 俺の声、さつきか

ら妙に甲高いな？風邪でも引いたか……？」

困ったようにグレンが頭をかくと、妙にほっそりした指に長い髪がさらりと絡まった。

「な、なんだこりゃ？髪がいつの間にか、こんなに伸びて……？なんか変だな？」

「あ、あのお……貴方、グレン先生……？ですよね……？」

「すっげ……」

何を言っている？

妙な事を聞いてくるシステイーナがグレンが訝しむような表情を向ける。逆にフィールはその姿にそんな安易な言葉しか出なかった。

「はあ？お前、一体、何言ってるんだ？俺が俺以外の何に見える……」

そう言いながら、グレンが自分の胸を叩くと……ぽによん。普段はない感触が、そこにあつた。思考が一瞬飛ぶくらいの柔らかな感触に目を見開く。

「……………はいつ？」

グレンが自分の胸部を見下ろす。

シャツを布下から窮屈そうに押し上げる丘陵が二つ、そこにある。しかも中々に大きな……

「ふむ、俺の固有魔術【戦闘力^{0.ス}想定眼^{カウ}】が計測するに…戦闘力はルミアとほぼ互角…87つてところかな？ いやあ、我ながら中々——つて、何iiiiiiii——ツ!？」

グレンが目を剥いて、自分の胸を両手で掴み、揉み上げる。

本来なら掴んだだけで幸せと感じるたわわな巨乳は全く持つて今は嬉しくなかった。

「なんじやこりやああああああああ——つ!? オパーイツ!？」

「ちよ!?! 先生つたら、何揉んでるんですか!?! 女性の胸を無遠慮に揉むなんて、そんなこと許され——あ、あれ!?! で、でもこの場合はいいの!?!」

魔術女学院へと派遣される」

「ふっぎけんな!? ナチュラルに俺を巻き込むんじゃねええええ——ツ!」

「因みに、この作戦立案者は、特務分室の室長《魔術師》のイヴーイグナイトだ」

「あのクソアマあああああ——ツ!?! つか絶対、泣かすツ! 行き遅れるヒス女ああああ!!」

「静かにしろ。お前の同行は必要だと感じた上での決断だグレン。俺が単なる嫌がらせで、お前に変身する事を強要すると、本気で思うか?」

「いや…それは思わねえけど……」

「まあ、半分は嫌がらせだが」

「うおおい!? アルベルトてめえ…!? 段々、いい性格になつてきやがったなあ!」

グレン（女）とアルベルトが口論し合っている中で、フィールはハッ!と何かを思い出し、手のひらを叩いた。先程の違和感が取れたようにフィールは右手を目の前に持つてくる。

「《虚数の箱よ・閉ざされし宝は・汝の手に開かれん》」

フィールが詠唱を始める。

白魔【アラウンド・ボックス】指定した道具を自分が指定した空間に入れる事の出来る魔術。ただし正しく認識していなければ失敗する為、殆どは使われない高等魔術だ。

フィールは一冊の本を右手に召喚した。

そんな魔術は教えてないのにそれが使えると言う事は……

「フィール!?何か思い出したのか?!」

「これ……この執筆者、セリカさんですよ。記憶に薄つすらと浮かんだんですけど

……」

「ん?」

「何が書いてあんだ……?」

「えっと……題名は『ばーふえくと秘伝書』?」

グレンが真剣な顔で見つめる。

読み上げますか?とフィールが聞くと全員が真剣な表情で耳を傾けた。未来の参考書だ。何が記述されているかもしれない……

フィールは全員に視線で了承を貰い、読み上げる。

「えつと……読み上げますね。『この本を読んでいるとき、私は既にもいないかもしれない。なので、とりあえずは教育用にと書いてみました。お年頃って言うのと12歳から思春期って聞くのでまあ興味を持ってくれたら幸いです。参考はセラとグレンのを覗き見したから知識はバツチリだ。じゃあまず子作りについての方法ですが、簡単に言うところ……」

***に○○○○をブチ込——」

「すとおおおおおおおおつぷ!!?!」

『おつと、一回目の警告だぜ?! 2回目止めようとするって発情する呪いカリスが発動するから注意してね☆続いて男を喜ばせる方法ですが——』

「【愚者の世界いいいいっ!!!!】」

【愚者の世界】が発動し、呪いは起動しなくなる。

グレンとセラは悲鳴をあげるかのように読み上げるのを全力で阻止した。フィールは止められないままだったせいかわれ恥心で崩れ落ちる。グレン（女）はセリカに近づいて、息切れたまま無言でヘッドロックをかける。

まさか並行世界のセリカがフィールドに残したものが、性的教育本（上級）だと誰が予想できたか。

「いだだだだだっ!!ちよ、何で私が食らってんだ、ちよっ!?た、タンマタンマ!」

「元を正せばお前のせいだろうがあああああっ!!つかあるのか!?この世界にも同じものがあるのか!」

「いや似たようなものはあるけ、いだだだだだっ!!タツプ!タツプ!!誰かゴングを鳴らしてくれ!」

「今すぐ捨ててこいやああああああっ!!!」

【愚者の世界】が解けるまでの3分間、グレン(女)はセリカにセラの分の腹いせと理不尽なまでの並行世界のセリカに対する八つ当たりをぶつけた。そりやあ並行世界とはいえ、営みを覗き見されて参考書にされて子供に渡されるなんて残酷過ぎる。

セラは羞恥心で顔を真っ赤にしながら、口移しの事を考えると気を失いかねないので何も考えず、『ぱーふえくと秘伝書』を拾い上げ、『シユレット・テンペスト』で千切りにするかのように切り裂いていた。

第28話

アルザーノ帝国、フェジテを出て早三日、フィール達は帝都オルランドへと辿り着いていた。ここからは馬車ではなく鉄道列車に乗って、聖リリイ女学院があるリリタニアへと向かうことになる。

「……大丈夫ですか？グレン先生」

「ああ……大丈夫だ。船よりは……」

「……すみません。酔い止めの魔術覚えておくべきでした」

『前』のフィールは揺れを抑える魔術を使って酔い止めとしていたが、今のフィールは学院の基礎魔術しか使えない。改変も短縮も流石だが、軍用魔術を教えていない学生以上の実力で打ち止め状態。

軍用魔術は単純に今のフィールには厳しいと思ひ、教えなかつた。それは今のフィールが万が一襲われ、人を殺すという事になった場合、今のフィールでは耐え切れる自信

がないからだ。

少なからず、防衛の為に拳闘や風の魔術を重点的にセラが教えてる。『疾風脚』シユトロムはすぐにマスターしたが、殺傷能力が高い【シユレッド・テンペスト】や【エア・ブレード】のような軍用魔術は教えなかった。

「普通に酔い止め持つてこなかったグレンくんが悪いから気にしないでいいよフィールちゃん」

「うっせ、酔い止め意外と高いんだよ」

「全く、先生つたら……」

セラもシステイーナも頭を痛めていた。

駅のホーム内に、力強い機関音を立てながら、グレン達の前に姿を現したのは魔術を使わずに科学の力で動く機関車だ。

「ふわあ……！」

フィールは少し目を輝かせていた。

黒鉄で形作られた重厚なその造形。頭部の煙突から大量の煙を吐き出すその雄姿。そんな機関車の姿に圧倒された三人が、感動と感慨に目を丸くしながら、それを見つめている。

「……凄いなあ……！これが機関車……！」

「フィールちゃん、そう言うの興味あるの？」

「興味は……どちらかと言うと機関車そのものじゃなくて動く原理の方に知りたい……それに興味があります……！」

少なからず興奮しているようだ。

それこそ、子供のように目を輝かせて知りたい欲求を抑えきれない様子だった。

「……！セラ先生、御手洗い行つてきていいですか？」

「いいよ、時間とか気をつけて迷子にならないように！」

「（この地図……全部記憶してるので大丈夫です……！」

うわ流石と呟くグレン。

記憶を失おうと優秀なのは変わりない。それこそ、風使いとしてはシステイーナよりも感性が強い。フィールに対して先生として教えた事はあまり無かったが、改めてその優秀さに舌を巻いた。苦笑いをしながらフィールの御手洗いを見送った後、重大な事に気付いた。

「白猫、リエルはどうした？」

「えっ、私の後ろに……あれ？」

「まさか……」

「迷子かよあのアホおおおお!!?!」

いつの間にかシステイーナの後ろにいたリエルの姿が見えない。十中八九、迷子になった事に気付いたグレンはホーム内を駆け回る羽目になった。

★★★

「ゴホッ……ゴホッ……!」

胸を押さえつけてトイレに血を吐き出す。
胸が締め付けられるような鋭い痛みに呼吸すら忘れてしまう程に。

「何……これ……」

手にベツタリとついた血。

こんなに血を吐き出す程に、自分の身体がまともじゃないのに恐怖した。フィールルⅡ
ウォルフオレンは何を抱えていたのか分からない。日記も、何かを患っていた記録も残
されていない。

「……ハア……ハア……」

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。

目が回るほどに自分の中で決壊していくようなナニかと、一体自分が何者なのかと言
う懐疑的な思考が、自分を呪った。

何を抱えていたのか。

そして、二人は何を隠しているのか。

身体が重い。

今の自分はフィールと言う名前の別人だ。フィールはフィールⅡウォルフオレンを知らない。だからこそ、今の自分が気持ち悪くて仕方がない。何を抱えているか知らないが、ただ少しずつ死んでいく身体は少女の心に恐怖を植え付けるようだった。

手を水で洗い流し、御手洗いを出てセラ達の方へ向かう。

きつと、フィールも苦しい事を我慢してでも心配させないと思っただろう。

「ハア……………《慈愛の天使よ》」

気休めの「ライフ・アップ」を身体にかける。

少しは痛みが和らぐ。治療限界も当然気にしなければいけないので一日二回が限度だ。ただ、まるで死神に呪われたかのような身体の崩壊にフィール自身は吐き気しかなかった。

★★★

「えっ……………!?リリエルちゃん……………迷子に!？」

『そーなんだよ！時間的に後15分だ！機関車が発車する五分前まで出来れば探してくれ！』

「分かりました……！」

グレンに渡された通信機器で連絡を受け取りリエルを探す。ここは駅だ。人も多
いし、混雑している。リエルを探すのは至難の業だ。

「……えっと、《我に従え・風の民よ・我は風統べる姫なり》」

黒魔改「ストーム・グラスパー」を使って風による広範囲感知を行う。風で分かるの
は精々人間の身長くらいだが、リエルくらいの身長の人がそう多くは居ないはず。

それくらいの身長の人間を感知して走る。

駅からそれ程遠く離れなくてよかった。案内掲示板の前で立っているリエルを見
つけた。

「リエルちゃん！」

「ん………フィール？どこ行ってたの？」

「こつちのセリフ……迷子になったの貴女!!」

ため息をついてリエルの腕を掴んで移動する。

迷子になって探すのに魔術を使って色々と疲れたと言うのに、リエルは首を傾げながら重大さに気付いていない。

するとリエルは突然、フィールの腕を掴み返した。

「……えっ?」

「血の匂いにする……フィールから」

「つつ……!」

とてつもなく勘が鋭い。

あまり心配かけたくないからと離れたのに一瞬でバレた事にフィールは苦い顔をしていた。

「……とりあえずそれは後、早くしないと乗り遅れて」

「あの……大丈夫ですか?」

急いでいる時に後ろから声が聞こえた。
振り返ると聖リイ学院の制服を着た女の子がいた。

「えっ……？」

フィールは目を見開いた。

眼鏡をかけて綺麗な茶髪をした同い年くらいの子、大した特徴は無いかもしれない。だが、フィールは目が離せなかった。

妙な既視感があった。

知らない。知るはずがない。

いや、知っていたけど忘れ……

『…………ごめんね…………フィール…………』

声が聞こえた次の瞬間。

その一瞬、目の前に写ったのは血に塗れた死体となったその子の光景だった。紅かった。何もかもが紅い。空も地面も、見える全てが染まってしまう程に……

「つつ……あつ……!」

「フィール…!」

頭が割れるような痛みがフィールを襲う。

違う違う違う違う。あり得ない、あり得るはずがない。見えた紅色は間違いなく彼女だった。

知らない。知らない筈だ。

会ったことすら初めて、知っているはずが無い。

『行こう!フィール!』

「だ、大丈夫なんですか!」

けれども、知っている。

記憶を失っても、心は覚えていた。

彼女は、いつも自分の隣を歩いて笑っていた。

失っても、記憶が無くても生きて会いたいと何度も願った。分からない。感情が抑えきれない、頭が痛くて思考がまとまらない。

自然と、涙が頬を伝って零れ落ちた。

「……………エ……………ルザ……………？」

ファイルが口にした名前。

それはかつて、背中を預けた相棒の名前だった。そして、未来でファイルが死なせてしまい、この世界で今を生きて目の前に現れた。

エルザⅡヴイリーフ

未来で帝国宮廷魔導師団の《戦車》としてフィールと共に任務を遂行していたフィールの親友だ。

「つつ!?何で、私の…名前を?」

「フィール…?あつ…!」

限界だった。

今と昔、今を生きる何も知らない自分と、失った過去の自分が入り混じる。記憶が混雑し、頭痛が激しくなり、フィールはエルザの方に倒れていく。

痛みに支配される。何も考えられなくなっていく。

私は知らない。今の私が知らなくとも『過去』の私に繋がれた絆は記憶などなくとも分かっってしまう程に鮮明に焼き付いていた感情だった。

きつと、彼女が大切だった。

大切だから、きつとフィールは彼女を…

「フィール!!」

「フィールさん!」

リイエルの声が聞こえた。

エルザの心配する声が聞こえた。

それ以上は何も、聞こえなかった。

忘れてくなかった。

どうして忘れてしまったのか。涙が流れても、胸が痛くとも、何も思い出せない。

無情にも消えたものは取り戻せない。

ただ、流れていく涙と共に、ファイルは意識を失った。

第29話

夢を見た。

遠い遠い幸せな記憶だった。地獄の中でも隣を歩いてくれる仲間がいたから。自分の手が血に塗れても怖くなつて、そう思えたからきつと投げ出す事をしなかったんだと思う。

あの教室で声をかけてくれなきやきつと。

私はもう、死んでいた。いつも支えてくれて、隣で笑つて、前へ突き進む。私はまだ子供で、その時はいつも照れ臭くて言えなかった。

アンタに会えて良かったって……

言いたくても恥ずかしくて口にしなかった。

けど……

『……ねえ……終わつたよ……
……！ねえ
私、仇を打つたよ。だからさ、目を…開けてよっ』

誰かの泣き声でした。

誰かが亡骸を抱きしめて泣き叫んでいた。正義の魔法使いを名乗る男に殺され、自分と一緒に隣を歩いてくれた彼女は居なくなってしまった。

「あ、ああつ……！」

ただ、血塗れの手に震えた。

ただ、大切なものを失った冷たさに涙が溢れた。

ただ、もう二度と会えない親友の亡骸を抱いて、泣き叫んだ。

もう、死にたいと何度も思った。

弱ければ死ねたのに、強くても守れなかった。

正義の魔法使い、そんな儂い夢を追つた末路が……

「あああああああああああああああああああああああッ
!!!!!!」

こんな滑稽な未来なら、自分は何のために生きていたのか分からなくなってしまった。

★★★

「っっは……!!」

「うわっ!？」

目が覚めると、全身から冷や汗が止まらなかつた。

知らない天井にガタガタ動く地面、列車の中に居る事すら認識が遅れる程に、息切れをしていた。

「ゆ……め……?？」

「フィール、大丈夫?」

「……ハア……ハア……」

自分の右手を見る。

少し他人より白い肌であるフィールの手にはマメが出来ているが、それ以外は何もな
い。

ただ、夢がフラッシュバックする。

自分の手がドス黒い血で染まっているように見えた。

「うっ………」

「おおい、吐くな！ほら、エチケツト袋!!」

吐き気がした。

口元を抑えるフィールにグレンが慌ててエチケツト袋を渡す。

アレが、アレが私の過去？

殺戮を繰り返し、血に汚れた姿が本来の自分？

受け入れきれなかった。

受け入れられない記憶が混ざり合い、今の自分を穢しているような感覚に襲われた。

「大丈夫、なのか？列車に乗ったはいいいけど帰った方がいいんじゃない」

「だ、大丈夫ですよ……少し、嫌な夢を見ただけです」

「……どんな、夢だったの？」

「えつと……誰かの死体を抱き抱えて泣いてたんです。血塗れで、冷たくなって……ちようどその人みたいなの……」

ん？その人？

髪は茶髪に近くて、そして何より夢で見た女の子にそっくりだった。どうやら夢を見ているようだ、フィールは自分の頬をつねるが、痛みはあった。

現実と夢の区別が微妙につかなかった。

違和感にフィールは瞬きを二回した。

どうやら、自分は幻術にかけられている様だ。白魔【マインド・アップ】で精神を強化しても目の前にいる女子は消えなかった。

そして現実だと認識した瞬間、フィールは後退りしながら驚愕していた。

「えつ、あ、ええつ!?生きてる!？」

「初対面で酷い言われ様だね!?生まれてこの方死んでないよ!？」

「えつ、でも……はっ?だって……貴女死——」

「はいはい悪い。ちよつとコイツ錯乱してただけだから」

グレンに口を塞がれるフィール。

過去の私が事情がよく分からないが、抱えていた死体がこの子だった筈だ。
でも、生きている。ただの思い違い？

それならばよかつたんだけど……………

「……………えつと、ごめんなさい」

「あ、ううん。大丈夫。私はエルザⅡヴィーリフ。貴女は？」

「フィール、フィールⅡウォルフオレン」

フィールとエルザは互いに握手をする。

その時、妙な違和感に気付いた。フィールは少しだけ反応し、握手が終わると座席に座り始める。

「……………」

「フィール？」

この時、顔に表していなかった。

フィールは少しだけこの子を警戒していた。エルザ・ヴィーリフ。この子の手には剣を握って出来る複数のママが存在していた。



「……フィール、そういえば話してない」

「ん？」

「フィールから、血の匂いがした事」

「[[[-]]」

心配かけたくないから黙っていたが、リエルに指摘され少し心臓が高鳴った。フィールは少し苦笑しながら嘘をついた。

「……ああ、アレね。いや女の子の曰…なんだけど」

「女の子の曰？」

「……普通に月経だよ。ごめん、心配かけて」

「グレン、げっけいってなに？」

「俺に聞くなよ。女のセラに聞け」

「?グレンも今は女だよ」

「そうだけでも、ってまさか俺も月経とか生理とかあんの？」

「あるわけないでしょ」

単純な話、グレンは男で女の体になっても男の機能は健在だ。まあ精巧に造り替えられている分、女としての機能は無いが、女の身体で出来る事は出来るようだ。言わないが。

「ん……?そう言えば……やけに騒がしくないですか？」

「あー、お前気を失ってたからな。なんか『白百合会』と『黒百合会』とかの派閥がクソ迷惑かけてんだよ。お陰で公共の場を占領されてっし」

「『白百合会』……『黒百合会』……」

ズキリと痛みが走った。

次の瞬間、頭の中で、何かが駆け巡った。

「っ……………」

懐かしい、懐かしい記憶だ。

私が……フィールがまだ幼さを残した子供だった頃の記憶が頭に駆け巡る。姿は小さいながらも、魔術師としては一流を名乗れるくらいの自分が二人に魔術を教えている。それを見て、二人を宥める女子もいた。

『阿保だろ、アンタ達』

『んだとコラッ！チビっ子！』

『聞き捨てなりませんわ！その野蛮人はともかく！』

『素質があるのに、下らない事にしか使えない阿保二人に私は何を教えればいいのかなあ。ジニー』

『私に振らないでもらえますか？』

『いや才能はあると思うよ？けど、派閥とか作って単位適当に貰えるようだけど、私からすれば猿と犬が仲良く喧嘩しているようにしか見えないうだけだ』

『ト〇とジエ〇ーですか』

『うがあああああああ！やっぱ戦争だコラ!!』

『珍しく意見が合ったようですね！私達が勝つたら子供らしくお尻ぺんぺんしてあげますわ!』

『よし分かった。瞬殺してやろう』

『一応殺さないでくださいね?』

黒い髪で男のように憤慨し、地団駄を踏む女の子と、猫のように逆立って悔しがる綺麗な金髪の女の子と、それを宥める灰色のツインテールと、身長からして子供で……銀色に染まった髪の毛の……

「わた、し………?」

「フイール?」

「つつ……!」

視界がブレた。

頭の中で、棘虫が暴れたような激しい痛みが流れ、頭を押さえてセラに寄りかかる。

その様子にグレンもシステイーナ達もおかしいとフィールを

「フィール！お、おいしっかりしろ!!」

「……ジニー、コレット……！フラ……ン」

「……えっ?」

「あ……っっ……!」

思い出そうとすればするほど頭痛が激しくなる。

だが、思い出さなければならぬ。フィールが何が大事な事を忘れた何かを思い出さなければと、遠ざかる意識の中、混雑し合う記憶に頭が焼き切れそうな苦しみの中で、フィールが持っていた記憶が引き出されていく。

「炎魔……裏切り……っ！あっ……くっ!」

「止めてフィール！無理に思い出そうとしないで!」

「っっ……！ヘヴン……ス、クロ……イツ……!」

「っっ!!?」

その言葉を伝えた瞬間、ファイルは糸が切れたかのように再び意識を失った。過呼吸でもなければ、単純に記憶が混在した影響で混乱しているのだろう。グレン達はホッと安堵の息を吐く。

セラは気を失ったファイルを膝の上に乗せて、心配しながらも今の言葉の意味をグレンと話した。

「グレン君、今の……」

「ああ、炎魔は微妙に分からんが、事件性のある言葉を言ってたな」

「事件性？ どういう事ですか先生？」

「ヘヴンスクロイツ……別名『蒼天十字団』は女王陛下にすら極秘で今も研究開発し続けている帝国魔術界の最暗部……らしいんだが、実在するのかわからないのか都市伝説扱いだ」

「ファイルがそれを言っただって事は……」

「間違いなく実在するって事だろ。裏切りって言葉から、聖リリエ学院にそのメンバーが居る可能性が高い。しかも狙いはリエルか」

リエルは『Project: Revive Life』の成功例。

標本にして解剖し、解明すれば長きに目標としてきた死者蘇生技術として有用出来る。ただし、多くの代償を払つての話だ。平和な世界から想像以上に死人が出るだろう。

「先生……」

「ん？」

「今更かもしれないんですけど……フィールはグレン先生とセラ先生の」

「……子供か、どうか知りたいんだろ？」

「はい、一応聞きたくて……フィールがアレだけ傷つく理由が二人にあるのには私達も分かっていましたし」

システイーナもルミアもちゃんと知りたかった。

ちゃんと知って、諦めをつけたかった。システイーナは無自覚だが、ルミアは自覚はある。

フィールがもしセラの子として産まれたなら。

グレンは考えながらも、二人に真実を話した。

「多分、フィールが未来で俺とセラの子供ってのは間違いはない。血を調べたが、俺とセラの遺伝子を継いでるってセシリア先生が言ってたしな。ほぼ間違いないだろう」

「！」

「で……肝心の先生はセラ先生と」

「まだ付き合ってねえよ。多分、フィールが産まれたのは並行世界だ。第五次元世界認識なんて魔術理論的に不可能だし、証明のしようがないが、フィールがいなけりや、多分俺はとつくにくたばってる」

あの時、ジャティスの人工精霊から放たれたマスケット銃の弾丸を撃ち落としたのはフィールだ。アルベルトでなければ宮廷魔導師団でそんな神業は不可能に近い。

システイーナやルミアも少なからずグレンに好意をもっていた。ただ、フィールの場合には好意というより……

親愛だった。

自分の全てを犠牲にしても二人を護ろうとしている。それがどれだけ血に濡れよう……。まだ15歳だ。女の子として生きてほしいという感情もある。今でさえグレンはどう接すればいいか分からない。

フィールが、記憶を失ったのに辛くもあつたが、安堵もあつた。もし、そんな事をし

て傷付いて、死に近づく事があるならその道を歩ませたくないそんな気持ちがあったから。

「こいつにどう接したらいいのか…ねえ」

グレンはフィールとどう接していけばいいのか。

真実を隠し、先生と生徒として見るのか。それとも並行世界で産まれたとは言え、自分の子親と子として見るべきなのか。

けれど、このままではよくない。

グレンもセラもフィールも、いずれその事に決着をつけないといけない。ただ、それだけは分かっていた。

第30話

戦争とは何か。

無論、戦争とは殺し合いを示すものだろう。それは個人での決闘とは違い、多対多の団体戦に近いものだ。ただし、団体戦と違うのは戦争にはルールも誉れもない殺せば次の相手を見つけて殺し、油断すれば殺されるのが戦争だ。

つまりだ。一対多数は基本的にあり得なくはない。

敵を作れば、作る程に一に向けて多数に襲われる。

戦争は無慈悲かつ希望などいない。

英雄が生まれようものなら出る杭よろしく打たれるのがオチだ。だから戦争はあくまで最終手段だ。

取り繕うのがめんどくさいから言うが……

「表に出なさい。世間知らずの三流お嬢様？」

「(嘩然)」

この学院の異常さにフィールがキレた。

異常にブチ切れ、最初からクライマックスの最終手段『よろしいならば戦争だ』状態になった。

いや、フィールは記憶を無くして少し臆病さがあつた筈なのに今は青筋を浮かべて『黒百合会』と『白百合会』のリーダー達を睨んでるよ。俺も流石に驚いたわ。セラが聞いたら嘩然で口をあんぐり開けているだろう。

一体どうしてこうなったか。

原因の説明をしよう。時は二時間前に遡る。

★★★

聖リリイ魔術女学院校舎にやってきたグレン達は、早速、学院長室へと通される。

「ようこそ、遠路遙々我が校において下さいました、皆さん」

学院長室でグレン達を迎えたのは、四十前後の、人の良さそうな女性であった。この人物は聖リリイ魔術女子学院の学院長マリアンヌ、国軍省でも噂になる程の器量がある人物だ。

「帝国が世界に誇る魔術の学び舎と名高きアルザーノ帝国魔術学院…そのような所から優秀な生徒や、高名な講師の方々を、この度、我が校にお招きできて大変光栄ですわ」

嬉しそうに笑って挨拶するマリアンヌ。

この聖リリイ魔術女子学院とアルザーノ帝国魔術学院を比べたら、アルザーノ帝国の方が指導力と人気がある。

「なにせ、我が校はこのような閉鎖的な空間にあります。余所の学生や講師の方が、この学院に新しい風を吹き込んでくれること、期待してますわ」

「ご期待に答えられるように頑張ります」

「まー、あんま期待されても困るんすけど。まあ、それよりも……」

グレンは探りを入れるようにマリアンヌに問う。

「なんで、うちのリエルに短期留学のオファーなんざ出したんすか？」

「はて……なぜ？とは」

不思議そうに、マリアンヌが小首を傾げる。

リエルは学力、素行（自覚無し）は壊滅的。オファーを出す理由など本来ならある筈が無い。フィールの場合とは違い、正式なオファーとは違うのにリエルを名指しで指名するのはおかしい。

「ええと……今回、我が校はオファーを出して余所の魔術学院から、短期留学生を特別に受け入れることになったのですが……その際、我が校の本部事務局教育支援部の事前調査によれば、リエルさんは、我が校に受け入れるに相応しい優秀な生徒だと聞き及んでいたので……何か問題でもあるのでしょうか？」

「……………」

誰かが、そう仕向けたのか。

もしくは、このマリアンヌが嘘をついているのか。グレンはセラの顔を見るとセラも

頷いていた。

「質問いいつすか？ マリアンヌ学院長」

「はい、答えられる質問なら」

「貴女は『蒼天十字団』^{ヘブンス・クロイツ} って知ってますか？」

マリアンヌの眉が僅かに動く。

知っている。その反応から確信を持った。

「ええ、噂は知ってはいます。私も一度魔導省に問い合わせた事がありますが、実在するかは不明と」

「調べたって、何でまた……」

「私が学院長に在籍する前の過去の資料から生徒の数名が名簿から消されていました。連絡も出来ず、行先も不明、魔導省に掛け合ってみましたが、生死すら不明と……」

「……そりやおかしいつすね」

「生徒の数名が国に属さない集団に攫われたのならと考えた瞬間、思わず聞いた事のある組織を調べました。しかし、私は学院長で宮廷魔導師程の実力は無いので、『天の智慧

研究会』や『蒼天十字軍』^{ヘブンス・クロイツ}を調べようとしても、突っぱねられました。学院長にそんな権限は無い、と」

まあそればかりは魔導省の言う事が正しい。

ただの学院長にそんな権限はない。マリアンヌの器量でも調べられるのには限度がある。

とは言え、マリアンヌはグレーだ。

決して気を許してはいけない気がした。

「あの、私も質問してもよろしいですか？」

「ん？何か俺たちにありますか？」

「えっと、リイエルさんはそこにいますけど、フィールさんは？」

「フィールなら後ろに……はっ？」

「あれ？」

グレン、セラが振り返るとそこにフィールは居なかった。

白魔「イリユージョン・イメージ」でフィールが入ったように見せかけて、どっかに

行ったようだ。

地面に書き置きが残されていた。

ファイルの文字と思える書き置きを拾い、グレン達は読んだ。

『記憶の手掛かりを探してきます』

なんともまあ、学院長の挨拶すつ飛ばす辺りグレンに似ている。曖昧とはいえ、ファイルが

『蒼天十字軍』^{ヘブンス・クロイツ}が居るって言ったのに脳天気で自由な所にグレンは珍しく青筋を浮かべていた。

★★★

「ごめんねエルザさん、無茶言つて」

「ううん、大丈夫。ファイルさんこそ良かったの？学院長の挨拶すつぽかして」

「後でしつかり怒られます」

「全然良くなかった!？」

後でグレン先生達に怒られるとして。

やはり、この校舎を知っている。記憶ではなく、身体がここの歩き方を知っている。綺麗な校舎の中、窓を見上げれば光が差し、廊下を見つめれば特注の赤いカーペットが目に入る。

身体が自然と向かっていた。

二年間学び、過ぎしたその場所に……

「ジニーさんも、ごめんね」

「いえいえ、あのお嬢様と比べたらまだマシですよ。しっかし寮を見たいって……」

「うん。32号室……だったような気がするの」

「今は私とエルザの部屋ですね。何があるんですか？」

「……強いて言うなら、記憶かな……」

「？」

32号室の寮の部屋を開ける。

ベッドと机が二つと、角に置いてある荷物。クローゼットが二つ。寮にしては贅沢な

広さだ。

いつも、自分は学院など早く卒業したかった。

宮廷魔導師団に入って、女王陛下と約束したエルミアナ王女の捜索をしたかったからだ。

けど……少しずつ、思い出してきた。

『……フィールちゃん、でいいのかな？』

『……誰、アンタ』

『私？私はエルザ。分からない所教えてくれない？』

『他に聞けば？』

『お願い！私、風の魔術の行使が苦手で……』

『知らん。私は忙しいんだよ』

覚えていない。

今のフィールは、エルザもジニーの事も知らない。

けど、覚えていた。

記憶ではない。身体が、心が……魂がそれを覚えていた。

『フィールちゃん』

『あ? またアンタか……』

『勉強教え——』

『昼飯奢り。それでチャラ』

未だに分からない。

流れ込む記憶に頭痛があっても、その記憶から目を背けない。背けてはならないのだ。

『フィールちゃん!』

『今度は何……?』

『剣の相手してくれない?』

『嫌に決まって……』

『じゃあ私の不戦勝だね! ありがとうじゃあ——』

『んな訳ないだろ。完膚なきまでに叩き潰す』

『剣で!?!』

その記憶はフィールにとって記録だ。

体験していた自分を見ているだけのただの記録。記憶が戻る訳ではないかもしれない。思い出せるかなんて未だに分からない。

『ちびっ子! 今日も勝負だ!』

『今日こそ負けませんわよ! ミニ魔術師!』

『《いい加減チビとかミニとか・訂正してから出直せえええ》!!』

『『ぎゃあああああっ!?!』』

『うわ【シヨック・ボルト】で完膚なきまでに……殺してませんよね?』

『………ウザったい羽虫を払った程度だよ』

『派閥のトップが虫扱いですか』

けれど……それでもこの記憶は……

『フィールちゃん、勉強教えて！』

『ああもう、ちゃん付け止めろっ！ナメてんだろ眼鏡貧乳！』

『はうっ！』

『うおー、ちゃん付けで子供扱いしていたエルザの心を深く抉ったーフィール選手のK
O勝利！』

『ジニーうっさい！』

そんな鬱陶しくも退屈しない日常。

フィールⅡ■●■は鬱陶しく思っても、他人と関わろうとしなくとも、自然と仲間
が集まっていた。仲間のドジに苦笑して、怒って、頭を抱えて、それでも笑って……

『フィール、よろしくね！』

『飛び級したらアンタと一緒にの部屋とか何の罰ゲームだよ……』

『おらっ、エルザ、フィールル、遊びに来たぜっ！』

『今夜は寝かせませんわよ！ジニー！』

『トランプっすねー、畏まりましたー』

『突入の仕方一世紀前くらいのチンピラか!?』

上手くは言えない。

上手く、自分がどうだったのか表現出来ない。

けれど、ただ一つ言えるのは……

フィールル ■■■ にとって……

この記憶は……

人生で一、二位を争うくらい幸せな日常だった。

★★★

目を開けると、フラつく。

記憶喪失は辛い過去の認識にロックをかけているようなものだ。記憶の欠片を手

すればするほど、記憶は形を取り戻していく。

「……………少し、思い出せたかな」

自分の腿に装着しているホルダーを開ける。

セラがファイルから隠していた何かの一部を纏めたものだ。何かを隠しているのは知っていた。けど、聞いたところで教えてはくれなかった。

そこから取り出したのは、一枚のタロット。

「……………『愚者』」

入っていたのは6枚のタロットと、圧縮され小さくなった業物の刀。『魔術師』『女帝』『戦車』『世界』『正義』……………そして『愚者』。このタロットがファイルの歩いてきた鍵だ。未だ思い出せない。思い出す事が出来ないけれど。

「私は……………そう、なんだね」

私はきつと、この世界に居ない人間なのだ。
それだけは、はつきりと理解出来た。

★★★

グレン先生にこめかみをグリグリされ、セラにお説教を食らった。ものすごく痛かったと追記しておこう。

まあ、マリアンヌの挨拶は後にするとして、グレンは月組の担任を請け負い、セラは太陽組の担任を請け負っている。フィール達は月組で、セラだけ担任の立場が違って若干涙目だった。仲間はずれじゃないし、仕方のない事だが……

「うわあ……」

「これ、酷いわね」

フィールとシステイーナが呟く。

今、月組の教室内では、四十人近いクラスの女子生徒達が半々くらいに分かれ、それぞれ教室の左右に寄り集まり、それぞれとある生徒を中心に二つの集団を作っている。

「おーっほっほっほ！中々良いお味ですわ！わたくしに相応しい一品ですわね！」

向かって教室の右側の派閥。フランシーヌを中心とした『白百合会』の集団。ティーセットや三段トレイに載った茶菓子を山のように用意し、詩集を片手に優雅なティータイムを満喫し、雑談に華咲かせている。教室という場所であるにも関わらず。

「よっしや、いい引きっ！チップを十枚レイズだぜっ！」

向かって教室の左側。コレットを中心とした『黒百合会』の集団。

コレット達はコレット達で、賭けトランプやチェス、賭け事のオンパレードで大盛り上がりだ。何処その不良を思い出すような光景にグレンは白目むいていた。

「エルザさん」

「さん付けはいいよ。私もフィールって呼ぶから」

「じゃあエルザ、これ何？」

「えっとね……『派閥』問題かな？」

この学院では『派閥』の問題がある。

正確に言うのなら、派閥に入っているのは権力者の娘だったり地位や身分が高い存在が入っている。それらが派閥を作り、学院で自由気ままに過ごしているのだ。単位も取得する事は決定している為、授業の無視など痛手にすらならない。

まあ、露骨すぎるため流石にグレン先生が可哀想だが。

「つてか、今、授業中だぞ!?お前ら、何やってんだ!?学級崩壊とか、授業拒否とか、もうそんなレベルじゃねーぞ、なんだこれ!」

「もうっ! 『黒百合会』っ! さっきから煩いですわよ! あと、先生も!」

「ああ!? うっせえのは、てめえら『白百合会』だろ!? あと、先生もなっ!」

「ハア……これじゃあ授——い”い”っ!」

そう言いながら教科書を投げ合っている派閥の流れ弾（教科書の角）がフィールの頭に突き刺さる。教科書は意外と質感がある以上、投げられたらかなり痛い。その気になれば人を殺せると思うほどの凶器（教科書）がフィールの頭にとぼつちりで当たったのだ。

「つつう~~~~!!」

「だ、大丈夫!？」

「お前らしい加減に……!!」

「「部外者の貴女は黙ってください!」」

「ぎゃあああああ——っ!？」

「はうっ!？」

一斉に飛んできた、電撃、突風、水撃、空気衝撃、冷気、熱風の雨あられに、グレンがもみくちゃにされながら吹き飛ばされ、フィールも流れ弾で電撃と冷気の攻撃をモロに食らった。

……二回に渡つてとんだとばっちりである。

「フィ、フィール!？」

「か、かなりモロに行つたわよ!ホント大丈夫!？」

「い、今治癒魔術を……!」

エルザ、システイーナ、ルミアの三人がフィールルに駆け寄る。ブスブスと紫電の余波が身体に走り、若干制服が焦げていながらも軽く凍結していた。かなり痛そうだ。

「…………ふ、ふふふふふふ」

「…………フィールル？」

そんな中で何事もなかったように立ち上がる。
不気味に笑い、長い髪で顔が隠れてしまっている。

「フィールル、大丈夫？ 斬る？」

「リエル、いいよ」

「でも……………ひっ」

「えっ、どうしたのリエエ……………」

リエルがフィールルの顔を見た瞬間悲鳴を上げた。

覗き込むようにルミアがフィールルの顔を見ると、顔を真っ青にしていた。無理もない、フィールルが怒った所はあまり見た事がない。怒るにしても、精々注意する時のシス

ティーナと同じくらいだ。

しかし、今のフィールは……

この物語の主人公にあるまじき形相をしていた。

「グレン先生、窓を開けてください」

「はっ？お、おう………」

フィールの顔を見た瞬間、察した。

これヤバイやつだと。フィールが立ち上がってグレンのいる教壇の前で立ち止まり、怒りのままに魔術を唱えた。

「《いい加減にしろ・この・阿保共がああああああつ!!!》」

即興改変した黒魔改【ストーム・グラスパー】で風を掌握し、教室に小さな台風が現れた。トランプが、菓子が、チェスが、お茶や食器だけが浮かび上がり、フィールの前に集まっていく。

システーナも戦慄する程の風の支配力。

ここまで精密には出来ないし、並列してそんな事不可能だが、怒りに震えたフィールを見て、何故か出来そうと言う根拠の無い言葉が浮かびあがった。

拳を強く握るとプレス機のように集まったものが圧縮され、風の大砲が如く窓へとボツシュートされた。

まるで通り過ぎる台風のように、原因を全て搔つ攫つて残骸となった遊戯道具だけが外に消えていった。

「?!?!?!」
「?!?!?!」
「?!?!?!」

あまりの光景にシステイーナも絶句。

目を白黒させるエルザに、唾然として呟くジニー。風の技量以上に、フィールが真つ向からお嬢様に喧嘩を売りつけるような真似をするとは思わなかったようだ。

「「「……………」」」

流石に、教室中の全ての生徒が、この事態には呆然とするしかなく、視線が全てフィール

ルに届くと、やり切ったような顔をして呟いた。

「ふっ、少しは気が晴れた」

「お、おお良かったな。みんな授業中は静かにね☆」

フィールは満足げな顔をして元の席に戻り、グレンは再び教壇に立ち、笑顔で生徒達へと振り返って、サムズアップであった。こう見るとやはり親子だなとシステイーナ達は感じながらも、その沈黙を破るかのように二つの派閥がフィールに近づいた。

「あ、あ、貴女っ!?!これは一体、どどど、どういうつもりですの!?!」

「おい、てめえ。留学生よお…これ、どう落とし前つけるつもりだ、ああ、こらあ?」

そして案の定、フランシーヌとコレットが肩を怒らせ、殺気立つ取り巻きを引き連れ、フィールを取り囲む。だがフィールはどこか吹く風のように全く気にせずにはリィエルに勉強を教えていた。

「フィール、ここが分からない」

「それ？ああ黒魔術の変換式を組み直して……」

「人の話を聞きなさいいいいい——っ!？」

「人の話を聞けええええええ——っ!？」

世間知らずのお嬢様である以上、部外者からの煽り耐性が弱い。フィールが煽っている所は見た事が無いが、グレンに似て煽りが上手い。派閥のトップが怒り狂っている。

「まったく…アルザーノ帝国魔術学院からやつてきた留学生が何か知りませんが…どうやら貴女には、教育が必要なようですわね！」

「おい、留学生よお？教えてやろうかあ？誰がこの学院の支配者なのかをなあ？余所モンがあまりデカい顔してんじゃねえぞ？…ああ？」

「……粗野、凶暴、世間知らず、気品あるお嬢様の格が知れるね。ここは動物園なの？二足歩行と喋る事が出来る犬と猿を初めて見た」

「はあ（ああ）っ!？」

「ぶっぶお……!？」

グレンとジニーが後ろで笑う口元を隠している。

笑い声に睨む視線が集まる前にジニーは咄嗟に机の下に隠れ、グレンは最早隠そうとすらしなかった。フィールはため息をついて立ち上がり、二人を前に見下しながら、言い放った。

「さつきからキャンキャン発情した犬みたいに騒いでた白犬会とギャーギャー喧しく騒いでた黒猿会、ハッキリ言つて大した力のない二足歩行哺乳類が動物みたいに縄張り意識気にして、アンタら人間出来てますか？つて聞きたいくらいだった」

「このっ……!!」

「テメツ……!!」

「はいストップ」

これ以上熱くなると收拾がつかなくなるのでグレンが止める。フィールを見たら分かる。相当キレてるなど。と言うかキレ過ぎて記憶喪失が嘘と思えるくらいの強気に苦笑いが溢れた。

まあ、このままでは授業にならないのでグレンもそれに乗っかって挑発をかける。

「なら試してみるか？お前らが必要ないと見限つた授業を受けたウチの生徒と」

「――」

「丁度、次の授業は『魔導戦教練』：一対一の決闘戦じゃ味気ねーし、複数同士で戦う軍団戦じゃこつちは戦術単位を組めるほど頭数がねえ。てなわけで、俺の教え子とお前達とで、四対四のパーティー戦ってのはどうだ？」

フィールもその言葉を聞いて成る程と口にした。

実戦形式なら、世間知らずのお嬢様を力尽くで黙らせられる。

「要するに格の差を見せようって訳ですね――表に出なさい。世間知らずの三流お嬢様？」

「レーン先生といい貴女といい、随分と吹きますわね……いいでしょう！ここまで言われて退くのは貴族の名折れ、受けて差し上げましょう！」

「はっ！後悔すんなよ！? テメエら！」

二つの派閥がいち早く教室から出ていった。

システイーナやルミア、エルザもついていけずにポカンとした顔でグレン達を見ていた。

ふう……と息をついたグレン達。

これが終わればお嬢様達を黙らせられるとは言え、あんな個性的なお嬢様を相手するのは疲れたのだろう。

「まっ、これなら文句なしに黙らせられるな」

「そうですね……あだっ」

「だけど言い過ぎ。お前なんであんなに好戦的になったんだ？」

「いや……なんか……」

フィールが好戦的なのは記憶が無かった時には見ていなかった。まあ魔術を食らった仕返しにしては少し煽りが強いようにも見えた。

フィールにも上手く言い表せないが。

あのお嬢様達を見ていると、何処か思うのだ。何処か好戦的になってしまうような自分がいいた事を……

「懐かしかったから……かな？」

彼女達もフィールル■
■
■
■
の記憶の欠片なのだから。

第31話

芝生の校庭にアルザーノ帝国魔術学院から来たフィール達四人と、聖リリイ魔術女子学院のークラス全員が立っていた。その中で三人がフィール達の前に立っている。

模擬魔術戦、両者学院生による対決だ。

「四対四のパーティー戦。方式は非殺傷系呪文によるサブスト。模擬剣や徒手空拳のよる近接格闘戦もありとしますわ。降参、気絶、場外退場、もしくは致死判定をもって、その術者の脱落とする…よろしいでしょうか？」

サブストとは、学生レベルの模擬魔術戦でよくあるルールだ。

学生用の非殺傷系の攻性呪文のダメージを、類似した殺傷系の攻性呪文のダメージに置き換えて致死判定を行うと言うものだ。

例えば、サブスト・ルール下では、非殺傷呪文である「シヨック・ボルト」は、効果範囲が酷似している殺傷呪文「ライトニング・ピアス」と見なされ、致死と判定される。

【ゲイル・ブロウ】は【ブラスト・ブロウ】

【バーン・フロア】は【ブレイズ・バースト】

【ホワイト・アウト】は【アイス・ブリザード】

基本的な三属性、炎熱、雷撃、冷気だ。

汎用魔術の学生レベル以上は存在するが、軍用魔術にはこれ以上の強さの魔術【プラズマ・カノン】や【プロミネンス・ピラー】の様な人に向けるには余りにも強すぎる魔術がある為、決闘で使用すればただの殺し合いだ。

なので決闘はサブストのルールをつける事が多い。

要するにモロに食らえば死ぬ魔術を威力を弱めた魔術で判定してもらおうという方法。まあ、学生内の決闘ではよくある事だ。

「ああ、それでいいぜ」

特に珍しくもないパーティー戦ルール。

怪我も少ないし、大事に至らせる事は流石にグレンも許可しない為、そのルールに関しては何の問題もない。

「あと、もう一つ。…この勝負、たとえば非殺傷系の呪文でも…炎熱系の呪文だけは使用禁

止でお願いしますわ」

「炎熱系呪文なし……？」

妙な追加ルールに、首を傾げる。

炎熱系呪文は非殺傷系呪文の中では特に威力が高い。『非殺傷』と名がついてはいるものの、まともに喰らえば、軽度の火傷ぐらいの危険はある。ただ法医呪文で痕も残らないように治せるのだが。

「あつ、先生。それは私からもお願いします」

「フィール？なんで？」

「えつと、炎にトラウマがある人が居るから刺激したら不味いし…」

「あつ、そう……まあいいけど」

グレンはその言葉に納得し眩く。

炎熱系は大した威力じゃなくとも、危ないし貴族の娘に下手に怪我をさせたら逆に何か言われそうなのでグレンもそれで納得した。

「……………これなら貴女も大丈夫でしょ？」

「！」

エルザはフィール見て、驚いていた。

少し驚いているようだ。なんでそれを知っているのか、と。フィールが思い出せたのは9歳から12歳までの記憶。残りの記憶はまだ思い出せないが……

「どうして…………？」

「……………分からない。けど、知ってるの」

エルザについてフィールは知っている。

かつて、自分の親友だった事。かつて、この学校が自分の母校で、エルザ達とはここで知ったのだという事。

そして……………

「……………」

自分がエルザを死なせてしまった事。

いつか迎える未来、そこでエルザは死んでしまった。

自分が未来の存在なのは理解した。

しかし、どうして未来から来たのか、どうしてエルザが死んだのか、何が原因かはまだ思い出せない。

「……それでも」

その現実から目を逸らせば二度失う事になる。

もう手遅れかもしれない。一度死なせてしまった自分では……ましてや記憶を失った自分では力不足かもしれないが……

「(それでも、貴女を守るよ。多分、私がそうするように)」

記憶が無かったとしても変わらない。

フィールルにとって、大切な親友に変わりはないのだから。



アルザーノ帝国 対 聖リリイ女子。

システイーナ、ルミア、リイエル、フィールの四人なのだが、あちらはフランシーヌ、コレット、ジニーの三人しかいない。四対四の魔術決闘だと意外と役割が複雑だったりする。

「クインテット四人一組・ワシユニット一戦術単位なら、お前らはあと誰かしら一人必要だけど誰が来るんだ？」

「エルザ、貴女は？」

「いや私は遠慮しておこうかな……派閥の問題だし」

「つつてもなあ。他だとアタシ達と同格なのが居ないんだよなあ」

フランシーヌもコレットも悩んでいる。

派閥のトップである二人と、ジニーはそれなりの実力はある。しかし、他を頼るとなるとエルザくらいしか思い浮かばないらしい。

派閥の足を引っ張りたくない為、名乗り出る人もいない。そんな中で、手を元氣よく挙げて名乗り出る藍色髪の少女が集団の中から割って出た。

「はいはい！私出ます！」

「んっ？貴女は……」

「黒百合会所属のミラークレイティです！コレットさんの危機に参上しました！」

「……居たっけ？そんな奴」

「酷い！居ましたよ！忘れたんですか!?!」

「……………あー、そういや確かに居たわ。悪い悪い」

「コレットさん忘れてましたよね!?!」

若干涙目で落ち込むミラ。

コレットも思い出してみれば確かに目立たないが居た記憶がある。賭けゲームで勝ち負け普通、魔術のセンスはまあそこそこだが、居ないよりマシだと内心は思いながら、彼女の参加を許可した。

「んじゃ、始める前にウチのチームに追加ルールな。このままじゃ一方的に過ぎるから、お前らにハンデをやるよ。リエル。お前は相手への攻撃禁止、フィールは相手陣地に踏み込み禁止、自陣からの攻撃魔術一切禁止な」

「なっ!?!」

「先生……私もリィエルもそれ迎撃の体術か防御魔術くらいしか使えなくないですか?」

「お前が売った喧嘩だが悪い。今のお前でも並の魔術師以上だ。本気でやると、この後のコイツらの自信喪失になっちまうからな。まつ、ストレス発散を考えてたんだろ?とばっちりの仕返しは諦めてくれ」

「えー……まあ、わかりました」

「ん。分かった、手加減すればいい?」

「そゆこと、特にリィエルは絶対な。絶対だからな!?!」

グレンは特に釘を指す。

特にリィエルは過剰な上に手加減が苦手だ。なんなら死人が出かねない。だが唐突に告げられたハンデにシスティーナが焦る。

「ちよ、ちよつと、先生!?!大丈夫なんですか!?!」

「あつ?何が?」

「た、確かに、今のフィールはともかくリィエルが本気出したら、勝負になりませんけど、

実質的に戦力になるのは私とルミアだけなんですよ!? それってつまり、私達が落とされたら、負けつてことじゃないですか! これじゃ、いくらなんでも……」

「防御ならまだしも攻撃中心はシステイナとルミアだ。事実四対二の戦いで攻性魔術が使えるのが二人の時点で相当のハンデだ。」

「もし、私達が負けたら……リエルの進退が……」

「……は? お前何言ってるの?」

だが、グレンは呆れたように頭を掻きながらシステイナに言った。

「あのな……お前らが、今さらあいつらレベルに負けるわけねえだろ?」

「……えっ?」

「むしろ負けたら単位落としてやる。弟子失格でデコピンも追加な」

「り、理不尽な!」

「それにフィールもセラに『風使い』の闘い方教えてたし、今のアイツなら学院生レベルに負けるわけないだろ」

ファイールの魔術技能は既に学生レベルを超えている。

記憶喪失で使える魔術に限りはあるし、殺傷力の強い軍用魔術は教えていないとは言え、経験を技量でカバーするだけの応用と機転は大して変わっていないように思えるし、風使いの最奥「ストーム・グラスパー」まで使えてしまう時点で相当な実力者と言えるだろう。

風使いの究極地点は風を支配し、自由に操る事。セラもファイールも風の巫女の血族である以上、操作力と支配力は紛れもない天才だ。

「そもそも、前のファイールならまだしも今のお前は今のファイールより上なんだぞ？まあ、いざとなったらハンデ解禁してやつから。……必要ねえと思うけど」

そして、才能だけならシステイーナも負けてない。

敵陣をチラツと見るが、問題無いと堂々と言い放ったグレンにコレット達は睨み付ける。明らかにナメられている。

「まあ……やりますよ。うっかり死なないようにね？」

ファイルが心配そうな顔をして忠告したのをトドメに派閥のトップ達が憤慨していた。

★★★

決闘開始の合図と共にジニーは敵陣に踏み込み、先陣を切る。

ジニーの得意分野は『シノビ』の教えから受け継がれた近接格闘、体術なら学生のレベルを超えているのだが……

「あつ、無理」

「ん」

ジニーの敗因は相手が悪すぎた事だ。

リエルのその技術は凄腕の暗殺者イルシアから引き継がれた戦闘技能だ。学生レベルを超えた程度では追い縋れない。

シノビとしての動き、短刀二本を向けられても動揺すら起こさずにリエルは眠そう

な顔をしながら隙だらけな状態からジニーの右手を掴んで投げ飛ばす。

「ジニー!?!」

「そりやあああああつ!」

「ブラック・アーツ魔闘術!?! フィール!」

「《光の剣よ》」

ミラが拳に魔力を乗せて襲いかかる。

自身の拳や足に魔力をのせて、相手の体内で直接その魔力を爆発させることで普通の近接格闘術より強い衝撃を与える魔術を複合した近接戦闘術。

学生で使えるのは中々のものだ。

フィールは白魔【ウエポン・エンチャント】で両手に魔力の膜を張り、拳を容易く受け止める。

「なっ……相殺?!」

「【ボディ・アップ】しといた方がいいよ?」

フィールの忠告をした次の瞬間、蹴りがミラの腹部に入った。後ろに下がりながらも倒れるのに耐えているが、痛みに膝が崩れた。手加減はしたが、相当痛い筈だ。

「ミラ!? 《雷精よ》——!」

「《霧散せよ》——ッ!」

フィールに向かう紫電はシステイーナの「トライ・バニツシユ」で打ち消す。まあそんな事をしなくてもフィールは防いだろうが、チーム戦なのでその持ち味を存分に活かす。

「中々、速い対抗呪文ですわね!けど、これならどうです!」

フランシーヌはシステイーナの対抗呪文の腕を見て、タイミングをズラすように詠唱を始める。

「《雷精の紫電よ》——!」

「《霧散せよ》!」

「なっ!? フェイクを読まれた!？」

「クソッ! 《大いなる風よ》——!。」

《風の盾よ》

コレットの「ゲイル・ブロウ」を襲いかかってくるミラを捌きながら黒魔【エア・スクリーン】で防ぐフィール。ミラの攻撃を余裕で躲しては、軽い魔力波だけで吹き飛ばしている。

「なら……! 《力よ無に帰せ》! ですわ!。」

フランシーヌは魔術干渉で魔術を打ち消す【デイスペル・フォース】を使い、風の盾を消し去った瞬間、コレットと共にその隙を狙って魔術を放った。

「《白き冬の嵐よ》——!。」

この瞬間、コレット達は勝利を確信する。

いくらか対抗呪文が得意でも二つ同時には打ち消せない。リエルはジニーが、フィー

ルはミラが抑えている以上、

……しかし。

「《光輝く護りの障壁よ》！」

システイーナは「フォース・シールド」でそれを防ぐ。

グレンの拳闘と軍用魔術の教えがあるせいか、相手が何をしたいか手に取るようにわかる。むしろ、ワザとやっているのではないかと思うほどに。

「システイーナ、普通に魔術撃つていいよ」

「えっ？ あつ、もう終わったの？」

「魔力酔いにさせて倒した」

「……きゆう」

「ミラッ!？」

ミラは立つことが出来ずに目を回している。

フィールがやったのは回路を簡易に接続し、魔力を流す方法で魔力酔いを起こさせた事だ。自分の容量以上の魔力を流されると、魔力による酔いが発生する。簡易的な使い魔契約を強引に行わせ、自分の魔力を他者の魔力容量に流し込む事で相手を酔わせる事が可能だ。

フィールの魔力量の多さがあるからこそ出来る芸当なのだが……

「(……魔力半分以上奪われた？容量の多さだけならあの二人より)」

今のフィールの容量は減ってはいるが6000程度はある。それこそ一流の魔術師の三倍はある。約4000程の魔力を流さなければ酔わす事が出来なかった。

「システイーナ」

「《雷精の紫電よ》—— 《ツヴァイ第二射》《ドライ第三射》！」

「くっ……！ 《その剣に光あれ》——！」

「《森人の加護あれ》——！」

「《力よ無に帰せ》—— 《重ねて消え去れ》」

えっ?と二人は呆気に取られた。

防御術式はフィールの「デイスペル・フォース」によつて破られ、紫電の閃光を防ぐ術はなく、そのまま……

「ぎやあああああつ!?!」

「【シヨック・ボルト】の致死判定。こつちの勝ちだな。ジニーはまだ粘つてるけど、続けるか?」

「……降参します。てか無理つすよこれ」

紫電の雷撃に崩れ落ちる二人を見た途端、ジニーは気を張つた状態から戻り、無理ゲーだとぼやいていた。

「……終わり、かな」

アルザーノ帝国側の勝利により、勝負は幕を閉じた。

コレット達の次を全力で拒否するお嬢様達にやや苦笑しながらも、長い鼻を折ることに成功し、これで当初の目的は果たされた。

……のだが

「お前らは言ったな？俺に教わることなんか何もねえって。けど、断言してやる。俺ならお前達を『魔術師』にしてやれる」

「俺がこつちにいられるのは短い期間だけだが…その間でも『魔術師』のなんたるかくらいは教えてやれる」

「ま、興味がないやつは、別に俺の授業に参加なんかしないでいい。ただ、俺の邪魔だけはすんな。お茶会や喧嘩やゲームがしたいなら教室じゃなくて余所でやれ。別に止めはしねえよ、勝手にしろ。だが……」

「少しでも俺の話聞いてみたいと思った奴は歓迎するぜ？本当の魔術ってやつを教えよ」

グレンが語った改善点が二人に響いたのか。

箱入りお嬢様達はグレンに慕い始め、コレットとフランシーヌは先生を百合会に入れる。いや、黒百合会に入れるとグレンの奪い合いが始まった。

コレットが右腕を、フランシーヌが左腕を掴んで左右に引つ張り出した。

「レーン先生♡」

「いだだだだだっ!?ちよ、待った!?待てい!!それは洒落にならん!?裂けちゃう!」

「……さけるチーズみたいに」

「何しれつととんでもないこと言つてんだ!?ぎゃー!?へ、ヘルプ!!見てないで助けろお
おおっ!」

「あ、あ、《貴女達・いい加減に・しなさい》いいいいいい——ッ!」

ジニーがとんでもない事を吹き、想像すると不味い事になりかねないと思ったシステイナが「ゲイル・ブロウ」でグレン先生ごと、取り巻きを吹き飛ばした。

今回のMVPは悲惨な惨状をやり方が穏便ではないとはいえ、未然に防ぐ事の出来たシステイナである。

★★★

グレンを追いかけているお嬢様達とそれを死守するシステイナ達から離れて校舎裏。マナ欠乏症に陥った訳でもないのに、身体が重い。

胸を抑えて、苦しみを我慢する。

いくら魔術でも、痛みも苦しみも打ち消す事も出来ない。

「つつ……！ゴホツ……ゴホツ！」

血を吐き出す。

決して少くない量の血反吐が、校舎裏の地面に零れ落ちる。ヤケに右肩が痛い。まるで肉を削られているような感覚に違和感を感じ、制服をズラして右肩を見る。

「何……これ……」

それを見た瞬間、絶句する。

思わず目を背けたくなるほどに右腕が黒く変色していた。

呪いのように蝕むソレがフィールから生命力を奪っていくようだ。不治の病のように、緩やかに回る毒が体に異常を残している。

「……私は……何なの？」

学生の頃にはそんな事も無かった。

その後に起きた事実、帝国宮廷魔導師団だった頃の自分は一体何だったのか。

黒い肌から僅かに感じ取れたのは呪いだった。

これは既存の呪いとかそういうものじゃない。

原初クラスの呪詛だ。それも、セシリア先生や他の人が感知出来ない程の強力な隠蔽

力と、治す事が出来ないほどの呪詛力。

フィールルだから分かる。

フィールルにしか分からないから治す手段がない。

そして、記憶喪失前のフィールルの知識を以つてしても解除出来なかつたもの。魔術に

よる不治の病を引き起こす呪い。

血をハンカチで拭い、教室に戻ろうとする……

「……あのー！」

「つつっ!?!」

油断し過ぎていた。

気配もなく、後ろから声をかけられ咄嗟に反応するフィールル。左腕を突き出し、魔術

をいつでも使えるように警戒するフィールに声をかけたのは……

「えっと、その、大丈夫ですか!？」

血を吐き出すフィールにどう声をかければいいのか分からずに不器用に心配しながらも、声をかけたミラックレイティだった。

第32話

その戦場は余りにも血に塗れていた。

多くの悪魔によつて殺された騎士達の亡骸、多くの生贄として死んでいった魔術師や民達の遺体、其処に立っていたのはたった二人。

深く斬り裂かれた右肩を抑え、膝を突きながらも剣に縋つて倒れないでいる少女と、神父服でありながらも、しっかりとした豪奢な身体で、いかにも好々爺然とした老人が立っていた。

『馬鹿な………』

だが、そんな老人に一振りの銀の剣が突き刺さる。

それだけで崩壊していく。老人の身体が銀の剣を中心に崩れていく。

『馬鹿な馬鹿な馬鹿な!?!』

『っ……ハア、ハア』

『あり得ない。何故、私の身体が……!?』

その名はパウエル・フューネ。

第三団《天位》でありながら「マジスタ・テンブリ神殿の首領」を名乗り、ソロームの指輪の下、魔界の

三十六悪魔将と666の悪魔軍団を従えし、世界最古にして現世最高の悪魔召喚士。

それが今、滅びようとしている。

フィールと、《正義》を受け継いだ少年の執念によつて朽ち果てようとしていた。

『アイツが……最後に残した形見だよ。それがなきや、私は死んでたよ』

銀の剣に組み込まれた浄化の術式。

元、聖職者であつた少年が、パウエルに対して有効な術式を組み上げ、死にゆく最中、その組み上げた術式を乗せた銀の剣をフィールに託した。

『悪魔召喚士でありながら、自身の身体までも悪魔の外法に染めたようだけど、核を破壊したんだ。悪魔も再生も出来ない』

知っていた。

『私は終わる。だが、ただで終わる訳にはいかないよ』

『……つつ!?なっ……!?』

パウエルの右手から発せられたドス黒い魔力が、フィールの中に入っていく。それを押し出すように、フィールは残った全魔力で対抗するが、ドス黒い魔力は肩の傷から体の中へ侵入していく。

『がっ……!?!』

身体の中から削れていく。

真っ白だった魔力の中に、墨を垂らされたようなそんな不快感と、ガリガリと蠢いて削っていくような身体の苦しみがフィールを襲う。

血を吐き出す。

鉛になったかのように重く感じる身体。傷口が軽く黒い痣のように変色している。

『何を……した!』

『呪いさ。この私が、悪魔を従える私の最後の悪足掻きさ』

『呪い……だと?』

『君は死ぬ。遠くない内にね。君の未来を奪っただけでも良しとしよう』

ただの呪いじゃない。

悪魔が存在し始めた、概念や信仰が始まった原初に生み出された呪い。単純かつ高度な呪いは最早魔術という枠組みから外れた呪いだ。

それがフィールに植え付けられた。

悪魔らしい最後の悪足掻きに苦しみながらも睨みつけた。

その表情を見て。パウエルは嗤った。

『さくらばだ患者の牙よ。天の智慧に栄光あれ』

そんな負け惜しみとも呼べる最後にフィールは笑う事さえ出来なかった。凱旋といふには余りにも程遠い結果になってしまった。

また、仲間を失って自分だけが生き延びた。

また、勝てなかった。正義の魔法使いになれなかった。

また、ひとりぼっちになった。

★★★

「えっと、その、大丈夫ですか!？」

血を吐き出す現場を目撃して、しどろもどろになるミラは動揺しながらも心配の声をかけた。

「ミラ…さん…?…?…?…!」

ズキリと右肩に痛みが走り、再び吐血した。

身体が引き裂かれるような痛みを失わずに耐えているのだ。ミラは何かを察し、フィールの背中を摩った。

「だ、大丈夫なんですか!? 待っててください! 今保健室の法医士を!」
「っ、止めて!」

ミラの腕を掴んで必死に止める。

その様子にミラは困惑を隠せなかった。

「で、でも……」

「いいから、いつもの事だから……」

特に、グレンやセラにバレたらオフアールから無理矢理帰らされる可能性がある。未だ記憶が戻っていない中、唯一の手掛かりはこの場所にあるのだ。まだ帰るわけにはいかない。

「あの……なら一つだけ、聞いてもいいですか?」

「……何?」

「……どうして、そこまで拘るんですか? あの人達にバレないように必死で隠してまで、どうして……」

「……………」

ミラから見て、友だちだとしてもそこまで必死に隠そうとするのはおかしいのだ。辛
いなら辛いと言うし、吐血してまでここにいなきやいけない理由などない筈なのに……

「……心配、かけたくない」

「……………」

「私にも、分かんない。……あの人達がどういう存在だったのか」

グレン先生も、セラ先生も、システイナーナも、ルミアも、リエルも、みんながフィー
ルの事について語ってくれなかった。私がどういう存在だったのか、教えてくれなかつ
た。

私が、どういう存在であの人達をどう思っていたのかわからない。ただ、一つ分かる
事は……

「^{フィール}私は多分、あの人達が好きだったから……」

「！」

「だから、知りたい。ここでそれを見つけるまであの二人にバレたくない。……そんなちっぽけな理由だよ」

今の私はあの二人が赤の他人にしか思えない。

環境を、場所を、他人を、自分すら疑って、どんな自分が正解なのか模索して、笑顔
を張り付ける事しか出来ない。

今の自分が気持ち悪い。

あの人達が大切だった筈だ。筈なのに……何処か距離を置いてしまっている自分が
居る。

あの人達もきつと自分達の知るフィール偽を待っている。

フィール偽||ウオルフオレン物ではない。

フィール本||■■■をきつと……

「……じゃあ貴女は?」

「えっ……?」

「待ってるかもしれない、待っているかもしれない貴女が居るのかもしれない。でも!
記憶が無い今の貴女は!それでもいいの!」

ミラが感情を荒げてフィールに叫んだ。

それじゃあまるで、フィール^偽ウオルフォレン^物が消えるべきなんだと、自虐しているようなものだ。

偽物としての、今の自分はどうしたいか。

「私にも……分からない」

まるで道に迷う子供のようにそう呟く。

ただ、そう答えるしかなかった。自分がどうなってしまうのかなんて考えた事もなかったから。

「……なら、私と友達になってください!」

「はっ?」

「今の貴女が在りたい理由に、私を入れてください!それなら!……それなら、まだ貴女が今のままでいたい理由に……なりませんか?」

かああ、と赤面しながらも言葉にするミラ。

今の自分、フィールⅡウォルフオレンで在りたいと言う理由にミラの存在を入れる。なんて馬鹿な少女なのだろう。

今日来たはずの、見ず知らずの他人にそんな事を言うなんて思わなかった。その言葉にフィールは耐え切れずに、笑った。

「ぶっ、アハハハハハッ!!」

「わ、笑わないでくださいよー」

肩の痛みに悶絶しながらも、笑ってしまった。

馬鹿みたいだ。自分が消えたくない理由になる。そんな事をするメリットなど、ミラにはない筈なのに……

「いつつ……」

「ちよ?!もう……!」

ミラは心配しながらも少し憤慨する。

ほんの少し、ほんの少しだけ今の自分を許せる理由が出来た。ただ、それだけで
フィールは少しだけ……

「でも、ありがとね……ミラ」

ほんの少しだけ、救われた気がした。

「それと、アレ止めてくださいね」

「……アレ？」

「強制的に使い魔にして酔わせるアレですよ！見てくださいよ!!首元噛まれたせいでキスマークみたいになっちゃったじゃないですか!？」

「あー、まあアレ…私が吸血鬼の特性を魔術に直した術式だから、吸血鬼みたいに他人に噛みつかないと…出来ないんだよね。まあ学生の固有魔術にしては強いけど…」

「この後の授業どうしてくれるんですか!?絶対変な目で見られますよコレ!」

「まあ……喰われたって事で」

「何に!?!」

「何につてナニに」

ミラは顔を真っ赤にしてフィールから離れていった。

この後、フィールはセラに少し説教され、ミラに関しては校舎裏で留学生と禁断の恋というとんでもない勘違いをされ、エルザやシステイーナ達が視線を露骨に合わせない事に地味に傷付いた。

★★★

聖リリイ魔術女学院。

カーテンを締めきった、薄暗い学院長室にて。

「……………どうです？今日で三日ですが…見極められましたか？彼女達は」

学院長マリアンヌは、手を組んで執務室につきながら、二人の女子生徒に問いかける。

「……………まだですね」

「今の状態じゃまだ無理ですよー」

少女は、まるで銀鈴が鳴るような、凜と覇気に満ちた声ともう片方はお気楽に気が抜けてしまいそうな覇気のない声でそうボヤいた。

「先日、魔導戦教練の授業がありましたか…彼女は攻撃を封じられていた上に、本気すら出していませんでした。あれで彼女の底を見ることは、到底できない……それに、あの人もハンデがありながら、全く本気を出してなかった」

「まっ、今のお嬢様達じゃ二人を測れませんよ。マリアンヌさんも知っていたんですよ？」

「まさか……………やってみないと解らないものでしょ？」

惚けたような様子で言葉を発するマリアンヌ。

少女が左手を静かに眼前に掲げると、今の今まで何も持っていなかったのに、まるで手品のように、その左手には一振りの刀剣が握られていた。

鉄線華の紋入りの丸い鍔、黒漆塗りの鞘に納まった、緩やかに湾曲した刀剣だ。菱状の目貫が、綺麗に一列に並ぶような柄巻きがなされた柄。

「帝国宮廷魔導師団・特務分室《戦車》《愚者》。そして、引退したとはいえ《女帝》まで居るもの。貴女にあの二人を倒せるかしら？」

きちり。そつと、その鯉口を切る。

すると鞘から四寸ほどまろび出る刀身。剣材は玉鋼。その鑄造りの鍛え肌は板目状。燃え上がる炎のような刃文。

磨き抜かれた鏡のような刀身に、少女の鋭き双眸が映る。

それはただただ美しい。実用性と芸術性。相反する属性を高次元で融和させた業物。帝国では滅多に見られない拵え。

その刀剣は——『打刀』

東方に伝わる特有の剣である。

「……自信はあります。父が倒されて以来、私は彼女の打倒を目指し、地獄のような鍛錬をずっと続けてきました。けれど万全を期すため、もう少し彼女達を見ていたい」

「……そう。まあ、精々、慎重になさいな……なませ……」

くすり、とマリアンヌが笑う。

「貴女には、致命的な弱点があるのだから」

その一言に、鏡の如き刃に映る少女の瞳……その眉間の間が、微かに曇った。赤い赤い忌避する呪い。かつて全てが燃えて消えたその呪いに打ち勝つ為に、少女はここに居る。

「……あら？ 気を悪くしちゃったかしら？ ごめんなさいね……私はただ、貴女のことを心配ただただなのよ……だって、貴女は私の大切な……」

「……どの口が言いますか」

そう返す少女の表情は、感情こそ殺していたが、言葉の端が苛立っている。そんな心の乱れから目を背けるように刀を鞘に納め、鯉口を鳴らし、決意を口に告げる。

「黙って見てなさい、マリアンヌ。私は必ず彼女も、あの人も…斬る」

「好きになさい。貴女もバックアップを頼むわよ」

「はい」

お気楽に返事する少女の瞳が一瞬だけ変わる。

締め切ったカーテンから溢れた光が当たり、瞳の色が明らかになる。それを見た隣の少女は少しだけその色に魅入られた。

それはとても綺麗で、鮮やかな紫炎色をしていた。

第33話

リエルの教育はフィールとエルザがしている。

ついでにミラも、教科書を見て頭を悩ませていたのでリエルのついでで教えていた。リエルは教科書に目を通しておけと言われたので、本当に目を通すだけで理解出来ていないようだ。

「そこ、計算式が違う」

「ん……どうやって解くの？」

「この公式を使って、自分で解いてみた方がいいよ」

「あだっ!!」

「ミラ、貴女は貴女で寝ない」

と言うか教えてあげてるのに寝るとは何事だ。教科書で頭を叩いて無理矢理起こした。

ミラはともかく、リイエルに関してはしばらくの間、集中している成果があり成績は伸びている。だが、計算式が致命的だ。暗記ならば問題ないのに……

「フイール、出来た」

「ん。……七割正解かな。計算苦手？」

「うん」

リイエルはまだ精神的に子供。

とは言え、学習能力だけならかなり高い筈なのだが、規則的なものがガラリと変わる
と対応が難しい様子。

「少しずつでいい……頑張つて」

「分かった」

エルザに少し負担をかけるが、ここからの頑張りはリイエル次第だ。フイールも教科書と睨めっこしながらどうしたらリイエルに伝わるのかを真剣に模索していた。

一方で、レーンことグレンはハーレムを作れたようなのだが、慕うお嬢様たちが少し

過剰なせいかシステイーナ達と先生の取り合いをしていた。無意識のうちに少しだけモヤモヤしているのにフィール自身は気付いていない。

「ええい、お前らツ！やめてツ!?俺のために争わないでえ!!」

「ぶふお……!」

その言葉を聞いた瞬間、フィールの腹筋が崩壊した。思わず笑いを堪える事に必死で、右肩が地味に痛くなるがそれでも笑ってしまう。

取り合いが激しくなり、魔術による乱闘に発展し、教室には絶えず流れ魔術が飛んできていた。

「《光の障壁よ》」

「ぎゃああああああつ?!」

フィールはすぐさま対応したが、グレンはモロに流れ魔術を食らい、絶叫を上げていた。



時刻は夕方。

勉強に浸っているリエルに教えられるところを教え、フィールは大浴場で湯に浸かっていた。夕方はまだ早いかもしれないが、自身の右肩が黒く変色しているのをあまり見せたくない為、誰もまだ入らない時間帯で貸し切り状態だ。

「ふうふうふうふう」

肩の力を抜いてゆったりと疲れを取る。

記憶喪失になってから思い出せる部分は思い出せた気がする。ただ、学生の頃の記憶だけだ。誰が親で誰を信用していいのかも思い出せない。

ただ、怖い。

身体中の至る所が傷痕だらけになっているのを見て、自分が何をしていたのか、少しだけ分かった気がする。

背中の裂傷、右肩の変色、太ももや腰辺りにも傷が数箇所、脇腹には火傷の痕まで……恐らくいつも「セルフ・イリユージョン」で隠していたのだろう。回復魔術でも治らな

い傷痕を見て、自分がどうしてここまで傷付いているのか、分かってしまった。

「!」

大浴場の扉が開いたのを見た瞬間、フィールは「セルフ・イリユージョン」で傷痕を隠す。ガラガラと開き、入ってきたのは……

「いや〜漸く風呂に……」

「……先生?」

女装中のグレンだった。

生徒が勉強している時間を見計らって、早めの入浴をしようとしていたようで、同じ目的のフィールと顔を合わせてしまった。

「フ、フィール!? す、すまん出直してくるわ!」

「あつ、いいですよ私もう上がりますし」

フィールはタオルを巻き、グレンの横を通り過ぎて風呂場を後にする。大分お湯に浸かれて疲れが取れたし、男一人の方がいいだろうと思ひ、風呂場から出ようとした。次の瞬間、フィールの腕をグレンに掴まれた。

「先生？」

「……《原初の力よ・均衡保ちて・零に帰せ》」

「つつ!?」

グレンが神妙な顔をして突如、フィールに対して「[デイスペル・フォース]を使い、フィールの「セルフ・イリユージョン」が解いた。フィールは激しく動揺する。

「な、んで……」

「分からないとも思ったのかよ……フィール、ソレは何だ？」

肩の変色を見て、グレンが問う。

フィールの右肩の変色は普通じゃない。魔術的に判断は出来ないが、何というか……ものすごく嫌な感覚だ。

何か、変な侵食を受けているような。

ガリガリと削れていつてるようなそんな感覚だ。

「……分かりませんよ」

「心当たりとかないのか？」

「あるわけないですよ……記憶無くしてるのに」

呪われてる。

そんな安易な言葉で片付けられたら良かった。グレンにはファイルが隠してる事に気づいた。否、気付いてしまった。

誤魔化せないくらいに分かってしまう。

何故、という言葉はもう出ない。全く気付けなかったあの時とは違う。グレンがソレに触れようとした瞬間。

「つつ!!」

パン、と左手で払われた。

無意識に触れないようにと、気付けばグレンの手を勝手に払っていた。多分、呪いが移る可能性は少ないと思っていたのに……

「……………何、するんですか」

「それ呪いだろ。調べりゃ少しは分かると思って」

「必要無いです」

「必要無いわけな——」

「貴方が調べても分からないですよ。どうせ誰にも解けない」

その事實は間違いなかった。

フィールは投げやりにグレンの返答を否定する。

「ふざけんな！隠して辛くなるくらいなら相談して——」

「隠してるのは貴方も同じでしょ。だったら何で私の過去、教えてくれないんですか？」

フィールの言葉にグレンは固まる。

フィールが幾ら聞いても、グレンもセラも、システイーナやルミア、リエルでさえ

フィールの過去を隠している。自分がどんな人間だったのかは教えても、過去に何があったのかは教えてくれない。やや要点をズラして誤魔化している。

「気付いてないと思ったんですか？ 貴方、露骨に私の過去を話す事を避けてるくせに」
「つ……それは」

「……記憶があつた私になつてほしくない。危なつかしいから、忘れてた方が都合がいいからと思つてるんでしょ？」

フィールの過去を教えないのは、その通りだった。

フィールは傷付きすぎた。これ以上、傷付いてほしくないというエゴからグレンもセラも隠した。

だが、フィールからすればグレンは赤の他人だ。セラに関してはともかく、この人に關してはただの先生。フィールはあまり関わりとうしなかつた。何もかも怪しいと思う中で、彼が一番怪しく見えているから。

「そもそも、貴方は私のなんなんですか？」

フィールⅡウォルフオレンとグレンⅡレーダスの間に何が存在するのか。グレンはフィールの何なのだろうか。

「俺はお前の……………」

言えない。

ここでそれを答えてしまえば、少なからずフィールがどういう存在なのか証明になってしまう。

ただ、伝えられたらよかった。

伝えられたらそれだけで良かった筈なのに、答えようとした口が開かない。

「ほら、答えられない」

フィールはその言葉に落胆する。

見限りにも近いソレにフィールは睨み付けた。グレンは顔を歪め、思わず一步後退してしまふほどに。

「そんな人に、私は信用なんて預けられない。たかが、生徒と先生の立場なら深く踏み込むのはやめてください」

そう言い残し、フィールは風呂場を後にした。

グレンが手を伸ばそうとした手がダランと宙に舞った。

★★★

フィールは寮のベッドに顔を埋めてふて寝していた。

モヤモヤする。フィールはあの人を怪しい存在だと思っている。自分の過去を教えない、教えてくれない薄情な先生だと思っている。少なからずセラにも同じ感情はあるが、セラの顔は悲しさと苦しさを滲み出してしまっていたから聞きたくなくなっていた。

ただ、深く踏み込むな。

そう告げただけなのに……

「痛い……」

痛いのは身体の傷でも右肩でもない。

無意識にそう呟いたその言葉は毛布に埋もれて消える。

「どろろして……」

どうしてこんなに悲しくなるのか。

グレンⅡレーダスはフィールの何なのか。

身体の痛みなどではない。

ただ、感情が溢れてしまっている。

痛いのは——心だ。

★★★

誰もが寝付いている深夜。

アルザーノ帝国専用の寮は二つ。部屋割りはグレン、リエル、ルミア。もう片方は

セラ、システイーナ、フィールで分かれている。

セラもシステイーナも眠りにつき、スヤスヤと寢息を立てている中、フィールは眠れないでいた。

「……散歩するか」

セラが聞いたら怒りそうだが、変に目が覚めてしまっていた。防音の魔術を張り、こっそり部屋から抜け出して夜天を見上げる。

窓を開け、詠唱を唱える。

「えっと、《天秤は傾くべし》」

着物が蝶のように羽ばたく。

フワリと自分の体が軽くなり、三階から着地しても痛みなどはない。怒られても仕方ない。けど、どうしてもこの場所で夜空を見たかった。星について語り合ったり、お嬢様らしくないけど、芝生で寝転がって天体観測したり、思い出せば、自分の思い出が少しずつ鮮明に思い出されていく。

「学生の記憶は思い出せた……あとは、幼少期と卒業から今に至るまでの記憶だけかな」

学生時代、正確には飛び級で入学してから二年間の間のみ。中途半端にしか思い出せていない。学生時代のある程度の技量を思い出してきた。人に向けて魔術を使うのに抵抗はあるけれど。

「ん？」

風切り音が聞こえた。

妙に懐かしい感覚に囚われた。それは剣の鼓動のようで、幾千回と聞いた事があるかのような、風を斬り閃く刀の音。

綺麗な太刀筋だった。

それはまるで剣の妖精と思えるような剣の舞。真っ直ぐな太刀筋でありながら力強く、それでいて刃に込められた熱が燻っている。

もう少しだけ見ていたかった。

けれど、彼女の表情を見て、どこか止めたかった感情が存在していた。

「……こんな時間に劍の鍛錬？」

「！」

声をかけた瞬間、鋒を此方に向けられる。

警戒しながらも、敵を見定めるような表情で此方を見たのは……

「フィール？」

「こんばんはエルザ」

眼鏡を外したエルザだった。

フィールは朗らかに笑いながらエルザの打刀の刀身を軽く摘む。それを見ると刀身を漆黒の鞘に納め始める

「見て……たんですか？」

「うん……凄かったよ。いい太刀筋してるね」

「そ、それほどの業じゃないよ。父の方がもっと凄い太刀筋をして……」

「15歳でそんな技量を持つてるなら、今の貴女は凄いと思う」

お世辞抜きに、太刀筋が綺麗だ。

真つ直ぐで力強いのは、過去の記憶と変わらない。

「と言うか、着物？」

「私の寝巻き、いつもこれなの。東方で買ってからお気に入りだね」

「行ったことあるの!？」

「きゅ、休暇でエル……じゃなくて友達と旅行に行った時に、桜を観に行ったの」

「そういやエルザは東方出身だ。」

刀や着物、桜など東方の事は大抵エルザに教えてもらった記憶がある。出身地は同じではないけれど、故郷を語れる人がいるだけ少し嬉しいのだろう。

「桜と、お寿司とお酒が美味しかったかな」

「お寿司!そう、偶にお刺身とかお魚が恋しくなるよね!」

「うんうん。酢飯とか醤油とか偶に濃くてねっとりしたものが偶に食べたくなるし」

あの頃、あんまり食に執着は無かったが、旅行に誘われ半信半疑でお寿司を食べた時に衝撃を受けた。残念ながらアルザーノ帝国では生魚が売ってない為、東方でしか食べられないものだと思った時、少しがっかりした表情をエルザに笑われた事がある。

「エルザ、少しだけ付き合ってくれる？」

「えっ？ フィール、貴女剣を使えるの？」

「んー、まあ多分？」

「なんで疑問系？……まあ、じゃあ少しだけ」

エルザは打刀を地面に置き、近場にあつた樽の中に入れられた木刀を取り出す。一本をフィールに渡し、一本を自分の手に握る。

互いに向き合う。

木刀とは言え、殴れば血は出るし骨も折れる。故に真剣を構えた相手と相對した緊張感が走る。

「——行くよ」

「——うん」

ゴウツ！と風を斬る音が聞こえる。

肉体は風より速く、振られる木刀は其れの倍速い。春風流【疾風】、死角に『縮地』で入り込み、右旋回しながら木刀を振るう。

まるで空間を跳躍したかのような爆発的速度。

そしてエルザの振るう剣速はリィエルより少し速い。

カンツ！と木刀が鏝迫り合う音が聞こえた。

風を読み、敵を読むのはフィールの得意技。ジャテイスのように未来を観測する【ユースティアの天秤】は今のフィールには使えないが、長年培った戦闘のカンが身体を働かせ、エルザに追い縋る。

「ふっ！」

フィールは払うように左腕で木刀の峰を狙う。それを予測したのか、エルザは右に避け、再び技を繰り出す。春風流【旋風】躲すと同時に左側から攻撃を繰り出す攻防に隙の無い技の応酬。

フィールは後ろに下がり、紙一重で躲すがエルザはその退路を与えない突きが此方に迫る。春風流〔追風〕の速さは抜刀の次に速い連撃、このままでは回避不可、ならば迎撃しかない。

「——はあ！」

「なっ!?!」

精霊剣舞。

ごく僅かに風の風圧が木刀に加わる。無意識の内に風の指向性だけを取り入れた剣舞専用の術式を使っていた。木刀と共に払い除けた一撃を防ぎつつも吹き飛ばされるエルザに追撃で木刀を振るおうとした次の瞬間。

「あっ……」

「えっ、ちよっ!?!」

着物を踏んづけてフィールはエルザの方へ転ぶ。

咄嗟過ぎて、エルザが下敷きになりながら二人とも芝生の上で派手に転んだ。握った

木刀が地面につき、エルザの木刀に当たりカランと言う音を立てて手から離れた。

「いたた……」

「大丈夫、フィール？」

「……かたい」

「喧嘩売ってる？買うよ？」

エルザの胸に飛び込んだフィールの感想に若干殺意が溢れていた。フィールの大きさはルミアに劣れど、かなりの大きさだ。退ける為に押す手が胸に触れるとふにょんと包み込むような柔らかさに血涙を流し、軽く絶望感に浸っている。

「ふっ……あははははははは！」

「くっ、はははははははははは！」

エルザもフィールも笑い出した。

なんて馬鹿らしいドジ踏んだのだろうと、気付けば笑ってしまっていた。芝生に背を預け、ごろんと夜天の星空を見上げる。

「ねえ、エルザ」

「なに？フィール」

「やっぱ、貴女だったんだね」

フィールの相棒はエルザだった。

宮廷魔導士団となってフィールの背中を預けていたのは彼女だった。死なせてしまつて、悔いて、全部投げ出したいと思つてしまつたくらいに。フィールの心の支えになつてくれたのが、エルザだったのだ。

エルザは首を傾げる。

分からなくていい。これはフィールだけの思い出だから。

「絶対に死なせない……」

例え、時間がなくても。

親友を死なせる未来で終わらせない。

それだけが、記憶も何もかも失つたフィールのただ一つの決意だった。

第34話

風が吹いた気がした。

気が付けば自分は草原の上に立っていて、空は青く澄んでおり、風が吹けば草原が揺れる。心地いい場所だった。

「……………」

振り返ると小さな黒髪の自分と、腕を組んで笑っているセリカさんと、木こりに座ってそれを笑顔で眺めているセラ先生の姿があった。どうやら魔術を教えているようだ。初歩的な風の魔術を何回も練習しているのを見て、セラ先生は少し懐かしむように眺めた。

「……………」は……………私の……………」

それは幼い、まだ思い出せない自分の記憶。

それは、とても懐かしく愛おしく思えるくらいに尊いもので、小さな私は笑顔に溢れ

ていた。

ずっと、こんな光景が続けばいい。
そう、思っていた。

風が吹いた。

先程の心地いい風ではない。

「……………?!」

気が付けばソコは地獄だった。

乾いた血と、焦げた匂いが蒸せ返る世界、辺り一面は火に覆われ焼き焦げる。人と言
う人は誰一人として存在せず、空は曇天に包まれた世界に私は立っていた。

「……………う……ぷっ……………」

吐き気がした。

自分が立っている所すら死体の山の上。ごろりと転げている炭になりかけた肉塊の感触。妙にリアルなその感覚に胃の中の全てを吐き出したいと思えるくらいに。

「ひっ……………」

抑えた手が真っ赤に染まっている。

気が付けば自分の服が変わっていた。聖リリイの制服から藍色の帝国のコートに変わった。

『どどっしてっ？』

『何故殺した？』

『嫌だ』『また消えた』『また死んだ』

『お前が殺した』『殺した』『殺された』

『死ねよ』『地獄に堕ちろ』『救えない』

『見殺しにした』『なんで存在してるの』

『助けてもらえなかった』『見捨てた』

『死ね死ね死ね』『偽善者』

『何もできない』『救えない英雄』

『ただ殺す事しか出来ない殺戮者』

『存在する価値のない正義の味方』

『助けてもらえなかった』『間に合わない』

『嫌だ死にたくない』『殺されたくない』

「ハッ……ハッ……」

これが咎。ファイル■■■■の罪。

壊れる。壊れるような情報量、耐え切れずに崩壊してしまうような感情。今のファイルⅡウオルフォレンに耐えられるものではない。過去も未来も詳しくは知らない中途半端な彼女には壊れている事を許容していたファイルⅡ■■■■の在り方を否定して

しまう。

受け入れなければ記憶を取り戻せないのは分かっている。けど、これはあまりにも残酷で、いつぞ滑稽と思えてしまうほどの悲劇と絶望の感情がフィールルウオルフォレンから大切なものをガリガリと削っていく。

「あ、ああ……」

気が付けば自分は剣で金髪の天使を刺していた。

手に滴る血の生温かさと肉を抉った感触が絶望していた。正義の味方も、銀髪の猫も、蒼色の剣士も、風の巫女も、もう一人の愚者も全員が血濡れて横たわる。

私の……私のせいで、死なせる運命になってしまったのなら。

『今の貴女じゃ、何も救えない』

どろり、と金髪の天使の顔が崩れる。

銀色の髪と金色の瞳の天使が血濡れた手で頬に触れる。

『ああ、また救えなかった』

バシヤ、と血の海に斃れていく。

血で染まった手に震えて、目の前の絶望に叫ばずにいられなかった。

フィールルⅡウォルフオレンでは何も救えない。

それが、壊れた私からの最後の通告だった。



「あああああああああああつ!!!?」

「いったあ!?!」

目が覚めると同時に銀色が額に当たる。

ガツンと額に衝撃が広がり血が流れる。何故か目の前にいるシステイーナは額に手を当てゴロゴロと寝転がり痛みに悶絶している。

悪夢にうなされたフィールルを起こそうとしたシステイーナだが、いきなり起き上がると思わなかったようで、思いつき額を打った。あまりの音にセラも焦ったように心

配する。

「ちよつ、今すつごい音がなつた気がするんだけど!」

「いったたた、つてフィール!? 血!」

「……ハア……ハア……」

額から血が流れているのを呆然としたまま手で抑える。

ヌルツと、掌が血で濡れる。気が遠くなつたままそれを見たフィールは激しい動悸と共に逆の手で口元を押さえた。

「つ……うつ」

「ちよつ、セラ先生! エチケツトの袋!!」

「いや、トイレの方が早いかも!」

それを見た瞬間、自分の夢の記憶がフラツシユバックした。今のフィールの倫理と常識、良心などが崩れていくような感覚に吐き気がした。今のフィールは人を殺すほどの倫理観を持ち合わせていない中、人を殺す事が当たり前だった前のフィールに近づくと

が怖いと思っってしまったている。

本来ならそれでいい。

その恐怖は間違っていない。

だが、それではいつまで経ってもファイルは自分を肯定できずに記憶を取り戻せない事もまた、理解していた。

★★★

「試験明日だろ？リイエル、大丈夫か？」

「……まあ、教えられる分は教えましたけどリイエル次第ですかね」

エルザの感想にグレンはため息をつく。

リイエルのノートの一部をエルザから見せてもらったが、大分成長はしている。必勝のハチマキを巻いてファイルに教わりながら勉強しているリイエルを見る。

まだ計算が苦手な部分はあるがこれなら少なくとも半分以上は取れるし大丈夫だろう。

「……？レーン先生、なんかありました？」

「ん？いや別に……いやちよつとあるわな」

「……？」

グレンはフィールを避けている。

と言うより逆も然りだ。フィールもグレンを避けている。グレンは今どう接すればいいのかわからず、フィールはフィールでグレンを信用出来る相手じゃないと認識して距離を置いている。

「フィール、ここの変換式教えて」

「……」

「フィール？」

「ん？ああ、ごめん。変換式だよね？」

条件に当てはまる【ショック・ボルト】の出力問題。

地味に魔力調整率を覚えていなければかなり難しい。比率の式を教えるが、リイエルは首を傾げる。

「……分かんない」

「まあ意外と難しいしね。答えの出力はこんな感じ、《雷精よ——》」

実際に魔術を行使して出力を覚えてもらう為、魔術を使おうとした次の瞬間。

「——っ」

自分の手が一瞬真っ赤に染まった幻覚を見た。

目の前がドス黒い光景と、死体だった親友の記憶に目を見開いた。それに怯んだせいで、魔術は不発に終わり教わっているリィエルは首をまた傾げた。

「フィール？」

「ああごめん、《雷精よ・紫電を以って・打ち倒せ》」

出力が下がった【ショック・ボルト】が上に放たれた。

今、一瞬とはいえ攻撃呪文を撃つ事に戸惑った。今日の自分は昨日の自分よりズレて

いる感覚がある気がするのだ。

「比率は40%以下。まあ、今ので覚えて」

「うん。分かった」

「エルザ。ごめん、少し任せていい？」

「あつ、うん分かった！」

申し訳なくもフィールはエルザに託して教室を出た。

グレンもフィールの姿を直視しなかったから分からなかったが、フィールの手は少しばかり震えていた。

★★★

「《雷精よ——」

再び手が赤く染まる幻影を見た。

やはりだ。夢がトラウマになって魔術を使うのに躊躇ってしまっている。殺傷力が

あるわけでもないのに、撃つ時にトラウマを抱えてしまっている自分に嫌になる。

「……《風よ》——」

唯一大丈夫なのは風の魔術だけ。

風の魔術を使う抵抗は全く無い。それは自分が風使いだからか、それとも……

「お母さん……」

母が使っていた魔術だから分からない。

ただ、精神が疲弊している。自分はこんなに脆い人間だったのかと、自分で自分を卑下していく。

「私は……ワタシは……わたしはダレなの？」

フィールⅡ ■■■ならもつと上手くやれた。

自分は偽物で、本物の皮を被った不良品。いずれ消えなきやいけない事も分かっている

る。

だが、心の中でもう答えは出てしまった。

エルザやセラ、この場所が暖かいと感じている。

「……なんで、失いたくないって思っちゃうんだよ！偽物のくせに!!」

いずれ消えなくてはいけないのに。

心の何処かで偽物としての自分を失いたくないという思いにまた自分を嫌悪し、ただ責めるように偽物の自分に叫んだ。